大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発　掘　調　査　報　告　書

（2014）

2016.3

大　阪　市　教　育　委　員　会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

例言

1. 本報告書は平成26年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所が各原因者より委託をうけて実施したものである。
3. 本報告書の執筆は（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所　南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会事務局文化財保護課において行った。

目　次

北　区
神山町遺跡発掘調査（CM14-1）報告書……1
長柄古墳発掘調査（NR14-1）報告書……11
天神橋遺跡発掘調査（TJ14-1）報告書……21
天神橋遺跡発掘調査（TJ14-2）報告書……29
豊崎遺跡Ｂ地点発掘調査（TS14-1）報告書……39

中央区
東心斎橋１丁目所在遺跡Ｃ地点発掘調査（HB14－1）報告書……55
高津３丁目所在遺跡発掘調査（KD14-1）報告書……95
森の宮遺跡・大坂城跡発掘調査（MR14－1）報告書……111
難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW14－1）報告書……119
難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW14－2）報告書……133
難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW14－3）報告書……143
大坂城下町跡発掘調査（OJ14－1）報告書……153
大坂城跡発掘調査（OS14－3）報告書……165
大坂城跡発掘調査（OS14－4）報告書……173
大坂城跡発掘調査（OS14－5）報告書……209
大坂城跡発掘調査（OS14－6）報告書……217
上本町遺跡発掘調査（UH14－1）報告書……225

天王寺区
北河堀町所在遺跡発掘調査（KC14-1）報告書……235
大坂城跡発掘調査（OS13-40）報告書……243
大坂城跡発掘調査（OS14－1）報告書……255
大坂城跡発掘調査（OS14－2）報告書……263
伶人町遺跡発掘調査（RJ14－1）報告書……275
摂津国分寺跡発掘調査（SK14-1）報告書……287
宰相山遺跡発掘調査（SS14-1）報告書……297
上本町遺跡発掘調査（UH14－2）報告書……305

淀川区
十八条遺跡Ｂ地点発掘調査（JH14-1）報告書……317
宮原遺跡Ｆ地点発掘調査（MH14-1）報告書……343
三津屋北３丁目所在遺跡発掘調査（MK14-1）報告書……361
新高３丁目所在遺跡発掘調査（NI14-1）報告書……373
野中北２丁目所在遺跡発掘調査（NV14-1）報告書……383

東淀川区
東淡路遺跡Ｃ地点発掘調査（EA14-1）報告書……393

旭　区
高殿５丁目所在遺跡発掘調査（DN14-1）報告書……405

城 東 区
関目６丁目所在遺跡発掘調査(SE14－1)報告書……413

住 吉 区
帝塚山古墳群発掘調査(TZ14－1)報告書……421

平 野 区
長原遺跡発掘調査(NG14-1)報告書……429
瓜破遺跡発掘調査(UR14-1)報告書……445

北区神山町における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(CM14－１)報告書

調査個所	大阪市北区神山町25－１の一部ほか４筆
調査面積	210㎡
調査期間	平成26年４月７日～４月22日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、黒田慶一

1）調査に至る経緯と経過

今回調査地は淀川によって形成された三角州上に立地し、北側には中崎町遺跡と扇町２丁目所在遺跡(OG10－１次）［大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012］、北西側には茶屋町遺跡、西側には安曇寺跡推定地がある(図１)。CH08－１次で行った花粉・珪藻分析、放射性炭素年代測定や、貝化石の産状などから、紀元前後頃の周辺一帯は淀川河口付近の干潟前縁の潮下帯であり、その後に淀川の氾濫によって土砂が供給され、古墳時代には陸化していたことが判明した［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010］。また、CH10－２次からは弥生時代後期の土器が出土している［大阪文化財研究所2012］。しかし、該当する時代の遺構はいずれもなく、明確な遺構としてはCH08－１次の平安時代の溝が一番古い遺構である。CH10－２次で徳川期に、中国街道沿いに建物が建ち並び、背後には畠地が拡がる景観が復元できた。

この周辺で開発が本格化するのは中世前半で、今回調査地の南西200mの安曇寺跡推定地（AZ05－１次調査）では、13世紀代の遺構・遺物が多く検出されている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006］。

当該地で大阪市教育委員会が試掘調査を行った結果、地表下1.0mで中～近世に相当する地層が確認された。この結果を受け、敷地西部の南北30m、東西７mの範囲で調査を実施した(図２)。調査は、約1.0mまでの地層を重機で除去した後、人力による掘下げを行い、遺構の検出作業を進めた。調査区は区画整理地に当り、中央には埋設管であるガス管の掘形が縦断する。

なお基準点は、Magellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記する。

図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

現地表下2.0mまでの地層を第0～4層に区分し、第3a層以下は海砂の堆積層で、第3層はa・a'・b・cに細分される。第3a層上面以下は、南から北に向けて緩やかに下がっていく。

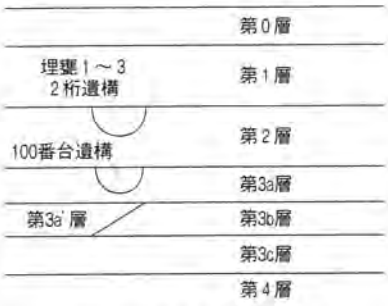


図3　地層と遺構の関係図

各層の層相の特徴は以下のとおりである。

第0層：近・現代の盛土層である。ガス管掘形は区画整理以前の町並みの西端を示す。

第1層：近代の作土層で層厚20～30cmを測り、灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂からなる。

第2層：近世の作土層で層厚20～40cmを測り、褐色(10YR4/4)細粒砂からなる。18世紀後葉までの遺物を含む。

第3a層：層厚20～50cmの黄褐色(10YR5/6)細粒～中粒砂層でラミナがみられる。

第3a'層：調査区北部で第3b層以下が削られた後に堆積した明黄褐色(10YR6/6)中礫質粗粒砂層で、ラミナがみられる。

第3b層：層厚30～40cmのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂からなる水成層である。

第3c層：層厚10～30cmのにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂からなる水成層である。

第4層：層厚20cm以上のにぶい黄橙色(10YR6/4)中礫質粗粒砂からなる水成層である。

ii)遺構と遺物

a．17世紀後半～18世紀前半の遺構(第3a層上面；図5・6)

調査区の南半で直径0.2m前後の小穴群を検出した。

SE101　掘形の直径2.0m、井戸側の直径が1.5mの井戸で、TP+0.2mを底部とする。井戸側内の埋土は、黄褐色(2.5Y5/3)シルトなどである。

SK102　長さ2.5m以上、深さ0.2mの黄褐色(10YR5/6)中礫を含むシルト質粗粒砂などを埋土とする土壙で、埋没後にSE101が掘られる。平瓦1が出土した。1は凸面に凹面台圧痕がみられ、凹面は丁寧なナデ調整後に狭端縁に深い面取りを施す。

SD103　長さ4.0m以上、幅0.5m、深さ0.1mの東西溝で、褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。

b．18世紀後半～近代の遺構(第2層上面：図5～8)

近代の便槽である埋甕1～3のほか、調査区のほぼ全域で直径0.2m前後の小穴群を検出した。

SK20　直径0.7m、深さ0.3mの円形土壙で、オリーブ褐色(2.5Y4/3)細礫質粗粒砂などを埋土とし、中世の平瓦2が出土した。

SK23　長さ1.0m以上、深さ0.4mの土壙で、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土を埋土とし、硯の未成品3～5が出土した。3は流紋岩、4・5は粘板岩である。共伴する遺物はない。

SK02　南北2.5m、東西4.5m、深さ0.4mの不整楕円形の土壙で、オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂質シルトを埋土とする。肥前磁器染付碗6、三巴文軒丸瓦7、土人形11・12が出土した。6は18世紀

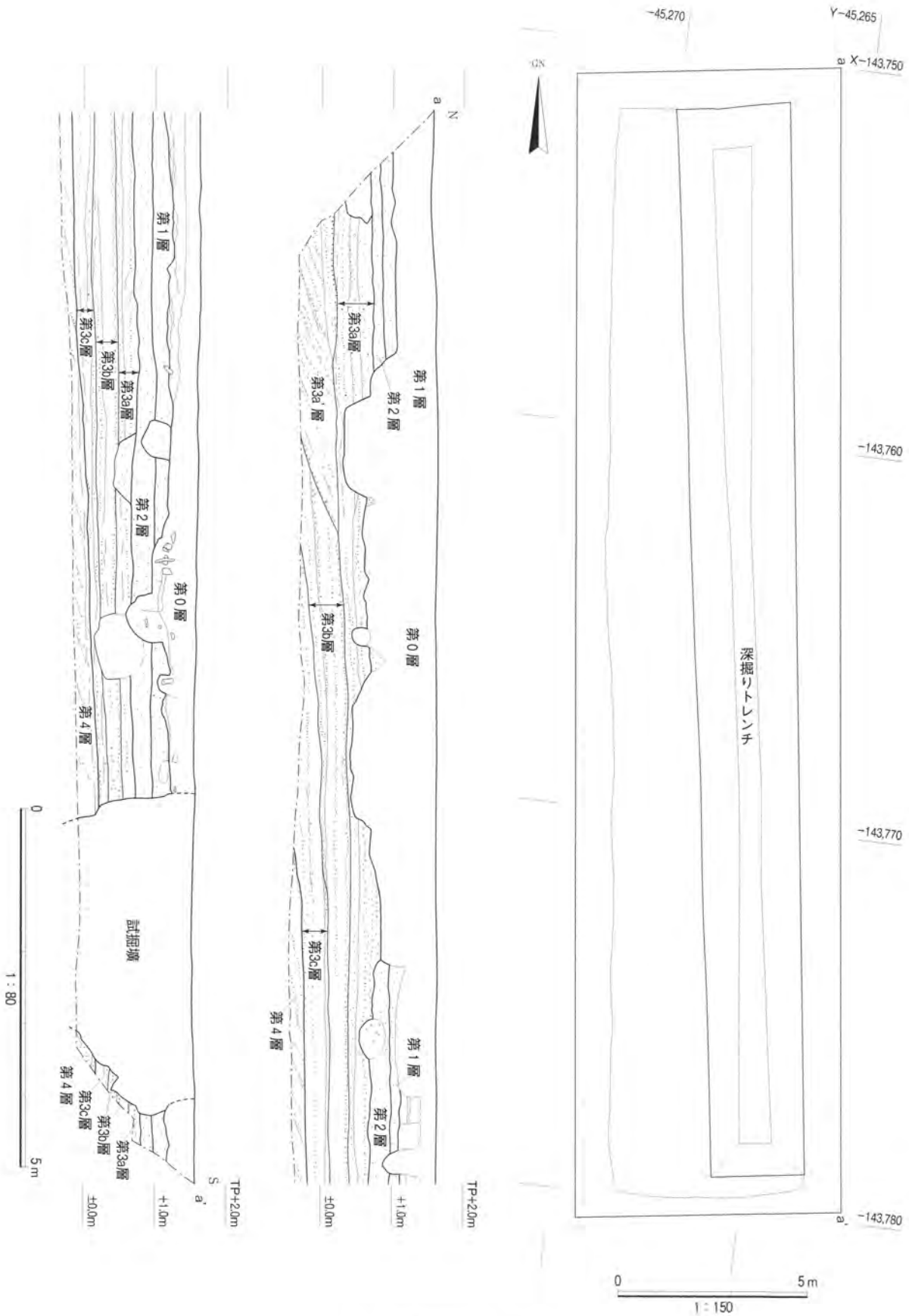


図4　東壁断面図と平面図

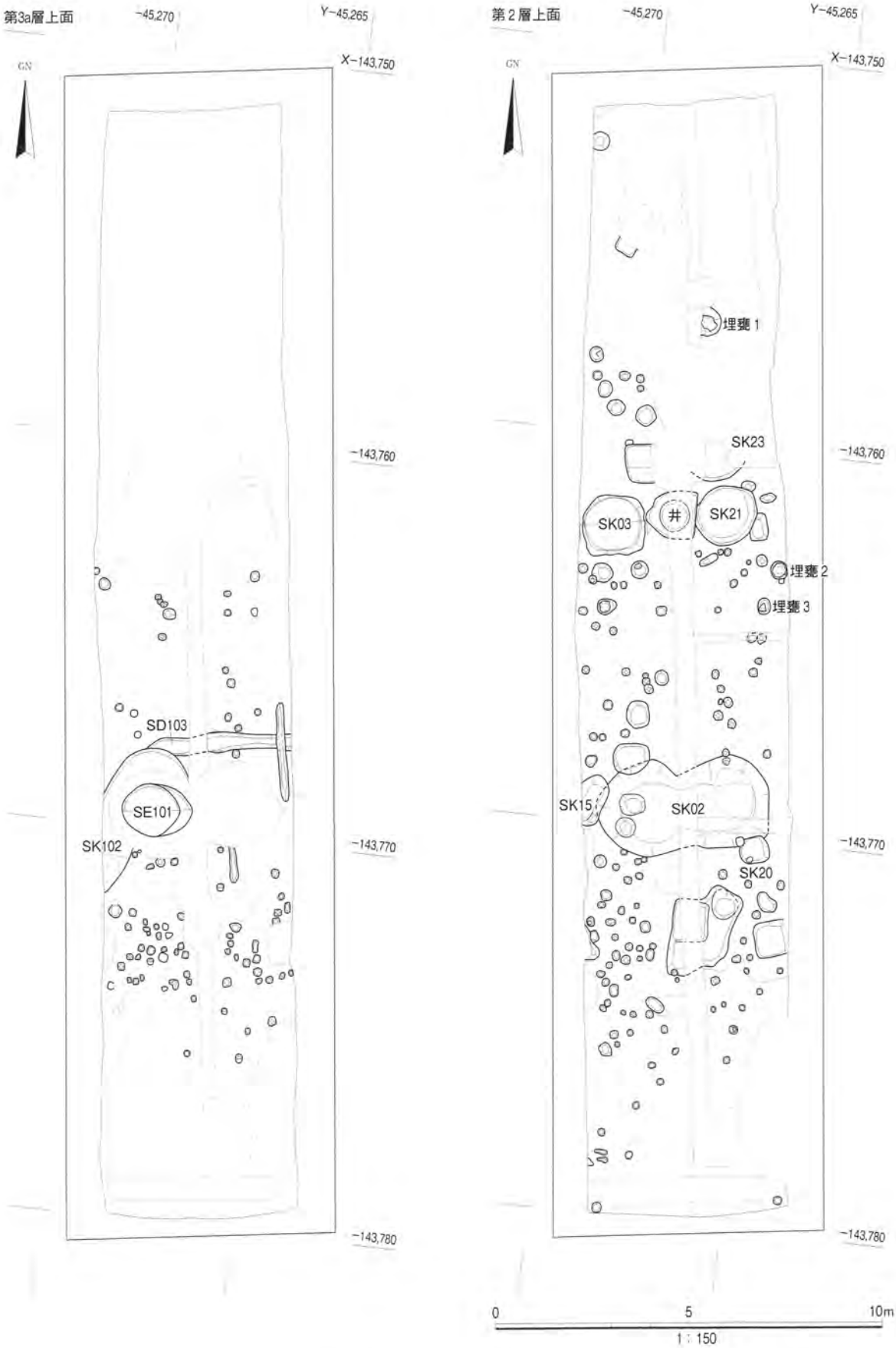


図5　第3a層・第2層上面平面図

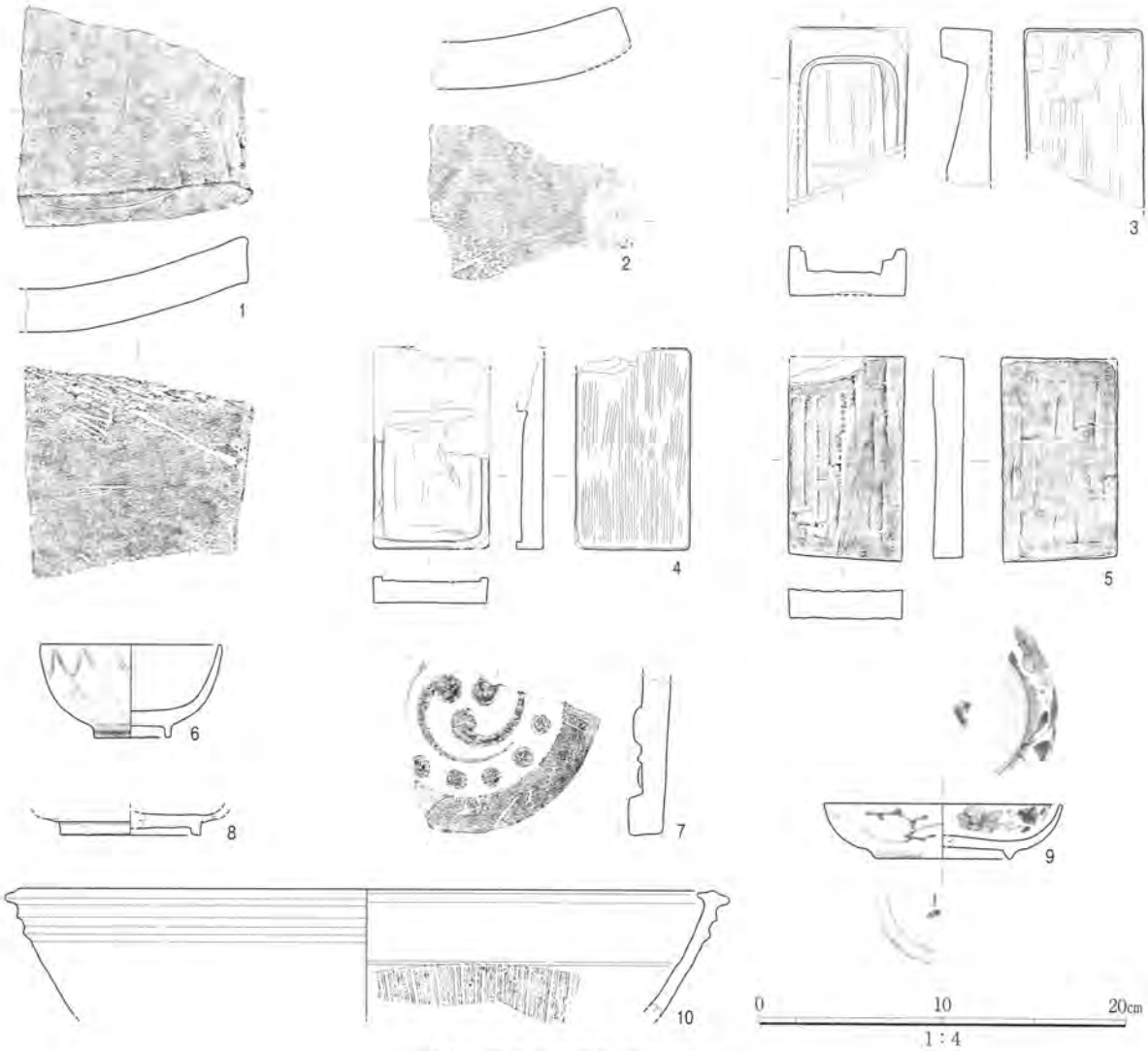


図6　遺構出土遺物実測図(1)

SK102(1)、SK20(2)、SK23(3～5)、SK02(6・7)、SK15(8)、SK03(9・10)

中葉のもので、11は唐人、12は赤色顔料付着の馬である。

SK03　直径1.3m、深さ0.7mの円筒形の土壙で、壁面に漆喰を施す(写真1)。肥前磁器染付皿9、丹波焼褐釉擂鉢10が出土した。10は19世紀代のもので、埋土にはレンガも含み、近代の遺構である。貯蔵穴と思われ、東側にも同規模のSK21がある。

SK15　長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.4mの褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトを埋土とする楕円形の土壙で、瀬戸美濃焼皿8、土人形13～17、面子18が出土した。13は赤色顔料付着の馬、14は赤色顔料付着の釣り人、15は櫓門、16は干し柿、17は魚である。

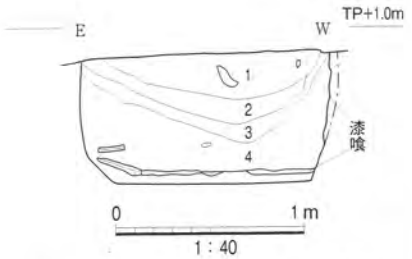
d．各層出土遺物(図9)

i．第3a層

東播系須恵器擂鉢19が出土した。13世紀のものである。

ii．第2層

中国産白磁皿20、同青磁碗21、瓦質土器羽釜22が見つかった。20は見込みに胎土目がみられ、高台は外縁を浅く削る。15世紀後葉～16世紀前葉のもので、21は14～15世紀、22は15世紀後半のものである。



1：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粗粒砂
2：褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂
3：にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂質シルト
4：褐色(10YR4/4)中礫質粗粒砂

図7　SK03断面図

写真1　SK03全景(北から)

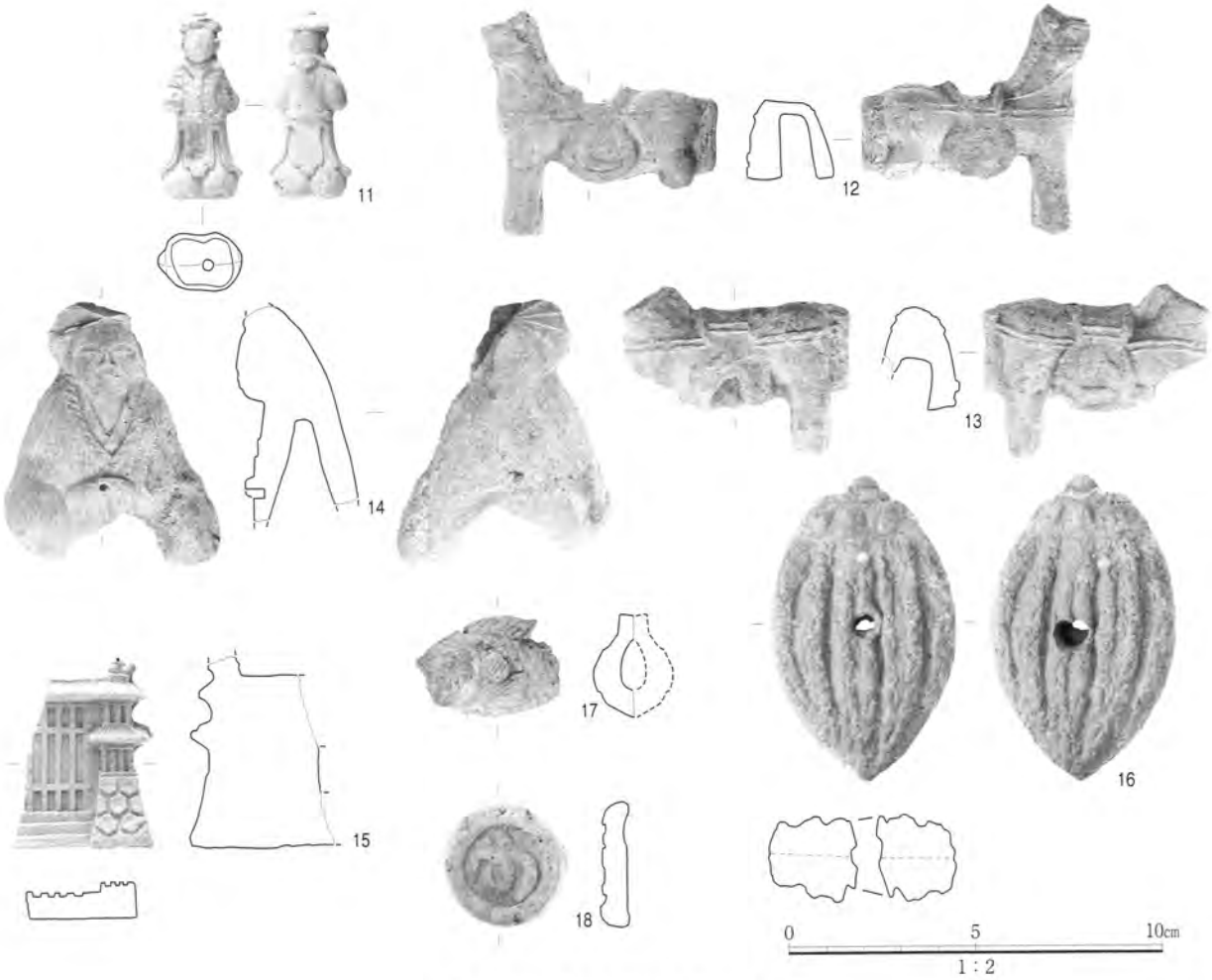


図8　遺構出土遺物実測図(2)
SK02(11・12)、SK15(13~18)

3)まとめ

今回の調査で最も古い遺物は、砂礫層の上面で検出した13世紀の土器であるが、周囲の調査成果や太融寺の存在を鑑みる時、もっと早い開発が予想される。今後の周辺部の調査に期待したい。

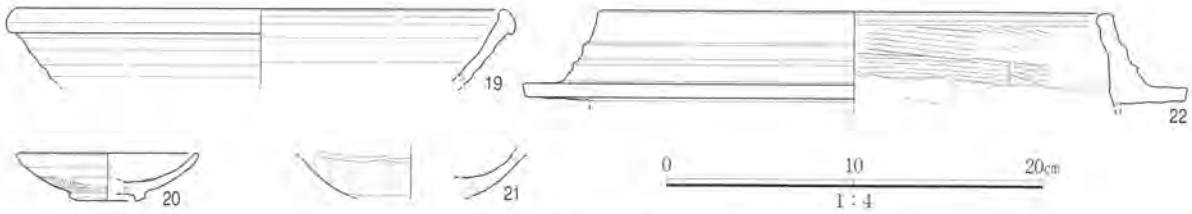


図９　包含層出土遺物実測図
第3a層(19)、第２層(20～22)

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2006、「安曇寺跡推定地発掘調査(AZ05－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告2005』、pp.3－22

2010、「北区茶屋町における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(CH08－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.3－10

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2012、「北区扇町二丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(OG10－１)報告書」:『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、pp.29－35

大阪文化財研究所2012、『茶屋町遺跡発掘調査報告』

第3a 層上面と深掘りトレンチ全景
（北から）

第２層上面遺構
（東から）

第２層上面遺構
（西から）

北区本庄東三丁目９－６・９－９における建設工事に伴う
長柄古墳発掘調査(NR14－１)報告書

調査個所	北区本庄東3丁目9－6・9－9
調査面積	30㎡
調査期間	平成26年11月21日～11月28日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工　吉田 悠歩

1）調査に至る経緯と経過（図1・2）

長柄古墳は淀川河口部のデルタ地帯に位置する。墳丘などは確認されていないが、戦後の復興期に工事に伴い古墳時代中期の家形埴輪が出土したことをきっかけにその存在が想定されるようになった［中村博司1975］。長柄古墳の周辺は低地部であるものの、推定地から埴輪や須恵器が出土したことと周辺に他の古墳の存在をうかがわせる地名が残ることから、小規模ながら古墳群が営まれたと推測されている［新修大阪市史編纂委員会1988］。しかし、古墳群に関連する資料は、先述の家形埴輪などのほかは長柄古墳の東方約0.5kmに立地する長柄西遺跡B地点NN12－2次調査において包含層から円筒埴輪の小片が出土したことが知られるのみで［大阪文化財研究所2013a］、古墳群の詳細は不明である。

長柄古墳ではこれまでにNR12－1次調査が行われている。この調査では氾濫堆積層の上に中世～近世の4層にわたる作土層や遺構・遺物が見つかり、中世前期に開発され、近代まで耕作地として利用されたことが明らかとなった［大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014］。

長柄古墳周辺の遺跡として、南に隣接する本庄東遺跡や西方約0.6kmに位置する豊崎遺跡が知られている。これらの遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が見つかっている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999・2003・2008］。加えて、本庄東遺跡HH01－2次調査では水成堆積層から弥生時代前期の土器が出土しており、弥生時代に陸化してすぐに人間の生活が営まれたことが指摘されている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003］。これらの遺跡からは、古墳時代中期～古代の遺構・遺物は顕著でないが、続く中世には、豊崎遺跡TS06－1次調査で瓦や青磁が出土したほか、本庄東遺跡HH13－1次調査では15～16世紀の遺構を確認した［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、大阪文化財研究所2013b］。また、淀川の川岸では長柄橋付近など3箇所で瓦や瓦

図1　調査地位置図

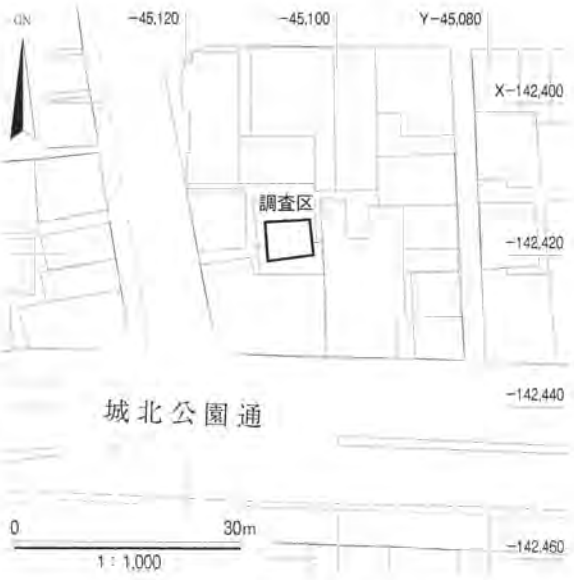


図2　調査区位置図

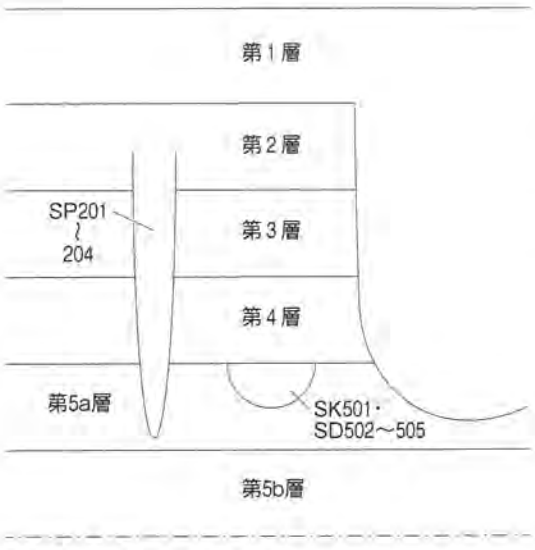


図3　地層と遺構の関係図

器椀などが採集され、寺院などがあったと推定されている[江谷寛1986]。近世には、本庄東遺跡で耕作痕跡や17世紀末～18世紀前半の土壙を確認した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999・2003・2008]。

今回の調査に先立って行われた大阪市教育委員会による試掘調査では、地表下約0.9m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする中世～近世と考えられる遺構面および遺物包含層が検出された。こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に発掘調査を実施した。

調査は平成26年11月21日に5m×6mの調査区を設定して開始した。第2層まで重機で掘削し、第3層以下を人力で掘り下げ、遺構面の精査と遺物の採集、写真撮影、実測などを行った。11月28日に機材撤収を行い、作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準にした。

2)調査の成果

i)層序(図3・4、図版1)

第1層はレンガやビニールパイプ、近世の瓦を含む現代の攪乱層で、層厚は0.5～1.2mである。

第2層は褐灰色(10YR4/1)わずかに細礫混り中粒砂層でわずかに炭を含む。層厚は最大24cmである。第2層内で柱穴群がみられる。

第3層はにぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに細礫混り中粒砂層である。層厚は最大42cmである。本層からは12～13世紀の遺物が出土した。

第4層は暗褐色(10YR3/3)中粒砂層で、層厚は8～17cmである。本層からは古代の土師器と中世の瓦器椀が出土した。

第5層は氾濫堆積層である。第5a層と第5b層に分類した。第5a層はにぶい黄褐色(10YR6/4)中粒砂層で、層厚は39～50cmである。第5b層の上部は10YR4/1褐灰色粗粒～中粒砂層で、層厚は26cmである。下部は粗粒砂～細礫からなり、層厚は62cm以上である。南から北へ下方に傾斜するラミナが見られる。

ii)遺構と遺物

a. 中世以前の遺構と遺物(図5・6、図版1)

第5層上面においてSK501、SD502～505を検出した。

第2層:褐灰色(10YR4/1)わずかに炭を含むわずかに細石混り中粒砂
第3層:にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに細石混り中粒砂
第4層:暗褐色(10YR3/3)中粒砂
第5a層:にぶい黄褐色(10YR6/4)中粒砂～細礫
第5b層:にぶい黄褐色(10YR4/1)中粒～粗粒砂

SP205埋土:暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂
SD503埋土:褐灰色(10YR4/1)シルト質中粒砂
SD505埋土:にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂

0　2m
1:80

第2層:褐灰色(10YR4/1)わずかに炭を含むわずかに細石混り中粒砂
第3層:にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに細石混り中粒砂
第4層:暗褐色(10YR3/3)中粒砂
SD502:暗褐色(10YR3/3)中粒砂
第5a層:にぶい黄褐色(10YR6/4)中粒砂～細礫
第5b層:にぶい黄褐色(10YR4/1)中粒～粗粒砂

0　2m
1:80

図4　地層断面図

SK501は長さ0.8m以上、幅0.5m、深さ0.1mの平面が楕円形をした土壙である。埋土は黒褐色(10YR5/2)中粒砂である。土師器の小片が出土した。

SD502は長さ5.0m以上、幅0.4m、深さ0.1mの溝で、N68°E方向に延びる。調査区内では直線的に延びるが、東壁に見られるSD502の断面は平面で見られる溝の延長よりやや南によっているので、東に向かって曲っていた可能性がある。埋土は暗褐色(10YR3/3)中粒砂である。

SD503は長さ3.7m以上、幅0.4m、深さ0.2mで、N25°W方向に延びる。直線的に延びる。調査区内では直線的に延びるが、北壁に見られるSD503の断面の幅は平面で見られる溝の幅よりやや広いので、調査区外では東西いずれかの方向に曲っていた可能性がある。埋土は褐灰色(10YR4/1)シルト質中粒砂である。

SD504は長さ2.3m以上、幅0.3m、深さ0.1mで、N56°E方向に直線的に延びる。埋土は暗褐色(10YR3/3)中粒砂である。

SD505は長さ4.5m以上、幅0.3m以上、深さ0.2mの溝ないし落込みである。N6°W方向に直線的に延びる。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂である。

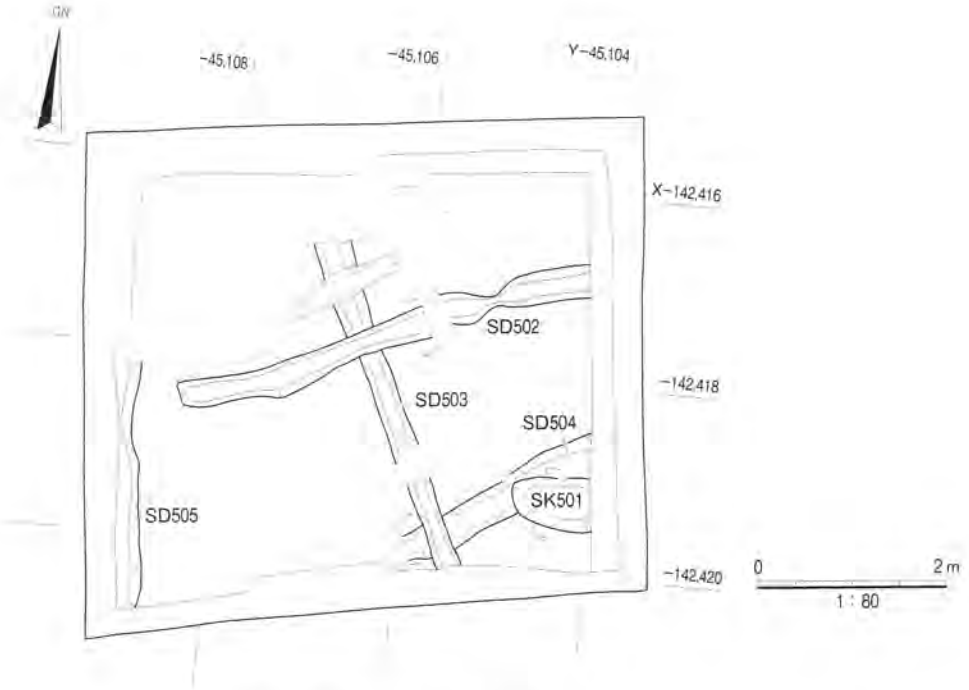


図５　中世以前の遺構平面図

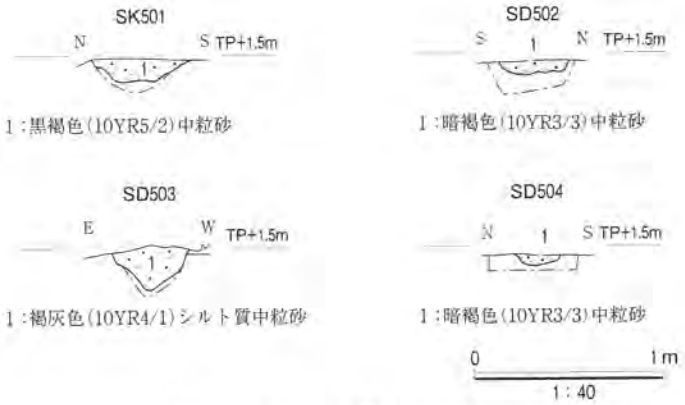


図６　中世以前の遺構断面図

本庄東遺跡HH01－２次調査時において、本層の第５層に相当する水成堆積層から弥生時代前期の土器が出土し、この層の直上に形成された古土壌内で弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が認められた。このことから、本調査地も同時期に離水したと推測できる。また、第４層からは瓦器椀が出土している。したがって第５層上面の遺構は弥生時代～中世のものと思われる。

b. 近世の遺構と遺物(図７～９)

第３層上面で、第２層を埋土とする柱穴群を検出した。第２層下面ないし第２層内の遺構である。いずれも一辺0.1m前後の方形で、検出面からの深さは0.2mほどである。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに細礫混り中粒砂でわずかに炭を含む。また、第３層の偽礫を含むものもある。このほか、いくつかの柱穴には直径0.08mほどの円形の柱痕があった。柱筋は、部分的に直線に並んでいるように見える個所もあるが、柵・建物などの配列は復元できなかった。なお、本庄東遺跡HH01－２次調査でも１辺が0.15m程度となる隅丸方形の近世以降の柱穴群を検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]。

SP202からは土師器皿１と17世紀末～18世紀前葉の丹波焼擂鉢が出土した。１は底部から斜めに立

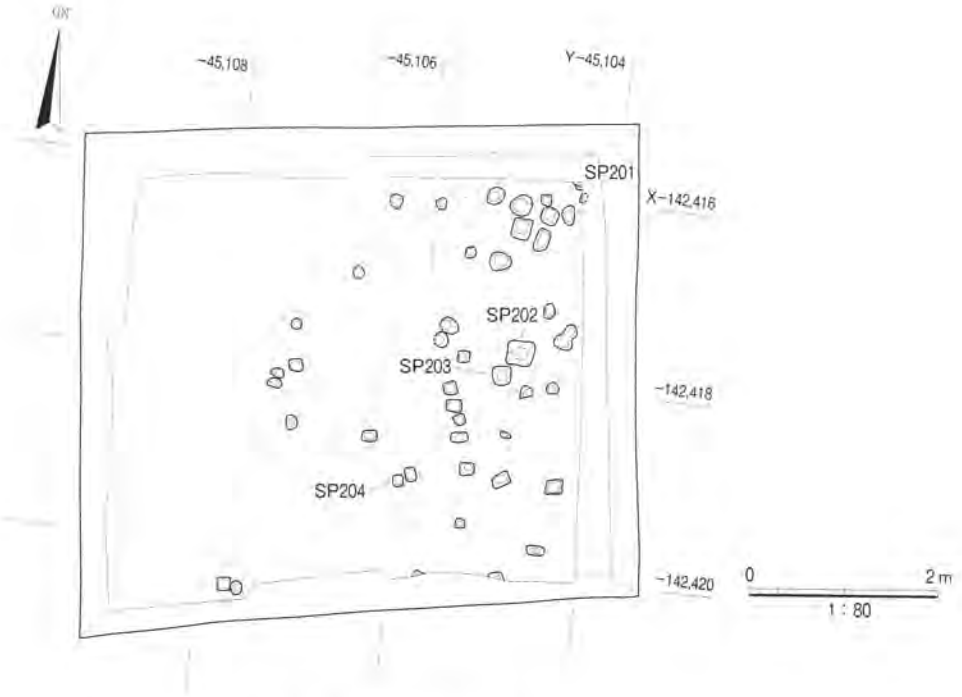


図7　近世の遺構平面図

ち上がり、端部は丸くおさめる。にぶい黄橙色を呈する。中世のものである。

SP203からは、埴輪片とみられる2が出土した。内外面にハケメが見られるが、内面は縦方向のナデによりハケメを消す。ハケメは内面のもので8条/cm、外面のもので6条/cmと細く、密である。にぶい橙色を呈する。

SP204からは土師器皿が出土した。18〜19世紀前半のものであろう。

これらの遺構の年代は、いずれも近世であろう。

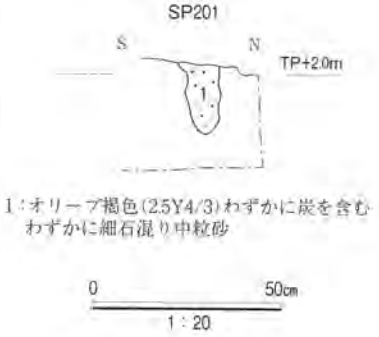


図8　SP201断面図

c. 各層出土の遺物(図11)

第4層からは土師器皿3・瓦器椀の細片が各1点ずつ出土した。3の口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。内外面ともナデで調整する。古代のものとみられる。なお、第4層の年代は、瓦器の小片が出土していることから、中世まで下るであろう。

第3層から土師器皿・須恵器甕・瓦器椀が出土した。

4・5は土師器皿である。4は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整である。にぶい黄橙色を呈する。5は口縁を外反させる。にぶい黄橙色を呈する。中世のものであろう。

6〜8は瓦器椀である。6は内面にヘラミガキが、外面にはヨコナデとユビオサエが見られる。13世紀代のものである。7の内面には比較的密にヘラミガキを施す。外面のヘラミガキはやや隙間がある。8は内面にヘラミガキが、外面にヨコナデがみられる。また、外面下部にユビオサエが見られる。いずれも12世紀代のものである。

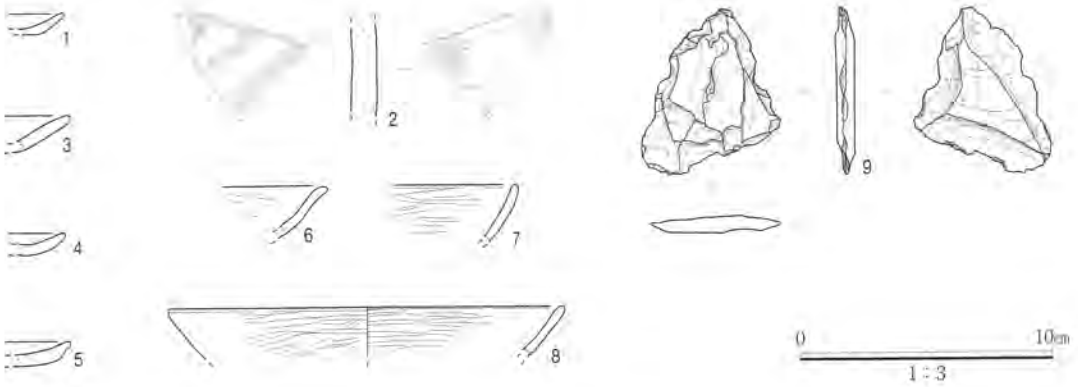


図９　出土遺物実測図
SP202(１)、SP203(２)、第４層(３)、第３層(４～８)、第３層以下(９)

９は側溝掘削時に第３～5a層から出土したサヌカイト製の加工痕のある剥片である。３箇所で折り取ったのち、表裏面に細部調整を施す。縁辺には表裏面への剥離を切るツブレ状の剥離面がところどころみられる。出土層位は明確でないが、調査地周辺は弥生時代に陸化していることから、９は氾濫堆積層である第５層に属するものである可能性が高い。

３)まとめ

今回の調査では中世以前の土壙・溝と近世の柱穴群を確認した。これにより調査地は陸化した後、中世までに土地利用が開始されたことが明らかとなった。長柄古墳NR12－１次調査では中世前半に周辺地域が開発されたこと、本庄東遺跡では弥生時代後期～古墳時代に土地利用が開始され、中世以後はおもに耕作地であったことが指摘されている。今回の調査で確認した遺構も同様の過程を示している。

また、古墳に関連する遺構は認められなかったが、埴輪とみられる細片が出土したことは注目すべき成果といえよう。

参考文献

江谷寛1986、「淀川川底に眠る寺院跡」：大阪市史編纂所『大阪の歴史』第十九号　大阪市史料調査会、pp.37－52

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「小倉商事(株)による建設工事に伴う確認調査(HH97－１)」:『平成９年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.19－27

2003、「本庄東遺跡発掘調査(HH01－２)報告書」：『平成13年度大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告書』、pp.３－７

2008、「豊崎遺跡発掘調査(TS06－１)報告書」：『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.３－12

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「北区本庄東二丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(HH10－１)報告書」：『平成22年度大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告書』、pp.１－10

2014、「北区本庄東三丁目における建設工事に伴う長柄古墳(NR12－１)発掘調査報告書」：『大阪市内埋蔵

文化財包蔵地発掘調査報告書』2012、pp.1－10
大阪文化財研究所2013a、『長柄西遺跡B地点発掘調査報告』、p.12
2013b、『北区本庄東二丁目における建設工事に伴う本庄東遺跡(HH13－1)発掘調査報告書』
新修大阪市史編纂委員会1988、『新修　大阪市史』第1巻、pp.418－424
中村博司1975、「大阪市内出土の埴輪鳥・家について」:『大阪城天守閣紀要』第3号　大阪城天守閣、pp.2－7

北壁地層断面
（南から）

東壁地層断面
（西から）

第５層上面遺構完掘
状況
（西から）

北区東天満二丁目９における建設工事に伴う

天神橋遺跡発掘調査(TJ14－１)報告書

調 査 個 所　北区東天満２丁目９
調 査 面 積　125㎡
調 査 期 間　平成26年８月25日～９月３日
調 査 主 体　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　高橋 工、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、弥生時代～近世の集落遺跡である天神橋遺跡の東北部、大阪天満宮の北東に位置する。付近のHX99－１次調査では、奈良時代後半を中心とする柱穴や溝など中世～近世の遺構・遺物が検出され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001]、また、HX11－１次調査では、中世から豊臣期の城下町開発、さらに18世紀中葉までの土地利用の変遷が明らかになる[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]などの調査成果が得られている。

大阪市教育委員会が平成26年７月10日に行った試掘調査の結果、現地表下約2.5m以下の深さで中世～近世と考えられる遺物包含層および遺構面が検出された。旧建物の堅牢な基礎躯体、構造壁は残したまま、４箇所のピット部分について、床部分のコンクリートを除去し、その下位の調査を実施することとなった。

8月25日、敷地北東寄りに幅約10m、長さ19mの調査区を設定し、北東隅(１区)から調査を開始した(図２)。重機によって、現地表下2.5mまで近現代攪乱層ならびにコンクリート床を掘削した後、慎重に人力によって掘り下げる予定であったが、１区はコンクリート床が厚く、破壊することが困難であったため、２～４区について、遺構・遺物の検出に努め、随時、写真・図面で遺構・地層の記録を行った。その後、４区で検出された遺構の広がりを調べるため、関係諸機関と協議のうえ、５・６区の調査を試みたが、厚いコンクリート床に阻まれ、断念した。最終的な掘削個所は６箇所、総面積は125㎡となった。機材の撤収などの作業を含め、９月３日に発掘調査を完了した。

調査地の基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づ

図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

図3　地層と遺構の関係図

く座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。

2）調査の結果

i）層序（図3・4）

敷地の現地表面の標高はTP＋4.3m前後とほぼ平坦である。TP＋0.6mまでの地層を2層に分類した。

第1層：旧建物のコンクリート製基礎躯体および現代攪乱層である。層厚は250～330cmである。

第2層：浅黄色(2.5Y7/3)中礫～極粗粒砂からなる暴浪時の海浜砂礫層で、最大層厚は100cm以上である。基本的な古流向は南から北である。遺物は確認できなかった。上面で17世紀初頭～19世紀初頭の遺物を含む井戸、土壙が検出された。

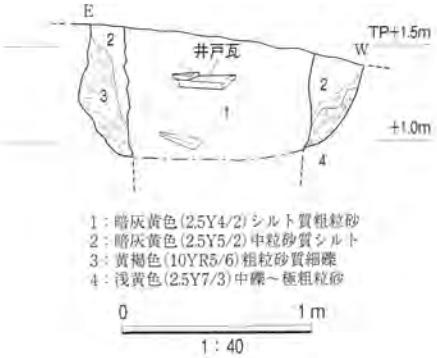


図5　SE02断面図

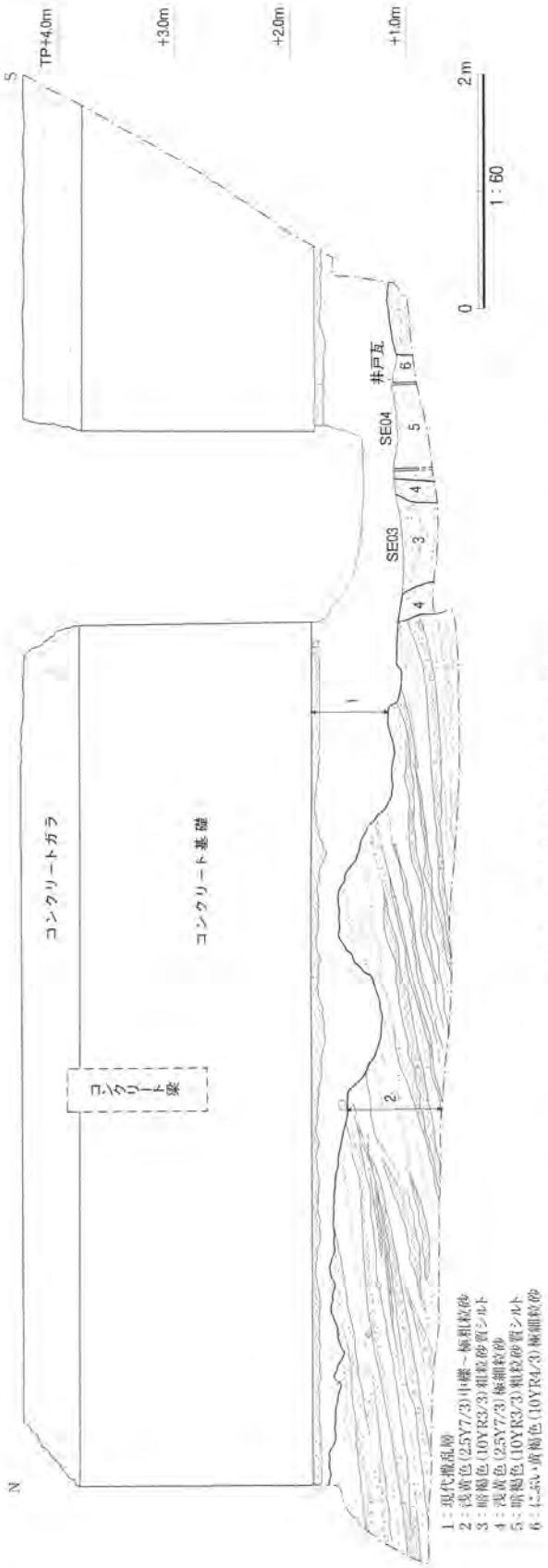


図4　3・4区東壁地層断面図

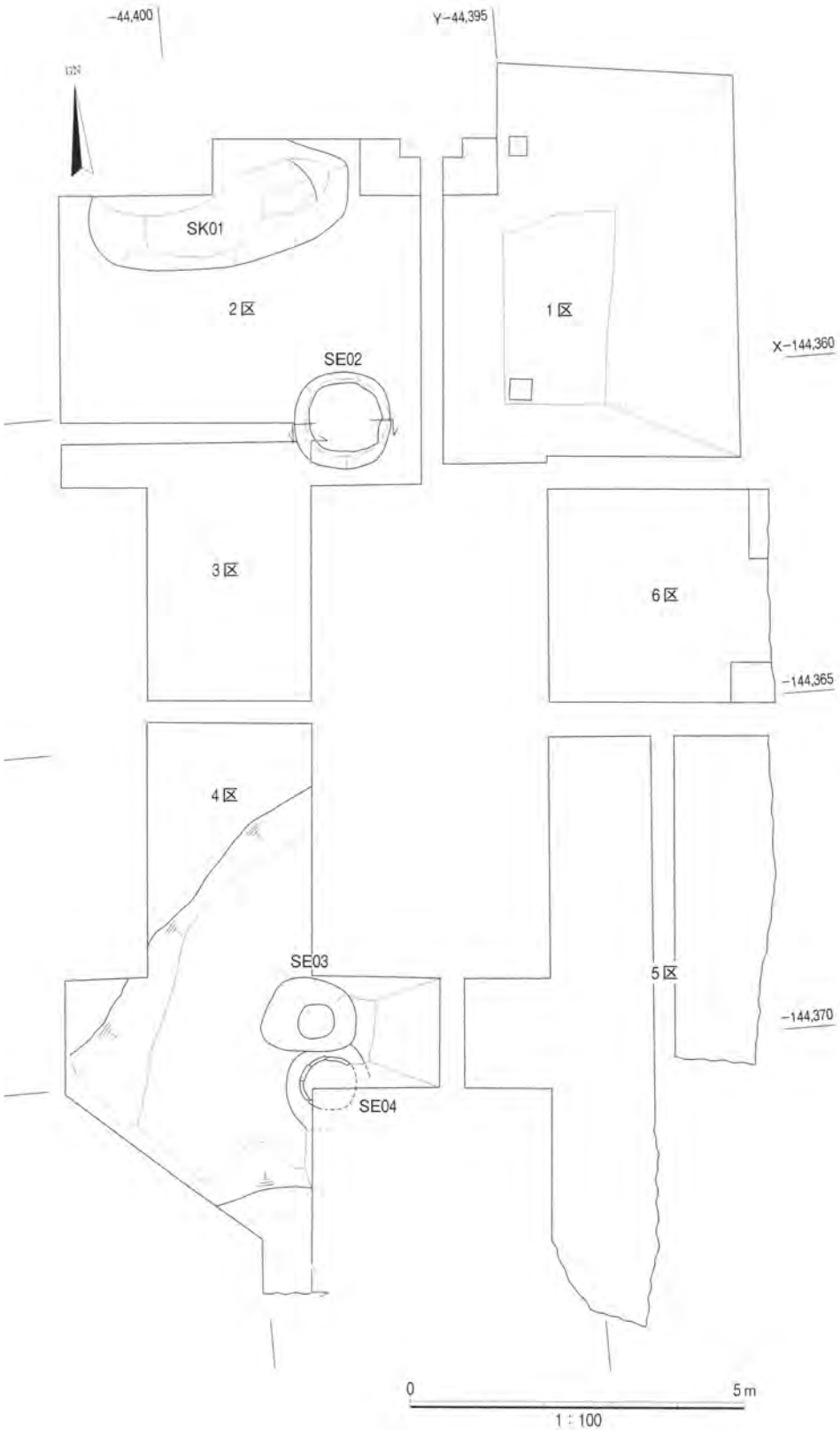

-44,400
Y-44,395
GN
SK01
2区
1区
SE02
X-144,360
3区
6区
-144,365
4区
SE03
5区
-144,370
SE04
0
5m
1：100

図6　遺構平面図

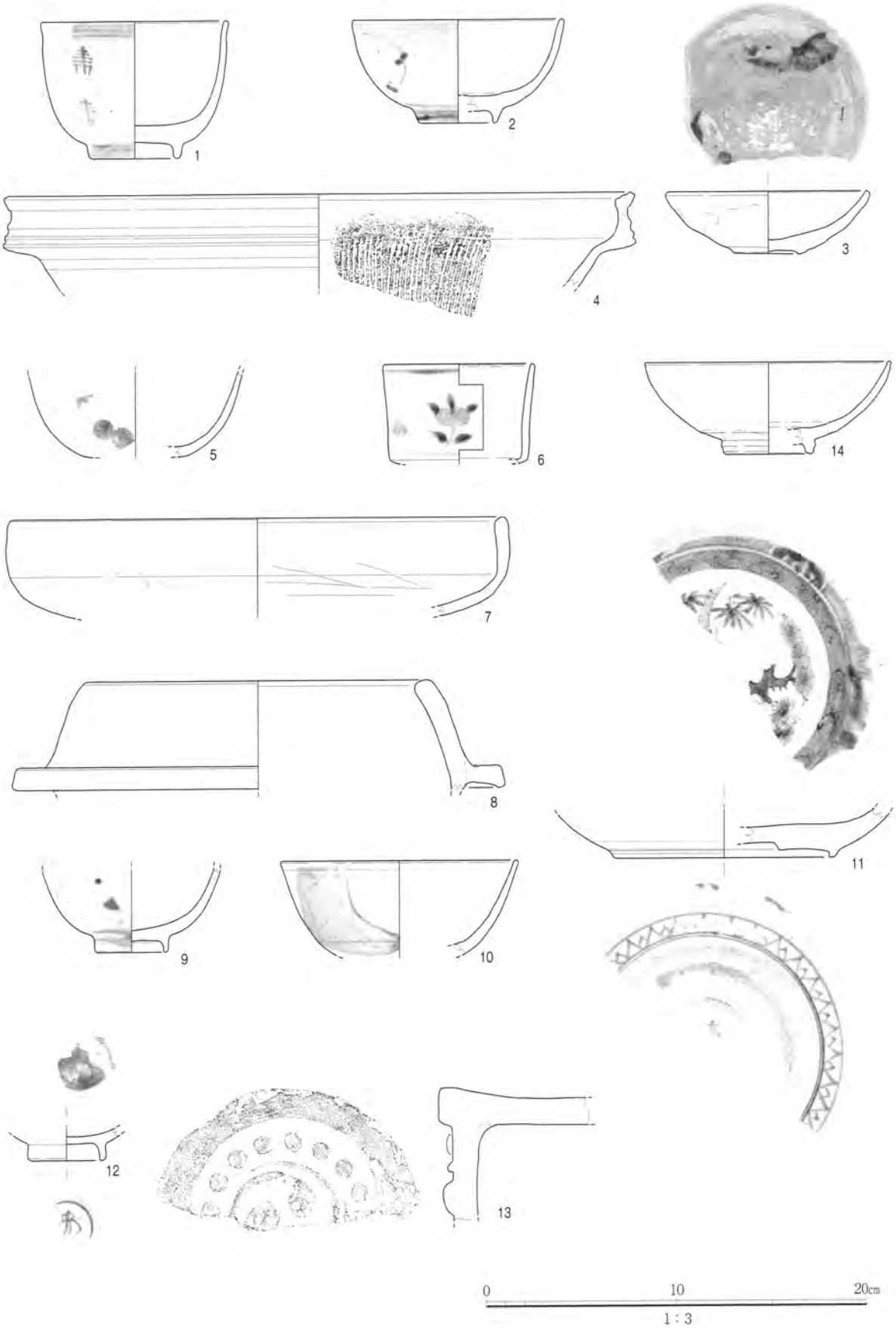


図７　出土遺物

SK01(１～３)、SE02(４～６)、SE03(７～13)、SE04(14)

ⅱ)遺構と遺物(図5～7)

SK01　2区の北西隅で検出された長さ3.8m、幅1.7m以上、深さ0.7mの長円形の土壙である。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトを主体とし、肥前磁器1・2、肥前陶器3、焙烙などが出土した。3は17世紀初頭、1は17世紀中頃、2は18世紀前半のものである。

SE02　2区の南東隅で検出された直径1.4m、深さ0.7m以上の井戸である。井戸側内の埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂で、肥前磁器筒形碗6のほか、井戸瓦片、漆喰が出土した。瓦の大きさから8枚で直径約1.0mの井戸側を形作っていたことがわかる。掘方の埋土からは、丹波焼擂鉢4、肥前磁器碗5、備前焼擂鉢など出土した。4～6とも18世紀前半頃に位置づけられる。

SE03　4区で検出された東西1.4m、南北1.1m、深さ0.4m以上の井戸である。SE04を切る。埋土は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂で、土師器焙烙7、瓦質土器羽釜8、肥前磁器碗9・10、同皿11、中国産青花碗12、軒丸瓦13などが出土した。7は口縁部外面を掻き上げて仕上げるC類に属し、時期は17世紀中頃～後半である[難波洋三1992]。8～10・12・13も17世紀後半を中心に位置づけられるが、11が18世紀末～19世紀初頭であり、井戸の埋没時期はこれ以降である。

SE04　SE03の南に接して検出された直径1.2m、深さ0.3m以上の井戸である。8枚の瓦で、直径0.85mの井戸側を形作っていた。その埋土からは肥前陶器碗14、肥前磁器、土師器火入などが出土した。14は18世紀前半に位置づけられる。

3)まとめ

本調査では遺構面・遺物包含層は旧建物で大きく削平されていたものの、徳川期の井戸3基、土壙1基を検出することができた。いずれも18世紀前半以降であるが、出土遺物には17世紀初頭に遡るものもあり、遺跡縁辺部でも豊臣期以降の地層・遺構が本来、保存されていたことが伺え、今後とも綿密な調査の蓄積が期待される。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001、「株式会社大京による建設工事に伴う東天満1丁目所在遺跡発掘調査(HX99－1)報告書」:『平成11年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.25－31

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「東天満遺跡発掘調査(HX11－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.1－10

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」:『難波宮址の研究』第九、pp.373－400

調査区全景(南から)

3・4区東壁地層断面
(北西から)

SE03・04検出状況
(西から)

北区天神西町10－６・10－13における建設工事に伴う

天神橋遺跡発掘調査(TJ14－２)報告書

調査個所	大阪市北区天神西町10－6・10－13
調査面積	15㎡
調査期間	平成26年9月16日～9月19日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

調査地は天神橋北詰の北西約200mに位置する(図1)。東には大阪市内を南北に貫く天神橋筋(南への延長は松屋町筋)が通る。この筋は現代のものであるが、近代以前の天神橋筋は天神橋筋商店街として残り、その道は古代まで遡る可能性が示唆されている[新修大阪市史編纂委員会1988]。調査地周辺は中世に京都と瀬戸内以西を結ぶ交通の拠点であった渡辺津の推定地であると共に、大坂天満宮の門前町として発展し、豊臣期の城下町天満でもある。

今回調査地の東南50mのTJ00－2次調査地では、古墳時代の土器埋納遺構や、奈良時代後半～平安時代中期の遺物、室町時代の堀・井戸・礎石・柱穴・土器溜・土壙が見つかっている。特に堀は南北19m、東西5m以上でコの字形に巡り、断面V字形で幅2.5m、深さ0.7mを測る。屋敷地を囲ったものと考えられている[大阪市文化財協会2002]。また1598(慶長3)年に掘削された天満堀川は現、阪神高速大阪守口線の位置で、当地から至近である。

今回調査地で試掘調査を行ったところ、中世～近世の遺物を包含する地層と遺構が確認されたことから、発掘調査を行うこととなった。当地の東・西・北にはTJ08－1・09－1・12－4次調査地があり、考古学的知見の濃密な場所である。調査は敷地の北側で旧建物の地中梁を避けて、東西5m、南北3mの調査区を設定し(図2)、平成26年9月16日に開始した。地表下1.2mまで重機掘削し、以下を人力掘削によって遺構検出に努め、掘下げと併行して写真撮影・実測などの記録作業を行った。調査は9月19日に終了し、機材などを撤収し、現場における全ての作業を終了した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1／2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP＋○mと表記した。

図1　調査地位置図

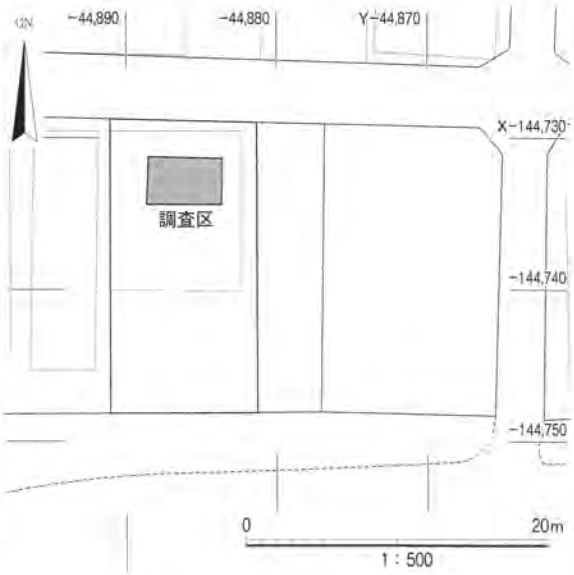


図2　調査区位置図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地の層序は以下のとおりである。第4層の中途まで重機掘削を行った関係で、第1～3b層の精確な時期は不明である。

第0層：層厚15cmの現代舗装のアスファルトとバラス層である。

第1層：層厚20～40cmの黄褐色(2.5Y5/3)中礫質粗粒砂の現代盛土層である。

第2層：層厚30cmの暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫質粗粒砂の近代盛土層である。

第3層は土色、土質が似通っているが、a・bの2層に細分化できる。

第3a層：層厚40～50cmの黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂層の畠作土層である。

第3b層：層厚10～30cmの黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質シルト層の畠作土層である。

第4層：層厚25～55cmの浅黄色(2.5Y7/3)細礫質粗粒砂の盛土層である。本層上面から掘り込んだ遺構から17世紀後半の遺物が出土することから、同時期以前の盛土である。

第5層は第5c層上に雨水などにより運ばれた土を用いたと思われる薄い整地層、第5a・5b層が堆積する。

第5a層：層厚2～8cmの黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂質シルトの整地層である。

第5b層：層厚2～10cmの暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトの整地層である。

第5c層：層厚15cmのにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトと焼土からなる整地層で、17世紀前葉までの遺物が出土し、大坂冬ノ陣(1614年)の焼土層を均したとみられる。

第6層：層厚5～8cmの暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルトの整地層で、調査区南半に分布する。

第7層：層厚2～4cmの炭を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルトの整地層で、調査区南半に分布する。

第8層はa・b・c層の3層に細分可能だが、明確な層理面をもたない。この細分は盛土施工の工程であると考えられ、時をおかずに施工された可能性が高い。また、周辺の調査から、1598年の天満堀川掘削時の排土による盛土と考えられる。

図3　地層と遺構の関係図

第8a層：　層厚10cmの粘土質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質細粒砂の盛土層である。

第8b層：層厚40cmのシルト質中粒砂偽礫を含むにぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質細粒砂の盛土層である。

第8c層：層厚15cmの灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂質シルトの盛土層である。

第9層は土質は似ているが、土色で上下2層に細分可能である。肥前陶器を含むことから本層も1598年の盛土の一部である可能性が高い。

第9a層：層厚2～5cmの黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルトの整地

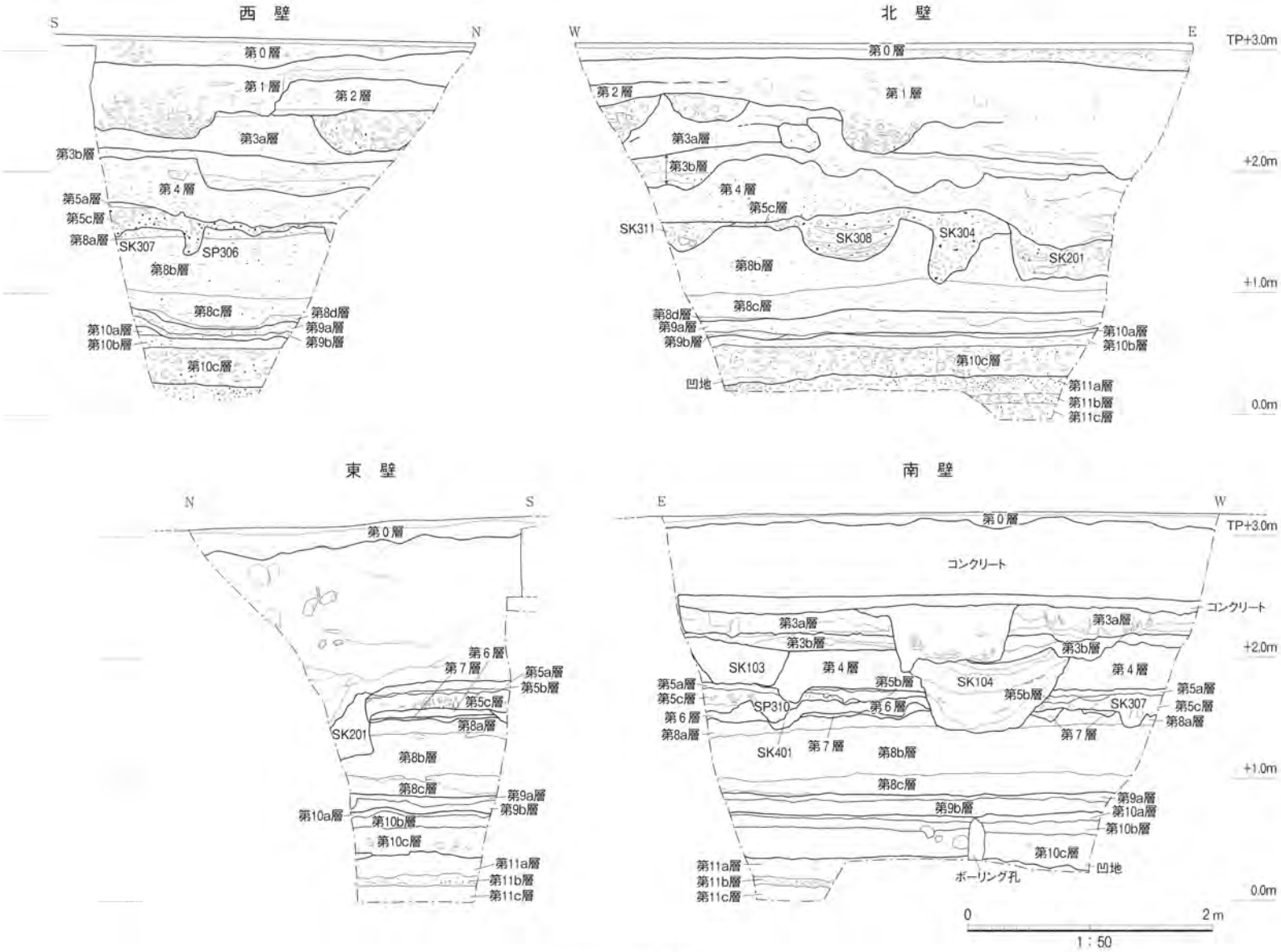

西 壁
S
N
第0層
第1層
第2層
第3a層
第3b層
第4層
第5a層
第5c層
第8a層
SK307
SP306
第8b層
第8c層
第8d層
第9a層
第9b層
第10a層
第10b層
第10c層
北 壁
W
E
TP+3.0m
第0層
第1層
第2層
第3a層
第3b層
第4層
第5c層
SK311
SK308
SK304
SK201
第8b層
第8c層
第8d層
第9a層
第9b層
第10a層
第10b層
第10c層
凹地
第11a層
第11b層
第11c層
+2.0m
+1.0m
0.0m
東 壁
N
S
第0層
第6層
第7層
第5a層
第5b層
第5c層
第8a層
SK201
第8b層
第8c層
第9a層
第9b層
第10a層
第10b層
第10c層
第11a層
第11b層
第11c層
南 壁
E
W
TP+3.0m
第0層
コンクリート
コンクリート
第3a層
第3b層
SK103
第4層
第5b層
SK104
第5a層
第5c層
第6層
第8a層
SP310
SK401
第7層
第8b層
SK307
第8c層
第9a層
第9b層
第10a層
第10b層
第10c層
第11a層
第11b層
第11c層
ボーリング孔
凹地
+2.0m
+1.0m
0.0m
0
2m
1：50

図4　地層断面図

層である。

第9b層：層厚５～15cmの灰オリーブ色(5Y5/2)粘土質細粒砂の盛土層である。

第10層は雨水などで運ばれた土で均した薄い第10a層の整地層と、時をおかずに造成された第10b・c層の盛土層からなる。

第10a層：層厚２～８cmの暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土の整地層である。

第10b層：層厚10cmのオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂混り粘土質シルトの盛土層である。本層は第10c層と偽礫を共有することから、第10c層の盛土施工後に時を空けずに造成されたとみられる。

第10c層：層厚25cmの黒褐色(2.5Y3/2)粘土質中粒砂偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂を含む粘土質シルトの盛土層で、16世紀末以前の遺物が出土する。

第11層は河成堆積層だが、中途に中礫が混じる第11b層が介在する。

第11a層：層厚20cmの黄褐色(10YR5/6)細礫質粗粒砂の自然堆積層である。

第11b層：層厚10cmの黒褐色(2.5Y3/2)中礫質細粒砂の自然堆積層である。

第11c層：層厚15cmの黄褐色(10YR5/6)細礫質粗粒砂の自然堆積層である。

大川(旧淀川)の河成堆積層である第11a層上の盛土である第10a～c層は、奈良～平安時代の土器とともに、豊臣前期の土師器皿を含むことから、豊臣前期の盛土であることがわかった。また第9a・b層は肥前陶器碗を含むから豊臣後期の整地層で、天満堀川開削時のものである可能性が高い。第８層も同川開削時の排土で、さらに嵩上げされ、屋敷地になったと思われる。大坂ノ陣後、層厚30～50cmの第４層の盛土で再度嵩上げされた。

２)遺構と遺物(図５～７)

ⅰ)第11a層上面(16世紀後葉)

凹地　調査区の西部が１mで10cmほど凹凸をもって東から西に低くなっている。

ⅱ)第７層上面検出遺構(17世紀前葉)

SK401　長さ0.70m、幅0.20m、深さ0.15mの溝状の土壙で、第６層で埋没している。

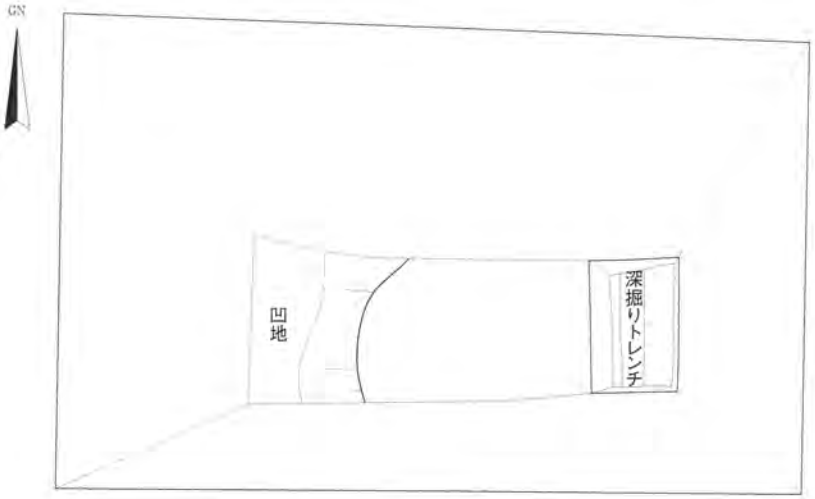
ⅲ)第６層上面検出遺構(1614年(大阪冬ノ陣)被災面)

礎石４個(SA301を含む)と土壙SK301・302・304・305・307～309・311と溝SD303、小穴SP306・310を検出した。いずれも第5c層で埋没している。ここではSA301、SD303、SK301・307について述べる。

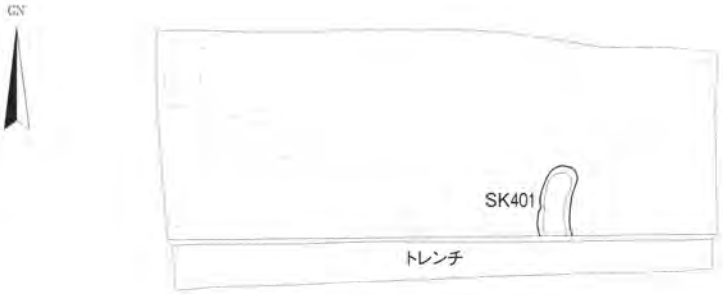
SA301　南北礎石列で、芯々間は1.3mである。北で西に８度振る。

SD303　幅0.3～0.6mで直径2.0mほどの弧を描くように掘られた溝で、北半の底部は長径0.4～0.5mの楕円形土壙が連続するような状態を呈している。肥前陶器碗１・２、瀬戸美濃焼志野菊皿３・天目碗４、土師器皿５・焜炉６、土製品７が出土した。２は「C」字状に鉄絵を描く。７は中央に直径８cmほどの円孔があり、刷毛目調整した面(実測図左側)に円孔から放射線状に棒状のもので太い沈線を入れ、その面が焼けて黒く煤けている。裏面(実測図右側)は煤けていない。

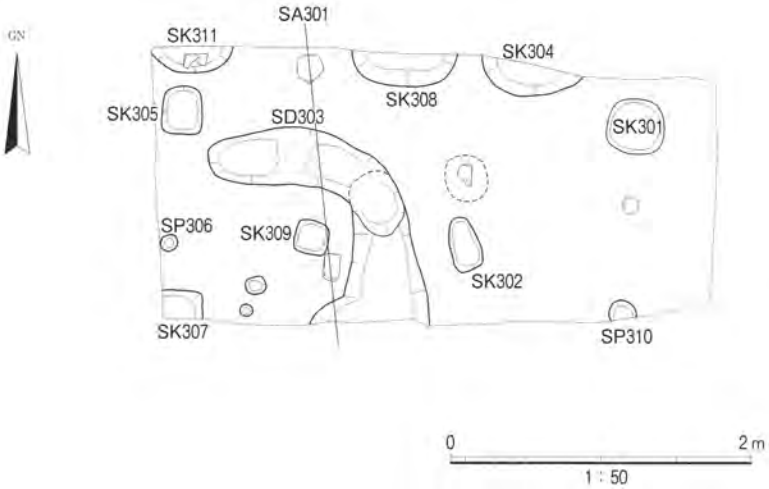
SK301　一辺0.4mもの隅丸方形で、深さ0.3mを測る。土師器皿９・10が出土した。９はヘソ皿である。



第11a層上面



第7層上面



第6層上面

図5　第11a・7・6層上面平面図

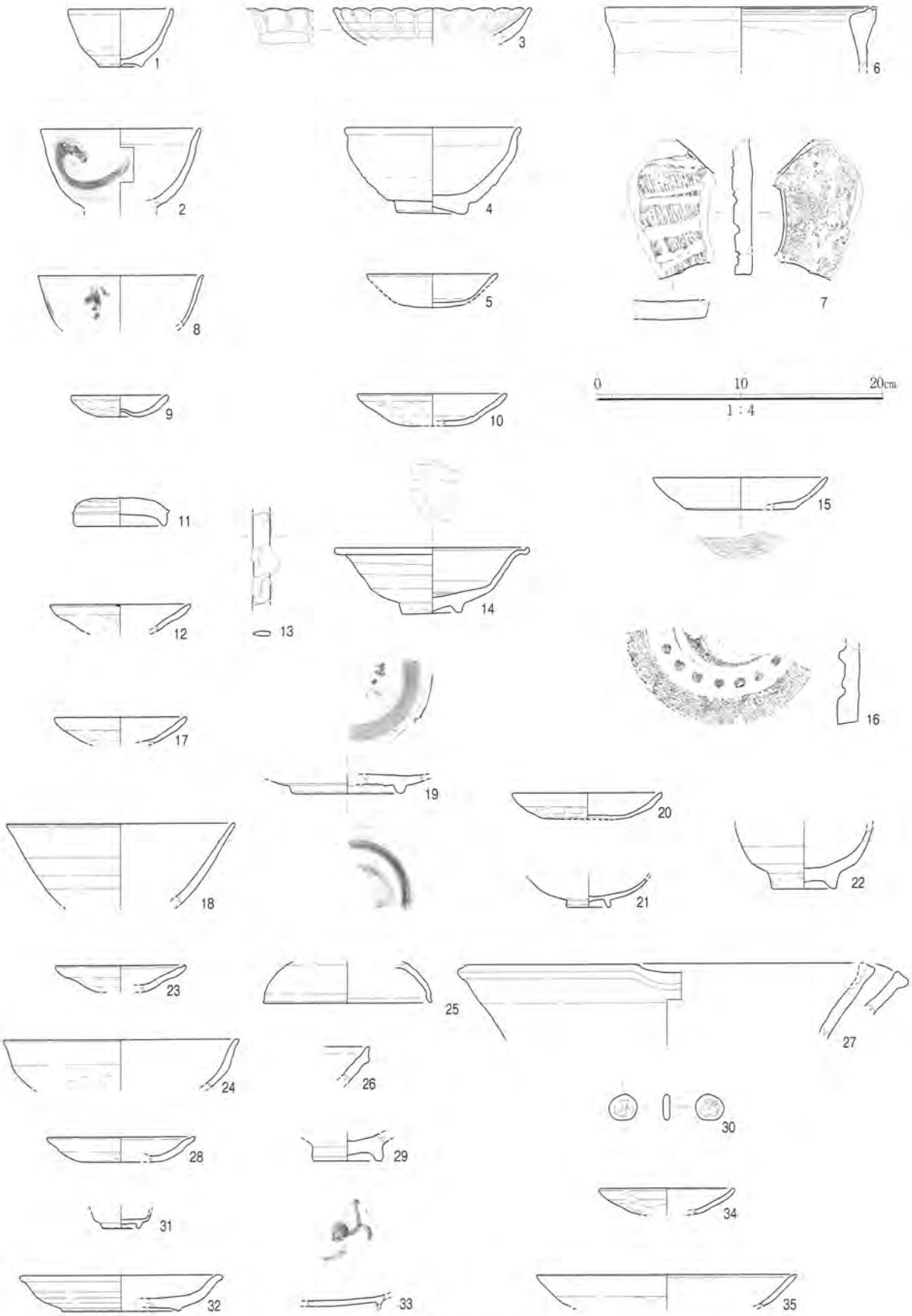


図6　出土遺物実測図

SD303(1～7)、SK307(8)、SK301(9・10)、SK201(11～13)、SK103(14～19)、SK104(20～22)、第10a～c層(23～27)、第9a・b層(28～30)、第5c層(31～35)

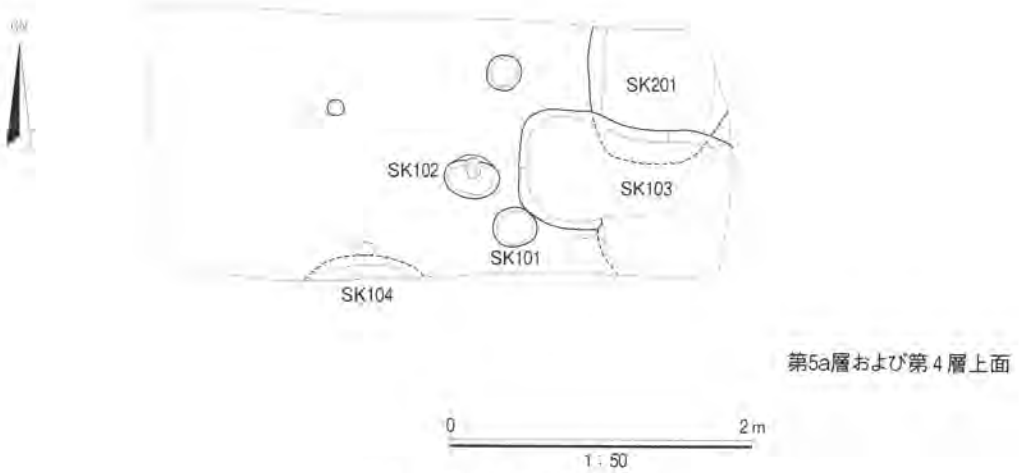


図7　第5a・4層上面平面図

SK307　東西・南北とも0.3m以上、深さ0.1mの土壙で、中国産青花碗8が出土した。

iv)第5a層上面検出遺構(17世紀前半)

SK201　東西1.0m、南北0.9m以上、深さ0.5mのオリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトを埋土とする土壙で、土師器焼塩壺蓋11・皿12、銅製小柄13が出土した。

v)第4層上面検出遺構(17世紀後半)

SK101　直径0.3m、深さ0.4mの柱穴の可能性のある土壙である。

SK102　長径0.4m、短径0.3mの楕円形を呈し、深さ0.5mの柱穴の可能性のある土壙である。

SK103　東西1.4m以上、南北1.0m以上、深さ0.3mの黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂を埋土とする土壙で、肥前陶器溝縁皿14、土師器皿15・17、左巻き三巴文軒丸瓦16、朝鮮産白磁碗18、中国産青花皿19が出土した。15は底部を糸切りし、19は内面を蛇の目釉剥ぎする。16は復元珠文数16である。17世紀中葉の遺物である。

SK104は直径1.3m、深さ0.7mの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトを埋土とする土壙で、土師器皿20、肥前京焼風陶器碗21・碗22が見つかった。21は17世紀後半のものである。

3)各層出土遺物(図6)

第10a～c層　土師器皿23・杯24、須恵器杯蓋25・鉢26・捏鉢27がある。24は8世紀に位置し、25はTK209型式で、7世紀前葉に属し、26・27は東播系で、26が13世紀前半、27が11世紀末～12世紀前半、23は16世紀後葉である。

第9a・b層　土師器皿28、肥前陶器碗29、碁石30が出土した。30は那智黒石である。

第5c層　中国産青花小杯31・皿33、瀬戸美濃焼皿32、土師器皿34・35が見つかった。いずれも豊臣期のものである。

4)周辺調査地との様相の違い

東南のTJ00－2次調査地からは古代の包含層と、室町時代の屋敷地が検出された。東方50mのTJ08－1次調査地ではTP＋2.5mで古代末から中世にかけての井戸・土壙が見つかり[大阪市教育委

員会・大阪市文化財協会2010]、西方25mのTJ09－１次調査地ではTP＋0.5mで13～14世紀の遺構群と、TP＋1.0mから1.5mにかけて1598年の天満堀川の開削工事時の排土を用いたと思われる盛土層が確認されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。一方、北方10mのTJ12－４次調査地では、TP＋0.2～0.5mの河成堆積層上に12～13世紀の溝・土壙があり、それを中世の盛土層が覆い、天満堀川開削時の盛土層はTP＋1.8～2.3mで見られた[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]。

今回調査地の河成堆積層(第11層)上面はTP＋0.3mで、天満堀川開削工事時の盛土層は第８・９層と考えられるが、TP＋0.6～1.6mに存在し、盛土造成後の北方TJ12－４次調査地よりも0.7mほど低いことがわかった。

5)まとめ

現地表下2.8m（TP＋0.3m)の河成堆積層直上に豊臣時代の盛土層が存在し、天満堀川開削工事時の盛土層でTP＋1.6mまで嵩上げされ、その上面の屋敷地は大坂冬ノ陣(1614年)で被災したと推測される。

遺物から当地の人間活動の始まりは７世紀前葉まで遡ることがわかった。

引き続き周辺部を調査することによって、より細かな各時代の様相が判明することと思う。

参考・引用文献

新修大阪市史編纂委員会1988、『新修大阪市史』第１巻

大阪市文化財協会2002、「天神橋遺跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―1999・2000年度―』、pp.181－190

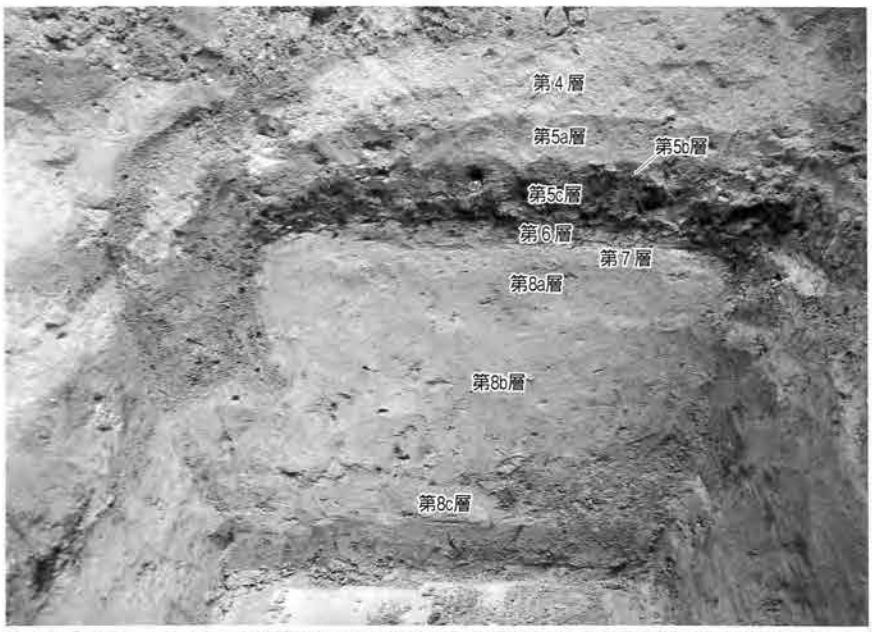
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「天神橋遺跡発掘調査(TJ08－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.10－20

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「天神橋遺跡発掘調査(TJ09－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)』、pp.３－12

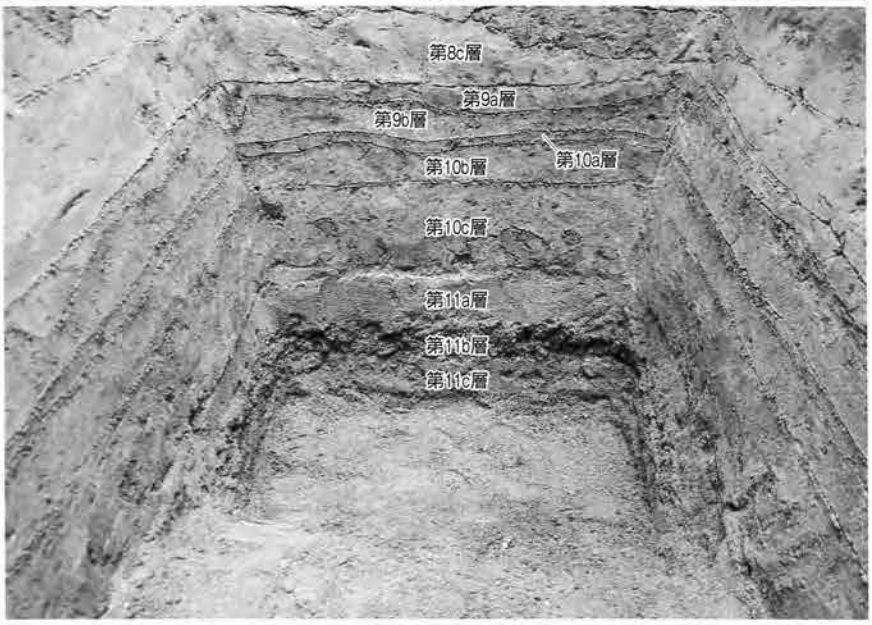
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「北区天神西町における建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ12－４)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』、pp.33－44

図版一

東壁地層断面(上部)



東壁地層断面(下部)



第11a層上面(北から)

第７層上面（南から）

第６層上面（北から）

第４層上面（北から）

北区豊崎七丁目８における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(TS14－１)報告書

調 査 個 所　大阪市北区豊崎７丁目８
調 査 面 積　約236㎡
調 査 期 間　平成26年６月16日～７月７日
調 査 主 体　公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　高橋 工、趙 哲済

1)調査に至る経緯と経過

豊崎遺跡は、1983年に豊崎6丁目の豊崎神社境内において、地表下1mの「砂に黒っぽい色の粘土が混じる地層」から古墳時代前期の土器が出土したことにより発見された遺跡である[伊藤純1990・2004]。当時、豊崎遺跡は長柄砂州[梶山彦太郎・市原実1972]に立地したと考えられた。その後、神社西側の工事立会調査および本調査で、TP−0.1〜−0.5mの古土壌とみられる暗褐色砂層中から弥生時代後期〜古墳時代前期初頭および古代の土器が出土した(TS88−1・2次調査[大阪市文化財協会2015])。また、神社北側の調査地では、中世の作土層(畠)の下位で弥生時代中期〜古墳時代前期の土器が出土した(TS06−1次調査[大阪市教育委員会・大阪市化財協会2008])。この調査地で土器を包含した地表下1.3〜1.7m(TP−0.3〜−0.7m)の地層が東北東から西南西に流れた河川成の砂層であったことから、豊崎遺跡は長柄砂州上の遺跡ではなく、淀川の三角州に立地した遺跡である可能性が指摘された。さらに、2009年にもすぐ東で調査が実施され、地表下1.3m(TP 0m)で河川成とみられた暗オリーブ褐色の砂層が確認された(TS09−1次調査:[大阪市文化財協会2009])(図1)。

本調査地は豊崎神社近辺の調査地とは新御堂筋を挟んで西側にあり、1街区北側には淀川左岸の堤防がある。2014年5月16日に大阪市教育委員会により実施された試掘調査で中世以降の遺物が出土したことにより、新たに発見された豊崎遺跡B地点として本調査を実施することになった(図1)。

調査区は当初、敷地の南西寄りに236㎡の範囲を設定し、6月16日から調査を開始した。途中、並

図1　調査地位置図

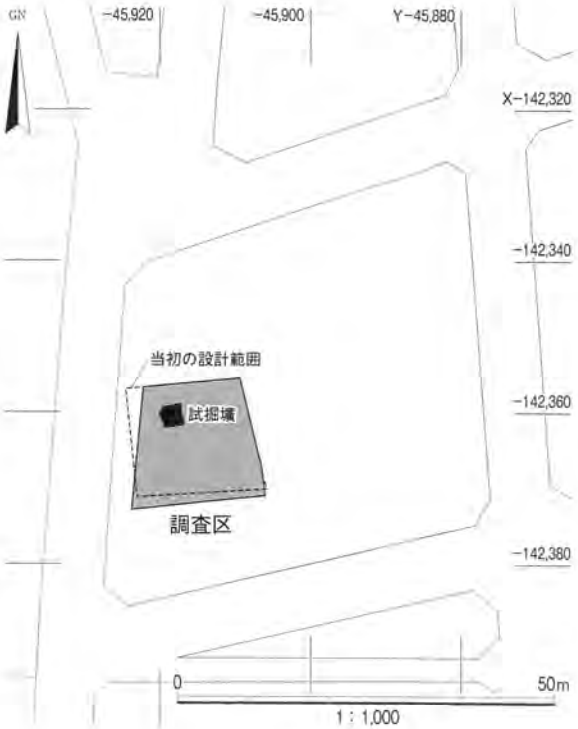


図2　調査区配置図

行して敷地内外で地中埋設電線の工事が行われていたため、作業の安全を確保する必要から、調査面積を変えずに調査範囲の形状を若干変更した(図２)。また、現地表下0.9mまで重機で掘削する予定であったが、後述する第２層まで近代の遺物を含むことがわかったので、第２層まで重機掘削し、地表下1.3m付近の第３層から下位を人力により掘り下げることにした。調査中には地層ごとに検出状況の写真撮影、遺構の掘下げ、掘下げ後の遺構写真撮影、平面図と断面図の作成などを順次行った。淀川に近いために湧水が激しく、溝埋土の層位掘りがうまく行えないなどの困難さがあったが、７月４日には調査を終え、７月７日に撤収を完了した。

調査地の基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、これに基づき、本報告では世界測地系の座標北を方位の基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±０mと記した。

なお、本報告書の出土遺物に関する記述は当研究所学芸員小田木富慈美が行った。

２)調査の結果

ｉ)層序

調査地の地表高は、ほぼTP＋0.9mで平坦である。現代の盛土層(第０層)の下位、地表下約３mまでを５層に区分した(図３)。以下、南壁の地層断面の観察に基づいて述べる(図４)。

第０層は現代盛土・攪乱層である。平均の嵩上げ層厚は0.9mで、攪乱の最深部は地表下２mに及んでいた。

第１層は現代の盛土直前まで耕されていた近現代の作土層とこれに付随する水漬き薄層である。上部が冠水後の落水時に沈殿したオリーブ黒色(5Y3/1)腐植質細粒砂質シルトからなる薄層(第1a層)で、層厚は３～５cmであった。下部が暗灰黄色(2.5Y4/2)わずかに細礫混り砂質シルトからなる作土層(第1b層)で、層厚は12～15cmであった。出土遺物は幕末～明治30年代を示す陶磁器のほかミニチュア土製品などである。第1b層上面の溝SD01出土遺物も同時期を示す。

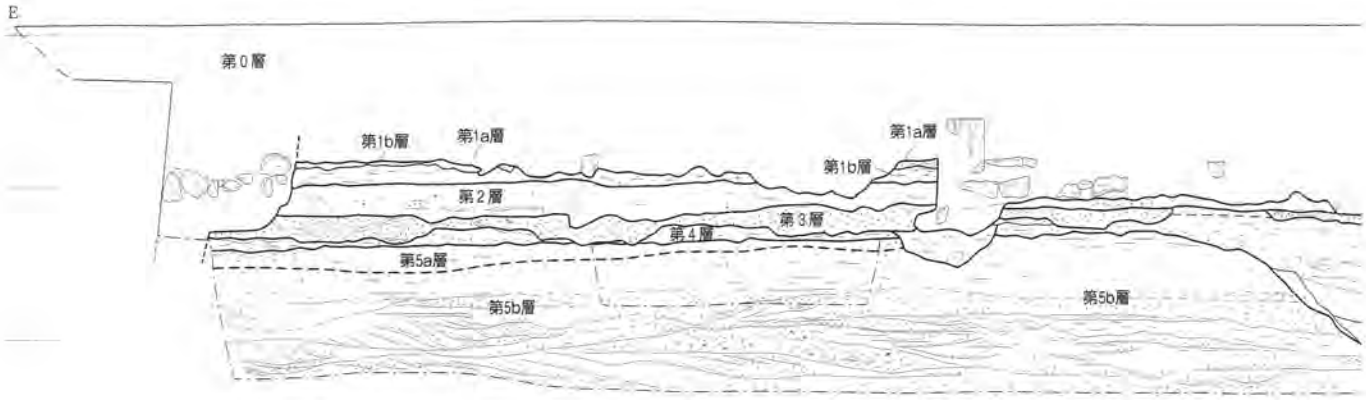


図４　地層断面図

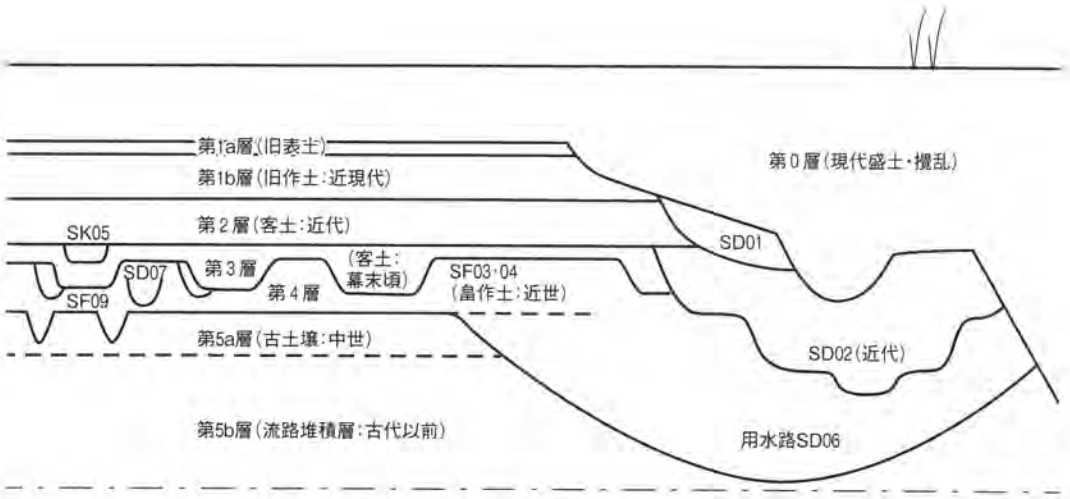


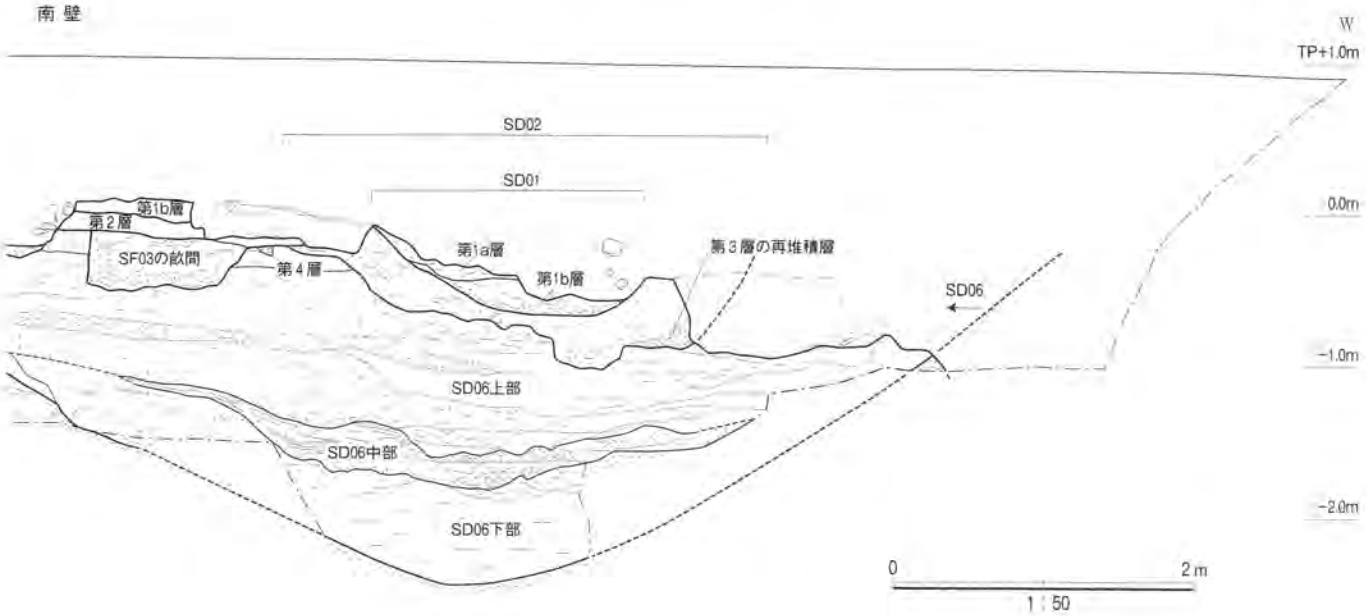
図3　地層と遺構の関係図

第2層は客土層である。炭片を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに細礫混り砂質シルトからなる。部分的に細粒砂の薄層を挟むが、これも一連の客土層の一部とみられる。しかし、上半部は分級が悪いなりに良く混じり合っており、作土であったかもしれない。第2層には18世紀後半～末の陶磁器のほか、近代の陶磁器、金属、ロウ石などが含まれ、第2層が近代以降に客土されたものと推定される。

第3層は客土層である。中粒砂優勢の明黄褐色(2.5Y6/6)粗粒～細粒砂が主体で、不定形なシルト偽礫が混じっている。第4層を覆う部分の層厚は7～10cmで、第4層上面の畠SF03の畝間や溝を埋めている。近世・近代の陶磁器が出土した。

第4層は作土層である。灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトからなり、層厚は12cm前後であった。瓦器・瓦質土器・白磁など中世の遺物を多く含むが、出土遺物に19世紀初頭の肥前磁器が含まれるので、耕作は幕末まで行われていたと考えられる。

第5層は流路堆積物～流路充填堆積物とその上限付近に生成した土壌からなる地層である。上限の



標高はTP－0.4m前後で全層厚は２m以上ある。上部の第5a層は黄褐色(10YR5/6)よりやや暗い極細粒砂質シルトの古土壌である。厚さは５～18cmで下限は漸移している。下部の第5b層は上部層準の層厚約30cmが黄褐色(10YR5/6)の中粒砂～細粒砂質シルトからなり、上方細粒化する。中部層準の層厚約100cmがにぶい黄褐色(10YR6/3)で細粒砂優勢の中～細礫混り極粗粒～細粒砂からなり、トラフ型斜交層理が顕著である。古流向は現淀川の東西性の流下方向とは少し斜交する北東から南西へであった。下部層準の層厚70cm以上は、部分的な観察にとどまるが、粗粒砂主体である。第5a層上面でSD06を検出した。第5a層中からは、８世紀末～12世紀の土師器・須恵器・黒色土器・瓦器などが出土しており、古土壌の生成は平安時代～中世と推定される。また、第5b層の中部層準の砂礫相からは、小片ではあるが、弥生時代中期後葉の弥生土器、庄内式土器、古墳時代の土師器・須恵器・奈良時代の土師器など比較的多くの土器が出土しており、河川は古代以前に流れていたと考えられる。

ⅱ)遺構と遺物

a．第5b層出土の弥生時代～奈良時代の遺物

１は弥生土器壺の口縁部である。口縁部は水平に近く外反し、口縁端部外面には凹線文を施す。口縁部内面にはヘラによる刺突文様を施す。２～４は土師器で、杯Aないしは皿Aとみられる。２・３は口縁部で、端部を肥厚させる。４は体部片である。５は製塩土器である。口縁部を内湾させ、端部をつまんでいる。内外面にはナデを施す。淡路・播磨地域産であろう。１は弥生時代中期後葉、２～５は８世紀に属することから、第5b層は奈良時代の洪水で堆積したものと考えられる。

b．第5a層出土の平安～鎌倉時代の遺物

６は製塩土器である。円筒形を呈するとみられ、口縁端部はやや外傾する面をなす。内面には布目圧痕が見られる。北部九州産であろう。７は土師器の椀で、口縁部をつまんでやや厚く仕上げる。体部外面にはユビオサエ痕が著しい。８・９は土師器皿である。10は土師器羽釜の鍔部分である。11は緑釉陶器椀の底部である。高台以外の部分に施釉する。12・13は黒色土器椀で、12はA類の底部である。13はB類の口縁部で、内外面には密にヘラミガキを施す。14・15は瓦器椀の底部である。14は高台が高く、内面には斜格子状のヘラミガキを施す。15は高台が低く、断面三角形で径が小さい。内面には粗い圏線状のヘラミガキが認められる。

以上の出土遺物のうち、６は８世紀、７・11は９～10世紀、９・12・13は11世紀、８・14は12世紀、

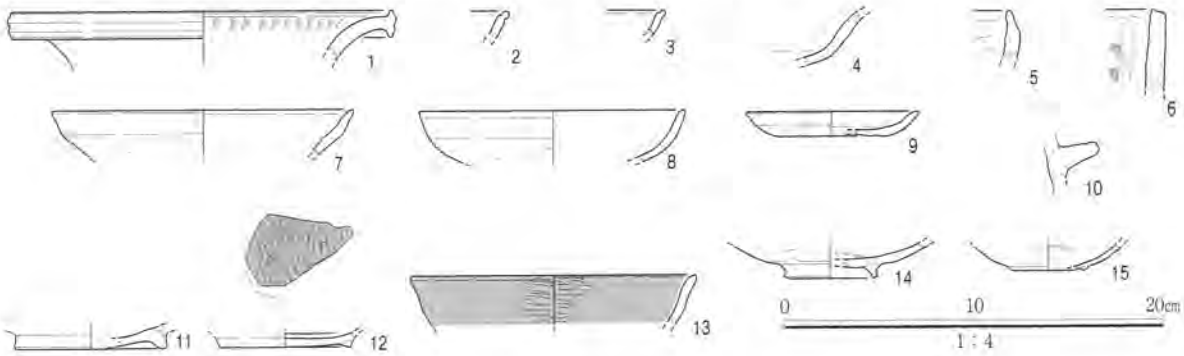


図５　弥生～鎌倉時代の遺物
第5b層(１～５)、第5a層(６～15)

15は13世紀に属することから、第5a層の古土壌は平安～鎌倉時代にかけて形成されたものと考えられる。6の製塩土器は奈良時代に属し、下位の第5b層に由来するものであろう。

c．近世の遺構

SD06は第5a層上面の用水路である(図6)。幅7.5m、深さ2.1mで、調査地の西部を北北西(N17°W前後)へ向かっている。埋土は第4層の同時異相であり、3層に区分できる。下部が暗オリーブ灰色(2.5GY4/1－2)粘土～砂質シルトからなる滞水時機能時堆積層、中部がオリーブ灰色～暗オリーブ灰色(2.5GY5－4/1)中～細礫質粗粒砂・粗粒砂・砂質シルト偽礫・有機質シルトと粘土のラミナ互層などからなる流水時機能時堆積層である。堆積相と境界面の形状・明瞭さから見て下部堆積後／中部堆積前の間に浚渫されている。上部がオリーブ黒色(5Y3/1)砂質泥偽礫・泥などからなる廃棄時埋立層である。上部の中にもレンズ状に粗粒砂薄層が挟まれているので、廃棄時の埋立ては断続的であり、その間にも水流があったと推定される。

出土遺物の17～25・30はSD06中部、26・28・33・36はSD06中～下部、それ以外は未細分で取り上げた遺物である。16は瓦器椀である。高台は低く、内面には平行線状のヘラミガキを施す。17は東

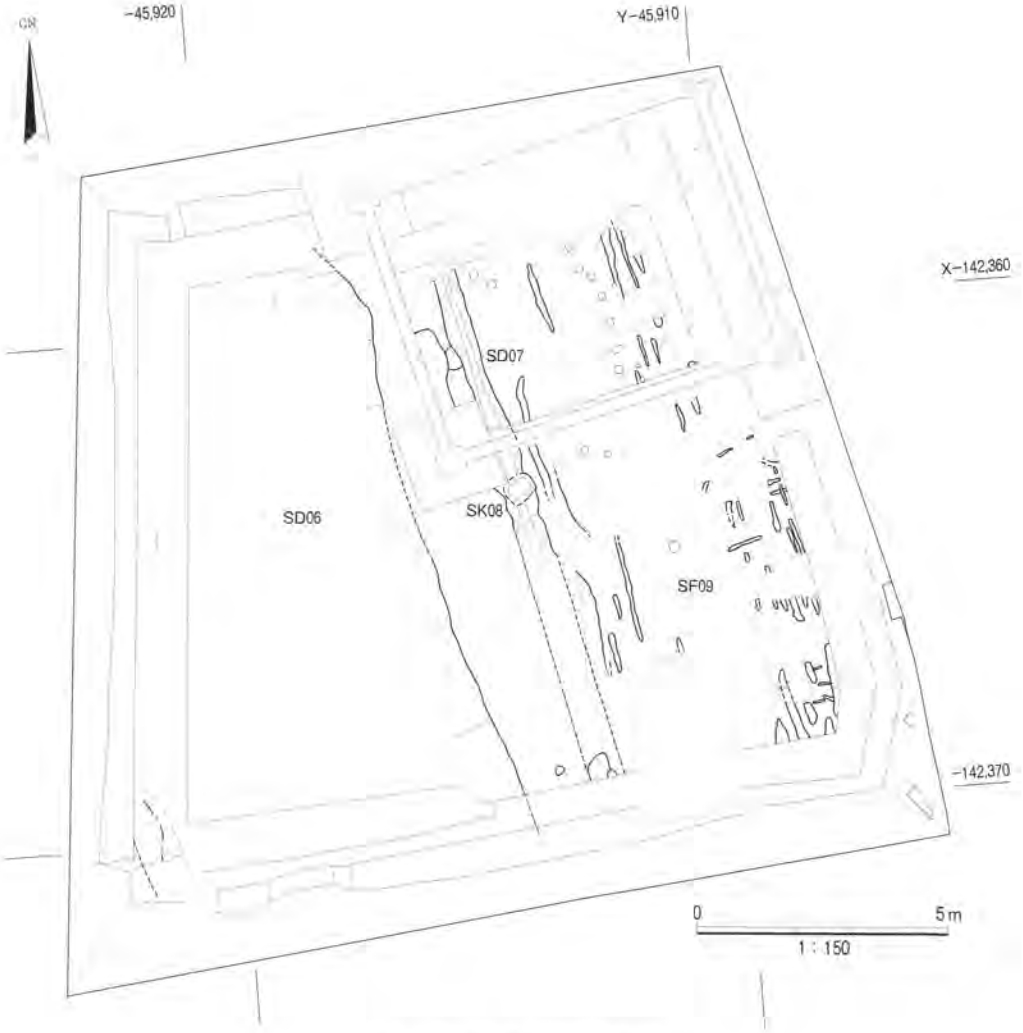


図6　第4層下面遺構平面図

図7　SD06出土遺物

中～下部(26・28・33・36)、中部(17～25・30)、未細分(16・27・29・31・32・34・35)

播系須恵器のこね鉢である。口縁端部は断面三角形を呈する。18・19は中国産青磁の碗である。18は口縁部が外反し、外面には蓮弁文を施す。19は底部で、内面には花文を施す。20～24は瓦質土器である。20～22は羽釜である。23は口径60cm以上になる井筒側である。24は擂鉢である。25は備前焼の擂鉢である。26は連珠文の軒平瓦である。27は丸瓦で、凸面は縄目タタキののちナデを施し、凹面には布目圧痕が見られる。28・29は滑石製の石鍋である。28は口縁部で、割れた面を磨いて温石に転用している。29は底部である。30は瀬戸美濃焼で小型の天目碗である。31は肥前磁器の染付碗で、外面には一重網目文を施す。32は瀬戸美濃焼磁器の碗である。33は土師器皿、34は土師器焙烙である。35は巴文軒丸瓦である。36は軒平瓦の一部である。瓦当部分は欠失する。凸面には凸帯がある。

以上の遺物のうち、16・17は鎌倉時代で13世紀、18～29は室町時代で14世紀末～15世紀後半に属する。30は豊臣期、31・33～36は徳川期で17世紀中葉～18世紀に属する。これらの年代と出土層準から見て、SD06は徳川期の用水路と考えられる。多数の中世に属する土器は下位層から再堆積したものであろう。また、32は明治時代のもので、上位層からの混入品であろう。

SD07・SK08は第４層内で見つかった遺構である(図６)。

SD07は幅0.6m、深さ0.2mで断面が浅いU字形の溝であり、北北西(N14°W)方向である。埋土は第４層と良く似た細礫混り細粒砂質シルトであるが、土色は第４層よりやや暗い。SF09(後述)の耕地を区画する溝の可能性がある。14世紀以降の瓦器・瓦質土器などの破片が出土した。遊離遺物であろう。

SK08はSK07の下位で見つかった土壙であり、長辺0.6m・短辺0.5mの方形気味で深さは0.3m、埋土はSD07と良く似ている。37は土師器の椀である。38は瓦器椀の底部である。以上は37が10～11世紀、38は13世紀に属するものであろう。この土壙は第４層内の遺構の中で最も下位層準にあり、中世に遡る可能性がある。その場合、第４層は中世にまで遡る可能性がある。

SF09は第４層下面で検出したSD07と並行する南北方向の溝状の耕作痕跡である。幅0.1m内外、深さは0.1m未満(３cm以下)で、検出した長さはせいぜい2.5mである。犂溝であろう。

なお、南壁の第４層内で土壙を確認しているが、広がりが分からず、全容は不明である。

d．第４層出土の遺物

第４層内のSD07・SK08の出土遺物を除けば、第４層からは18世紀後半を下限とする陶磁器および土器類が出土している。40・41は土師器皿である。口縁部は短く直線的に開く。42は緑釉陶器椀の底部である。43は瓦器皿である。44・45は瓦器椀の底部で、内面には平行線状のヘラミガキを施す。46は中国産白磁碗の底部である。高台は高く、体部内面に沈線を有する。47は中国産白磁の皿で、口縁部は輪花である。底部内面は輪状に釉剥ぎする。48は瀬戸美濃焼の皿である。49は肥前陶器の大皿である。50は肥前磁器の合子蓋で、型押し成形である。以上のうち、42は９世紀、40・41・43～46は12世紀後半～13世紀に属する。47～49は16世紀末～17世紀中葉、50は18世紀に属するものである。

e．幕末～近代の遺構

SF03・04は第４層上面の畠である(図８)。

SF04は畝と畝間をもつ畠である。各畝間は幅0.3m内外が多く、0.2mのものもある。深さは0.1m

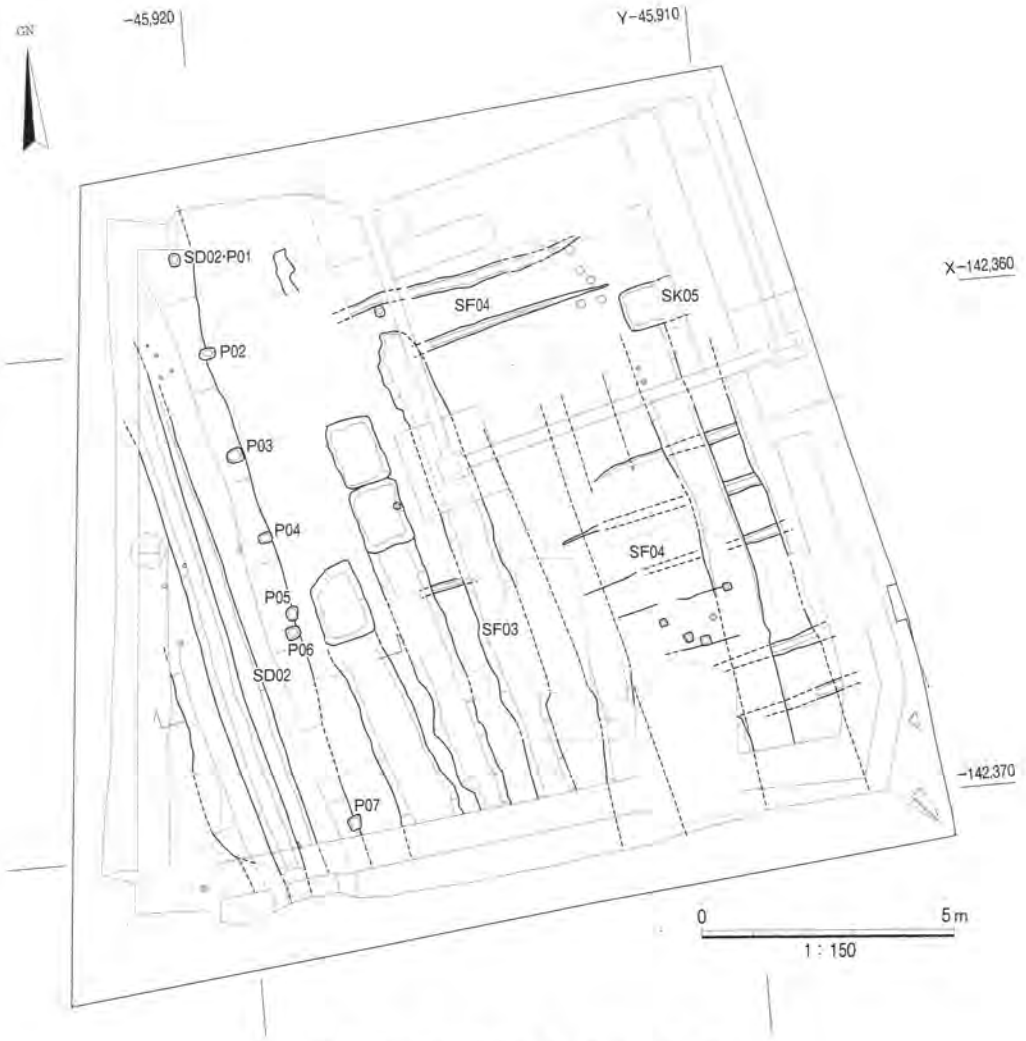


図８　第４層・第３層上面の遺構平面図

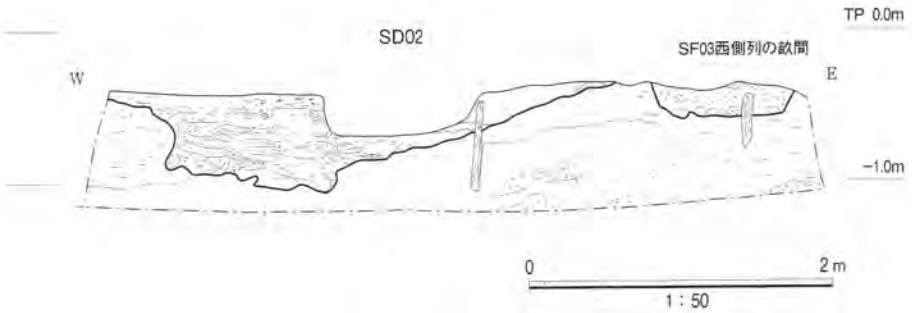


図９　SD02断面図

未満で、５～７cmが多い。東北東(N75°E)方向である。保存のよい調査区東壁近くでは畝間は1.1m間隔で整然と並ぶ。畝の上半部は上位層耕作時に壊されて残っていない。埋土は第３層と類似する中粒砂主体の明黄褐色(2.5Y6/6)粗粒～細粒砂で、シルト偽礫が混じっているが、ラミナが認められるので、洪水で破堤あるいは溢流した砂が畠を覆ったものと推定される。

SF03はSF04を壊して上に重なる畝と畝間をもつ畠である。北北西(N15°W)方向であり、SF04とは直交する。埋土は第３層である。各畝間は幅0.9～1.0mを中心に0.8～1.2mあり、深さは0.1m以下が多い。畝間間隔は1.3～1.5mでほぼ揃っている。検出長は最大11m余りであり、北壁付近には分布

していない。また、西側２列の畝間部分には1.1～1.5m間隔の壁や段で区画されている。西１列目の畝間には１箇所、西２列目の畝間には２箇所の区画がある。深さも他の部分に比べれば深く、西１列目で0.2m、２列目で0.4m前後ある。上位層の耕起による削剥量を復元すれば、本来さらにそれぞれ0.2mは深かったものと考えられる。これらの部分には、土採り穴などの畝間とは異なる機能があった可能性がある。

SD02・SK05は第３層上面の遺構である(図８・９)。

SD02は北北西(N14°W)方向の溝であり、SD06を踏襲する。平面検出時の幅は2.8m前後であるが、南壁断面からは3.2m前後あったことが推定できる。深さは0.6m近くあるが、溝底で幅0.5m、深さ0.2mの２段落ちの溝になる。溝の埋土は灰色(5Y4.1)シルト質細粒砂～砂質泥が主体で、これに多数の細粒砂ラミナがレンズ状に挟まれるが、ラミナ面は全体に不定形で不鮮明である。恒常的に停水状態かごく遅い流れがある程度で、水深の浅い溝であったと推定できる。下底付近に加工時の砂質粘土偽礫があり、西側斜面には第３層の再堆積とみられる中粒砂が認められる。

溝の東肩に沿って柱を立てたと思われるピット(SD02－P１～４・６・７)が2.0m、一箇所1.7m間隔で並んでいる。ピットは大きいもので0.4m×0.3m、小さいもので0.3m×0.2m程度の掘形があり、深さは0.1～0.2mである。柱痕跡は確認していない。また、溝内には不規則に杭が打たれている。

埋土からは19世紀中～後葉の陶磁器類および土製品・石製品・瓦が出土している。39は唐草文軒平瓦である。

SK05は南北0.9m、東西0.8m以上、深さ0.2m足らずの土壙である。埋土は第３層と第４層の堆積物が混在した細粒砂質シルトの不定形の偽礫と粗粒～細粒砂からなる。一時に埋め立てられている。土師器・瓦器の破片が出土した。

f．第２層出土遺物

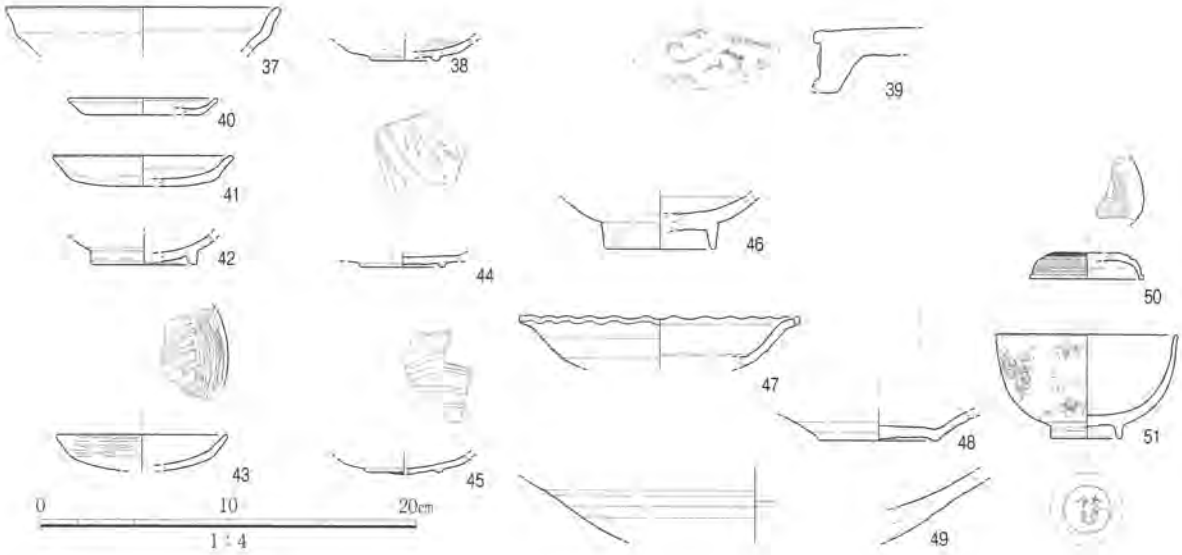


図10　近世の遺構および包含層出土遺物
SK08(37・38)、SD02(39)、第４層(40～50)、第２層(51)

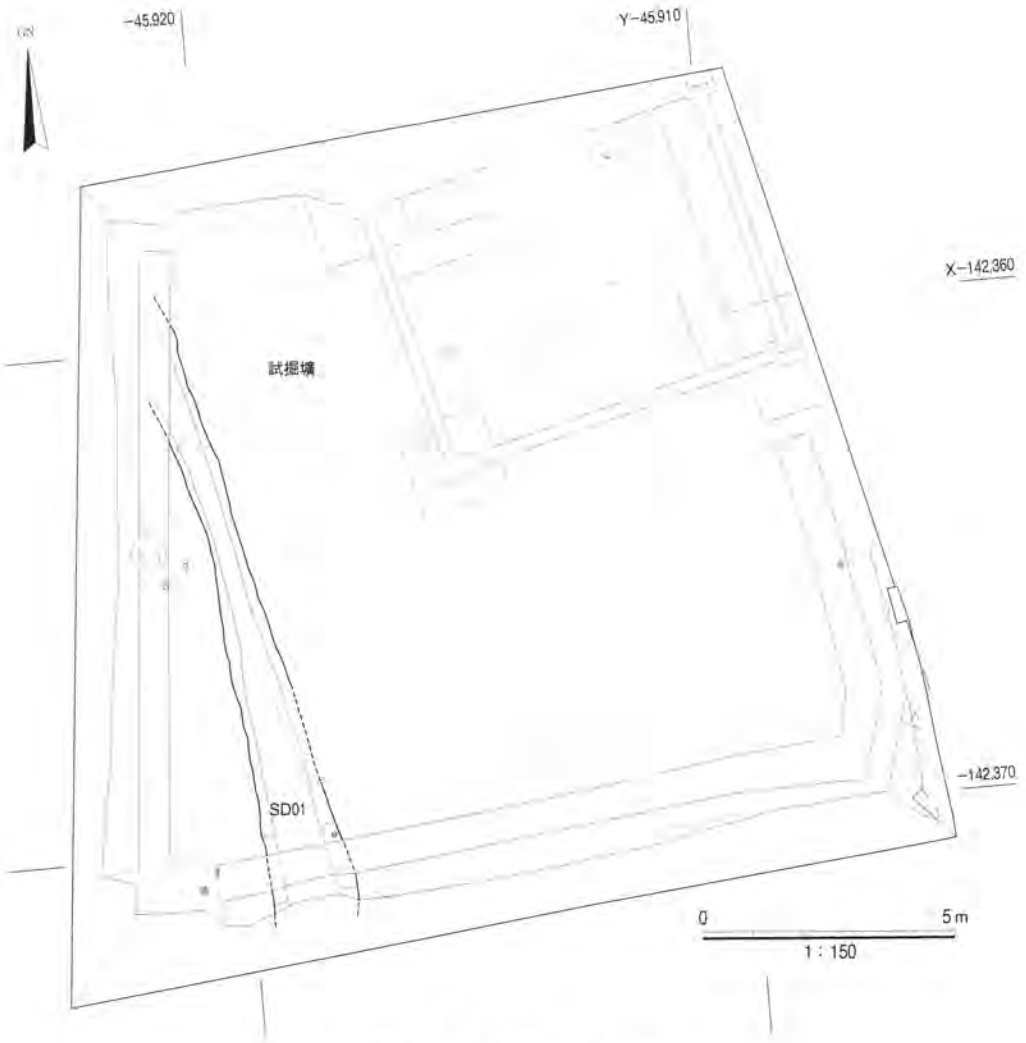


図11　第1b層上面遺構平面図

18世紀～明治時代までの遺物を含む。51は肥前磁器の染付碗で、高台内には「大明年製」銘がある。18世紀前葉である。

g．近現代の遺構

SD01は第1b層上面の溝である(図11)。北北西(N14°W)の方向で、SD02を踏襲する。幅1.8m、深さ0.9m程度である。埋土は下部がオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂から上方で砂質シルト、上部が黒褐色(2.5Y3/1)泥で、第1a層の異相である。

3)古代以前の中津川の流れについて

豊崎遺跡・豊崎遺跡B地点では、本調査地を含めて、弥生時代～古代の遺物が4地点から出土している。豊崎神社境内の出土層はTP+1.5m以下でほかより一段と高いが、神社西側のTS88－1・2次調査地の第2層はTP－0.2m以下、TS06－1次調査地の第2・3層はTP－0.3m以下、本調査地の第5b層はTP－0.3m以下である。その内、TS88－1・2次調査地の第2層は古土壌で、豊崎神社境内の出土層も類似した層相を示す。また、TS09－1次調査地の基盤層の土色は古土壌に似る。したがって、周囲より一段と高い豊崎神社境内付近が弥生時代～古代の集落域で、その周囲の調査地が、集落

図12　古代中津川の推定流路（２万分の１仮製地図に加筆、矢印は古流向）

域かこれに近い河岸沿いの陸地であったと考えられる(図12の太線の南側)。

一方、TS06－1次調査地と本調査地では堆積環境と古流向が推定され、前者が三角州成層で西南西向き、後者が流路堆積物～流路充填堆積物で南西向きである。小さな調査地で堆積環境を限定するのは慎重であらねばならないが、両調査地間は約260mの距離にあり、トラフ型斜交層理が発達する堆積相や層序と出土遺物の年代が類似することから、一連の河口近くの河成堆積層と推定できる。

明治20年の仮製2万分の1地形図をみると、新淀川の前身である中津川と堂島川とに挟まれた低地には、周囲の条里区画とは不調和な帯状の区画(図12の薄く網掛けした帯)が、豊崎神社のある本荘村の西から幅200～300mで西南西～南西に向かうのが読み取れる。この区画は浦江村の北側で北西に向きを変え、塚本村の南まで追跡できる。この区画の向きが上述の河成堆積層の古流向と一致することや蛇行の様子は、この区画が過去の中津川の流路痕跡である可能性を示唆する(図12)。すなわち、仮製地図作成の頃には西流している中津川が、それより前に、本荘村の西側で西南西～南西に向っていた時期があったと考えられる。その時期は、河川成堆積層(第5b層)と上位の古土壌(第5a層)の出土遺物の年代から、奈良時代かそれ以前であったと推定される。この古代の推定流路が弥生～古墳時代にまで遡るかどうかはわからないが、豊崎神社付近以外にも弥生時代～古代の集落があったのは間違いないだろう。

本調査地の南西1.1km、古代の推定中津川の左岸から南東約0.4kmにあたる北区大深町のOC11－1次調査地では、中世・近世～幕末の遺物を含む溝群の下位に時代未詳の古土壌がある。その下位のTP－1.7m以下に、同じく時代未詳で粗粒砂主体の河成砂層(層厚約80cm)と氾濫湿地の砂泥互層(層厚70cm以上)が重なっている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。河成粗粒砂層の古流向は南向きで、一部西向きである。古代中津川の破堤堆積物がこの地まで運ばれたのかもしれない。

4)まとめ

本調査では、豊崎遺跡B地点が、平安時代以降、離水して陸地となり、遅くとも近世には耕地として利用されていたことが明らかになった。また、弥生時代～古代、中世には、近隣に集落が存在したことが推定される。さらに、奈良時代以前には、本調査地点が中津川の流路上にあったと推定された。このことは、本調査地と同様の環境が、より西側の古代中津川の推定流路跡にも続くことを示唆する。

当該地周辺はこれまであまり調査が行われて来なかった地域であるが、上述のように、今後の調査に期待されるところは大きい。

文献

梶山彦太郎・市原実1972、「大阪平野の発達史―C14年代からみた―」:『地質学論集』7. pp.101－112

伊藤純1990、「豊崎神社境内の土器」:『葦火』26、pp.4－5

伊藤純2004、「豊崎遺跡」:大阪市史編纂所・大阪市史料調査会編『新修大阪市史資料編』第1巻、pp.261－262

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「豊崎遺跡発掘調査(TS06－1)報告書」:『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.13－16

大阪市文化財協会2009、「豊崎６丁目における建設工事に伴う豊崎遺跡発掘調査(TS09－１)報告書」、pp.１－３
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「大深町遺跡B地点発掘調査(OC11－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.35－42
大阪文化財研究所2015(刊行予定)、「北区豊崎遺跡」:『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』、pp.７－９

調査地とその周辺
（南から）
遠方の堤防は淀川左岸

地層の断面
（北西から）

近世と近代の畠、
土採り溝、用水路
（南から）

中央区東心斎橋一丁目における建設工事に伴う

東心斎橋１丁目所在遺跡C地点発掘調査(HB14－１)報告書

調査個所	大阪市中央区東心斎橋1丁目45－1・6
調査面積	227㎡
調査期間	平成26年4月21日～6月9日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、櫻田 小百合

1)調査に至る経緯と経過

調査地は堺筋と長堀通の交差点の南西100mに位置する(図1)。堺筋は近世には主要な交通路の一つであり、また北側を東西方向に通る長堀通は、もとは、1619～1622(元和5～8)年に掘削された長堀川が1964(昭和39)年に埋め立てられたものである。調査地は、このような交通要路に近接し、敷地は堺筋に面している。周辺における調査としては、今回の調査地の北側で行われたHB13－1次調査があげられる。ここでは、豊臣後期の土壙が検出されているほか、大坂ノ陣の焼土面が確認されている[大阪文化財研究所2014]。

今回の調査は、建設工事に先立って大阪市教育委員会により行われた試掘調査において、近世の遺構・遺物が確認されたため、本調査を実施したものである。今回の調査地は、新発見の遺跡で、HB13－1次調査地と合わせて、東心斎橋1丁目所在遺跡C地点とされた。発掘調査は平成26年4月21日に開始した。当初、調査地の東部に調査区を設定して重機掘削を行ったが、現代の攪乱が広範囲に及んでいたため、大阪市教育委員会と協議して調査区をやや西にずらすとともに一部面積を拡張して調査を行った(図2)。現代の整地層である第0層を重機により掘削し、第1層以下の地層および遺構を人力により掘り下げた。また、これらの作業と並行して実測図の作成および写真撮影による記録作業を行った。その後、重機による埋戻しを行い、平成26年6月9日に現地におけるすべての作業を完了した。

なお、基準点はMagellan社製Pro Mark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP＋○mと表記した。

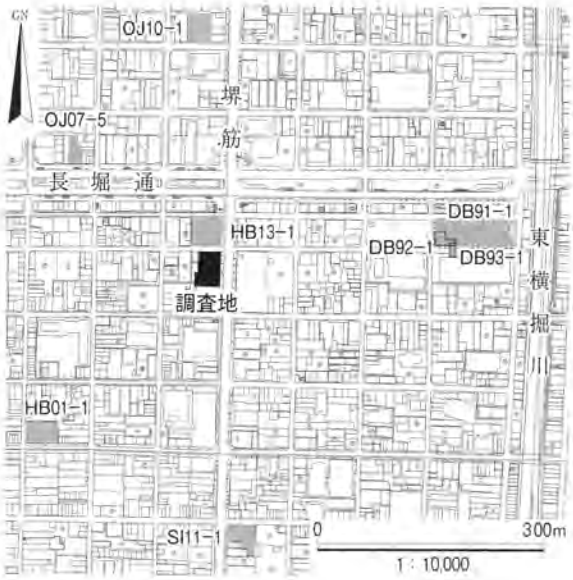


図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

2)調査の結果

i)層序(図3～6、図版1)

調査地における標高は約TP+3.9～4.1mでほぼ平坦である。

今回の調査地における層序は、南端部とそれより北側で明瞭に異なっており、江戸時代において屋敷地が異なっていた可能性がある。そのため、北側と南端部で別の層序名を付し、北側の地層に第1～9層、南端部の地層に南第1～14層を付した。第0層および第10層は、北側と南端部に共通である。北の層序と南の層序との対応関係については、大坂ノ陣後の整地層である北の第8a層上面と、南第8層上面が同一遺構面の可能性がある。これよりも下位の地層については、南端部と北側の土地利用の違いは地層の観察からは明らかにできなかった。

第0層　現代の整地層で、層厚は104～243cmである。

第1層　褐色(10YR4/6)わずかに中～細礫混り中粒砂、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂の偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂からなる複数の整地層により構成される。層厚は最大14cmである。18世紀後半以降の地層で、北側の瓦溜りの周辺にのみ分布する。

第2層　褐色(10YR4/4)中～細礫混り極粗粒～中粒砂からなる。層厚は最大25cmである。17世紀末～18世紀初頭の整地層とみられる。

第3層　オリーブ褐色(2.5Y4/4) わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂、黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルトの偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂を主とする整地層で、層厚は最大32cmである。17世紀後半の地層とみられる。

第4層　炭・焼土を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)・オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂を主とする整地層で、層厚は最大20cmである。17世紀後半の地層とみ

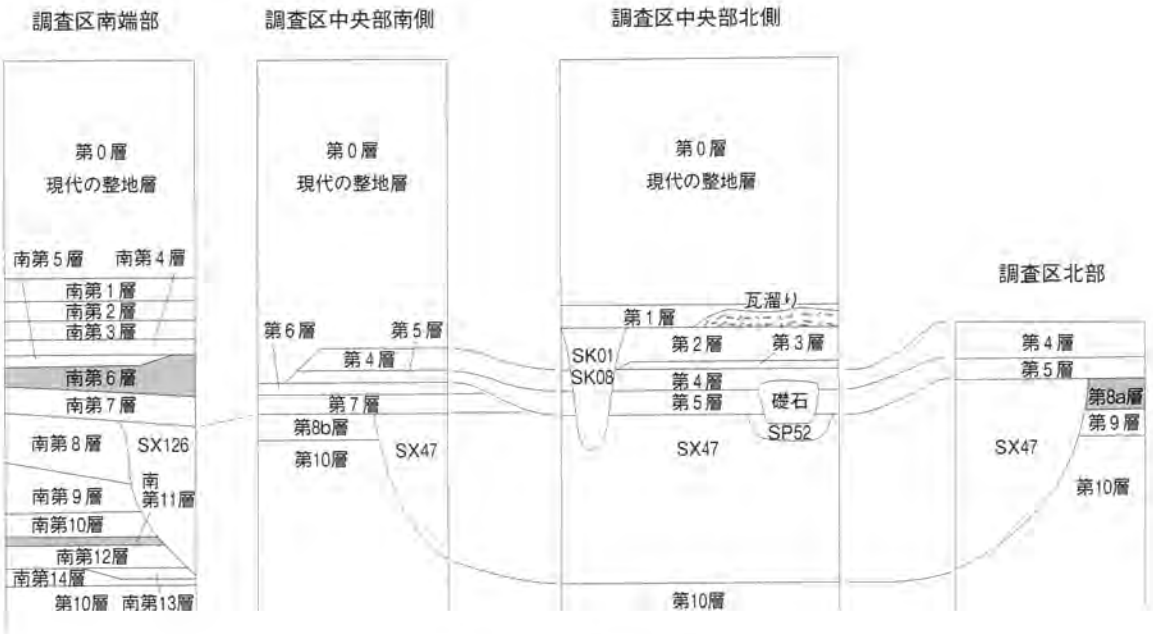
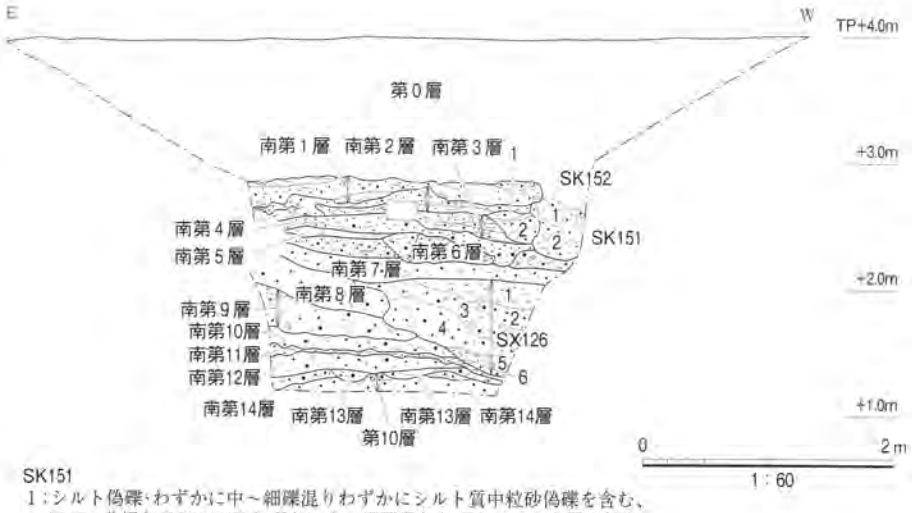


図3　地層と遺構の関係図



SK151
1：シルト偽礫・わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂偽礫を含む、
　にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂
2：灰黄褐色(10YR5/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂

SK152
1：にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り中粒砂
2：にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂

SX126
1：炭・5.5cm大の礫・細粒砂質シルト偽礫わずかに含む、
　にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混りごくわずかにシルト質中粒砂主の中粒～粗粒砂
2：にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
3：にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り中粒砂主の粗粒～中粒砂
4：にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに中～細礫混り中粒砂主の粗粒～中粒砂
5：中粒砂偽礫を含む、褐灰色(10YR4/1)・灰黄褐色(10YR4/5)炭混り極細粒砂質シルト
6：にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに細礫混り粗粒～中粒砂

図4　南壁地層断面図

られる。

第5層　黄褐色(2.5Y5/6)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂、黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルト、褐色(10YR4/4)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂を主とする薄い整地層群である。層厚は最大18cmである。17世紀後半の地層とみられる。

第6層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂からなる整地層で、調査区中央部に分布する。層厚は最大13cmである。17世紀後半の地層とみられる。

第7層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂からなる整地層で、調査区中央部に分布する。層厚は最大21cmである。17世紀中頃～後半の地層とみられる。

第8a層　焼土を多量に含む整地層で、大坂ノ陣に伴う火災後の整地によるものとみられる。本層から出土した遺物の年代観もこれと矛盾しない。この焼土を含む整地層の下位には、わずかに砂が分布したため、これを第8a－2層とし、上位の焼土を含む整地層を第8a－1層とした。第8a－1層は炭・焼土を多量に含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂からなり、層厚は最大17cmである。第8a－2層はにぶい黄色(2.5Y6/4)・オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに細礫混り粗粒～中粒砂からなり、層厚は最大10cmである。第8a－1・第8a－2層ともに調査区北端部にのみ分布した。

第8b層　にぶい黄褐色(10YR5/3・5/4・4/3)炭をわずかに含むわずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂からなる整地層で、層厚は最大20cmである。徳川初期の地層とみられる。第8b層

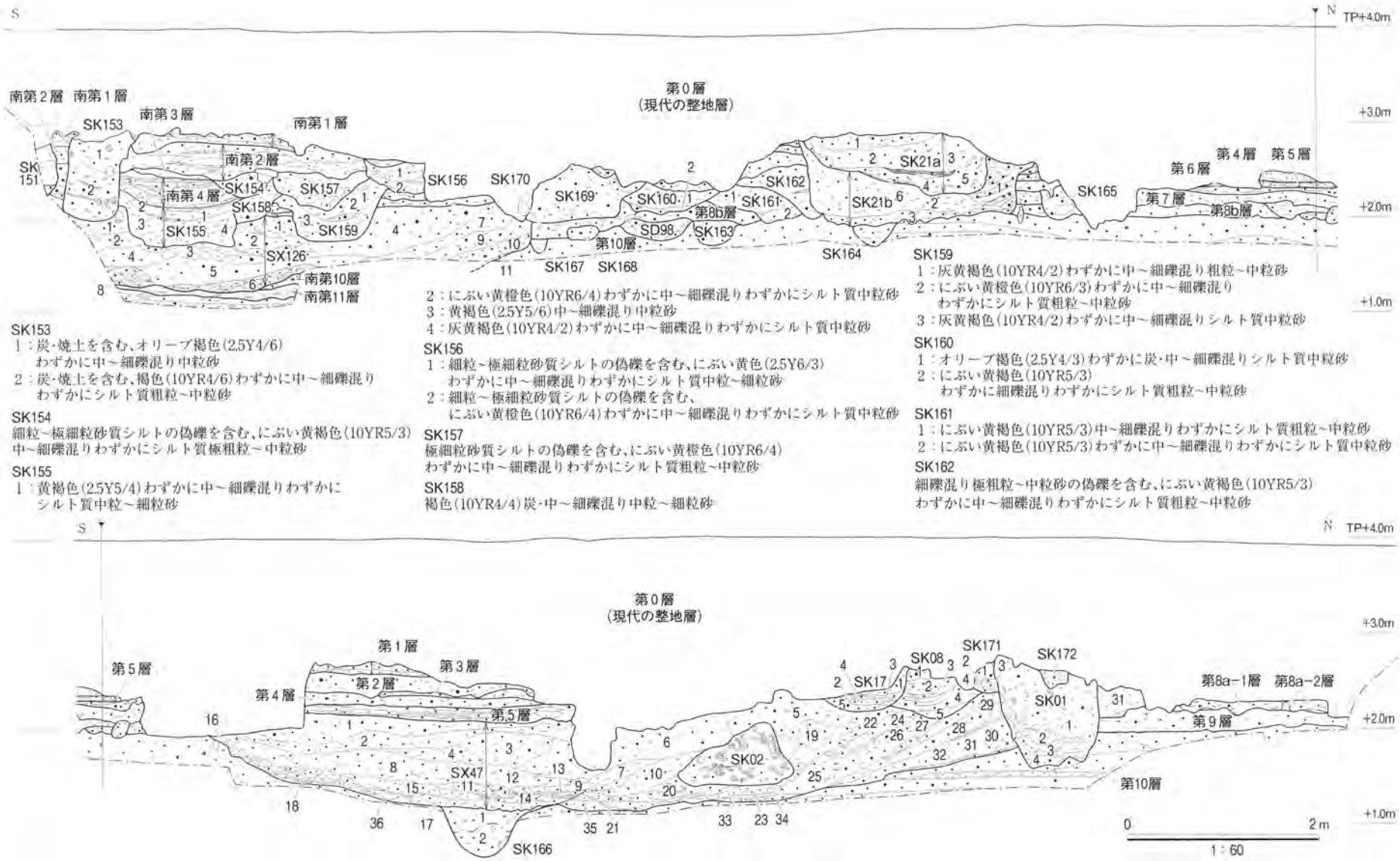


図5　調査区西壁地層断面図

SX126
1：褐色(10YR4/4)・にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
2：わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂偽礫・わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂偽礫を含む、にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
3：にぶい黄褐色(10YR4/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
4：にぶい黄褐色(10YR5/3)中～細礫混り極粗粒～中粒砂
5：シルト質極細粒砂偽礫を含む、灰黄褐色(10YR4/1.5)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
6：中粒砂偽礫を含む、にぶい黄褐色(10YR5/4)炭混り極細粒砂質シルト
7：灰黄褐色(10YR5/2)わずかに炭・中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂
8：にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂主の粗粒～中粒砂
9：にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに炭・細礫混り粗粒～中粒砂
10：にぶい黄橙色(10YR6/3)わずかに炭・中～細礫混り粗粒～中粒砂
11：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかにシルト質粗粒～中粒砂

SK163
にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂

SK164
オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂

SK165
粗粒～中粒砂偽礫を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂

SK166
1：にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混り中粒砂
2：わずかに中～細礫混り極粗粒～粗粒砂偽礫を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂

SK168
にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂

SK169
わずかにシルト質中粒砂偽礫を含む、にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに炭・中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂

SK170
細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む、褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂

SD98
中粒砂(第10層)偽礫を含むにぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂

SK21a
1：シルト質極細粒砂偽礫含む、黒褐色(2.5Y3/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
2：細粒～極細粒砂質シルト偽礫含む、オリーブ黒色(5Y2/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
3：暗オリーブ色(5Y4/3)わずかにシルト質中粒砂
4：黒色(2.5Y2/1)炭
5：炭含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
6：オリーブ黒色(5Y3/2)炭混りシルト質中粒～細粒砂

SK21b
1：わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂偽礫を含む、オリーブ色(5Y5/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂・黄褐色(2.5Y5/4)粗粒～中粒砂
2：炭含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂
3：極細粒砂質シルト偽礫含む、オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに炭・中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂

SX47
1：褐色(10YR4/4)わずかに炭・中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに炭・中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂
3：シルト偽礫含む、オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに炭・中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
4：オリーブ褐色(2.5Y4/6)中～細礫混り粗粒～中粒砂
5：にぶい黄褐色(10YR5/4)中～細礫混りごくわずかにシルト質粗粒～中粒砂
6：にぶい黄褐色(10YR5/4)中～細礫混り極粗粒～中粒砂
7：にぶい黄褐色(10YR5/4)中～細礫混り粗粒～中粒砂
8：細粒～極細粒砂質シルト偽礫含む、にぶい黄褐色(10YR4/3)わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂
9：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに細礫混り粗粒～中粒砂
10：にぶい黄橙色(10YR7/2)中～細礫混り粗粒～中粒砂
11：オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂
12：中粒砂偽礫含む、灰オリーブ色(5Y4/2)わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂
13：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂
14：黄褐色(2.5Y5/4)中～細礫混り中粒砂
15：オリーブ色(5Y5/4)中～細礫混り中粒～細粒砂
16：オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂
17：炭含む、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに細礫混りシルト質中粒～細粒砂
18：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに中～細礫混り中粒砂・粗粒～中粒砂
19：中粒砂偽礫含む、黄褐色(10YR5/6)わずかに炭・中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂
20：にぶい黄橙色(10YR6/4)中粒砂主の粗粒～中粒砂・わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂
21：黄褐色(2.5Y5/3)わずかに中～細礫混り中粒砂
22：黄褐色(2.5Y5/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
23：にぶい黄橙色(10YR6/4)中粒～細粒砂質シルト
24：中粒砂偽礫含む、にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂
25：炭・極細粒砂質シルト偽礫含む、にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
26：にぶい黄橙色(10YR6/3)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
27：にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
28：細粒～極細粒砂質シルト偽礫含む、黄褐色(2.5Y5/3)中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
29：浅黄色(5Y7/3)わずかに細礫混り粗粒～中粒砂
30：にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂
31：にぶい黄橙色(10YR6/4)中～細礫混り粗粒～中粒砂
32：にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
33：オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂
34：にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに炭・細礫混り中粒砂
35：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに細礫混りシルト質中粒～細粒砂
36：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂・暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～細粒砂(加工時形成層)

SK01
1：炭・極細粒砂質シルト偽礫含む、暗灰黄色(2.5Y5/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～細粒砂
2：シルト質細粒砂偽礫を含む、黄褐色(2.5Y5/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂
3：炭・粗粒～中粒砂偽礫を含む、暗オリーブ褐色(2.5Y5/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂
4：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂(加工時形成層)

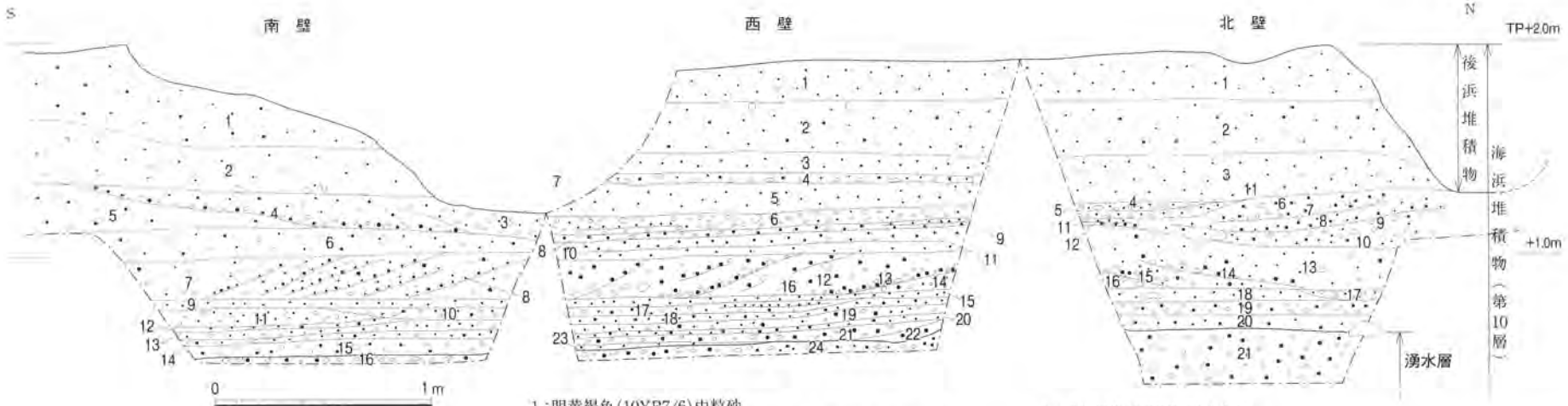
SK02
瓦多量に含む、にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂

SK08
1：にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
2：5cm大の礫含む、黄褐色(2.5Y5/6)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
3：5cm大の礫含む、黄褐色(2.5Y5/3)わずかに炭・中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂
4：オリーブ黄色(5Y6/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
5：にぶい黄橙色(10Y6/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂

SK17
1：暗オリーブ色(5Y4/4)わずかに炭・中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
2：暗オリーブ色(5Y4/3)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト
4：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに中～細礫混りシルト質中粒～細粒砂
5：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂

SK171
1：にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
2：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
3：灰黄色(2.5Y6/2)わずかに細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂
4：にぶい黄色(2.5Y6/3)わずかに細礫混り粗粒～中粒砂

SK172
シルト質極細粒砂偽礫含む、灰オリーブ色(5Y5/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂



1：明黄褐色(10YR7/6)粗粒～中粒砂
2：中礫をわずかに含む明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
3：明黄褐色(10YR6/6)中礫～中粒砂
4：明黄褐色(10YR6/6)中～細礫混り極粗粒～粗粒砂
5：明黄褐色(10YR6/6)わずかに中～細礫混り粗粒砂
6：明黄褐色(10YR6/6)中～細礫混り粗粒～中粒砂
7：にぶい黄橙色(10YR7/4)中～細礫混り極粗粒～中粒砂
8：明黄褐色(10YR6/6)粗粒～中粒砂
9：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
10：明黄褐色(2.5Y7/6)中～細礫多く混じる粗粒～中粒砂
11：明黄褐色(2.5Y7/6)中礫～中粒砂
12：明黄褐色(10YR6/6)粗粒～中粒砂
13：明黄褐色(2.5Y7/6)中礫～中粒砂
14：明黄褐色(10YR6/6)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
15：明黄褐色(2.5Y7/6)わずかに中礫混り細礫～粗粒砂
16：明黄褐色(2.5Y7/6)中礫～極粗粒砂

1：明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
2：明黄褐色(10YR7/6)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
3：明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
4：明黄褐色(10YR7/6)中(最大3cm大)～細礫を含む粗粒～中粒砂
5：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
6：明黄褐色(10YR6/6)中礫～中粒砂
7：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
8：明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂
9：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
10：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
11：明黄褐色(10YR6/6)中礫～粗粒砂
12：にぶい黄橙色(10YR7/4)中～細礫混り極粗粒～中粒砂
13：にぶい黄橙色(10YR7/4)中礫～極粗粒砂
14：にぶい黄橙色(10YR7/4)中～細礫混り極粗粒～中粒砂
15：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
16：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
17：明黄褐色(2.5Y7/6)中～細礫混り粗粒～中粒砂
18：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂主の粗粒～中粒砂
19：明黄褐色(2.5Y7/6)中～細礫混り極粗粒～中粒砂
20：明黄褐色(10YR6/6)粗粒～中粒砂
21：明黄褐色(2.5Y7/6)中礫～極粗粒砂
22：明黄褐色(10YR6/6)粗粒～中粒砂
23：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
24：明黄褐色(2.5Y7/6)中礫～極粗粒砂

1：明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
2：明黄褐色(10YR7/6)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
3：明黄褐色(10YR6/6)中(最大3cm大)～細礫を含む中粒砂
4：明黄褐色(10YR6/6)中礫～中粒砂
5：明黄褐色(10YR6/6)中礫～中粒砂
6：明黄褐色(10YR6/6)粗粒～中粒砂
7：明黄褐色(10YR6/6)中礫～粗粒砂
8：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂主の粗粒～中粒砂
9：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂質中(最大4cm大)～細礫
10：明黄褐色(10YR6/6)粗粒～中粒砂
11：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
12：明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂
13：にぶい黄橙色(10YR7/4)中～細礫混り極粗粒～中粒砂
14：にぶい黄橙色(10YR7/4)中～細礫混り極粗粒～粗粒砂
15：にぶい黄橙色(10YR7/4)中礫～極粗粒砂
16：にぶい黄橙色(10YR7/4)中～細礫混り極粗粒～中粒砂
17：明黄褐色(2.5Y7/6)中礫～中粒砂
18：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
19：明黄褐色(2.5Y7/6)中礫～粗粒砂
20：明黄褐色(10YR6/6)粗粒～中粒砂
21：明黄褐色(2.5Y7/6)中礫～極粗粒砂

図6　深掘りトレンチ地層断面図

は、第8a層よりも南に分布する地層で、SX47が北部では第8a－1層上面、南部では第8b層上面から掘り込まれていることから、第8a－1層上面と第8b層上面を同一遺構面として認識できる。

第9層　オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂からなる整地層、層厚は最大26cmである。豊臣後期の整地層である。

第10層　砂・礫からなる海浜成層で、上町台地西縁の砂州を形成する。上部は明黄褐色(10YR7/6)中～細礫を含む粗粒～中粒砂を主とする後浜堆積層で、層厚は78cmである。下部は明黄褐色(10YR6/6・2.5Y7/6)・にぶい黄橙色(10YR7/4)砂礫からなる海成層で、層厚は190cm以上である。

第10層上部の後浜堆積物からは弥生時代末～古墳時代前期の土器片が出土している。調査地周辺は[趙哲済2014]により砂州A・砂州Bとされる2つの砂州の間にあたる。弥生時代後期～古代にはこの低地部に部分的にラグーンが存在することが推定されているが[趙2014]、調査地周辺については、弥生時代末～古墳時代前期にはこうしたラグーンは存在していなかったものとみられる。

南第1層　にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り細粒～極細粒砂質シルト、にぶい黄橙色(10YR6/3)わずかに中～細礫混りシルト質中粒～細粒砂、オリーブ褐色(2.5Y4/6)極細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は最大21cmである。18世紀以降の整地層である。

南第2層　灰黄色(2.5Y6/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂、にぶい黄褐色(10YR5/3)中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～細粒砂からなる整地層で、層厚は最大40cmである。17世紀後半～18世紀初頭の地層である。

南第3層　褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混り細粒～極細粒砂質シルト、オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂、黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)・にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂からなる整地層で、層厚は最大18cmである。17世紀後半の地層とみられる。

南第4層　オリーブ色(5Y5/4)極細粒砂質シルトの偽礫・黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含むにぶい黄橙色(10YR6/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～細粒砂、褐色(10YR4/6)細粒～極細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は最大33cmである。17世紀後半の地層とみられる。

南第5層　にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混り細粒～極細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は最大10cmである。17世紀中葉の地層とみられる。

南第6層　灰黄褐色(10YR4/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂からなる整地層で、層厚半最大16cmである。17世紀中葉の地層とみられる。

南第7層　明黄褐色(2.5Y6/6)極細粒砂質シルトの偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂からなる整地層で、層厚は最大20cmである。17世紀中葉の地層とみられる。

南第8層　黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫・焼土をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂からなり、層厚は最大30cmである。南第8層が東から西にやや傾斜していることや、本層より下位では遺構が確認できなかったことなどから、南第8層

以下の地層は個別の整地層ではなく、SX126と同一遺構内の埋土、あるいはこれと重複する別遺構の埋土の可能性も推定されるが、調査範囲内では確認できなかった。本層以下からは豊臣後期の様相を示す遺物が出土している。

南第９層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂の偽礫・焼土をわずかに含むにぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂からなる。層厚は最大32cmである。

南第10層　灰黄褐色(10YR3/2)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫・炭をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂からなる。層厚は最大14cmである。

南第11層　灰褐色(10YR4/1)細粒～極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大14cmである。

南第12層　にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂からなり、層厚は最大18cmである。

南第13層　にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂からなる。層厚は最大10cmである。

南第14層　にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂からなる。層厚は最大10cmである。南第８層以下の地層が遺構埋土であれば、本層が加工時形成層である。

ⅱ)遺構と遺物

a)豊臣後期の遺構と遺物

＜第10層上面遺構＞(図７・８)

第10層上面では、建物の礎石と推定される礎石m、柱穴SP73、小穴SP71・116・117・128、土壙SK80～82・94～97・130・141～145・166、溝SD98・115のほか小穴を多数検出した。

SP73は東西0.25m、南北0.38mの長円形の柱穴である。柱穴内からは地下式礎石と、柱の固定のためとみられる石が出土した。断面の観察から、柱穴を掘削した後に下部を埋め、礎石を据えている状況が確認できた。

SK80～82は重複する土壙で、新しい方からSK80→SK81→SK82である。SK80は東西0.96m、南北1.18m、深さ0.30m、SK81は東西0.40m以上、南北0.50m、深さ0.23m、SK82は東西0.93m、南北0.75m以上、深さ0.50mである。SK166は第８層上面遺構のSX47の下部で検出した土壙で、東西0.37m、南北1.20m、深さ0.54mである。本来の掘込み面は明らかではないが、遺構の深さや埋土の状況から、第10層上面の遺構と推定される。

SD98は幅0.88m、深さ0.24mの東西方向の溝である。前述のとおり、南と北の層序の境界付近にあたることから、敷地境の溝であることも推定される。16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土している。

SD115は、調査区東端部で検出した南北方向の溝である。下部は幅0.10mで、遺構の肩が崩れやすい砂層に掘り込まれた遺構であるにもかかわらず、遺構の断面形状が方形に近いことから、機能時には板状のものが埋められていた可能性がある。上部は、これを抜き取った痕跡とみられる。板状のものが埋められていた可能性があることから、なんらかの区画施設としての機能が推定される。遺物は

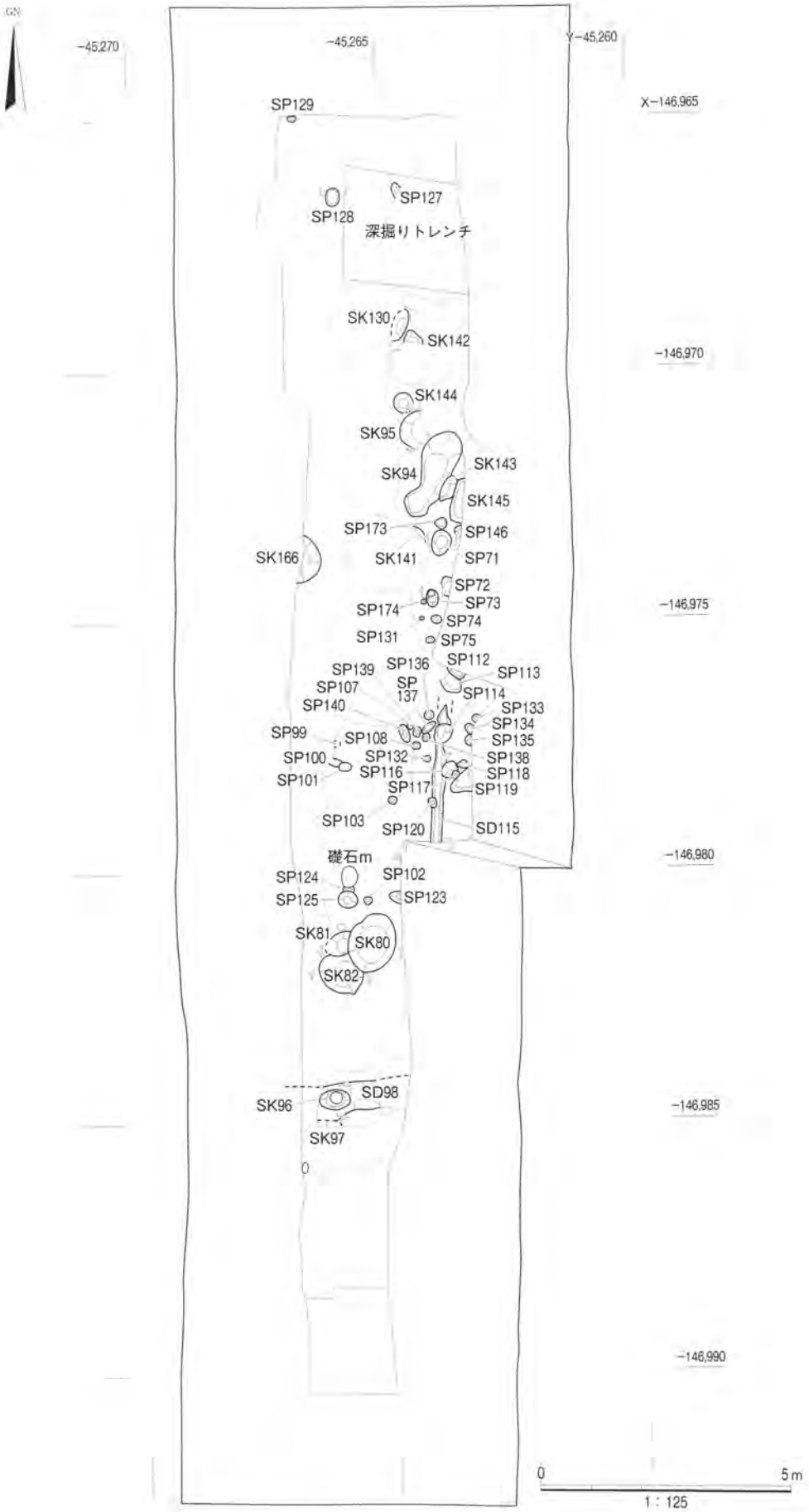
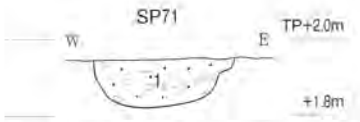
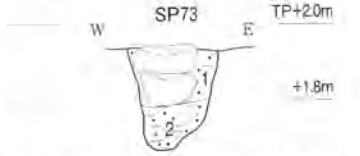


図７　第10層上面遺構平面図



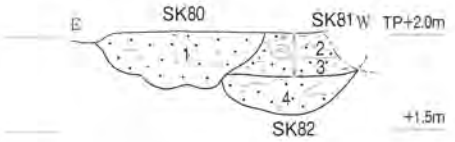
1：炭・黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂の偽礫を含む、
にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂



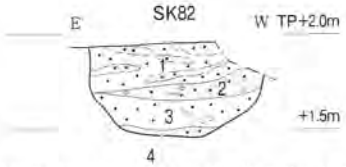
1：オリーブ黄色(5Y6/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂
2：中粒砂(第10層)の偽礫を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/3)
わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂

1：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(第8b層)
2：中粒砂(第10層)の偽礫を含む、にぶい黄色(2.5Y6/4)
わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SD115抜取り穴埋土)
3：中粒砂(第10層)の偽礫を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/3)
わずかにシルト質中粒砂(SD115埋土)
4：中粒砂(第10層)の偽礫を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/3)
わずかにシルト質中粒砂(SD115埋土)
5：黄褐色(2.5Y5/6)粗粒～中粒砂(第10層)
6：黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂(第10層)

0　1 m
1：20

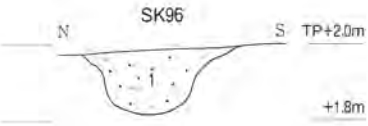


1：暗オリーブ褐色(2.3Y3/3)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SK80埋土)
2：炭・焼土・黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂の偽礫を含む、
オリーブ褐色(2.5Y4/6)中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SK81埋土)
3：わずかに炭を含む、黒褐色(2.5Y3/2)
わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂(SK81埋土)
4：黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂(第10層)の偽礫を含む、
黄褐色(10YR5/6)わずかに中～細礫混り中粒砂(SK82埋土)

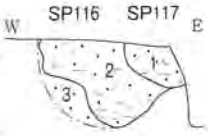


1：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質
中粒砂の偽礫を含む、黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂の偽礫を含む、黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂
4：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに細礫混り中粒砂

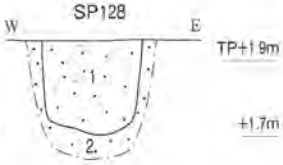
0　1　2 m
1：40



1：わずかに炭を含む、暗褐色(10YR3/3)・
黄褐色(2.5Y5/4)わずかに細礫混り
わずかにシルト質中粒砂



1：わずかに炭を含む、にぶい黄褐色(10YR5/4)
わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂
(SP117埋土)
2：炭・中粒砂(第10層)の偽礫を含む、
にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SP116埋土)
3：明黄褐色(10YR7/6)中粒砂(第10層)



1：わずかに炭を含む、
にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SP128埋土)
2：にぶい黄橙色(10YR7/4)中粒砂(第10層)

0　1 m
1：20

1：にぶい黄褐色(10YR5/5)
わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SK130埋土)
2：黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂の偽礫を含む、
にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SK130埋土)
3：明黄褐色(10YR7/6)粗粒～中粒砂(第10層)
4：明黄褐色(10YR7/6)中粒砂(第10層)

1：炭・灰オリーブ色(5Y5/2)・オリーブ褐色(2.5Y4/4)の偽礫を含む、
わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂(SK95埋土)
2：黄褐色(2.5Y5/4)粗粒～中粒砂(第10層)
3：黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂(第10層)

0　1　2 m
1：40

図8　第10層上面遺構断面図

出土していない。

<第９層上面遺構>(図９～11)

第９層上面では、SP83・85・86・88・104～106、SK84・87・89～93を検出した。このうち、SK89・93、SP83・104・105以外の遺構埋土には焼土が含まれていることから、大坂ノ陣の後、第8a層による整地以前に掘削された遺構、あるいは本来は第8a層上面の遺構の可能性がある。

SP83は、直径約0.40m、深さは0.76mである。遺構の形態や深さから柱の抜取り穴の可能性がある。SP88は東西0.69m以上、南北0.70m以上の柱穴とみられる遺構である。

SK89は、東西0.48m以上、南北0.48m、深さ0.18mの土壙である。SK91～93は、重複する土壙で、SK92が最も古く、SK91･93はこれよりも新しい。SK91は東西0.32m、南北0.22m以上、深さ0.28m、SK92は東西0.83m以上、南北1.10m以上、深さ0.48m、SK93は東西0.85m以上、南北1.16m以上、深さ0.39である。SK93からは、備前焼鉢４、肥前陶器輪花皿１・碗２、軟質施釉陶器筒形碗３が出土した。豊臣後期の様相を示す。３は、白化粧は確認できるが、釉薬は二次焼成によりとんでいる。

b)徳川期の遺構

<第８層・南第８層上面遺構>(図12～17、図版２中)

第8a－１層・第8b層上面では、礎石の可能性のある石を伴うSP40・41のほか、SP55・56・63・64・68、SX47、SK33・49・50・57～62・65～67・69・70を検出した。SK49・50はSX47と重複しており、SX47よりも新しい遺構である。これらの遺構は、大坂ノ陣の後～17世紀前半までの遺構とみられる。

SP40は、東西0.84m以上、南北0.90m以上、深さ0.06mの浅い穴で、礎石kの据付け穴とみられる。

SP41は、東西0.65m以上、南北1.28m以上、深さは0.22mで、礎石jの据付け穴とみられる。礎石k

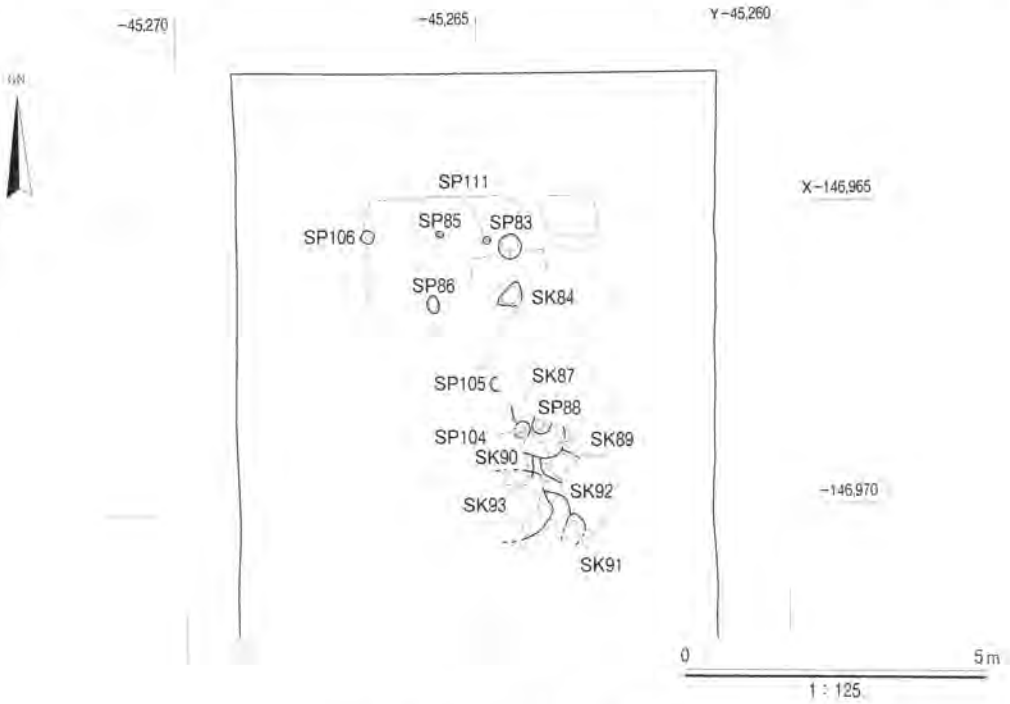


図９　第９層上面遺構平面図

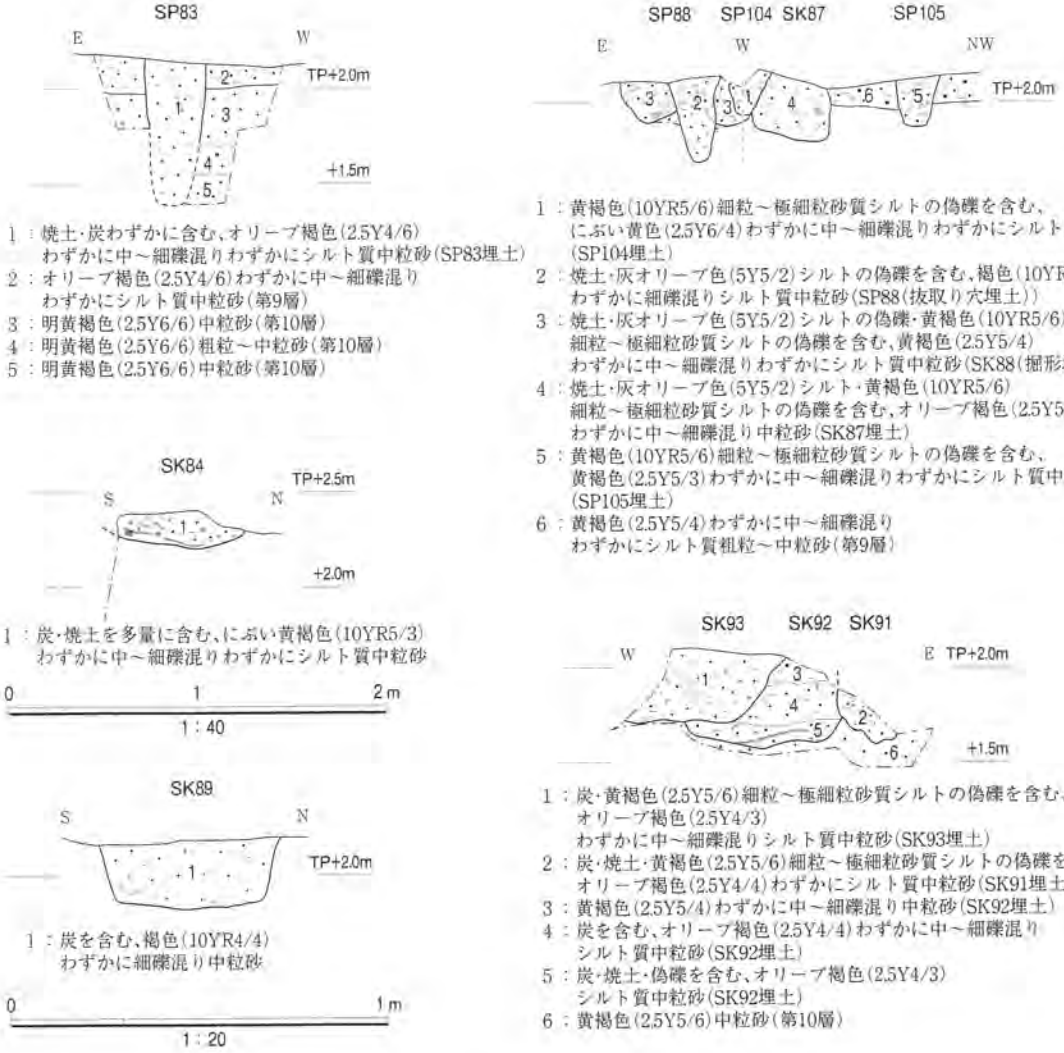


図10　第9層上面遺構断面図

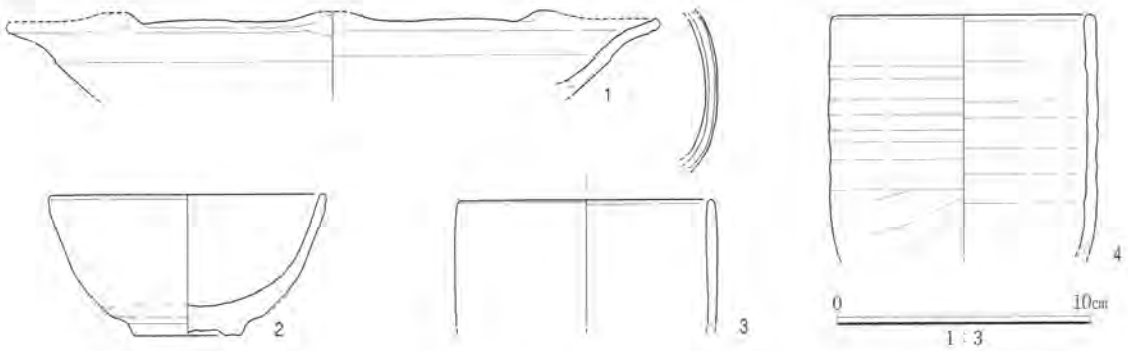


図11　SK93出土遺物実測図

とjの中心間の距離は1.07mである。

SX47は、東西3.10m以上、南北9.80m、深さ1.26mの落込みである。堆積状況から、外側から徐々に埋め戻されている状況が確認できる。大坂ノ陣による火災に伴う焼土を含む第8a層上面から掘り込まれていることから、徳川初期の遺構とみられる。

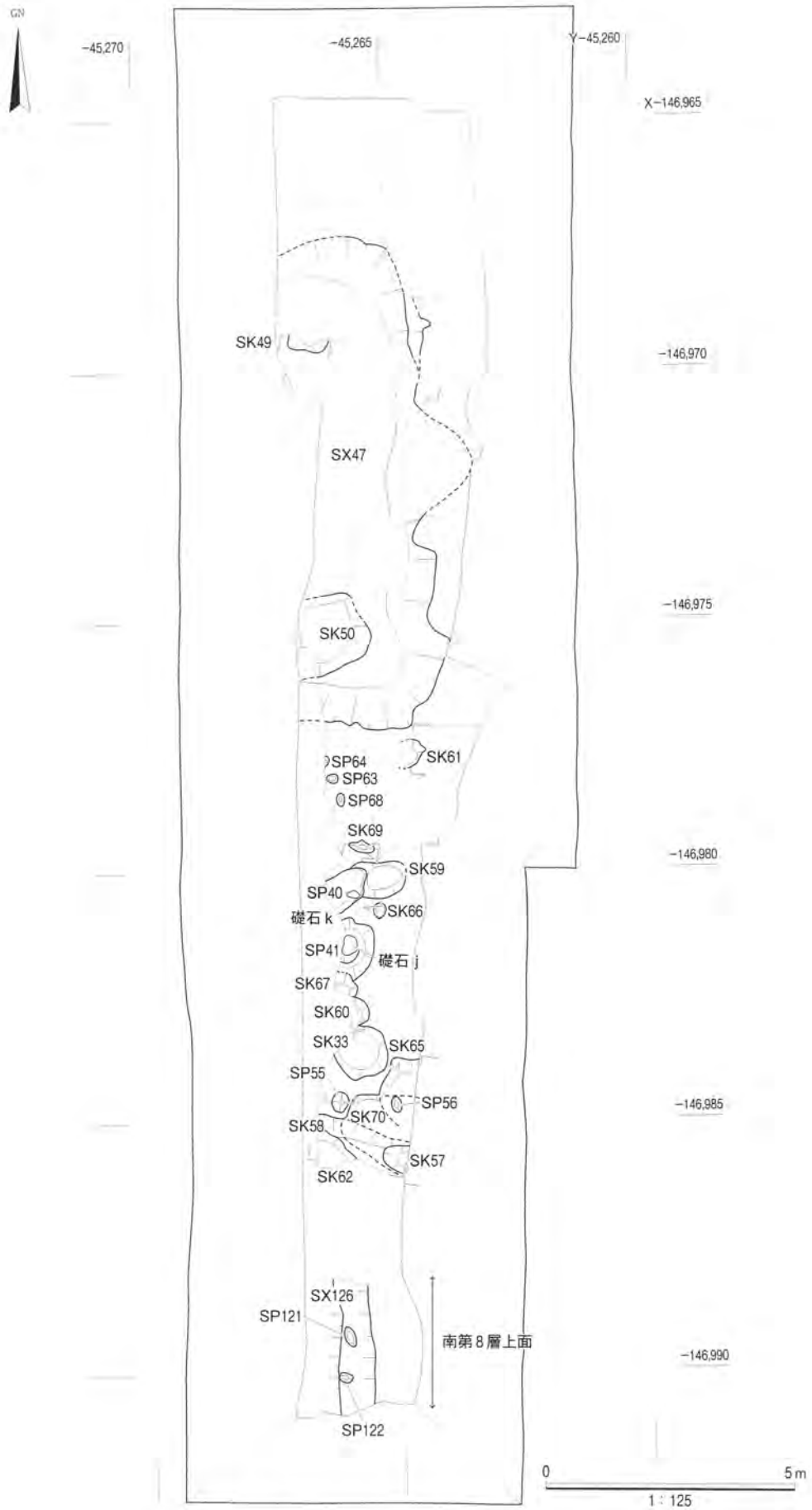
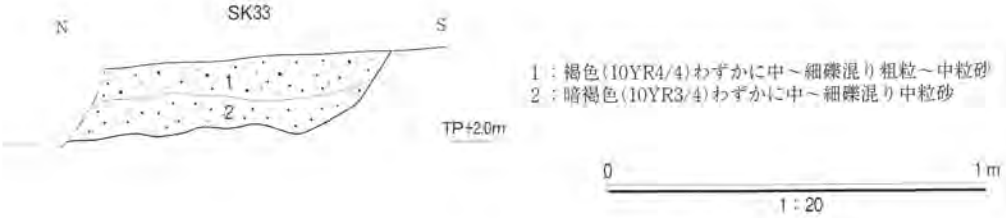
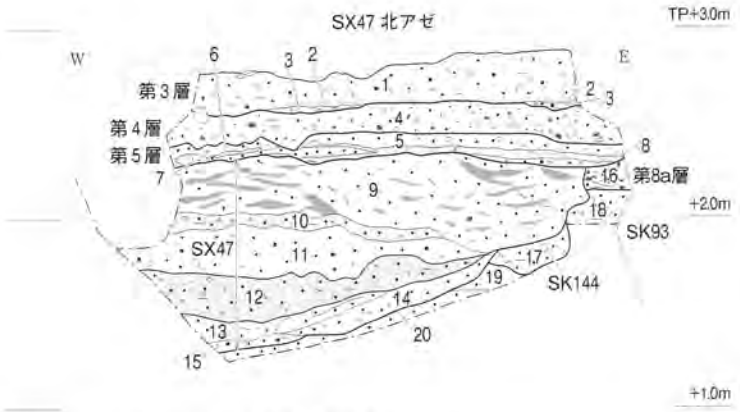


図12　第8層・南第8層上面遺構平面図



1：褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂
2：暗褐色(10YR3/4)わずかに中～細礫混り中粒砂

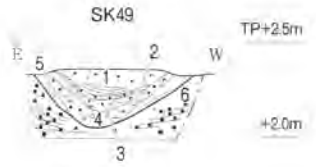
1：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに中～細礫混り中粒砂(SK60)
2：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂(SK67)
3：焼土・中粒砂の偽礫・粗粒～中粒砂の偽礫を含む、
　オリーブ褐色(2.5Y4/4)・褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SP41)
4：わずかに炭を含む、オリーブ色(5Y5/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SP40)
5：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(第8b層)
6：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SP125)
7：わずかに炭を含む、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SP149)
8：わずかに炭を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SP124)
9：灰オリーブ色(5Y5/3)わずかに中～細礫混り中粒砂(SP150)
10：オリーブ黄色(5Y6/4)中粒砂(第10層)



1：黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルトの偽礫・炭を含む、
　オリーブ褐色(2.5Y4/4)中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂(第3層)
2：黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルト(第3層)
3：にぶい黄色(2.5Y6/4)中～細礫混り粗粒～中粒砂
4：焼土・炭・黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルトの偽礫を含む(第3層)、
　褐色(10YR4/4)中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂(第4層)
5：褐色(10YR4/6)わずかに中～細礫混り中粒砂(第5層)
6：黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルト(第5層)
7：褐色(10YR4/6)わずかに中～細礫混り中粒砂(第5層)
8：黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルト(第5層)
9：炭・オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに細礫混り中粒砂の偽礫を含む、
　オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り中粒砂(SX47)
10：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SX47)
11：にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂(SX47)
12：わずかに炭を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SX47)
13：第10層の偽礫を含む、黄褐色(2.5Y5/4)わずかに細礫混り中粒砂(SX47)
14：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り中粒砂(SX47)
15：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに細礫混り粗粒～中粒砂(SX47)
16：焼土・炭を含む、褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(第8a層)
17：灰オリーブ色(7.5Y5/3)シルトの偽礫を含む、
　オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SK144)
18：炭を含む褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SK91)
19：にぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒～中粒砂(第10層)
20：にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂(第10層)

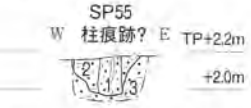
0　1　2m
1：40

図13　第8層上面遺構断面図(1)



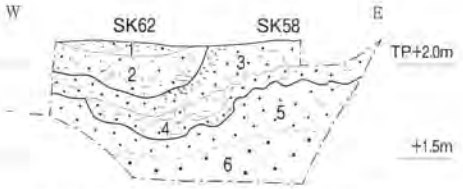
1：褐色(10YR4/4)わずかに細礫混り中粒砂(SK49埋土)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに細礫混りシルト質中粒砂(SK49埋土)
3：褐色(10YR4/4)わずかに細礫混り中粒砂(SK49埋土)
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに細礫混りシルト質中粒砂(SK49埋土)
5：暗褐色(10YR3/4)わずかに細礫混り中粒砂(SK49埋土)
6：褐色(10YR4/4)わずかに細礫混り中粒砂(SX47埋土)

1：黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含む、
オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに炭・中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SK50埋土)
2：黄褐色(2.5Y5/4)中～細礫混り中粒砂(SX47埋土)
3：黄褐色(10YR5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含む、
暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに炭・中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SX47埋土)
4：黄褐色(2.5Y5/6)わずかに中～細礫混り中粒砂の偽礫を含む、
灰オリーブ色(5Y4/2)
わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SX47埋土)
5：にぶい黄色(25Y6/4)わずかに中～細礫混り中粒砂(SX47埋土)
6：オリーブ褐色(2.5Y4/3)・黄褐色(2.5Y5/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SX47埋土)
7：オリーブ黄色(5Y6/3)・にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂(第10層)

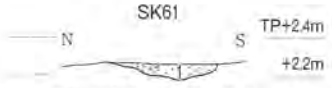


1：褐色(10YR4/4)わずかに細礫混り
中粒～細粒砂(SP55(柱痕跡))
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り
シルト質中粒砂(SP55(掘形))
3：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
わずかに細礫混りわずかにシルト質中粒砂

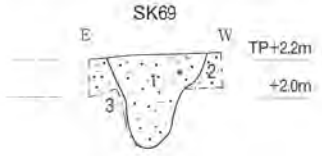
1：わずかに炭・焼土を含む、
オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SK59埋土)
2：わずかに炭を含む、にぶい黄褐色(10YR4/3)
わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂
(第8b層)



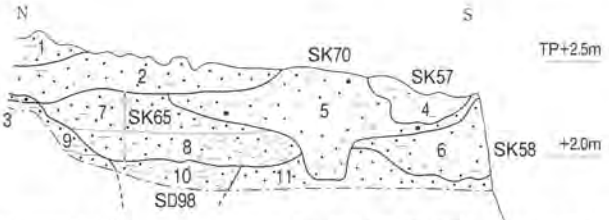
1：暗灰黄色(2.5Y5/2)・黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂質シルトの偽礫を含む、
オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかにシルト質中粒～細粒砂(SK62埋土)
2：炭・暗灰黄色(2.5Y5/2)・黒褐色(2.5Y3/2)
極細粒砂質シルトの偽礫を含む、暗オリーブ色(5Y4/4)
わずかに中～細礫混りシルト質中粒～細粒砂(SK62埋土)
3：炭を含む、暗褐色(10YR3/4)
わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂(SK58埋土)
4：炭・わずかに中～細礫混り細粒～極細粒砂質シルトの
偽礫・細粒砂質シルトの偽礫を含む、
わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂
5：わずかに中礫含む明黄褐色(2.5Y7/6)中粒砂
6：明黄褐色(2.5Y7/6)粗粒砂



1：炭・焼土・中粒砂の偽礫を含む、
黒褐色(7.5YR3/2)シルト質細粒砂



1：炭わずかに含む暗褐色(10YR3/3)わずかに中～
細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SP69埋土)
2：暗褐色(10YR3/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(第8b層)
3：黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂(第10層)



1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(第6層)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(第7層)
3：オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに細礫混り
粗粒～中粒砂(第7層)
4：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り
シルト質中粒砂(SK57)
5：炭をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)
わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂(SK70埋土)
6：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SK58埋土)
7：炭をわずかに含む、オリーブ褐色(2.5Y4/4)
わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂(SK65埋土)
8：炭・偽礫を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/3)
わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂(SK65埋土)
9：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(第8b層)
10：オリーブ褐色(2.5Y4/6)第10層偽礫を含む、黄褐色(2.5Y5/6)
わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SD98)
11：黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂(第10層)

0　1　2m
1：40

図14　第8層上面遺構断面図(2)

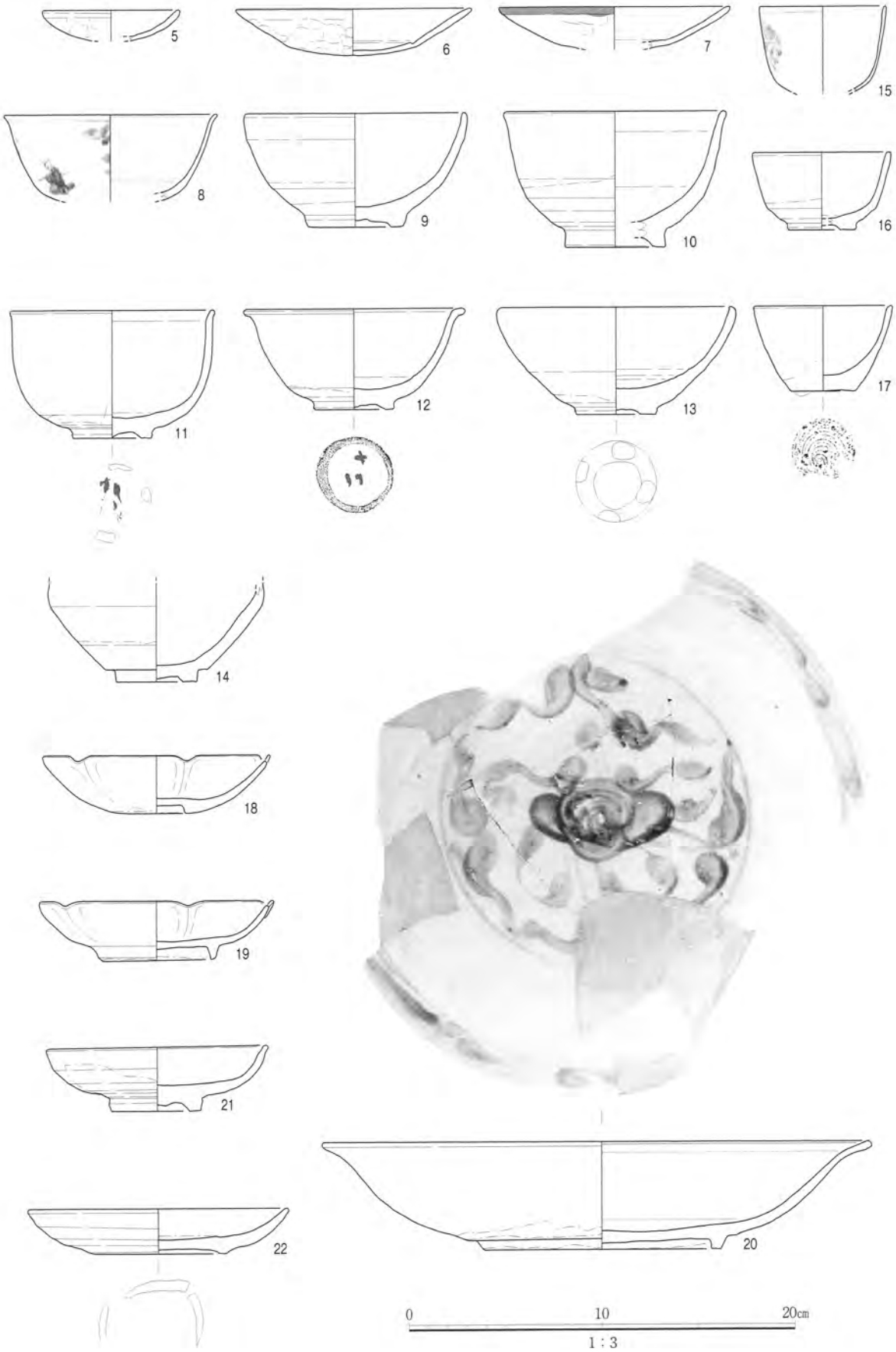


図15　SX47出土遺物実測図(1)

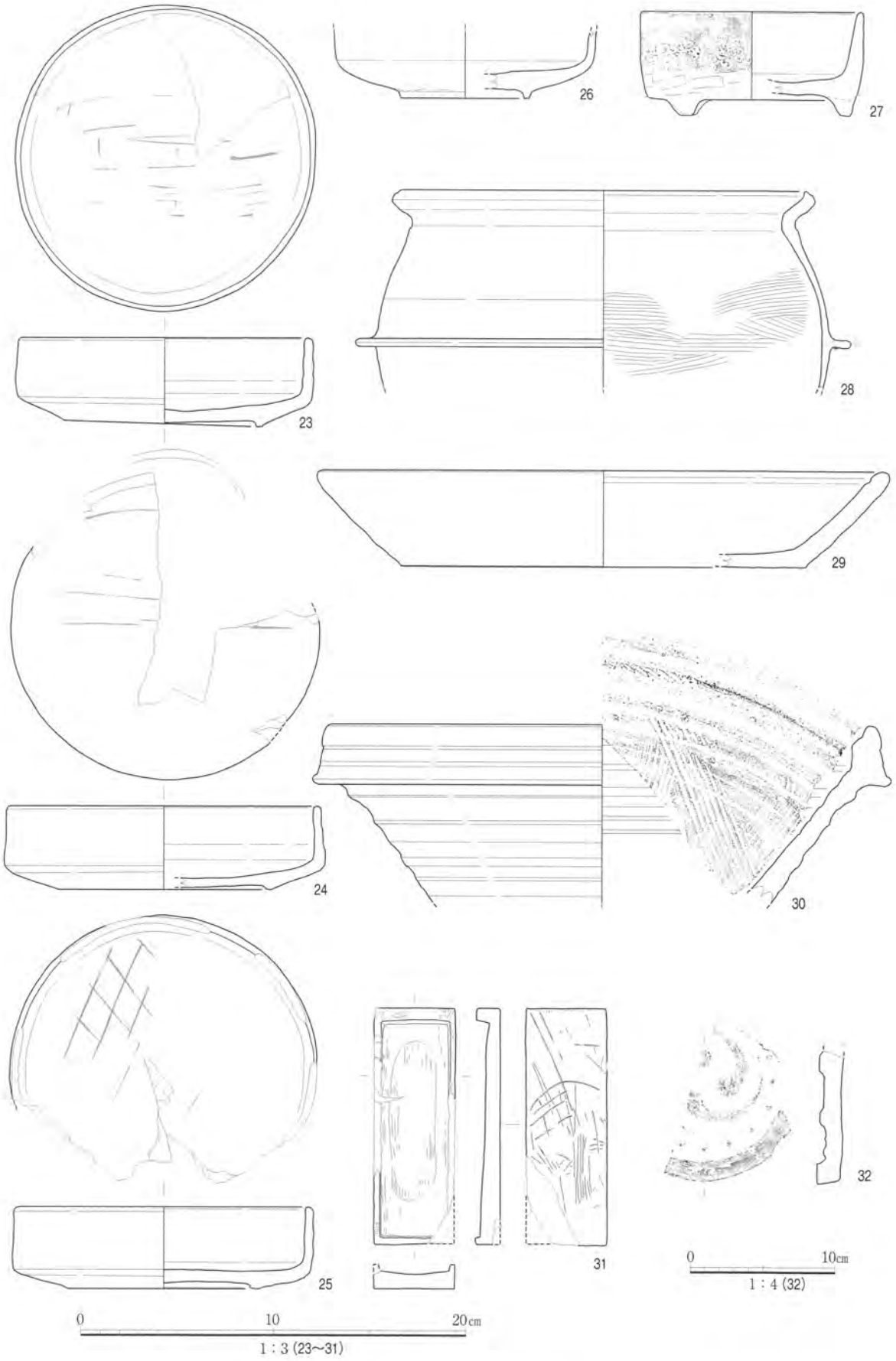


図16　SX47出土遺物実測図(2)

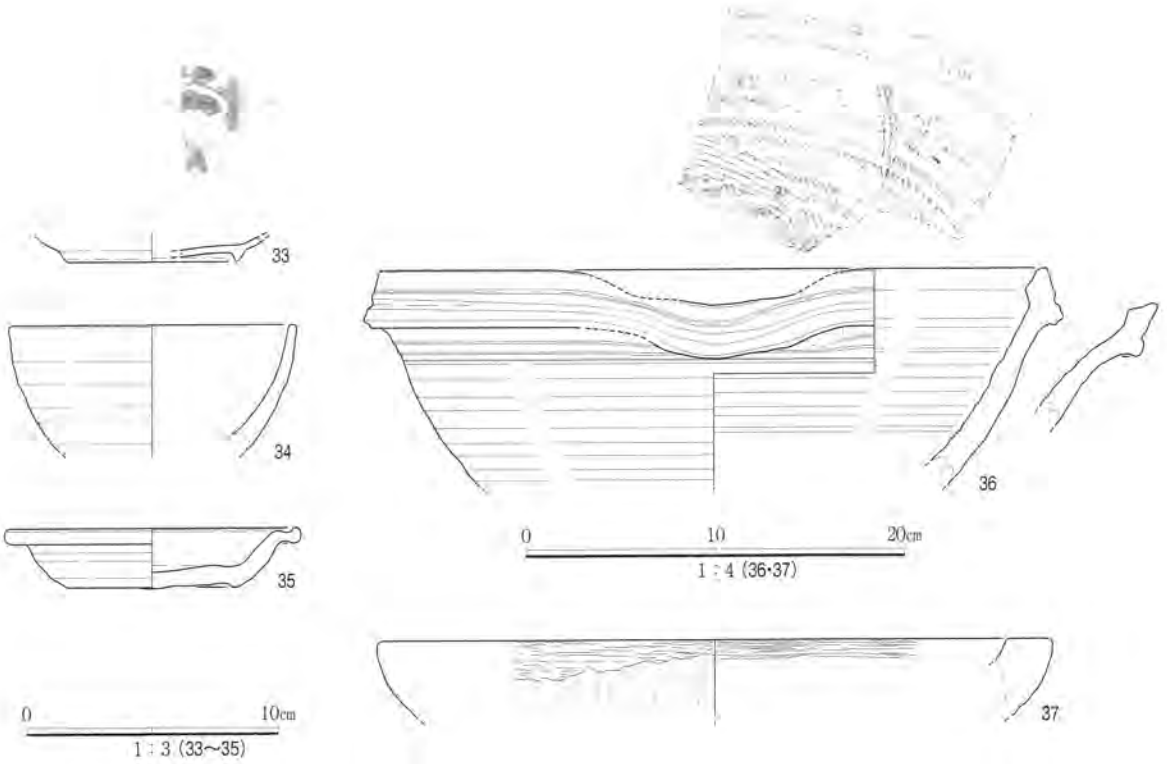


図17　SX126出土遺物実測図

土師器皿5～7・大和型釜28、瓦質土器香炉27、備前焼擂鉢30、丹波焼大平鉢29、中国産磁器8・15・18～20、瀬戸美濃焼陶器14・22～26、肥前陶器9～13・16・17・21、石製硯31、巴文軒丸瓦32を図化した。中国産磁器は、青花碗8・小杯15・大皿20、青磁輪花皿18・19がある。瀬戸美濃焼陶器には、天目碗14、皿22、志野鉢23～26がある。このうち23～25は形態や法量が類似することから組物とみられる。肥前陶器は碗9～13・小杯16・17・皿21がある。このうち碗11・12は底部に墨書が見られるが、文字の判読はできない。

これらの遺物は、瀬戸美濃焼の志野鉢類が特徴的に見られ、肥前陶器はあるが肥前磁器を含まないこと、また備前焼擂鉢の形態などから豊臣後期～徳川初期の様相をもつ良好な資料といえる。

SK58は、東西1.90m以上、南北1.08m以上、深さ0.50mである。西壁地層断面との対応関係が不明であり、調査区内ではさらに西側に延長するか確認できなかったため土壙としたが、溝の可能性もあり、この場合、下位の第10層上面で検出したSD98と同位置であることから、同様に敷地境の溝かもしれない。

南第8層上面では、SP121・122、SX126を検出した。SP121・122はSX126よりも新しく、SP121は東西0.23m、南北0.40m、深さ0.04mの小穴、SP122は東西0.27、南北0.20m、深さ0.14mの小穴である。

SX126は、東西1.52m以上、南北4.84m以上、深さ0.82mの東から西に下がる落込みである。既述のとおり、南第8層以下の地層が、SX126と一連の遺構であった場合は、規模・深さともにさらに大きくなる。出土遺物には、備前焼擂鉢36、中国産青花皿33、瀬戸美濃焼陶器折縁皿35、肥前陶器碗34、砂岩製茶臼37がある。SX47出土遺物群と近い様相を示す。比較的大規模な落込みであることや、

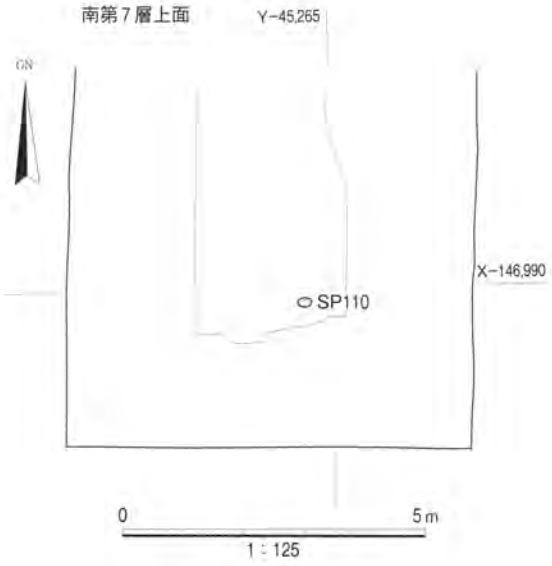


図18　南第7層上面遺構平面図

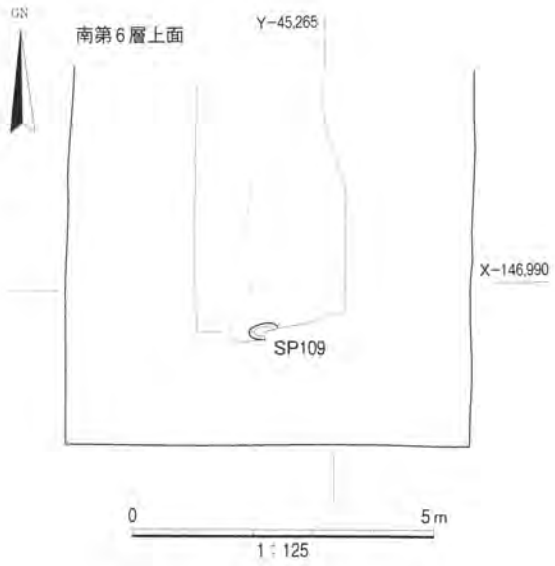


図19　南第6層上面遺構平面図

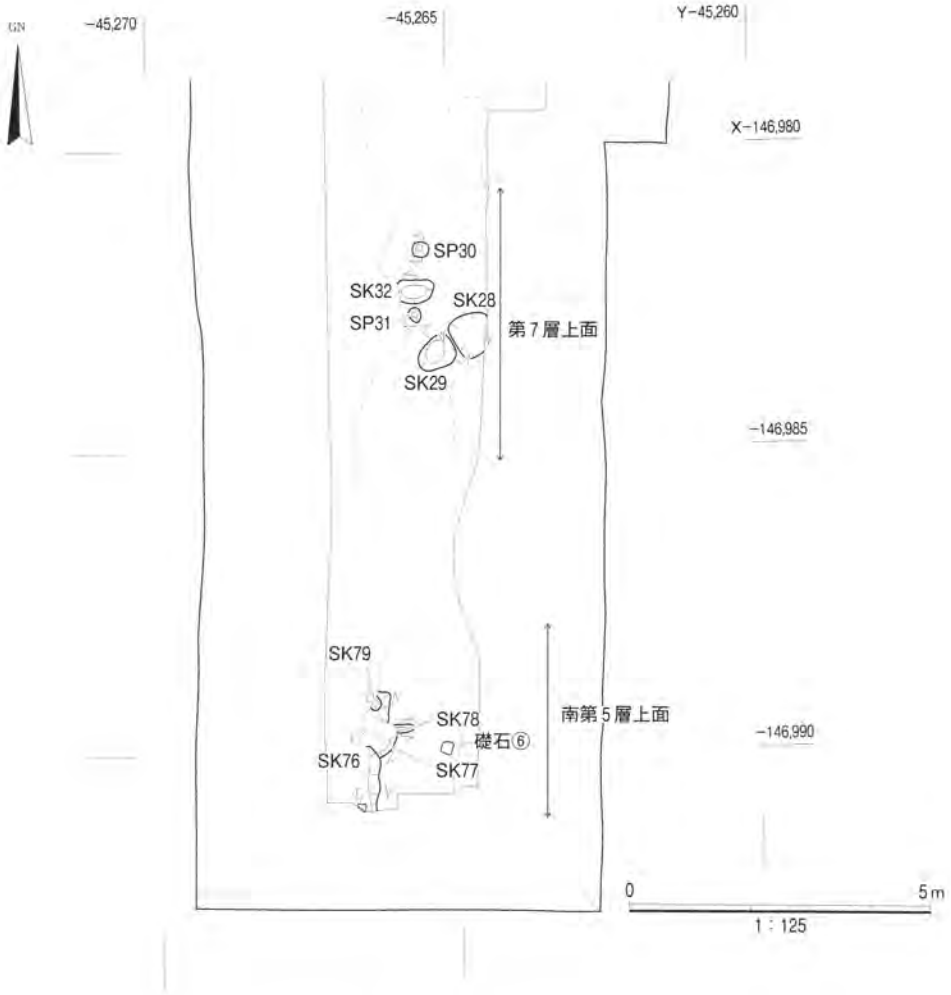


図20　第7層上面・南第5層上面遺構平面図

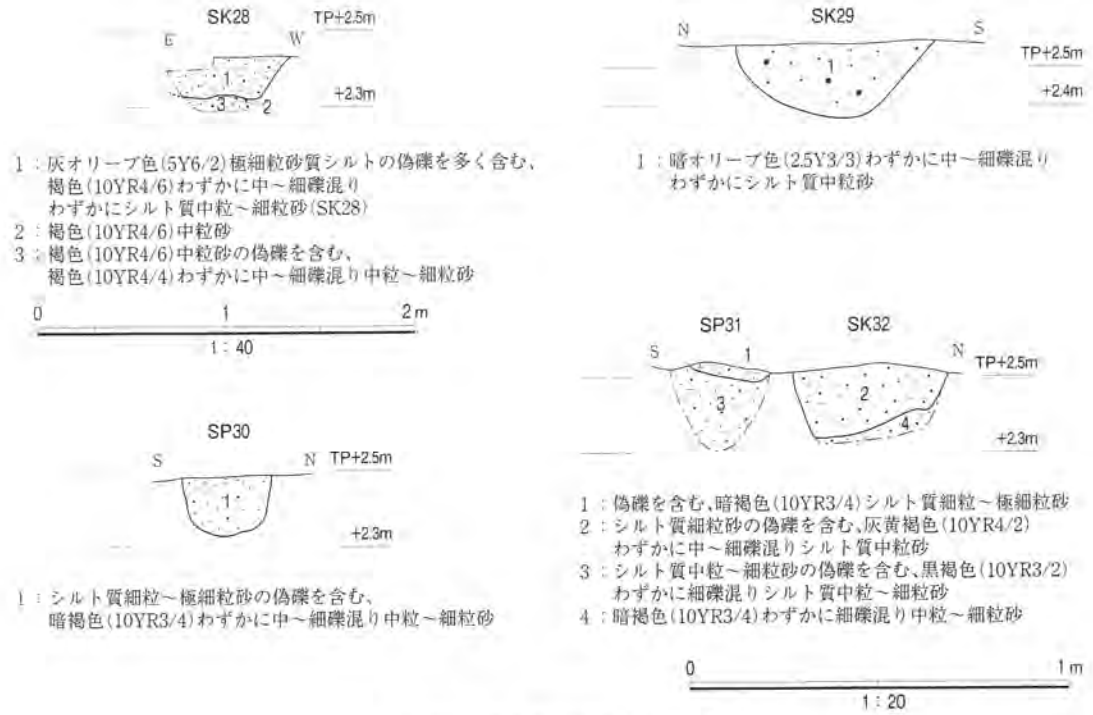


図21　第７層上面遺構断面図

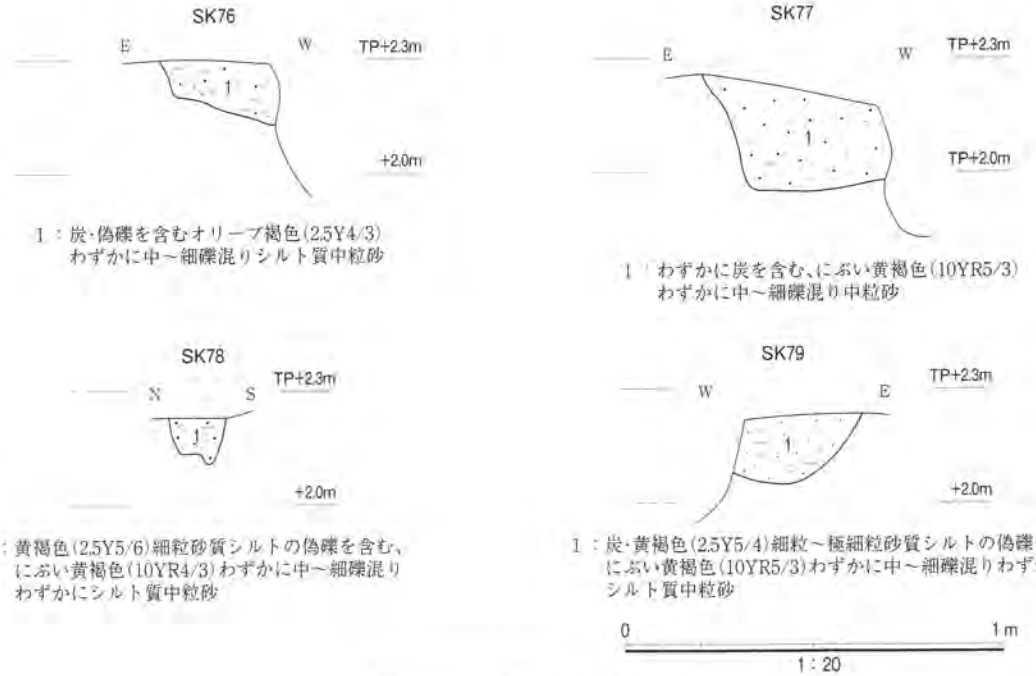


図22　南第５層上面遺構断面図

外側から埋め戻されている堆積状況などもSX47と類似することから、近い時期の類似する遺構と推定される。このことから、この段階では北側と南端部の間に土地利用の差違はない可能性がある。しかし、両者の境付近に第10層上面で東西方向の溝SD98が検出されていることから、この溝が敷地境の溝である可能性もあり、今回の調査では北と南の境がどの段階からあったのかについては明らかにできなかった。

＜南第７層上面遺構＞(図18)

南第７層上面では、SP110を検出した。SP110は東西0.24m、南北0.16m、深さ0.05mの小穴である。

＜南第６層上面遺構＞（図19）

南第６層上面では、SP109を検出した。SP109は、東西0.48m、南北0.25m、深さ0.13mの小穴である。

＜第７層・南第５層上面遺構＞（図20～22）

第７層上面では、SP30・31、SK28・29・32を検出した。

SP30は、直径0.24m、深さは0.15mの小穴、SP31は、直径0.20～0.22m、深さ0.04mの小穴である。SP30からは17世紀中頃～後半の年代観をもつ遺物が出土している。

SK28は東西0.65m以上、南北0.77m、深さ0.22m、SK29は東西0.63m、南北0.60m、深さ0.19m、SK32は東西0.60m、南北0.41m、深さ0.19mである。SK28・29からは17世紀中頃～後半の遺物が出土している。

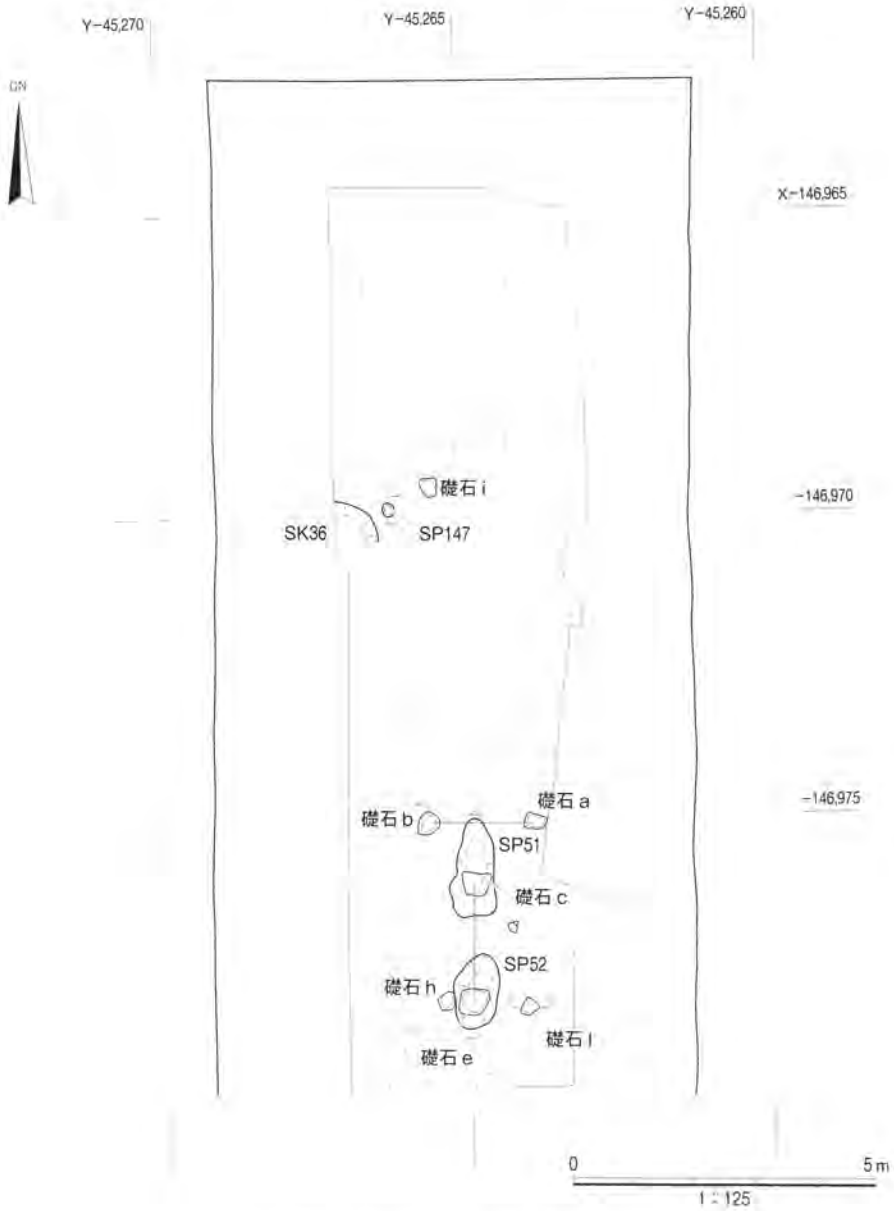


図23　第５層上面・層中遺構平面図

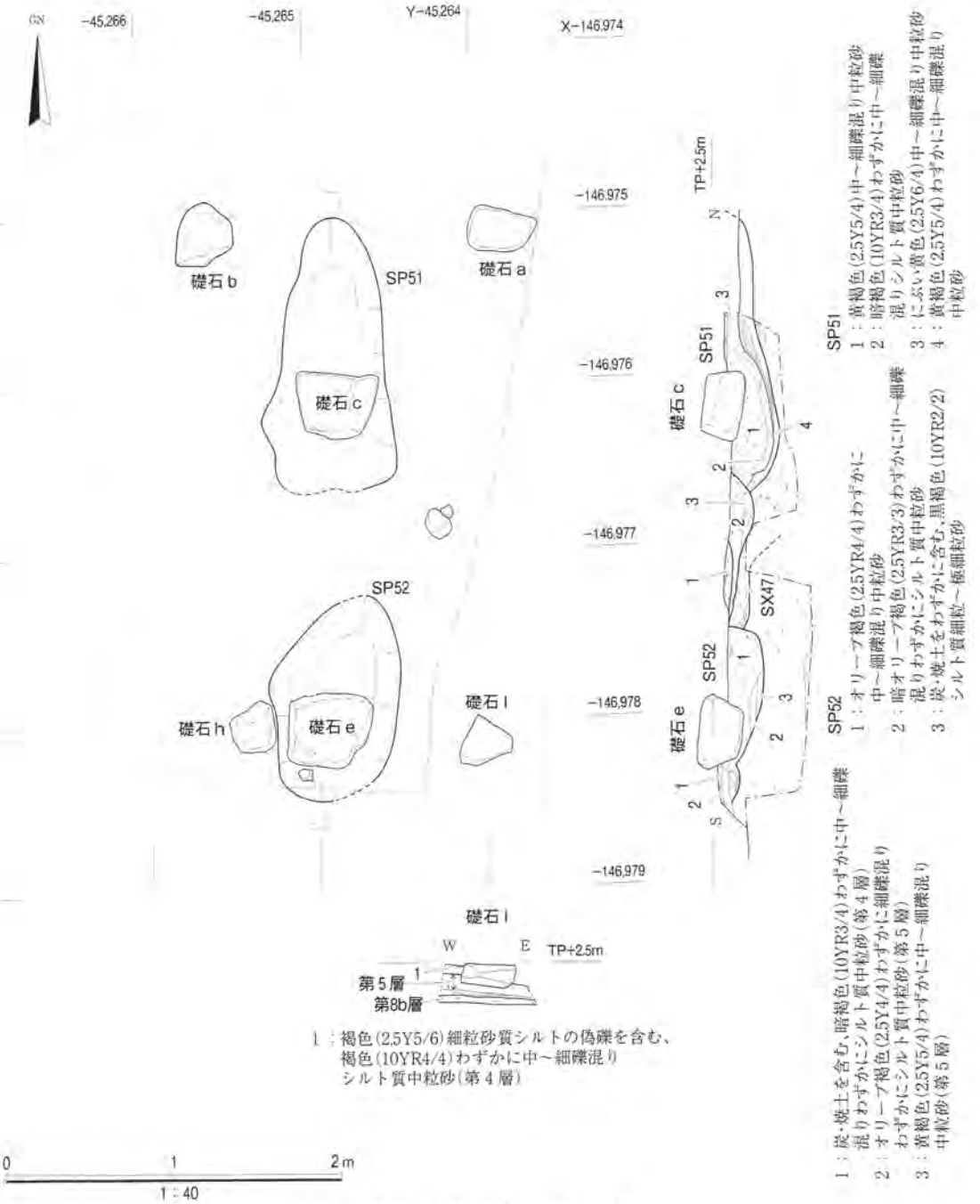
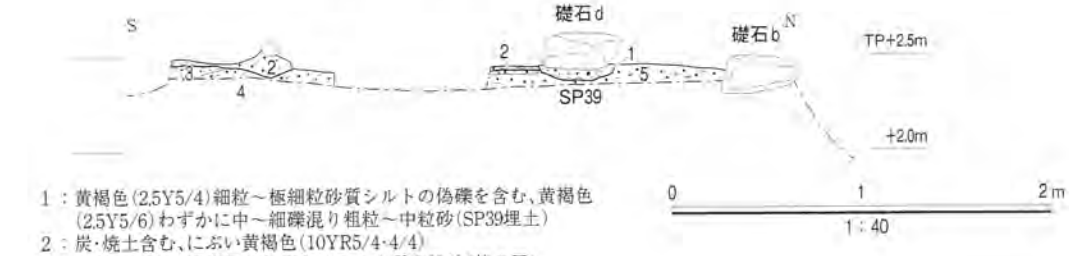


図24　第5層上面検出礎石建物平・断面図



1：黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含む、黄褐色(2.5Y5/6)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂(SP39埋土)
2：炭・焼土含む、にぶい黄褐色(10YR5/4・4/4)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(第4層)
3：灰黄褐色(10YR4/2)中～細礫混り中粒砂(第5層)
4：にぶい黄褐色(10YR4/3)わずかに中～細礫混り中粒砂(第5層)
5：炭を含む、にぶい黄褐色(10YR4/3)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(第5層)

図25　第5層上面遺構断面図

南第５層上面では、礎石とみられる石(**礎石⑥**)、土壙SK76～79を検出した。

SK76 は東西0.31m以上、南北1.14m以上、深さ0.17m、SK77は東西0.62m以上、南北0.35m以上、深さ0.30m、SK78は東西0.34m以上、南北0.15m、深さ0.12m、SK79は東西0.38m以上、南北0.50m以上、深さ0.17mである。

＜第５層上面・層中遺構＞(図23～28、図版２下・図版３上)

第５層上面・層中遺構は、**礎石a・b・c・e・h・i・l**、SP51・52・147、SK36を検出した。これらの遺構は、第５層および上位の第４層がともに17世紀後半と推定されることから、17世紀後半の遺構とみられる。

礎石のうち、aとb、cとeはそれぞれ組み合うものとみられる。**礎石a**は40cm大、**礎石b**は37cm大の花崗岩で、**礎石a・b**の距離は1.78mである。**礎石c・e**には据付け穴SP51・52が伴う。**礎石c・e**は、SP51・52を掘削した後、砂を主体とする埋土である程度埋め、その上に据え置かれている。第５層の整地は、**礎石c・e**を据えた後に一連の工程で行われたものと推定される。**礎石c**は48cm大、**礎石e**は50cm大の花崗岩で、大きな礎石である。SP51・52は、このような大きな礎石とそれに伴う重量のある上屋を支えるための工夫と推定される。SP52からは、17世紀前半の肥前陶器皿38が出土している。

SP147は、なんらかの祭祀関連の遺構と推定される。直径0.15m、深さ0.26mの円形の穴を掘り、三巴文軒丸瓦39を瓦当を下にして埋め、これとその他の瓦片で筒状に組んだ後、この内部を埋め、その上に9cm大の礫が置かれていた。

＜第４層上面遺構＞(図25・29、図版３中)

第４層上面遺構は、**礎石d**とそれに伴う据付け穴SP39を検出した。**礎石d**は、43cm大の花崗岩

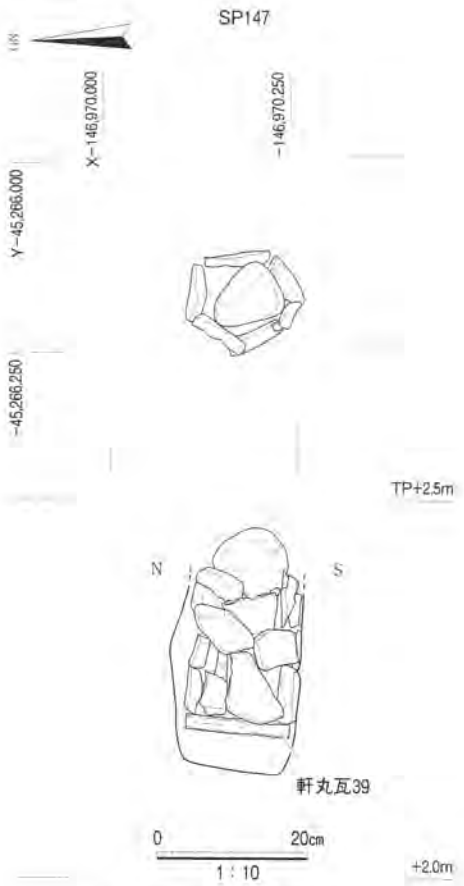


図26　SP147平・立面図

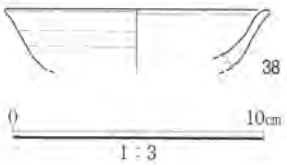


図27　SP52出土遺物実測図

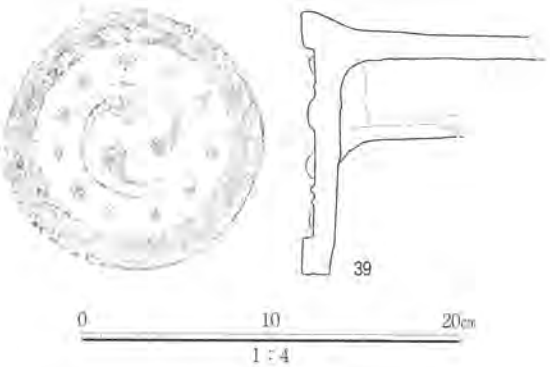


図28　SP147出土遺物実測図

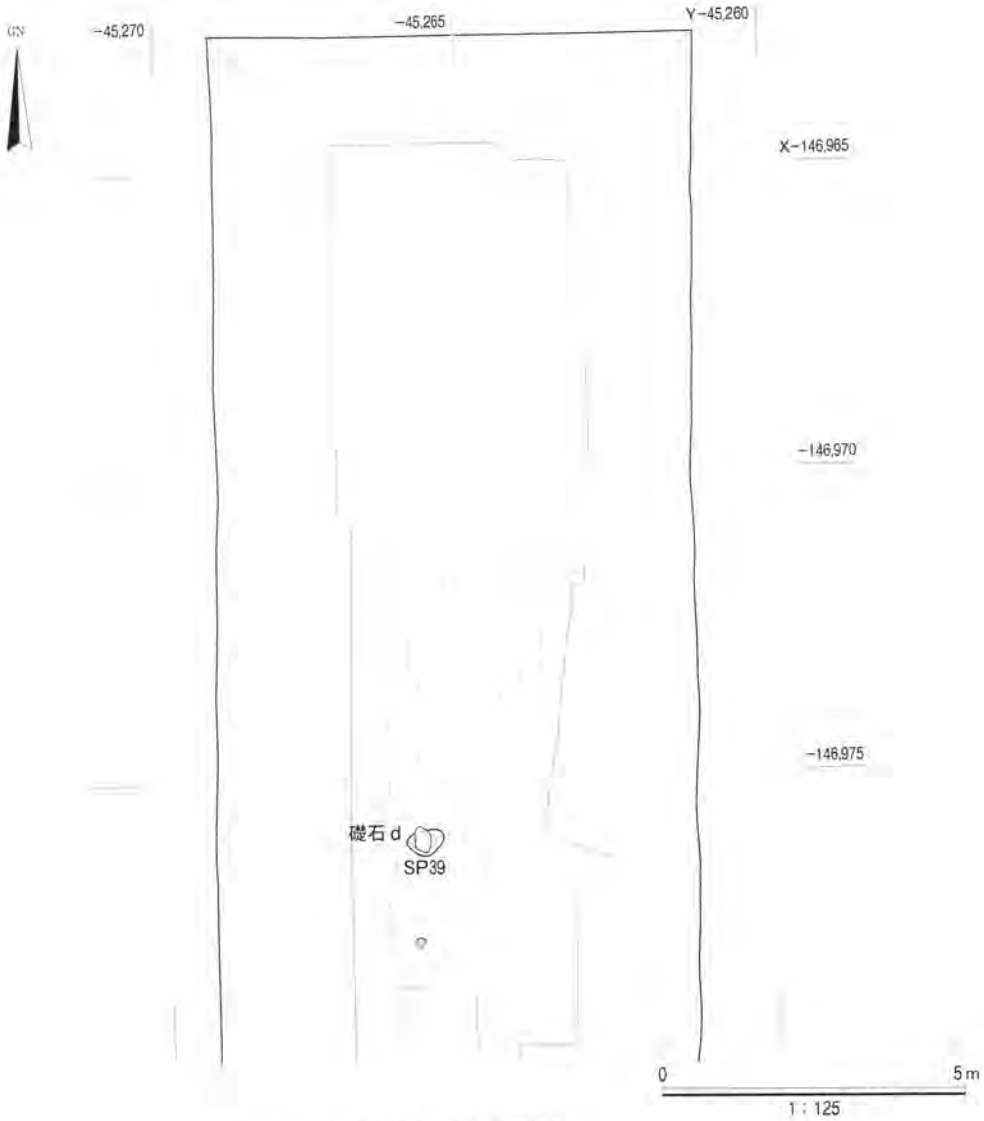


図29　第４層上面遺構平面図

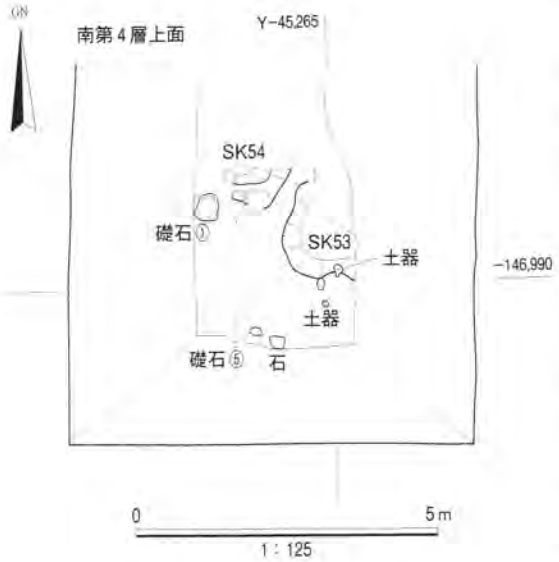


図30　南第４層上面遺構平面図

である。SP39は、東西0.65m、南北0.40m、深さ0.09mで、下部をやや埋めた状態で礎石dを据えている。

＜南第４層上面遺構＞（図30・31）

南第４層上面では、礎石とみられる礎石①・⑤、SK53・54・SP148を検出した。

SK53は東西1.17m以上、南北1.58m以上、深さ0.13mの浅い土壙、SK54は東西0.86m以上、南北0.77m以上、深さ0.40mである。SP148は礎石①の下で検出した直径0.22m以上、深さ0.05mの浅い小穴である。礎石①の下にあることから据付け穴の可能性もある。

1：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中～細礫混り中粒～細粒砂(SK54埋土)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)
わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂(SK54埋土)
3：炭・黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含む、
暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂(SK54埋土)
4：黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含む、
オリーブ褐色(2.5Y4/4)
わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(SK54埋土)
5：にぶい黄橙色(10YR6/4)
わずかに中～細礫混り粗粒～細粒砂(南第4層)
6：黄褐色(2.5Y5/4)中～細礫混り中粒～細粒砂(南第5層)
7：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかにシルト質中粒砂の偽礫を含む、
褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混り中粒砂

1：にぶい黄橙色(10YR6/4)細粒～極細粒砂質シルト(南第1層)
2：にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(南第2層)
3：黄褐色(2.5Y5/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂(南第3層)
4：明黄褐色(2.5Y6/8)極細粒砂質シルト(南第3層)
5：黄褐色(2.5Y5/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂(南第3層)
6：明黄褐色(2.5Y6/8)極細粒砂質シルト(南第3層)
7：明黄褐色(10YR7/6)
わずかに中～細礫混りシルト質中粒～細粒砂(SP148)
8：浅黄色(2.5Y7/4)中～細礫混り粗粒～中粒砂
9：にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂

0　1　2m
1：40

図31　南第4層上面遺構断面図

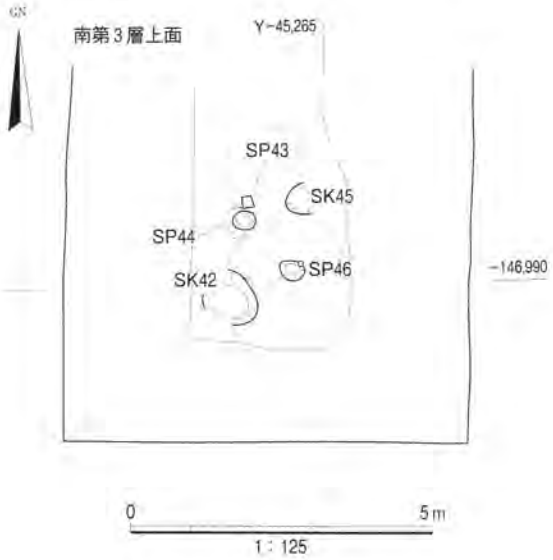


図32　南第3層上面遺構平面図

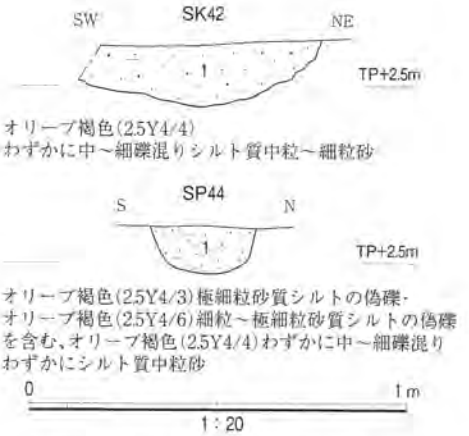


図33　南第3層上面遺構断面図

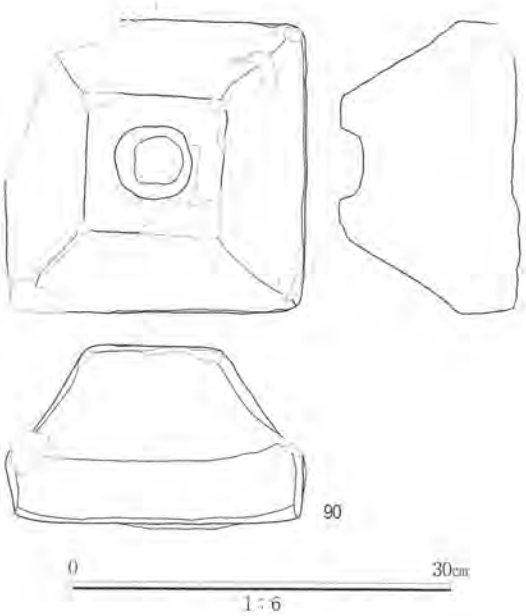


図34　SK154出土遺物実測図

＜南第3層上面遺構＞(図32～34)

南第3層上面では、SP43・44・46、SK42・45を検出した。このほか、調査区西壁断面でSK154を確認した。SP43は、0.20mの方形の小穴で、深さは0.18mである。SP44は、直径0.28～0.38m、深さ0.13m、SP46は直径0.32～0.42m、深さ0.07mの小穴である。

SK42は、東西0.90m、南北0.90m、深さ0.17m、SK45は、東西0.42m以上、南北0.50m、深さ0.07mの土壙である。SK154からは、花崗岩製の五輪塔の火輪90が出土した。

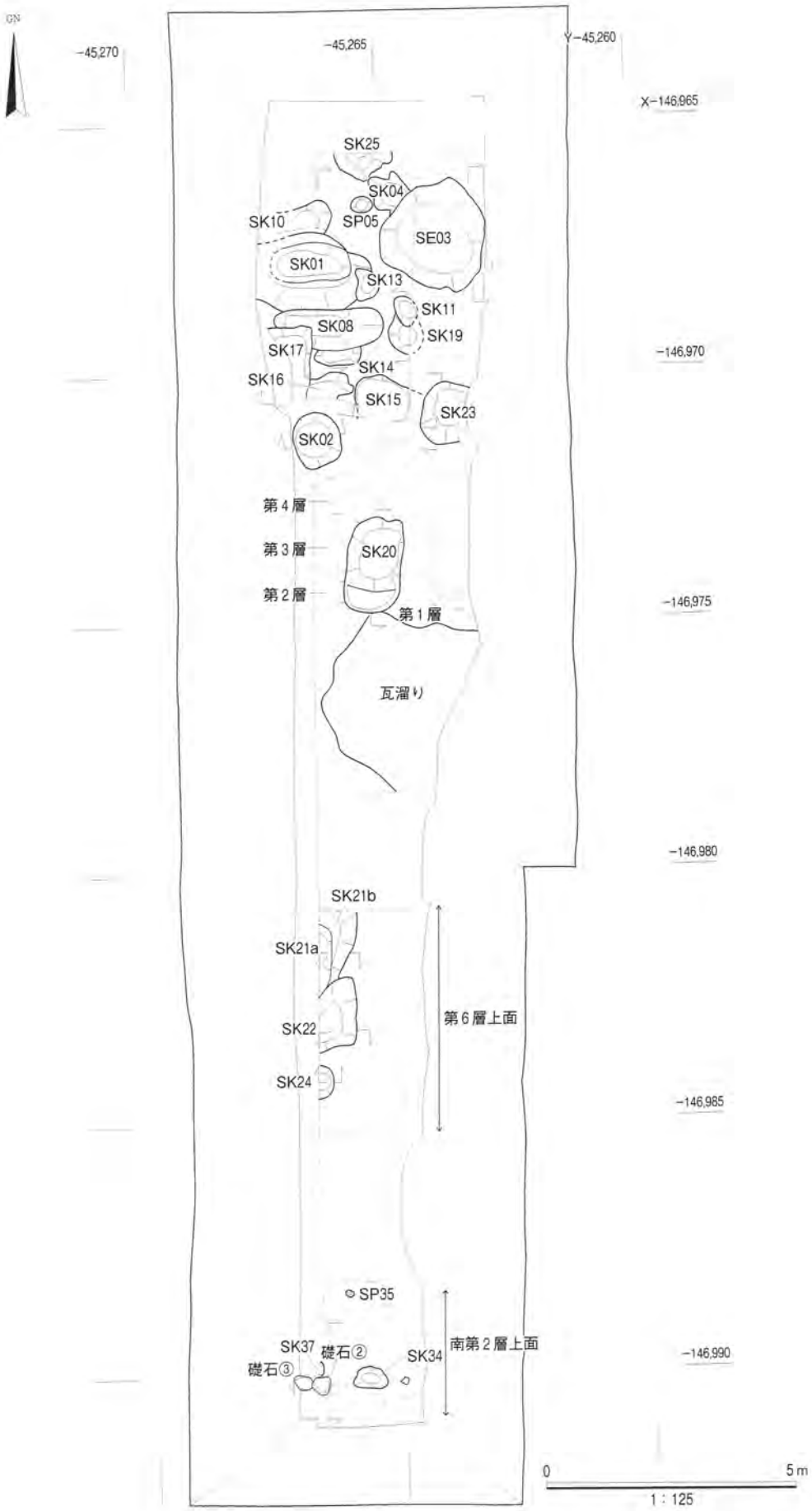
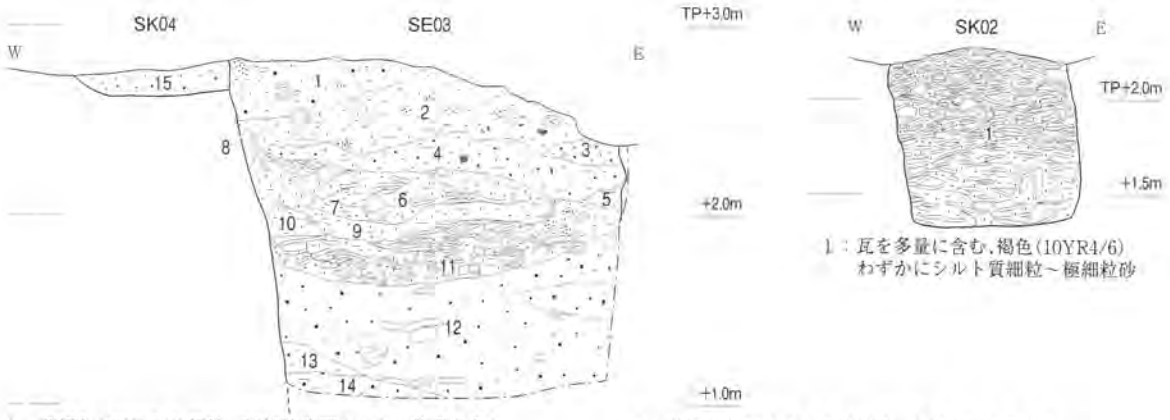
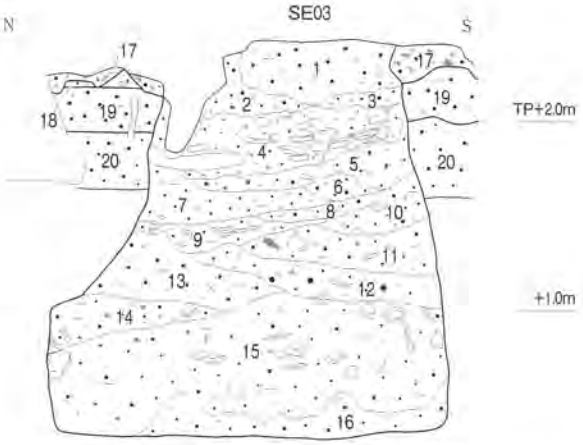


図35　第2層上面遺構平面図



1：瓦を多量に含む、褐色(10YR4/6)
わずかにシルト質細粒～極細粒砂

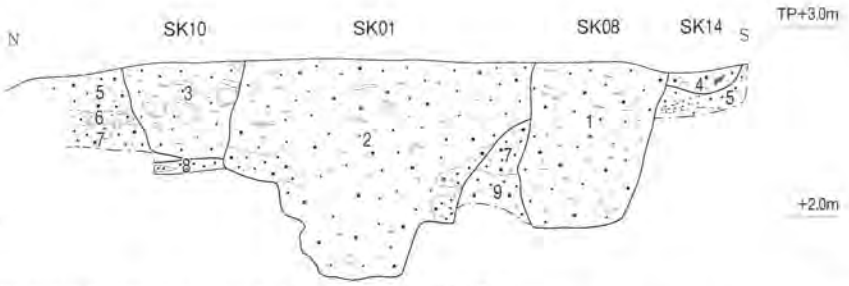
1：黄褐色(10YR5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含む、
褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混り粗粒～細粒砂(SE03埋土)
2：淡黄色(2.5Y8/4)中～細礫多く混じるシルト質粗粒～細粒砂の偽礫・
黄褐色(10YR5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含む、
オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに炭・焼土・中～細礫混りシルト質
細粒～極細粒砂(SE03埋土)
3：にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに細礫混り中粒～細粒砂(SE03埋土)
4：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに炭・焼土・中～細礫
混り中粒～細粒砂質シルト(SE03埋土)
5：にぶい黄橙色(10YR6/4)
わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂(SE03埋土)
6：オリーブ褐色(2.5Y4/3)
わずかに細礫混り細粒～極細粒砂質シルト(SE03埋土)
7：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト(SE03埋土)
8：暗褐色(10YR3/4)焼土を含むシルト質中粒～細粒砂(SE03埋土)
9：黄褐色(2.5Y5/3)偽礫を含む、わずかに細礫混り
細粒～極細粒砂質シルト(SE03埋土)
10：にぶい黄褐色(10YR5/3)わずかに細礫混り
細粒～極細粒砂質シルト(SE03埋土)
11：にぶい黄褐色(10YR5/4)
わずかに細礫混り細粒砂質シルト(SE03埋土)
12：にぶい黄橙色(10YR6/4)粗粒～中粒砂の偽礫を含む、
にぶい黄褐色(10YR4/3)
わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂(SE03埋土)
13：にぶい黄橙色(10YR6/4)
わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂(SE03埋土)
14：にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り
シルト質粗粒～中粒砂(SE03埋土)
15：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに細礫混り中粒～細粒砂(SK04埋土)



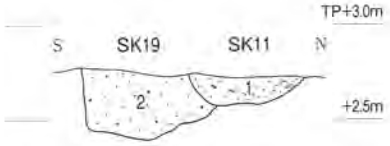
1：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒～細粒砂(SE03埋土)
2：黄褐色(2.5Y5/3)わずかに中～細礫混り
粗粒～細粒砂(SE03埋土)
3：オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに
中～細礫混り粗粒～中粒砂(SE03埋土)
4：炭・焼土・偽礫を含む、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
わずかに中～細礫混りわずかにシルト質
中粒～細粒砂(SE03埋土)
5：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)わずかに
中～細礫混り粗粒～中粒砂(SE03埋土)
6：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに中～細礫混り
粗粒～中粒砂(SE03埋土)
7：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り
粗粒～中粒砂(SE03埋土)
8：にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかに中～細礫混り
粗粒～中粒砂(SE03埋土)
9：暗褐色(10YR3/4)わずかに中～細礫混り
シルト質中粒砂(SE03埋土)
10：にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質粗粒～中粒砂(SE03埋土)
11：焼土を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/4)
わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂(SE03埋土)
12：焼土を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/3)中～細礫混り
極粗粒～中粒砂(SE03埋土)
13：炭を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(SE03埋土)
14：焼土を含む、オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質粗粒～中粒砂(SE03埋土)
15：焼土を含む、暗褐色(10YR3/3)わずかに
中～細礫混りシルト質粗粒～中粒砂(SE03埋土)
16：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに
中～細礫混り粗粒～中粒砂(SE03埋土)
17：炭・焼土を含む、にぶい黄褐色(10YR5/4)・灰黄色(2.5Y6/2)・
褐色(10YR4/6)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒砂(第8a-1層)
18：にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかに細礫混り中粒砂(第8a-2層)
19：黄褐色(2.5Y5/4)・オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒砂(第9層)
20：黄褐色(10YR5/6)粗粒～中粒砂(第10層)

0　1　2m
1：40

図36　第2層上面遺構断面図(1)

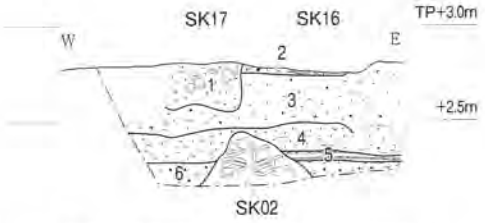


1：黄褐色(2.5Y5/3)わずかに中～細礫混りシルト質粗粒～中粒砂(SK08埋土)
2：にぶい黄色(2.5Y6/3)・明黄褐色(10YR6/6)・にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂の偽礫を含む、
暗灰黄色(2.5Y4/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質粗粒～中粒砂(SK09埋土)
3：褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混りシルト質中粒砂(SK10埋土)
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかに中～細礫混りシルト質粗粒～中粒砂(SK14埋土)
5：にぶい黄橙色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂・褐色(10YR4/4)わずかに中～細礫混り中粒砂(第2層)
6：細粒～極細粒砂の偽礫を含む、黄褐色(10YR5/6)わずかに細礫混り中粒～細粒砂質シルト(第2層)
7：黄褐色(2.5Y5/6)・オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂(第2層)
8：焼土を含む、褐色(10YR4/6)わずかに粗粒砂混り中粒砂(第8a層)
9：にぶい黄褐色(10YR6/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂(SX47)



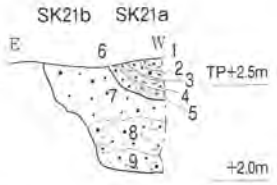
1：黄褐色(10YR5/6)細粒～極細粒砂質シルトの偽礫を含む、
オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに炭・中～細礫混り
シルト質細粒～極細粒砂
2：黄褐色(2.5Y5/6)粗粒～細粒砂質シルトの偽礫を含む、
オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに中～細礫混り中粒～細粒砂

1：瓦多量に含む、灰黄色(2.5Y6/2)
わずかに中～細礫混り中粒～細粒砂(SK15埋土)
2：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに中～細礫混り
中粒～細粒砂(第2層)
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒～細粒砂(第3層)
4：にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかにシルト質
中粒～細粒砂(第3層)
5：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～細粒砂(第3層)
6：にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに
シルト質中粒～細粒砂(第3層)
7：焼土を含む褐色(10YR4/4)わずかに
中～細礫混りシルト質粗粒～細粒砂(第4層)
8：にぶい黄褐色(10YR5/4)わずかに中～細礫混り
粗粒～中粒砂



1：瓦を含む、灰黄色(2.5Y6/2)わずかに中～細礫混り
シルト質細粒～極細粒砂(SK17埋土)
2：にぶい橙色(7.5YR7/3)
わずかに炭・シルト質細粒～極細粒砂(SK16埋土)
3：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに中～細礫混り
わずかにシルト質中粒～細粒砂(第2層)
4：炭・焼土を含む褐色(10YR4/4)・にぶい黄褐色(10YR5/4)
わずかに中～細礫混りシルト質細粒～極細粒砂(第4層)
5：にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒～細粒砂・
わずかにシルト質細粒～極細粒砂(第5層)
6：明黄褐色(10YR6/6)わずかに中～細礫混り中粒砂

1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)
わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂質シルト



1：灰オリーブ色(5Y4/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂(SK21a埋土)
2：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに細礫混り粗粒～中粒砂(SK21a埋土)
3：灰オリーブ色(5Y4/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂(SK21a埋土)
4：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに細礫混り粗粒～中粒砂(SK21a埋土)
5：灰オリーブ色(5Y4/2)わずかに中～細礫混りわずかにシルト質中粒～細粒砂(SK21a埋土)
6：黄褐色(2.5Y5/4)わずかに細礫混り粗粒～中粒砂(SK21a埋土)
7：オリーブ黄色(5Y6/8)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂(SK21b埋土)
8：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかに中～細礫混り粗粒～中粒砂質シルト(SK21b埋土)
9：オリーブ黒色(5Y3/2)わずかに中～細礫混りシルト質粗粒～中粒砂(SK21b埋土)

0　1　2m
1：40

図37　第2層上面遺構断面図(2)

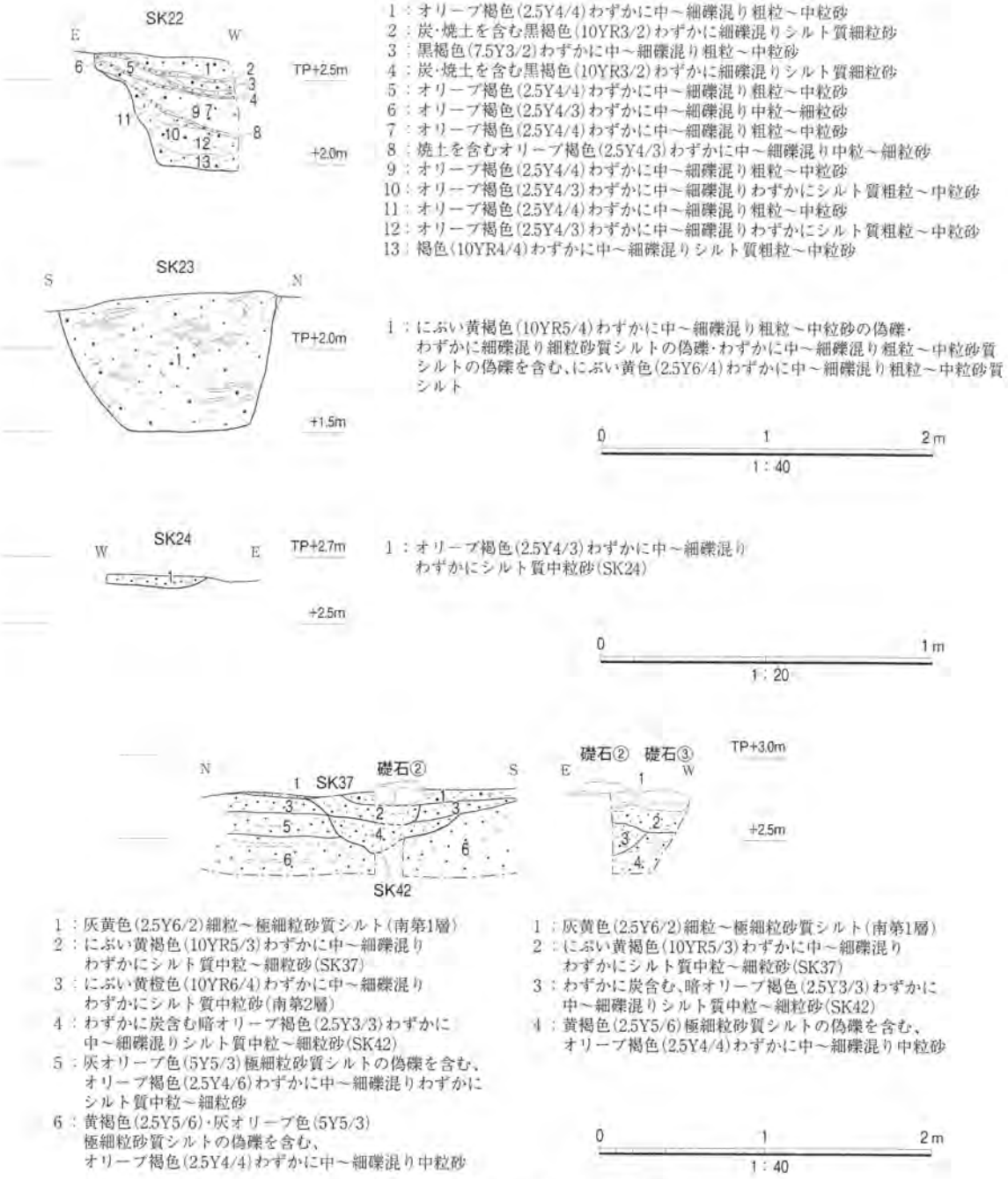


図38　第２層・南第２層上面遺構断面図

＜第２層上面・南第２層上面遺構＞(図35～46、図版３下)

第２層上面遺構には、SP05、土壙SK01・02・04・08・10・11・13～17・19・20・21a・21b・22～25、井戸SE03、瓦溜りがある。土壙のうち、SK01・02・08・15・20は、瓦や陶磁器などの遺物を多く含んでいたことから廃棄土壙とみられる。これら第２層上面遺構は、18世紀前葉以降の遺構である。なお、SK21a・21b・22・24については、これらの遺構の周辺には第５層以上の地層がほぼ残存していなかったため第６層上面で検出したが、出土遺物の年代から第２層上面の遺構と判断した。

SK01は東西2.30m以上、南北1.62m、深さ1.15mで、SK08・10と重複しており、SK08より古く、SK10より新しい。18世紀前葉～中葉の遺物が出土しているが、SK10から18世紀後半とみられる遺物

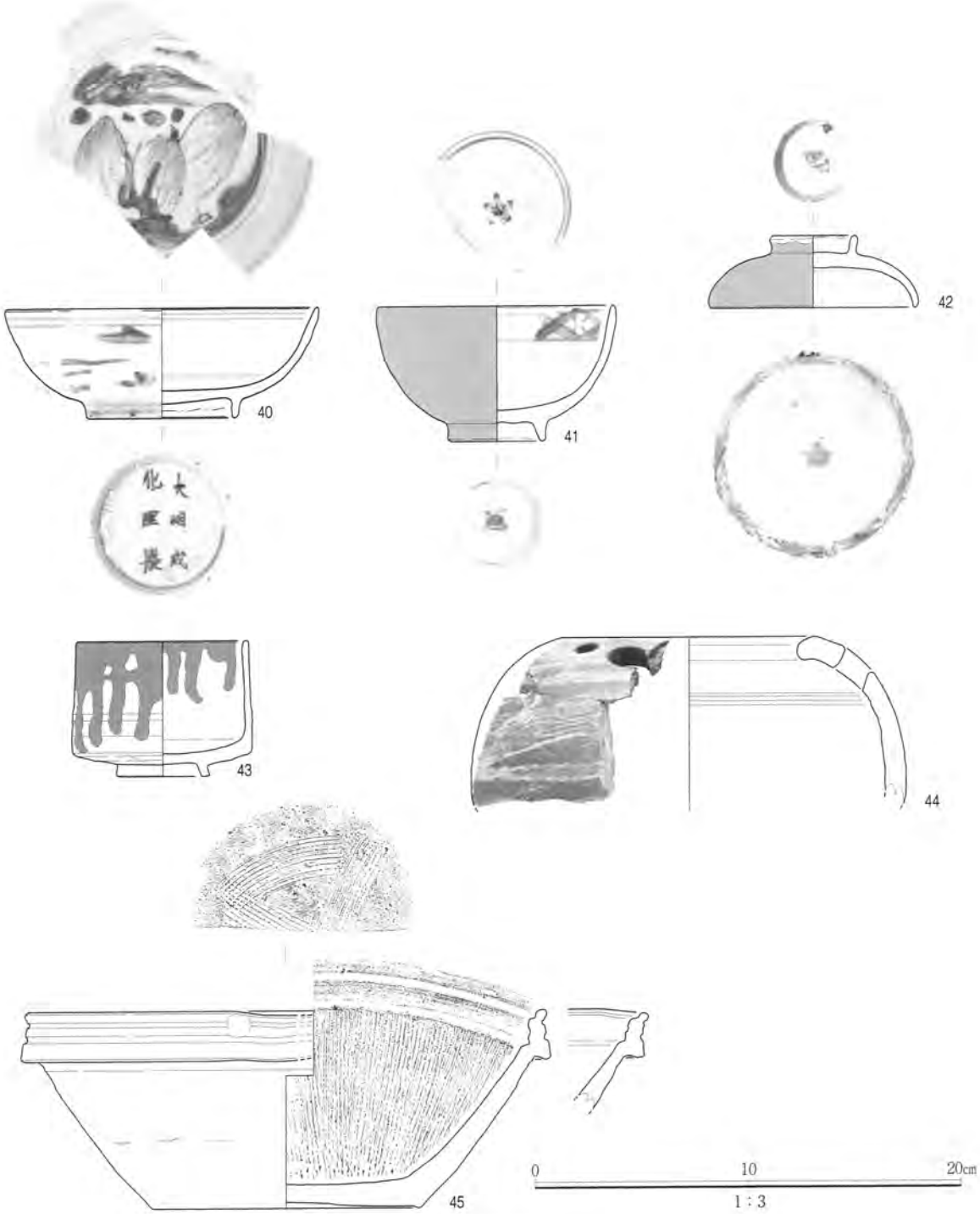


図39　SK02出土遺物実測図

が出土していることから、SK01の年代は18世紀後半以降である。

SK02は、直径0.95～1.10m、深さ0.95mで、多量の瓦が廃棄されていた。18世紀後葉の遺構とみられる。土師器火鉢44、中国産磁器青花碗40、瀬戸美濃焼陶器筒碗43、肥前磁器41・42、堺擂鉢45が出土した。肥前磁器碗41・蓋42はいずれも青磁染付で、41の丸碗は内面に四方襷文を施す。

SE03は直径2.07～2.20m、深さ2.10mの井戸とみられる。肥前磁器青磁染付碗46、三巴文軒丸瓦47、平瓦片48を図化した。48は小口に「○」の刻印がある。このほか、幕末頃の遺物が出土している。

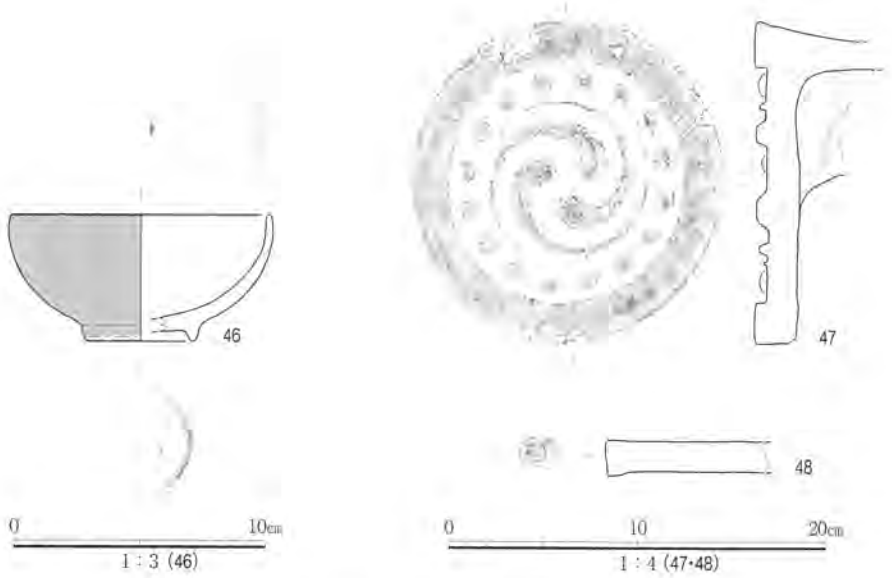


図40　SE03出土遺物実測図

SK08は、東西2.22m、南北0.80m、深さ0.86mの土壙である。土師器49・58、焼締陶器50・59、肥前陶器55・57、肥前磁器51～53、関西系陶器54、産地不明陶器56が出土した。49は土師器皿で口縁部に煤が付着している。50は備前焼灯明受皿である。51・53は肥前磁器の染付碗で、51はコンニャク印判による文様を施し、53は二重網目文を施す。52は蓋物である。肥前陶器は開口碗55と刷毛目鉢57が出土している。54は関西系陶器で、色絵を施す平碗である。56は産地不明の碗で、陶胎染付である。轆轤の回転は右回転で、胎土に砂粒を多く含む。58は土師器焙烙である。59は焼締陶器の植木鉢で、底部には焼成後に２箇所の水抜き孔があけられている。18世紀後半の遺物がまとまって出土しているが、他の遺構との重複関係から18世紀末の遺構とみられる。

SK20は、東西1.08、南北1.92m、深さ1.46mの土壙である。瓦質土器69、中国産磁器67、肥前陶器62・68、肥前磁器60・61・64～66、関西系陶器碗63、三巴文差瓦70が出土した。67は青花の皿で、底部には鉋削りの痕跡が確認できる。肥前磁器には染付碗60・碗蓋61・皿64・鉢66、青磁染付鉢65がある。肥前陶器62は陶胎染付蓋物、68は刷毛目鉢である。瓦質土器の火鉢69は二方に獣面の把手が付く。出土遺物から18世紀中葉の遺構とみられる。

SK21a・SK21bは当初は同一の遺構と認識して掘りはじめたが、断面の観察から上下２つの遺構が重複していることが確認されたため、上位のものをSK21a、下位のものをSK21bとした。肥前磁器染付碗71が出土したほか、SK21bからは、備前焼灯明受皿72が出土した。SK21a・bいずれも18世紀前半の遺構とみられる。

SK23は、東西0.96m以上、南北1.31m、深さ0.85mの土壙である。出土遺物の年代から18世紀前葉の遺構とみられる。図化した遺物は丹波焼擂鉢74、肥前磁器染付碗73、三巴文軒丸瓦75、唐草文軒平瓦76・77である。

瓦溜りは、調査区中央部で検出した。東西2.62m、南北3.80mの範囲に、第１層に混じり多量の瓦が集中して廃棄されていた。落込み状に窪んでいる状況は確認できず、平面にまとめて廃棄し、第１

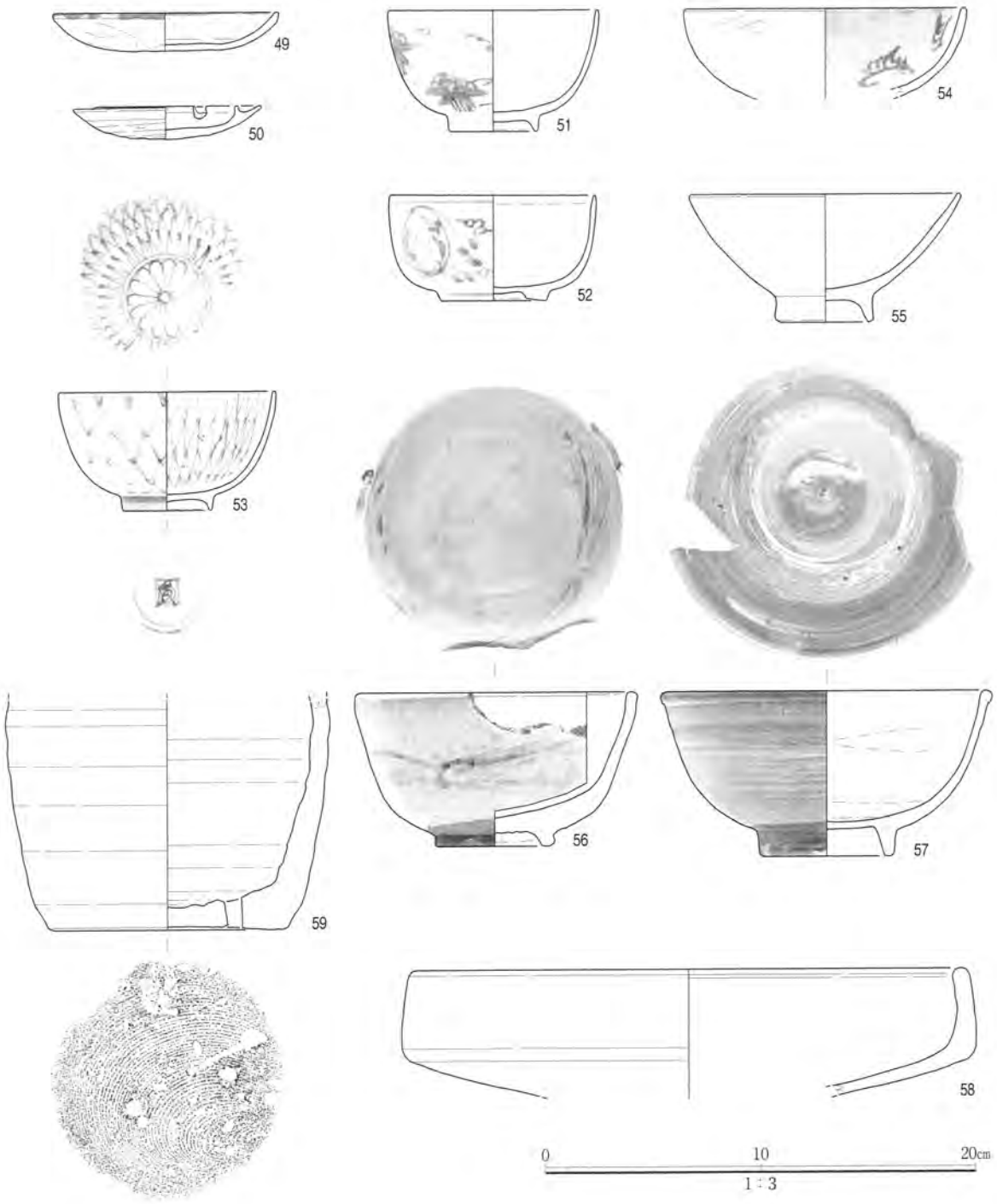


図41　SK08出土遺物実測図

層により整地したものとみられる。瓦とともに、T字口縁の信楽焼甕が出土しており、18世紀後半の遺構とみられる。出土遺物は78～89を図化した。備前焼擂鉢79、肥前磁器染付碗78、瓦80～88、鉄釘89が出土している。80～82は三巴文軒丸瓦、83～86は菊丸瓦、87・88は唐草文軒平瓦である。鉄釘89は残存幅1.0cm、残存長4.0cm、残存厚0.5cmである。

出土瓦の中に菊丸瓦が一定量含まれることから、菊丸瓦を用いる瓦葺き建物があったことが想定される。こうした重量のある瓦屋根を支える下部構造としては、今回の調査で検出した遺構の中では、礎石c・礎石eの建物が候補としてあげられる。

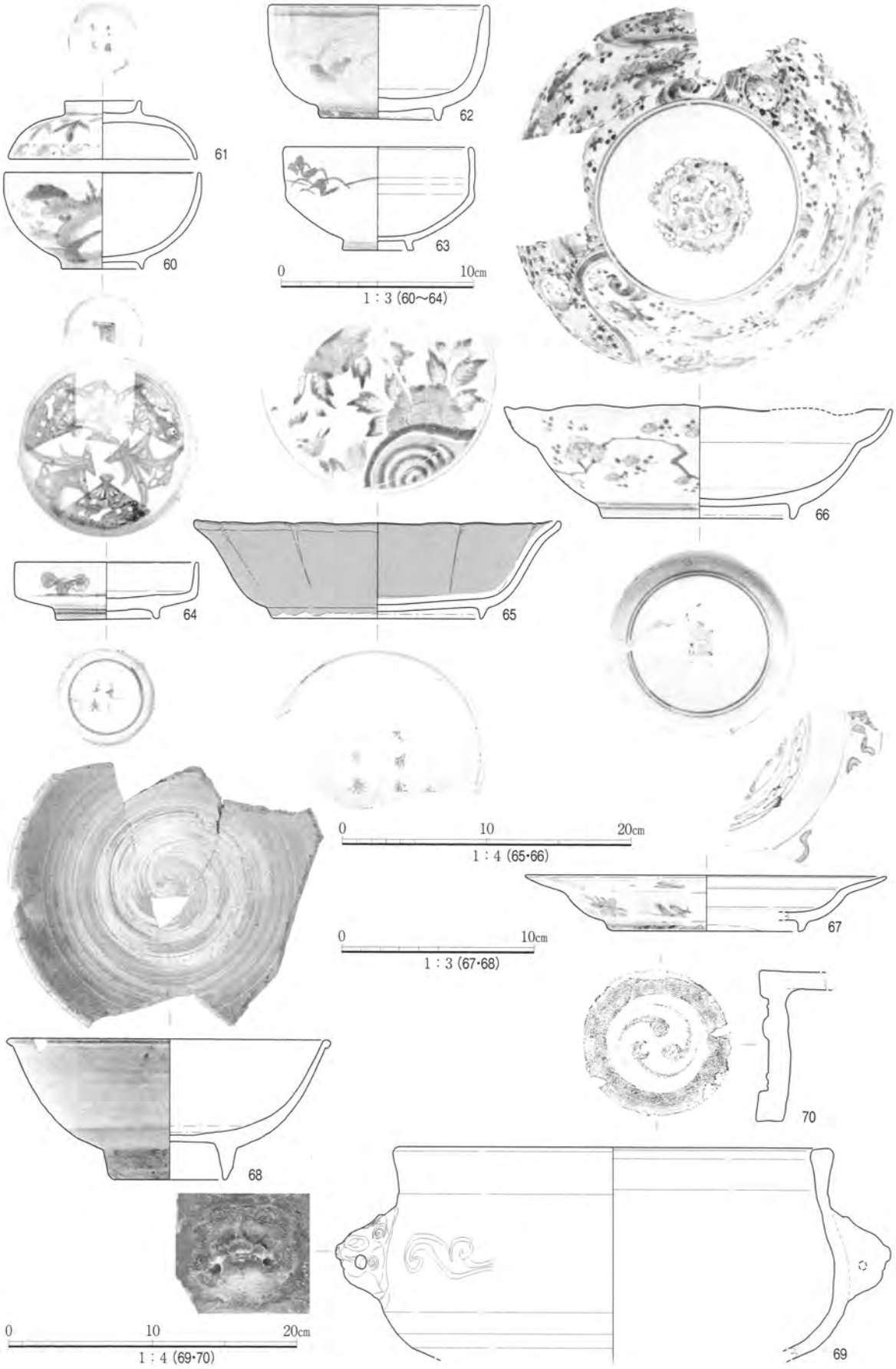


図42　SK20出土遺物実測図

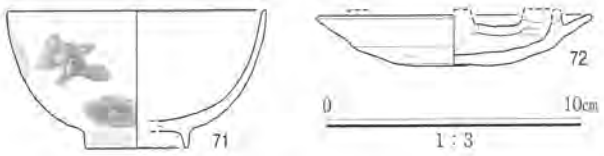


図43　SK21出土遺物実測図

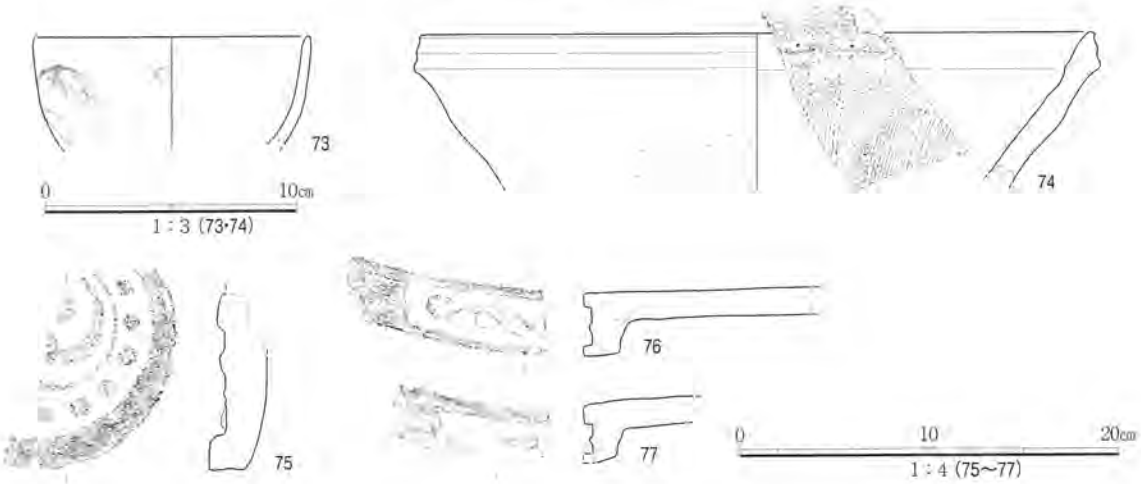


図44　SK23出土遺物実測図

南第２層上面では、礎石②・③、SK34・37、SP35を検出した。礎石②・③は約40cm大の花崗岩で上面が比較的平らなことから礎石の可能性がある。SK34は東西0.70m、南北0.43m、深さ0.05mの浅い土壙、SK37は東西0.50m以上、南北0.70m、深さ0.17mの土壙である。SP35は直径0.15～0.17mの小穴である。

c)地層出土の遺物(図47・48)

第９層からは遊離資料ではあるが須恵器杯91が出土した。第8a層からは中国産磁器青花碗92が出土した。第8b層からは、備前焼鉢94、肥前陶器碗93が出土しており、17世紀前葉の様相を示す。第５層からは、中国産磁器95・96、肥前陶器97、上野高取焼大平鉢98が出土した。95は青磁の輪花皿で、SX47出土の18・19と類似することから、本来はこれらとセット関係にあったものと推定される。96は色絵染付皿、97は鉄絵壺である。99は第４層から出土した土師器灰器である。第３層からは中国産とみられる白磁の小碗101が出土した。このほか、詳細な出土層位は不明であるが、第４層以下の地層から須恵器杯100が出土している。

南第10層から李朝白磁皿102、瀬戸美濃焼陶器小碗103、桐文の飾瓦104が出土した。102は見込みおよび畳付けに目跡が残り、103は底部に糸切痕が確認できる。南第４層からは、中国産磁器青花碗105、肥前陶器溝縁皿107・大皿106が出土した。

d)深掘りトレンチ(図６・７、図版１下)

第10層の堆積状況を確認するため、調査区北部に深掘りトレンチを設定した(図７)。TP+0.40m付

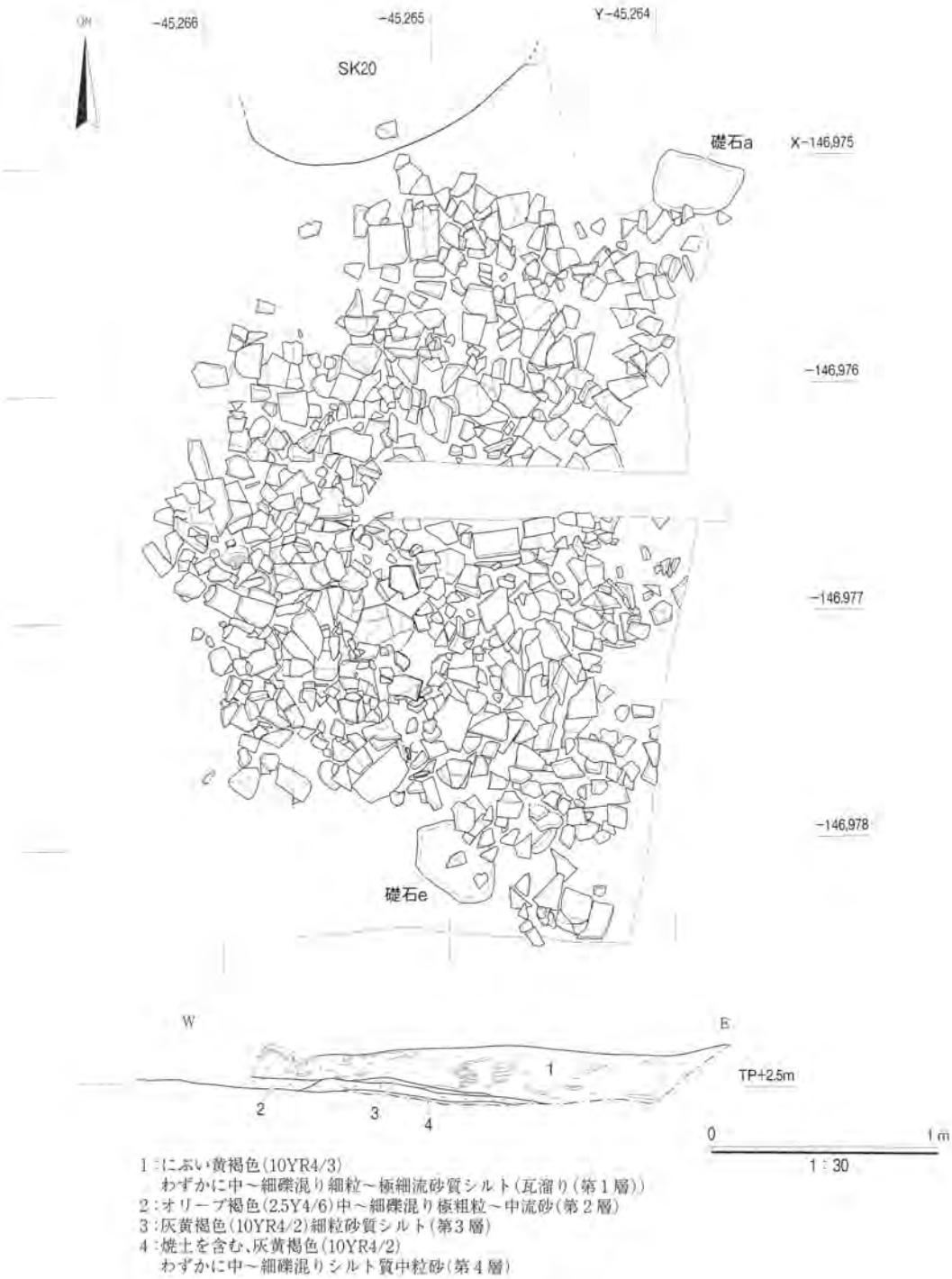


図45　瓦溜り平・断面図

近まで人力により掘り下げ、地層断面図を作成した。第10層上部は粗粒～中粒砂を主体として礫をまばらに含むという特徴から、後浜堆積物といえる。これより下位の地層には、平行葉理や平板状斜層理が認められる。平板状斜層理の流向は、S16°E～S25°Eである。

TP+0.6m付近で湧水層に達したため、TP+0.40mより下位については重機によりTP−0.70m付近まで掘削した。TP−0.30m～0.50mは中礫主体の礫層で鉄分の沈着が顕著に見られた。TP−0.50m～0.70mは細礫主体の礫層であった。

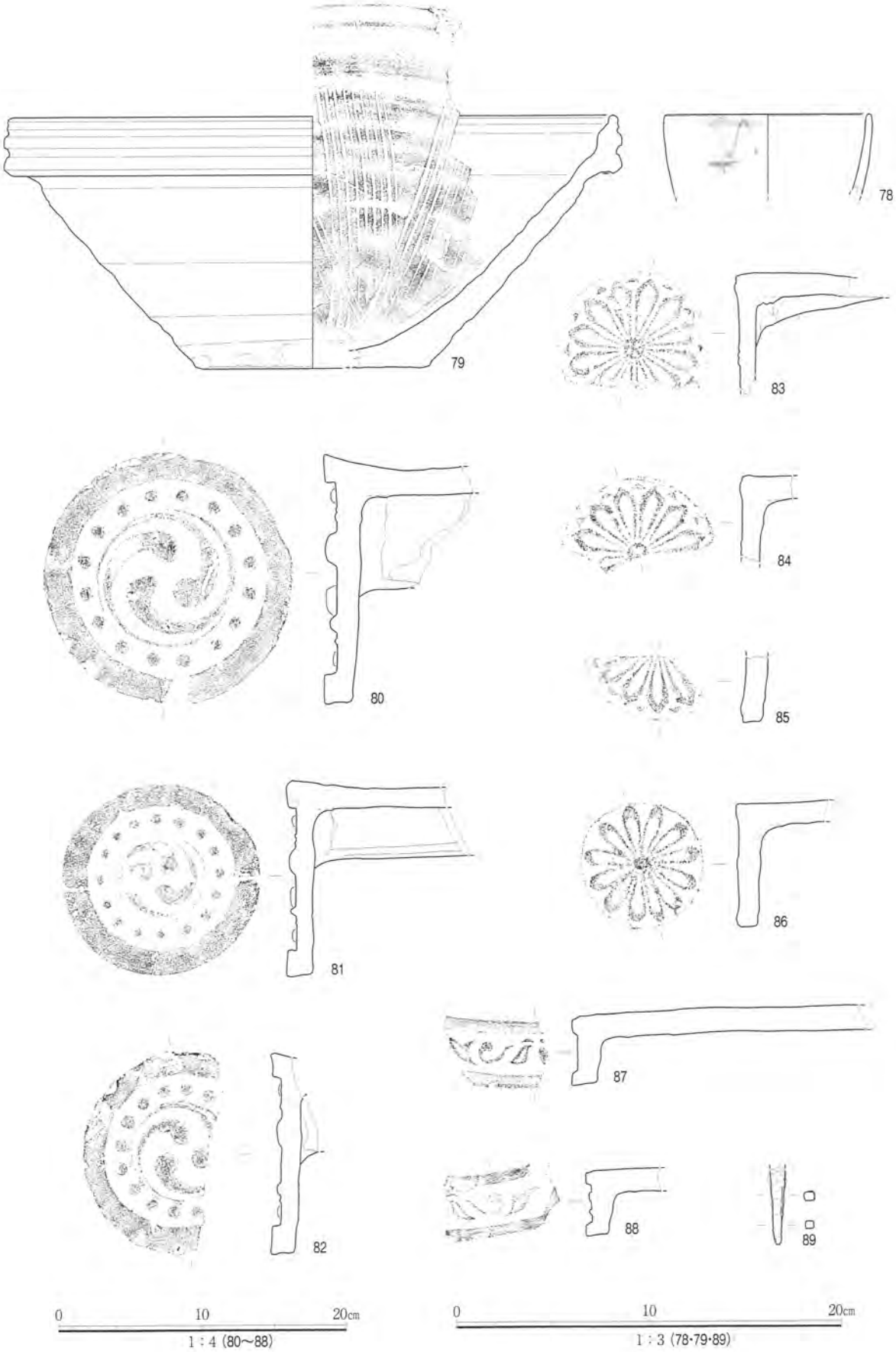


図46　瓦溜り出土遺物実測図

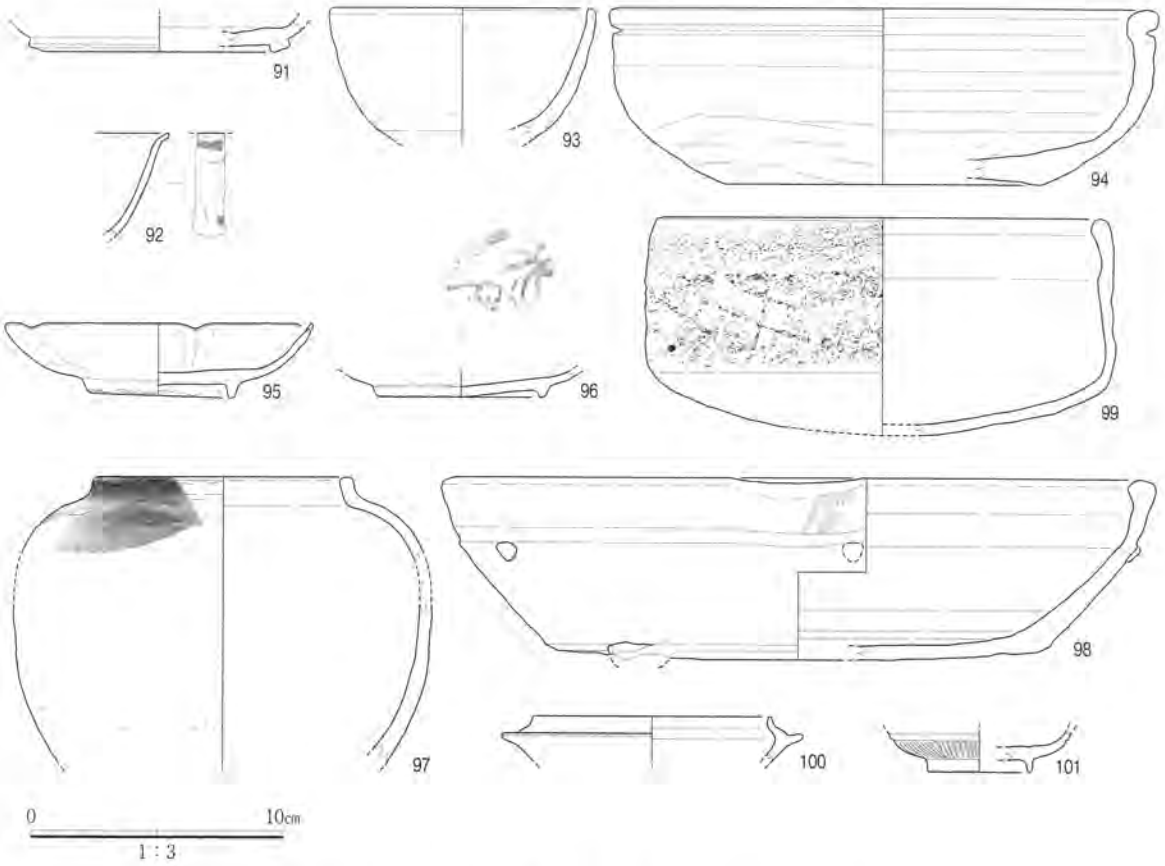


図47　地層出土遺物実測図

第９層(91)・第8a層(92)・第8b層(93・94)・第５層(95～98)・第４層(99)・第４層以下(100)・第３層(101)

3)まとめ

今回の調査では、大坂ノ陣に伴う焼土を含む整地層が確認されたほか、これよりも下位の第９層上面でSP83・88、第10層上面でより柱穴の可能性が高いSP73を検出しており、豊臣後期の建物の存在を示す遺構を確認することができた。従来、豊臣期における城下町の範囲は唐物町付近までと推定されていたが、近年の調査により、これよりも南側で大坂ノ陣に伴うとみられる焼土層が確認されている。今回の調査成果は、HB13－１次調査の成果と合わせて、豊臣期の城下町が現在の長堀通を越えて南側にまで及んでいた可能性を示すものといえる。とはいえ、長堀通以南については、面的な広がりをもって開発が行われていたかどうかは現状では不明である。今回の調査地は堺筋に面していることから、交通路の周辺のみ先行して開発が進んだことも推定される。

徳川期については、南端部とこれよりも北側で整地層の様相が異なることから、屋敷地の境界があった可能性があり、またこの境界が豊臣期に遡る可能性についても指摘した。特筆すべき遺構としては礎石c・eがあげられる。礎石の大きさや据付け穴の状況から、比較的立派な建物が想定される。徳川期には、調査区南端部を除く北側は同一の敷地内の可能性が高いと推定されることから、堺筋に面した角地の広い屋敷地にそうした建物があったことが推定される。

今後の調査により、豊臣期における長堀通以南の様相や、堺筋周辺の開発のあり方などについて、

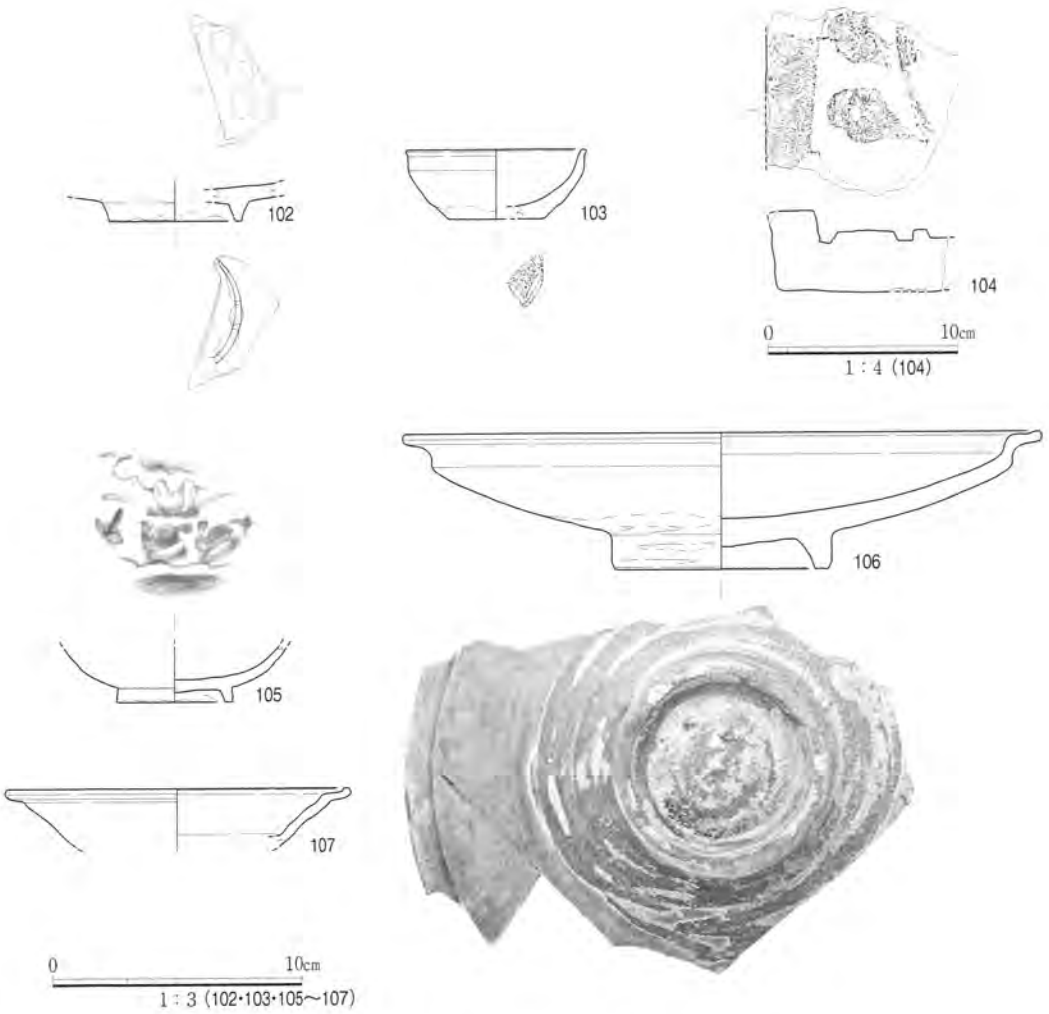


図48　南整地層出土遺物実測図
南第10層（102～104）・南第４層（105～107）

明らかになっていくことを期待する。

引用・参考文献

大阪文化財研究所2014、「中央区東心斎橋一丁目50－１における建設工事に伴う発掘調査（HB13－１）報告書」

趙哲済2014、「難波砂州北部～天満砂州南端部の表層地質に関する覚え書」：『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、pp.23－36

調査区西壁地層断面
（南東から）

調査区西壁地層断面
（北東から）

第10層
深掘りトレンチ
北壁・西壁地層断面
（南東から）

第10層上面遺構全景
（北から）

第8a層上面遺構全景
（北から）

第５層上面遺構全景
（北から）

SP51・52断面
（北東から）

第４層上面遺構全景
（北から）

第２層上面遺構全景
（北から）

中央区高津三丁目７－１他９筆における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(KD14－１)報告書

調査個所	大阪市中央区高津3丁目7－1他9筆
調査面積	136㎡
調査期間	平成26年8月25日～9月9日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、田中裕子

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は近世の集落遺跡である高津3丁目所在遺跡に位置する。調査地の西側には1740(元文5)年に建設された天王寺村銭座、その廃止後の1752(宝暦2)年に建設された「高津(天王寺)御蔵」跡が存在する。これまでに高津御蔵跡ではNP05－1・KD07－1次調査が行われており、中世の湿地性堆積層と近世の作土層や整地層が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006・2009]。またKD07－1次調査地では、19世紀の廃棄土壙からベンガラ生産に関わる土師器焙烙がまとまって出土している。

当該地では大阪市教育委員会が行った試掘調査において現地表下1.3m以下で近世前期と考えられる遺構面・遺物包含層が検出された。そのため、建設工事に先立ち、本調査を実施する運びとなった。調査区は敷地西北部に東西8m、南北17mの136㎡で設置した。2014年8月25日より着手し、重機で近代・現代の盛土を除去し、近世以下の各層を人力で調査した。遺構や遺物の検出を行い、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行ったのち、9月9日に現地における作業を完了した。

基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の成果

i)層序(図3・4)

調査地周辺の標高は3.0～2.5mで、西に向かって低くなる地形をしている。

本調査区では現地表下3.0mまでの地層を観察し、第0～8層に区分した。

第0層：最大層厚152㎝、レンガ・コンクリートを含む現代盛土層である。

図1　調査地位置図

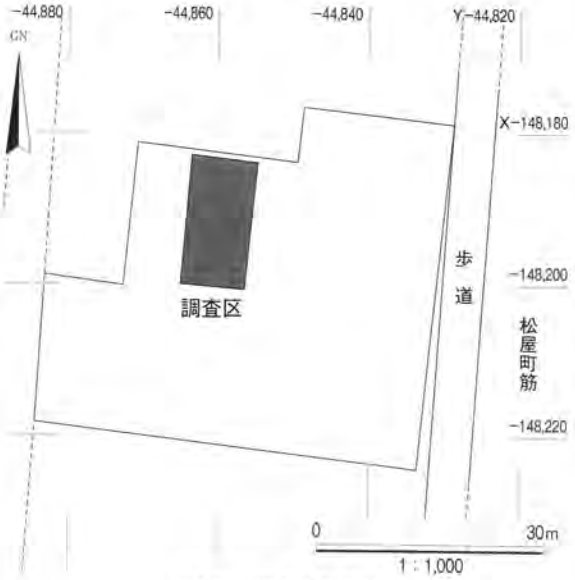


図2　調査区配置図

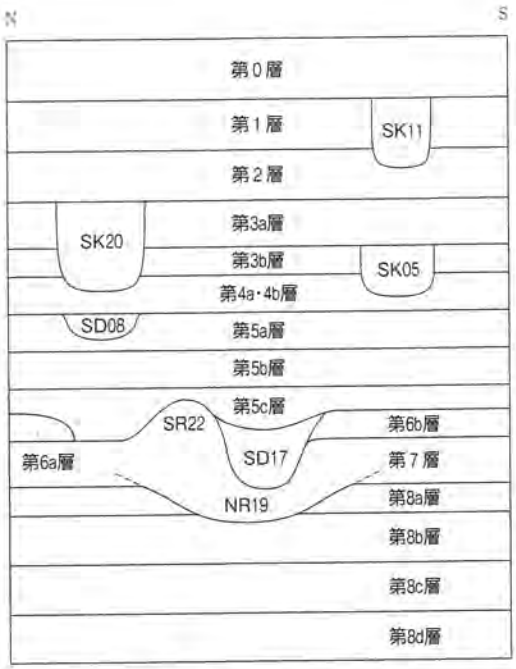


図3　遺構と地層の関係図

第1層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒～細粒砂からなる、近代の盛土層である。層厚4～72cmである。レンガ・ガラスを含む。

第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂混りシルト質中粒砂からなる、幕末～明治初期の整地層である。層厚16～60cmである。焼継のある肥前磁器広東碗や瀬戸美濃焼磁器、ヨーロッパ産陶器などを含む。本層の上面よりSK11・13などバイガイの廃棄土壙が検出された。

第3層：18世紀後葉～19世紀前半の盛土層で、赤色顔料の付着した土師器焙烙が大量に出土した。第3a・3b層に分けることができる。

第3a層：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂からなり、層厚8～56cmである。

第3b層：暗赤褐色(2.5YR3/4)シルトからなり、層厚15～40cmである。

第4層：第5層の耕作地を埋め立てて調査地周辺を整地した際の盛土である。第4a層と第4b層に分けることができる。第4a層から肥前磁器染付碗などが出土し、18世紀中～後葉に属する。

第4a層：黄褐色(10YR5/6)中粒～細粒砂からなり、層厚2～58cmである。

第4b層：黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂からなり、層厚8～32cmである。後述する第7層に由来するとみられる。

第5層：近世の作土層で第5a～5c層に分けることができる。肥前磁器染付碗、巴文軒丸瓦などを含み17世紀～18世紀前半に属する。

第5a層：褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト～シルトからなり、層厚は12～24cmである。下面で人や偶蹄類の踏込が検出された。

第5b層：黒褐色(10YR2/2)細粒砂質シルトからなり、層厚8～24cmである。

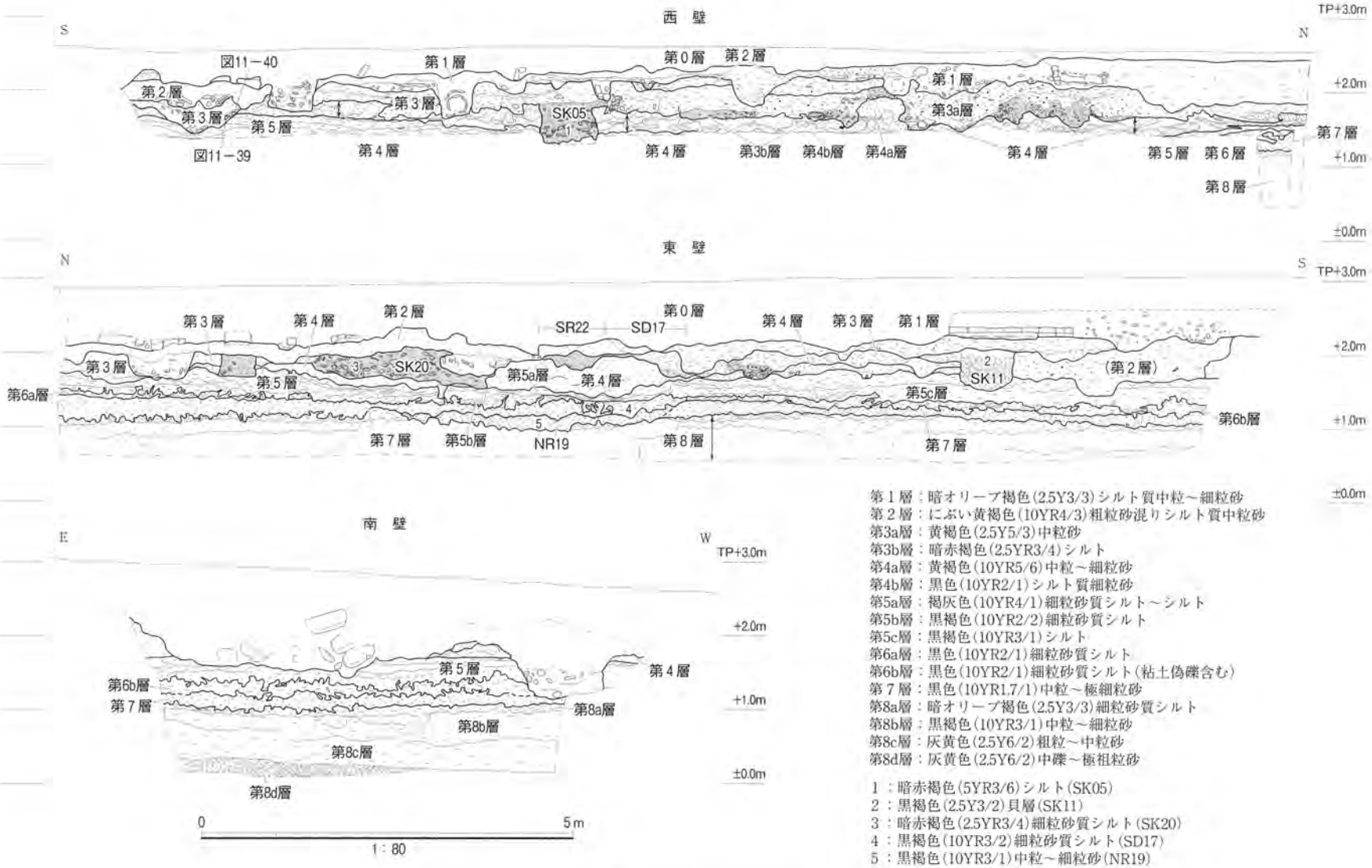
第5c層：黒褐色(10YR3/1)シルトからなり、層厚4～8cmである。

第6層：近世の作土層であり、調査区北部に堆積する第6a層と調査区南部に堆積する第6b層に分けることができる。出土遺物はないが層位関係から、17世紀頃の作土層といえる。第6b層の上面からSD17が掘り込まれており、その北側には第7層を掘り残した畦畔SR22がある。

第6a層:黒色(10YR2/1)細粒砂質シルトからなり、層厚10cmである。上面からの踏込が顕著である。

第6b層：黒色(10YR2/1)細粒砂質シルトからなり、層厚5～15cmである。偽礫を含み、あまり撹拌されていない。

第7層：黒色(10YR1.7/1)中粒～極細粒砂からなり、層厚4～38cmの湿地性堆積層である。植物片が混じる。上部で17世紀後半の肥前陶器とみられる陶胎染付火入34が出土したが、上層から踏み込まれた可能性もある。また第5・6層の作土層からは瓦器椀などが出土しており、耕作によって本層



第１層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒～細粒砂
第２層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂混りシルト質中粒砂
第3a層：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂
第3b層：暗赤褐色(2.5YR3/4)シルト
第4a層：黄褐色(10YR5/6)中粒～細粒砂
第4b層：黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂
第5a層：褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト～シルト
第5b層：黒褐色(10YR2/2)細粒砂質シルト
第5c層：黒褐色(10YR3/1)シルト
第6a層：黒色(10YR2/1)細粒砂質シルト
第6b層：黒色(10YR2/1)細粒砂質シルト(粘土偽礫含む)
第７層：黒色(10YR1.7/1)中粒～極細粒砂
第8a層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルト
第8b層：黒褐色(10YR3/1)中粒～細粒砂
第8c層：灰黄色(2.5Y6/2)粗粒～中粒砂
第8d層：灰黄色(2.5Y6/2)中礫～極粗粒砂

１：暗赤褐色(5YR3/6)シルト(SK05)
２：黒褐色(2.5Y3/2)貝層(SK11)
３：暗赤褐色(2.5YR3/4)細粒砂質シルト(SK20)
４：黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルト(SD17)
５：黒褐色(10YR3/1)中粒～細粒砂(NR19)

図４　西・南・東壁地層断面図

から巻き上げられた可能性もある。本層の堆積は遅くとも中世以降、近世初頭頃までは湿地であったといえよう。

第８層：海成堆積層であり、本調査地の地山層である。遺物の出土はない。第8a ～8d層に分けることができる。第8c・8d層は調査区南部に設置した深掘トレンチで確認した。上方細粒化している。

第8a層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルトからなり、層厚５～12cmである。植物根の痕跡が顕著である。

第8b層：黒褐色(10YR3/1)中粒～細粒砂からなり、層厚10～30cmである。

第8c層：灰黄色(2.5Y6/2)粗粒～中粒砂からなり、層厚40cm以上である。

第8d層：灰黄色(2.5Y6/2)中礫～極粗粒砂からなり、層厚20cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．中世～近世(図５)

NR19　第７層内の遺構で、幅2.7m、深さ0.2mの東から西へ流れる流路である。埋土は黒褐色(10YR3/1)中粒～細粒砂である。流路底には足跡が見られた。出土遺物はない。検出層位から中世～近世に属するとみられる。

ｂ．近世(第6b層上面：図６)

SD17　第6b層上面で検出された幅1.6m、深さ0.3m、長さ5.0m以上の東西方向の溝である。埋土は黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトからなる。溝の北側には同じく東西方向の畦畔SR22がある。出

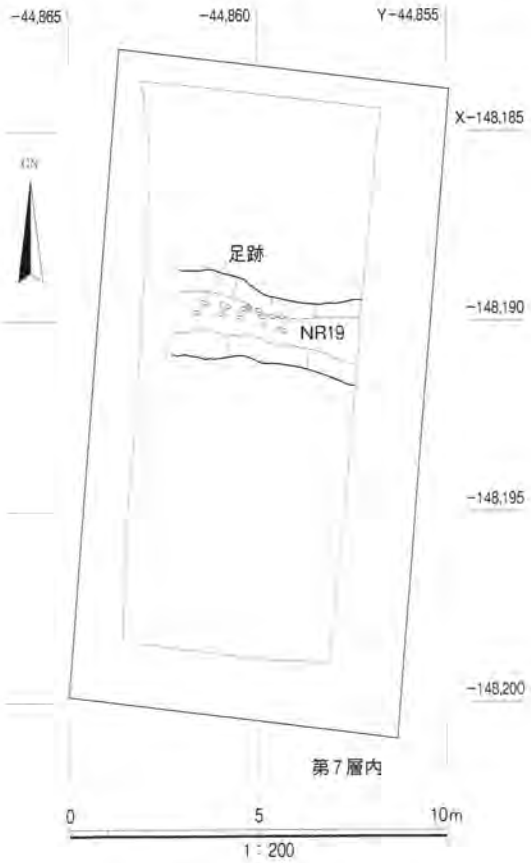


図５　中世～近世の遺構平面図

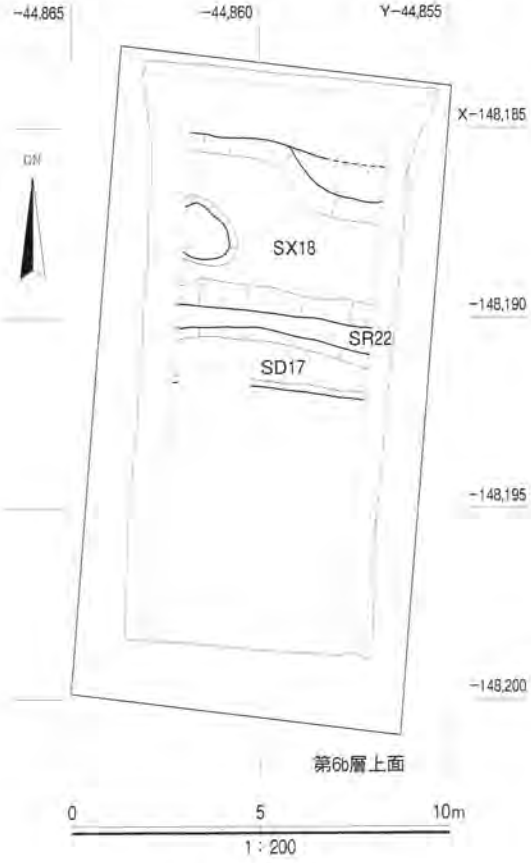


図６　近世の遺構平面図

土遺物は肥前陶器鉢や近世の丸瓦・平瓦のほか、須恵器甕などが混入する。

SR22　幅1.0m、高さ0.2mの東西方向の畦畔で、第７層を掘り残す形で形成された第６層下面遺構である。上面には足跡が無数に見られた。

SX18　SR22の北側に広がる浅い窪みで、幅4.5m、下面には全体的に足跡が広がっていた。埋土は第5c層で、黒褐色(10YR3/1)シルトからなる耕作土である。18世紀代の肥前磁器染付碗や近世の平瓦が出土したほか、須恵器甕・瓦器椀が混入する。

c．近世(第４層下面；図７・９)

第４層の下面で溝状の落込みが検出された。

SD08　幅0.8m、深さ0.1m、長さ9.0mで蛇行する。第4a層とした直径約30cmの砂の偽礫が検出された(写真１)。調査地周辺を埋め立てる際の盛土の単位を表しているといえよう。出土遺物は丸瓦１のほか、土師器皿・丹波焼甕・軟質施釉陶器灯明皿などで、瓦器椀が混入する。１は完形である。これらの遺物は18世紀中～後半のものである。

写真１　SD08の埋土

第４層は第５層の耕作地を埋め立てて整地した際の盛土である。調査地周辺は妙智焼後の1733(享保18)年に新地開発が行われ、1734(享保19)年に高津入堀川が掘削されている。SD08は水田を埋め立てる際の排水用として掘削された溝か土地の低い部分であったとみられる。高津入堀川掘削後の開発に係るものであろうか。

d．近世(第3a・3b層上面；図７～９)

第3a層上面および第3b層上面から赤色顔料が付着した焙烙が大量に廃棄された井戸SE07および土壙SK01・03～06・09・20を検出した。この中でSK20より出土した焙烙に付着する赤色顔料に対し蛍光X線分析を実施したところ、鉄を主成分とすることが分かった。赤色顔料はベンガラと考えられ、これらの廃棄土壙はベンガラ生産に関わる可能性が高い。

そのほか第３層上面の遺構としてSK12・14・15を報告する。

SE07　調査区中央部に位置する直径1.0m、深さ1.7mの井戸である。井戸の底から木質が検出され、曲物の井戸側を備えていた。曲物内側の埋土は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルトで機能時堆積層である。曲物の外側は地山層を用いて井戸側を固定した層である(図８－第６層)。その上部は廃棄時の堆積層で、赤色顔料が付着した焙烙片を含む(図８－第３・４層)。さらに上部は貝類を廃棄した層が検出された(図８－第１・２層)。この貝類廃棄層はSK06とする。

出土遺物は磁器では中国産磁器２・肥前磁器３・４・瀬戸美濃焼磁器５、陶器では関西系陶器、軟質施釉陶器６、また明石擂鉢・赤色顔料の付着する土師器焙烙・鉄釘・鉛の板材である。２は青花鉢

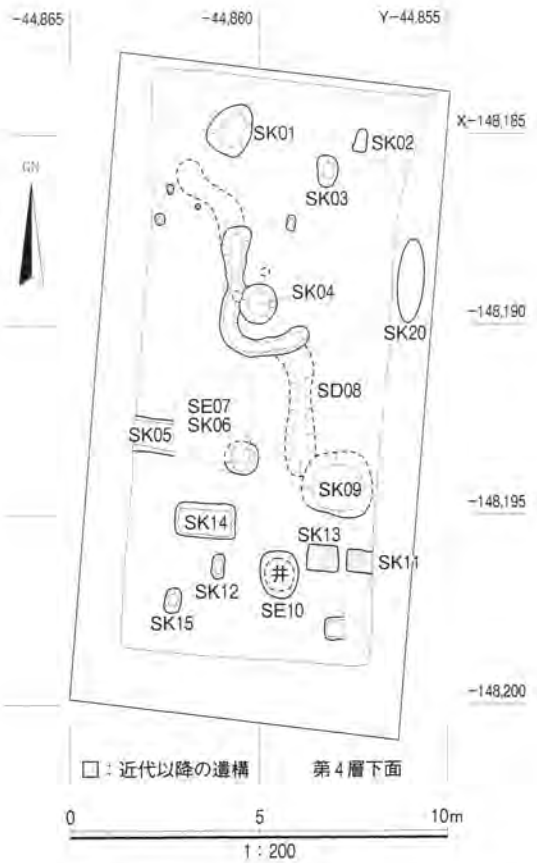


図７　近世・近代の遺構平面図

図８　SK06・SE07遺構断面図

である。３は染付皿で低部内面が蛇の目釉剝ぎされ中央にコンニャク印判を有する。４は白磁碗で輪花である。５は染付の端反碗で、瀬戸美濃焼磁器でもやや古手の様相を示す。６は壁掛式の灯明具である。把手の部分に判読不明であるが刻印が見られる。これらの遺物は18世紀後葉～19世紀第２四半期までのものであろう。

SK01　東西1.1m、南北1.4m、深さ0.3mの楕円形の土壙である。埋土は赤色(10R4/8)シルトで、赤色顔料が付着する焙烙の廃棄土壙である。出土遺物は肥前磁器染付碗や肥前陶器瓶類のほか、土師器焜炉・赤色顔料の付着した焙烙である。図示した遺物は土師器焜炉７である。

SK05　東西1.1m以上、南北0.9m、深さ0.5mの方形の土壙である。埋土は暗赤褐色(5YR3/6)シルトからなり、赤色顔料が付着した焙烙が多量に出土した。持ち帰った遺物はコンテナパット３箱分である。出土遺物は肥前磁器染付碗８・10・白磁仏飯具９のほか、関西系陶器土瓶や明石擂鉢、土師器焙烙などが出土した。土師器焙烙11・12はいずれもD類で、やや深い器形である。体部内面には赤色顔料が付着し、断面では浸み込みが確認できる。12には貫通しない２穴の把手がある。Db２類に属する[難波洋三1992]。18世紀後葉から19世紀前葉までの遺物を含む。

SK09　東西1.9m、南北1.8m、深さ0.3mの楕円形の土壙である。埋土は赤(10R4/6)～にぶい赤褐色(2.5YR4/4)シルトからなり、コンテナパット３箱分以上の赤色顔料が付着した焙烙が出土した。出土遺物は肥前磁器染付皿・青磁染付碗・白磁蓋・色絵碗のほか土師器焜炉・焙烙である。図示した遺物は土師器焙烙13・14である。13・14ともにD類に属し、外面には赤色顔料が液だれをしたような

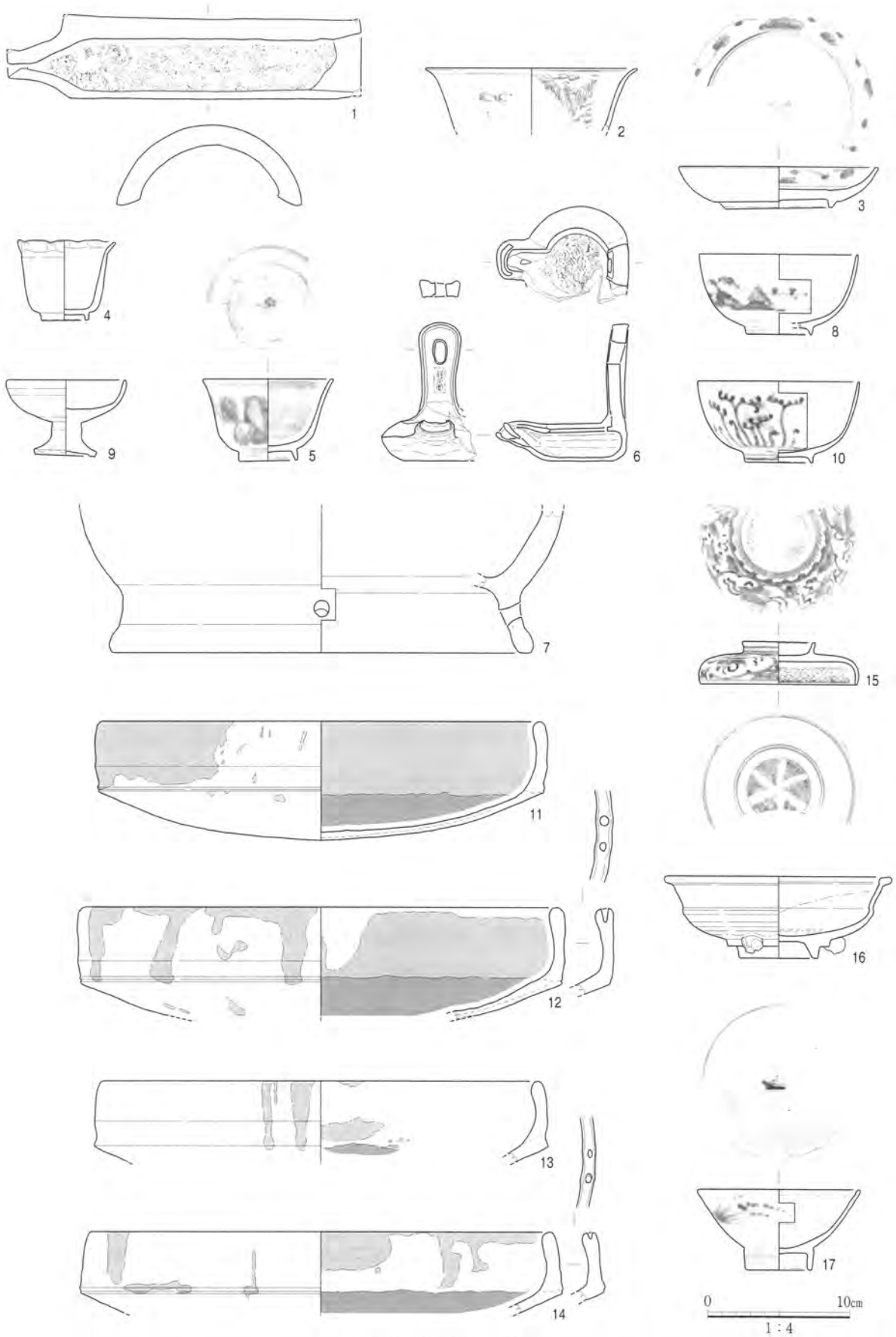


図９　遺物実測図（１）

SD08（１）、SE07（２～６）、SK01（７）、SK05（８～12）、SK09(13・14)、SK04(15・16)、SK12(17)

痕跡が残る。14は貫通しない２穴の把手がある。

SK20　トレンチ東壁の法面で検出した南北2.4m、深さ0.4m、東西長不明の土壙である。第3a層上面から掘り込まれている。埋土は暗赤褐色(2.5YR3/4)細粒砂質シルトで、赤色顔料が付着した焙烙が大量に廃棄されていた。出土遺物は肥前磁器青磁碗や関西系陶器碗、堺擂鉢、平瓦のほか上記の焙烙である。

そのほかSK03(東西0.5m、南北0.8m、深さ0.1m)、SK04(直径1.0m、深さ0.3m)も同様の性格のものである。SK04からは赤色顔料の付着した焙烙がコンテナ２箱以上、また肥前磁器染付蓋15や鉄釉の肥前陶器香炉16など18世紀末～19世紀前葉の遺物が出土している。

上記の赤色顔料が付着した焙烙を廃棄した土壙はいずれも18世紀後葉～19世紀前葉の遺物を含んでいる。土師器焙烙はいずれもD類で深いものと浅いものが共伴している。土壙の掘込み面も第3a層上面からと第3b層層中のものがあり、時期差がうかがえるが、陶磁器類からは明確な違いはなかった。

SK12　東西0.3m、南北0.7m、深さ0.1mの楕円形の土壙である。17は肥前磁器染付碗である。広東碗で焼継がある。19世紀前半に属する。

SK14　東西1.6m、南北0.9m、深さ0.6mの方形の土壙である。埋土の下部は第８層由来の偽礫を主体とし、上部に遺物がまとまって廃棄されていた。壁面、底面とも垂直に整えられており、本来穴蔵であった可能性もある。出土遺物は肥前磁器染付広東碗18・青磁染付碗・色絵皿、関西系陶器灯明皿19・秉燭、軟質施釉陶器灯明受皿、丹波焼水甕、土師器焙烙(赤色顔料付着)、土人形、土人形の型、丸瓦・平瓦・桟瓦、スラグである。18世紀末から19世紀初頭の遺物を含む廃棄土壙である。

SK15　東西0.4m、南北0.7m、深さ0.1mの楕円形の土壙である。出土遺物は肥前磁器染付碗・皿、関西系陶器土瓶・土鍋、土師器皿、巴文軒丸瓦20である。これらの遺物は18世紀中葉頃に属するが、18世紀末～19世紀の廃棄である。

e．近代以降(図７・８・10)

SE10　直径1.2m、深さ1.8m以上の井戸である。井戸側には井戸瓦が用いられており、井戸内からは肥前磁器染付広東碗や瀬戸美濃焼磁器染付碗、瀬戸美濃焼陶器馬の目皿などのほか、碍子、ガラス製品21～23、ホーロー製品24などが出土した。21は無色透明でニッキ水の瓶である。22は口縁が広がった円筒形で、食品瓶とみられる。淡緑色を呈する。23は無色透明で薬品瓶の可能性がある。24はホーロー製マグカップで、口唇部内外面が青く、底部外面にK.E.R.SWEDENの銘がある。1893年創業のスウェーデンKOCKUMS社の製品とみられる。19世紀代～20世紀前半までの遺物を含み、戦前頃に放棄された井戸といえよう。

SK02　東西0.4m、南北0.6m、深さ0.3mの楕円形の土壙である。埋土は黒褐色(10YR2/2)細粒砂質シルトで埋め戻されていた。出土遺物は磁器では肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器25、陶器では関西系陶器26～29、軟質施釉陶器30、また土師器皿31、ガラス製品32・33などがある。25は型紙摺である。26は関西系陶器皿で「賄」の字がある。同じ文様を持つ皿は計３枚出土している。27は蓋で鉄釉で模様を施す。28は緑釉の小瓶である。29は窯道具で底部に糸切があり、中央部に焼成前の穿孔がある。30は小皿で、黄色味がかった透明釉を施釉し、口縁に緑釉を配している。底部は糸切がある。31は土師

器皿で内外面に墨書がある。底部内面は「清水」、口縁部外面は「石山中□」とある。32は化粧瓶とみられ、無色透明で口縁部のみ摺りガラスになっている。33は1896(明治29)年に発売された丹平製薬株式会社の健脳丸容器である。これらの遺物は明治～大正時代に属し、近代の廃棄土壙である。

SK11　第２層上面で検出された東西0.7m以上、南北0.6m、深さ0.6mの方形の貝類廃棄土壙である。貝類はバイガイを主体とし、未成品や切断後の下半部が廃棄されていた。一部が破損した完成品もわずかにあるが詰め物の出土はなかった。バイゴマ製作における素材としての貝殻の選別・切断・研磨の諸工程が行われていたとみられる(写真２)［池田研2013］。そのほか若干の食糧残滓が見られる(註

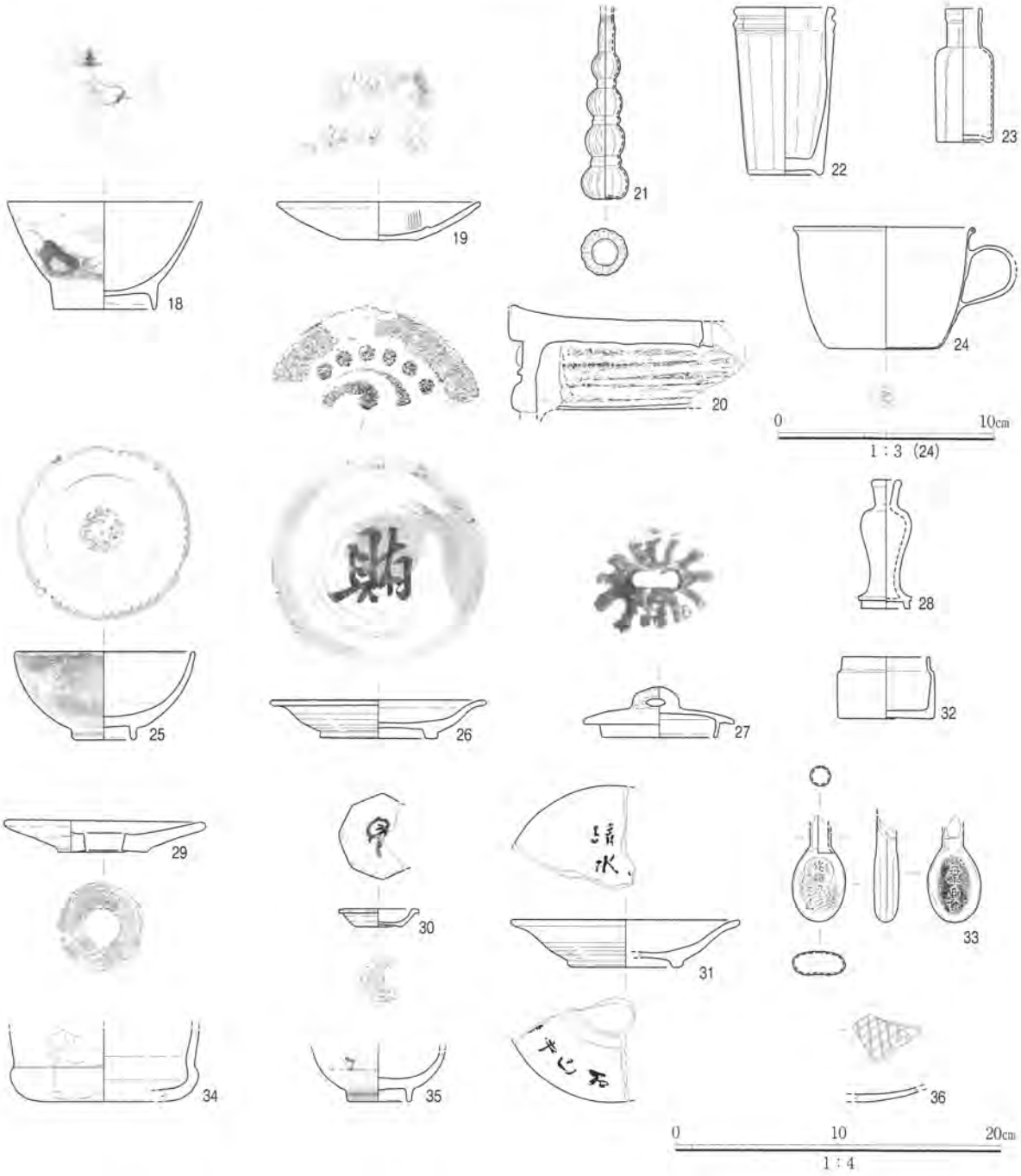


図10　遺物実測図(２)

SK14(18・19)、SK15(20)、SE10 (21～24)、SK02(25～33)、第７層(34)、第５層(35・36)

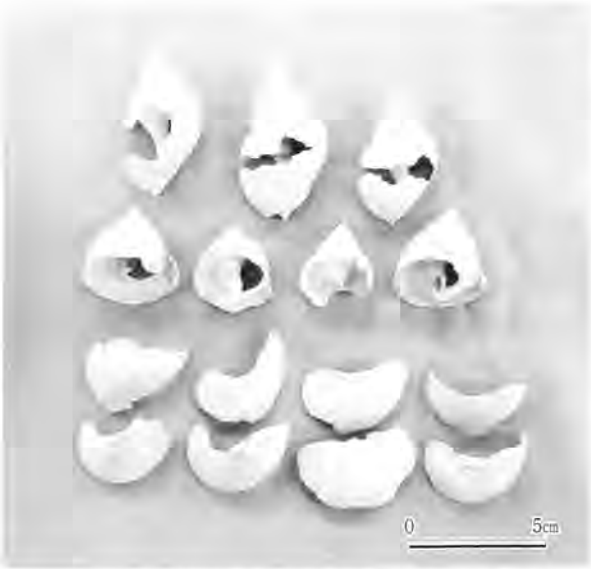


写真２　SK11出土のバイゴマの未成品と廃材

１)。検出層位の関係から本土壙は幕末～明治初期にかけてのものと考えられる。同様の貝類廃棄土壙はSK06・13がある。出土したバイガイはコンテナバット４箱分に及ぶ。

ｆ．各層出土遺物(図10・11)

第７層　34は17世紀後半に属する肥前陶器とみられる陶胎染付の火入である。本来、上位層に帰属する可能性がある。

第５層　35は肥前磁器染付碗である。一重網目文様をもつ。17世紀中～後葉に属する。36は瓦器椀の底部である。格子状のヘラミガキが見られる。混入品である。

第４層　37は肥前磁器染付碗で低部内面に蛇の目釉剝ぎを施す。38は肥前磁器染付蓋である。これらの遺物は18世紀中～後葉に属するとみられる。

第３層　肥前磁器39・40と肥前陶器41および土師器42～45を図示した。39は白磁碗である。40は染付小碗である。41は土瓶である。本層からは赤色顔料が付着した土師器焙烙が大量に出土している。42はD類の焙烙で口縁部外面に判読不明であるが、墨書が見られる。43は貫通しない把手を備える。浅い器形である。44・45は土師器焜炉である。赤色顔料が付着する焙烙とともに出土し、これらの焜炉にも赤色顔料がしみ込んでいた。上記の遺物は18世紀後葉～19世紀前半に属する。

第２層　中国産磁器46・47、関西系磁器48・49、関西系陶器50、ヨーロッパ産陶器51を図示した。46は青花鉢である。47は徳化窯産の白磁碗である。48は染付碗である。49は鉄釉の碗である。50は碗で、体部外面にはイッチン掛けで文様が施される。51はヨーロッパ産陶器皿である。プリントウェアでいわゆるにじみ手(Flown Blue)とみられ[小田木富慈美2013]、口縁部外面にピン跡がある。これらの遺物は幕末～明治時代初期に属する。

３)ベンガラ製作について

本調査地においてベンガラ製作に関わる廃棄土壙が検出された。出土した焙烙はコンテナバットで20箱に及ぶ。同様の遺構はこれまでに瓦屋町遺跡(WR08－１次)や本調査地と隣接する高津御蔵跡(KD07－１次)などで見つかっており、近世大坂におけるベンガラ生産については上記の報告書中に詳述されている[大阪市文化財協会2009]。

今回の調査で見つかった赤色顔料が付着した焙烙は18世紀後葉～19世紀前半に属する。いずれも大坂産とされるD類に属し、把手は貫通しない２穴を有する。把手を有しないものも存在する可能性はあるが、完形に復元できるものがないため、断言できない。底部は粘土を２層に張り合わせており、通常の焙烙より厚みを増しているようである。身は深いものと浅いものがある。口縁部外面には液だれをしたような痕跡が残り、内面の付着物が発泡していたように見える。焙烙の断面にまで赤色がし

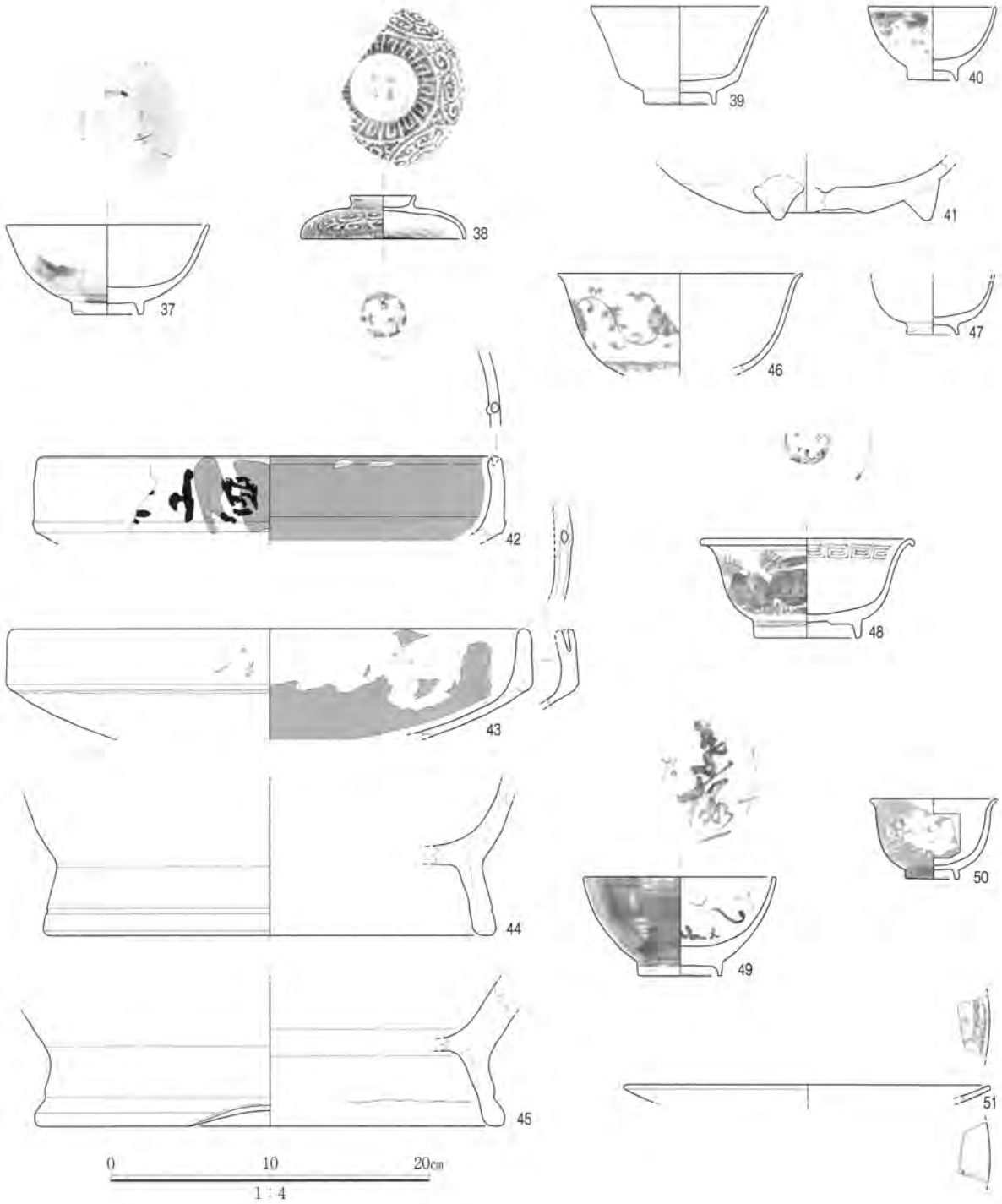


図11　各層出土遺物実測図

第4層(37・38)、第3層(39～45)、第2層(46～51)

み込んでおり、色調は暗赤褐色(7.5R3/2)～橙色(2.5YR6/8)まで様々である。

こうした様相は瓦屋町遺跡例により近いものであるといえよう。瓦屋町遺跡のベンガラは鉄廃材を原材料とする鉄丹ベンガラの可能性が指摘されている[大阪市文化財協会2009]。一方で高津御蔵跡のものは備中吹屋で主に生産されていたローハ(緑礬)ベンガラと関係する可能性も指摘されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。今回の調査で出土した大量の焙烙がどのようなベンガラ生産と関係していたのか、今後さらなる検討が必要である。

4）土地利用の変遷

本調査地は難波砂州に位置する[趙哲済2014]。周辺の調査成果を踏まえてみれば、海浜の砂地が中世には、植物の繁る後背湿地となっていったといえる。湿地であったが近隣の人の往来はあったらしく、調査区内からは瓦器椀などが出土している。おそらく調査地の東側の松屋町筋が街道(浜道)として機能していたためとみられる。その後、近世に入ると盛土がなされて耕作地としての利用が始まる。1724(享保９)年の妙知焼ののち、西高津村一帯が新地開発され、1734(享保19)年に高津入堀川の掘削が行われる。本調査地の第４層はこの後の盛土である。

高津新地では1740(元文５)年に設置され、1741(寛保元)年より一文銭を鋳造する銭座が置かれたが３年で廃止され、その後、1752(宝暦２)年には江戸幕府の米蔵である高津御蔵(天王寺御蔵)が設置される。この高津御蔵も1791(寛政３)年には難波御蔵と合併し廃止となる。調査区で見つかったベンガラ製作に関わる廃棄土壙は18世紀後葉～19世紀前半であり、高津御蔵廃止後のものである。調査地西方のKD07－１次調査地においてもベンガラ生産に関わる焙烙の廃棄土壙が見つかっている。本調査地では19世紀中葉にはベンガラ生産は終了したとみられ、幕末～明治時代初期の盛土の上からはバイゴマ製作に関わる廃棄土壙が検出されている。明治時代、松屋町筋に沿って寺院が集中する下寺町ではバイゴマを製造・販売する店が軒を連ねていたことが文献に記載されており[池田2013]、今回出土した資料はそうした業者の一つによって廃棄された可能性が高い。銭座の設置以降、城下町の郊外に位置し、高津入堀川の水運を利用できる調査地一帯は手工業生産の場となっていたといえる。

5）まとめ

本調査区では以下の成果が得られた。

・中世の湿地・近世の作土および盛土が検出され、難波砂州に位置する調査地周辺の土地利用が明らかとなった。

・近世の18世紀後葉～19世紀前半のベンガラ生産に係わる遺物が見つかった。近世大坂城下町の周辺部で行われていた手工業生産を考える上で重要な資料である。

・近代にはバイゴマ生産に関わる廃棄土壙が検出された。

註）

（１）貝類については土佐市教育委員会の池田研氏にご教示いただきました。感謝いたします。

引用・参考文献

池田研2013、「近世から近代にかけてのバイゴマ(独楽)製造について」：『大阪歴史博物館研究紀要』11号、pp.54－64

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2006、「日本橋２丁目所在遺跡発掘調査(NP05－１)報告書」：『平成17年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地

発掘調査報告書』、pp.33－35

2009、「高津御蔵跡発掘調査（KD07－1）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2007）』、pp.53－62

大阪市文化財協会2009、『瓦屋町遺跡発掘調査報告』、pp.1－70

小田木富慈美2013、「19世紀におけるヨーロッパ産陶器の受容－幕末～明治時代の大阪市内出土資料より－」：『大阪文化財研究所研究紀要』14号、pp.1－18

趙哲済2014、「難波砂州北部～天満砂州南端部の表層地質に関する覚え書」：『大阪上町台地の総合的研究』、pp.23－36

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」：『難波宮址の研究』第九、pp.373－400

NR19(東から)

SD17・SR22(西から)

近世・近代の遺構
(第3・2層;南から)

中央区森ノ宮中央一丁目９－17・９－21・９－23の各一部における
建設工事に伴う森の宮遺跡・大坂城跡発掘調査(MR14－１)報告書

調査個所	大阪市中央区森ノ宮中央1丁目9－17・9－21・9－23の各一部
調査面積	30㎡
調査期間	平成26年8月22日～8月29日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、谷﨑仁美

1)調査に至る経緯と経過

調査地は玉造筋の西側にあり、上町台地東縁の裾部に立地する。縄文～江戸時代の複合遺跡である森の宮遺跡の範囲内にあり、豊臣～徳川期には大坂城惣構の東南部に当る(図１)。

調査地一帯は豊臣～徳川期に大規模な整地が行われたことがわかっており、その下位では古代から中世の遺構や遺物が見つかっている。調査地の北に隣接するMR13－３次調査では、古代の溝、中世の水田、豊臣前期の建物・溝、豊臣後期の石垣など各時代の遺構が確認されている[大阪文化財研究所2014]。その北のMR12－２次調査でも中世から近世に至る各時代の遺物包含層と豊臣前期の遺構が検出されており、古墳時代から古代にかけての多数の遺物が出土している[大阪文化財研究所2013]。

当地において大阪市教育委員会が行った試掘調査で、地表下1.1m以下の深さで近世もしくはそれ以前の遺構面が検出されたため、本格的な発掘調査を行うことになった。調査区は敷地の東寄りに東西６m、南北５mの範囲で設定した(図２)。調査は８月22日に開始した。現地表下1.1mまで重機による掘削を行い、それ以下は人力で掘り下げた。本体工事の影響が及ぶのは現地表下2.2mまでであったが、湧水と悪天候による壁面の崩壊によって調査が困難となったため、地表下1.8～2.0mまで掘り下げ、遺構検出、地層の観察・記録を行った。調査の記録は、適宜に実測図の作成、写真撮影を行った。調査は８月28日に終了し、作業に係る機材の搬出は29日に行い、同日完全に撤収した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告書で用いた方位は世界測地系座標に基づく座標北を基準にした。標高はT.P値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

i)層序(図3・4)

第1層：浅黄(2.5Y7/3)～灰黄色(2.5Y6/2)粘土偽礫・シルト質極細粒砂偽礫混り細粒～極細粒砂の整地層である。層厚は58cmである。MR13－3次調査における第1c層に類似し、豊臣後期～徳川初期の年代が与えられるが、本調査で出土遺物はなかった。上面でSE101とそれに伴うSP102・103、土壙やSX104などの落込みを検出した。これらは17世紀後葉～近代のものである。

図3　地層と遺構の関係図

第2層：整地層を主体とする地層で、第2a～c層に細分する。第2a層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂の薄層とオリーブ黒(5Y3/1)～黄灰色(2.5Y6/1)粗粒～中粒砂が優勢の細粒～極細粒砂質シルトからなる整地層で、第2b層上面で検出した遺構の上半部を埋めていた。層厚は8～20cmである。上面で第1層で埋るSD201を検出した。MR13－3次調査における第2a層に類似する。

第2b層は、暗オリーブ灰(5GY4/1)～オリーブ灰色(10Y4/2)中粒～細粒砂混りシルト質粘土層や、黄褐色(2.5Y5/3)中粒～極細粒砂質シルト偽礫層、灰黄(2.5Y6/2)～淡黄色(2.5Y8/3)シルト質中粒～極細粒砂層、シルト偽礫・細粒～極細粒砂偽礫を含むにぶい黄(2.5Y6/4)～明黄褐色(2.5Y7/6)シルト質中粒～極細粒砂層、オリーブ褐(2.5Y4/4)～にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～極細粒砂質シルト層からなる整地層で、整地の単位が確認できた。上面で柱、礎石、SX202・203を検出した。層厚は西部で13cm、南部で30cmであった。MR13－3次調査における第2b層に類似する。

第2c層は粗粒～中粒砂偽礫を含む灰色(10Y5/1)細粒～極細粒砂質シルト層や、灰白色(10Y7/2)細粒～極細粒砂質シルト偽礫層、オリーブ黒色(10Y3/1)細礫混りシルト質粗粒～細粒砂層などからなる盛土層である。層厚は西部で12cm、南部で24cmであった。MR13－3次調査における第3層に類似する。

MR13－3次調査では第2層が豊臣前期、第3層が中世～豊臣前期の年代が与えられた。本調査では白磁の細片や煙管のほか須恵器や瓦が出土し、豊臣期以降の年代が与えられる。

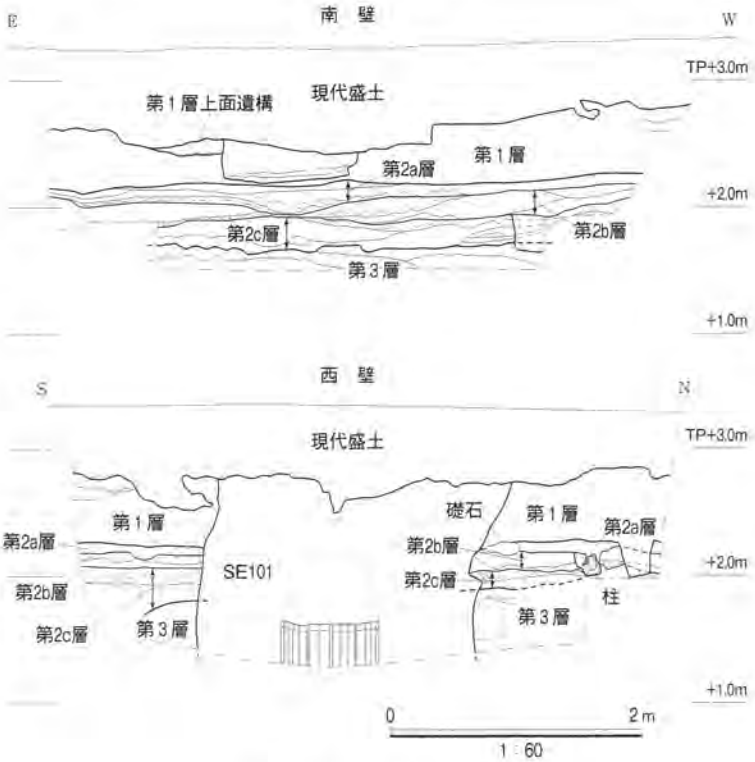


図4　調査区地層断面図

第3層：氾濫堆積層である。全体

の土色は灰(10Y4/1)～暗オリーブ色(5Y4/4)でシルト質中粒～極細粒砂層と極細粒砂質シルトの薄層が挟在する粗粒～極細粒砂層と中粒砂混りシルト質泥が互層になる。層厚は北西部で50cm以上、南部で20cm以上である。出土遺物はなかった。

ii)遺構と遺物

a．豊臣～徳川期(図4・5)

第2a層上面でSD201、第2b層上面で**柱跡**、**礎石**1基、**杭跡**、SX202・203を検出した。

柱は西壁際で検出した(図4・5)。柱は直径6cm、長さ10cmが残存していた。掘形は幅0.20m、深さ0.18mで、にぶい黄色(2.5Y6/3)極細粒～中粒砂層で埋まり、上部は第2a層で埋まる。

礎石は調査区西壁で検出した(図4)。幅0.26m、厚さ0.11mの花崗岩である。

SX202は南北長0.40m以上、東西長1.30m、深さ0.11mの不整形な落込みで、上部は第2a層で埋り、下部は黄灰(2.5Y5/1)～灰色(10Y4/1)粗粒砂を主体とする中粒～細粒砂質シルトで埋る。SX203は南北長0.18m以上、東西長1.10m、深さ0.11mの不整形な落込みで、埋土の状況はSX202と同様である。いずれも出土遺物はなかった。

SD201は幅0.28m、深さ0.30mの東西溝で、断面が逆台形を呈する。第1層で一気に埋る。出土遺物はなかった。

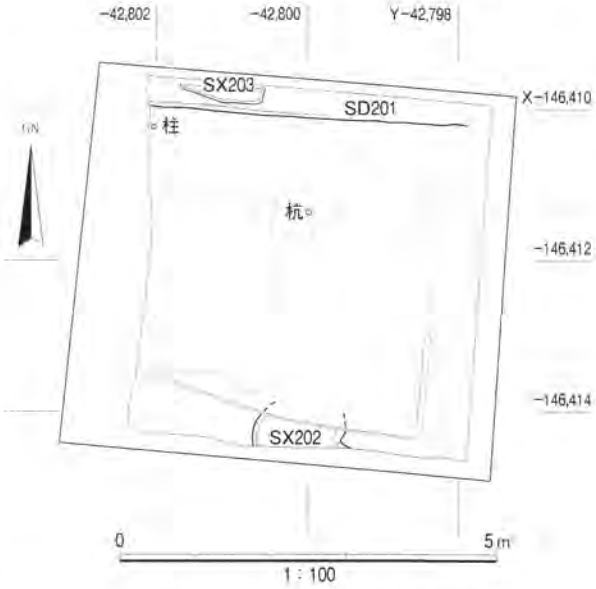


図5　第2a・b層上面遺構平面図

b．17世紀後葉～近代(図4・6～8)

第1層上面でSP102・103、SE101、多数の土壙、SX104を検出した。

SX104は南北長1.00m以上、東西長2.50m以上、深さ0.12mの隅丸方形の落込みである。中粒～極細粒砂偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒～極細粒砂で埋る。

遺物は1～10のほか、備前焼の小壺・擂鉢、瓦が出土した。1～3は土師器皿で、2は灯明皿に使用している。1は口径10.8cm、2は9.9cm、3は9.1cmで灰白色を呈する。4・5は土師器の焙烙である。4は積山分類のD類、5はE類の3もしくは4群に属する[積山洋1999]。6は備前焼の小甕で、内外面ともに赤褐色を呈する。7

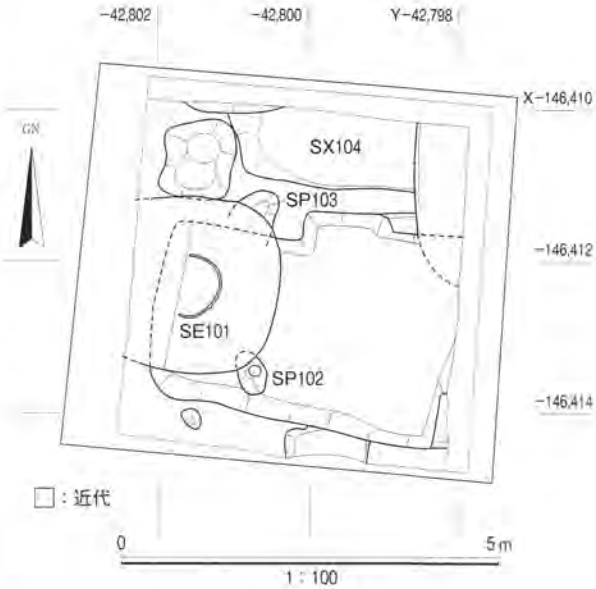


図6　第1層上面遺構平面図

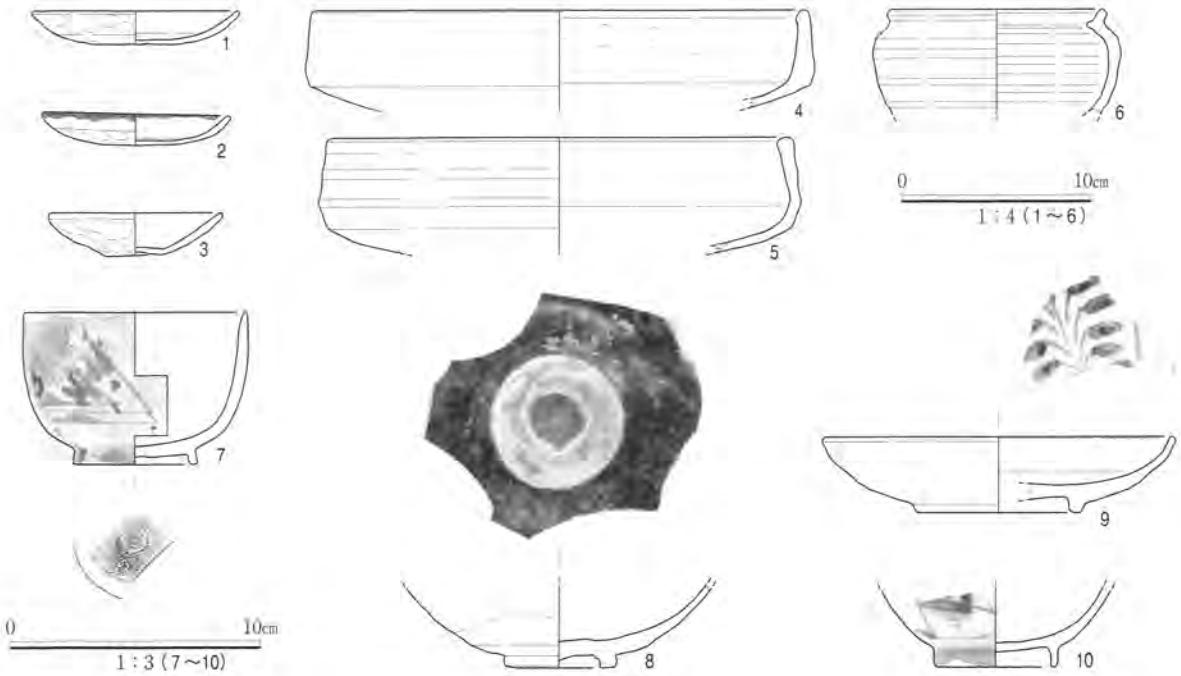


図7　SX104出土遺物

は肥前京風陶器の碗である。浅黄色の釉を施し、底部外面は露胎である。高台内に刻印がある。8は肥前陶器の皿である。銅緑釉を施し、底部内面を蛇ノ目剥ぎする。体部下半は露胎である。9は肥前磁器の染付皿である。釉が灰色、呉須はオリーブ色を呈し、口錆を施す。畳付は露胎で離れ砂が付着している。10は肥前磁器の染付碗である。畳付は露胎である。以上は17世紀後葉の年代が与えられる。

SE101は桶を井戸側に転用し、井戸側の直径は0.80mである。掘形の深さは1.50m以上で、底には到達できなかった。掘形は直径2.30mの円形で、シルト偽礫を含む浅黄色(2.5Y7/4)細粒～極細粒砂で裏込めする。図4の破線の内部は井戸廃絶時の埋土で、炭化物・シルト～粘土偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒～極細粒砂である。

SP102・103は井戸に伴う覆屋などの建造物の柱穴と考えられる。SP102は柱が残存していた(図8)。掘形は南北長0.50m以上、東西長0.40m、深さ0.36mで、埋土は還

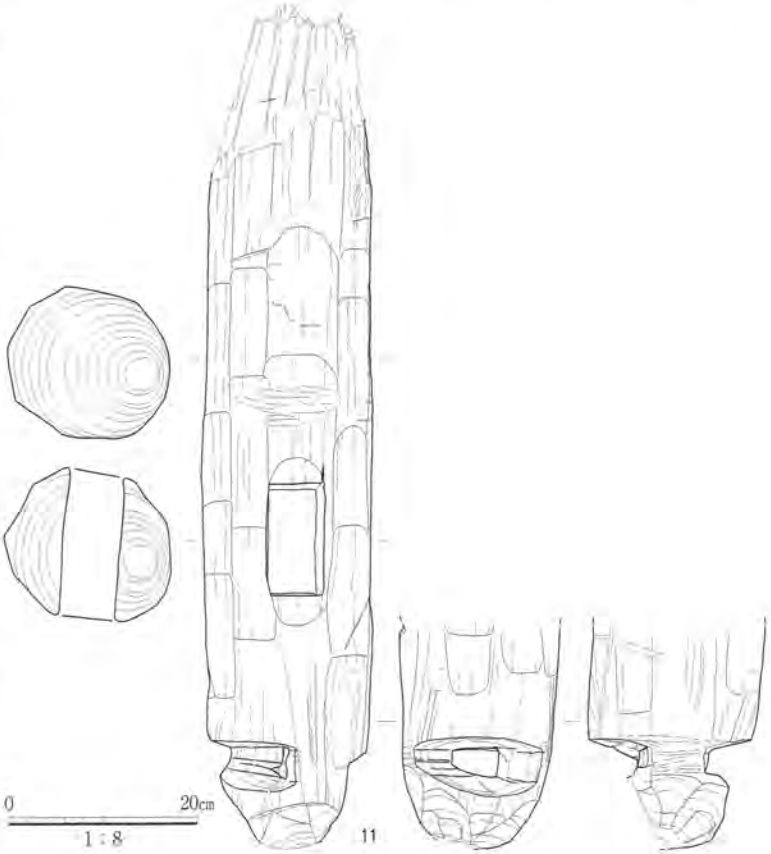


図8　SP102柱材

元変色しているが井戸の裏込め土と同様で、有機物と細粒～極細粒砂シルト偽礫を含むオリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒～極細粒砂である。柱は直径0.18m、残存長0.89mである。下部に長さ11.8cm、幅5.8cmの長方形の柄穴があり、転用材である。下端部は縄を掛けるために加工されており、縄が当たって擦れた痕跡も見られる。SP103は南北長0.35m以上、東西長0.50mの不整形で、深さ0.47mである。柱痕跡は確認できなかったが、掘形埋土はSP102と同様である。以上はいずれも出土遺物がなかったが、井戸の下位にある土壙からの出土遺物に瀬戸美濃焼磁器の銅版転写による染付碗が含まれており、SE101およびSP102・103は明治30年代よりも新しいと考えられる。

3)まとめ

調査では、現地表下約2.0mの地層を確認し、豊臣前期と推定される整地層と遺構、徳川期～近代の遺構を検出した。今回、豊臣期の建物などの明確な遺構は確認できなかったが、当該期の整地が確認できたことは重要である。森の宮遺跡周辺の豊臣期大坂城の状況は不明な点が多く、今後の調査の進展が期待されるところである。

引用・参考文献

大阪文化財研究所2013、『中央区森ノ宮中央一丁目における建設工事に伴う森の宮遺跡・大坂城跡発掘調査(MR12－2)報告書』

2014、『中央区森ノ宮中央一丁目10－2・10－3における建設工事に伴う森の宮遺跡・大坂城跡発掘調査(MR13－3)報告書』

積山洋1999、「大坂の土師質土器―主要器種を中心に―」：関西近世考古学研究会編、『関西近世考古学研究Ⅶ』

調査区完掘状況
（東から）

調査区南壁地層断面
（北から）

第2aおよび2b層上面
検出状況（東から）

中央区上町Ａ－２における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW14－１)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区上町Ａ－２
調 査 面 積　120㎡
調 査 期 間　平成26年４月10日～４月18日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　高橋 工、田中裕子

1)調査に至る経緯と経過

調査地は古代の都城跡である難波宮跡および近世の城郭跡である大坂城跡の南部に位置する。上町台地上において、古代から近世にかけての遺構・遺物が密集する地域である(図1)。調査地に隣接するNW80－8・85－32次調査では、難波宮造営前～難波宮期にかけての遺構が検出されている[大阪市文化財協会2004]。また、調査地東隣のNW87－21・10－2次調査では、本願寺期の薬研堀(図2、SM501・502)が検出されている[大阪市文化財協会2004、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下1.4m以下の深さで17世紀以前とされる遺構面が検出され、今回の調査を実施することとなった(図2)。調査区は調査地南半部に東西12m、南北10mの120㎡を設置した。調査は4月10日より着手した。後述する第1層までを重機によって除去したのち、人力による掘下げを行った。その後、適宜、遺構の検出・記録作業を行い、4月17日に現場の埋戻しを、4月18日に撤収を含むすべての作業を完了した。

基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地は上町台地上にあり、付近の標高はTP+22.0m前後である。調査地北方から南に向かってごく緩やかな下りとなる。

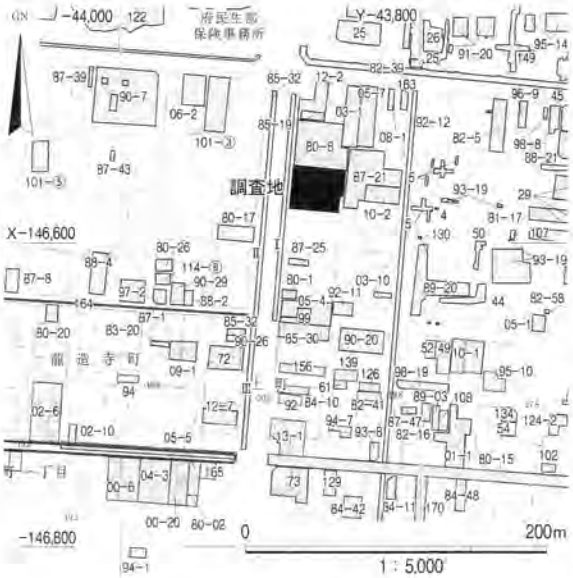


図1　調査地位置図

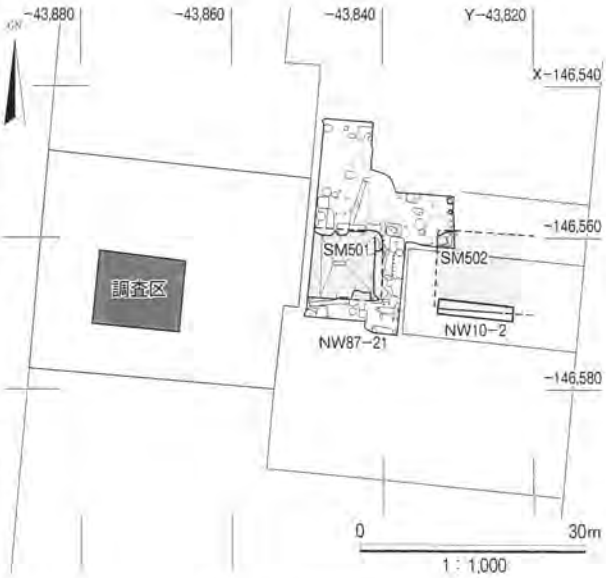


図2　調査区位置図

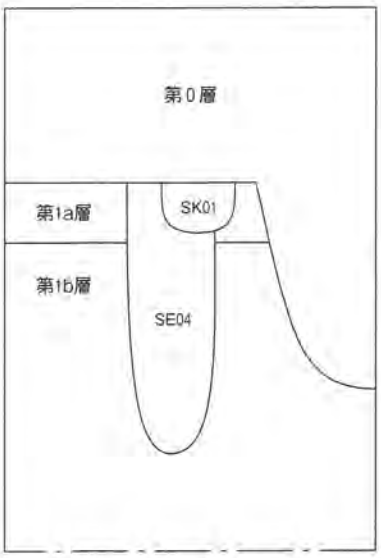


図3　地層と遺構の関係図

第０層：近現代の盛土層であり、層厚は40～165cmである。レンガ・タイルなどを含む。

第１層：段丘構成層である。第1a層と第1b層に分けることができる。第1a層はにぶい黄褐色中礫～細粒砂層で、層厚は最大50cmである。平行ラミナの構造が部分的に壊れており、建物を解体する際などの影響で段丘構成層が液状化した部分である。第1b層は明黄褐色細礫～細粒砂層で、層厚は250cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物

今回の調査では、豊臣期・徳川期の整地層は確認できず、遺構はすべて第１層の上面で検出した。検出遺構の時期は大きく２時期に分けることができ、豊臣後期～徳川初期のSE04・05と、18世紀代のSK01・02などがある。

a．豊臣後期～徳川初期の遺構と遺物(図５～９)

第１層の上面で検出した遺構の中で、出土遺物などの特徴からSE04・05を該期の所属とした。

SE04　上部で東西1.6m、南北1.8mを測る、深さ2.9m以上の井戸である。下半部が崩落のため、大きくオーバーハングしている。埋土は、上部と下部に分けることができる。下部は、壁面の崩落に由来する地山偽礫を含むにぶい黄～灰黄色細粒砂～シルト質細粒砂からなる(図６の５～８層、５層は崩落した地山偽礫)。上部は、暗灰黄色粗粒～細粒砂と灰色粘土、灰色シルト質細粒砂が縞状の堆積構造をなし、人為的に埋めた様相を示している(図６の２～４層)。礫が壁面に沿って出土しており、石組の井戸と考えられるが、その一方で井戸の周りに配置していた礫を投棄した可能性もある。

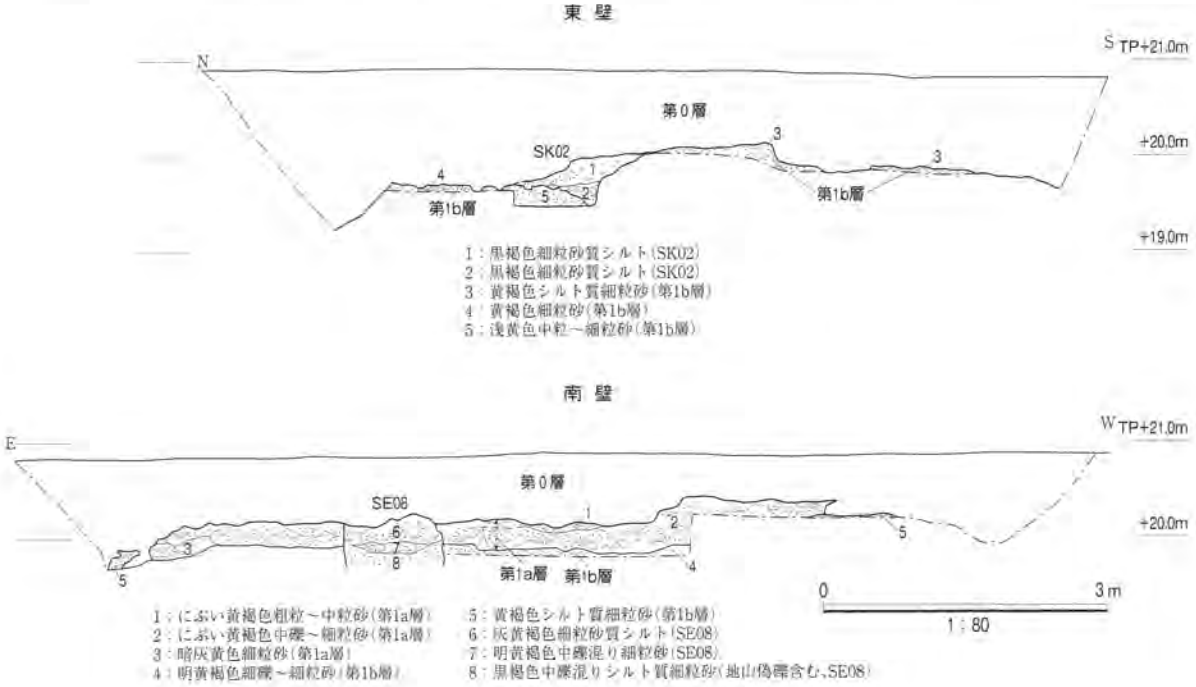


図4　東・南壁地層断面図

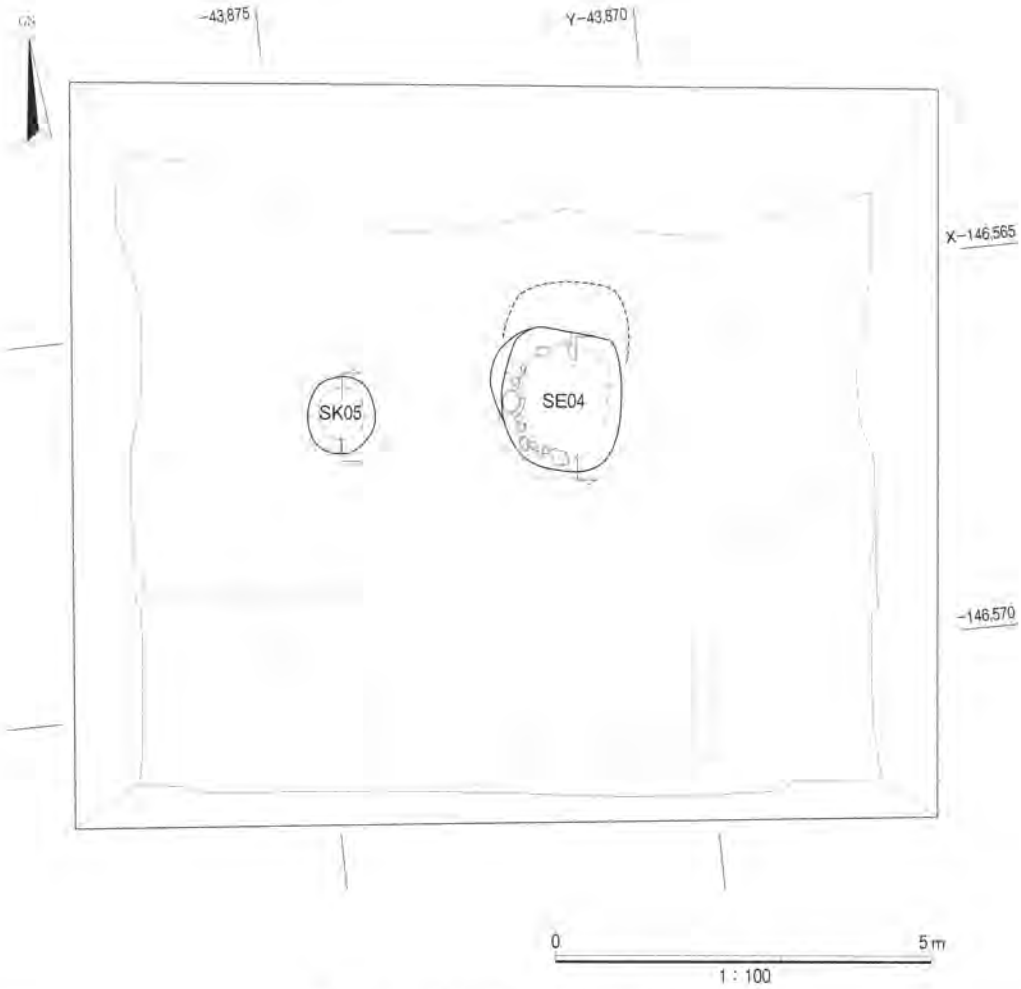


図５　豊臣後期～徳川初期の遺構平面図

出土遺物は中国産磁器のほか、国産陶器・土器類が出土した。中国産磁器では、饅頭心の青花碗１がある。ほか小片であるが、白磁碗および漳州窯産の青花大皿がある。国産陶器としては、瀬戸美濃焼志野向付２、肥前陶器碗３・皿４・５、丹波焼大平鉢６、備前焼大甕７、信楽焼鉢がある。２は内面に鉄絵が見られる。また、丸瓦・平瓦が大量に出土した。８は唐草文軒平瓦である。旧中央体育館(NW88－１次調査)出土の3653[黒田慶一1992]と同笵の可能性が高い。いずれも壁面の崩落土で埋まった埋土の下部から出土し、豊臣後期～徳川初期に属する。

SE05　東西0.9m、南北1.0m、深さ3.0mの楕円形の井戸である。埋土は上部と下部に分けることができる。下部は黒褐色粗粒～中粒砂が互層に堆積し、部分的に炭層を含む。上部は地山偽礫を含む黒褐色極粗粒砂混り中粒～細粒砂質シルトからなる。上部は投棄された割石を含み、矢穴を持つ48なども見られた。また、井戸の最も壁よりに細粒砂の薄層(図６の６層)がある。この薄層は当初、側板の痕跡と考えられたが、地山層と埋土の境界の二次堆積の可能性もある。

出土遺物は、輸入陶磁器のほか、国産陶器・土器類・石製品・瓦がある。輸入磁器では中国産青花９～13、朝鮮半島産白磁14がある。９は碗で、漳州窯産である。10～13は皿で、10は景徳鎮産で底部内面に獅子が描かれるとみられる。12・13は口縁部内面に四方襷文が描かれる。14は朝鮮半島産白磁皿である。

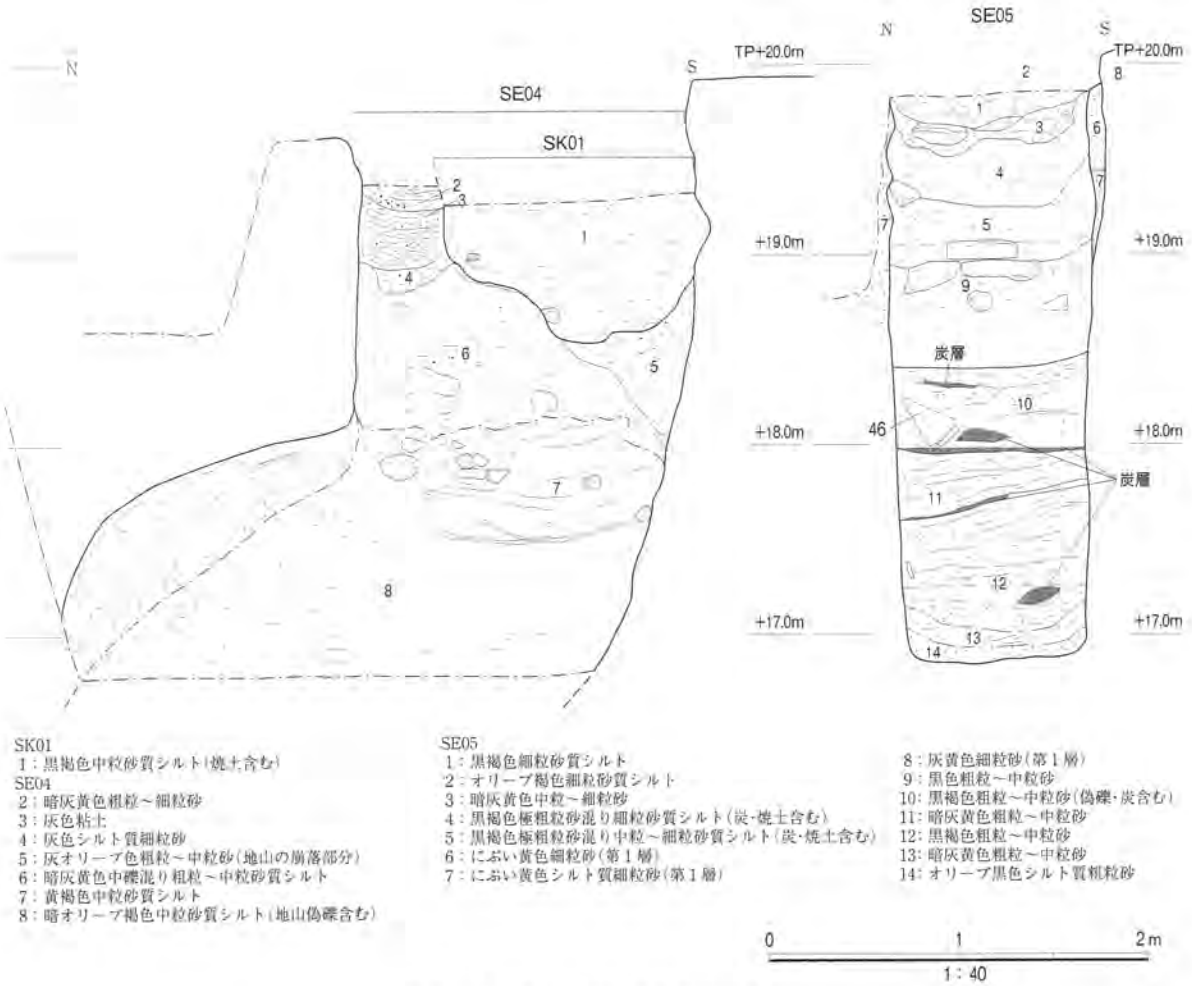


図6　豊臣後期～徳川期の遺構断面図

国産陶器として、瀬戸美濃焼15～18、肥前陶器19～26、備前焼27～29、丹波焼30がある。15は鉄釉の天目碗である。16は志野菊皿、17は灰釉皿で口縁部が外反する。18は底部糸切り痕をもつ鉄釉の鉢で、内面には赤色顔料が付着していた。19・20は灰釉の碗、21～25は皿である。皿22・25は口縁部が外反する。23・24はわずかに内湾する。26は絵唐津の向付である。また、備前焼壺27・底部破片28には窯印が見られる。擂鉢29の擂目は12条一単位で、２段に施される。30は丹波焼大平鉢である。

そのほか、土師器皿31～38、石製品39～41、瓦42～47がある。土師器皿は大きさが３種類あり、７cm前後の小型、10cmの中型、12cm前後の大型がある。小型の31～33はいわゆる「へそ皿」で、33には口縁部に意図的な打ち欠きが見られる。中型34・35および大型36～38は口縁部をつまんでいる。石製品では、39は茶臼で、石材は金雲母・角閃石が目立つ細粒な花崗岩である(註１)。40は硯で、赤色の非常に細粒な凝灰岩もしくは含礫の赤色頁岩製とみられる。いわゆる赤間硯の可能性もある。41は砥石で、雲母を含むホルンフェルス化作用を受けた珪質頁岩である。瓦は大量に出土しており、完形の丸瓦46などが含まれる。また、平瓦は47に見るように、全体的に薄いものが多い。42～45は唐草文の軒平瓦である。同笵瓦は見つからなかった。また、このほか割石が複数出土している。48は花崗岩製とみられる直方体の割石で矢穴を持つ。矢穴は矢穴口長辺11.5～12.0cmで船底状を呈し、森岡・藤川両氏の「先Aタイプ」に属するといえる[森岡秀人・藤川祐作2008]。

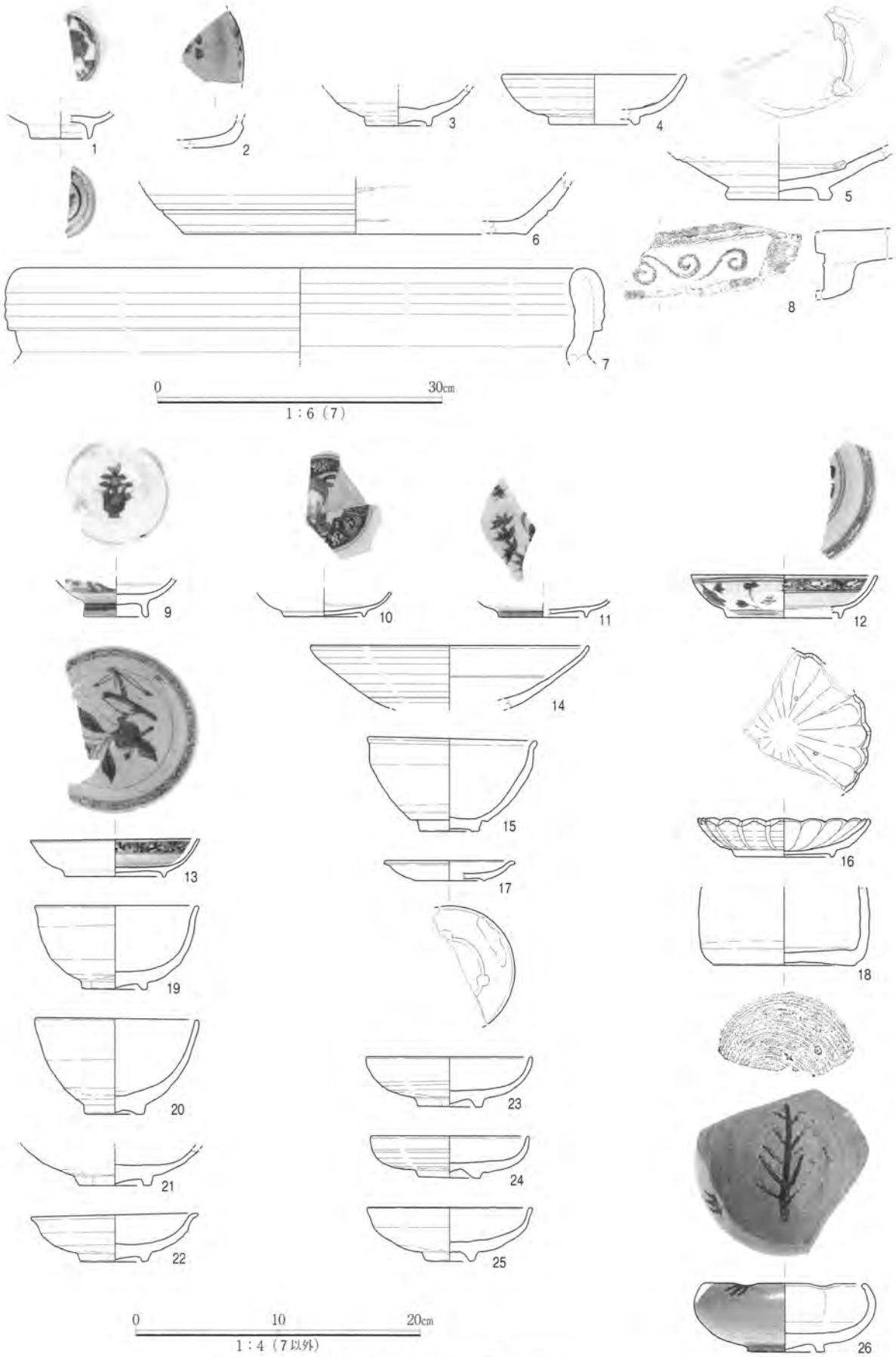


図7　SE04・05出土遺物実測図

SE04(1～8)、SE05(9～26)

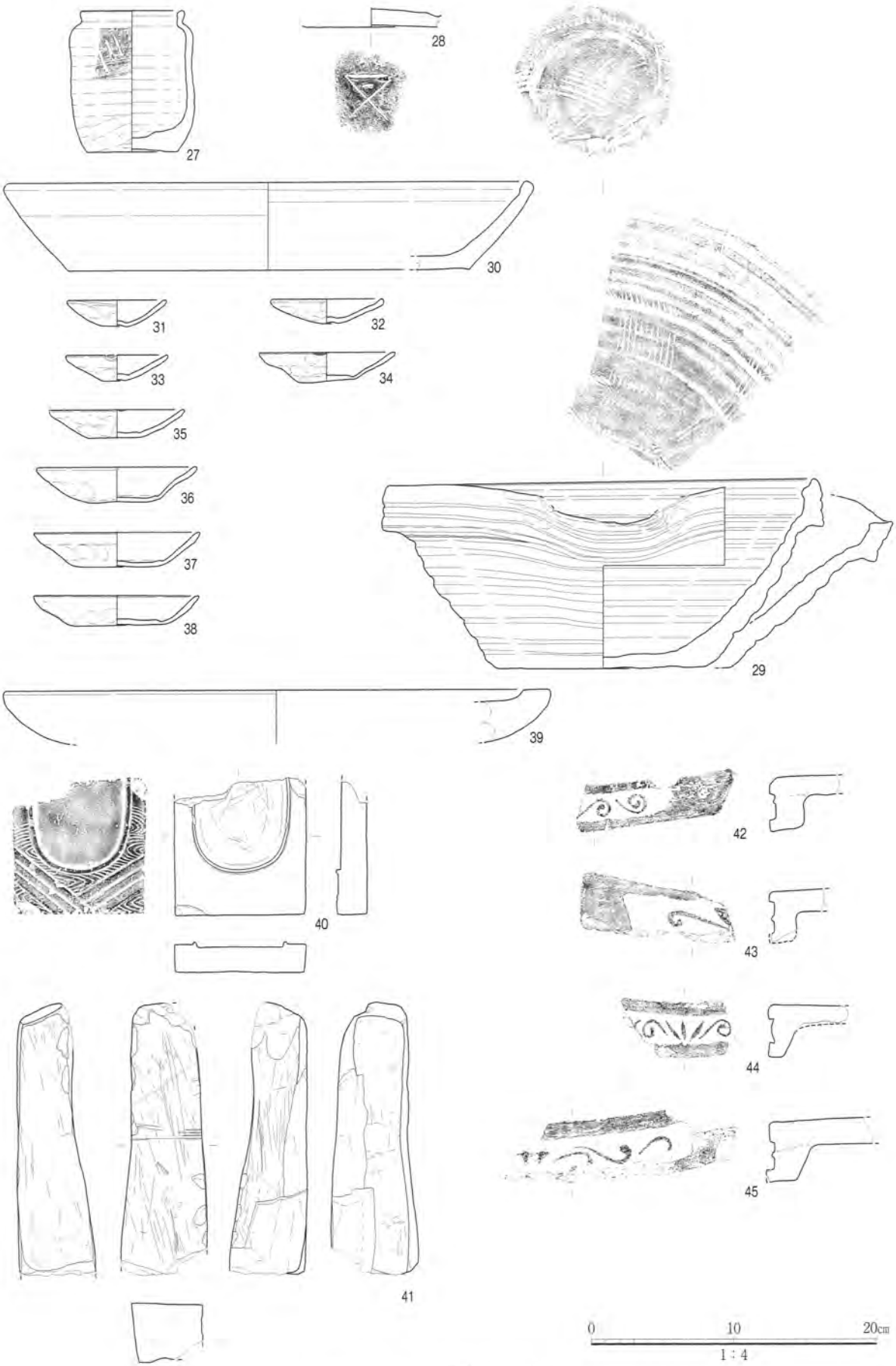


図８　SE05出土遺物実測図（１）

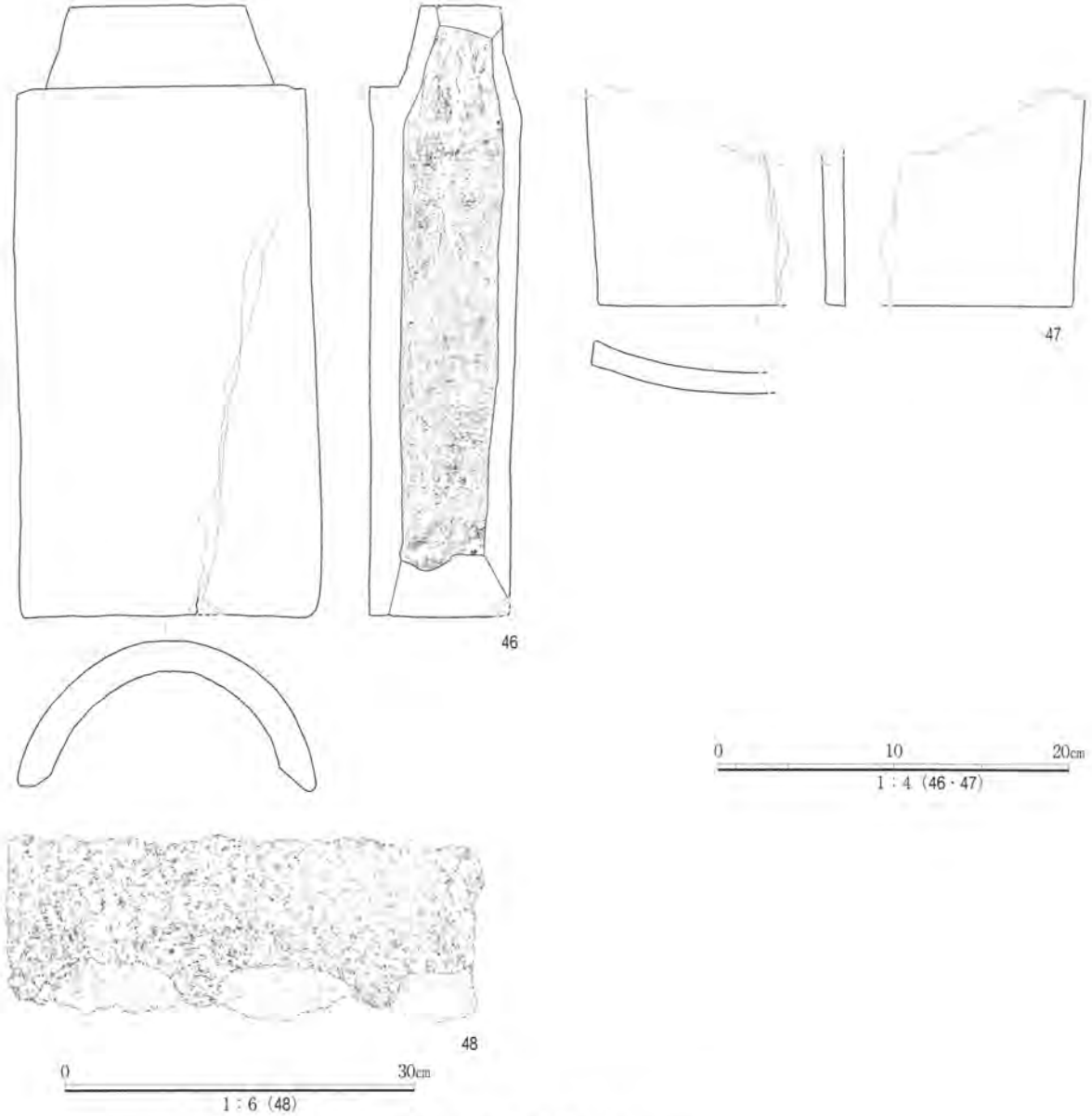


図９　SE05出土遺物実測図（２）

b．18世紀以降の遺構と遺物（図６・11～12、写真１）

第３層の上面で検出した遺構の中で、出土遺物などの特徴からSA03、SK01・02・06・07、SE08を該期の所属とした。

SA03　調査区西半に位置する柱列である。柱穴は西からSA03－a・b・cとした。SA03－aは東西0.5m、南北0.4m、深さ0.5mで、楕円形を呈する。柱痕跡は直径0.1mである。掘形の埋土は明褐色粗粒砂混り中粒砂質シルトからなり、柱痕跡は褐色細粒砂質シルトからなる。掘形より近世平瓦が出土した。SA03－bは直径0.4mで、埋土は偽礫を含む褐色～オリーブ褐色粗粒砂混り中粒～細粒砂質シルトからなる。柱痕跡は検出されなかった。SA03－cは、直径0.4m、深さ0.3mで、上部が大きく削平されている。柱痕跡は直径0.08mである。掘形の埋土は、明褐～褐色中粒～細粒砂質シルトからなり、最下層は地山偽礫を含む。柱痕跡はオリーブ褐色中粒砂質シルトからなる。遺物はSA03－aより出土した平瓦の破片１点のみであり、近世以降の遺構といえるが、時期の絞り込みはできなかった。

SK01　調査区中央部に位置する東西2.0m、南北1.4m、深さ1.4mの方形の土壙である。SE04を切る。埋土は１層で、焼土を含む黒褐色中粒砂質シルトからなる。埋土中からは、肥前陶磁器のほか、瀬戸美濃焼陶器・関西系陶器・備前焼・丹波焼、また土師器・土製品・瓦および鞴羽口が12点以上、鉱滓がコンテナ２箱分、砥石が３点以上出土した。

図示した遺物は肥前磁器染付碗49・50、同猪口51、同皿52、肥前青磁皿53、肥前白磁仏飯具54、瀬戸美濃焼菊花皿55、関西系陶器碗56、軟質施釉陶器秉燭57、土師器焙烙58・59、同火入60、土人形61・62、鞴羽口63・64、砥石65～68、瓦69～71である。

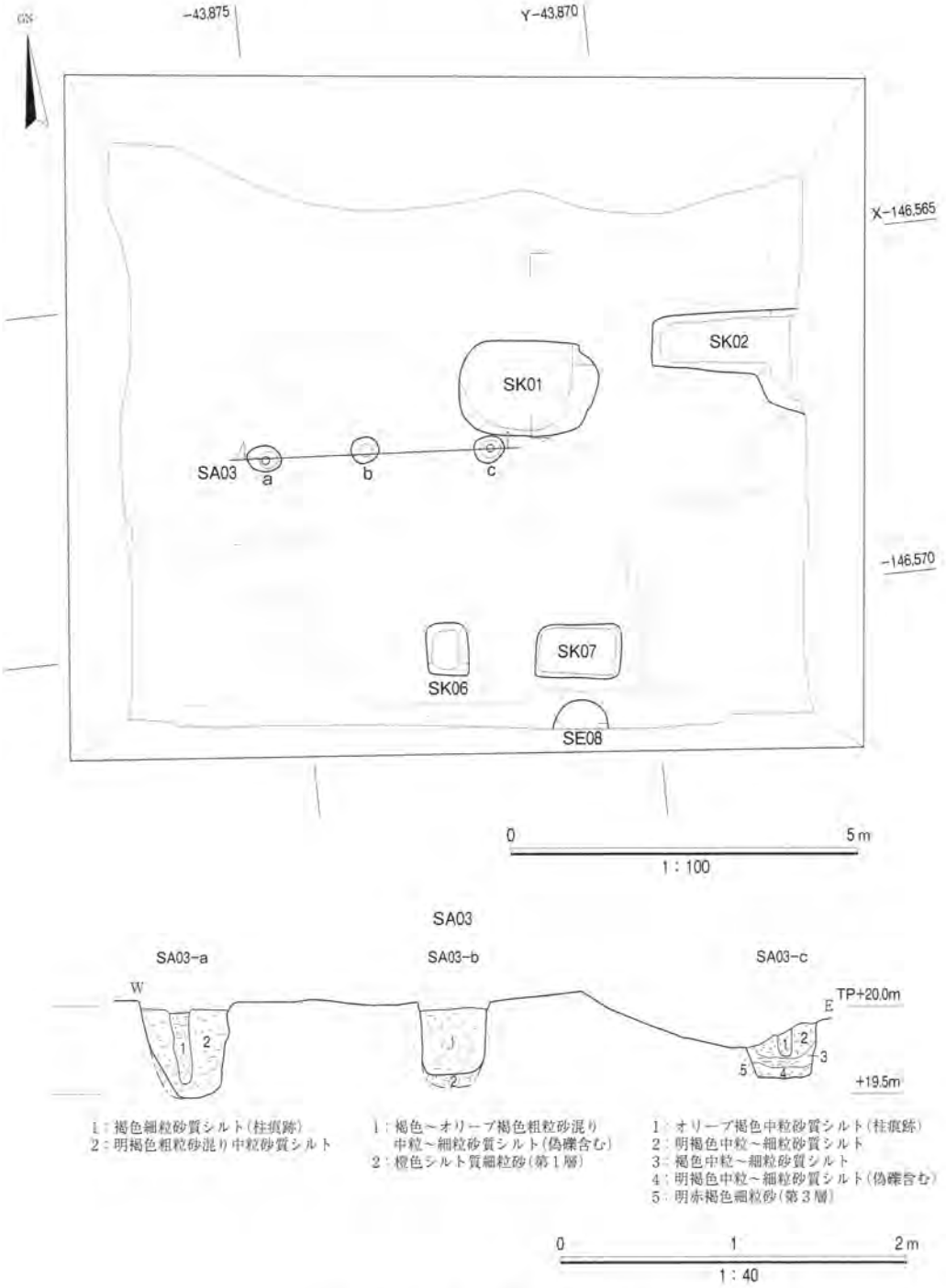


図10　18世紀以降の遺構平面・断面図

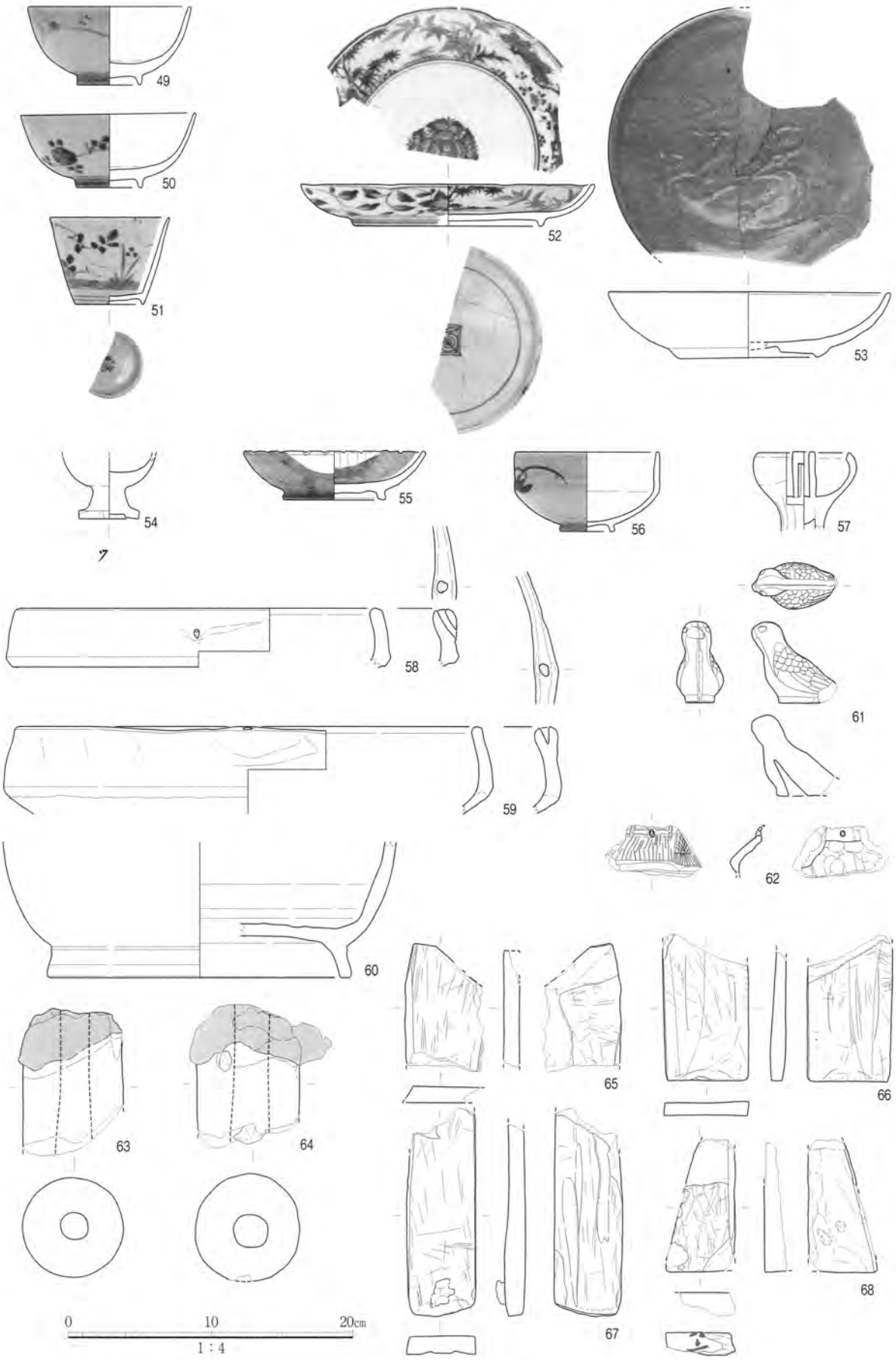


図11　SK01出土遺物実測図

51·52は底部に銘がある。51は寿字文の可能性があり、52は渦福である。53は内面に松文が施される。54は底部外面に墨書「ツ」がある。55は口縁部を菊花形とし、灰釉の地に緑色釉を流しかける。56は半筒碗で、鉄絵が見られる。土師器焙烙は粘土を貼り付けた把手に穿孔があり、58が穿孔の貫通するDa1類、59が穿孔の貫通しないDa2類である[難波洋三1992]。土人形61は鳩、62は茅葺屋根の建物をかたどったものである。鞴羽口63は外径7.0cm、孔径2.5～1.9cm、64は外径7.2cm、孔径2.8～2.5cmである。65・67・68は珪質頁岩製の砥石である。いわゆる砥石型頁岩と呼ばれるものであろう。68には判読できないが、小口部分に墨書が見られる。66も砥石であるが、雲母が混じるホルンフェルス化作用を受けた珪質頁岩である。65·67·68に比べてやや粗い。69は橘唐草文軒平瓦である。平瓦70は刻印があり、下半部は不明瞭であるが「み」の可能性がある。71は煽り大面瓦とみられる。裏面に櫛状工具によるカキヤブリがある。出土陶磁器の年代は18世紀前～中葉頃に属するといえよう。

SK02　調査区北東部に位置する長方形の土壙である。東西2.0m以上、南北1.5m、深さ0.5mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトからなる。廃棄土壙である。肥前陶磁器や関西系陶器のほか、土師

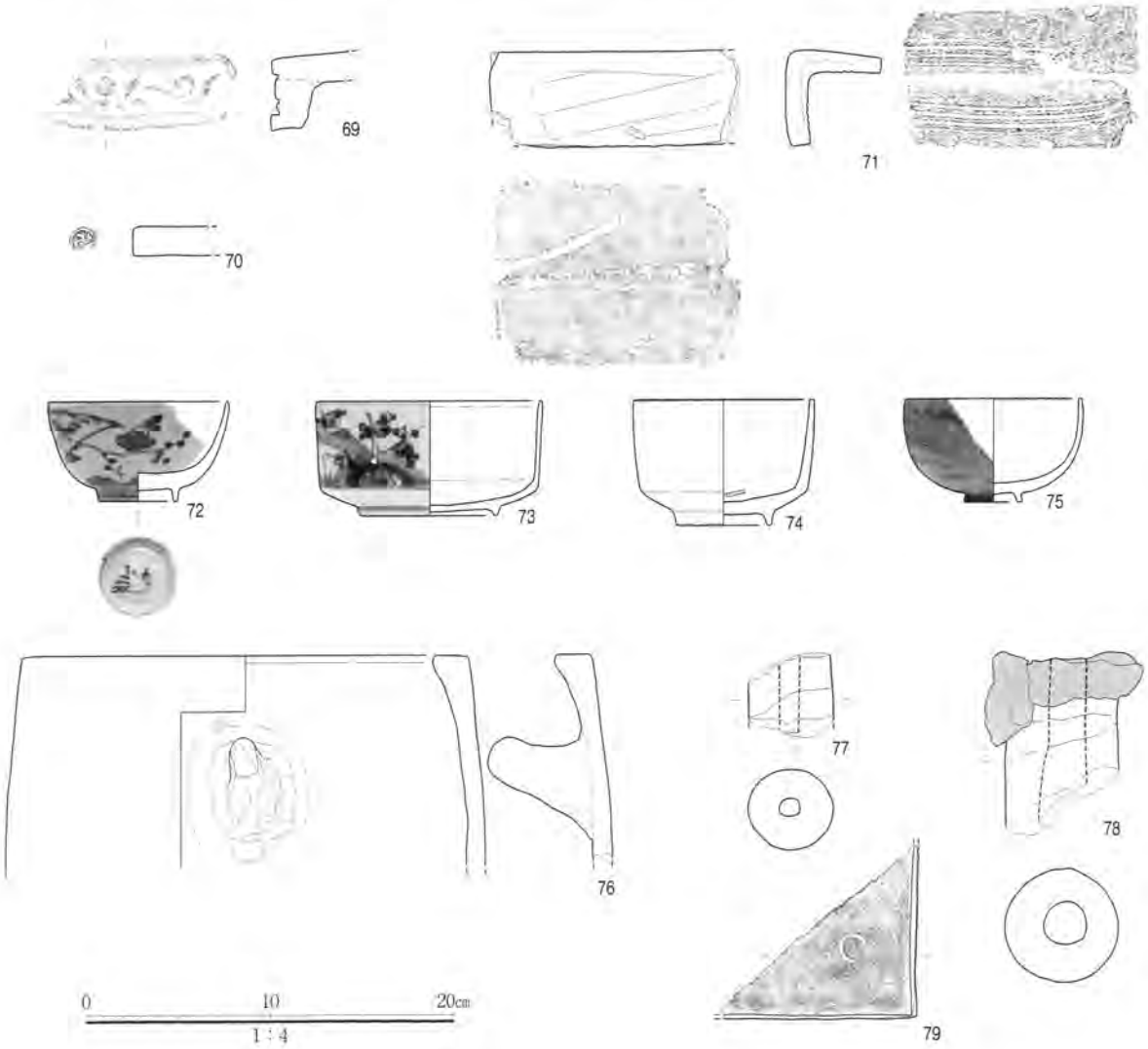


図12　SK01・02出土遺物実測図
SK01(69～71)、SK02(72～79)

器・瓦類および鞴羽口５点以上、コンテナ1/2箱分の鉱滓を含む。図示した遺物は肥前磁器染付碗72、蓋物73、関西系陶器碗74、同色絵碗75、土師器焜炉76、鞴羽口77・78、平瓦79である。72は底部外面に崩れた字款を持つ。74は口紅が施される。76は内側に突起が２本残存し、本来は３本あったとみられる。鞴羽口は大小２種類あり、77は外径4.5cm、孔径1.0cmで小型である。78は外径6.2cm、孔径2.5～1.8cmで大型である。平瓦79は刻印「○」を持つ。以上は18世紀前葉のものである。

写真１　SK01出土の鉱滓

SK01・02の陶磁器類は、SK02が18世紀前葉までであり、SK01は18世紀前～中葉までを含む。

なお、鞴羽口は総数17点以上あり、大小二種類が見られる。小型は外径約４cmで、77１点のみであり、ほか16点はすべて大型(63・64・78)であった。大型の羽口の形状は直管で、中の孔は先端に向かって細くなる。胎土には意図的に混ぜられた砂礫を多く含む。小型の羽口も直管で、胎土に砂礫が混ぜられているが、内孔は直線的である。また、同時に出土した鉱滓類は大部分が椀型鍛冶滓である(写真１)。これらは鍛冶操業に伴って生じた廃棄物といえよう。

SK06・07は近代の建築遺構の基礎部分である。底面が平らに整えられた方形の土壙の底にこぶし大の礫が敷かれていた。SK07からは銅版転写の瀬戸美濃焼磁器碗が出土した。

SE08は直径0.8m、深さ0.45m以上の井戸である。埋土からは、瀬戸美濃焼磁器が出土しており、明治時代以降に属する。

c．本願寺期の大溝について

今回の調査では、東に隣接するNW87－21・10－２次調査で発見された本願寺期の薬研堀SM501・SM502に連続する遺構の検出が期待された(図２)。しかし、堀の西への延長方向に当る調査地の東部には地下室があり、破壊されていたため、堀の有無は確認できなかった。また、調査区中央ではTP＋20.0m前後で地山層が検出されており堀は見られなかった。さらに、調査地北側のNW80－８次および西側のNW85－32次調査においても、地山層がTP＋19.0～20.0mで検出されており、溝の延長は見つかっていない。SM501・SM502は途中で終わるか、南に向かって折れている可能性が考えられる。

3)まとめ

今回の調査では、豊臣後期～徳川初期の井戸を検出し、一括性の高い遺物が得られた。また、18世紀代に属する廃棄土壙を検出し、陶磁器とともに、鍛冶操業に伴う鞴羽口・鉱滓などが出土した。

註)

(１)石製品39～41、65～68の石材鑑定は、大阪市立自然史博物館学芸課長 川端清司氏に依頼しました。感謝

申し上げます。

参考文献

大阪市文化財協会2004、「NW87－21次およびその周辺の調査」：『難波宮址の研究』第十二、pp.63－68

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「中央区上町一丁目における建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW10－２）報告書」：『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.７－11

黒田慶一1992、「瓦磚類」：『難波宮址の研究』第九、pp.187－225

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」：『難波宮址の研究』第九、pp.373－400

森岡秀人・藤川祐作2008、「矢穴の型式学」：『古代学研究』180、pp.405－418

調査区南壁および
第２層上面の遺構
（北から）

第２層上面遺構全景
（西から）

SE04遺構断面
（東から）

中央区上町一丁目13－12・13－18における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW14－２)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区上町１丁目13－12・13－18
調 査 面 積　45㎡
調 査 期 間　平成26年６月２日～６月11日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　高橋 工、谷﨑仁美

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は上町台地の北端部東斜面に位置し、北西約150mには史跡難波宮跡、北約900mには特別史跡大坂城跡がある(図1)。大小の谷が入り組んだ起伏のある地形で、「上町谷」の支谷の谷頭部分に当ると推定される(図2)。歴史的には、前期難波宮の「朱雀門」(宮城南門)の東南約70mに位置し、また、徳川期には武家屋敷地として整備され、[1863(文久3)年改定増補国宝大阪全図(大阪歴史博物館蔵)]では「御城代屋敷」であったことが記されている。

調査地周辺では、特に北・西側で多くの調査が行われており、古墳時代～難波宮期、本願寺期・豊臣期・徳川期の遺構が検出されている[大阪市文化財協会2004]。調査地北西のNW93－5次調査では、前期難波宮の「朱雀門」と東西に取り付く回廊跡、その東約100mに位置するNW04－2次調査では東回廊棟通り延長地点で柱穴が検出された。また、NW07－4次調査では古墳時代後期に遡る可能性のある柱穴が検出されている[大阪市文化財協会2009]。

また、調査地西側の南北道路は、調査地の北西側で急激に北から南へ下る地形となっており、NW82－2次調査では、地表面からハンドオーガーで5.7m掘り下げても地山が検出されず、深い谷が北西から南東へのびることが想定された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1984]。南北道路では1986年度に下水管渠築造工事に伴うNW86－2次調査が行われ[大阪市文化財協会1986]、南北約200mにわたる地層断面が記録されている。比較的平坦なD区では前期難波宮の東朝集殿に比定される南北棟の掘立柱建物が検出されているが、C区北半では地山が北から南に急激に下る落込みが、B区では徳川期の整地層の下から豊臣～徳川初期と推定される石垣および石組みの東西溝が検出された。C区の落込みは自然の傾斜地を加工した人工の段あるいは豊臣期大坂城の堀

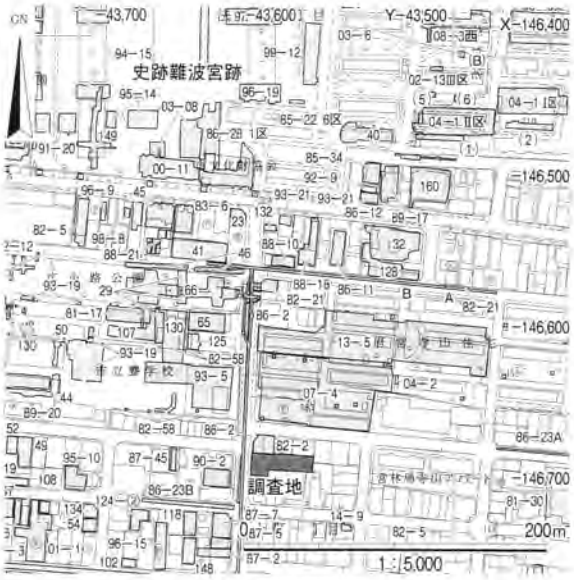


図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

等高線は、発掘調査で明らかになった地山(上町層)上面の標高と現地形をもとに旧地形復元を試みたもの。

の北辺の可能性が指摘されている。

以上のように、歴史的に重要な調査地で大阪市教育委員会が試掘を行ったところ、地表下約1.5mよりも深いところで古代から近世と考えられる遺構面および遺物包含層が検出されたため、本格的な発掘調査を行った。事業主側によりあらかじめ調査区予定範囲は現地表面から2.0m掘り下げられており、その中に調査区を南北９m、東西５mで設定した。６月２日から調査開始し、６月11日には調査に必要なすべての作業を終えて撤収した。

なお、本報告で使用する方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記する。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３・４)

調査区南部で段丘構成層(第９層)が開析されて北から南に下がる急斜面を成しており、谷(SX301)の北斜面を構成すると考えられた。

第１層：江戸時代以降の盛土層である。調査区東壁で確認した。にぶい黄褐色(10YR5/3)細礫混りシルト質粗粒～中粒砂層で、層厚は６cmである。調査前に試掘した際、本層か下位の第２層から18世紀以降のものと思われる三巴文軒丸瓦が出土した。しかし、調査中に第２層から江戸時代まで下る遺物が出土しなかったことから、本層由来のものと判断した。調査中に本層からの出土遺物はなかった。

第２層：鎌倉時代以降の盛土層である。黄褐色(10YR5/6)細礫混り極粗粒～中粒砂層で、層厚は20～50cmである。調査区東壁断面で本層上面に土壙があることを確認したが、調査区平面には分布しなかった。出土遺物は瓦器のほか、古墳～鎌倉時代の土師器・須恵器がある。

第３層：SX301の埋土で、黒色(10YR7/1)シルト質粘土層に細粒～極細粒砂ラミナが挟在する湿地の堆積層である。層厚は20cmである。南側および調査区南壁断面では上面が攪拌されており、第２層由来の褐色細礫質粗粒～中粒砂が入り込んでいた。

第４層：SX301の埋土で、黒褐色(10YR3/3)中粒～極細粒砂を含む植物遺体層である(図６)。層

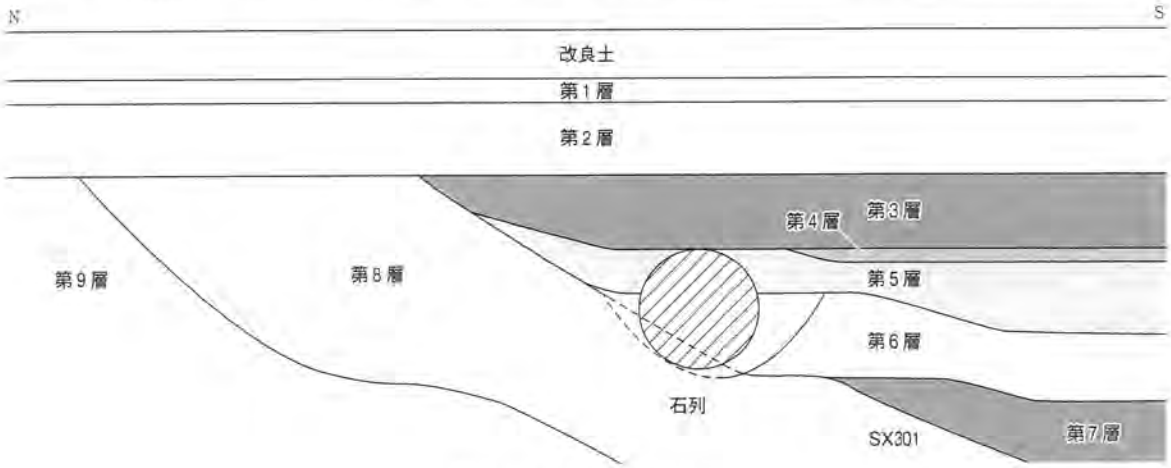


図３　地層と遺構の関係図

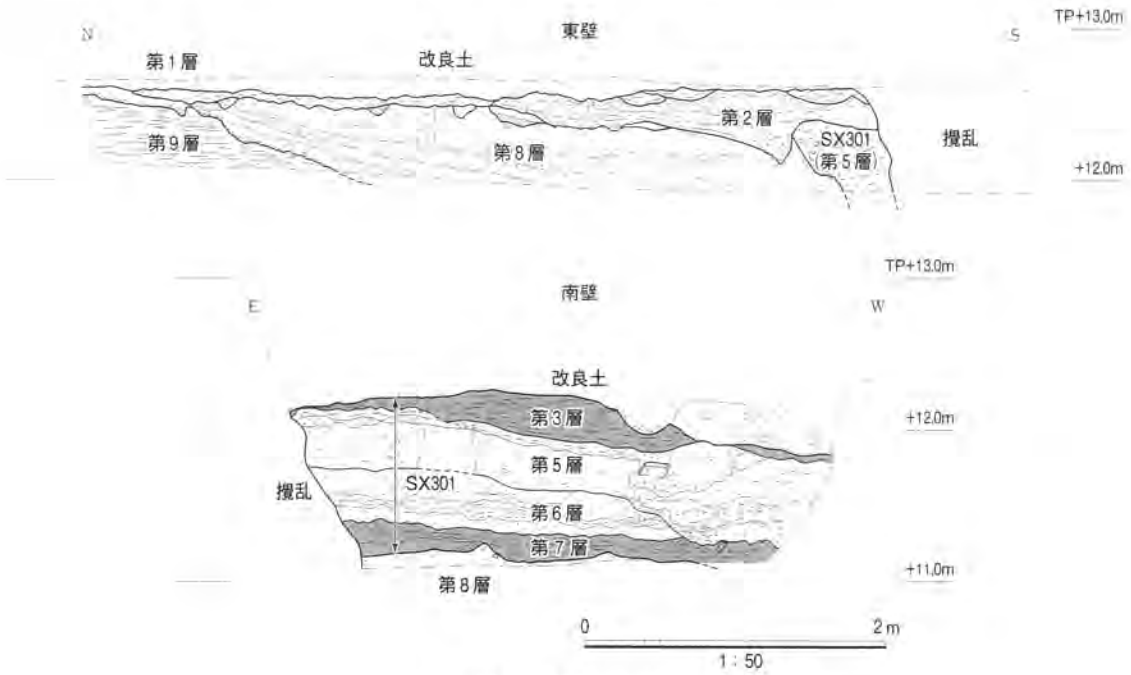


図4　地層断面図

厚は6cmである。

第3・4層からは土師器皿9、黒色土器椀10、須恵器壺12、木製品7のほか、古墳時代の土師器甕1・鉢2、須恵器杯蓋3・提瓶6が出土した。

第5層：SX301の埋土で、にぶい黄褐～黒褐色(10YR5/3～10YR3/2)粗粒～細粒砂層にシルト質中粒～極細粒砂や粘土の薄層が挟在する盛土層で、自然木を多く含む。層厚は30～50cmである。瓦器椀11、塼13、木製品8のほか、奈良時代の瓦が出土した。

第3～5層は出土遺物から12世紀中葉頃を遡らないと考えられる。

第6層：SX301の埋土で、暗灰黄～灰色(2.5YR4/2～10Y5/1)中礫混り粗粒～細粒砂の盛土層である。植物遺体や細粒砂質シルトの薄層が挟在し、少量の偽礫を確認した。層厚は35cmである。上面で石列を検出した。出土遺物は奈良時代の瓦が主体で、ほかに古墳時代の土師器・須恵器が出土した。

第7層：SX301の埋土で、暗灰黄～黒褐色(2.5Y4/2～10YR3/2)中粒～極細粒砂質シルトまたは極細粒砂質シルトの盛土層である。層厚は20cmである。須恵器杯4など古墳時代の土師器・須恵器が主体であるが、飛鳥時代の須恵器平瓶5が出土した。

第8層：段丘構成層(第9層)の二次堆積層と考えられる。分級の良い黄褐色(10YR5/6)中～細礫質粗粒～細粒砂層で、上面は固く締まる。層厚は100cmである。上面でいくつかの浅い土壙やSX301を検出した。出土遺物はなかった。

第9層：段丘構成層である。明褐色(7.5YR5/8)粘土層で、層厚は40cm以上である。

ii)遺構と遺物(図5～8・表1)

a．第8層上面

土壙(図5)　大小の土壙を検出したが、いずれも深さ0.05m程で上部は第2層によって削平されていた。にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト混り細礫質粗粒～中粒砂で埋まる。古墳時代の須恵器や奈良時代

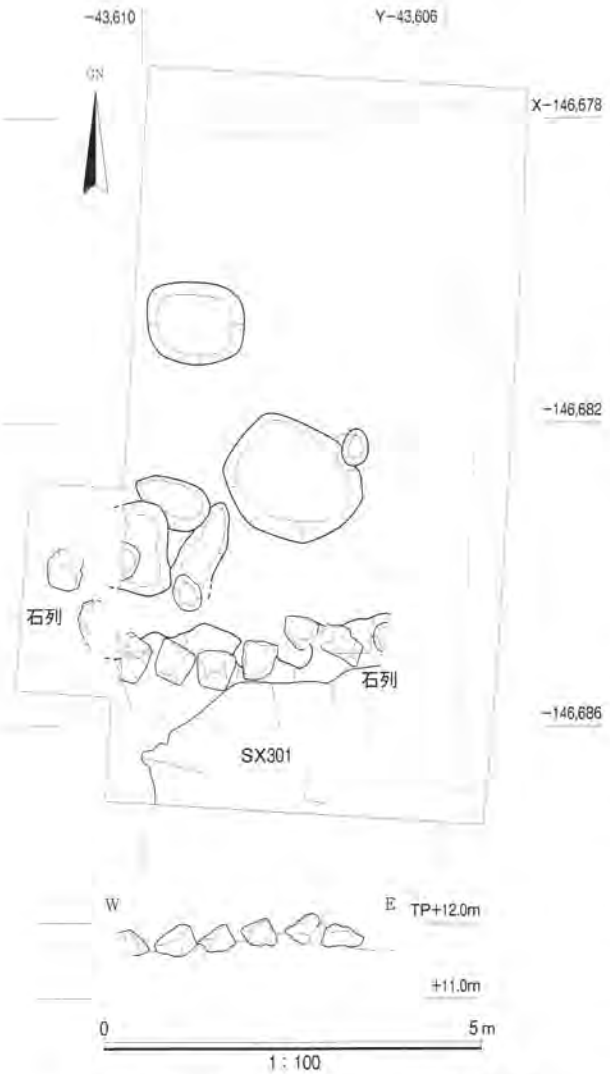


図5　第6・8層上面遺構平面図・石列立面図

の瓦の細片が出土したが、遺構の年代の詳細は不明である。

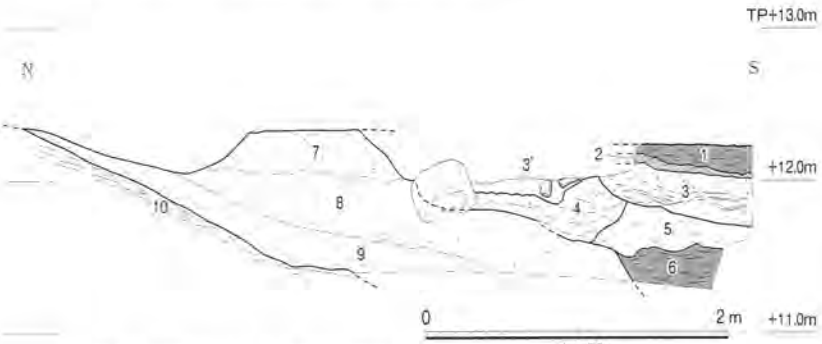
SX301(図5・6)「上町谷」に繋がる支谷の谷頭で、北肩はTP+12.3mで検出した。後述する石列の構築面はゆるやかに南に傾斜するテラス状をしており、そこからまた南に下がって最も深い部分でTP+11.15mを測ったが、谷底には到達できなかった。

埋土は前述のように第3～7層に分けられる。以下、出土遺物を層位ごとに述べる(図7・8・表1)。

第7層からは4・5が出土した。4は須恵器杯身で口径11.9cmである。短い口縁部が立ち上り、端部は薄くなって終わる。TK209型式に属する。5は須恵器平瓶である。体部は丸みをもつ。4・5は難波Ⅱ新～Ⅲ中段階に属する[佐藤隆2003]。

第6層の出土遺物の主体は後期難波宮期の丸・平瓦である。第5層で述べる出土瓦15～17が本層出土瓦と同様相を示している(図8)。

第5層からは8・11・13・15～17が出土した。瓦器椀11は復元口径14.6cmで端部は丸くおさめる。内面のヘラミガキは密で、12世紀中葉頃のものと考えられる[尾上実・森島康雄・近江俊秀1995]。8は曲物である。2枚の板を2本の桜皮で組み合わせている。片面に無数の浅い切痕がある。13は塼である。4.4cmの厚みがあり、方形と思われる。表面に細かいハケメが残る。被熱したのか表面は褐色を呈する。胎土は粗く、石英・風化した長石・炭化し



1：黒色(10YR7/1)シルト質粘土の薄層と
細粒～極細粒砂の薄層が互層になる(湿地の堆積層)－第3層
2：黒褐色(10YR3/3)中粒～極細粒砂を含む植物遺体層－第4層
3：瓦・木材を含む黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂偽礫を含む
粗粒～細粒砂層、シルト質中粒～極細粒砂が狭在する(盛土)－第5層
3'：瓦・木材を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒～細粒砂層(盛土)－第5層
4：にぶい黄色(2.5Y5/3)極細粒砂偽礫混り粗粒～細粒砂
5：灰色(10Y5/1)極細粒砂質シルト偽礫混り中粒～細粒砂層(盛土)－第6層
6：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～極細粒砂質シルト層(盛土層)－第7層
7：黄褐色(10YR5/6)中礫質粗粒～細粒砂層
8：にぶい黄色(2.5Y4/6)粗粒～細粒砂層
9：黄褐色(2.5Y5/6)粗粒～細粒砂層
10：黄橙色(7.5Y7/8)粘土層－第9層
地山の二次堆積(第8層)

図6　石列と断割地層断面(東壁)図

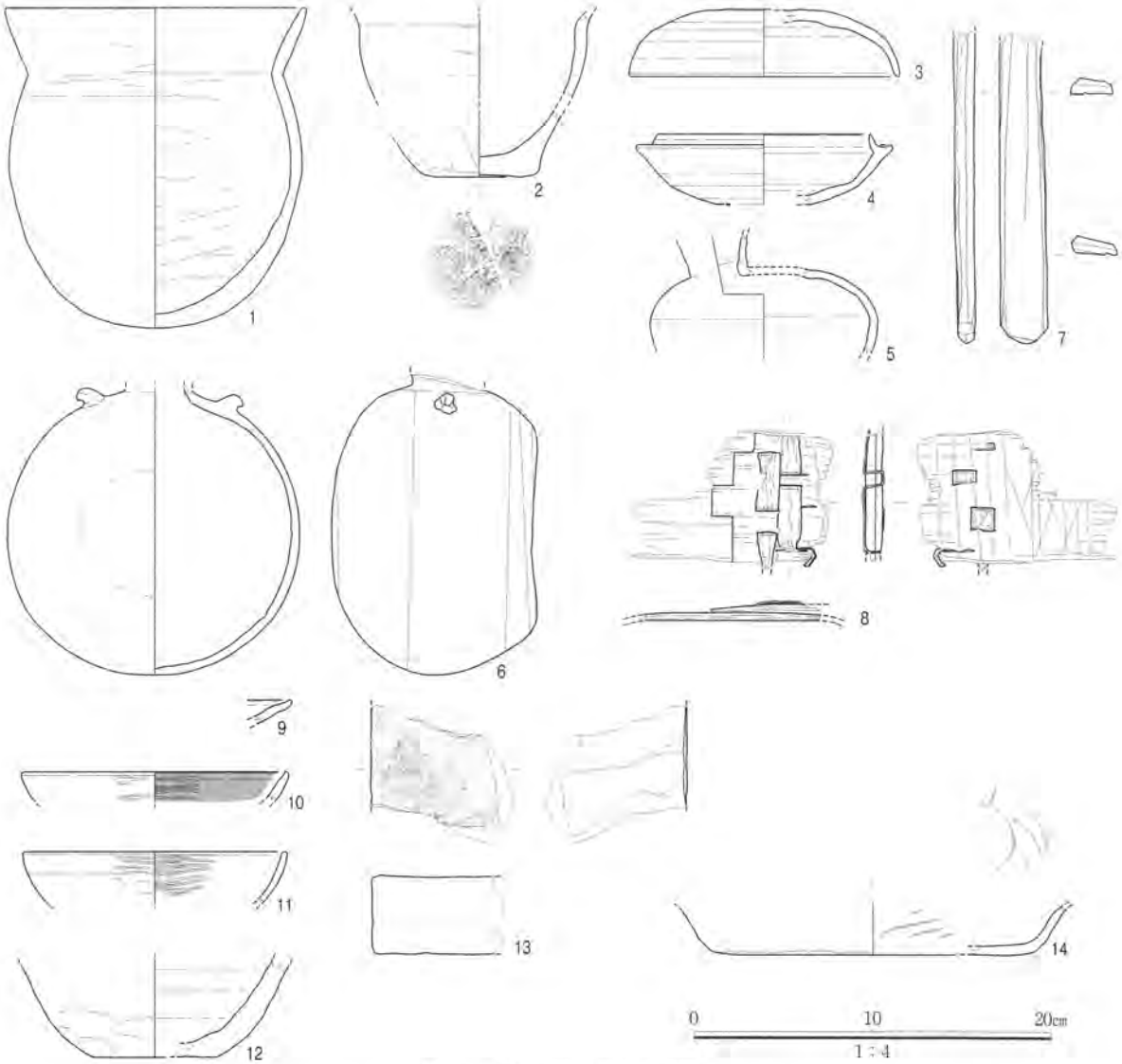


図７　遺構と各層の出土遺物

図６－４層(石列掘形埋土)(14)、第３・４層(１～３・６・７・９・10・12)、第５層(８・11・13)、第７層(４・５)

た植物片を含む。15は重圏文軒平瓦でG型式に類似する。詳しい計測値は表１に示した。凹面は縦方向のナデ調整で凸面は縦方向の縄目タタキである。16は平瓦で、凹面はかなり磨滅しているが、枠板痕と思われる段差が見られるため桶巻作りと考えられる。凸面は縦方向の縄目タタキである。灰白色を呈し、焼成は良好で石英・長石・チャートを含むやや粗い胎土である。17も平瓦で、凹面に枠板痕、糸切り痕、布目圧痕が見られる桶巻作りで、凸面は16よりもやや細かい縄目タタキである。青灰色を呈し、焼成は堅緻で密な胎土である。凸面側端部や狭端部に胎土の付着が見られ、不良品の可能性がある。

第３・４層からは１～３・６・７・９・10・12が出土した。１は土師器甕である。内外面ともに板ナデ調整である。２は土師器鉢で、内外面ともにナデ調整で底部外面には木の葉圧痕がある。３は須恵器杯蓋である。TK209型式に属する。６は須恵器提瓶である。外面は回転ヘラケズリのちにナデ調整で、把手は退化が進み端部をやや折り曲げる。７は板状木製品である。残存長17.2cm、幅2.6cm、厚さ1.0cmで、端部を削って丸く加工している。９は「て」の字口縁の土師器皿である。灰黄褐色を呈し、

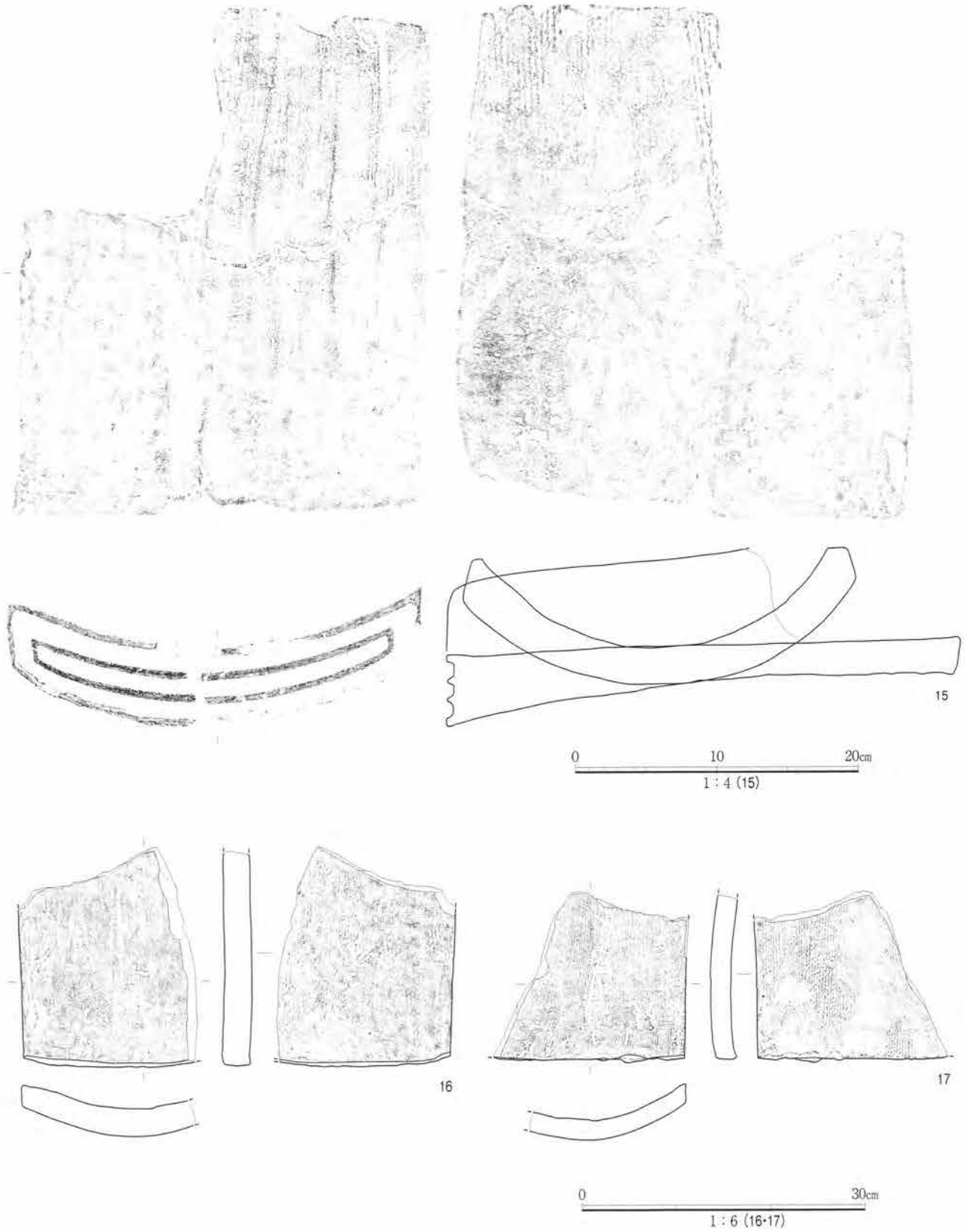


図8　各層の出土遺物
第5層(15～17)

表1　重圏文軒平瓦計測表

単位：cm

報告番号	瓦当部													平瓦部			
	上弦幅	下弦幅	弧深	厚さ	中央弧厚	圏内厚	圏外厚	内区厚	上外縁		下外縁		全長	尻弦幅	尻弦深	尻厚	硬度
									幅	高	幅	高					
15	27.4	28.8	5.9	5.3		0.7	2.05	3.5	0.6	0.55	0.6	0.5	36.2	24.5	6.6	2.6	やや軟

型式番号	瓦当部													平瓦部			
	上弦幅	下弦幅	弧深	厚さ	中央弧厚	圏内厚	圏外厚	内区厚	上外縁		下外縁		全長	尻弦幅	尻弦深	尻厚	硬度
									幅	高	幅	高					
6572B	27.3	28	5.7	6.1		0.8	2.3	3.1	0.8	0.7	0.8	0.7	37.9	－	－	－	硬
6572G	27	28.2	4.6	5.6		0.9	2	3.8	0.7	0.6	0.7	0.6	35	17.6	2.3	1.9	やや硬

シャモットを含む密な胎土で、佐藤編年の平安時代Ⅳ期中段階で12世紀以降、10は黒色土器A類の椀で、佐藤編年の平安時代Ⅲ期新段階で11世紀前半頃に属するものであろう[佐藤隆1992]。12は須恵器壺底部である。内外面ともにナデ調整で、外面に一部自然釉がかかる。灰白色を呈し、石英・長石を多く含む粗い特徴的な胎土である。畿外産とみられる。

第３・４層からは６～12世紀の遺物が出土しているが、第５層で12世紀中葉頃の瓦器椀が出土していることから、第３～５層はこれを遡らないと考えられる。

b. 第６層上面

石列(図５・６)　東西に幅50～60cmの石材６個が並んでいた。調査区外で西の続きを確認したところ、さらに２個確認し、湾曲して西に続いていた。東側は検土杖で突いてみても石材は無いようだったので続いていないと考えられる。第６層上面を布掘り状に掘り込んで石材を据えていた。面をそろえないものの同大の石材がほぼ等間隔に並ぶことや掘形を伴うことから、人為的に構築されたものと考えられる。石材は花崗岩である。

掘形埋土はにぶい黄色(2.5Y5/3)粗粒～細粒砂で、基盤層も砂であるため石材が沈下していた(図６)。掘形からは11と同様の瓦器片が出土したため、**石列**は12世紀中葉を遡らないと考えられる。このほか、土師器杯ないし皿14が出土した(図７)。底径18.0cmで、口縁部は外傾ぎみに立ち上がり、端部は外反する。底部内面に螺旋状と斜放射状の暗文がある。これは８世紀中葉に属し、第６層に帰属するものと考えられる。

iii)石列の性格と年代について

石列は谷斜面の地形に沿って並んでおり、護岸的な施設が候補として挙げられる。しかし、石材間は最大20cmの隙間があり、護岸の役割を果たせたのか疑問が残る。

調査区西側のNW86－２次調査B区で石組みの東西溝や石垣が確認されている[大阪市文化財協会1986]。石組みの東西溝の石材の上面の標高はTP+12.5m付近で、石垣の上面はTP+11.0mである。**石列**の石材上面は最も高くてTP+12.1mで、石組みの東西溝と近い。また、石組みの東西溝の石材は50～60cm大の花崗岩で石材の規模も共通する。しかし、石組みの東西溝が構築された基盤層は「黄褐色砂混り粘土」の盛土で、段丘構成層由来のシルト偽礫がさほど顕著でなく砂層であった第６層と異なる。また、下位で確認された石垣が豊臣期のものと推察されることから、石組みの東西溝は豊臣後期～徳川初期のものと考えられている。今回の**石列**は奈良時代末頃以降の盛土層を掘り込んで構築さ

れ、12世紀中葉を遡らない年代が与えられる盛土で埋没している。第２～５層から鎌倉時代より新しい遺物が出土していないことから豊臣期に下らせる根拠に乏しい。今後周辺調査が進行とともに石列の年代決定となる各層の年代の詳細を検討したい。

３)遊離資料

調査後の建設工事中、コンクリート杭を設置する竪孔を掘削している際に木簡が出土した。第５層からの出土と推測される。詳細は釈読が終了してから別の機会に報告する。

４)まとめ

古墳時代～中世に埋る谷と、谷斜面に構築された石列を検出した。

SX301は「上町谷」の支谷の谷頭部分と考えられる。最も深いところで難波宮下層遺跡の時期に当る古墳時代の盛土を検出したが、その上は後期難波宮廃絶時の瓦を含む盛土で埋め立てられており、前期難波宮造営時には、谷は埋め立てられていなかったようである。

石列の性格は不明である。また、NW86－２次調査B区で確認された豊臣～徳川初期の石組み東西溝との関連は、構築された基盤層の岩相や年代観の相違から関連づけることは難しい。石列の性格や年代については、今後周辺での発掘調査の進行とともに検討していきたい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1986、『上町他８町地内下水管渠築造工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW86－２)略報』

2004、『難波宮址の研究』第十二

2009、『大坂城跡XI　大阪府営上町第１期住宅(建て替え)建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1984、「難波宮跡(NW82－２)試掘調査略報」：『昭和57年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.33－35

尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編：『概説中世の土器・陶磁器』、pp.315－337

佐藤隆1992、「平安時代の長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編：『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告V』、pp.102－118

2003、「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年－陶邑窯跡編年の再構築に向けて－」：大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要　第２号』、pp.３－30

調査区全景（西から）

調査区南壁地層断面
（北から）

石列の検出状況と
断割地層断面（西から）

・「〈玉　作　五十　戸　俵」

0　2cm
1：1

調査後の建設工事中に出土した荷札木簡
谷崎仁美2015、「発見！「玉作五十戸俵」木簡」：『葦火』174号、大阪文化財研究所編 pp.1－3

中央区上町一丁目24－23他における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW14－３)報告書

調 査 個 所	大阪市中央区上町１丁目24－23・24－24・24－31
調 査 面 積	43㎡
調 査 期 間	平成26年11月26日～12月３日
調 査 主 体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、黒田慶一

1)調査に至る経緯と経過

今回調査地は前期難波宮宮城南門(いわゆる朱雀門)の南方140mにある(図1)。過去の試掘調査で、古代の包含層に地表下1.1mで達し、地山には地表下1.25～1.5mで到達することが確認されており、この地で建設工事が計画されたため本調査を行うこととなった。

平成26年11月26日、南北6m×東西6mの調査区を設定して、調査に着手した。重機で地表下0.5～0.6mまでの現代盛土と近代整地層および攪乱を除去し、以後、人力と重機を併用しながら掘削し、実測図作成、写真撮影などの記録保存を行った。古代道路側溝と思われる南北溝が検出されたことから、関係機関と協議し、調査区を北に長さ3.5m、幅2m拡張して溝の続きを確認した(図2)。12月2日に全ての調査を終了し、翌日、資材撤収を行った。

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

第0層：層厚20～30cmの現代盛土層である。

第1層：層厚30～40cmのレンガ・礫を多く含む灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂などからなる近代盛土層である。

第2a層：層厚50～70cmの黒褐色(2.5Y3/2)～暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂の盛土層である。上面で17世紀後半～19世紀中葉の遺構を検出した。

図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

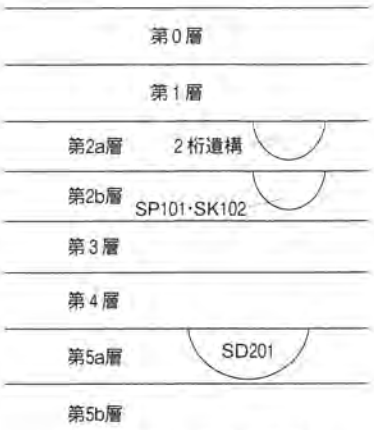


図3　地層と遺構の関係図

第2b層：層厚10～20cmの暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂からなる整地層である。「文禄弐(1593)年」銘の刻書をもつ硯11を含み、豊臣期施工の可能性がある。

第3層：層厚15～30cmのにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土層である。瓦器・須恵器・土師器・布目瓦片を含む。

第4層：層厚10～40cmのにぶい黄褐色(10YR5/4)～暗褐色(10YR3/3)シルト～粘土質粗粒砂層で、重圏文軒丸瓦1・2と須恵器杯身3、布目平瓦4が出土した。8世紀後半までの遺物を含む。

第5a層：層厚10～30cmの暗褐色(10YR3/3)～明褐色(7.5YR5/6)粘土質粗粒砂の上部の一部は整地層、下部は地山層である。⇓印付近で第5a層の上半部9cmは暗褐～明褐色斑状の中礫～細礫混り泥質粗粒～中粒砂からなる整地層である。調査区東壁では、本層上面が朱雀大路の道路面と考えられ、北部で上面に層厚2～7cmで、直経1～2cmのチャート系の小石群(バラス)が分布するのが観察された。地山上に整地し、その上にバラスを敷いたとみられる。

第5b層：浅黄色(2.5Y7/3)粘土質粗粒砂の地山層である。

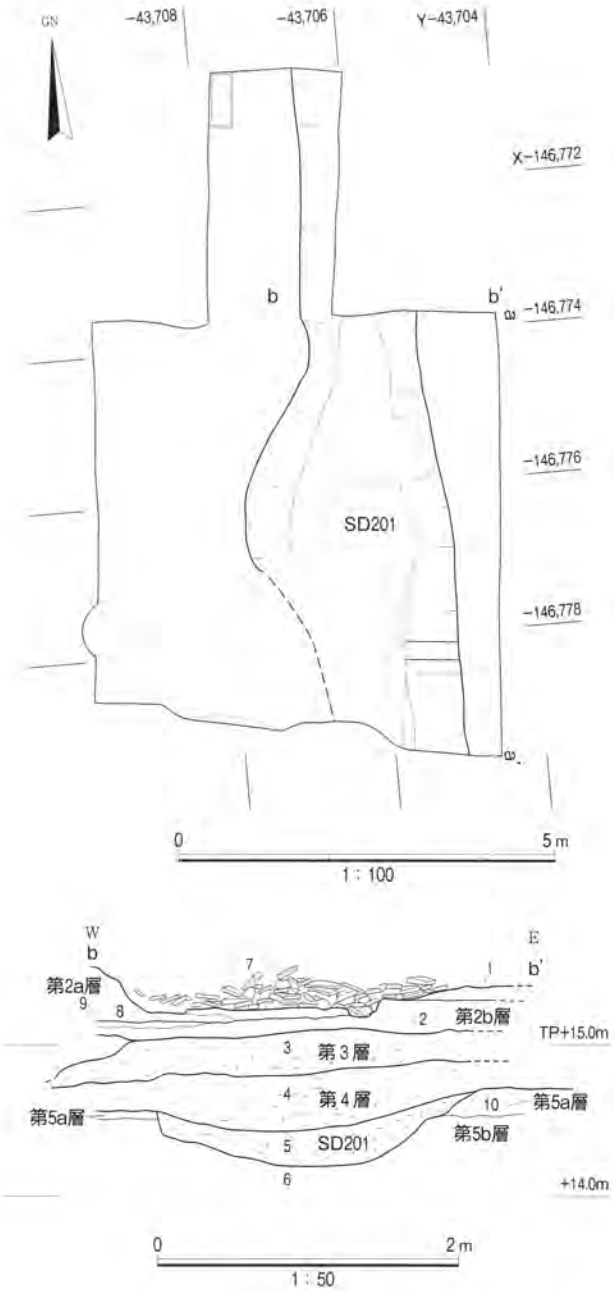
ii)遺構と遺物(図5～7)

a．古代(第5a層上面)

SD201　長さ9.3m以上、幅2.2～2.8m、深さ0.5mの正南北の南北溝で、灰黄褐色(10YR4/2)粘土質中粒砂を埋土とする。土師器・須恵器片や布目瓦片が出土した。遺物は細片で時期を限定できない。この溝芯から16.35m東側に、前期難波宮の中軸線の延長がはしり、東側の第5a層上面にはバラスがあり、道路面と考えられることから、朱雀大路(註1)の西側溝の可能性がある。施工された時期であ

1：暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂
2：暗オリーブ色(2.5Y3/3)粗粒砂
3：灰褐色(7.5YR4/2)粗粒砂
4：灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂
5：にぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒砂
6：暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂
7：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂
8：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂
9：漆喰を含む黄褐色(2.5Y5/3)粘土層粗粒砂
10：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂
11：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂
12：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂
13：炭を含む黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂質シルト
14：炭を多く含むオリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂質シルト
15：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂
16：暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂
17：暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂
18：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂
19：地山ブロックを含む明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質粗粒砂
20：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂
21：褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂
22：灰黄色(2.5Y6/2)粗粒砂質シルト
23：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土
24：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粗粒砂
25：明褐色(7.5YR5/6)粘土質粗粒砂
26：浅黄色(5Y7/3)粘土質粗粒砂
27：暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質粘土

図4　東壁地層断面図



1：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂
2：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂
3：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土
4：暗褐色(10YR3/3)粘土質粗粒砂
5：灰黄褐色(10YR4/2)粘土質中粒砂
6：浅黄色(2.5Y7/3)粘土質粗粒砂
7：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂
8：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂
9：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂
10：暗褐色(10YR3/3)粘土質粗粒砂

図5　第5a層上面遺構平面・断面図

るが、道路の整地層(第5a層の一部)は遺物を含まないことから、前期難波宮期のものと考えられる。

b．近世初頭(第2b層上面)

SP101　一辺0.15m、深さ0.25mの方形の杭穴で、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK102　東西1.0m、南北0.5m以上、深さ0.4mの土壙で、にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。土師器、備前焼擂鉢、瓦片が出土した。

c．近世(第2a層上面)

SK01　東西1.0m、南北1.7m、深さ0.5mの長方形を呈する土壙で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂質シルトを埋土とし、肥前磁器染付小碗8・白磁小杯9、瀬戸美濃焼陶器輪花皿10など、19世紀前葉の遺物を含む。

SK02　直径0.6m、深さ0.2mの円形の土壙で、暗褐色(10YR3/3)粗粒砂質シルトを埋土とし、17世紀後半の遺物を含む。

SK03　東西1.5m、南北1.0m、深さ0.6mの不整長方形を呈する土壙で、貝殻を多く含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂質細粒砂を埋土とし、19世紀前半の遺物を含む。

SK04　東西2.0m、南北1.3m、深さ1.4mの不整楕円形を呈し、瓦と焼土を多く含む褐色(7.5YR4/4)シルト質粗粒砂を埋土とし、19世紀中葉の遺物を含むことから、文久3(1863)年の御幸町大火の火事場整理のゴミ穴である可能性がある。

SK05　東西0.9m、南北0.5m、深さ0.1mの長方形の土壙で、炭・焼土を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂を埋土とし、18世紀後半の遺物を含む。

SK06　東西1.0m、南北1.0m以上、深さ0.6mの方形を呈する土壙で、暗褐色(10YR3/3)粗粒砂質シルトを埋土とし、17世紀後半の遺物を含む。

SK07　東西0.7m、南北1.3m以上、深さ0.3mの長方形を呈する土壙で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂を埋土とし、18世紀後半の遺物を含む。

SP08～10　いずれも直径0.6～0.7m、深さ0.2～0.3mの円形土壙に漆喰を多く含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂を充填していた。礎石の地固めと思われる。19世紀代の遺物を含む。

SK11　東西0.9m、南北1.7m、深さ0.7mの隅丸長方形を呈する土壙で、にぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する灰を埋土とし、18世紀前半の遺物を含む。

SK12　東西0.8m以上、南北1.5m、深さ0.7mの土壙で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂を埋土とし、土師器皿6、肥前陶器刷毛目碗7など、17世紀後半の遺物を含む。

SK13　東西0.5m以上、南北1.5m、深さ0.5mの土壙で、上部は炭を含む黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂質シルト、下部は炭を多く含むオリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂質シルトを埋土とし、19世紀前半の遺物を含む。

SK14　東西0.6m以上、南北1.7m以上、深さ0.3mの土壙で、暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂を埋土とし、肥前磁器染付碗5など、18世紀前葉の遺物を含む。

SK15　直径0.8m、深さ0.6mの円形土壙で、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂を埋土とし、

19世紀前半の遺物を含む。

SK16　東西0.7m以上、南北0.4m、深さ0.2mの土壙で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK17　長径0.5m、短径0.3m、深さ0.2mの土壙で、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK18　東西1.7m、南北2.1m、深さ1.0m以上の楕円形を呈する土壙で、灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂質シルトを埋土とする。18世紀前半の遺物を含み、井戸の可能性がある。

SE19　直経1.0mの掘形に、井戸瓦を用い、内径0.6mの井戸側を構築した井戸で、掘形は灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粗粒砂を埋土とし、18世紀前半の遺物を含む。井戸側内は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粗粒砂で埋まる。

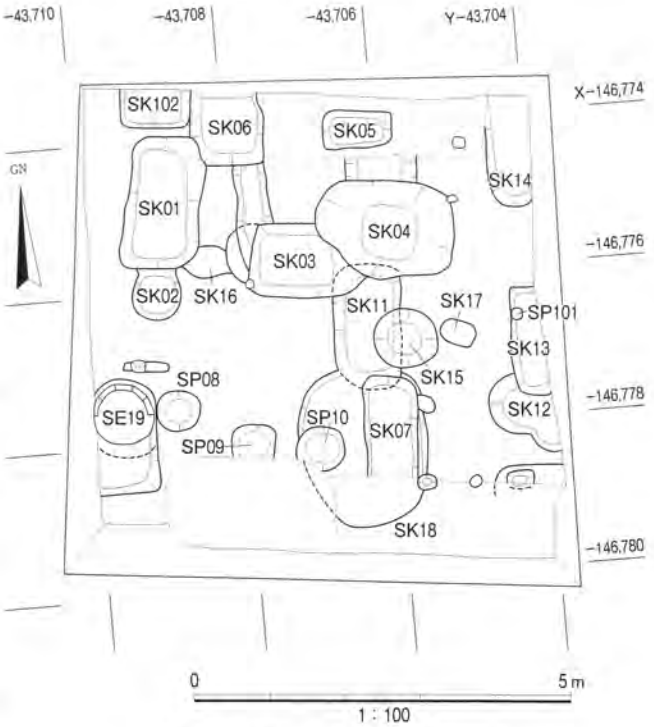


図6　第2a・2b層上面遺構平面図

iii)各層出土遺物(図7)

a．第4層

重圏文軒丸瓦1・2の計測値は表1のとおりである。1は6014型式に近い。2は第3圏内径82㎜が、

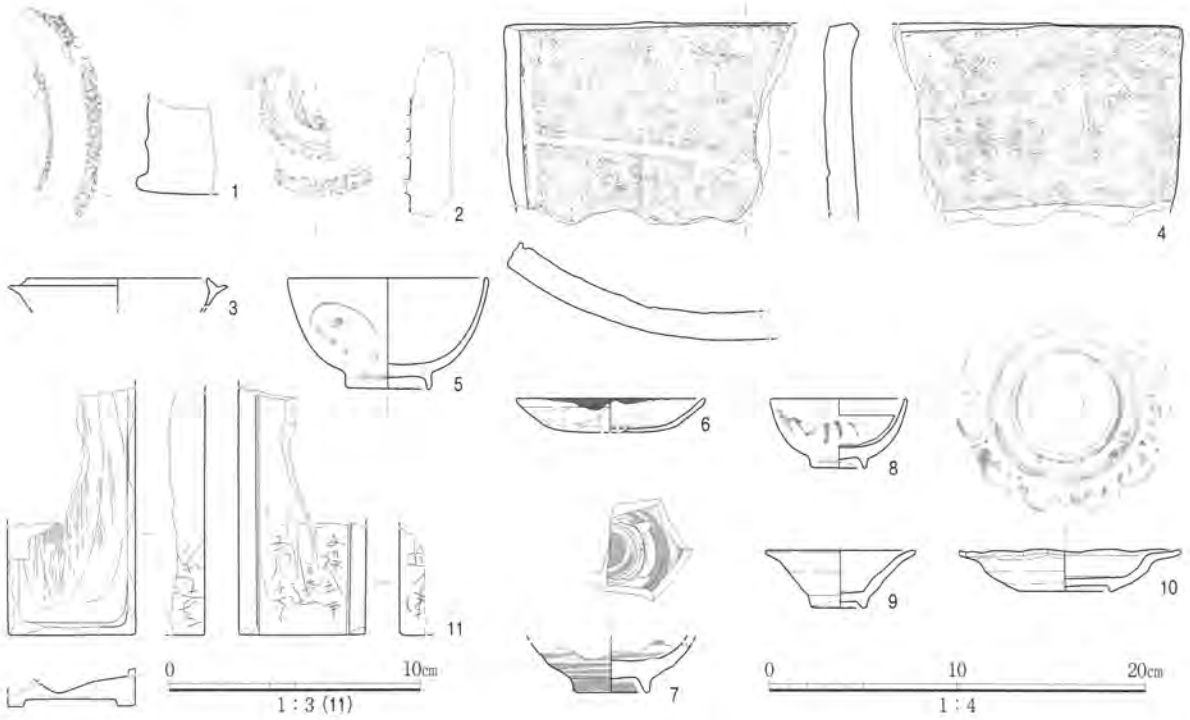


図7　出土遺物実測図

第4層(1～4)、SK14(5)、SK12(6・7)、SK01(8～10)、第2b層(11)

表1　重圏文軒丸瓦計測表(単位：mm)

遺物番号	型式番号	第1圏					第2圏					第3圏					内区径	外縁厚	外縁高	外縁形	第2圏幅	第3圏幅	第3圏と外縁間隔	瓦当径	瓦当厚
		内径	線厚	圏中央径	縁高	外径	内径	線厚	圏中央径	縁高	外径	内径	線厚	圏中央径	縁高	外径									
1		?	?	?	?	?	?	?		?	?	116	4	120	2	122	158	<6~10.5>	6	直立	?	19	13	174	<35>
—	6014 (参考)	36	4	40	2	44	73	4	77	2.5	82	116	4	119	2.5	123	135	7	11	直立	15	17	6	154	26
2		16	6	24	?	32	44	8	54	?	62	82	8	94	?	102	?	?	?	?	6	9	?	?	<22>

6010型式の同内径(81mm)に近いが、他の内径が大きく異なり、不明である。8世紀中葉の瓦である。須恵器杯身3はTK209型式に属し、7世紀前葉に位置する。平瓦4は幅3cmの模骨痕をもつ桶巻き作りである。

写真1　前期難波宮中軸線および朱雀門跡と調査地(南から)

図8　前期難波宮と今回の調査地
(条防復原線は[積山洋2013]による)

b．第2b層

石製硯11は長方形で、両側に高台をもち、裏面と両側面に文字の刻書をもつ。文字は裏面の「文禄弐年五月十七日」以外、不明である。

iv）SD201について

前期難波宮の中軸線は、真北に対して0度39分56秒東偏し、難波宮から10km近く離れた、堺市・大和川今池遺跡[大阪府文化財センター2010]で検出された「難波大道」は、0度42分39秒東偏することから、朱雀大路の中軸線もこれに近い傾きと考えられる。仮に難波宮中軸線を当地に延ばし(写真1・図8)、SD201の溝芯までの距離を計算すると16.35mという値が得られることから、朱雀大路の溝芯々間は32.7mの可能性がある。

図9は古代の道路を示したもので、これらの道路の規模と今回の発掘成果と比較すると、側溝の芯々間で、藤原京の朱雀大路は約25m、横大路は約32～35m、下ツ道は約24m、難波大道で約18.5mである。地方の大道である東山道・山陽道は9～12mであるから、今回の復元値32.7mは広く、大和の横大路級である。

側溝の規模としては、藤原京や横大路、下ツ道の大型側溝は、幅2.5m以上、深さ

1m以上のものもあるが、難波大道側溝の幅1.5～2.9m、深さ0.3～0.7mが古代道路の標準的な側溝の規模で、SD201は道路側溝として遜色ない。

難波京の施工が前期難波宮の時期まで遡るとすると、藤原京(690年着工：日本書紀)よりも古くなる。藤原京の例に当てはめると、条坊大路は1/2里(1里＝5町＝1,800尺＝約540m)で割り付けられている[黒崎直2000]。仮に難波京の条坊大路間に小路があると仮定すると、1/4里等間隔で割付けられたことになり、前期難波宮の基準尺は1尺＝0.292mであるから、1/4里＝131.4mとなり、朱雀門の東西軸(棟筋)から131.4mのところに東西道路芯があることになる。小路幅を16mと仮定すると、朱雀門の東西軸から約140m南に道路の南側溝があることになり、調査区内で検出されるはずだったが、発見されなかった。図8の「(仮)西南方宮外官衙」はこの推定東西小路上に位置し[市川創2015]、推定小路上にあるNW170次調査で、掘立柱建物が見つかっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1981]ことから、小路はなかった可能性がある。

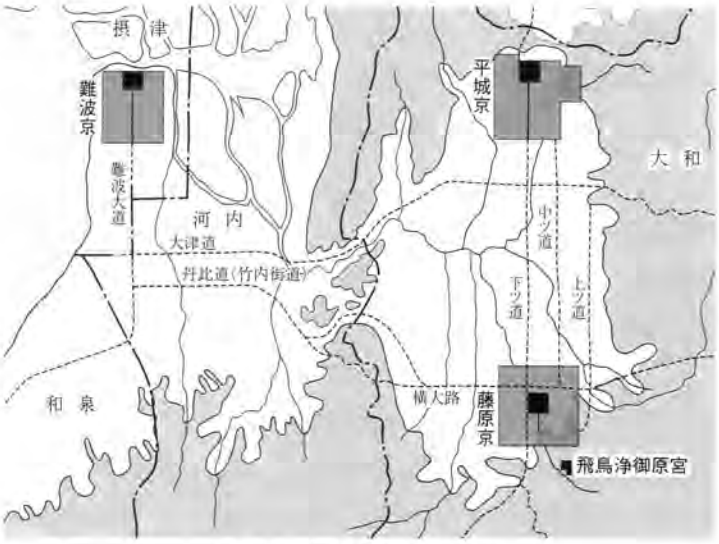


図9　古代の都城と主要道路
([奈良文化財研究所2002]よりトレース・加筆)

3)まとめ

今回、難波京朱雀大路の西側溝と思われる南北溝を検出した。大路の幅は溝芯々間で32.7mと推定され、大和の横大路級である。また江戸時代の盛土上で、17世紀後半～19世紀中葉の遺構を多く検出することができた。

今後、調査地と条坊の位置関係を予め正確に把握し、朱雀大路の延長上を注意深く調査することによって、資料は確実に増えていくと思われる。

註)

(1)前期難波京より後出の藤原京朱雀大路の存在については、学界でも異論はないであろう。前期難波宮に該当する難波長柄豊碕宮の工事開始は、孝徳紀白雉元(650)年10月条、「宮地に入るために壊された丘墓及び遷さるる人に物を賜う。将作大匠荒田井直比羅夫を遣わして、宮堺標を立てる」に求められ、翌年12月、「天皇、大郡より新宮に移り、難波長柄豊碕宮と号す」が同宮への正式な遷宮である。

しかし、工事開始から1年半遡る大化5(649)年、難波において四天王寺に仏像四躯を迎えるなど、難波の都としての整備に尽力した阿倍大臣倉梯麻呂が薨じた際、孝徳紀同年3月17日条に「天皇は朱雀門に幸じ、挙哀して慟ず。皇祖母尊、皇太子等、及び諸公卿悉く随いて哀哭す」(孝徳紀)とあるように、難波のどの宮かは詳らかではないし、「朱雀門」というのも『日本書紀』編纂時の潤色の可能性もあるが、「宮城南門」に重きが置かれ、そこでこのような公式行事が行われたことは疑えない。大和国との幹線道路とし

ての「難波大道」が、正方位で施工されていることからも、「宮城南門」の重要性は窺える。奈良時代においても平城宮朱雀門の正面の朱雀大路で、さまざまな行事が行われており、朱雀大路が都城制と切っても切れない関係にあるから、推定される南北道路を以下、難波京「朱雀大路」と称する。

参考文献

市川創2015、「邸宅か、官衙か－中央区上町１丁目の発掘成果から－」：『葦火』174号、pp.４－５

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1981、「難波宮跡第170次調査」：『昭和54年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.19－22

大阪府文化財センター2010、『大和川今池遺跡』Ⅲ

黒崎直2000、「藤原宮・京の範囲とその性格」：奈良文化財研究所編『研究論集』Ⅺ、pp.203－272

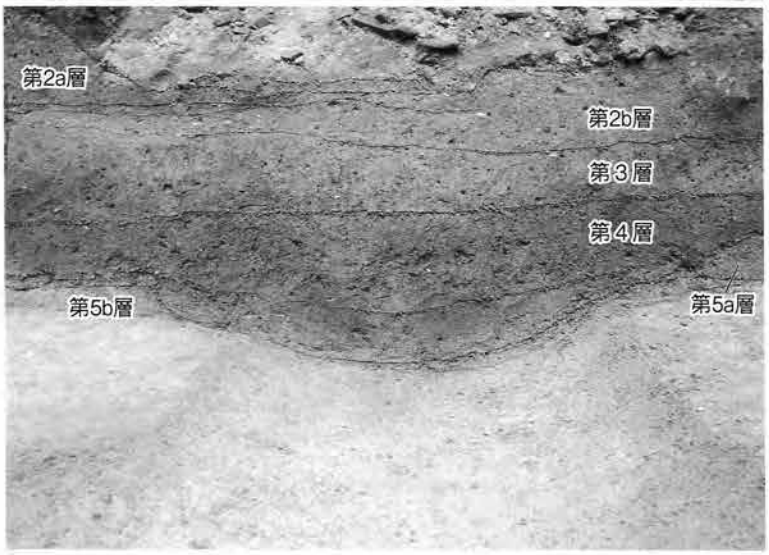
積山洋2013、『古代の都城と東アジア　大極殿と難波京』　清文堂出版

奈良文化財研究所2002、『日中古代都城図録』

SD201(南から)

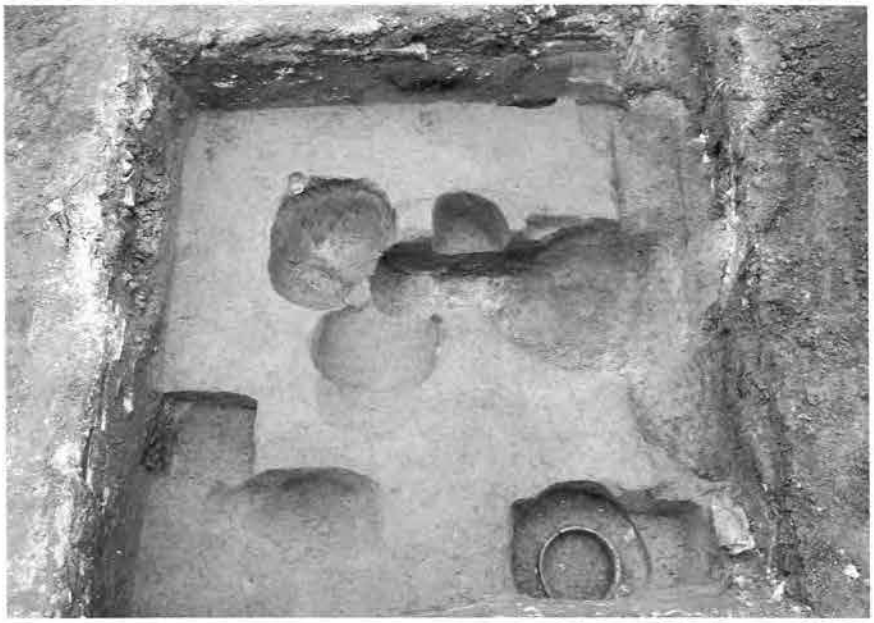
第5a 層上面
(西から)

SD201断面
(南から)

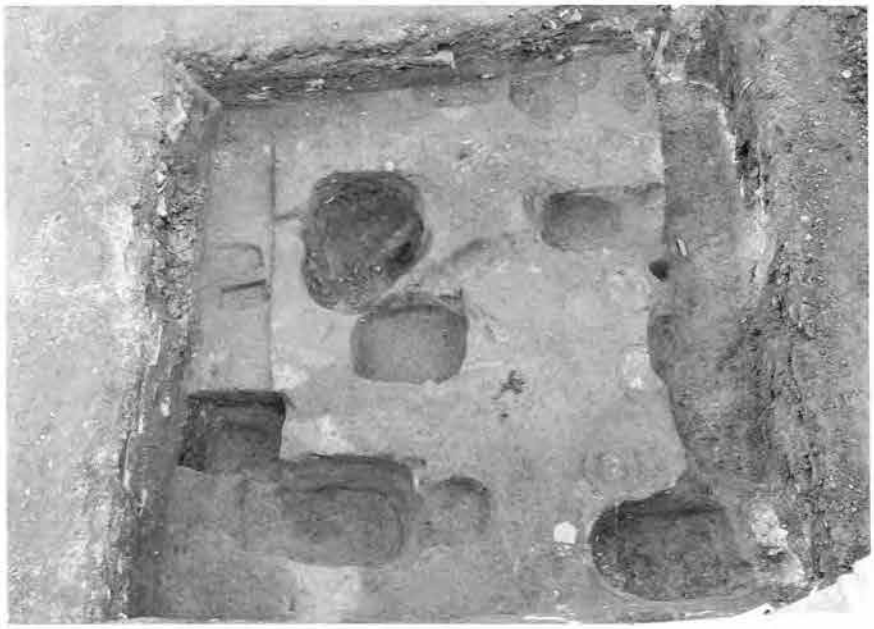


第４層上面
（西から）

第３層上面
（西から）



第2a 層上面
（西から）



中央区淡路町二丁目１他における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ14－１)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区淡路町２丁目１他
調 査 面 積　40㎡
調 査 期 間　平成26年10月24日～10月30日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　高橋 工、趙 哲済

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地周辺は中世から近世にかけての集落・都市遺跡である大坂城下町跡の中央部に位置する。また、近隣では弥生時代～古代の遺構・遺物も出土しており、難波砂州の形成と開発の関係が注目されている(図1)。調査地は難波砂州の先端部の古代に河口州1の湿地であった箇所に当ると考えられている[趙哲済2014・趙ほか2014]。

平成26年8月29日、当該地で大阪市教育委員会が実施した試掘調査により、地表下3mから下に中世の土器を含む遺物包含層と遺構面が検出されたのを受けて、調査地の北端に調査区を設定して本調査が実施されることになった(図2)。

調査は工事側による連壁工事と地表下3mまでの機械掘削の完了を持って、10月24日から開始した。東西5m×南北8mの調査区を設定し、重機と人力を併用して遺構遺物の検出につとめた。掘り下げの進行と同時に適宜に写真記録、図面記録を作成し、10月30日に調査を終了した。

調査地の基準点はMagellan社製ProMark3により測位した1地点と大阪市道路地図を併用して求めた座標に基づき、本報告では世界測地系の座標北を方位の基準とした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

なお、本報告の遺物に関する記述は、調査課学芸員の小田木富慈美が担当した。

2)調査の結果

i)層序

調査地の現地表の標高はTP+2.3m前後で平坦である。調査地の東面道路(中橋筋)はそれより少し低く、TP+2.0～2.1mである。調査は現地表から約3m重機掘削された後のTP−0.7～0.9mから開始

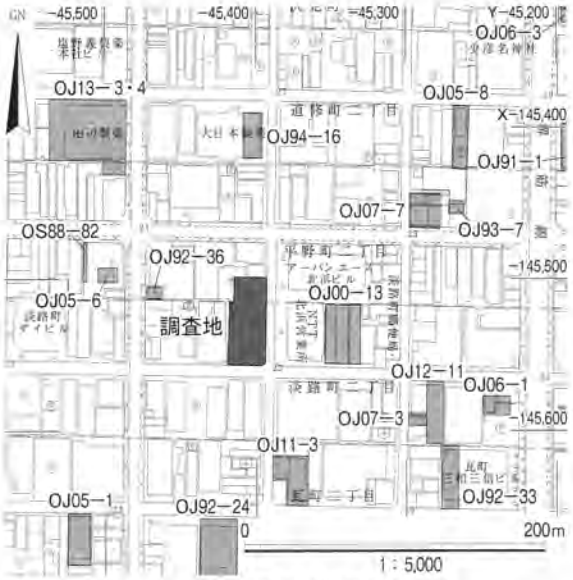


図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

した(図3・4)。

第0層は重機掘削された現代盛土層および重機掘削時の攪乱層である。

第1層は客土層である。暗灰黄色(2.5Y5/2)細礫質粗粒～中粒砂からなる。層厚は25cm以上あり、中位に客土作業の間隙期のものとみられる粗粒～細粒砂質シルト層(層厚3～12cm)を挟んでいた。SD01の埋立て時の上部埋土である。

第2層はSD01埋土中部の機能時堆積層である。黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土層で、最大層厚は20cmであった。豊臣期後期以前の遺物が出土した。

第3層は作土層およびSD01埋土下部層である。作土層とみられるのは調査区の南半部、SD01の南側に分布したオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒～中粒砂からなる。層厚は10cm余りである。上限は第0層で壊されて耕作面は確認できないが、分級が悪い割によく混じり合っていることから作土層と推定される。土師器・須恵器の小片が出土したのみである。SD01埋土下部層は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混り中～細礫質粗粒～中粒砂からなり、最大層厚は20cmである。分級が悪く、加工時形成層とみられる。SD01埋土中部層からは豊臣後期を中心とする時期の遺物が出土した。

第4層はSK23・24の埋土層である。2層に区分し、それぞれさらに2分できる。上部の第4a層はSK23の埋立て客土層と水漬き堆積層である。第4ai層は暗褐色(10YR3/4)細礫質粗粒～細粒砂からなる客土層で層厚は最大20cmである。第4aii層はSK23の下部を埋める暗灰黄色(2.5Y4/2)の上方細粒化するシルト質粗粒～細粒砂層(最大層厚20cm)で側方へ砂質シルト層に移化する。第4b層はSK24の水漬き堆積層である。第4bi層はSK24上部の細粒中～細礫質極粗粒～中粒砂層(最大層厚15cm)、SK24

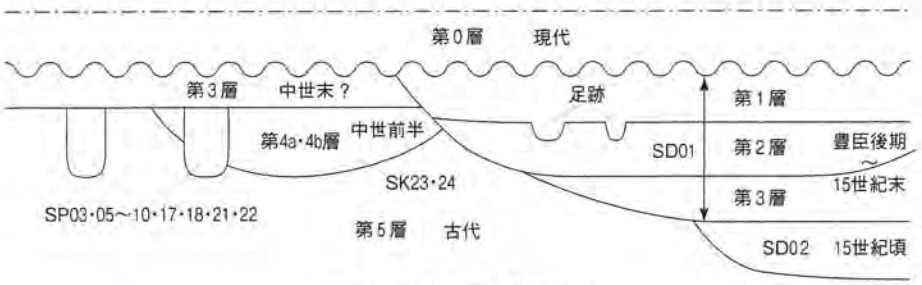


図3　地層と遺構の関係図

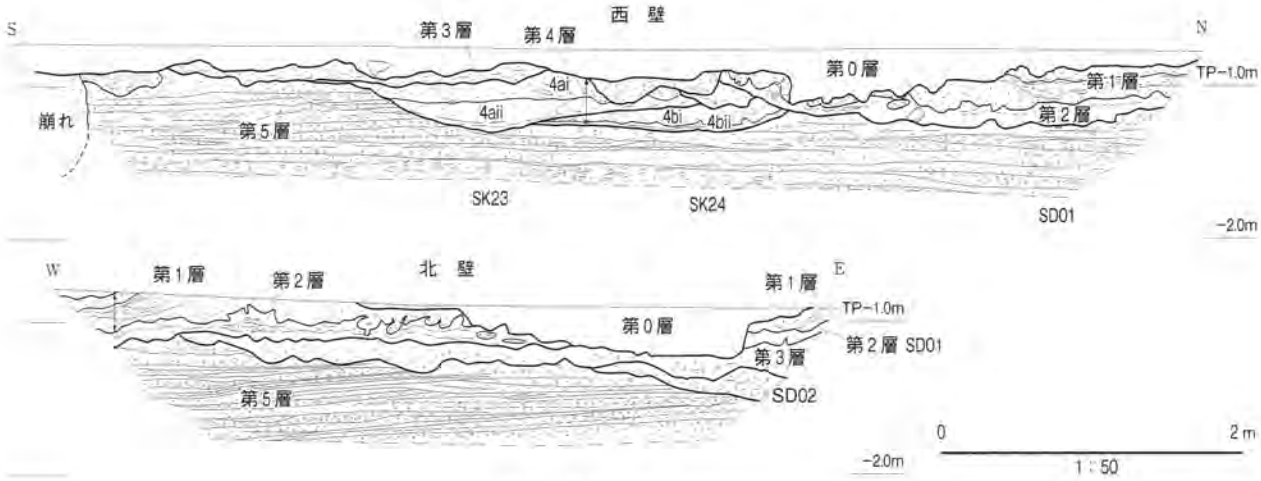


図4　調査区壁地層断面図

基底に沿うように堆積した第4bii層は暗灰黄色シルト質中粒～細粒砂層(層厚５cm)である。第4a層基底部からは瓦器片が出土した。

第５層は海浜成層である。褐色(10YR4/4)～黄褐色(2.5Y5/4)砂礫層で、平行葉理～低角板状斜交葉理が発達する。層厚は90cm以上で下限は未確認である。本層からは土師器・緑釉陶器が出土している。堆積環境の詳細はiii)堆積環境で述べる。

ii)遺構と遺物

a．古代の包含層出土遺物

第５層からは飛鳥～奈良時代初頭とみられる土師器杯Cおよび、平安時代前葉とみられる緑釉陶器が出土しているが、いずれも細片であり、図示し得なかった。

b．中世前半の遺構とその遺物(図５)

SK23･24は、第５層上面に重なる２基の土壙状の凹地である。SK24は南北2.4m以上、東西2.7m以上、深さ0.4mで、第4bi・ii層を埋土とする。SK23は南北2.7m、東西0.7m以上で、深さは0.5m、東肩は西トレンチの中で収まる。SK23下部とSK24の第4bi・ii層は水漬き堆積層であり、湧水を貯水する目的で掘られたと思われる。SK24が埋まった後にSK23を掘っている。SK24の底からは瓦器椀片が出土した。

c．中世後半の遺構とその遺物(図５～７)

SP03・05～10・17・18・21・22は第４層上面の小穴群であり、そのうちSP22は柱穴である。直径は0.2m強～0.6m弱であり、深さは0.1m未満で極めて浅い。その中で、SP05・07・09・10・22な

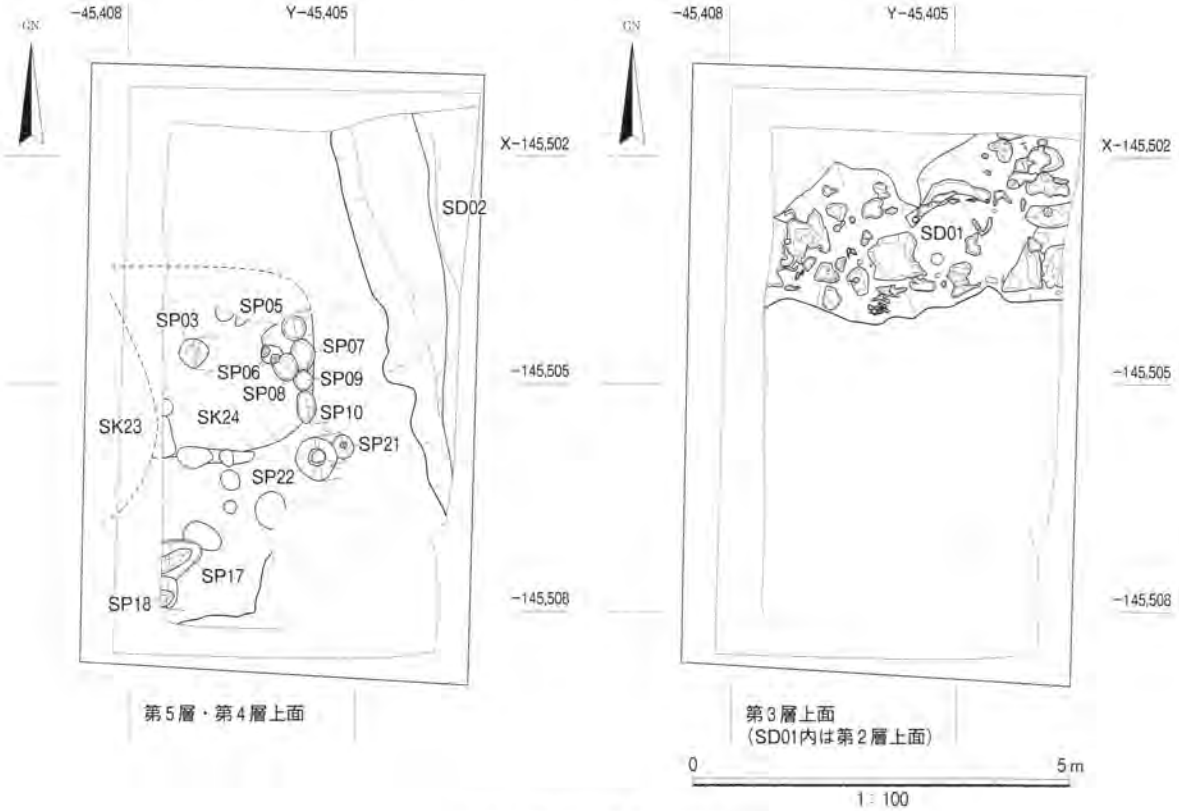


図５　調査区遺構平面図

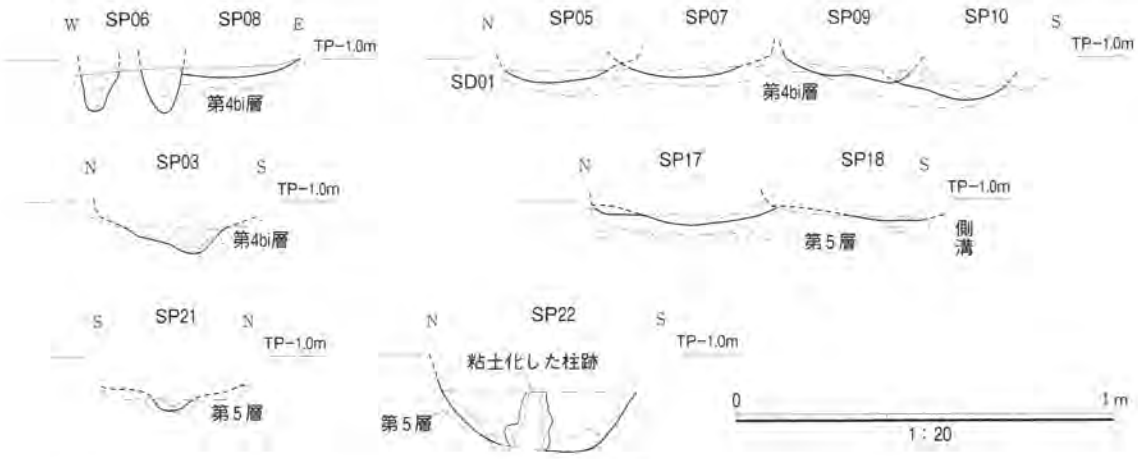


図6　遺構断面図

どは、概ねN15° Wに並び、その並びに対してSP03はSP05を起点に直交しているように見える。また、SP06・10・21などは、概ねN40° Wに並び、この延びとSP17・18やその周辺の小穴の並びは直交するように見える。これらは建物や柵を構成していたのであろう。いくつかの小穴から遺物が出土しているが、いずれも小片である。

SD02は第5層上位の第2層基底面で検出したN10° Wに延びる溝である。幅1.5m以上、深さ0.3mで二段落ちになっている。長さは5.7m以上ある。埋土はにぶい黄色(2.5Y6.4)中礫～細礫質粗粒～中粒砂で、埋土内に人間の攪拌によると思われる不規則・不定形な偽礫が多数認められる。出土遺物は土師器・須恵器・瓦質土器・常滑焼・備前焼・瓦であった(図7)。1～3は土師器である。1は椀で、口縁端部を軽くつまんで内湾させる。2は甕である。3は皿の口縁部片である。4は須恵器壺ないしは横瓶の口縁部である。5は瓦質土器の羽釜である。6は平瓦で、凹面には糸切痕が残る。以上のうち、1・2・4は奈良～平安時代に遡るものであるが、3・5・6は15世紀のもので、遺構の時期を示す。

SD01は第3層上面でほぼ東西(N89° E)に延びる溝である。幅3.0m以上、深さ0.4mで、長さ4.7m以上である。埋土下部は第3層の加工時形成層、埋土中部は第2層の機能時湿地性粘土層、上部は第1層の客土層である。第2層上面に第1層客土時のものとみられる偶蹄類の足跡が多数認められた。出土遺物は主として埋土中部の第2層から出土したが、埋土中/下部の第2/3層の掘り分けが不完全であったため、中部・下部埋土の遺物は区別できていない。15世紀末～豊臣後期の遺物として、土師器・瓦質土器・備前焼・丹波焼・肥前陶器・中国産磁器・瓦・壁土・木製品・銭・鉱滓・貝・昆虫遺体があり、このほか、古代の土師器・須恵器・瓦が出土した(図7)。7・8は土師器皿である。口縁部は緩やかに外反し、端部を軽くヨコナデしている。底部内面にはヨコナデの線が圏線状に巡る。9・10は須恵器杯Bの蓋と身である。11は須恵器甕の口縁部である。12は須恵質焼成の平瓦である。凸面には縄目タタキが見られ、凹面は布目圧痕の一部をナデですり消している。13は須恵質焼成の丸瓦である。凸面には縄目タタキ、凹面は布目圧痕が見られる。14は瓦質焼成の丸瓦で、凹面は布目圧痕が見られる。15は瓦質土器の羽釜で、焼成は土師質に近い。16は備前焼の擂鉢で、摺目は斜め方向に施す。17は中国産青磁で、鎬蓮弁文の碗である。18・19は中国産青花の碗である。20～22は肥前陶器である。20は碗、21・22は皿で、底部内面に胎土目痕が見られる。以上の遺物は、9・10・11～13が奈良時代の8世紀

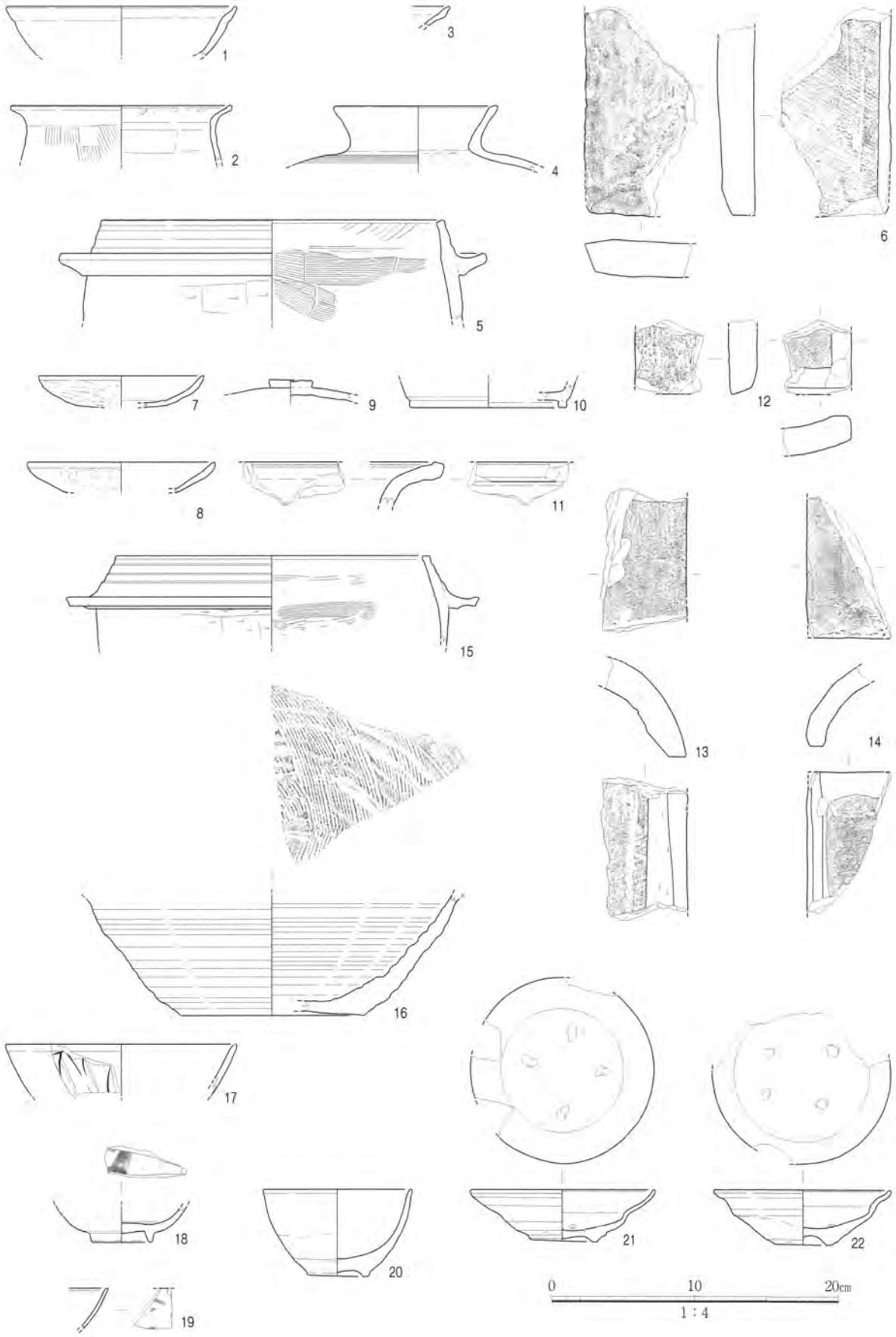


図７　出土遺物実測図

SD02(１～６)、SD01(７～22)

後半～末、17が13世紀、15が15世紀後葉に遡るほかは、おおむね豊臣後期に属する。

iii)調査地周辺の古代～中世の堆積環境と古地理について

第５層は平行葉理～低角板状斜交層理が顕著に発達する層厚２～４cmの砂薄層・砂礫薄層の細互層である。礫は亜円礫主体で3.0～0.5cmの中粒～細粒中礫および細礫が多く、砂は粗粒～中粒砂が主体である。薄層の傾斜の向きはN43° Wである。北壁中央の層序は図８に示すように、北壁中央の下限～TP－1.63m間では、逆級化あるいは逆級化－正級化成層が顕著に認められる。このような堆積状況、特に分級よく砂の細互層が堆積する状況は、静穏時の前浜堆積物に典型的に認められる粒子配列である[横川美和・増田富士雄1988]。したがって、第５層下半部は基本的に前浜堆積層と考えられる。

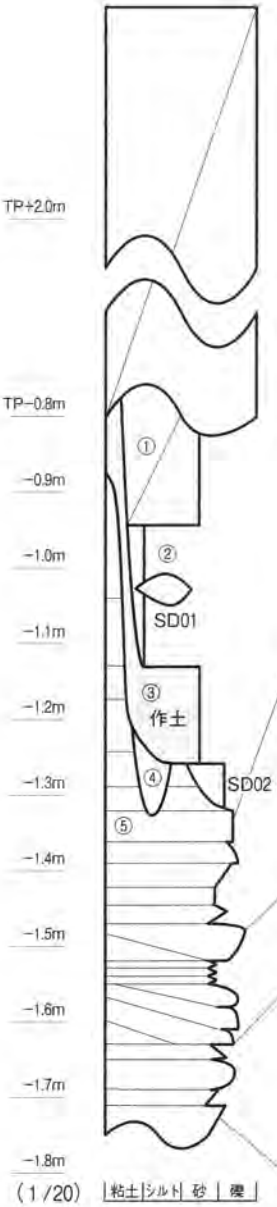
一方、図８のA1～３・B・C層は中礫を含む混合砂礫で、下限には侵食面が認められ、層厚が厚いという特徴がある。A1～３層は見かけ上の西から東に傾く低角のフォアセット層理の一部であり、B層にも微弱ながら南へ傾くフォアセット層理が認められる。

ところで、[中条武司2012]は難波砂州(難波砂堆)の地層形成は暴浪時に進行したと考え、特に、台風による営力が重要であったと指摘している。その際に堆積する砂礫層(バー堆積物)には陸方向に傾く平板状斜層理が特徴である。この知見に基づけば、前浜堆積層中にあり、陸側に傾斜する層理をもつA・B層はバー堆積物の一部と考えられ、暴浪時に前浜に乗り上げ、砂州を嵩上げし成長させていったと考えられる(註１)。A・B層の各上位には、相対的に細粒の逆級化成層や正級化成層が重なり、しだいに平穏な波況になっていった状況を示すものと推定される。一方、C層以上では層理が明瞭でなく、分級も悪いので、当該地が離水後、後浜に打ち上げられた砂礫が擾乱される過程で混合していったものと推定される。

第５層の堆積時期は、包含する遺物が平安時代初頭以前であること、第５層上面の遺構出土遺物に平安時代後半の遺物が含まれることから、第５層の離水は平安時代中頃までに行われたと考えられる。道修入江の南にあり、河口州１[趙ほか2014]の中央部にある当該地付近は、平安時代前葉頃までは砂浜海岸であったと考えられる(図９)。しかし、近隣のOJ92－36･94－16･00－13･11－３次調査地では、古代～中世の古土壌～湿地堆積層が分布している。従来、当該地周辺は古代難波宮期以来、河口州１の中の湿地であったと考えられてきたが、この考えは再検討の必要がある。なお、第５層やその直上の遺構から、飛鳥～奈良時代の遺物も少なからず出土していることから、第５層を堆積させた古代前半の砂浜海岸の近隣には、居住域が隣接していたものと推定される。

道修町通りより南にある当該地で、船場城下町の町割りがつくられた豊臣後期以降のSD01や周辺調査地(例えばOJ94－16・00－13・11－３など)の遺構が東西や南北を向くのに対して、本調査地で見つかった中世後半の溝や小穴群の並びは、北北西－南南東～北西－南東方向である。また、OJ94－16次調査地の16世紀前半～中頃の溝SD901も北で少し西に傾いている。これらは中世後半の町並みの方向を示すものと考えられる。この方向は、古代の海岸線にほぼ直交することから、当該地周辺には古代の地形が中世後半にまで残っていたと考えられ、その地形に規制された方向であったと推測される。

４)まとめ



堆積柱状図(左)および柱状対比図(図９)の位置図
([趙2014]；図１に加筆して作成)

①～⑤：地層番号

TP－1.32～－1.34m(上限､層厚２cm以上)が塊状の混合砂礫層
TP－1.34～－1.37m(層厚３cm)細粒中礫－細礫で粗粒砂支持の正級化成層
TP－1.37～－1.39m(層厚２cm)が中粒中礫－細礫と極粗粒～粗粒砂からなる
混合砂礫の正級化成層(C層)
TP－1.39～－1.42m(層厚３cm)が極粗粒砂～粗粒砂－細粒中礫～細礫で
基質が極粗粒～粗粒砂からなる混合砂礫の逆級化成層
TP－1.42～－1.45m(層厚０－２cm)が楔形に挟まる極粗粒砂層
TP－1.45～－1.47m(層厚２cm)が細礫から粗粒砂の逆級化成層
TP－1.47～－1.52m(層厚５cm)が極粗粒～粗粒砂と細礫－粗粒中礫の
混合砂礫からなる逆級化成層(B層)
TP－1.52～－1.55m(層厚３cm)が極粗粒砂と粗粒砂からなる細互層
TP－1.55～－1.58m(層厚３cm)が極粗粒砂－中粒中礫－粗粒砂からなる逆級化－正級化成層(A３)
TP－1.58～－1.61m(層厚３cm)が中粒中礫～細礫と極粗～粗粒砂からなる混合砂礫の塊状で
上部が正級化成層(A２)
TP－1.61～－1.63m(層厚２cm)が細礫－細粒中礫の基質が粗粒砂で､上部が正級化成層(A１)
TP－1.63～－1.65m(層厚２cm)が細礫－粗粒砂の正級化成層(下底部に極薄い逆級化成層を伴う)
TP－1.65～－1.69m(層厚４cm)が粗粒～極粗粒砂－細粒中礫～細礫－粗粒砂の逆級化－正級化成層
TP－1.69～－1.71m(層厚２cm)が極粗粒砂－中粒～粗粒砂の逆級化成層
TP－1.71～－1.75m(下限､層厚４cm以上)は細礫－中粒～粗粒砂の逆級化成層

註)混合砂礫：粒度に２つ以上のモードがある礫～砂の混合堆積物､いわゆる砂礫

図８　北壁中央付近の堆積相柱状図

本調査では、15世紀頃の溝や建物を構成したとみられる小穴、および中世末～豊臣後期の溝を検出した。また、古代前半には当地が砂浜海岸であったと推定した。近隣の調査地では古代～中世の古土壌～湿地堆積層が分布しており、微小景観の復元が課題となる。

道修町通りより南にある当該地周辺では、船場城下町の町割りがほぼ東西や南北を向くのに対して、中世後半の町並みの方向は北北西－南南東～北西－南東方向であったと推定される。

調査地周辺は大阪が繁栄した礎となった豊臣期～徳川期の大坂城下町遺跡の中心地域であるとともに、弥生～古代・中世には大阪湾に面した難波砂州に立地した沿岸低地の遺跡でもある。今後も埋蔵文化財の(記録)保存と活用の観点で、より慎重な調査が望まれる。

註)

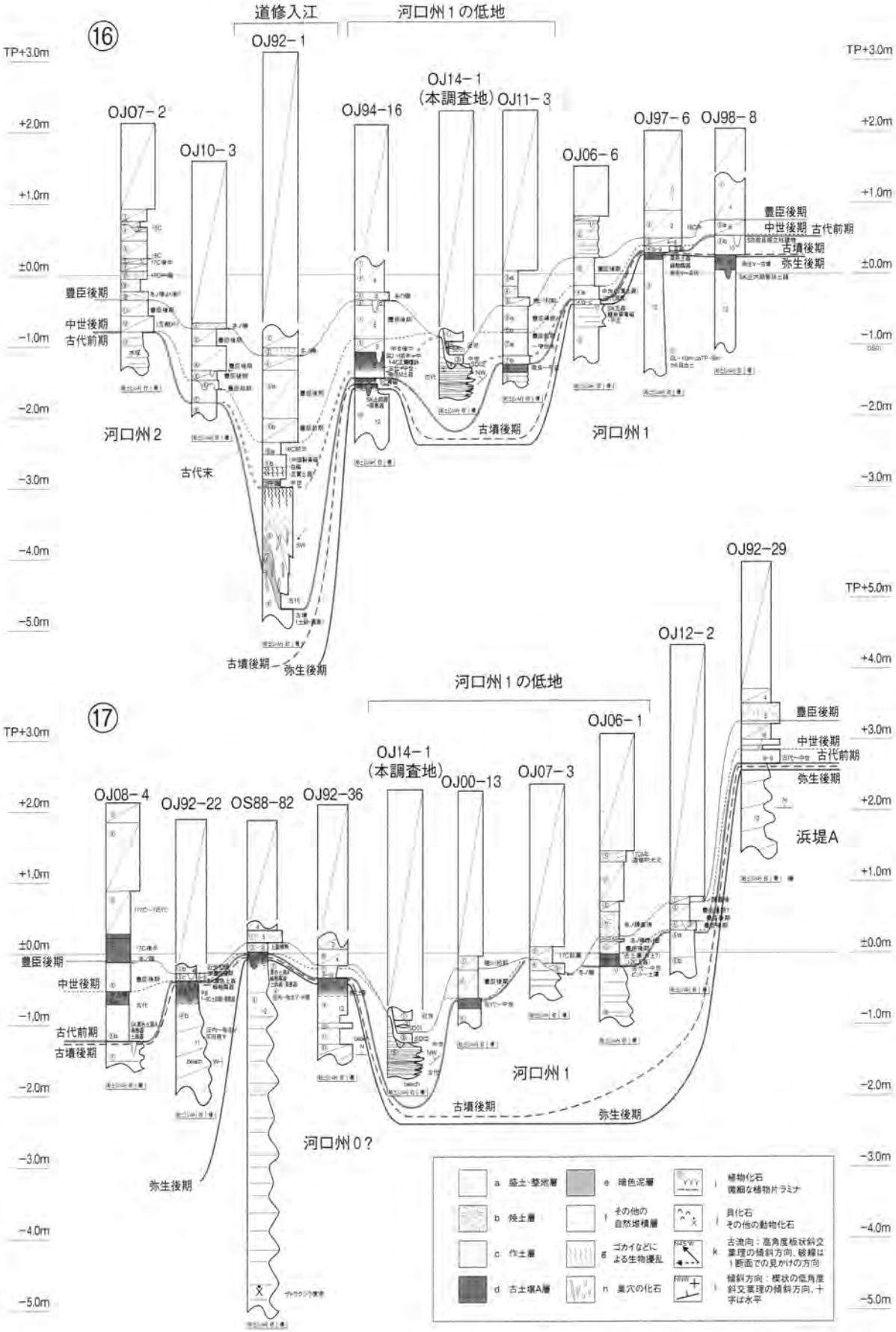


図9　OJ14−1調査地周辺の柱状対比図

[趙2014]の図3・4の一部をもとに加筆・編集して作成。

(1)前浜堆積物の成層構造について、大阪市立自然史博物館の中条武司氏からご意見を伺った。記して謝意を表する。

引用・参考文献

趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」:『平成21～25年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A) 大阪上町台地の総合的研究―東アジア史における都市の誕生・成長・生成の一類型―』、pp. 9 - 22.

趙哲済2014、「難波砂州北部～天満砂州南端部の表層地質に関する覚え書」:『平成21～25年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A) 大阪上町台地の総合的研究―東アジア史における都市の誕生・成長・生成の一類型―』、pp.23 - 36.

中条武司2012、「恵美須遺跡第6層上部の海浜堆積物」:『大阪市浪速区恵美須遺跡発掘調査報告』、pp.77 - 79.

横川美和・増田富士雄1988、「前浜堆積物の粒子配列―茨城県鹿島郡荒野海岸での観察例―」:『月刊地球』、7、pp.453 - 457.

図版一

調査区遠景（西から）

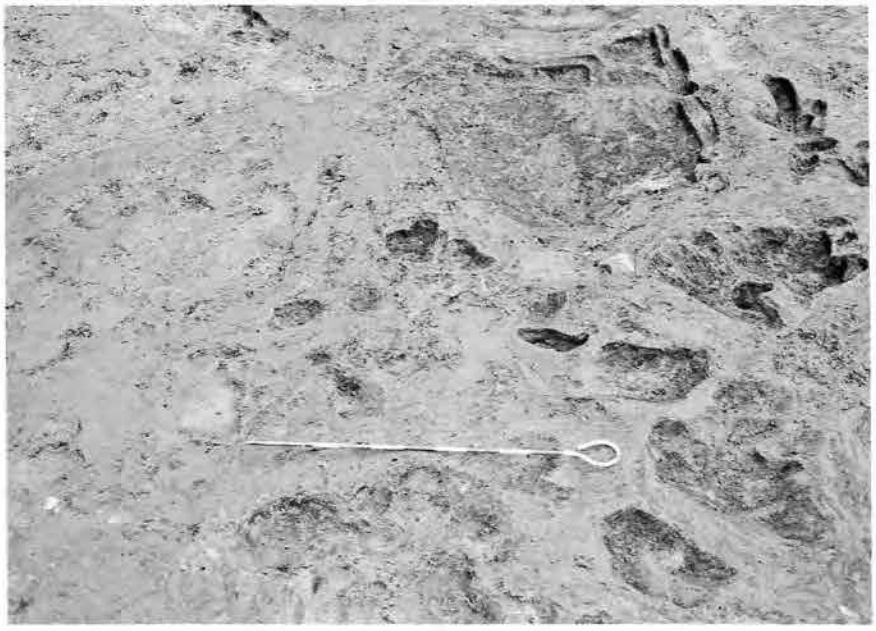
地層断面
（北壁；南東から）

地層断面
（西壁；北東から）

SD02・ピット群
（第５層・第４層上面
；東から）

SD01
（第３層上面；東から）
SD01内は第２層上面

SD01埋土の粘土層
（第２層）上面の足跡群



中央区和泉町二丁目37における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS14－３)報告書

調 査 個 所　中央区和泉町２丁目37
調 査 面 積　49㎡
調 査 期 間　平成26年６月９日～６月18日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　高橋 工、岡村勝行

1）調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西斜面にあり、大坂城跡の西部に位置する。周辺の半径200mの範囲では、これまで10数件の調査が行われ、古墳時代中期から徳川期にいたる多種多様な遺構・遺物が発見されている。西南西100mのOS07－10次調査では、古墳時代中期の円筒埴輪、奈良時代、室町時代の遺物のほか、豊臣後期から徳川期にかけての井戸や土壙が検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。北西150mのOS12－19次調査では、８世紀後葉～９世紀初頭の遺物がまとまって出土し、後期難波宮後半以降の人間活動が確認されている[大阪文化財研究所2012]。また、北東50mのOS02－８次調査(南大江小学校敷地内)では、豊臣氏大坂城の建造に使われた瓦を供給した達磨窯や日本初の木製瓦笵が発見され、全国的に注目された[大阪市文化財協会2003]。また、こうした調査成果を集約し、古地形を復元した結果、本調査地の西数十mには北北西－南南東方向に延びる開析谷(「南大江谷」と呼称)が埋没していることが明らかになっている[趙哲済ほか2014]。

大阪市教育委員会が平成26年５月19日に行った試掘調査の結果、現地表下約1.0m以下の深さで豊臣期～徳川期(17世紀代)の遺物包含層および遺構面が検出され、本調査を実施することになった。６月９日、敷地北寄りに、幅７m、長さ７mの規模で調査区を設定した。重機で現地表下1.0mまで近・現代盛土層を掘削し、その後、慎重に人力によって掘り下げながら、遺構・遺物の検出に努め、随時、写真・図面による遺構・地層の記録を行った。地山上面の調査では、地形が北西隅に大きく落ち込んでいたが、安全面を考慮し、地表下2.7mまでを確認することとした。13日に記録や機材の撤収など

図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

の作業、18日に現地におけるすべての作業を終え、発掘調査を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)である。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

敷地の現地表面の標高はTP+7.9m前後とほぼ平坦である。TP+5.2mまでの地層を第1～4層に大別し、第3層を細分した。

第1層：近現代の盛土および攪乱層である。中には1945(昭和20)年の大阪大空襲による焼けあと整

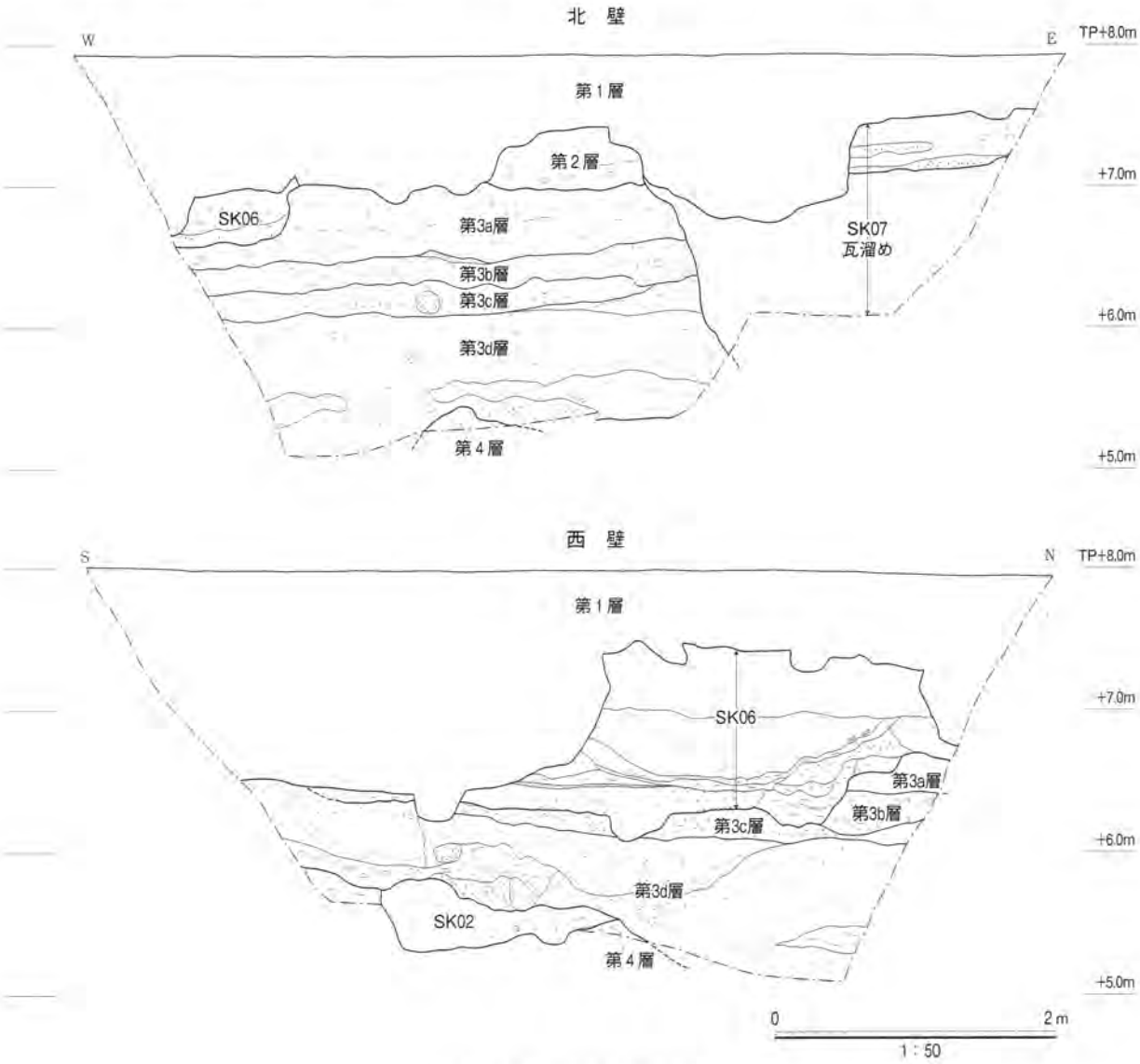


図4　北壁・西壁地層断面図

理に伴う焼土層、焼けた瓦を多量に投棄したゴミ穴も含まれる。層厚は40～170cmである。

第２層：黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト～黒褐色(10YR3/2)細粒砂からなる盛土層で、最大層厚は40cmである。18世紀以降の遺物を含み、上面で土壙SK06～08、井戸SE09・10などが検出された。

第３層：灰オリーブ色(7.5Y6/2)粘土質シルト偽礫を含み、にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトを主体とする盛土層で、層厚は70～160cm以上である。遺物は古墳時代の円筒埴輪、飛鳥時代の土器以外確認できなかったが、周辺の調査状況から豊臣後期以降の盛土である可能性が高い。ａ～ｄの４層に細分した。

第3a層はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトの偽礫を主体とし、層厚約50cmである。

第3b層は下位の段丘構成層に由来する灰オリーブ色(7.5Y6/2)粘土質シルトの偽礫を主体とし、層厚20cmである。

第3c層はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトの偽礫を主体とし、層厚10～20cmである。

第3d層は灰オリーブ色(7.5Y6/2)粘土質シルトの偽礫混りにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトである。層厚は調査区北西に向けて増し、60～100cm以上である。

第４層：灰オリーブ色(7.5Y6/2)粘土質シルトからなる段丘構成層で、層厚は20cm以上である。上面でSK02～05、および地すべり跡SX01を検出した。

ⅱ)遺構と遺物(図５～８)

ａ．飛鳥時代以前(図５・８)

SX01　調査区西側の地山上面で南北長3.0m分検出された地すべり跡である。滑り面に最大厚３cmの暗褐色細粒砂質シルトが弧状に入り込んでいた。SK02～05の下位で検出され、７世紀中頃以前の地震によるものと推定される。

特記される遺物として、第3d層から出土した円筒埴輪１がある。低平なタガを有し、外面を１cm当り６本と粗いナナメハケで調整し、古墳時代中・後期のものと考えられる。

ｂ．飛鳥時代(図５・６・８)

調査区西壁近く、第４層上面で４基の土壙を検出した。

SK02　南北1.7m以上、東西0.6m以上、深さ0.5m以上である。SK04・05に切られる。埋土はにぶい黄褐色偽礫混り細粒砂質シルトで、須恵器杯G6が出土した。口径9.1cm、器高3.9cmである。

SK03　東西0.4m以上、南北0.6m、深さ0.1mで、SK05に切られる。埋土はに

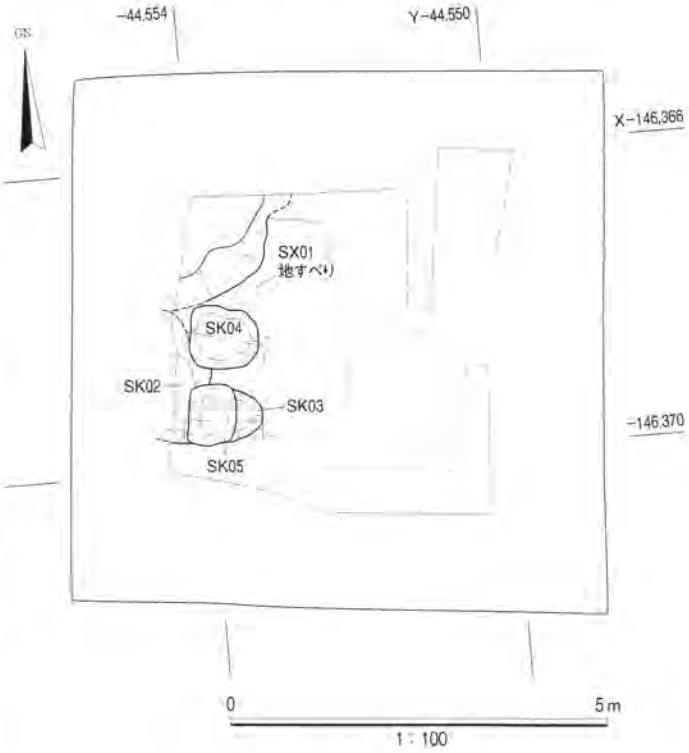


図５　第４層上面遺構平面図

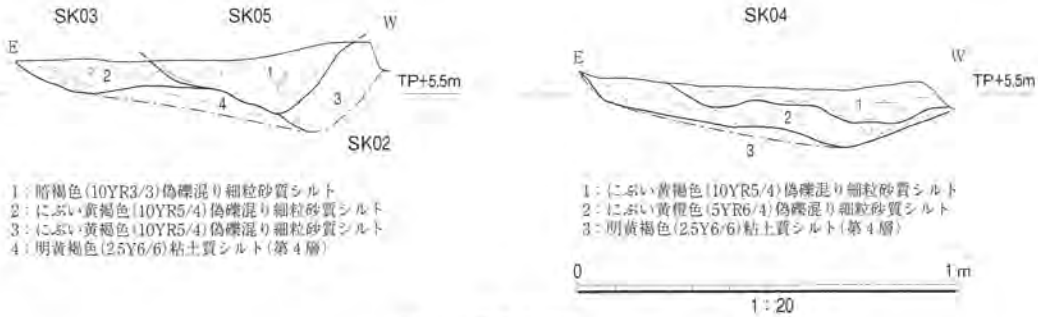


図6　遺構平面図

ぶい黄褐色偽礫混り細粒砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

SK04　長さ0.9m、幅0.8m、深さ0.2mの隅丸方形の土壙で、埋土は2層に分かれる。ともに偽礫を含み、上層はにぶい黄褐色細粒砂質シルト、下層はにぶい黄橙色細粒砂質シルトである。土師器甕、甑の細片が出土した。

SK05　長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.2mの長方形の土壙で、埋土は暗褐色細粒砂質シルトである。土師器杯C3・高杯4、須恵器杯G5が出土した。3は復元口径13.6cm、器高4.6cmで、内面に放射状暗文を施す。外面は磨滅により、詳細は不明である。5は口径9.9cm、器高3.2cmである。

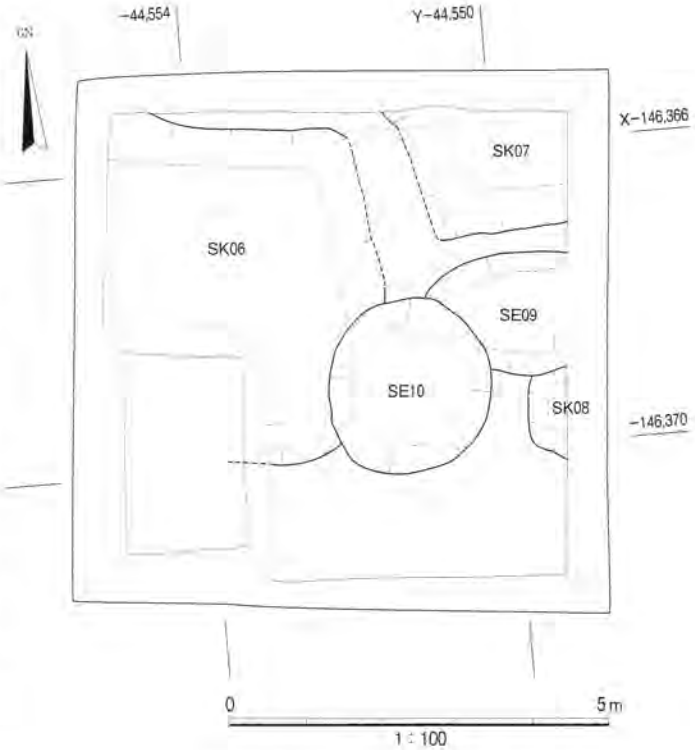


図7　第2層上面遺構平面図

このほか、第3d層から土師器鍋2が出土した。口径32.3cmで、頸部外面のユビオサエ痕が顕著である。

以上の遺物は概ね前期難波宮期に属する。

c．徳川期以降(図7)

第2層上面で、土壙SK06～08、井戸SE09・10を検出した。SK07は瓦溜で、SE09・10は粗粒砂で埋め戻されていた。出土遺物からいずれも18世紀以降に属する。

3)まとめ

本調査は小規模であったが、下記の調査成果が得られた。

①周辺ではこれまで古墳時代中期の円筒埴輪が知られていたが、今回、新たな資料が加わり、周辺に複数の時期にわたる古墳群が存在した可能性が高まった。

②「南大江谷」に連なる地すべりの跡を検出し、周辺の古地形を復元する上で新たな情報を得ることができた。

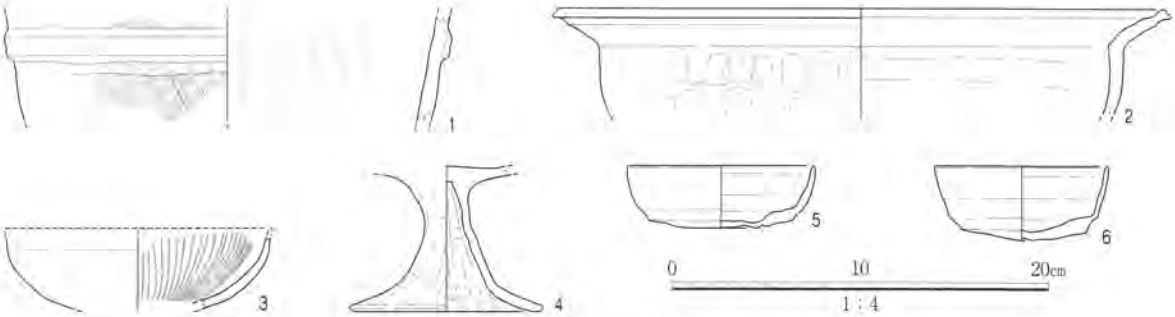


図８　出土遺物実測図

SK02(６)、SK05(３～５)、第3d層(１・２)

③この地すべりは地震によるものと思われ、時期は７世紀中頃以前と考えられる。

④前期難波宮期の遺構・遺物が検出され、当該期の人間活動の一端が確認できた。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「大坂城跡の調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』、pp.49－74

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大坂城跡発掘調査(OS07－10)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.125－134

大阪文化財研究所2012、『中央区農人橋二丁目における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS12－19)報告書』

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：『難波宮址の研究』第十一、pp.253－264

趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」：脇田修編著『大阪上町台地の総合的研究』平成21～25年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書、巻頭図版１～７・pp.9－22

調査地とその周辺(南から)

北・西壁地層断面(南東から)

古代遺構・地すべり跡検出状況
(東から)

平成26年度特別史跡大坂城跡豊臣期石垣公開事業にかかる
発掘調査(OS14－４)報告書

調査個所	大阪市中央区大阪城　大阪城公園内　本丸地区
調査面積	485.1㎡
調査期間	平成26年８月18日～平成27年２月４日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、京嶋 覚、櫻田小百合

1)調査に至る経緯と経過

調査地は特別史跡大坂城跡の本丸地区に位置する。徳川期天守の南東に位置し、現存する金蔵(重要文化財)の南および東に当る(図1・2)。本調査地北側では、1984年に配水管埋設工事に伴って、南北2つの調査区を設定してOS84-17次調査が行われた[大阪市文化財協会1985・2002]。両調査区では豊臣期大坂城詰ノ丸の外周を巡る石垣が検出され、また北区では詰ノ丸の石組溝、南区では中ノ段の遺構が検出された。この調査は、豊臣期大坂城を知る上で極めて重要な成果となった。

大阪市により、上記の豊臣期大坂城の石垣を再発掘して一般市民に公開するための整備事業が計画され、2012年度に試掘調査が行われた。その結果、本格的な発掘調査を実施して徳川期の遺構の状況を確認するとともに、豊臣期石垣の現況確認を行うことが必要と判断された。これにより、2013年度にOS13-11・38次の2調査が実施された(図2)。

OS13-11次調査では徳川期大坂城の金蔵に係わる区画施設とみられる南北方向の石列と石組溝が検出されたほか、瓦廃棄土壙群が検出され、三葉葵文鬼瓦など徳川期大坂城の瓦が多数出土した[大

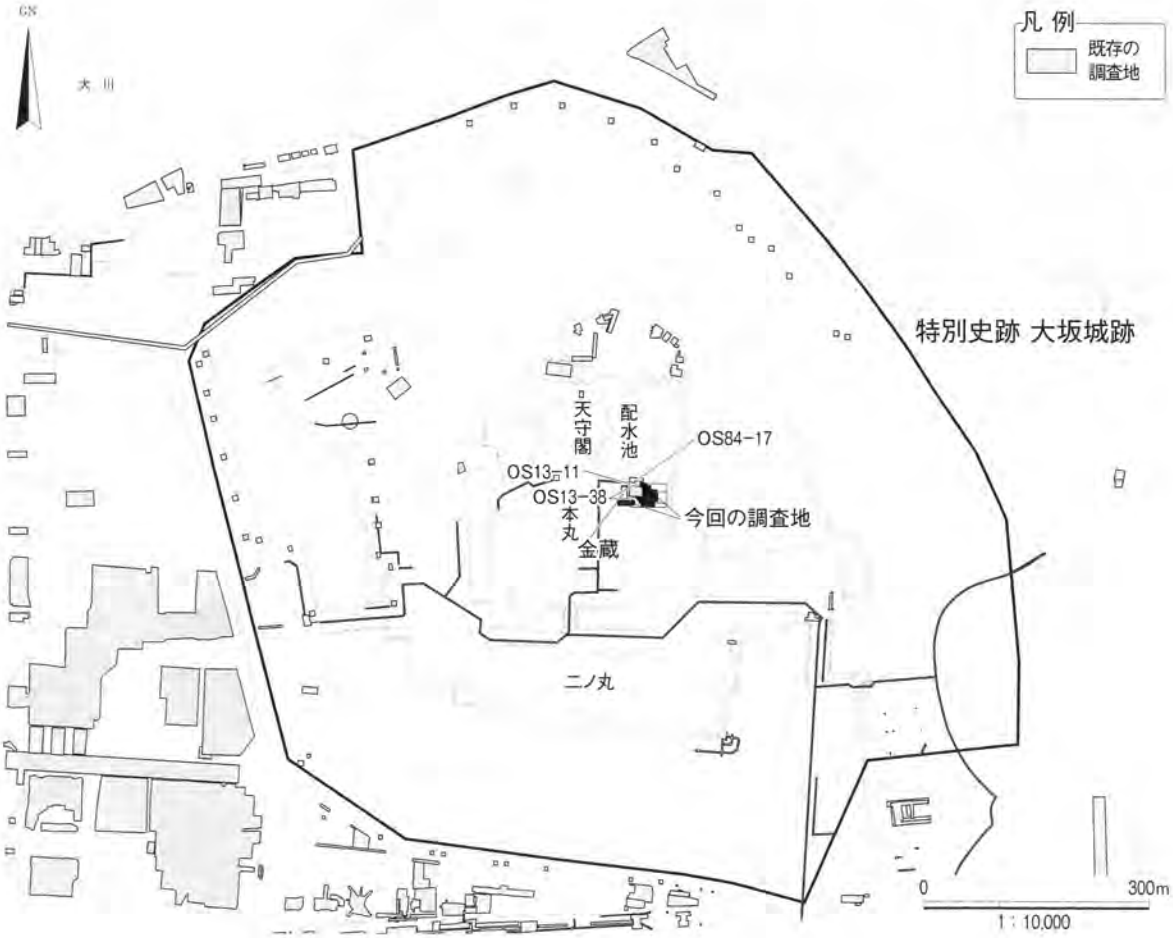


図1　調査地位置図

阪文化財研究所2014a]。

OS13－38次調査では、豊臣期石垣の再発掘調査とOS13－11次調査で検出された金蔵の区画施設とみられる石列および石組溝の南側への延伸状況確認のための発掘調査が行われるとともに、豊臣期大坂城中ノ段と下ノ段を区画する石垣の位置を確認するための動的コーン貫入検査が行われた[大阪文化財研究所2014b]。この調査により、金蔵の区画施設に係わる石列の南の延長部分を検出したほか、金蔵南側において東西方向の石組溝が新たに検出された。また、コーン貫入検査では豊臣期大坂城中ノ段の石垣あるいは裏込石が検出された。

こうした経緯により、今回の調査は、金蔵に係わる南北方向の石列の南側への延長状況および東西方向の石組溝の西側への延長状況を確認するとともに、OS13－11次調査区以東の徳川期の遺構の状況を確認することを目的として調査を行った。

調査は2014年８月18日に準備工を開始し、８月21日から本格的な調査を開始した。調査は金蔵の南側の西調査区と東側の東調査区の２つの調査区を設定して行った。このうち東調査区はOS13－11次調査地の東側に当り、OS13－38次調査においてコーン貫入検査のため一部調査を行っている部分である。東調査区は掘削土置場確保のため東側約３分の２の調査を行った後、反転して西側３分の１の調査を行った。西調査区は、OS13－38次調査区の南から西にかけて調査区を設定して行った。

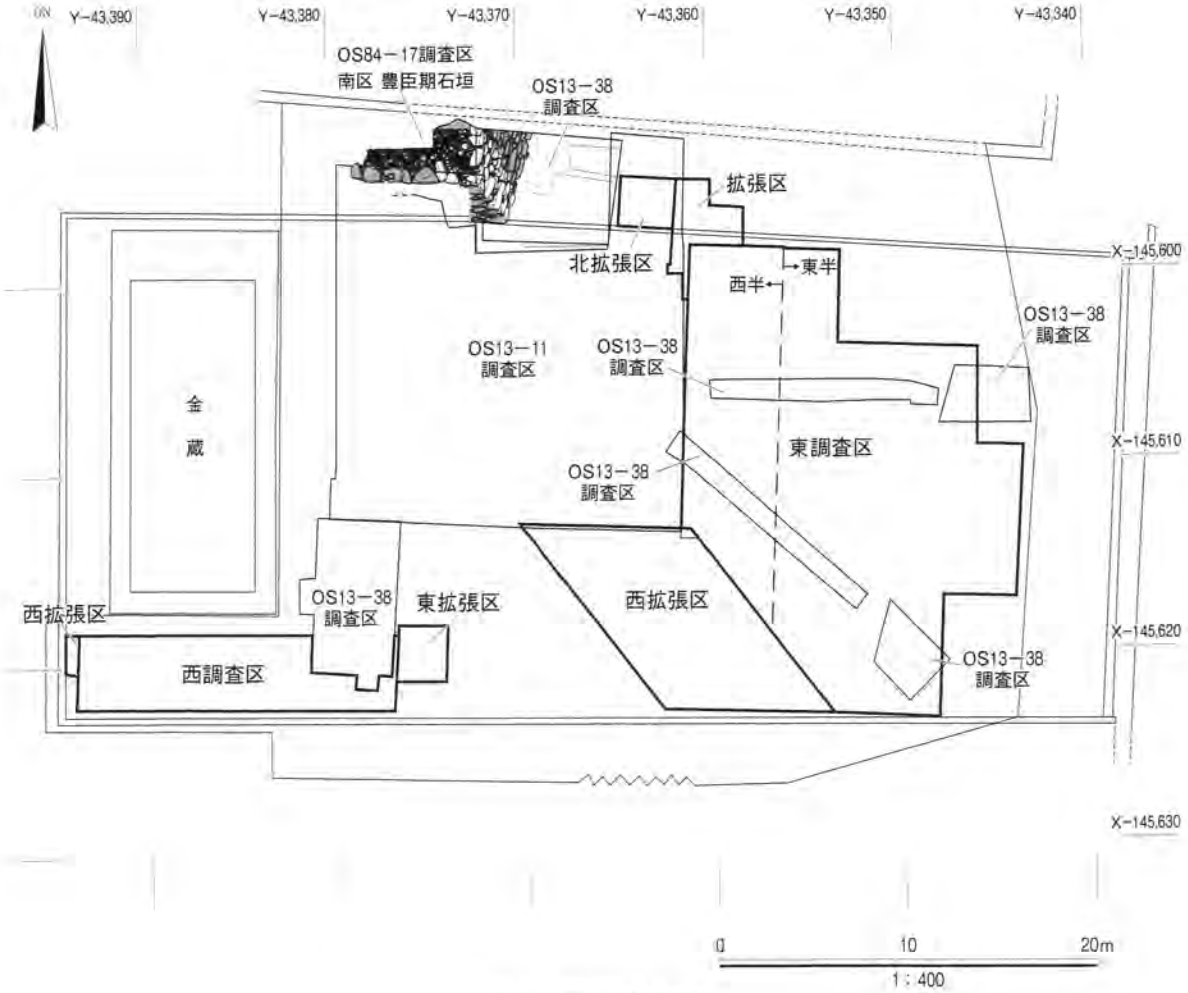


図２　調査区配置図

調査は、西調査区では現代の整地層である第０層を人力により掘り下げ、第3a層上面で遺構検出および遺構の掘削を行った。東調査区では第０層と近代の整地層である第１層を重機により掘削し、平面・断面図の作成および写真撮影等による記録作業を行いながら、第２層以下の遺構および地層を人力により掘り下げた。大阪市教育委員会と協議し、重要な遺構や今後検討の必要な遺構については保存し、その他の部分については徳川初期の一括盛土(第3d層)の上面まで調査を行い、一部第3d層の上部を掘り下げた。なお東調査区では、大阪市教育委員会の指示により調査区北端部に拡張区を設定し、第3b層中で検出した舗道遺構の残存範囲を確認するための調査を行った。埋戻しに際しては、遺構面に保護砂を敷いて遺構の保護を行った後、西調査区は人力により、東調査区は重機により埋戻しを行った。当初計画されていた調査については、2014年12月８日に完了した。

その後、大阪市教育委員会の指示により、2015年１月５日から追加調査を行った。追加調査は、東調査区南西部における徳川期の遺構の広がりと残存状況を確認するため西拡張区を設定し、西調査区については東西方向の石組溝が東側へ延長しないことを再確認する目的で東拡張区を設定して行った。またこれとともに、東調査区で検出した舗道遺構の残存範囲を確認するため、東調査区北拡張区を設定して埋設管の下位における遺構の残存状況について調査を行った。これらの調査を完了し、２月４日に現地での調査を完了した。

なお、今回の調査で使用した基準点は、OS13－11次調査においてMagellan社製ProMark３により測位した基準点を用いた。本報告で使用した方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、標高はT.P.値を用い、本文および図中ではTP＋○mと表記した。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３～12、図版１・２)

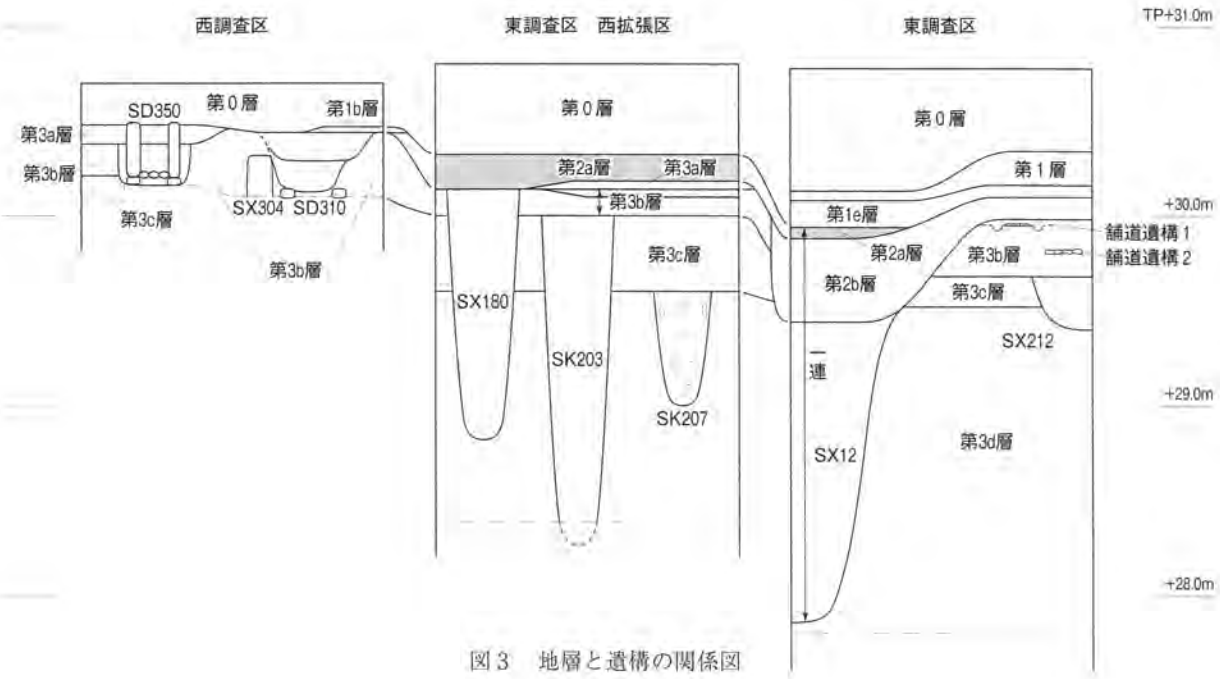
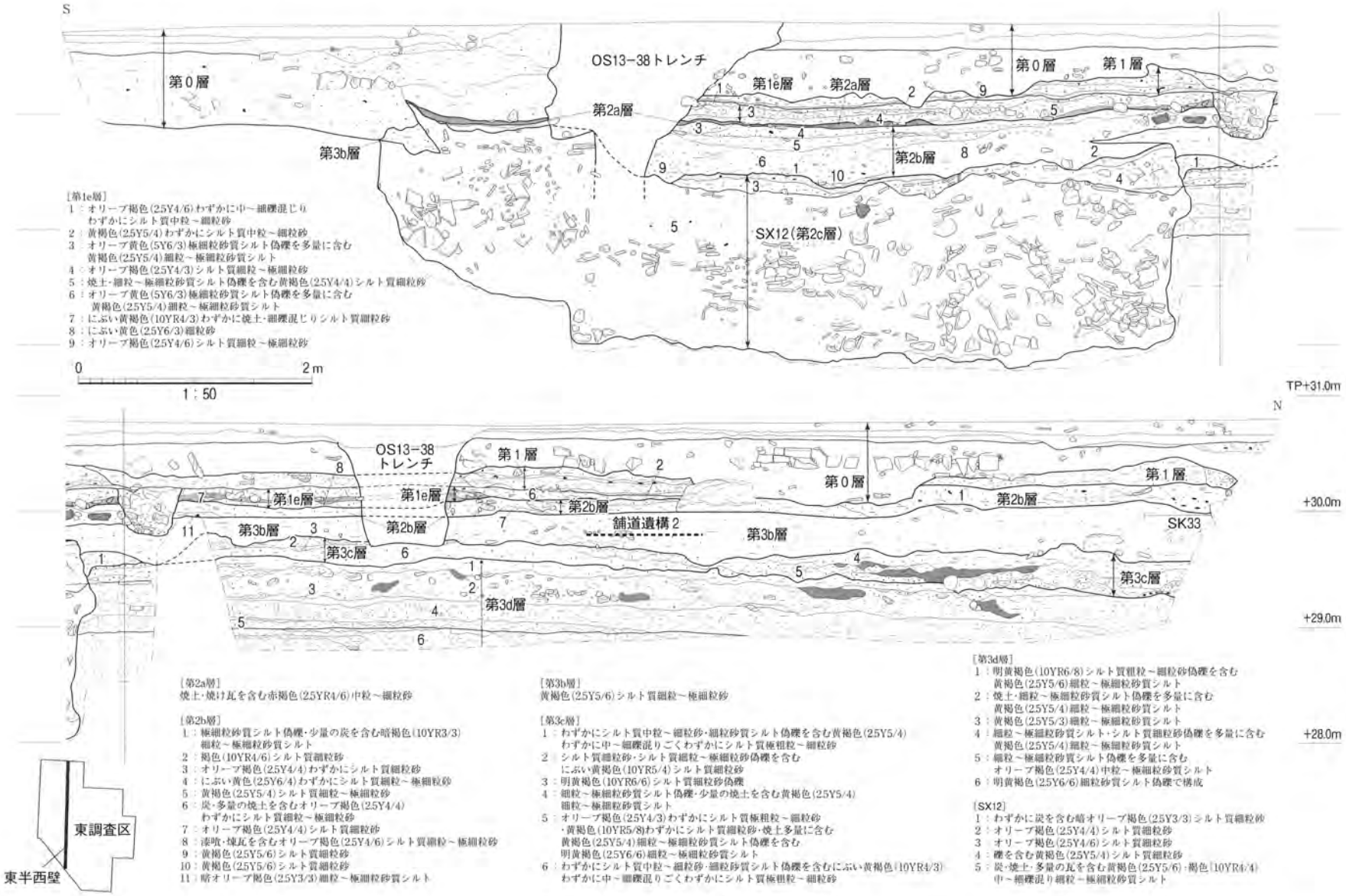


図３　地層と遺構の関係図



[第1e層]
1：オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかに中～細礫混じり
わずかにシルト質中粒～細粒砂
2：黄褐色(2.5Y5/4)わずかにシルト質中粒～細粒砂
3：オリーブ黄色(5Y6/3)極細粒砂質シルト偽礫を多量に含む
黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒～極細粒砂
5：焼土・細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂
6：オリーブ黄色(5Y6/3)極細粒砂質シルト偽礫を多量に含む
黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)わずかに焼土・細礫混じりシルト質細粒砂
8：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂
9：オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質細粒～極細粒砂

[第2a層]
焼土・焼け瓦を含む赤褐色(2.5YR4/6)中粒～細粒砂

[第2b層]
1：極細粒砂質シルト偽礫・少量の炭を含む暗褐色(10YR3/3)
細粒～極細粒砂質シルト
2：褐色(10YR4/6)シルト質細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかにシルト質細粒砂
4：にぶい黄色(2.5Y6/4)わずかにシルト質細粒～極細粒砂
5：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒～極細粒砂
6：炭・多量の焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)
わずかにシルト質細粒～極細粒砂
7：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂
8：漆喰・煉瓦を含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質細粒～極細粒砂
9：黄褐色(2.5Y5/6)シルト質細粒砂
10：黄褐色(2.5Y5/6)シルト質細粒砂
11：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト

[第3b層]
黄褐色(2.5Y5/6)シルト質細粒～極細粒砂

[第3c層]
1：わずかにシルト質中粒～細粒砂・細粒砂質シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)
わずかに中～細礫混りごくわずかにシルト質極粗粒～細粒砂
2：シルト質細粒砂・シルト質細粒～極細粒砂偽礫を含む
にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂
3：明黄褐色(10YR6/6)シルト質細粒砂偽礫
4：細粒～極細粒砂質シルト偽礫・少量の焼土を含む黄褐色(2.5Y5/4)
細粒～極細粒砂質シルト
5：オリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかにシルト質極粗粒～細粒砂
・黄褐色(10YR5/8)わずかにシルト質細粒砂・焼土多量に含む
黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む
明黄褐色(2.5Y6/6)細粒～極細粒砂質シルト
6：わずかにシルト質中粒～細粒砂・細粒砂質シルト偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)
わずかに中～細礫混りごくわずかにシルト質極粗粒～細粒砂

[第3d層]
1：明黄褐色(10YR6/8)シルト質粗粒～細粒砂偽礫を含む
黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルト
2：焼土・細粒～極細粒砂質シルト偽礫を多量に含む
黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
3：黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト
4：細粒～極細粒砂質シルト・シルト質細粒砂偽礫を多量に含む
黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
5：細粒～極細粒砂質シルト偽礫を多量に含む
オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒～極細粒砂質シルト
6：明黄褐色(2.5Y6/6)細粒砂質シルト偽礫で構成

[SX12]
1：わずかに炭を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質細粒砂
4：礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂
5：炭・焼土・多量の瓦を含む黄褐色(2.5Y5/6)・褐色(10YR4/4)
中～細礫混り細粒～極細粒砂質シルト

図4　東調査区東半西壁地層断面図

調査地の標高はTP＋30.6～30.8mとほぼ平坦である。

層序は、OS13－11･38次調査における成果と対比し、現代の整地層を第０層、近代の整地層を第１層、戊辰戦争で生じた焼土を多量に含む整地層を第２層、これよりも下位の徳川期の地層を第３層とした。

第０層：現代の整地層で、層厚は13～98cmである。

第１層：近代の整地層で、複数に細分できる。OS13－11･38次調査の層序と対比できる地層としては、旧金蔵に係わる第1b層が西調査区の東端部で確認できた。また、東調査区において第1e層に相当するオリーブ黄色(5Y6/3)極細粒砂質シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルトを主とし、明治時代の遺物を含む整地層が分布しており、層厚は最大で37cmであった。このほかの地層についてはOS13－11・38次調査成果との対応が困難であったため、煩雑さをさけるため細分した地層名は付していない。

第２層：戊辰戦争時の火災により生じたものと推定される焼土や焼けた瓦を多量に含む整地層である。幕末～明治時代の遺物を含み、戊辰戦争の後、明治時代に整地が行われたことを示している。焼土・焼け瓦を多量に含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト・赤褐色(2.5Y4/6)中粒～細粒砂を主とする第2a層と、焼土・炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかにシルト質細粒～極細粒砂・オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒～極細粒砂を主とする第2b層に細分できる。これら第2a層と第2b層は整地の単位によるものとみられる。第２層は西調査区には分布せず、東調査区では後述するレンガ基礎の**建物４**付近から西側に第2a層が厚く分布しており、これよりも東側には第2b層が主として分布し、第2a層の分布は希薄であった。第2a層の層厚は最大で20cm、第2b層は最大47cmであった。

第３層：徳川期の整地層および盛土層である。徳川初期の一括盛土である第3d層とこれ以降の第3a～3c層の４つに大きく細分でき、各層の上面および第3b層中において遺構を検出した。

第3a層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)・黄褐色(2.5Y5/6)シルト質細粒砂を主とする整地層で、層厚は最大10cmである。東調査区の西端部から西拡張区にかけて部分的に分布した。整地層の年代を示す遺物は出土していないが、第3b層が19世紀前半の整地層であることから幕末の整地層とみられる。西調

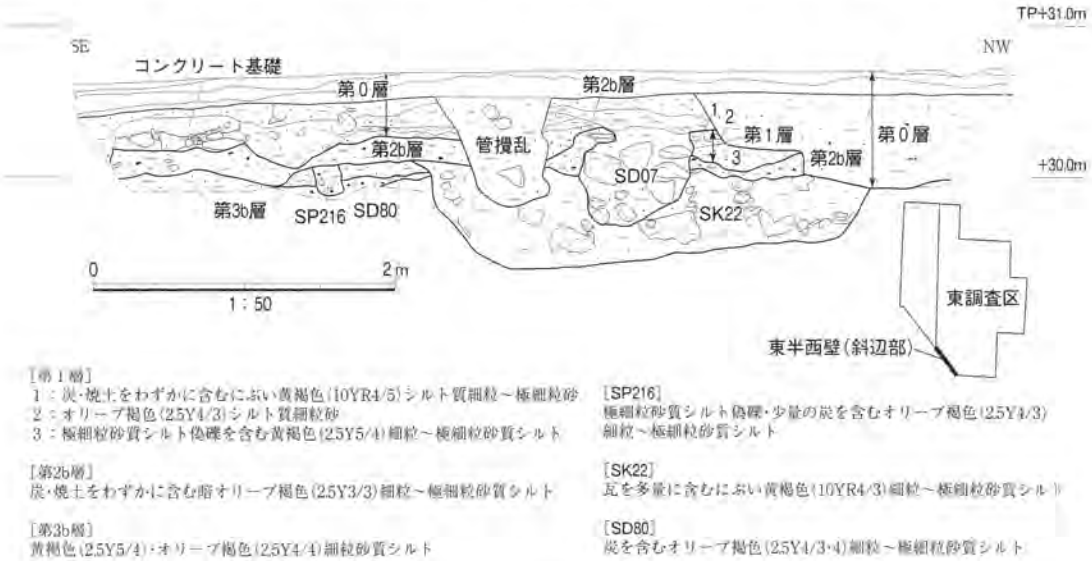
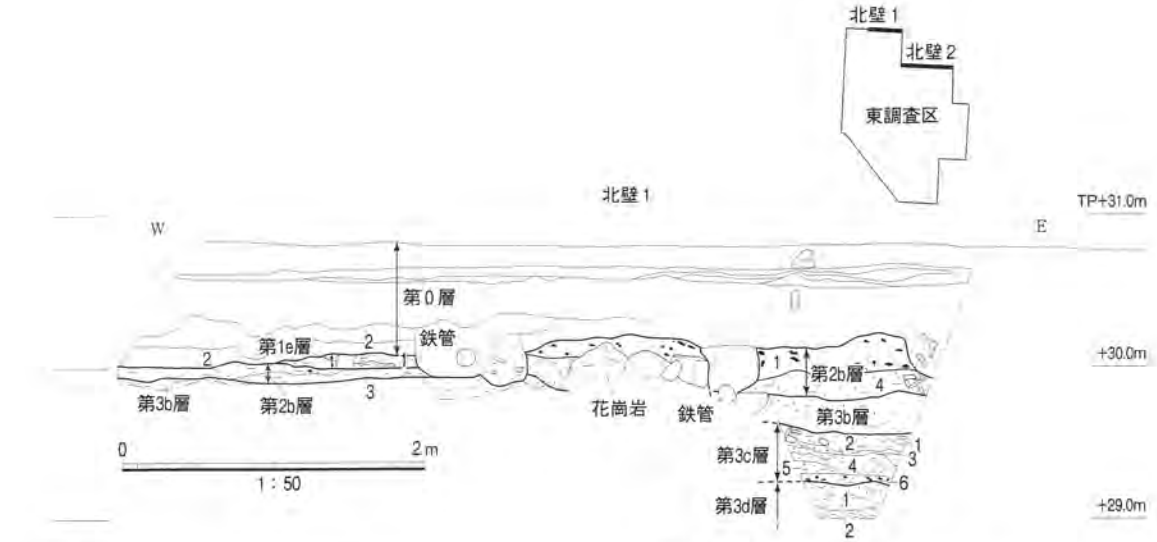


図５　東調査区東半西壁(斜辺部)地層断面図



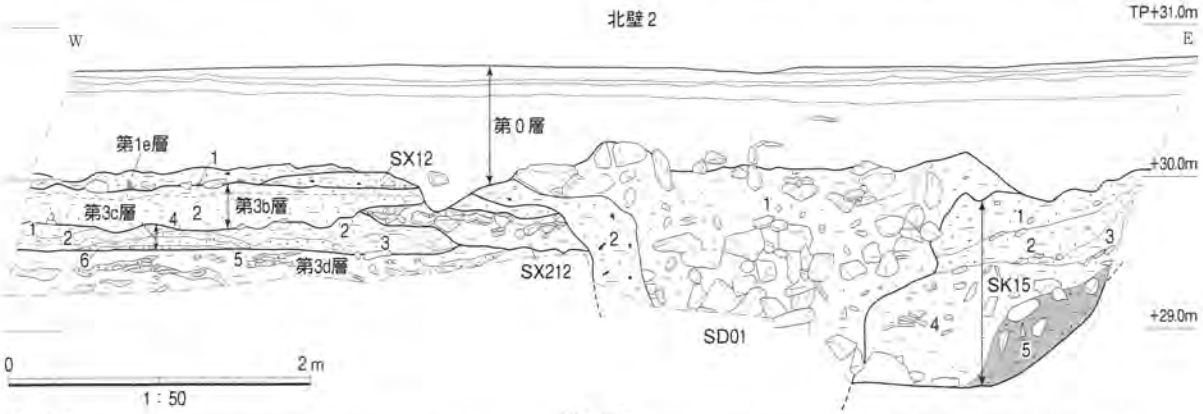
［第1e層］
1：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒～極細粒砂
2：明黄褐色(2.5Y6/6)細粒～極細粒砂質シルト

［第2b層］
1：炭を含む黒褐色(10YR3/2)・オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト
2：炭・焼土をわずかに含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒～極細粒砂
4：炭をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト

［第3b層］
黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒～極細粒砂

［第3c層］
1：オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒～極細粒砂質シルト
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
3：焼土をわずかに含む褐色(10YR4/6)細粒～極細粒砂質シルト
4：黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト偽礫・オリーブ褐色(2.5Y4/3)
わずかにシルト質極粗粒～細粒砂偽礫
5：黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
6：炭を多量に含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト

［第3d層］
1：わずかにシルト質粗粒～細粒砂・細粒～極細粒砂質シルト・シルト質
細粒砂偽礫を多量に含むにぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～極細粒砂質シルト
2：明黄褐色(2.5Y6/6)細粒～極細粒砂質シルト



［第1e層］
焼土をわずかに含むにぶい黄色(2.5Y6/4)細粒～極細粒砂質シルト

［SX12］
炭・焼土をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト

［第3b層］
1：黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト
2：黄褐色(2.5Y5/3・4)細粒～極細粒砂質シルト

［第3c層］
1：黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルト
2：シルト質細粒砂偽礫・粗粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む
黄褐色(10YR5/6)・灰黄色(2.5Y6/2)細粒～極細粒砂質シルト
3：明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質細粒砂
4：にぶい黄色(2.5Y6/3)わずかにシルト質細礫～細粒砂
5：黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルト
6：にぶい黄色(2.5Y6/3)わずかにシルト質細礫～細粒砂

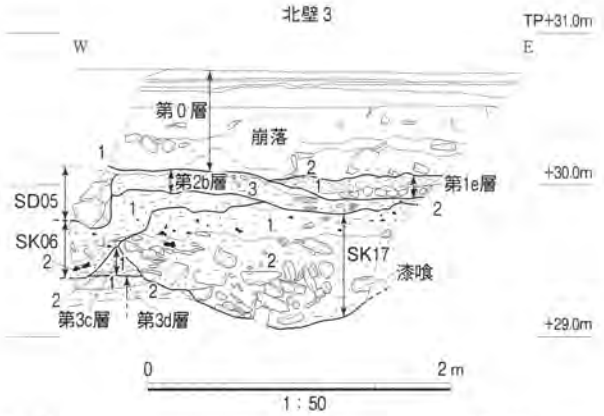
［第3d層］
明黄褐色(10YR6/6)・黄褐色(2.5Y5/6)中粒～細粒砂質シルト偽礫・褐色(10YR4/6)
・焼土を含む黄褐色(10YR5/6)細粒～極細粒砂質シルト偽礫・黄褐色(2.5Y5/6)
・黄褐色(10YR5/6)粗粒～細粒砂偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3・4)細粒～極細粒砂質シルト

［SX212］
瓦を多量に含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト

［SD01］
1：多量の礫(～30cm)を含む暗灰黄色(10YR4/2)シルト質細粒～極細粒砂
2：炭・焼土をわずかに含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～極細粒砂質シルト

［SK15］
1：中礫(～5cm)を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒～極細粒砂質シルト
2：瓦・中礫(～4cm)を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)
・黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト
3：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～極細粒砂質シルト
4：黄橙色(10YR8/6)漆喰・礫(～15cm)・多量の瓦を含む
にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～極細粒砂質シルト
5：礫(～25cm)・瓦・焼土を含む暗褐色(7.5YR3/4)細粒～極細粒砂質シルト

図6　東調査区北壁地層断面図



[第1e層]
1：細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む
黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト
2：漆喰ブロックを多量に含む
浅黄色(2.5Y7/4)細粒～極細粒砂質シルト

[第2b層]
1：黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト
2：黄褐色(2.5Y5/6)シルト質細粒砂
3：焼土をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)
細粒～極細粒砂質シルト

[第3c層]
1：黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルト
2：オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒～細粒砂

[第3d層]
1：黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫で構成
2：焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト

[SK06]
1：礫・瓦・少量の炭・焼土を含む黄褐色(2.5Y5/4)
細粒～極細粒砂質シルト
2：炭・焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト

[SK17]
1：炭・焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
2：礫(～20cm)・漆喰塊・瓦を含む
暗褐色(10YR3/3)細粒～極細粒砂質シルト

[第2b層？]
焼土を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒～極細粒砂質シルト

[第3d層]
1：細粒～極細粒砂質シルト偽礫・粗粒～中粒砂偽礫を含む
黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
2：オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒～細粒砂
3：黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫で構成

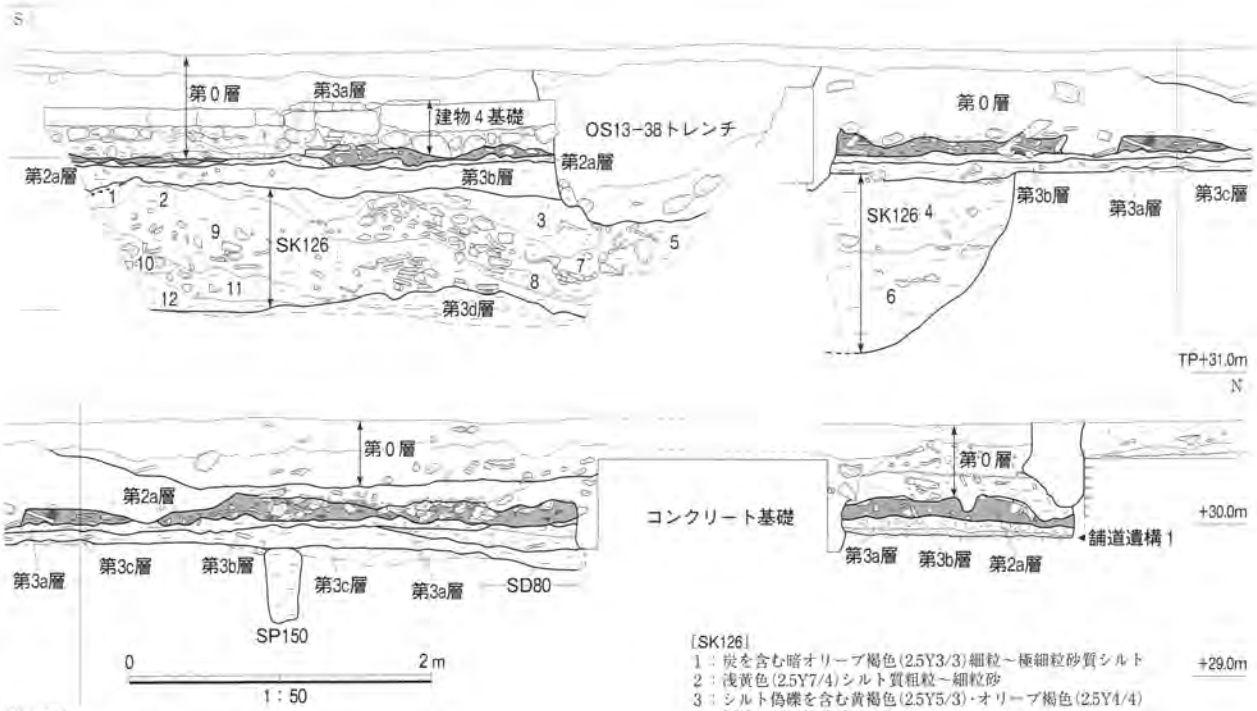
[SK06]
1：礫(～7cm)・瓦・炭・焼土を含む褐色(10YR4/4)
細粒～極細粒砂質シルト
2：瓦・炭・焼土を含む褐色(10YR4/4)細粒～極細粒砂質シルト

[SK15]
1：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～極細粒砂質シルト
2：瓦・中礫(～4cm)を含む黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト
3：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒～極細粒砂質シルト
4：漆喰・礫・瓦を含むにぶい黄色(2.5YR6/3)細粒～極細粒砂質シルト
5：焼土を含む褐色(10YR4/4)細粒～極細粒砂質シルト

[SK20]
礫(～20cm)・瓦・少量の炭を含む暗褐色(10YR3/4)
細粒～極細粒砂質シルト

[SK75]
礫(～20cm)・瓦・少量の炭・焼土を含む褐色(10YR4/6)・暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
細粒～極細粒砂質シルト

図7　東調査区北壁・東壁地層断面図



[第2a層]
瓦・焼土多量に含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)・明褐色(7.5YR5/6・8)
・にぶい赤褐色(5YR4/4)細粒～極細粒砂質シルト・シルト質極細粒砂

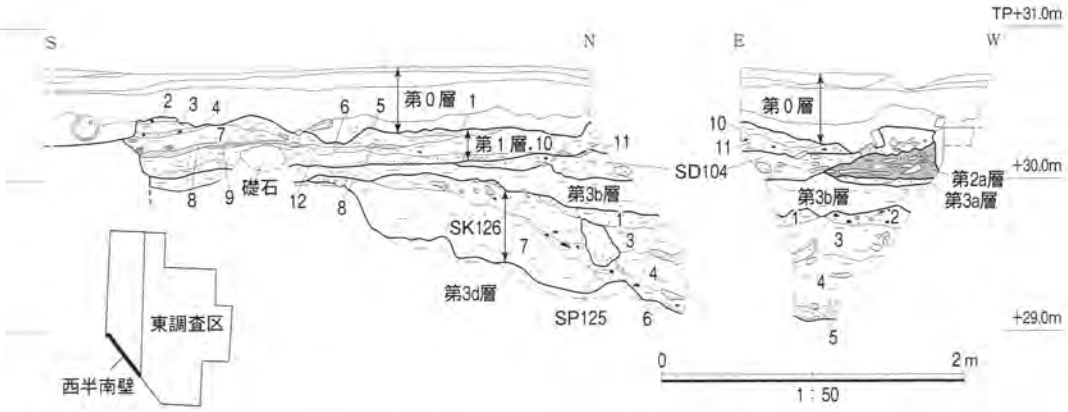
[第3a層]
オリーブ褐色(2.5Y4/3)・明黄褐色(2.5Y6/8)シルト質細粒砂
北端部：明黄褐色(2.5Y6/8)細粒砂質シルト偽礫で構成

[第3b層]
漆喰をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)・黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
北端部：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂

[SK126]
1：炭を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト
2：浅黄色(2.5Y7/4)シルト質粗粒～細粒砂
3：シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)・オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
4：細粒砂質シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
5：黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルト
6：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
7：瓦・礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
8：明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質極粗粒～細粒砂偽礫・細礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒～極細粒砂質シルト
9：瓦・礫・シルト偽礫・炭を含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト
10：礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
11：礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)・灰オリーブ色(5Y5/2)細粒～極細粒砂質シルト
12：黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト

+29.0m

図8　東調査区西半西壁地層断面図



[第1層]
1：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～極細粒砂質シルト
2：炭を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト
3：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
4：炭を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト
5：焼土をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
6：焼土をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
7：焼土・シルト質細粒砂偽礫を含む褐色(10YR4/4)細粒～極細粒砂質シルト
8：赤褐色(5YR4/6)粗粒～細粒砂
9：黄褐色(10YR5/6)シルト質細粒砂
10：炭・焼土をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
11：炭・焼土をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト
12：オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質細粒砂

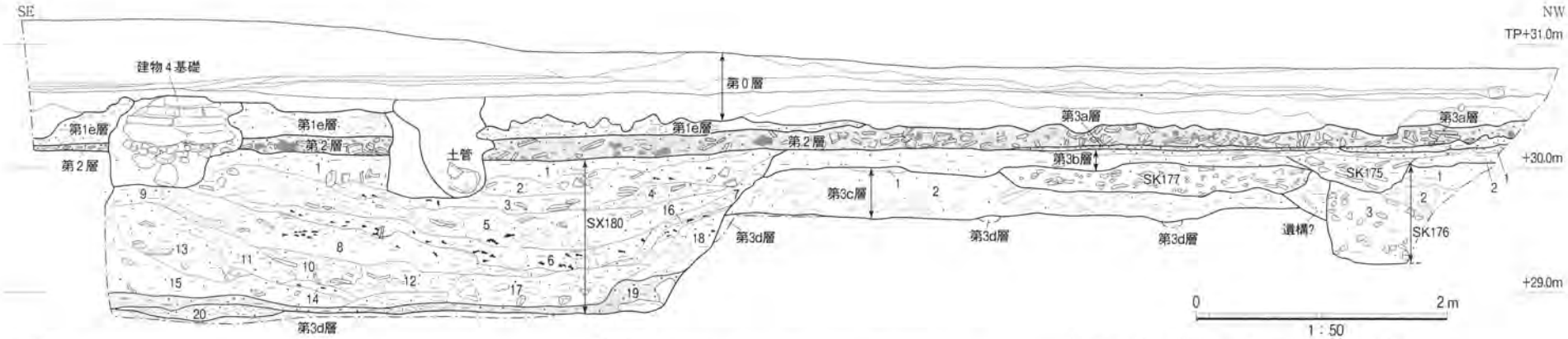
[第2a層]
瓦・焼土を多量に含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)・
明褐色(7.5YR5/8)細粒～極細粒砂質シルト

[第3a層]
黄褐色(2.5Y5/6)シルト質細粒砂

[第3b層]
漆喰をわずかに含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト

[SK126]
1：明黄褐色(10YR6/6)シルト質粗粒～細粒砂
2：炭を含む暗褐色(10YR3/3)細粒～極細粒砂質シルト
3：シルト偽礫・炭をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト
4：礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト
5：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～極細粒砂質シルト
6：炭を含む黒褐色(2.5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルト
7：シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルト

図9　東調査区西半南壁地層断面図



[第1e層]
黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト・褐色(2.5Y5/6)シルト質細粒砂偽礫を多く含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト

[第2層]
焼土・瓦を多量に含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト

[第3a層]
黄褐色(10YR5/6)わずかにシルト質細粒砂偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂

[第3b層]
1：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト

[第3c層]
1：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
2：黄褐色(10YR5/6)・灰オリーブ色(5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルトを主とする偽礫を含む
わずかに中～細礫混り褐色(10YR4/6)中粒～極細粒砂質シルト

[第3d層]
灰オリーブ色(5Y6/2・5/2)細粒～極細粒砂質シルト
・灰オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂質シルト偽礫

[SK175]
瓦を多量に含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト

[SK176]
1：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒～極細粒砂
2：灰オリーブ色(5Y6/2)極細粒砂質シルト偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト
3：3～6cmの円礫を多く含む
にぶい褐色(10YR4/3)細粒～極細粒砂質シルト

[SK177]
瓦を多量に含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト

[SX180]
1：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒～極細粒砂[埋戻し土]
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
3：炭・漆喰をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
4：多量の黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫・少量の漆喰を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
5：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫・漆喰を含む
暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
6：炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
7：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒～極細粒砂偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
8：オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質細粒砂偽礫・炭を含む
暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
9：オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質細粒砂偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
10：黄褐色(10YR5/6)・灰オリーブ色(5Y5/3)シルト質細粒砂偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
11：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
12：黄褐色(2.5Y5/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫・漆喰を含む
暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
13：漆喰をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
14：炭をわずかに含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
15：漆喰をわずかに含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
16：炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
17：わずかに礫(～16cm)を含む暗オリーブ褐色(10YR3/3)
細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
18：オリーブ褐色(2.5Y4/3・4/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫・少量の炭を含む
オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルト[埋戻し土]
19：わずかに礫(～33cm)・漆喰を含む黒褐色(10YR3/2)
細粒～極細粒砂質シルト[機能時堆積層]
20：第3d層の偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)
中粒～極細粒砂質シルト[加工時形成層]

[遺構？]
オリーブ褐色(2.5Y4/4)わずかにシルト質細粒砂偽礫を含む
褐色(10YR4/4)細粒～極細粒砂質シルト

図10　東調査区西拡張区西壁地層断面図

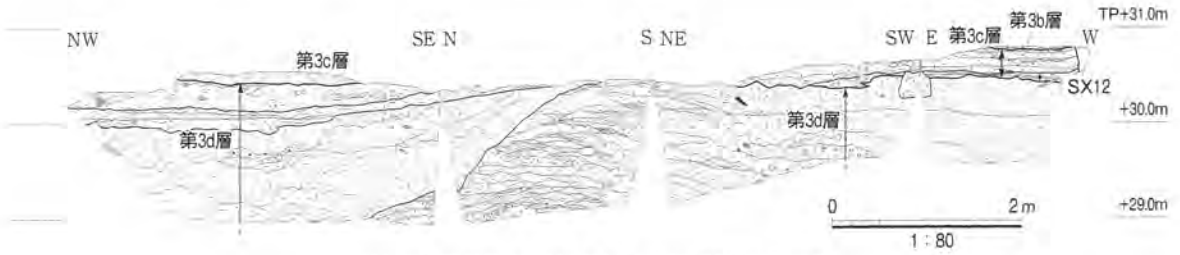


図11　東調査区第3d層地層断面図(SX12東肩部)

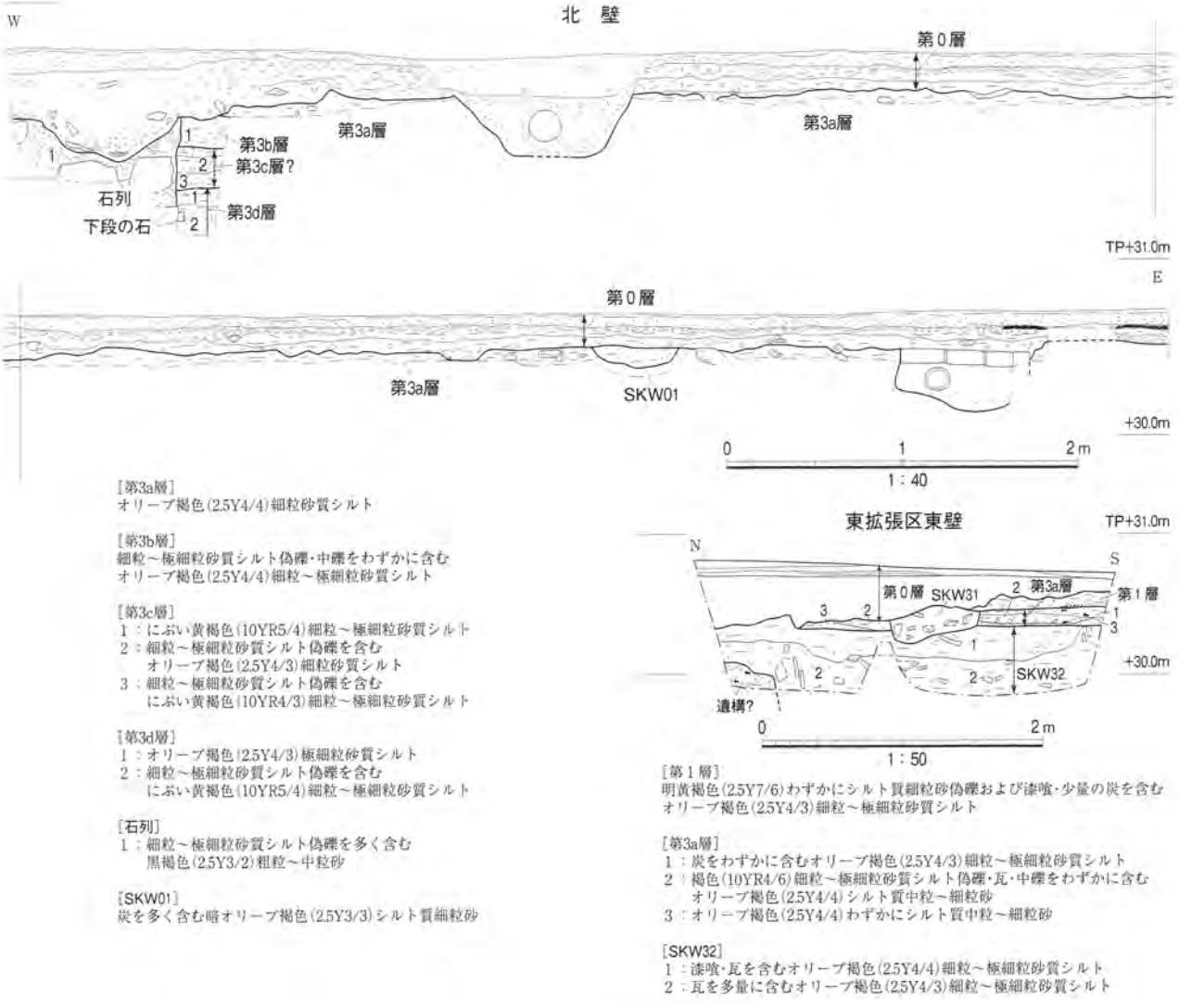


図12　西調査区地層断面図

査区ではオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルトの整地層を第3a層とし、この上面で遺構検出を行った。

第3b層はオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～極細粒砂質シルトを主とする整地層で、層厚は最大で52cmである。今回の調査区全域に広く分布し、部分的に上部に土壌生成が認められた。本層の上面では、徳川期～明治時代の遺構を検出し、層中では舗道遺構を検出した。第3b層内からは土師器・須恵器・備前焼・丹波焼・肥前磁器・軟質施釉陶器・関西系陶器・瓦・熙寧元寶が出土している。このうち須

恵器は古い時代の混入品である。陶磁器は18世紀～19世紀前半のものが出土しており、19世紀前半の整地層とみられる。

第3c層は細粒～極細粒砂質シルト偽礫を含む褐色(10YR4/6)中粒～極細粒砂質シルトを主とする整地層で、層厚は最大で38cmである。これまでの調査成果からはこの上面が徳川期大坂城再築当初の地表面であることが推定されてきた。

今回の調査において第3c層を掘り下げた第3d層上面において明瞭な土壙SK207を検出し、かつ徳川期のものとみられる瓦が出土したことから、第3d層の盛土が行われた後、第3c層の整地を行うまでの間に一定の時間があったことが推定される。出土遺物には鞴羽口・備前焼・肥前陶器・瓦・貝が出土しているが、第3c層の整地の年代を示すものは出土していない。

第3d層は大坂城再築時の一括盛土で、極細粒砂質シルト～粗粒砂からなる偽礫で構成される。層厚は172cm以上である。備前焼・瓦・石仏・壁土・貝が出土している。図11・図版1下段はSX12東肩部で確認した第3d層の地層断面である。先行して一部分を高く盛り、その後この部分から両側に土を入れて盛土していく様子が確認できる。

ⅱ)遺構と遺物

a．第3d層上面の遺構と遺物(図13・14)

東調査区においてSK207、SP85・89・91を検出した。

SK207　東調査区西拡張区で検出した東西1.5m、南北2.3m、深さ0.89mの土壙で、埋土には7～12cm前後の円礫を多量に含んでいた。出土遺物は、巴文軒丸瓦1、三葉二転系の唐草文軒平瓦2、谷間瓦3が出土した。3には「○にヤ」の刻印が施されている。

SP89・91は柱抜取り穴とみられ、SP85は深さ0.09mの小穴である。

b．第3c層上面の遺構と遺物(図15～17、図版2・3)

第3c層上面では、瓦廃棄土壙とみられるSK126・127・176・177・197～200・202・203・209～211、SX212のほか、SD79・87、柱穴や柱穴の可能性のあるSP67・125・128・129・150・190・192・194～196・205・208、礎石e、その他小穴や浅い凹みを検出した。

瓦廃棄土壙については遺物の出土量が比較的多かったものについて、出土遺物を中心に記述する。

SK126　土師器・肥前磁器・軟質施釉陶器・京焼系陶器・瓦が出土している。軒丸瓦は7など、左巻きの巴文で面径約16～17.5cmまでのものが出土している。軒平瓦は14・16・18などが出土しており、14には「大一」の刻印が、18には「○」の刻印が施されている。刻印のある瓦としてはこの他に「○に二」の刻印が見られた。

SK127　SK126と重複関係にあり、SK126が埋められた後に掘削された遺構である。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土している。軒丸瓦は10など、文様が確認できるものは左巻きの巴文で、珠文の大きさと間隔の異なるものが出土している。17は軒平瓦である。

SK176　備前焼・軒丸瓦・鳥衾瓦・丸瓦・平瓦・輪違瓦が出土している。軒丸瓦は文様が確認できるものは左巻きの巴文である。12は鳥衾瓦で、文様は左巻きの巴文である。

SK177　中国産磁器・軒丸瓦が出土している。軒丸瓦は文様の確認できるものは左巻きの巴文で、

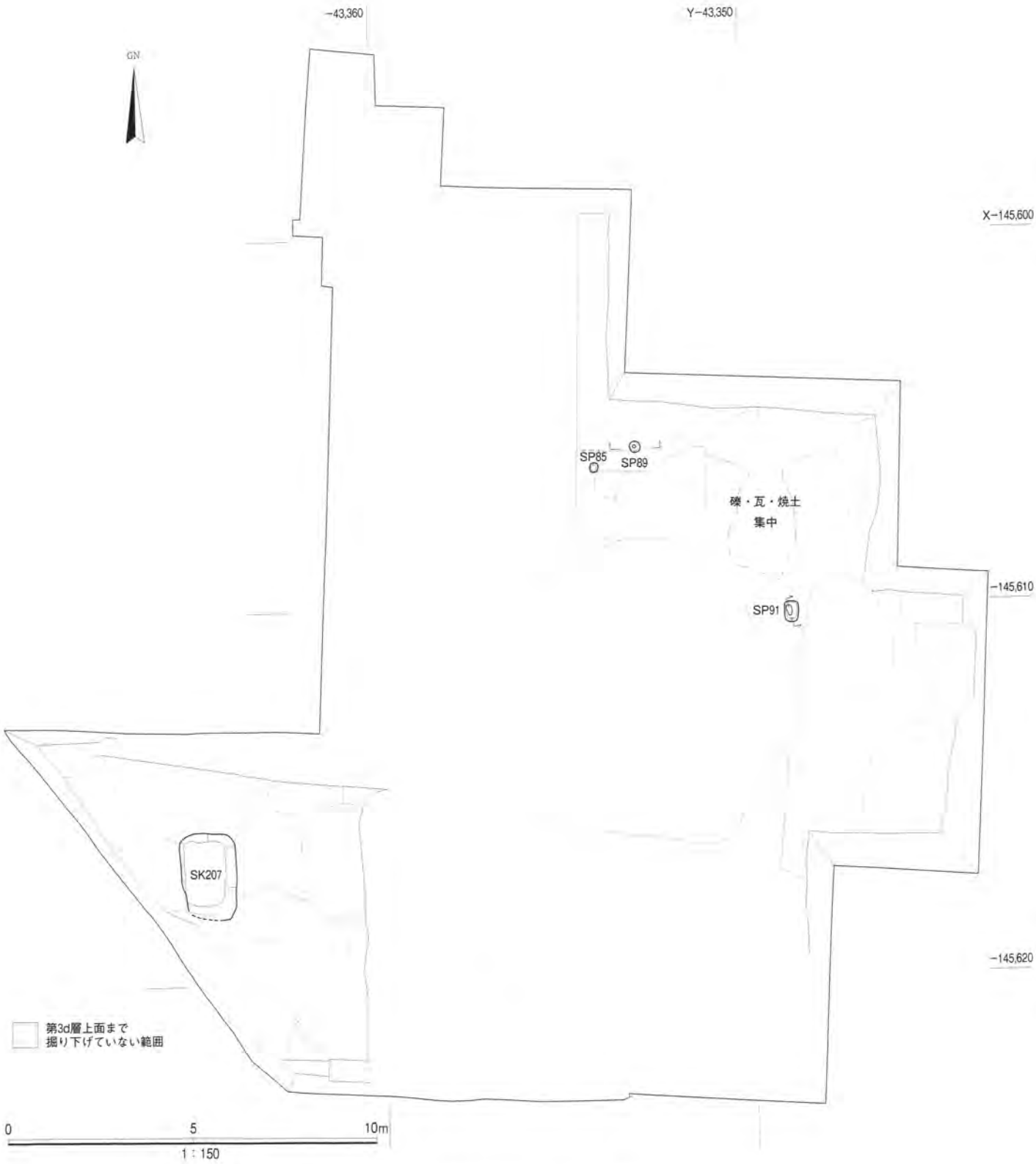


図13　東調査区第3d層上面遺構平面図

珠文の大きさと間隔が異なる２種が出土している。

SK197　軒丸瓦、菊丸瓦が出土している。丸瓦は左巻きの巴文、菊丸瓦は二重菊で周縁のない19・20が出土している。

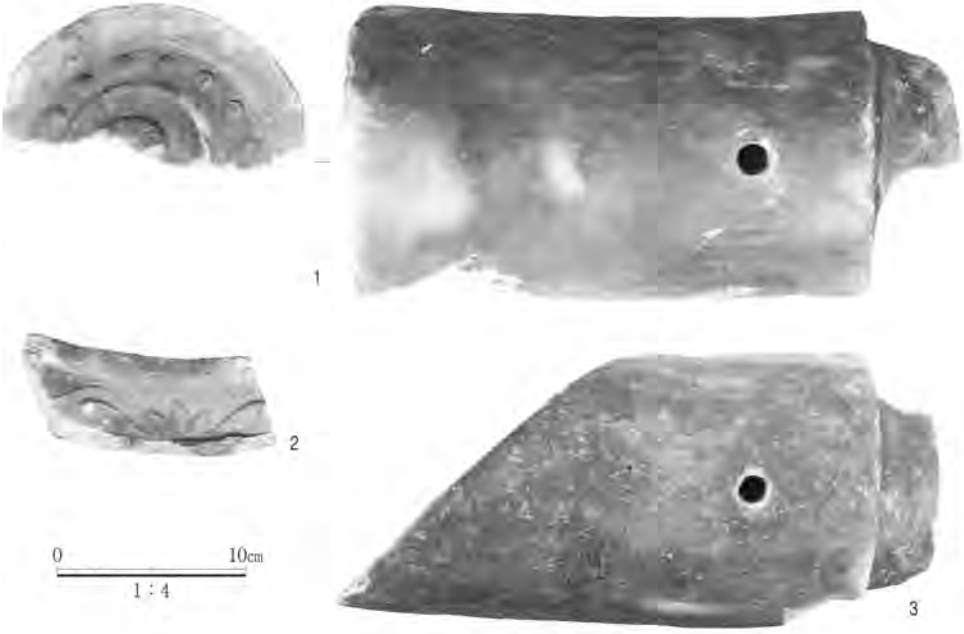


図14　SK207出土遺物

SK199　軒丸瓦・軒平瓦・鳥衾瓦・丸瓦が出土している。軒丸瓦はいずれも面径約16.5cmで、左巻きの巴文である。刻印を施すものには「○に甚」のほか、○に何らかの文字か記号を施したものが見られる。4は肥前磁器染付小広東碗、13は鳥衾瓦である。

SK203　瀬戸美濃焼陶器・京焼系陶器・瓦・貝が出土している。肥前磁器には染付半球碗5や小広東碗を含む。京焼系陶器6は底部外面に「安永八□亥散(？)西□」の墨書がある。安永8年は西暦1779年で亥年である。瓦は軒丸瓦・軒平瓦・菊丸瓦・丸瓦・平瓦が出土しており、二次的に火を受けているものが1点含まれる。軒丸瓦は8・9・11など、面径約13.5～17.5cmまでのものが出土しており、すべて左巻きの巴文である。軒平瓦は15が出土しており、「○に北または小」の刻印が施されている。菊丸瓦は、二重菊で周縁のない21、二重菊で周縁のある22が出土した。このほか丸瓦に「○に二」の刻印を施すものが見られた。

SX212　東調査区北端部で確認した浅い落込みで、瀬戸美濃焼陶器・瓦・元豊通寶が出土した。

これらの瓦廃棄土壙群から出土した遺物の多くは瓦であり、陶磁器が少量含まれていた。陶磁器の年代は、肥前磁器の小広東碗4や半球碗5を含む18世紀後半～末のものを主体としており、廃棄土壙群の年代は18世紀後半～末とみられる。SK203出土の京焼系陶器6に書かれた安永8(1779)年の墨書の年代とも矛盾しない。

SD79・87は第3b層を埋土とする溝である。SD79からは肥前磁器・関西系陶器・瓦が出土しており、肥前磁器は19世紀に入るものである。

SP128・194・196は柱痕が確認でき、SP129は底に礎板石が確認できたことから柱穴といえる。またSP67・125・150・190・192・195・205・208は、柱痕は確認できないものの、一定の深さがあることから柱抜取り穴の可能性がある。これらの柱穴・抜取り穴はSP67・128を除き、瓦廃棄土壙が埋められた後に掘り込まれた遺構であることが確実である。礎石の可能性のある礎石eについても瓦

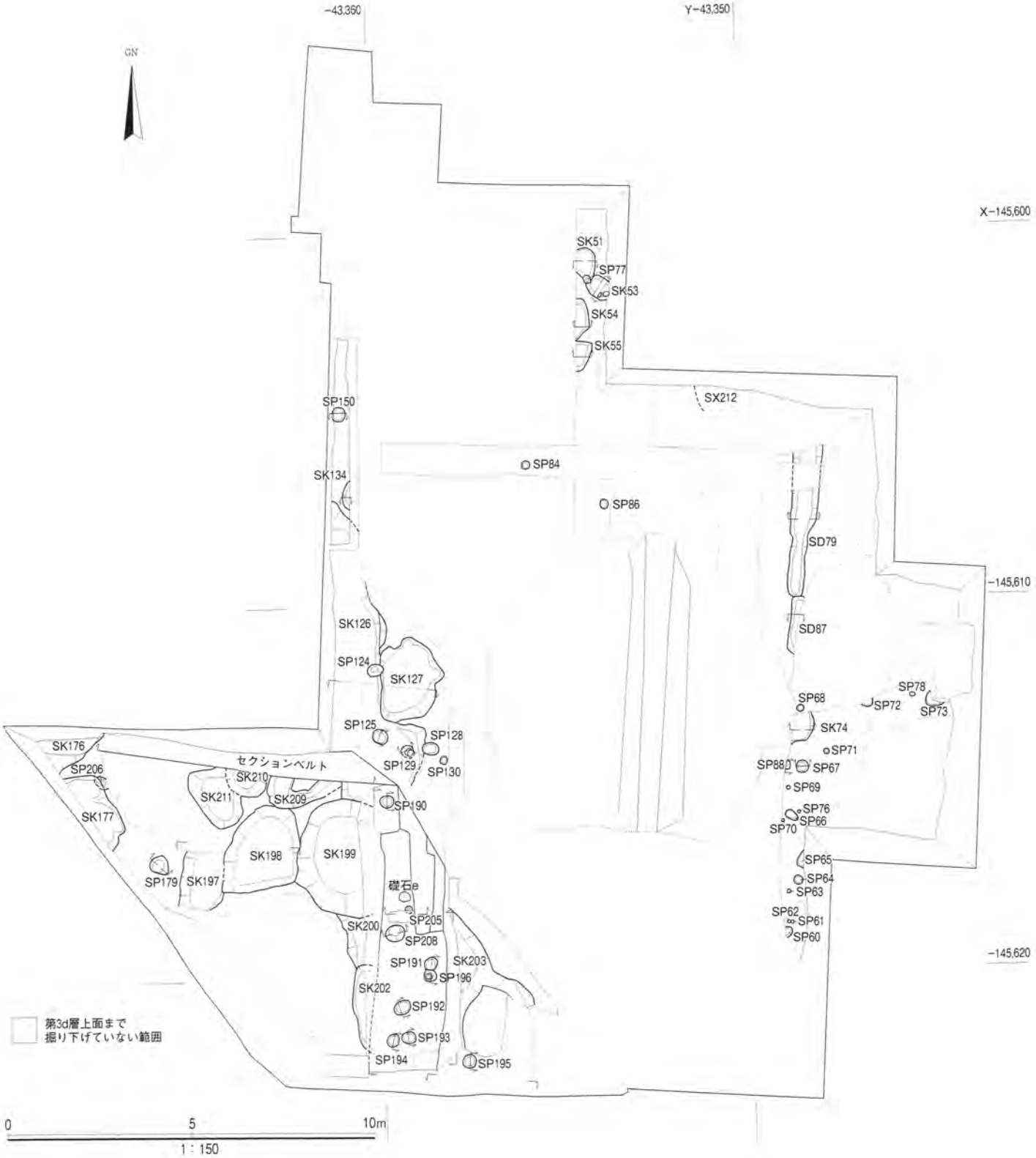


図15　東調査区第3c層上面遺構平面図

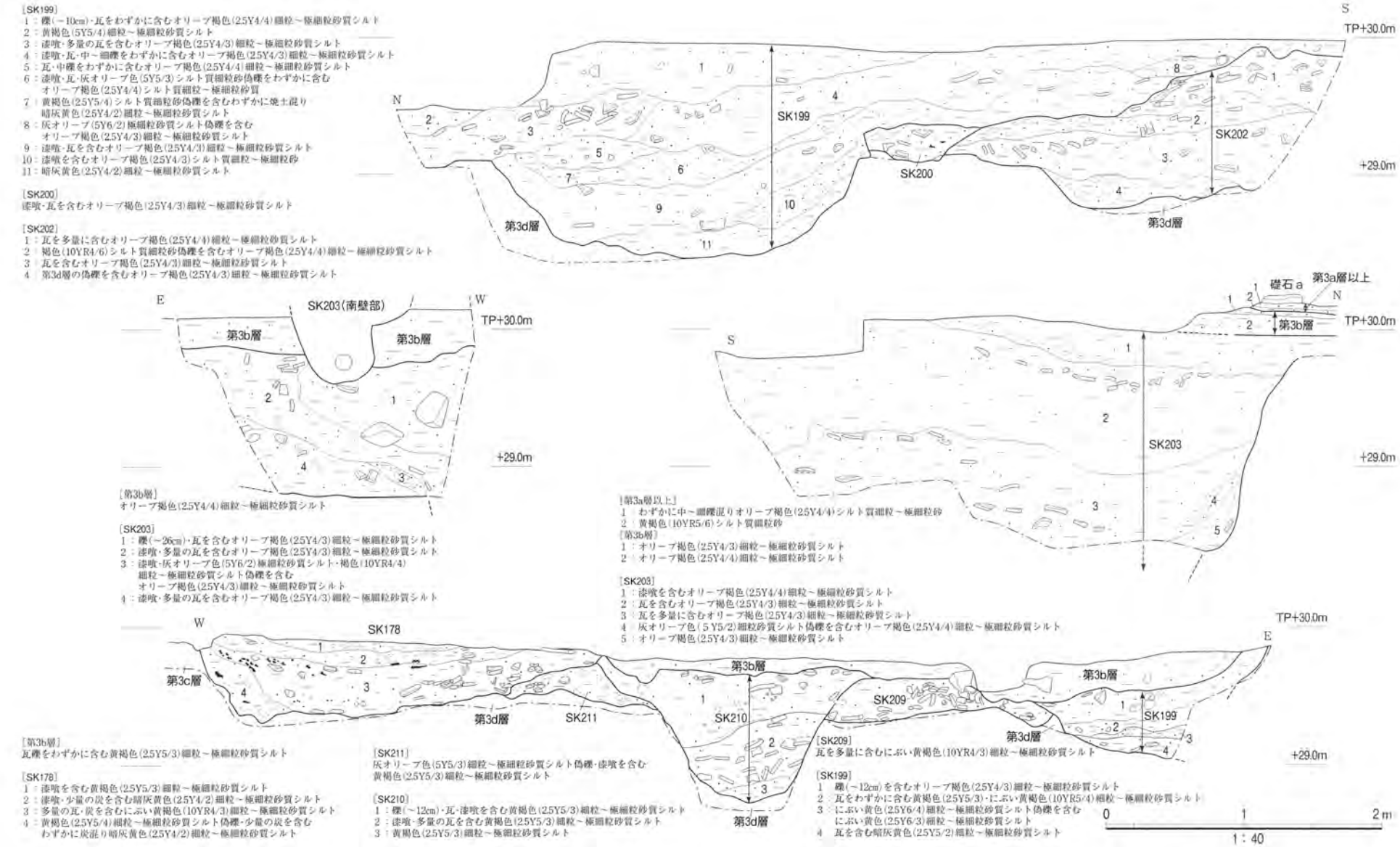


図16　東調査区第3c層上面遺構断面図

図17　第3c層上面遺構出土遺物
SK126(7・14・16・18)、SK127(10・17)、SK176(12)、
SK197(19・20)、SK199(4・13)、SK203(5・6・8・9・11・15・21・22)

廃棄土壙が埋められた後に据えられたものである。

c．第3b層中の遺構と遺物(図18～22、図版３・４)

第3b層中において礫や瓦を敷き詰めた舗道とみられる**舗道遺構１・２**のほか**SP135・138～140・**

図18　東調査区第3b層中遺構平面図

142～144・146を検出した。これらの遺構は第3b層上面からやや掘り下げた面で検出したもので、舗道遺構の周辺のみ複数回地業が行われたものと推定される。

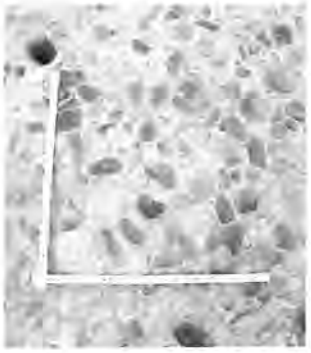


図19　舗道遺構１南端部表面

舗道遺構１　幅約2.5mで玉石や瓦片が敷き詰められており、上面が硬くしまっていることから舗道と推定される。東端にはSD147、西端にはSD80が伴う。これらの溝は幅0.5～0.8m、深さ0.1～0.2mの浅い溝で、側溝と推定される。SD80からは瓦・丹波焼・肥前の京焼風陶器が出土しており、このうち丹波焼徳利は18世紀末以降のものである。路面は南端部では４～８cm大の黒色の玉石を主に使用している(図19)。これらの玉石は黒色で緻密な泥岩の特徴から那智黒石とみられる。北半部では黒色の礫は使用されておらず、これよりもやや小振りな礫と瓦片で構成され、礫は１～６cmのもの、瓦片は４～16cm大のものを使用している。菊丸瓦23は舗道遺構の南端部に敷かれていた(図18)ものである。

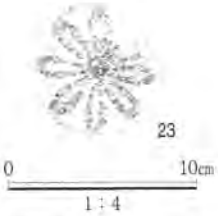


図20　舗道遺構１菊丸瓦

この舗道遺構の北半部では、６～14cm程下に瓦を主体とする路面がさらにもう一面確認できた。サブトレンチを掘削して地層断面の観察を行った結果、この路面に伴う側溝が確認できたほか、下の路面の上に10cm前後の整地をして上の路面が形成されていることが確認できた。

舗道遺構２　**舗道遺構１**の東側で検出した東西方向の瓦片を敷き詰めた遺構で、幅は約1.0mである。検出面の高さから、**舗道遺構１**の下の路面と同時に存在した可能性があり、路面に瓦片を主として使用している点でも類似している。

これらの舗道遺構の年代については、第3c層上面の瓦廃棄土壙に18世紀末までの遺物を含み、第3b層の年代が19世紀前半であることから、この間の遺構である。これらの舗道遺構の行き先については、寛政５(1793)年の『大坂城絵図』(図21)をみると、調査地の東側に番所が描かれており、**舗道遺構２**はちょうどこの方向に延びている。また、**舗道遺構１**の南の延長上付近には馬印櫓があり、この付近に向かって延びているものと推定される。なお、天明３(1783)～嘉永元(1848)年の間の

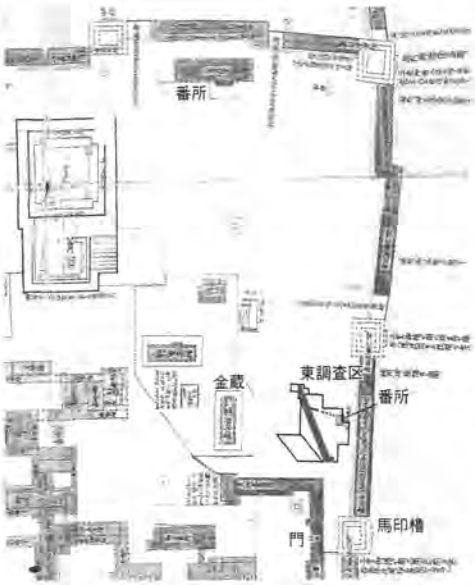


図21　『大坂城絵図』(部分に加筆)

図22　『浪華城全図』(部分に加筆)

絵図とされる『浪華城全図』(図22)には、**舗道遺構1**と同様の方向に白い線が表現されており、**舗道遺構1**の行き先を考える上で参考になる資料である。

d．第3b・a層上面の遺構と遺物(図23～32、図版4・5)

ここでは西調査区で検出した遺構についてまとめて報告した後、東調査区の第3b・a層上面の遺構について報告する。

西調査区では第3a層上面で遺構検出を行った。これらの遺構の多くは出土遺物の年代から明治時代のものとみられる。SDW05・09を完掘して石組溝SD350を検出した。SD350はOS13－38次調査で検出された東西方向の石組溝で、今回検出したのはこの西の延長部分にあたる。SDW05・09はSD350の側石の抜取り溝で、SDW09が先に掘削され、その後SDW05が掘削されている。SDW09からクロム青磁の香炉が出土しており、少なくとも明治時代前半にはSD350は機能していなかったといえる。SD350の側石の多くは抜き取られていたが、側石の下に据えられていた石と溝の底石については良好に残存していた。これらの石材の大半は花崗岩であった。SD350は調査区西端まで延びており、さらに西側に延びるものとみられる。SD350は第3b層上面から掘り込んで構築しており、東調査区において第3b層中から19世紀前半の遺物が出土していることから、遺構の構築時期はこれ以降であろう。

このほか、OS13－11・38次調査で検出した石列SX304の南の延長部分をサブトレンチの掘削により検出し、さらに石列が南に延びることが想定された。この石列の構築についてはこれまで第3b層の整地と同時に行われたものと理解されていたが、今回の調査で確認できた範囲についてはSX304と同時併存していたとされる石組溝SD310が第3b層により埋没している状況が確認できたことから、SX304・SD310は第3c層上面の遺構と理解したい。この点での既往の調査との齟齬については今後再検討が必要である。

また、第3c層上面に据えられたものとみられる**礎石1・2**を検出したほか、調査区西端では近代以降に構築された南北方向の**石列**を検出した。**石列**は切石を並べたもので、この下にはさらに自然石の石列が確認できた。この下位の石列については上位の**石列**と一連、あるいはこれよりも古い可能性の両方が想定されるが、今回の調査ではいずれか確認することはできなかった。

東調査区では第3a層の分布範囲が限定されていたため、確実に第3a層上面の遺構と認識できる遺構は小穴SP174のみであった。第3b層上面で検出した遺構には戊辰戦争より前に形成された遺構と、戊辰戦争の後第2層による整地が完了するまでの間に形成された遺構の2者の遺構がある。

前者の遺構であることが確実な遺構として、SK97、瓦廃棄土壙SK175･178、SX180があげられる。ここではSK97と、瓦廃棄土壙のうち遺物量の多かったSK178・SX180について遺物を中心に記述する。

SK97　切石で方形に区画した遺構であるが、底石はなく用途は不明である。埋土からは瀬戸美濃焼磁器の篆書文を施す小振りな端反碗が出土しており、明治時代に埋まったものとみられる。

SK178　土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・磁器・軟質施釉陶器・関西系陶器・瓦が出土している。瓦は軒丸瓦・軒平瓦・鳥衾瓦・丸瓦・平瓦・谷間瓦が出土している。軒丸瓦は25～28など、面径約16～17.5cmまでのものが出土しており、文様が確認できるものはいずれ左巻きの巴文で

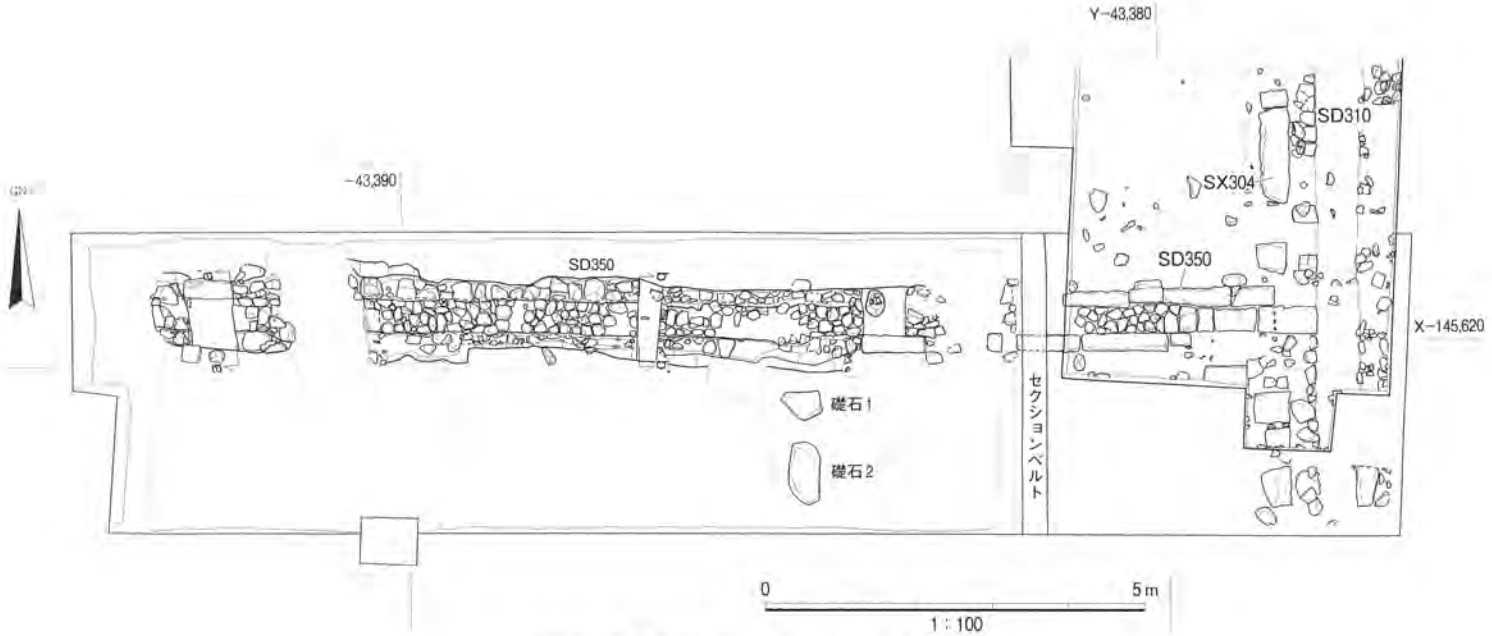


図23　西調査区第3b・c層上面遺構平面図

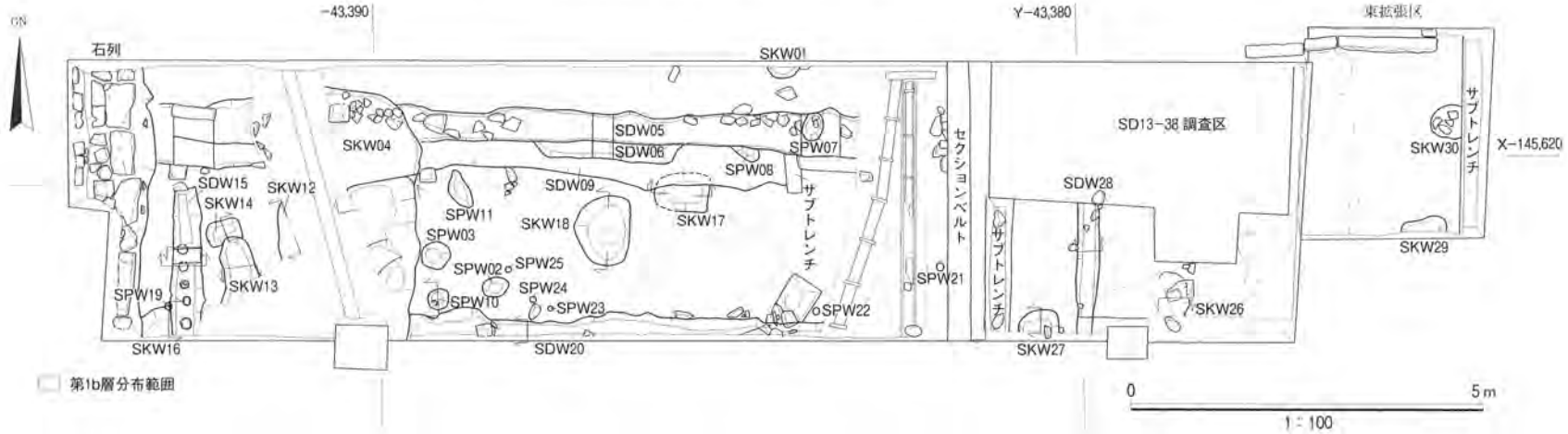


図24　西調査区第3a層上面遺構平面図

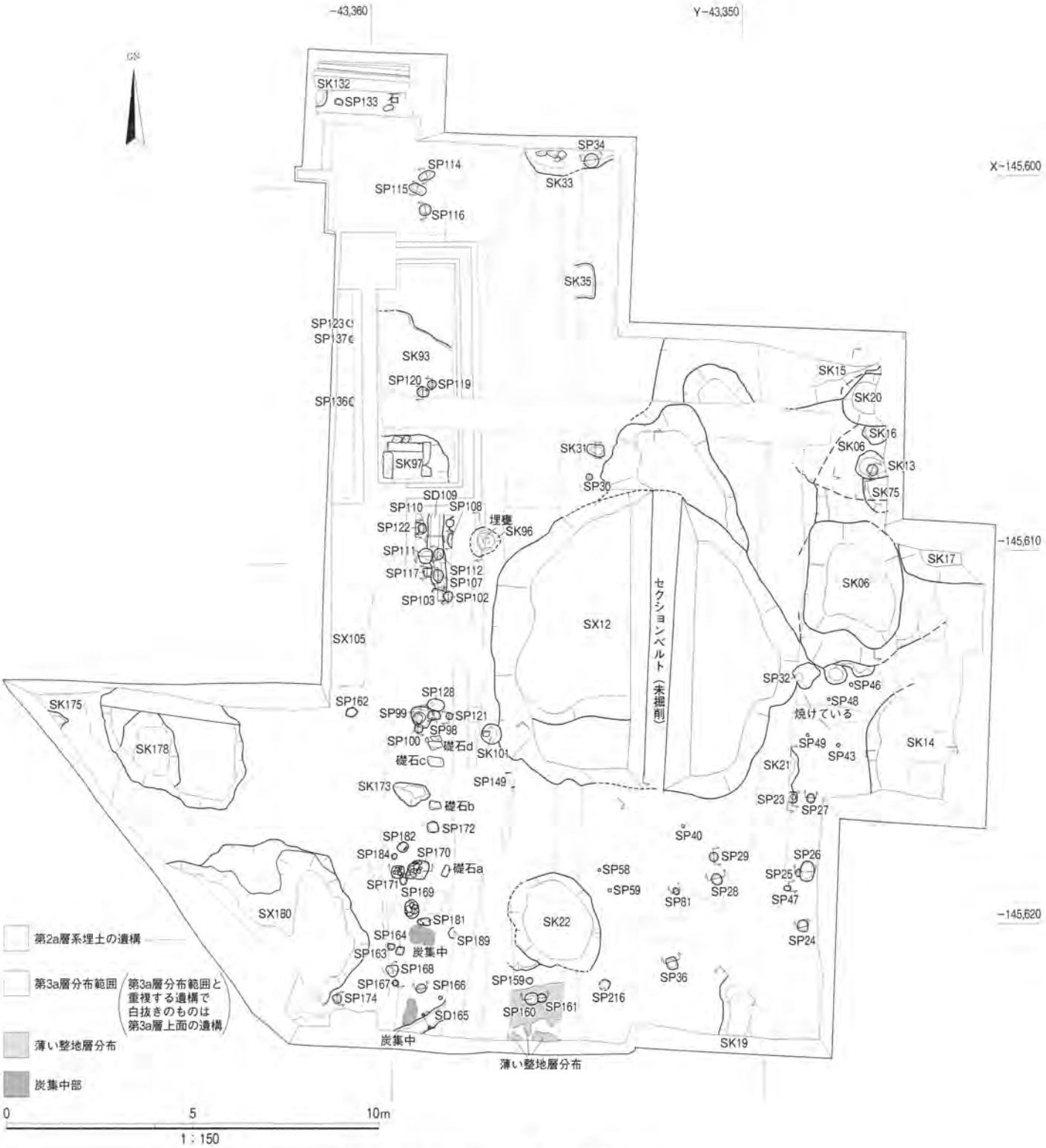


図25　東調査区第3a・b層上面遺構平面図

ある。軒平瓦は29が出土した。刻印を施すものは「○に十」のほか、○内に何らかの文字を施すものが見られた。24は肥前磁器染付半球碗である。

SX180　土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・磁器・丹波焼・関西系陶器・瓦・磚・石製品・金属製品・貝・漆喰・火打石が出土している。瓦は鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・輪違

瓦が出土している。金属製品は釘・鎹が出土している。

30は三葉葵文鬼瓦、31は鬼瓦の鰭部分である。32～39は軒丸瓦でいずれも左巻きの巴文である。40～47は軒平瓦で、41は三葉二転系、42・43は祖形橘唐草文、44・45は橘唐草文である。刻印が施されたものには「○」「○に二」「○に九」「○に十」「○に亥」「○に平」「○に市」「○に利」「○に太」「○に年」「○にた」「○にす」「○にヤ」などが確認できた。

これら第3b層上面の廃棄土壙から出土した陶磁器の年代は18世紀代までに収まるものであるが、第3b層が19世紀前半の整地層であることから、廃棄土壙の年代はこれ以降のものである。また、これらの遺構には焼土や二次焼成を受けた瓦がほとんど含まれていないことから、19世紀前半以降で戊辰戦争よりも前の遺構とみられる。なお、西調査区東拡張区の東端部に掘削したサブトレンチにおいて確認したSKW32(図12)もこれらの土壙と同様に第3b層上面の瓦廃棄土壙とみられる。

戊辰戦争後の遺構としては、瓦廃棄土壙SK06・14・15・17・20・22、SX12のほか、SK33・93・96・173、SP123・136・137・170・171があげられる。瓦廃棄土壙には、焼土や焼けた瓦が多量に含まれており、第２層と類似する埋土で埋められている。これらの土壙は第3a層の分布しない東調査区東半部に掘削されていることや、この周辺において第3b層上面に部分的に被熱した面が確認できることから、第3b層上面から掘り込まれたものと推定される。土壙を掘削して瓦などを廃棄した後、第2b・a層により整地したものとみられ、土壙の掘削から第２層による整地までは比較的短期間のうちに一連の作業過程で行われたものと想定される。

ここでは、瓦廃棄土壙のうち遺物の出土量が多かったものについて遺物を中心に取り上げた後、

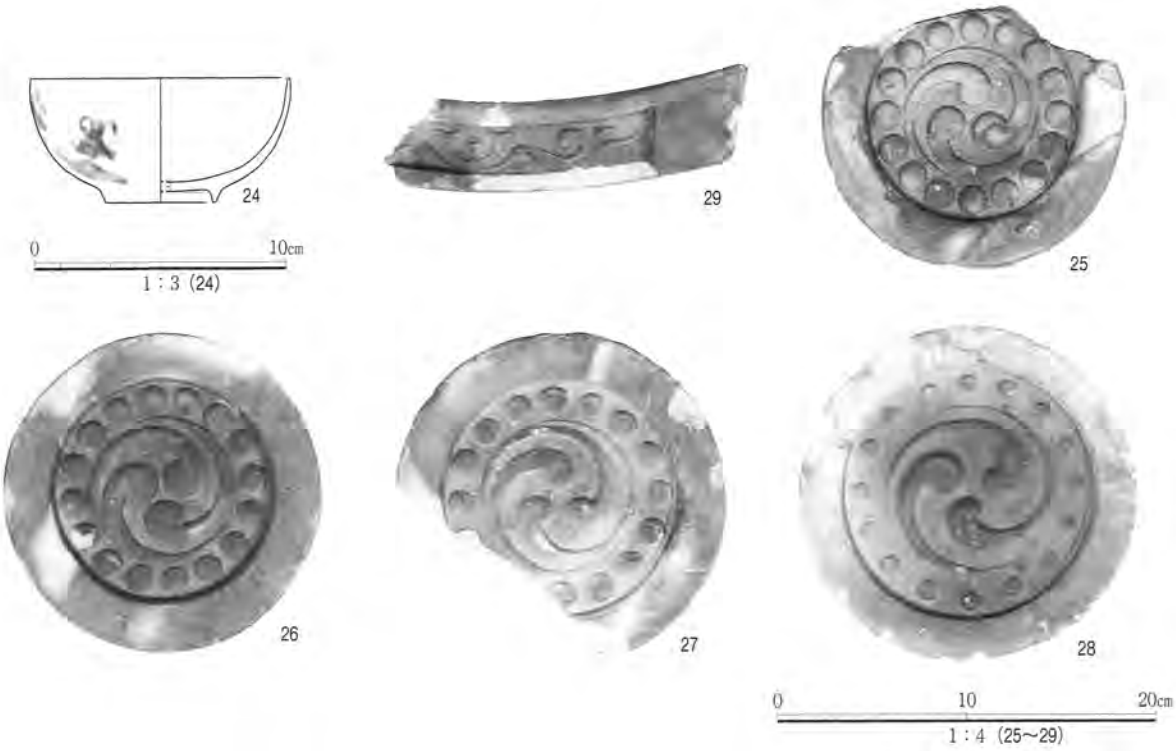


図26　SK178出土遺物

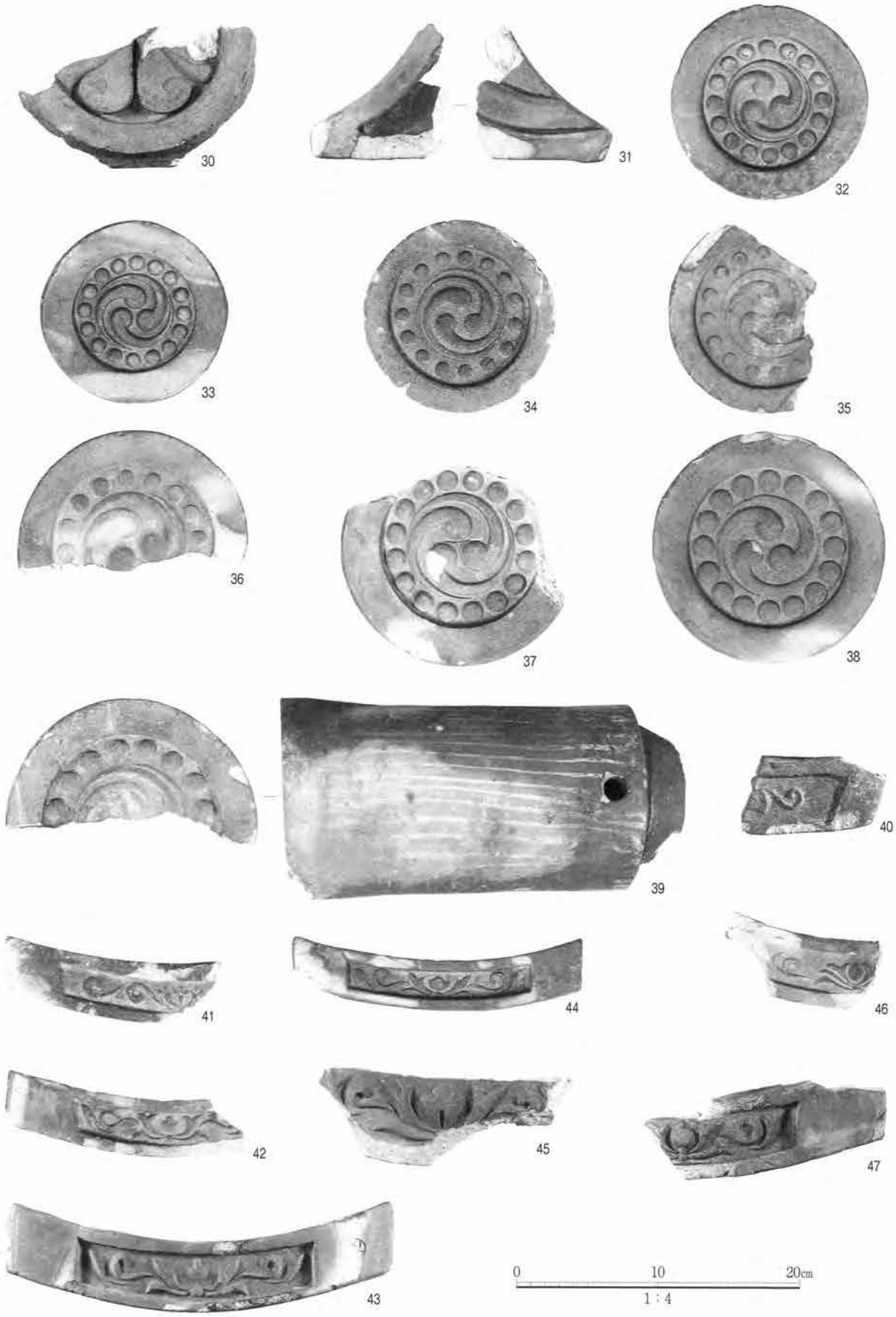


図27　SX180出土遺物

SK96について記述する。

SK06　土師器・須恵器・備前焼・丹波焼・信楽焼・瀬戸美濃焼陶器・肥前磁器・関西系陶器・堺焼・瀬戸美濃焼磁器・瓦・骨製品・石製品・金属製品・ガラス製品・壁土・漆喰塊が出土している。このうち土師器火鉢や関西系陶器の中には底部外面に墨書を施すものが見られた。

瓦のうち軒丸瓦は、文様や大きさが確認できるものは面径約13～16cmの左巻きの巴文、面径約18cmの右巻きの巴文が出土しており、桟瓦は丸付きの桟瓦が出土している。刻印のあるものとしては「○」「○に堺」「○にリ」「○に堺と○にリ」「○にエ」「○に木の篆書体」「○に太」「○に七」「○に小」の刻印を施すものが確認できた。瓦の中には高温で融解した金属塊が付着しているものが見られた。このほか、瓦と漆喰が互層になったものが出土しており、降棟の可能性がある。

骨製品は歯ブラシの柄、石製品は硯・石塔、金属製品としては薬莢、ガラス製品にはワインボトルなどの瓶類が出土した。

SX12　東西8.3m、南北は段落ちの肩部で8.0m、深さ1.9mの大規模な廃棄土壙である。土師器・備前焼・丹波焼・信楽焼・瀬戸美濃焼陶器・肥前磁器・軟質施釉陶器・関西系陶器・堺焼・瀬戸美濃

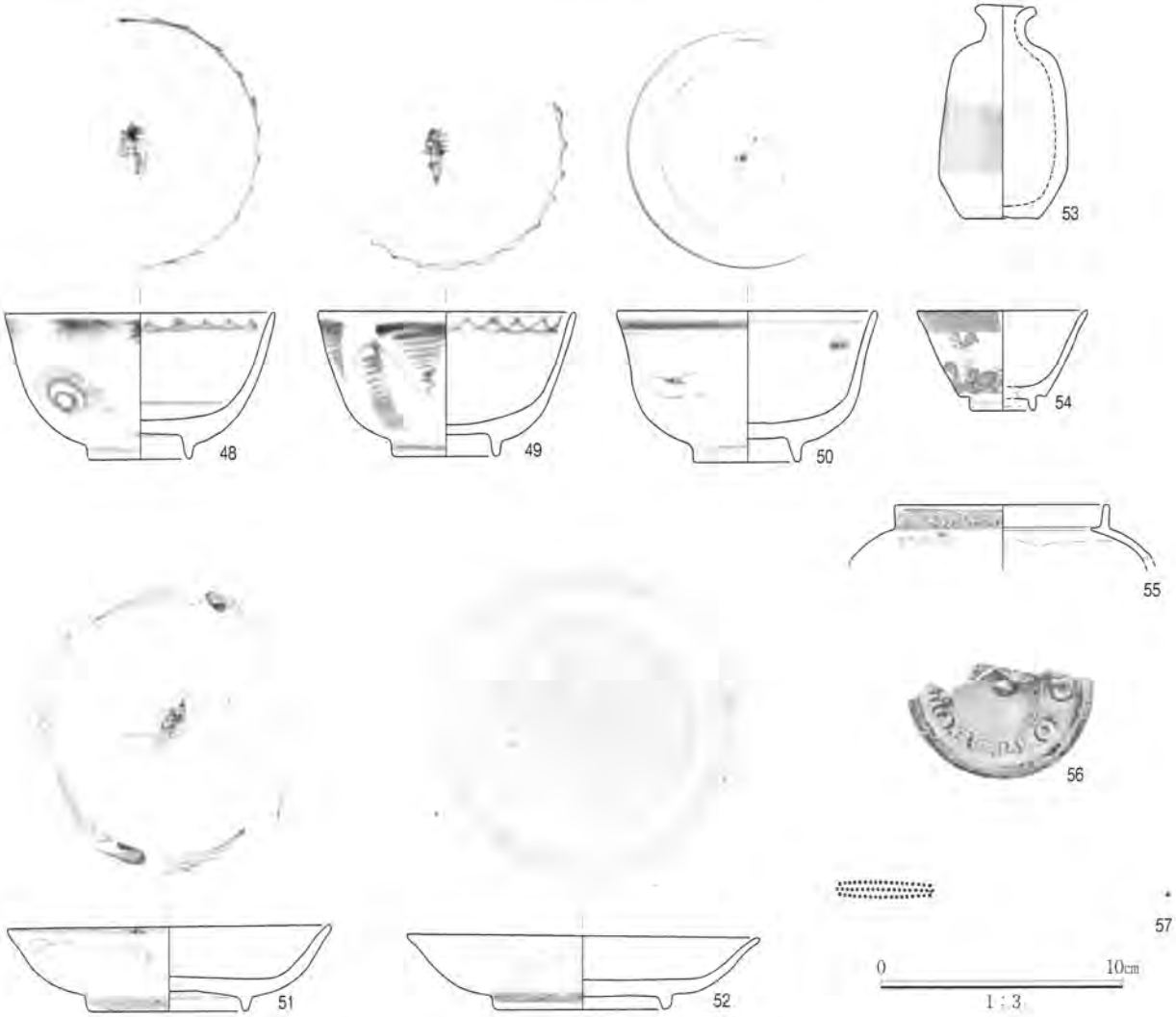


図28　SX12出土遺物（1）

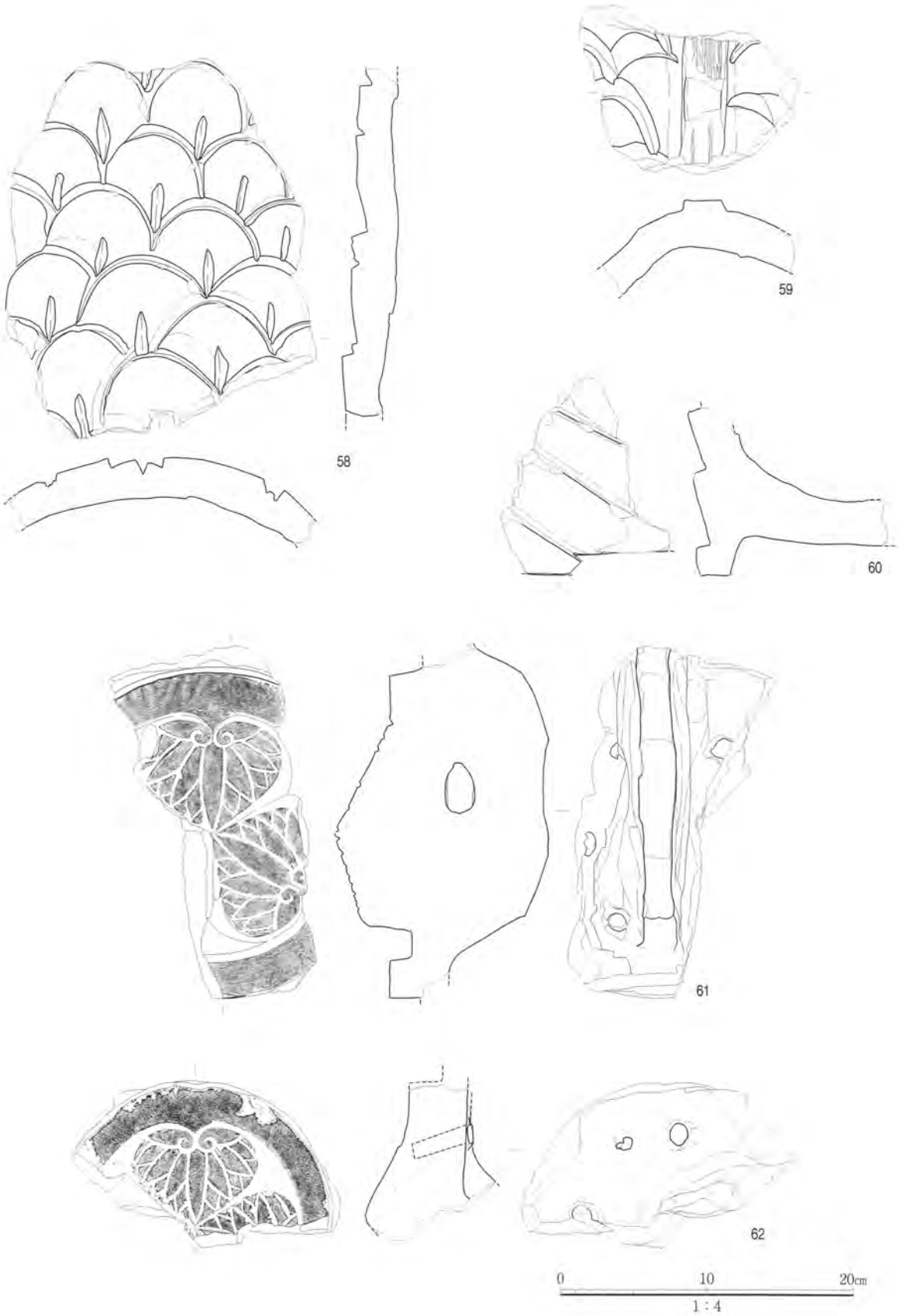


図29　SX12出土遺物（2）

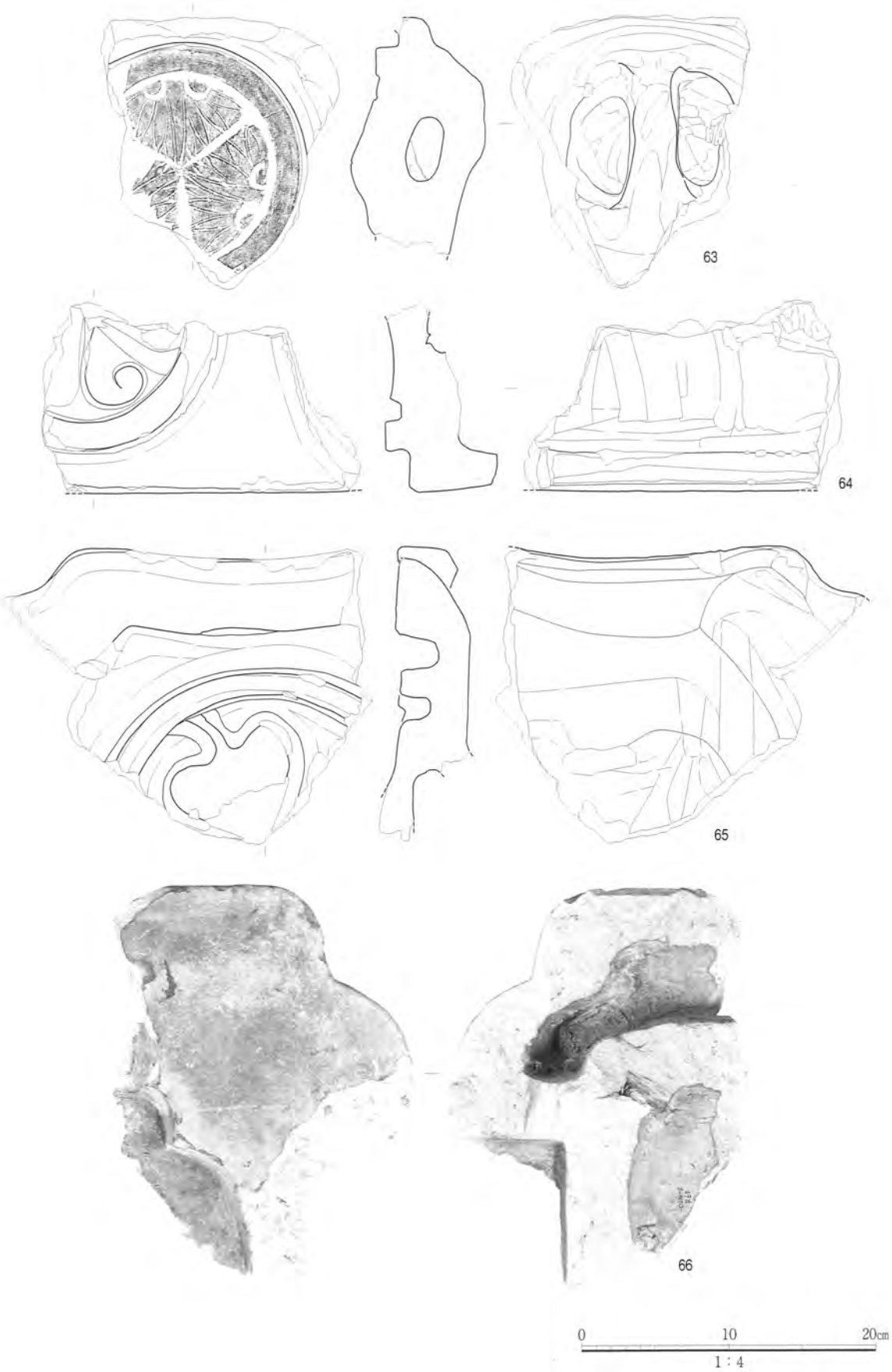


図30　SX12出土遺物（3）

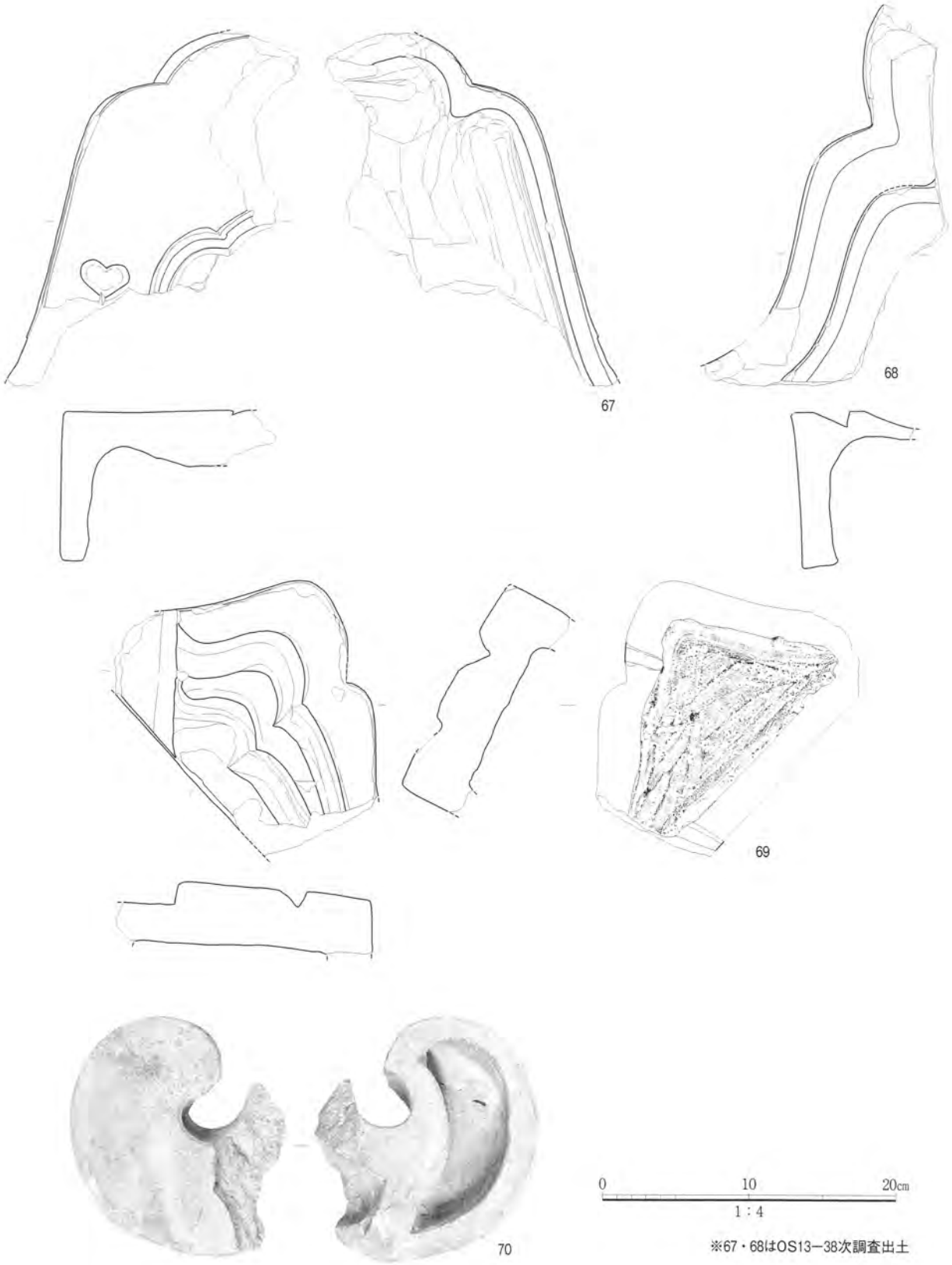


図31　SX12出土遺物（4）

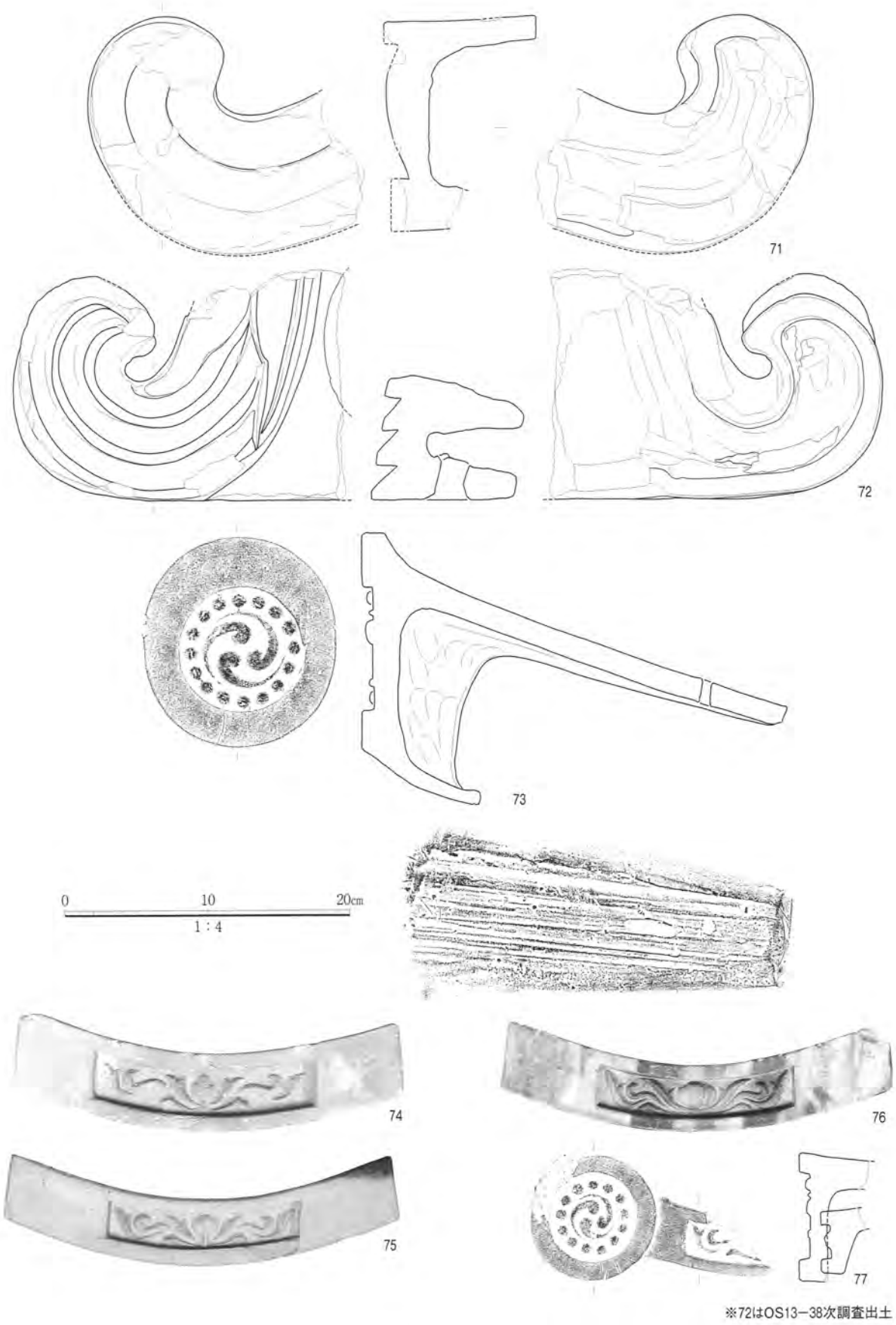


図32　SX12出土遺物（5）

焼磁器・瓦・煉瓦・骨製品・石製品・金属製品・ガラス製品・貝・壁土・漆喰塊が出土している。これらの遺物の中には何らかの金属製品が高温により溶けて融着したものや、焼けた壁土が多量に含まれていた。

48・49は瀬戸美濃焼磁器染付端反碗、50は肥前磁器染付端反碗で蛇ノ目釉剥ぎする。51・52は瀬戸美濃焼陶器皿、53は丹波焼瓶である。このほか、関西系陶器の土瓶なども出土している。これらの陶磁器は同形態・同意匠のものが多数出土している。遺物の年代は幕末までのものとみられる。54は瀬戸美濃焼磁器の染付小杯、55は染付急須で、明治時代に属するものである。

出土した陶磁器の大半は碗・皿・瓶・土瓶などで、このほかに灯火具や合子が一定量含まれるが、調理具はほとんど含まれない。また、陶器の中には墨書の書かれたものもが含まれていた。

56はワインボトルの底で、「OBELLO」と「D」の文字が確認できることから、「COOPER&WOOD PORTOBELLO」と書かれていたものとみられ、スコットランド製のガラス瓶で1859～1868年のものである。57は骨製の歯ブラシである。骨製品としてはこのほかにボタンが出土している。

瓦は、鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・丸瓦・平瓦・桟瓦・輪違瓦・その他道具瓦が出土した。桟瓦は二次焼成を受けていないものが大半であるが、わずかに二次焼成を受けているものが含まれる。

58～60は鯱瓦である。いずれも二次的に火を受けて赤く変色している。58は鯱の鱗部分、59は背鰭部、60は胸鰭部である。60はあるいは胸鰭から腹部にかけての部分の可能性もある。また、実測図で下面とした部分には布が付着している。61～72は鬼瓦で、61～65は三葉葵文の鬼瓦である。61～63は葉の葉脈を表現するもの、64は葉の茎を強調するもの、65は葉の稜線を強調するものである。73は隅巴瓦、74～76は橘唐草文の軒平瓦、77は丸付きの桟瓦である。

このほか、刻印を施す瓦が多数出土している。これらの刻印の中には、第3b層上面の瓦廃棄土壙のうち徳川期の遺構には含まれなかった「○に堺」の刻印を施すものも一定量含まれる。また、このほかに約30cm四方の方形の平らな瓦が複数含まれており、片面と四方の小口面に漆喰が付着していることからなまこ壁に使用されていたものである可能性がある。

煉瓦には「○に中」とみられる刻印を施すものが含まれていた。石製品には硯・豊島石の切石などが出土しており、豊島石は１面が焼けて赤く変色しており、この面が露出した状態で火災にあった可能性がある。金属製品は鎹・釘などが出土している。

SK14　肥前磁器・関西系陶器・瀬戸美濃焼磁器・信楽焼・瓦・煉瓦・金属製品が出土した。陶磁器のうち関西系陶器平碗には底部外面に「會」の墨書が記されているものが見られた。瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土した。軒平瓦は橘唐草文、軒丸瓦は面径約14～16cmの左巻きの巴文が出土している。刻印は「○に中」「○にス」「○に堺」「○に堺と○にケ」「○に太」「○にヤ」「□に久」などが見られる。煉瓦にも刻印が施されており、残存状況が悪く不明瞭ではあるが「○に中」の刻印の可能性がある。

SK15　土師器・備前焼・信楽焼・瀬戸美濃焼陶器・丹波焼・肥前磁器・関西系陶器・瀬戸美濃焼磁器・瓦・煉瓦が出土している。瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土した。刻印は「□にル」が見られた。

SK17　肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器・関西系陶器・瓦が出土している。軒平瓦・平瓦には刻印が施

されており、平瓦には「○に堺」の刻印が確認できるが、軒平瓦に施された刻印は部分的に欠けており○の中の文字は確認できなかった。

SK22　肥前磁器・関西系陶器・瀬戸美濃焼磁器・瓦・高温で融解した金属塊が出土した。瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土しており、これらの瓦の中には高温で変形し、表面が発砲したものも見られた。刻印は「○に大一」「○に大」「○に堺と○テ」が見られた。

これらの廃棄土壙から出土した陶磁器は18世紀後半～幕末までのものが多く、明治時代のものを少量含む。明治時代の遺物は土壙が掘削されて遺物が廃棄された年代を示し、幕末以前の遺物については戊辰戦争以前に使用されていたものと推定される。また、SX12から出土した48～53と同形態・同意匠の陶磁器がこれら明治時代の土壙から共通して出土している。遺物の年代は徳川期に収まるものと推定されるが、徳川期のものであることが確実な遺構からは同様の陶磁器はほとんど出土していない。このことから、これらの陶磁器は、あるいは明治時代の遺物か、幕末につくられて明治時代に使用されたものであった可能性がある。

また、これらの廃棄土壙に含まれていた煉瓦や桟瓦は東調査区西半部に厚く分布する第2a層中からは出土しておらず、東調査区西半部に分布する第2a層と東半部の第2a・2b層および瓦廃棄土壙との間には若干の年代差がある可能性がある。東半部の第2a・2b層および瓦廃棄土壙中から出土した陶磁器の中には明治時代後半のものは含まれておらず、出土した桟瓦や煉瓦がいつどのように使用されていたかについては今後の課題である。

SK96　埋甕遺構である。甕は大谷焼と類似する陶器であるが、産地は不明である。明治時代のものとみられ、甕内からは寛永通寶と瓦が出土した。

このほか、第3b層上面で礎石a～d・柱穴・柱抜き取り穴の可能性のある遺構・小穴などを検出した。礎石b～dは南北方向に並ぶが間隔が一定せず、関連する遺構かは不明である。また礎石aは、第3b層上部あるいは第3b層以上の薄い整地層の上に据えられており、礎石b～dとは関連しないものとみられる。

e．第2層上面以上の遺構(図33・34)

第2層上面以上の遺構としては近代の建物4棟、礫を多量に含む溝状の遺構SD01、埋設管とこれに伴う会所を確認したほか、第2層上面でSK03・92・106、SD08・11・104、SP09・10・95・154～158を検出した。

建物1　コンクリート基礎で、OS13－11次調査で検出されたSB105と同一の建物基礎である。図34(右)にみえる車庫の基礎と考えられる。

建物2　コンクリート基礎で、コの字状に張り出すような形態であることから、図34(右)の車庫の東側の建物や図34(中央)にある建物の可能性がある。

建物3　SD02・05・07・94で構成される礫を多量に含む方形に廻る溝状の遺構で、建物基礎下の地業の可能性がある。SD04はこの方形の溝のほぼ中央を横断するように掘削されており、同様に礫を含む溝状遺構であることから一連の遺構であろう。

建物4　コンクリートと煉瓦からなる基礎で、基礎下には礫を多量に含む溝状の地業が行われてい

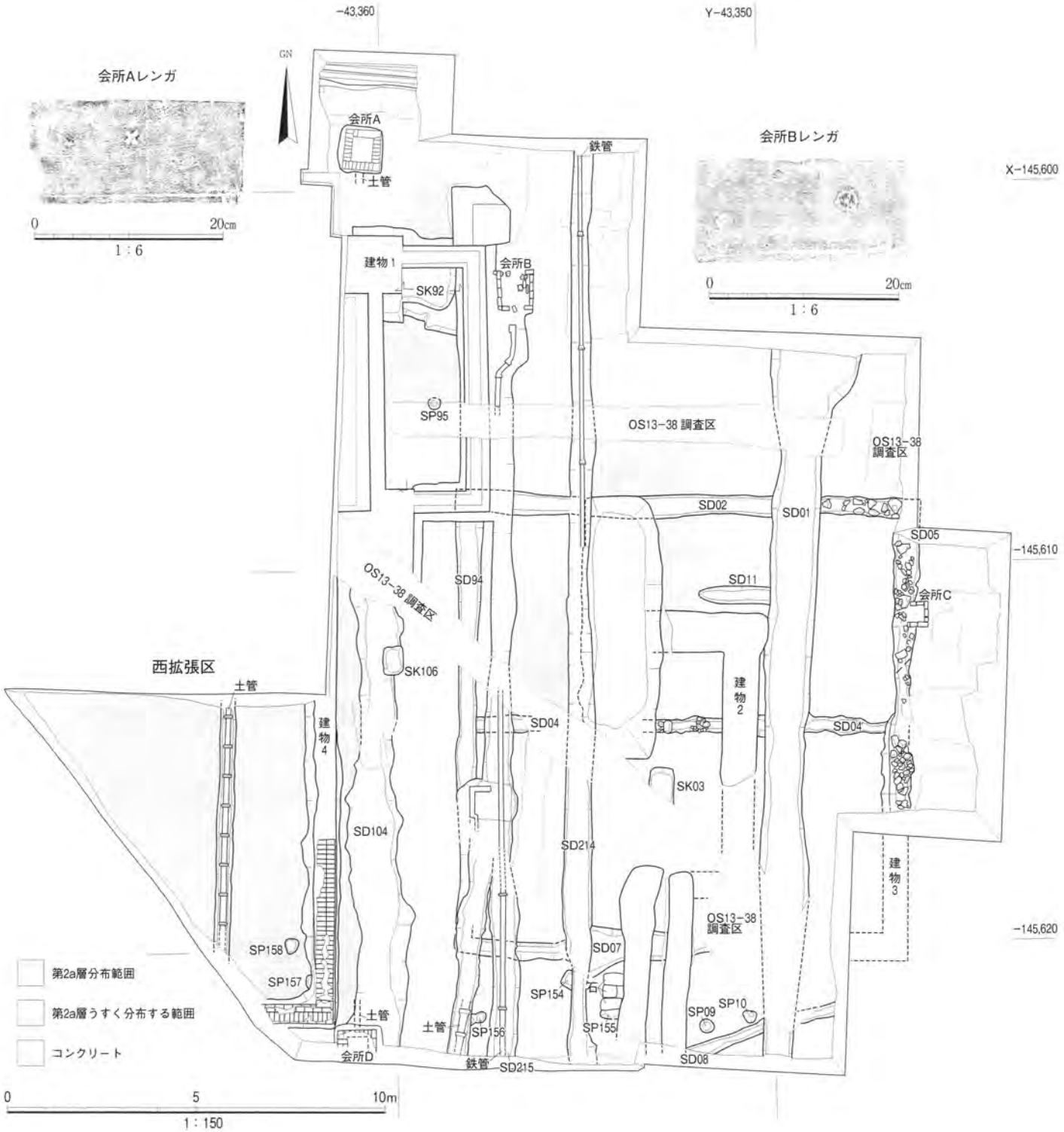
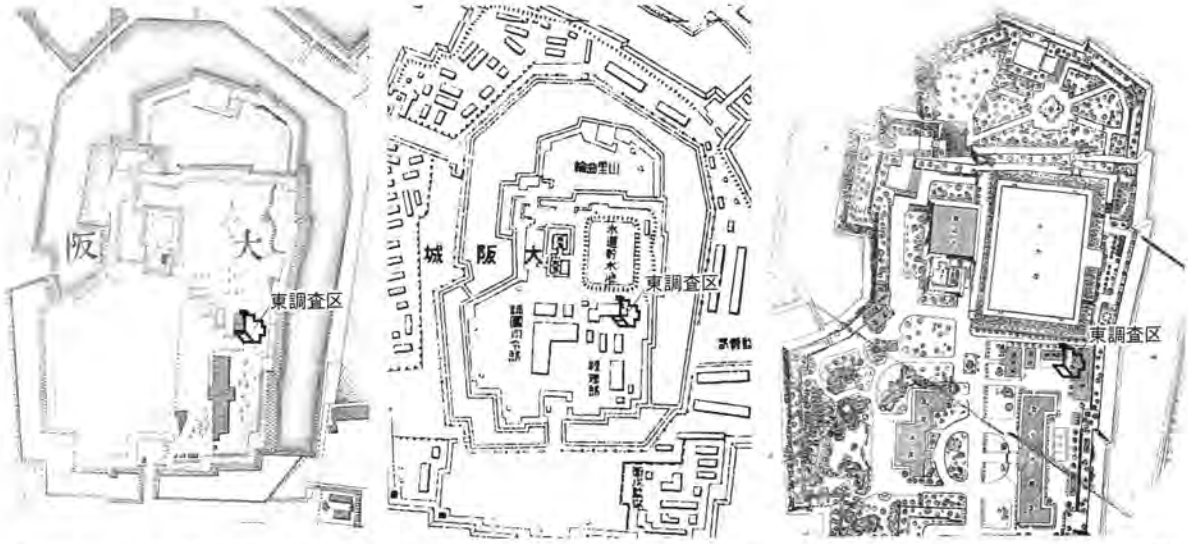


図33　東調査区近代遺構平面図



明治20(1887)年(『大阪実測図』部分)　大正3(1914)年(『大阪市街図』部分)　昭和6(1931)年頃(『大阪城公園図』部分)

図34　各時期における調査地周辺のようす(縮尺不同)

る。OS13－11次調査で確認されたSB103と同一の建物基礎であり、図34(左)に見られる南北方向の建物であろう。基礎に使用されている煉瓦には「×」の刻印があり、岸和田煉瓦製であることがわかる。

会所A～Dは煉瓦積の会所で、煉瓦に施された刻印から会所Aの煉瓦は岸和田煉瓦製、会所Bの煉瓦は大阪窯業製であることが判明した(図33)。

f．各地層出土遺物(図35)

第3d層から金箔押し軒丸瓦78が出土した。

第3b層から肥前磁器染付碗79、関西系陶器80が出土した。79は蛇ノ目釉剥ぎをし、外面には梅枝文を施す。80は若松文の退化した小杉碗である。いずれも19世紀前半の遺物である。このほかに第3b層から出土した19世紀の遺物としては軟質施釉陶器の秉燭がある。

81は第2a層から出土した瀬戸美濃焼磁器染付端反碗である。篆書文を施す小振りなもので、明治時代のものである。

3)まとめ

今回の調査では、徳川期には空閑地と考えられてきた本丸東縁部に舗道遺構が確認されたことで、本丸内において諸施設を結び日常的に使用する舗道が整備されていた様子が見えてきた。このことは、本丸における空間利用のあり方を考える上で重要な成果といえる。

また、東調査区で検出された徳川期～明治時代の瓦廃棄土壙から出土した瓦は、OS13－11次調査出土遺物と合わせて、遺構の年代によって18世紀後半～末、19世紀前半以降、明治時代前半の大きく3時期に廃棄されたものであり、徳川期大坂城の瓦利用のあり方について年代的な変化を捉えることができる貴重な資料といえる。

金蔵周辺の南北方向の石列SX304・石組溝SD310の構築面や年代については、昨年度の調査成果を含めて再検討の必要性が生じた。これにより東西方向の石組溝SD350の構築時期について本文中に

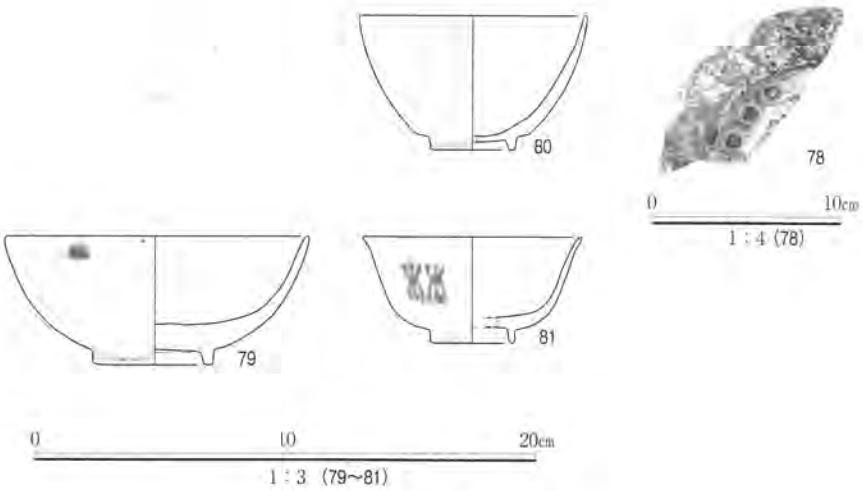


図35　各層出土遺物

第3d層(78)、第3b層(79・80)、第2a層(81)

示した19世紀前半以降という年代についても変動する可能性があるものの、調査成果の蓄積によって第3b層の出土遺物の年代に基づいて遺構の年代を示すことができる可能性が出てきたという点で、金蔵周辺の遺構の理解を進める上で一歩前進したものと考える。

昨年度から３期にわたって実施した発掘調査成果について総合的に再整理・検討することで、金蔵周辺の遺構の構築時期を含めて、遺構・遺物について再評価していくことが今後の課題である。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1985、『特別史跡　大坂城跡』

2002、『大坂城跡Ⅵ』

大阪文化財研究所2014a、『平成25年度特別史跡大坂城跡豊臣石垣公開事業にかかる発掘調査業務(OS13－11)報告書』

2014b、『平成25年度特別史跡大坂城跡豊臣石垣公開事業にかかる発掘調査業務(OS13－38)報告書』

大阪城天守閣2008、『描かれた大坂城・写された大阪城』

図版一

東調査区東半
西壁地層断面(南東から)

東調査区東半
西壁地層断面(東から)

東調査区東半
SX12断面および第3d層
地層断面(西から)

図版二

東調査区西拡張区
西壁地層断面(南東から)

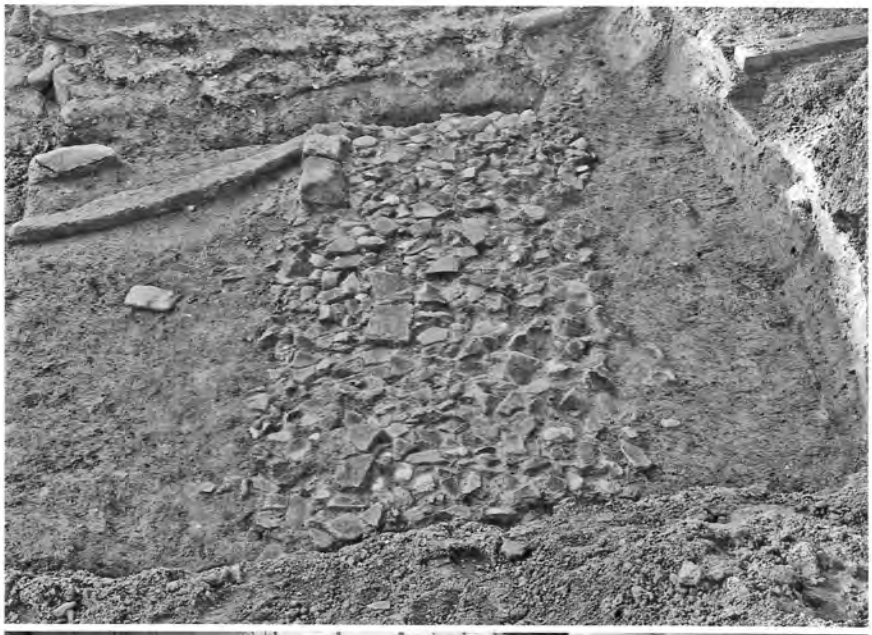
東調査区西拡張区
西壁地層断面(北東から)

東調査区西拡張区
第3c層上面全景
(南東から)

東調査区西半
第3c層上面・第3b層中全景
（南から）

東調査区第3b層中の舗道遺構１（南東から）

東調査区西半
第3b層中舗道遺構２
（東から）



西調査区
第3a層上面全景
（東から）

西調査区SD350
（西から）

東調査区西半
第3b層上面全景
（南から）

東調査区西半
第3b層上面SK97
（北西から）

東調査区東半
第3b層上面全景
（南西から）

中央区船越町二丁目52－１における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS14－５)報告書

調査個所	大阪市中央区船越町２丁目52－１
調査面積	23.5㎡
調査期間	平成26年７月28日～７月31日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、谷﨑仁美

1)調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城跡の西部に位置し、周辺ではOS87－39次・OS08－12次調査などで豊臣期の大名屋敷をはじめとする多数の遺構・遺物が見つかっている(図1)。地形的には上町台地の西斜面の傾斜地に当り、調査地より東の高所では、奈良時代の掘立柱建物など多数の遺構が見つかったOS90－50次・OS90－51次調査や井戸から奈良三彩小壺や墨書土器が見つかったOS87－29次調査など古代の遺構・遺物も見つかっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、大阪市文化財協会2003]。

当地において建設工事に先立って行われた大阪市教育委員会による試掘調査で、現地表下1.6m以下に江戸時代かそれ以前の遺構面が検出されたため本格的な発掘調査を実施することになった。

調査区は敷地の南寄りに4m四方の16㎡の範囲で設定した。ところが、後述のように豊臣期の礎石列が見つかり、協議の結果、その位置関係を探るために北側を約7.5㎡拡張し、最終的な調査面積は23.5㎡となった(図2)。調査は7月28日に開始した。現地表下1.6mまで重機で掘削し、それ以下は人力で地層の掘下げ、遺構検出を行った。調査の記録は適宜に実測図の作成、写真撮影を行い、7月31日に現場のおけるすべての作業を終了した。

なお、本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

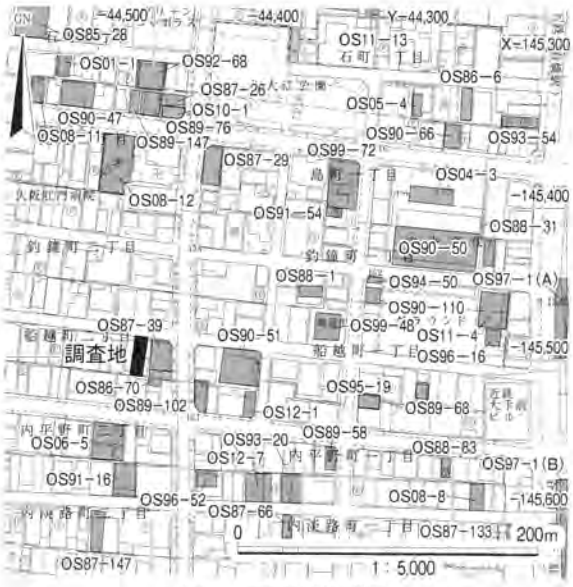


図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

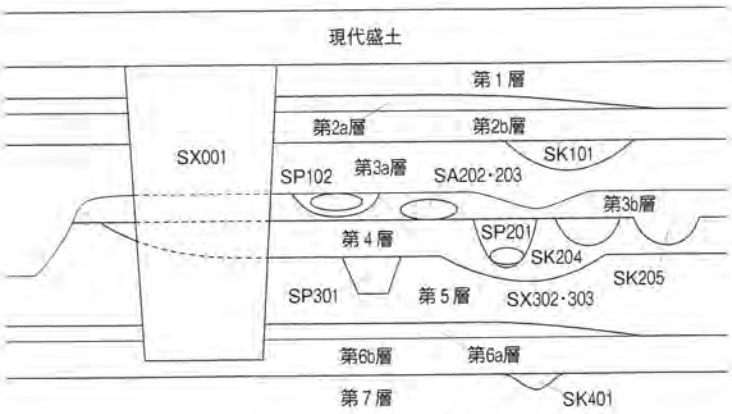


図3　遺構と地層の関係図

調査地に北接する東西道路を見ると、ちょうど北東の交差点付近で段差があり、東西で約1.9mの高低差がある。調査地付近で緩やかな傾斜となり西に向かって低くなっている。ただし、敷地内は平坦で、以下で述べる整地・盛土層もおおむね水平をなしていた。最後に調査区南壁際を深く掘り下げ、現地表下2.8mで段丘構成層(第7層)を検出した。

第1層：徳川期の盛土層である。炭・焼土塊を含むにぶい黄褐～褐色(10YR5/4～7.5YR4/4)シルト質細粒～極細粒砂層で、層厚は15cmである。層内から出土遺物はなかった。上面で18世紀前半代に埋没するSX001を検出した。

第2層：徳川期の焼土層である。a・b層に細分する。第2a層は炭を主体とする暗灰黄～オリーブ褐色(2.5Y4/2～2.5Y4/4)シルト質細粒～極細粒砂層で、層厚は7cmである。第2b層は炭・焼土塊を多く含む黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂層で、層厚は20cmである。出土遺物はなかった。

第3層：徳川初期の整地層である。大坂夏ノ陣後の片付けによる整地である。第3a層は調査区東側では、少量の炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂層で、層厚は75cmである。遺構埋土である可能性がある。調査区西側では、炭を多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒～極細粒砂層で、層厚は20～30cmである。土師器・肥前陶器・瓦・鉄釘・石材・貝が出土した。上面でSK101などの土壙を検出した。第3b層は調査区全域に分布する。炭を多く含む黄褐色(2.5Y5/3)中礫混り中粒～極細粒砂層で、層厚は10～20cmである。上面でSP102を検出した。第3b層から土師器14～20・肥前陶器21～23・備前焼・瓦・煙管24が出土した。

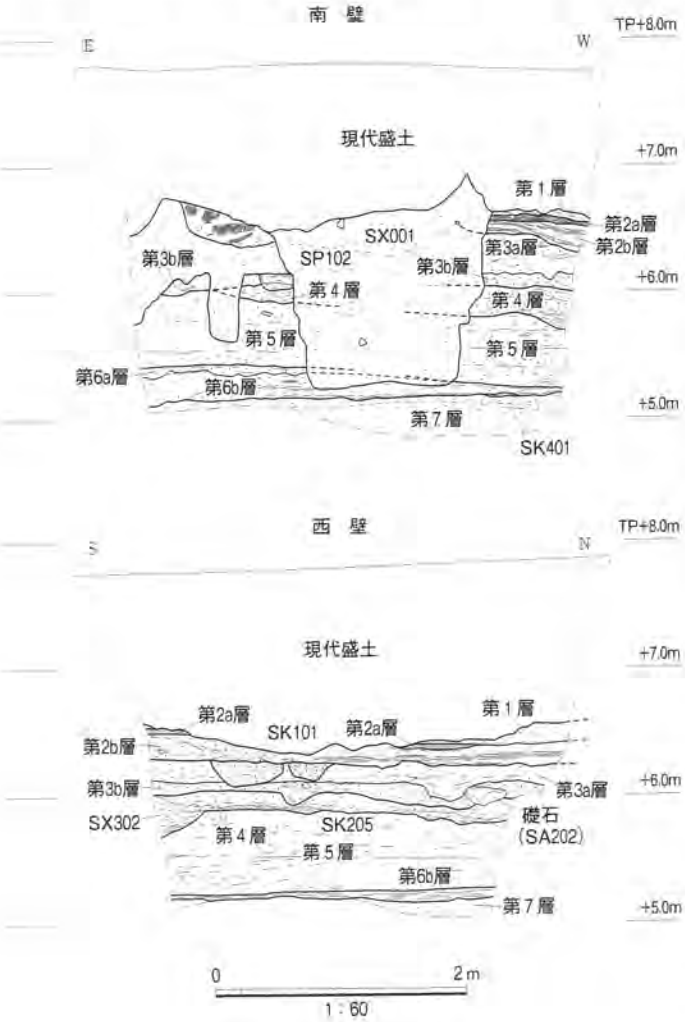


図4　調査区地層断面図

第４層:豊臣後期の遺構埋土および盛土層である。炭・焼土塊・シルト偽礫・中粒～極細粒砂偽礫を含むオリーブ黄色(5Y6/3) シルト質中粒～極細粒砂層で、層厚は18cmである。出土遺物はなかった。上面でSP201、SA202・203、SK204・205を検出した。

第５層：豊臣前期の盛土層である。炭・シルト偽礫を含む黄褐～にぶい黄褐色(2.5Y5/3～10YR5/3)粗粒～細粒砂層で、層厚は65cmである。土師器11・瓦・鞴羽口・石製品25が出土した。上面でSP301やSX302・303を検出した。

第６層：豊臣前期の整地層である。a・b層に細分する。第6a層は調査区東側の高所に分布する。浅黄色(2.5Y7/4)シルト質極細粒砂層で、層厚は10cmである。第6b層は調査区全域に分布する。炭・中粒～細粒砂偽礫を含み、極細粒砂質シルト層が挟在するにぶい黄色(2.5Y6/3) シルト質細粒～極細粒砂層である。層厚は８～18cmである。第6b層から土師器12・須恵器・瓦13が出土した。

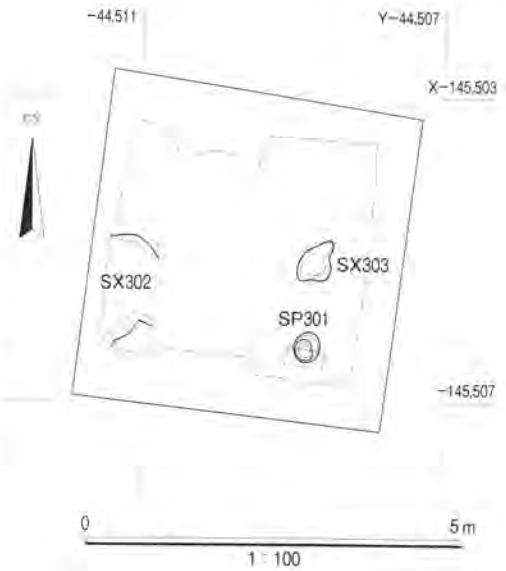


図５　第５層上面遺構平面図(豊臣期)

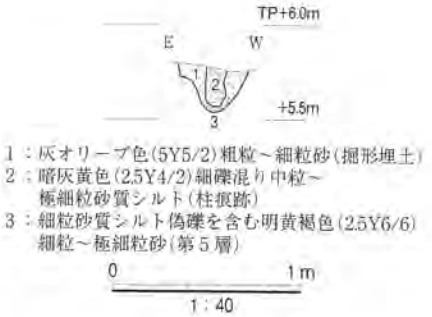


図６　SP301遺構断面図

第７層：段丘構成層である。上部は明黄褐色(2.5Y6/8)中粒～細粒砂層で、根による攪乱が見られたが、下部は黄褐～黄灰色(2.5Y5/6～2.5Y6/1)分級の良い粗粒～細粒砂層である。上面にSK401があることを調査区南壁の断面観察で確認したが、平面には分布しなかった。

ⅱ)遺構と遺物

a．第７層上面の遺構と遺物(図４)

SK401は幅0.35m、深さ0.05mの土壙で明黄褐色(2.5Y6.6)粗粒砂混り泥質シルトで埋る。埋土が人為的であるため、遺構と判断したが、出土遺物はなかった。

b．豊臣前～徳川初期の遺構と遺物(図５～７・９)

第５層上面でSP301やSX302・303を検出した(図５)。

SP301は掘形の直径0.35～0.40mで、柱痕跡の直径0.12m、深さ0.25mの柱穴である。掘形は灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒～細粒砂が充填し、柱痕跡は暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混り中粒～極細粒砂質シルトで埋る(図６)。出土遺物はなかった。

SX302・303はいずれも第４層で埋る浅い落込みである。平瓦や石材片、鉄滓が出土した。

第４層上面でSP201、SA202・203、SK204・205を検出した(図７)。

SP201は礎石を伴う柱穴である。掘形は南北長0.40m、東西長0.27m、深さ0.42mの楕円形で、オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質中粒～細粒砂が充填する。礎石の上に柱痕跡は確認できなかった。石材は花

図7　第4層上面遺構平面図(豊臣後～徳川初期)

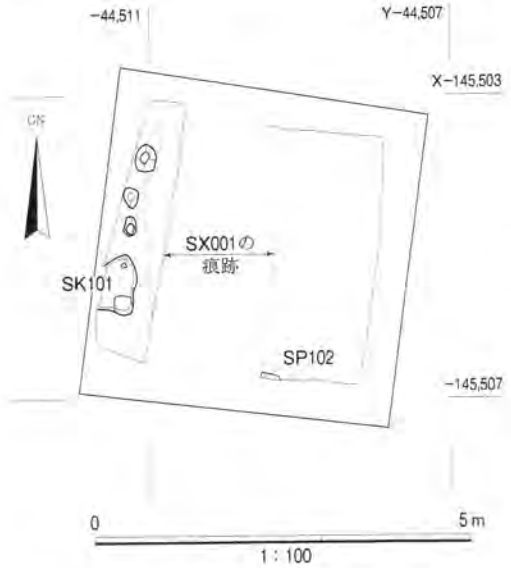


図8　第3a・b層上面遺構平面図(徳川初期以降)

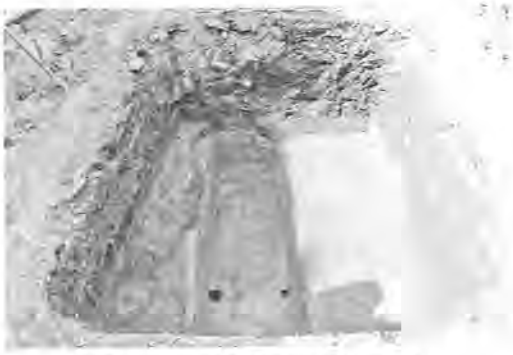


写真1　SX001の完掘状況(南から)

崗岩で直径15cmである。

SA202は南北方向の礎石列で、北で東に7°振る。掘形の痕跡はなく、礎石は約1.0mの間隔で4基並ぶ。石材は花崗岩で直辺40cmのものから25cmのものがある。SA203も同様の礎石列で、北で東に2～3°振る。掘形の痕跡はなく、礎石は0.90～0.95mの間隔で4基並ぶことを確認したが、後述する第1層上面のSX001を掘っている際、南端の石材を取り上げてしまった。それより南では石材を検出せず、延長しないようである。石材は花崗岩で直径25cmである。

SK204は直径0.60m、深さ0.18mの土壙で、炭・第4層由来の中粒～極細粒砂偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒～細粒砂層で埋る。平瓦片が出土した。

SK205は直径0.4m、深さ0.1mの土壙で第3b層で埋る。SK205から丹波焼擂鉢1が出土した。内外面ともにナデ調整で、1条1単位の摺目が入る。口縁端部は面をなし、17世紀初頭(豊臣後～徳川初期)に属する。

c．徳川初期以降の遺構と遺物(図4・8・9・写真1)

第3b層上面で礎石を伴う柱穴SP102を検出した(図4・8)。石材は花崗岩で長辺25cm、短辺10cm遺構、高さ10cmである。掘形は直径0.27m、深さ0.15mで、黄褐色(2.5Y5/4)中粒～細粒砂が充填する。出土遺物はなかった。

第3a層上面で多数の土壙を検出した。SK101は南北長0.70m、東西長0.45m以上、深さ0.20mの不整形な土壙で、炭・焼土塊を多く含む黄褐色(2.5Y5/4)中粒～極細粒砂で埋る。他の土壙の埋土の状況も同様である。

SK101からは土師器皿2・3のほか肥前陶器片や平瓦が出土した。2は口径9.0cmで浅黄橙色を呈する。内面はナデ調整で、外面は指頭圧痕が明瞭に残り、口縁端部は丸くおさめる。3は口径9.4cmで灰褐色を呈する。口縁部はナデ調整でやや直立ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。被熱している。17世紀前半に属すると考えられる。

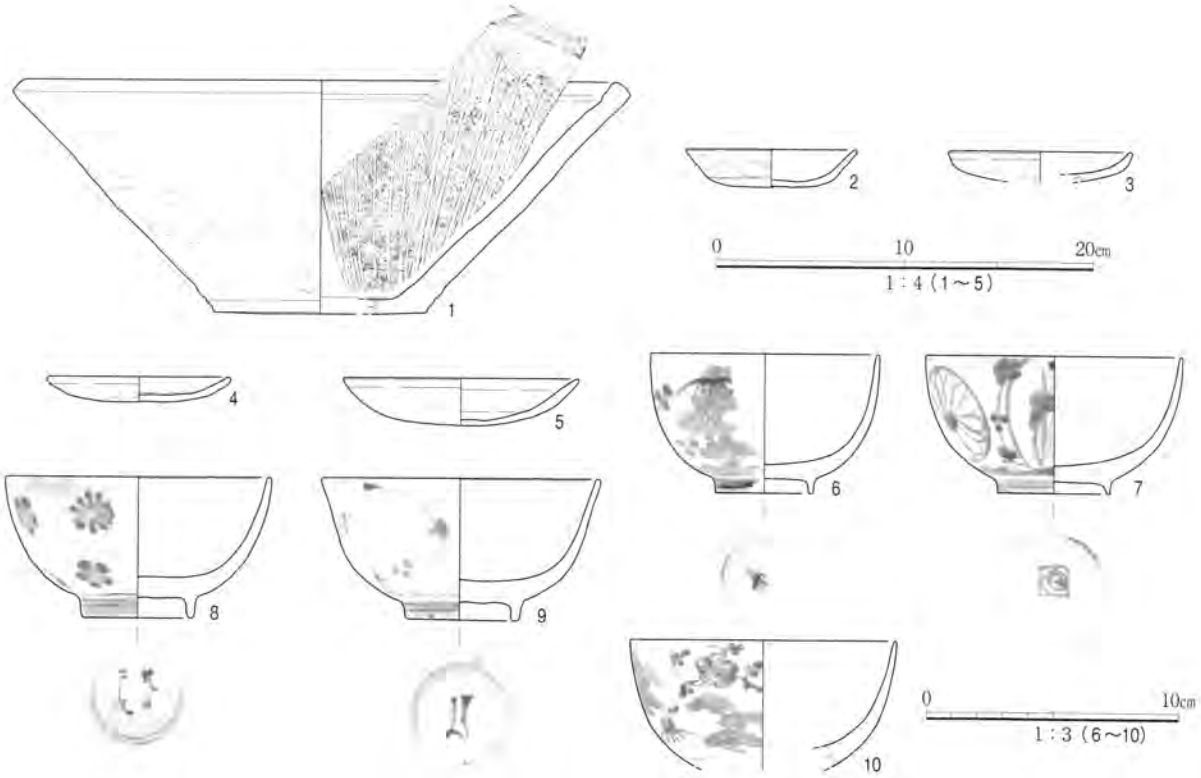


図9　遺構出土遺物

SK205(1)、SK101(2・3)、SX001(4～10)

第1層上面で穴蔵SX001を検出した。南北長3.4m、東西長1.8m、深さ1.5mの長方形で、黄褐色(2.5Y5/3)中礫混り粗粒～細粒砂で一気に埋る。底には南側に2箇所の柱痕跡があった。一辺18cmの方形で、暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで埋る。

土師器皿4・5、肥前磁器の染付碗6～10や染付皿、備前・丹波焼の甕、備前焼の瓶、貝片が出土した。4は口径9.5cm、5は口径12.4cmでともに灰白色を呈する。6・7は高台内に渦福銘を有する。6・10

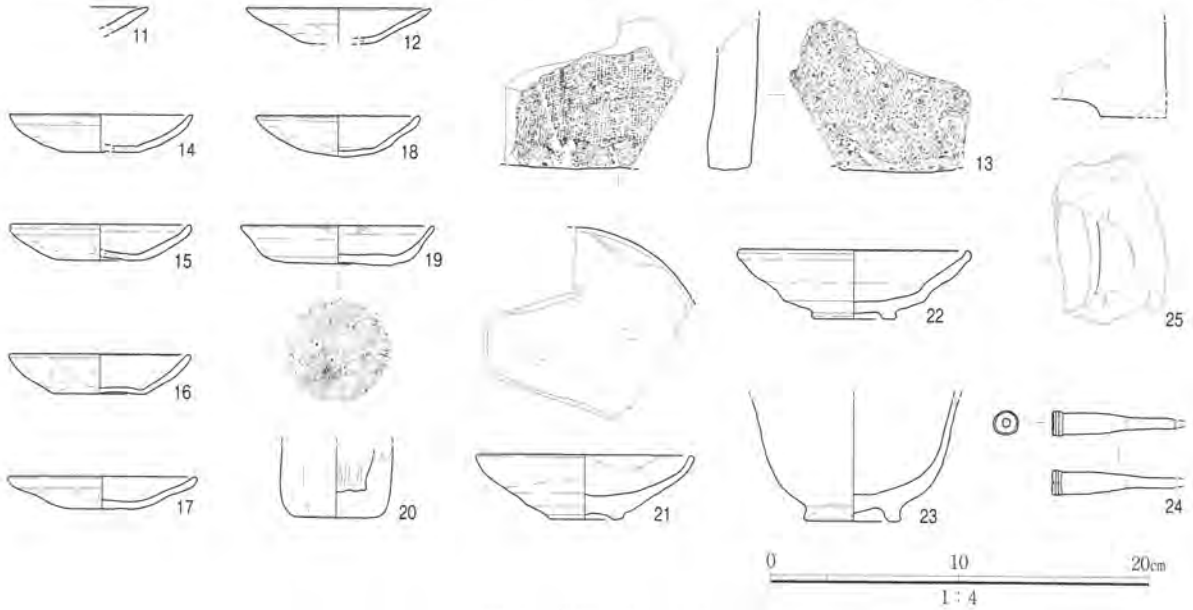


図10　各層の出土遺物

第6b層(12・13)、第5層(11・25)、第3b層(14～24)

はコンニャク印判と手描きによる施文である。8は高台内に崩れた「太明年製」銘を、9は形骸化した「大明」銘を有する。これらは18世紀前半に属する。

iii)各層の出土遺物(図10)

第6b層からは土師器皿12、平瓦13のほか、須恵器片が出土した。12は口径9.8cmで、灰黄色を呈する。内外面ともにナデ調整で、端部をややつまみ上げる。豊臣前期に属する。13は、凸面はナデ調整で凹面は端部をケズリ調整するほかは布目圧痕と桶の枠板痕跡が残る。3～5㎜大の長石や石英を含む密な胎土で、焼成は堅緻である。青灰色を呈する。古代に属する。

第5層からは土師器皿11のほか、中世以降の丸・平瓦、鞴羽口片、石製品25が出土した。11は口径不明で、灰白色を呈する。口縁部はやや厚く、端部を丸くおさめる。豊臣前期に属する。

第3b層からは土師器皿14～19、焼塩壺20、肥前陶器の皿21・22、碗23、煙管24のほか、備前焼の甕や平瓦が出土した。14～17は口径9.4～9.8cmで黄橙色を呈し、17は被熱している。18は口径8.6cmで灰黄色を呈し、内外面に煤が付着する。19は糸切り底の皿で、灯火具に転用する。口径10.1cmで黄橙色を呈する。21は高台から口縁部にかけて緩やかな曲線で開き、口縁部内面に鉄絵を施す。底部内面に胎土目跡を有する。22は折縁皿で、底部内面に胎土目跡を有する。23は被熱しており、内外面の灰釉が灰白色を呈する。25は笏谷石製のバンドコ(行火)の脚部の可能性がある。ただし、石材は凝灰岩で長石・石英・軽石を多く含み、きめ細かい点は笏谷石の特徴と合うが、火山礫を含まない点や暗褐色を呈する点が異なる。以上は徳川初期に属する。

3)まとめ

今回は小規模の調査であったが、豊臣前期～徳川期の遺構および整地層を確認した。特に豊臣前期の整地層は、本調査地東側のOS87－39次・OS90－51次調査などでは確認しているが、北側のOS08－12次・OS87－29次調査では、豊臣後期の整地層の下は段丘構成層で存在しないようである。豊臣期の土地利用の変遷を考える上で重要である。今後、周辺での調査が進み、大坂城・大坂城下町の歴史的変遷について更なる検討を加え、明らかにしていく必要がある。

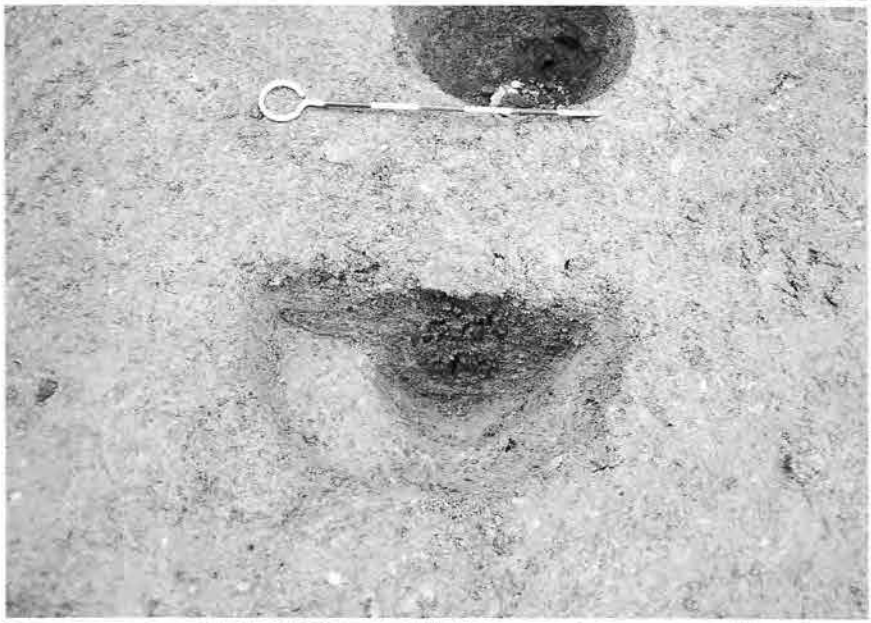
引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城跡発掘調査(OS08－12)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.236－247

大阪市文化財協会2003、「OS90－50次およびその周辺の調査」、「OS90－51次およびその周辺の調査」:『大坂城跡Ⅶ』、pp.105－128、pp.133－142

調査区南・西壁地層
断面(北東から)

SP301断面(北から)



調査区全景および
第4層上面遺構
検出状況(南から)

中央区谷町二丁目33－11における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS14－６)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区谷町２丁目33－11
調 査 面 積　122㎡
調 査 期 間　平成26年11月５日～11月13日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　高橋 工、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は大坂城跡の中央部にあり、谷町筋と大手通りの交差点北東に位置する(図1)。今回の調査区すぐ西のOS88－121次調査で、三ノ丸築造前の屋敷地の一部と想定される、豊臣前期の板留めの排水施設やゴミ穴が検出されている[大阪市文化財協会2002]。また、豊臣氏大坂城の三ノ丸と惣構との境界付近にある谷町筋で実施されたOS97－1次調査のC区では、弥生・古墳・飛鳥時代の土壙、奈良・平安時代の建物、豊臣前期・後期の建物など多時期にわたる遺構・遺物が見つかった[大阪市文化財協会1999]。南方のOS05－3次調査では、5世紀末～6世紀初頭の整地や7世紀中頃の大溝、豊臣期の銅合金の製造に関わる木簡や坩堝、炉壁、徳川期の軟質施釉陶器の生産に関わる窯道具と製品などが発見され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]、周辺地域では詳細な歴史復元のための情報が蓄積されつつある。

大阪市教育委員会が平成26年9月30日に行った試掘調査の結果、現地表下約1.8m以下の深さで徳川期と考えられる遺物包含層および遺構面が検出され、本調査を実施することになった。11月5日、敷地北部に8m四方の調査区を設定し、調査を開始した(図2、1区)。重機によって、現地表下1.8mまで近現代攪乱層ならびに近世盛土の一部を重機で掘削し、慎重に人力によって掘り下げた。その結果、18世紀前半以降の大きな落ちSX01が検出されたものの、より古い遺構・遺物は確認できなかった。関係者と協議した結果、調査区を南方に拡張することにし、長さ4m、幅5m分を重機で掘削したが(2区)、1区とほぼ同様の内容であり、さらに南方に8m分の拡張を行った(3区)。ここで豊臣期の遺構面を確認し、遺構・遺物の検出に努め、随時、写真・図面で遺構・地層の記録を行った。機材の撤収などの作業を含め、11月13日に発掘調査を完了した。

調査地の基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づ

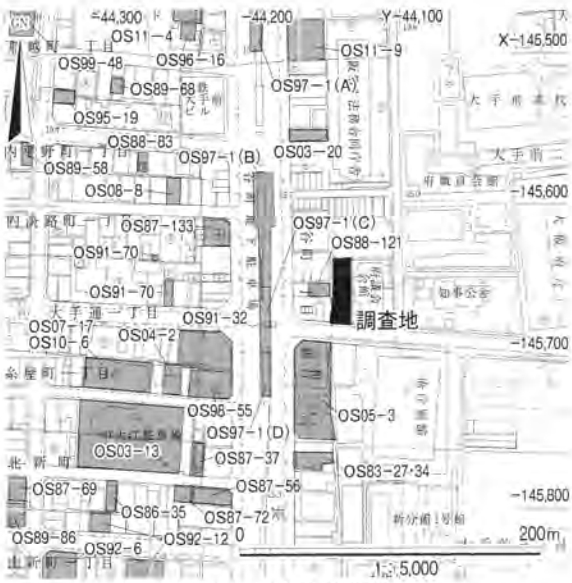


図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

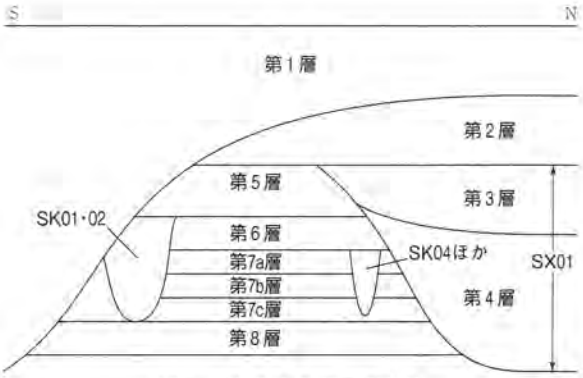


図3　地層と遺構の関係図

く座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。

2）調査の結果

i）層序（図3・4）

敷地の現地表面の標高はTP＋16.6m前後とほぼ平坦である。TP＋12.0mまでの地層を第1～8層に分類し、第7層を3層に細分した。なお、第2～4層は1区、第5～7層は3区で確認したものである。

第1層：アスファルト、砕石を含む、近現代の盛土および攪乱層である。層厚は100～380cmである。

第2層：焼土・炭を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルトを主体とする近世～近代の盛土層で、最大層厚は90cmである。

第3層：炭を含む黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトからなるSX01の埋土で、最大層厚は150cmである。18世紀前半から中頃の陶磁器、瓦などを検出した。

第4層：オリーブ黒(7.5Y3/1)中礫混り細粒砂質シルトからなるSX01の埋土で、最大層厚は230cmである。18世紀前半から中頃の陶磁器、瓦などを検出した。

第5層：黄褐色(10YR5/6)偽礫混り粘土質シルトからなる盛土層で、最大層厚は116cmである。土師器皿、瀬戸美濃焼の水鳥形水滴11、平瓦、石製硯12など、豊臣期の遺物が出土した。

第6層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト偽礫混り細粒砂質シルトを主体とする盛土層で、層厚は15cm前後である。土師器皿2、瀬戸美濃焼の天目碗6、中国産白磁輪花皿8など、豊臣前期以前の遺物を含む。上面でSK01・02などを検出した。

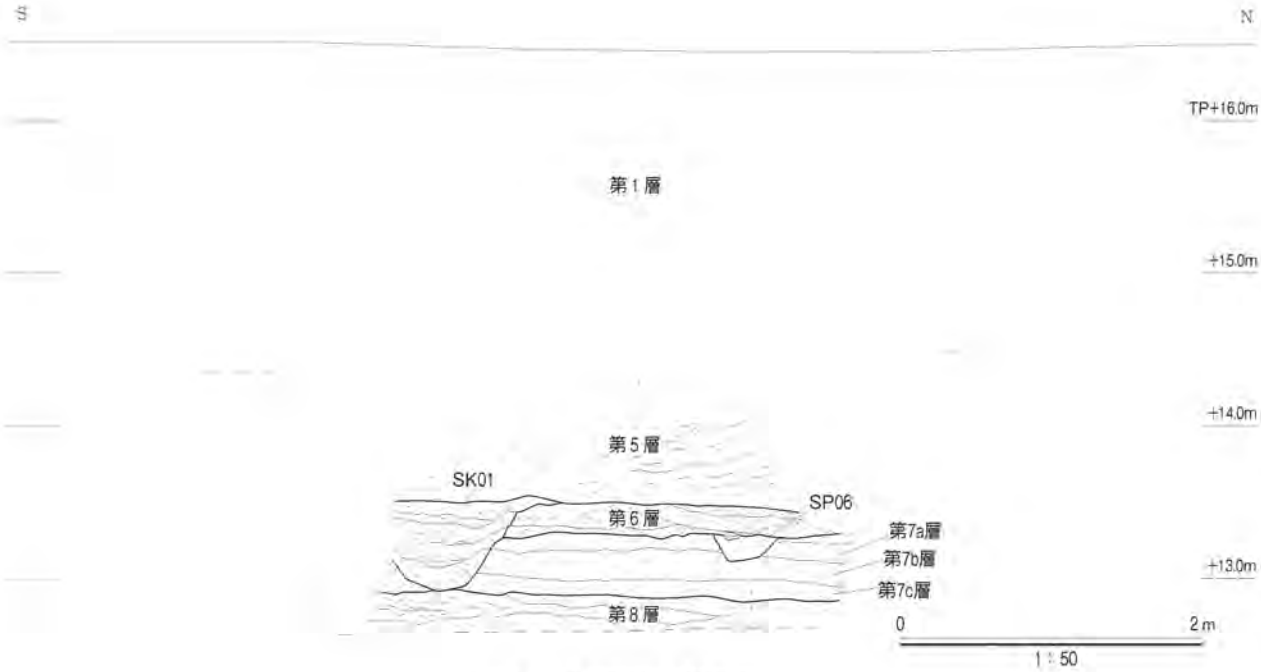


図4　3区西壁地層断面図

第7a層：黄灰色(2.5Y5/1) 中粒砂質シルトからなる盛土で、層厚は10cm前後である。上面でSK04・05などを検出した。

第7b層：黄灰色(2.5Y5/1)偽礫混り中粒砂質シルトからなる盛土で、層厚は20cm前後である。

第7c層：にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂～細粒砂からなる盛土で、層厚は10cm前後である。

第８層：にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂を主体とする段丘構成層で、層厚は20cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．豊臣期の遺構と遺物

３区の第7a層上面と第６層上面で豊臣期の遺構を検出した(図５・７)。

第7a層上面遺構の埋土はいずれも灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトを主体とする。

SK04　直径0.2m前後、深さ0.1mの土壙である。箸片と考えられる木製品が出土した。

SK05　南北0.2m、東西0.1m、深さ0.1mの土壙である。

SP06　南北0.5m、東西0.4m以上、深さ0.2mの柱穴で、中央に礎石を据えていた。礎石上で検出した円形の粘土塊は柱痕跡と考えられ、直径は0.20mである。土師器皿の小片のほか、備前焼壺７、中国産の青磁蓮弁文碗９が出土した。後者は13世紀中頃以降に増加する遺物である。

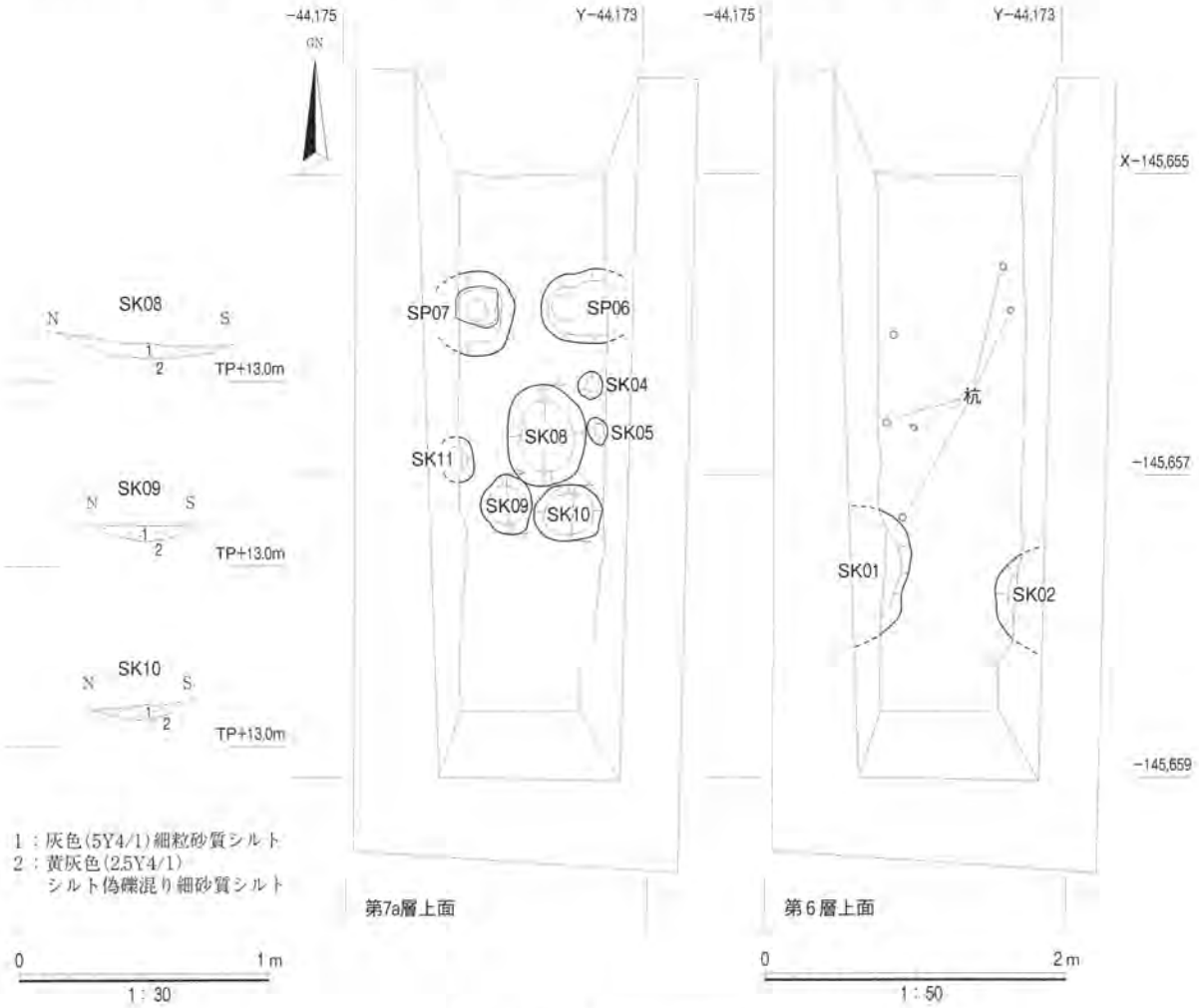


図５　３区遺構平面・断面図

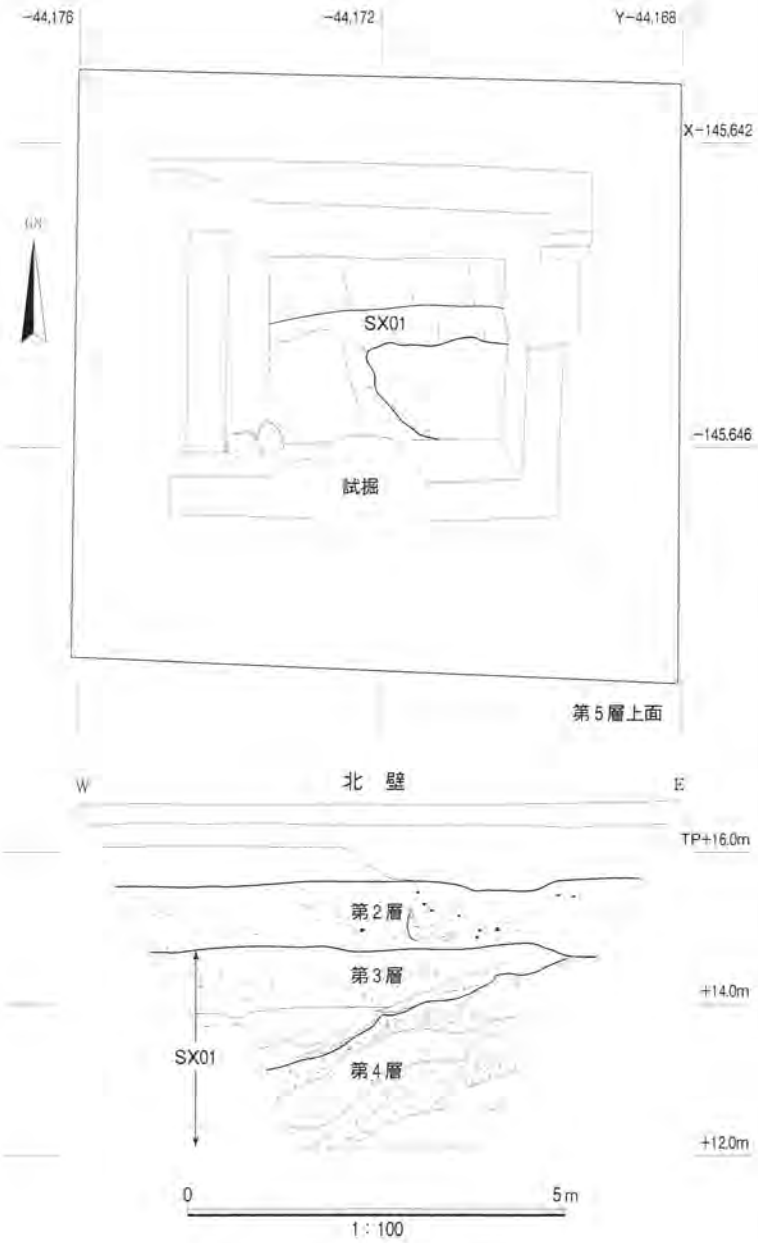


図6　1区遺構平面・断面図

SP07　南北0.55m、東西0.35m以上、深さ0.20mの柱穴で、礎石は確認できず、柱痕跡と考えられる円形の粘土塊の直径は0.14mである。

SK08　南北0.65m、東西0.52m、深さ0.10mの土壙で、土師器皿、瓦器椀の小片が出土した。

SK09　南北0.40m、東西0.32m、深さ0.07mの土壙で、土師器皿の小片が出土した。

SK10　南北0.35m、東西0.45m、深さ0.08mの土壙である。

SK11　南北0.30m、東西0.08m、深さ0.10mの土壙である。

第6層上面遺構では2基の土壙を検出した(図5・7)

SK01　西壁沿いで検出した南北1.0m以上、東西0.2m以上、深さ0.60mの土壙で、埋土は灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトを主体とする。土師器皿3が出土した。豊臣前期に位置づけられる。

SK02　東壁沿いで検出した南北0.6m以上、東西0.2m以上、深さ0.50mの土壙で、埋土は灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトである。瀬戸美濃焼の鉄釉碗5が出土した。豊臣前期に属する。そのほか、直径約5㎝の杭を6箇所で確認した。

b．徳川期の遺構と遺物(図6・7)

1区の第5層上面でSX01を検出した。上端は調査区外にあり、規模は少なくとも南北12m以上、東西5m以上、深さは2.6m以上である。地山上面で確認した底部の形状は南東は平坦だが、北方向に1m以上急激に落ちている。埋土から肥前磁器染付碗13・14、同皿15、軟質施釉陶器の火もらい16、土師器焙烙17、木製柄18などが出土した。16は褐色の鉄釉を施し、円形の窓をもつ。糸切り底である。17は口径26.6㎝で、D類のうち、把手に1孔を貫通させるa2類に属し、18世紀前半に位置づけられる[難波洋三1992]。18は長さ12.2㎝、最大径2.8㎝で、一木から成り、外面は丁寧に面取りされ、内部は断面が円～楕円形に刳り貫かれる。柄端部に銅製の輪金具(鐺？)がつく。13～17は18世紀前半～中

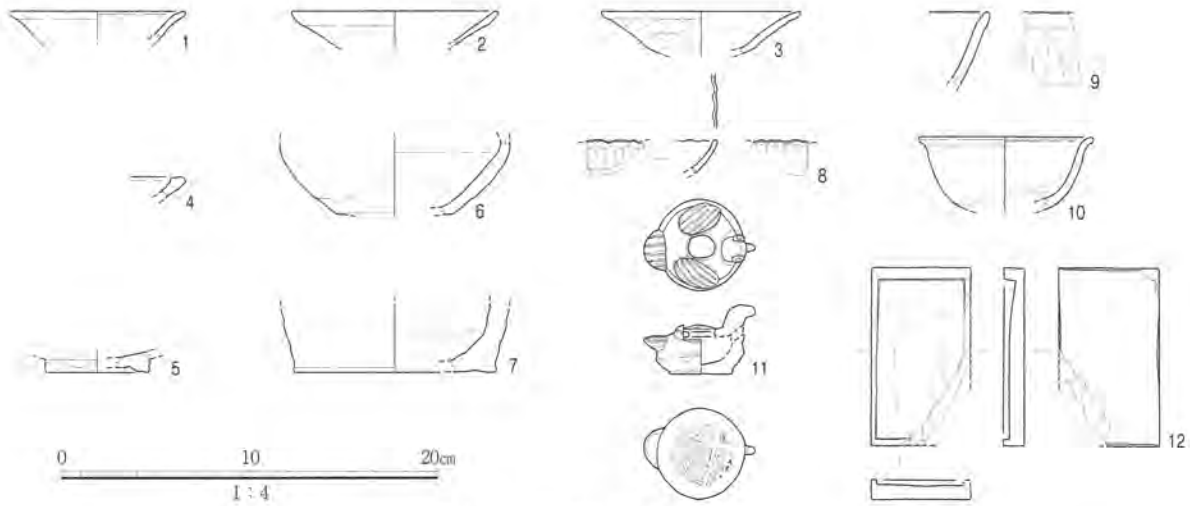


図７　１区出土遺物実測図

SK01(３)、SK02(５)、SP06(７・９)、第7a層(１・４)、第６層(２・６・８・10)、第５層(11・12)

頃に位置づけられ、SX01の埋没年代はそれ以降と考えられる。

隣接するOS88－121次調査区ではTP+15m付近に夏の陣焼土層、TP+13.5m付近に地山があり、当地と堆積状況が異なっていることがわかる。

c．地層出土遺物

３区の第7a層から、土師器皿１、瀬戸美濃焼の灰釉折縁皿４が出土した。１は口縁端部の内外面に煤が付着しており、灯明皿として用いられている。いずれも豊臣前期に属する。第６層から、土師器皿２、瀬戸美濃焼の天目碗６、中国産白磁輪花皿８、中国産青花碗10などが出土した。８は16世紀中頃～後半、10は端反りで16世紀後半、そのほかは豊臣前期に位置づけられる。第５層から瀬戸美濃焼の水鳥形水滴11、石製硯12が出土した。11は高さ3.6cmで、やや扁平な体部上半に鉄釉を施す。12は長さ9.4cm、幅5.3cm、厚さ1.1cmで、陸・海部とも墨が付着する。

3)まとめ

本調査では３区で小範囲ながら、豊臣前期に遡ると想定される柱穴群、土壙を検出し、豊臣期以前

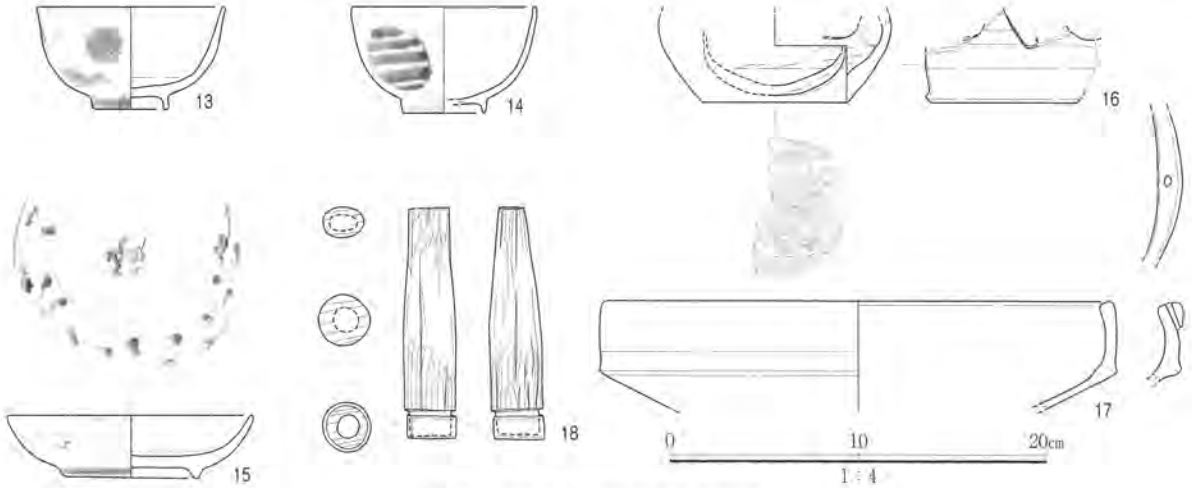


図８　３区SX01出土遺物実測図

の地層・遺構がよく保存されていることが確認できた。また、１区では、これまで確認されていない18世紀前半以降の大規模な落ちあるいは凹地の一部を検出した。今後とも地域の歴史復元に向けた、緻密な調査の蓄積が期待される。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「難波宮跡・大坂城跡発掘調査（OS05－３）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.61－69

大阪市文化財協会1999、『大坂城跡Ⅳ』、pp.１－139

2002、「三ノ丸北西部の調査」：『大坂城跡Ⅵ』、pp.113－133

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」：『難波宮址の研究』第九、pp.373－400

3区全景(南から)

3区第7a層上面遺構(北東から)

1区北壁地層断面(南から)

中央区上汐一丁目２－４・２－11における建設工事に伴う

上本町遺跡発掘調査(UH14－１)報告書

調 査 個 所　大阪市中央区上汐１丁目２－４・２－11
調 査 面 積　53㎡
調 査 期 間　平成26年４月８日～４月11日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　高橋 工、岡村勝行

1）調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の脊梁部に立地する上本町遺跡の北部に位置し、古代においては難波宮の南に接し、近世では豊臣氏大坂城の南端である惣構堀の南に当る。周辺のUH10－１次調査[大阪文化財研究所2012a]、UH12－３および６・７次調査[大阪文化財研究所2012b・c]、UN02－５次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004]、TX97－１次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]では、飛鳥・奈良時代の遺構・遺物が出土しており、UH94－１次調査、UN02－５次調査、UH98－３・５次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000a・b]では、豊臣期から徳川期にかけての遺構・遺物が発見されている(図１)。調査地周辺は、古代の難波京や近世の平野町など、都市大阪の発展過程に係る遺構が残されており、特に最近では難波京の形成を物語る遺構が発見されていることから注目される地域である。本調査地もUH12－６次調査で検出された推定一坊を４分する坊間路の南延長上に当り、道路側溝の発見が期待された。

当地においては、建築工事に先立つ大阪市教育委員会による試掘調査によって、地表下0.8mで古代の遺構面が発見されたため本調査が行われることとなった。当初、敷地の西半に東西14m×南北５mの調査区を設定する予定であったが、土置き場の確保のため、東西長を最終的に10.6mに減じた(図２)。第２層までを重機を用いて掘削し、その後、地山(第３)層上面、遺構の検出、遺構の掘下げは人力で行い、適宜に実測図の作成や写真撮影によって記録を作成した。

また、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。

図１　調査地位置図

（実線の方眼は難波京条坊想定線[積山 洋2010]による。破線は1/4ライン）

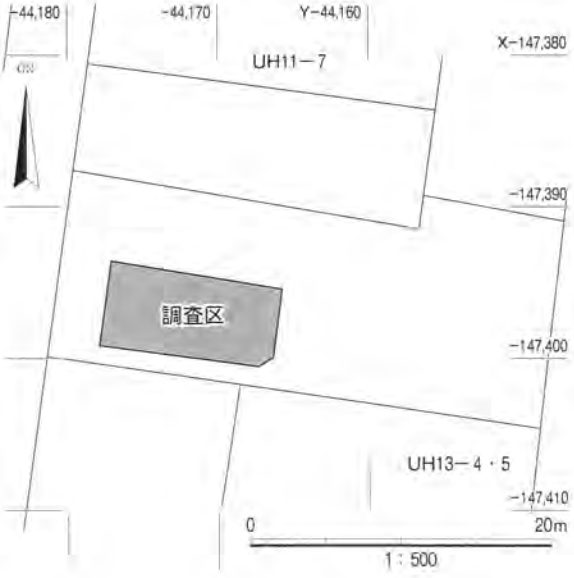


図２　調査区位置図

2）調査の結果

ⅰ）層序（図３・４）

調査地内の現況地形は、ほぼ平坦でTP＋21.9m前後であった。

第１層：現代の整地・攪乱層で、層厚はほぼ30～80cmであるが、西壁近くの一部で厚く、120cm以上に及ぶ。

第２層：中世以降の作土層で、褐色（10YR4/6）細粒砂からなる。層厚は30cmで、上位層に削剥され、西部の一部にのみ遺存した。本層中に遺物は確認できなかったが、上面でSK37など豊臣期以降の遺構、第３層上面で中世の遺構が検出されることから時期を判断した。

第３層：当該地の地山で、明黄褐色（7.5Y5/8）細粒砂質シルトを主体とする上町層である。表層が風化しており、上位層の削剥は少なく、上面は当時の地表面近くを示すものと考えられる。上面でSD28・29など中世の遺構、柱穴を中心とする古代の遺構を多数検出した。

ⅱ）遺構の全般的状況（図５・表１）

第３層上面で検出した50基近い遺構は埋土の違いからおよそ３種類に大別が可能である。第１群は地山偽礫が混じる褐色極細粒砂を主体とする古代の柱穴（SP１～12、SP14～20、SP22～25）であり、最も多い。第２群は淘汰の良い褐色極細粒砂を主体とする中世の溝群（SD28～30）、第３群は地山偽礫を多く含む締まりの悪い灰色細粒～粗粒砂質シルトを主体とする近世

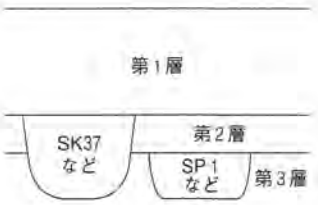
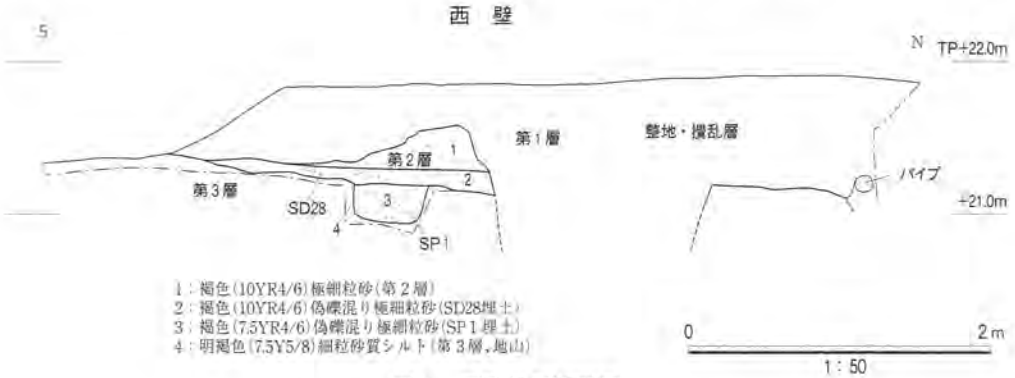


図３　地層と遺構の関係図

表１　遺構一覧表

遺構名	長辺	短辺	深さ	底レベル	時期	おもな出土遺物ほか
SP1	80	70	24	20.87	飛鳥	須：甕、柱痕径17cm
SP2	64+	30+	60	20.64	飛鳥	－
SP3	88	86	44	20.69	飛鳥	土：羽釜
SP4	40+	10+	10+	21.10	古代	－
SP5	32	30+	8	21.16	飛鳥	須：杯HG身
SP6	48	40	24	21.02	飛鳥	土：鉢?、平瓦
SP7	54	34	14	21.11	古代	－
SP8	58	46	20	21.08	古代	－
SP9	60+	24+	12	21.13	古代	柱痕径12cm
SP10	60+	40+	24	20.92	古代	須：甕
SP11	34+	26+	12	21.05	古代	－
SP12	74+	38+	12	21.02	古代	－
SK13	56	52	4	21.07	飛鳥	須：鉢
SP14	103	98	56	20.47	飛鳥	須：甕、柱痕径18cm
SP15	96	94	52	20.68	飛鳥	須：杯B?、柱痕径20cm
SP16	78	56	40	20.80	飛鳥	柱痕径17cm
SP17	74	48	46	20.76	飛鳥	須：甕、柱痕径20cm
SP18	54	54	46	20.69	飛鳥	須：甕、柱痕径12cm
SP20	120+	62+	66	20.54	飛鳥	須：杯H、平瓦、柱痕径35cm
SK21	94	90	10	21.08	飛鳥	土：杯、鉢
SP22	36+	28+	32	20.86	古代	－
SP23	48	42	16	21.05	飛鳥	須：杯G蓋?
SP24	78	76	44	21.75	飛鳥	竈、柱痕径18cm
SP25	72	70	32	20.92	飛鳥	須：小片、柱痕径12cm
SD26	100	80	13	21.13	古代	－
SP27	30+	30	22	21.05	中世	瓦器椀
SD28	300+	108	23	21.10	中世	瓦器椀
SD29	540+	140+	8～15	21.13	中世	瓦器椀、須：壺
SD30	314	36	10	21.15	中世	須：甕
SP31	20	20	14	20.90	中世	須：甕
SP32	20	20	14	20.90	中世	土：皿
SP33	34	24	10	21.02	中世?	－
SP34	26	26	18	21.07	中世	土：小片
SK35	60+	20+	10	21.05	中世?	－
SP36	32+	20+	32	20.86	中世	土：小片
SK37	266	202	36	20.88	近世	白磁皿、土採穴?
SK38	50+	34+	48	20.74	近世?	土：小片
SK39	150	78	66	20.55	近世	関西系陶器椀、青磁椀
SP40	30	30	30	21.24	近世?	土：小片
SP41	40	22	28	20.87	近世	土：小片
SP42	18	16	14	21.13	近世	－
SP43	26	18	10	21.08	近世	－
SP44	28	26	14	21.09	近世	－
SP45	30	28	24	20.84	近世?	土：小片
SP46	24	22	12	20.81	近世?	須：杯
SP47	40+	22+	30	20.94	近世?	土：小片

※単位は、底レベルがmである以外は、cm。土：土師器、須：須恵器



1：褐色（10YR4/6）極細粒砂（第２層）
2：褐色（10YR4/6）偽礫混り極細粒砂（SD28埋土）
3：褐色（7.5YR4/6）偽礫混り極細粒砂（SP１埋土）
4：明褐色（7.5Y5/8）細粒砂質シルト（第３層，地山）

図４　西壁地層断面図

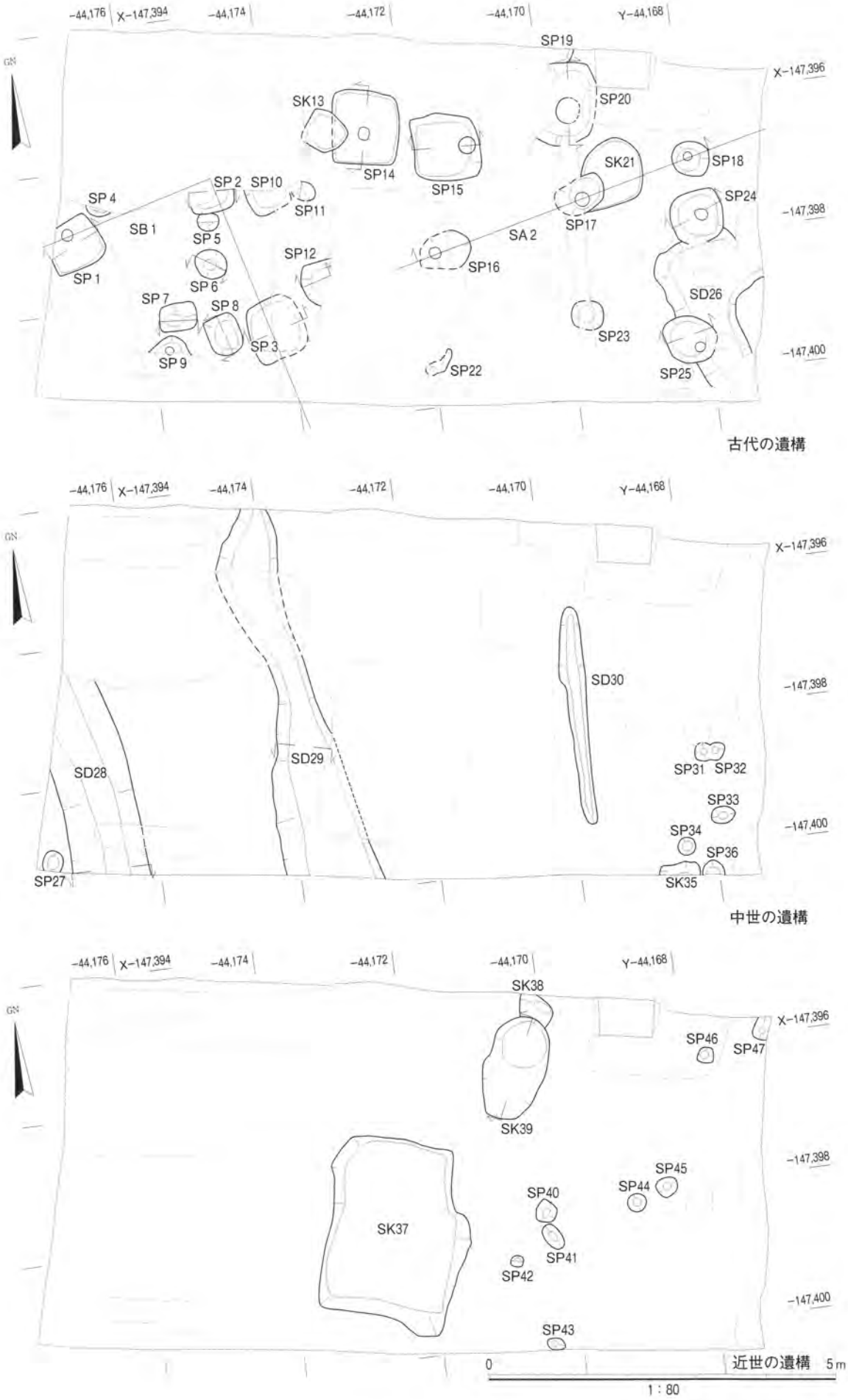

古代の遺構
中世の遺構
近世の遺構
SP19
SP20
SK13
SP14
SP15
SK21
SP18
SP24
SP17
SP4
SP2
SP10
SP11
SB1
SP5
SA2
SP12
SP16
SP1
SP6
SP7
SP8
SP3
SP9
SP22
SP23
SD26
SP25
SD30
SD28
SD29
SP31
SP32
SP33
SP34
SP36
SP27
SK35
SK38
SP46
SP47
SK39
SP45
SP44
SP40
SK37
SP41
SP42
SP43
0
5m
1：80

図5　遺構平面図

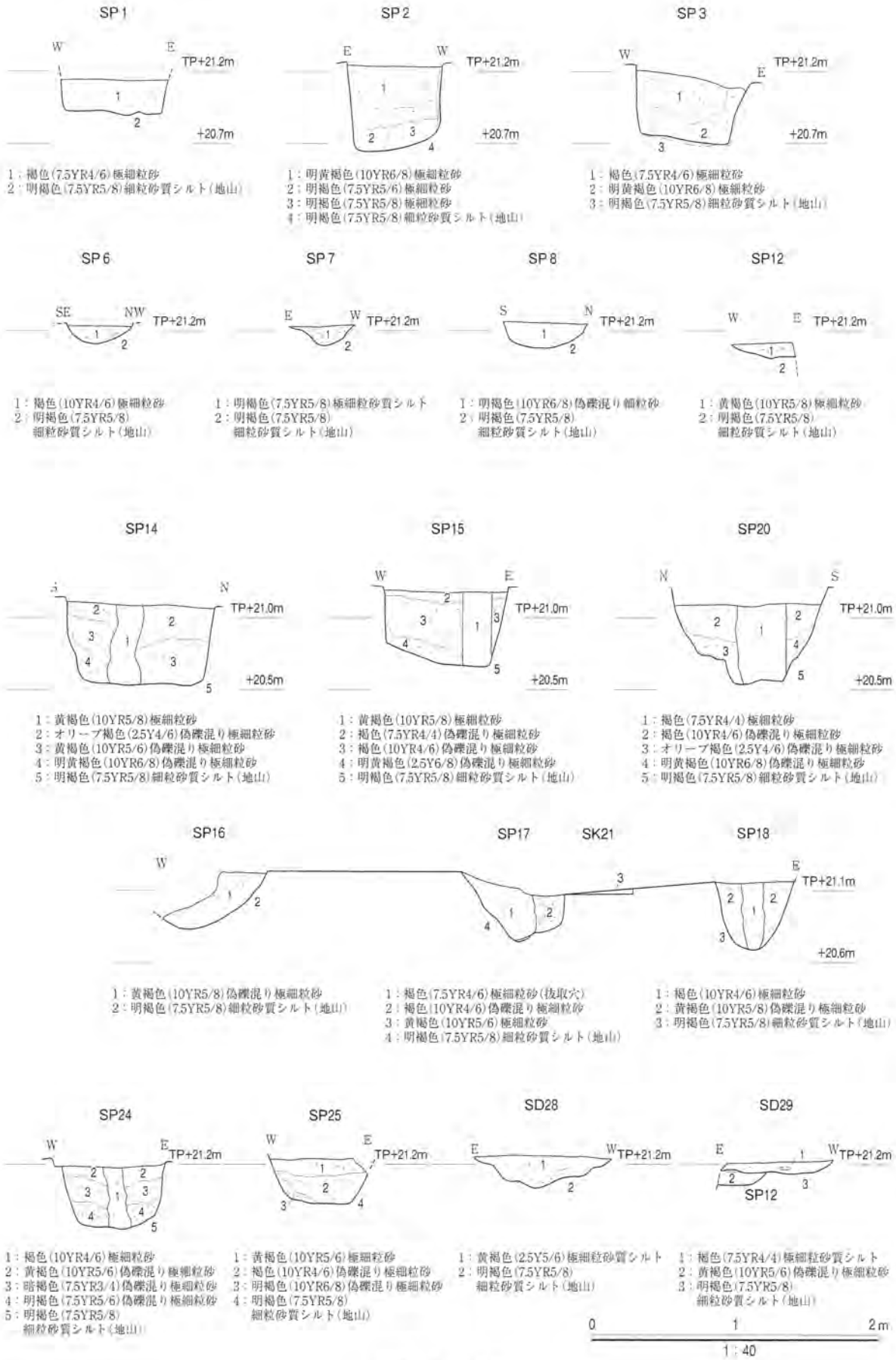

SP1
W
E
TP+21.2m
+20.7m
1：褐色(7.5YR4/6)極細粒砂
2：明褐色(7.5YR5/8)細粒砂質シルト(地山)
SP2
E
W
TP+21.2m
+20.7m
1：明黄褐色(10YR6/8)極細粒砂
2：明褐色(7.5YR5/6)極細粒砂
3：明褐色(7.5YR5/8)極細粒砂
4：明褐色(7.5YR5/8)細粒砂質シルト(地山)
SP3
W
E
TP+21.2m
+20.7m
1：褐色(7.5YR4/6)極細粒砂
2：明黄褐色(10YR6/8)極細粒砂
3：明褐色(7.5YR5/8)細粒砂質シルト(地山)
SP6
SE
NW
TP+21.2m
1：褐色(10YR4/6)極細粒砂
2：明褐色(7.5YR5/8)
細粒砂質シルト(地山)
SP7
E
W
TP+21.2m
1：明褐色(7.5YR5/8)極細粒砂質シルト
2：明褐色(7.5YR5/8)
細粒砂質シルト(地山)
SP8
S
N
TP+21.2m
1：明褐色(10YR6/8)偽礫混り細粒砂
2：明褐色(7.5YR5/8)
細粒砂質シルト(地山)
SP12
W
E
TP+21.2m
1：黄褐色(10YR5/8)極細粒砂
2：明褐色(7.5YR5/8)
細粒砂質シルト(地山)
SP14
S
N
TP+21.0m
+20.5m
1：黄褐色(10YR5/8)極細粒砂
2：オリーブ褐色(2.5Y4/6)偽礫混り極細粒砂
3：黄褐色(10YR5/6)偽礫混り極細粒砂
4：明黄褐色(10YR6/8)偽礫混り極細粒砂
5：明褐色(7.5YR5/8)細粒砂質シルト(地山)
SP15
W
E
TP+21.0m
+20.5m
1：黄褐色(10YR5/8)極細粒砂
2：褐色(7.5YR4/4)偽礫混り極細粒砂
3：褐色(10YR4/6)偽礫混り極細粒砂
4：明黄褐色(2.5Y6/8)偽礫混り極細粒砂
5：明褐色(7.5YR5/8)細粒砂質シルト(地山)
SP20
N
S
TP+21.0m
+20.5m
1：褐色(7.5YR4/4)極細粒砂
2：褐色(10YR4/6)偽礫混り極細粒砂
3：オリーブ褐色(2.5Y4/6)偽礫混り極細粒砂
4：明黄褐色(10YR6/8)偽礫混り極細粒砂
5：明褐色(7.5YR5/8)細粒砂質シルト(地山)
SP16
W
1：黄褐色(10YR5/8)偽礫混り極細粒砂
2：明褐色(7.5YR5/8)細粒砂質シルト(地山)
SP17
SK21
1：褐色(7.5YR4/6)極細粒砂(抜取穴)
2：褐色(10YR4/6)偽礫混り極細粒砂
3：黄褐色(10YR5/6)極細粒砂
4：明褐色(7.5YR5/8)細粒砂質シルト(地山)
SP18
E
TP+21.1m
+20.6m
1：褐色(10YR4/6)極細粒砂
2：黄褐色(10YR5/8)偽礫混り極細粒砂
3：明褐色(7.5YR5/8)細粒砂質シルト(地山)
SP24
W
E
TP+21.2m
1：褐色(10YR4/6)極細粒砂
2：黄褐色(10YR5/6)偽礫混り極細粒砂
3：暗褐色(7.5YR3/4)偽礫混り極細粒砂
4：明褐色(7.5YR5/6)偽礫混り極細粒砂
5：明褐色(7.5YR5/8)
細粒砂質シルト(地山)
SP25
W
E
TP+21.2m
1：黄褐色(10YR5/6)極細粒砂
2：褐色(10YR4/6)偽礫混り極細粒砂
3：明褐色(10YR6/8)偽礫混り極細粒砂
4：明褐色(7.5YR5/8)
細粒砂質シルト(地山)
SD28
E
W
TP+21.2m
1：黄褐色(2.5Y5/6)極細粒砂質シルト
2：明褐色(7.5YR5/8)
細粒砂質シルト(地山)
SD29
E
W
TP+21.2m
SP12
1：褐色(7.5YR4/4)極細粒砂質シルト
2：黄褐色(10YR5/6)偽礫混り極細粒砂
3：明褐色(7.5YR5/8)
細粒砂質シルト(地山)
0
1
2m
1：40

図6　遺構断面図

の土壙(SK37・39)と柱穴(SP41～44など)である。

それぞれの規模、おもな出土遺物、特徴について、表1にまとめた。以下では個々の遺構の関係、特記すべき遺構を中心に記述する。

iii)古代の遺構と遺物(図5～7)

第3層上面で柱穴を中心に26基の遺構を検出した。遺物はそのほとんどが柱穴掘形から出土し、少量かつ小破片であるが、第2四半期を中心とした7世紀代に位置づけられる。

SB1　調査区西側で検出された掘立柱建物で、北で東に15°振る。柱間は東西で約2.1m、SP1の柱痕跡は直径17cmであった。

SA2　調査区東側で2間分検出した柱列で、長さ3.9m以上である。方向はSB1と同じである。西から柱間は2.25m、1.65mで、柱痕跡の直径は17cm、20cm、12cmである。SP17はSK21を切る。

SP5　平面形がほぼ円形の柱穴で、長辺0.32m、短辺0.30m以上、深さ0.08mである。埋土は褐色細粒砂で、須恵器杯G身5・杯H6が出土した。5は口径10.1cmである。これらは概ね難波Ⅲ中段階に位置づけられる。

SK13　平面形が方形の浅い土壙で、長辺0.56m、短辺0.52m、深さ0.04mである。埋土は褐色細粒

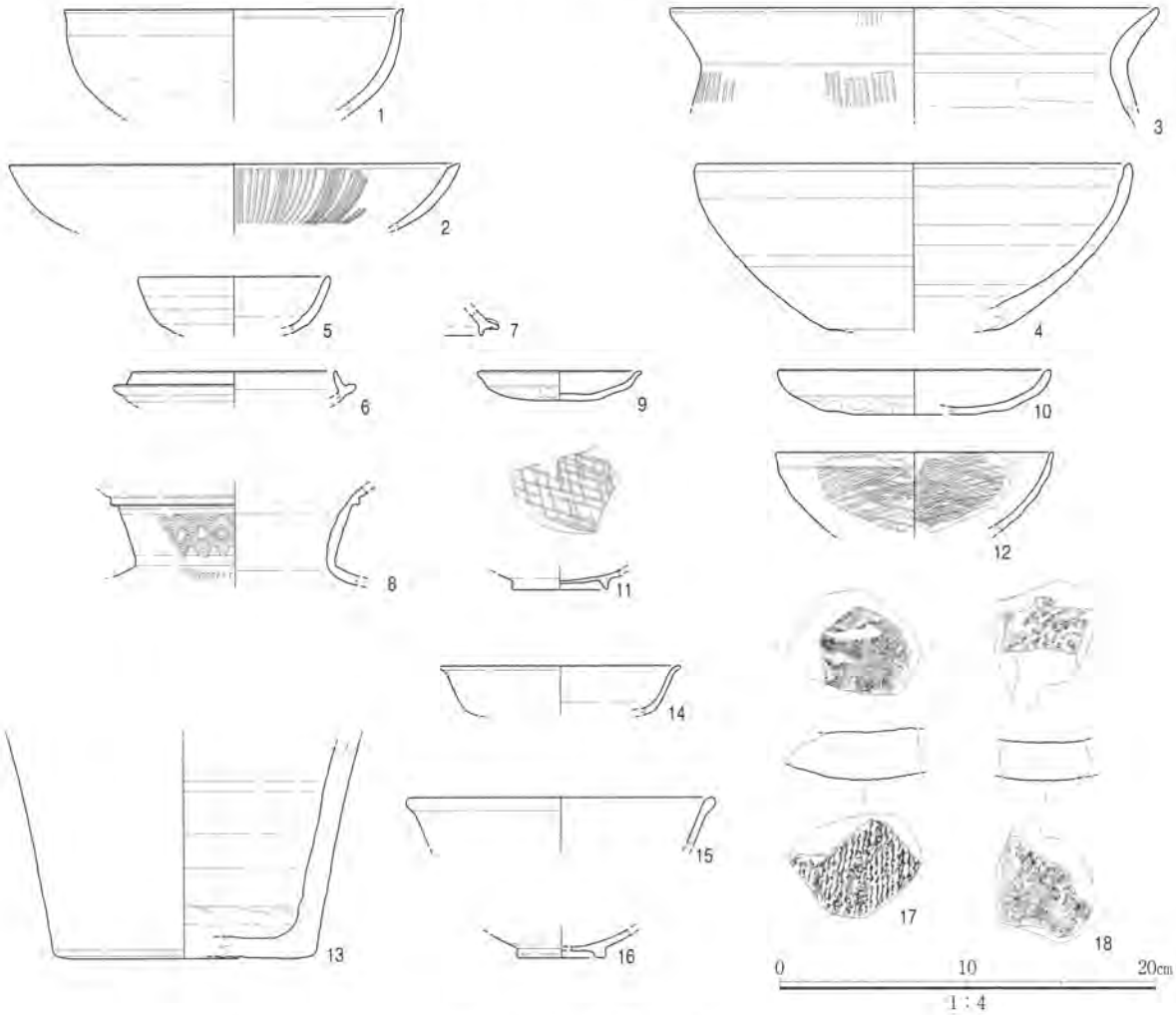


図7　出土遺物実測図

SP5(5・6)、SP6(17)、SK13(4)、SP20(18)、SK21(1・2)、SP24(3)、SD28(11)、SD29(12・13)、SP32(9・10)、SK37(14)、SK39(15・16)、第3層上面(7・8)

砂で、須恵器鉢4が出土した。器壁が厚く、平底である。

SP14　平面形がほぼ方形の柱穴で、長辺1.03m、短辺0.98m、深さ0.56mである。柱痕跡は直径18cmである。SK13に切られ、飛鳥時代以前に属する。大型の柱穴であるが、調査区内では、明確に組み合う柱穴が確認できない。

SP15　平面形がほぼ方形の柱穴で、長辺0.96m、短辺0.94m、深さ0.52mである。柱痕跡は直径20cmである。須恵器杯Bの底部の可能性のある小片が出土した。

SP20　平面形が隅丸長方形の柱穴で、長辺1.20m、短辺0.62m以上、深さ0.66mである。柱痕跡は直径35cmである。掘形の埋土から平瓦18が出土した。18は凸面に縄目タタキ痕、凹面に同心円文が見られる。

SK21　平面形が方形の土壙で、長辺0.94m、短辺0.90m、深さ0.10mである。埋土から土師器杯C1と鉢2が出土した。前者は復元口径18cmである。調整は内面は磨滅のため不明であるが、外面は口縁部はヘラミガキ、底部はヘラケズリである。2は内面に放射状暗文を施す。これらは概ね難波Ⅲ古～中段階に属す。

SD26　調査区南東端で検出された平面形がL字形の溝で、幅0.80～1.00m、深さ0.13mである。

このほか、SP6から平瓦17、SP24から土師器甕3、第3層上面から須恵器杯G蓋7が出土した。17は凸面に縄目タタキ痕、凹面に布目圧痕が見られる。

ⅳ)中世の遺構と遺物(図5～7)

第3層上面で溝状遺構と柱穴を検出した。これらの遺構は第2層上面から掘り込まれたものも含まれる。

SD28　調査区西端で検出した正南北方向に延びる溝で、幅1.08m、深さ0.23m、長さ3.00m以上である。埋土は偽礫を少量含む黄褐色細粒砂質シルトで、流水・滞水状況を示さない。瓦器椀11が出土した。ていねいな底部内面の暗文、高台の形態から、12世紀後半を中心とする時期のものと考えられる。

SD29　調査区西側で検出した正南北方向に延びる溝で、最大幅1.40m、深さは0.08～0.15m、長さ5.40m以上である。埋土は黄褐色細粒砂質シルトで、流水・滞水状況を示さない。瓦器椀12、須恵器壺13が出土した。12は口径14.7cmで、内外面ともていねいなヘラミガキで調整する。11同様の時期が考えられる。

SD30　最大幅0.36m、深さ0.10m、長さ3.14mのほぼ正南北方向の溝状遺構である。

SP32　調査区東端近くで検出した柱穴で、直径0.2mである。土師器皿9・10が出土した。口径はそれぞれ、8.6cm、14.4cmで、口縁端部を斜め上につまみ上げ、底部に指頭圧痕を残す。12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる。

ⅴ)近世以降の遺構と遺物

SK37　平面形が長方形の土壙で、長さ2.66m、幅2.02m、深さ0.36mである。底面はほぼ平坦で、埋土は褐色細粒砂質シルトである。底面近くで白磁皿14が出土した。16世紀代のものと考えられ、周辺調査の状況から豊臣期以降の土採を目的とした土壙である可能性がある。

SK39　平面形が長円形の土壙で、長辺1.50m、短辺0.78m、深さ0.66mである。埋土は地山偽礫を

多く含む明褐色粗粒砂質シルトで締まりが悪い。関西系陶器碗16が出土した。高台部は露胎である。

vi)そのほかの遺物

第3層上面精査中に、須恵器壺8が出土した。薄手で、全体にシャープな作りの頸部に波状文を配する。概ねTK23型式に位置づけられる。また、江戸時代のSK39から混入遺物として中国産青磁碗15が出土している。復元口径16.0cmで、14～15世紀に位置づけられる。

3)まとめ

今回の調査では、限られた面積にも関わらず、難波宮下層段階から前期難波宮期に属する建物・柱穴を密集して検出した。南隣のUH13－4次調査地[大阪文化財研究所2013]、北方20mに位置するUH11－7次調査地[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]では、古代～中世の遺構はまったく確認されなかったが、今回の調査地近辺には飛鳥時代の建物群が広がっていることが明らかとなった。柱列、SP15以外の柱掘形は正方位を向かず、建物群の多くは難波宮下層段階に位置づけられる可能性が高い。また、古代に遡る道路側溝は発見されなかったものの、地割の溝の可能性がある正方位に延びる、中世の溝を検出した。

今後、調査地周辺、難波京内で確認されている古代～中世の遺構との関連を十分に検討した上で、今回検出された遺構群の意義を追求していきたい。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「石原商店による建設工事に伴う確認調査(TX97－1)」:『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.31－39

2000a、「友成公氏による建設工事に伴う発掘調査(UH98－3)」:『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57－61

2000b、「森口氏による建設工事に伴う発掘調査(UH98－5)」:『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.62－65

2004、「上本町遺跡発掘調査(UN02－5)報告書」:『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.33－39

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「上本町遺跡発掘調査(UH11－7)報告書」:『平成23年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.385－390

大阪文化財研究所2012a、『上本町遺跡』Ⅲ

2012b、『中央区上汐一丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH12－3)報告書』

2012c、『中央区上汐一丁目1－6における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH12－6)報告書』

2013、『中央区上汐一丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH13－4)報告書』

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」:『難波宮址の研究』第十一、pp.253－265

積山洋2010、「複都制下の難波京」:平成18～21年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書『東アジアにおける難波京と古代難波の国際的性格に関する総合研究』、pp.79－86

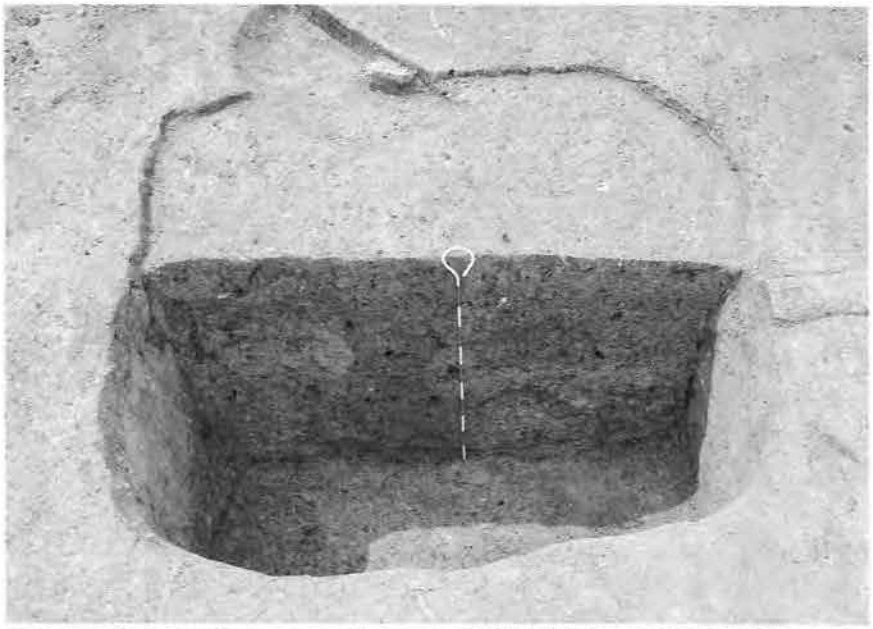
図版一

調査区全景
（東から）

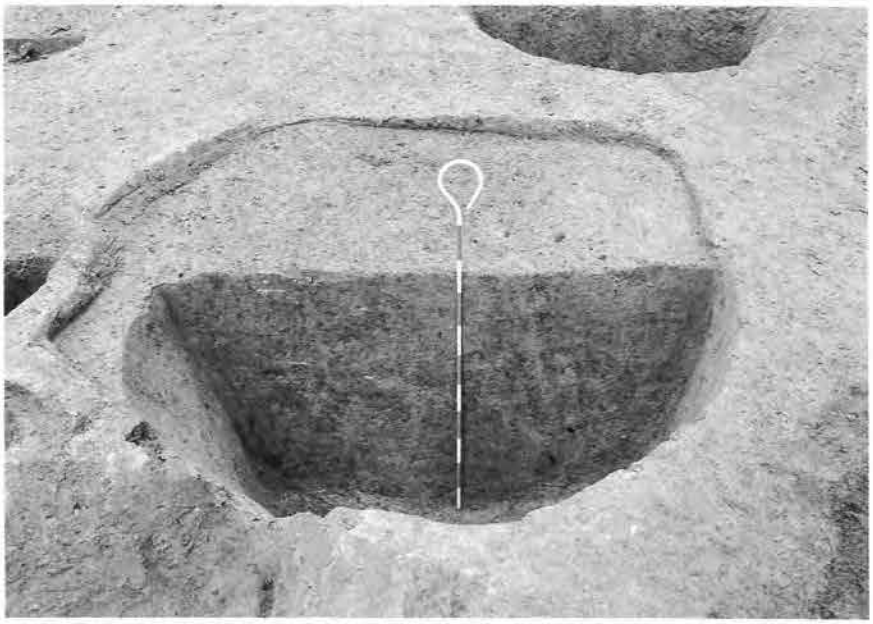
調査区全景
（西から）

西壁地層断面
（東から）

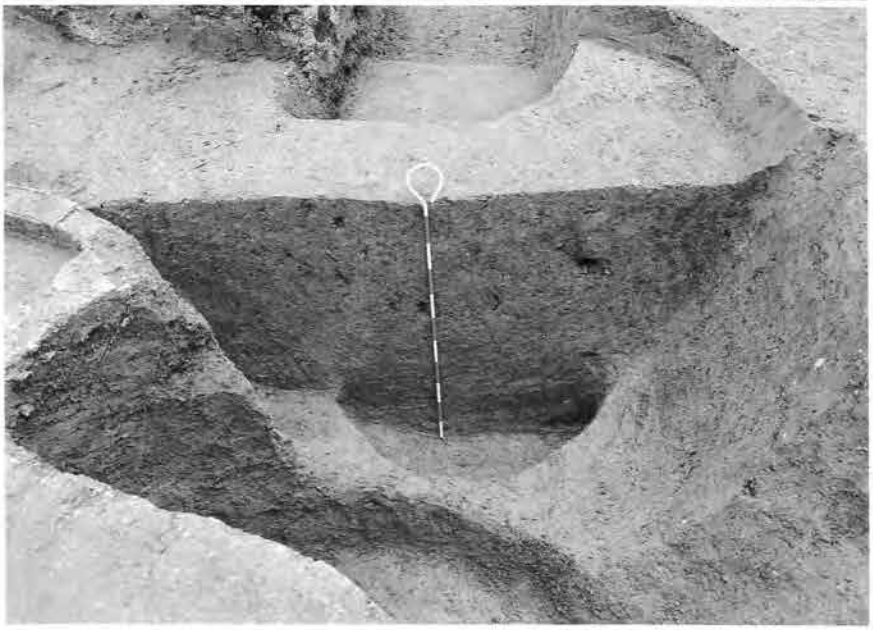
SP14(東から)



SP24(南から)



SP20(西から)



天王寺区悲田院町における建設工事に伴う
北河堀町所在遺跡発掘調査(KC14－１)報告書

調査個所	大阪市天王寺区悲田院町２－４・18－６
調査面積	136㎡
調査期間	平成26年６月16日～６月25日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、谷崎仁美

1）調査に至る経緯と経過

北河堀町所在遺跡は天王寺区の南部にあり、四天王寺旧境内遺跡の南約300m、阿倍寺跡の北約500mに位置する。地形的には、遺跡は上町台地上にあり、東は緩やかに下っている。また、調査地の北側には東西に走る谷があるが、これは和気清麻呂による導水路開削の痕跡と伝えられ、茶臼山の南の河底池に連なることから「河底谷」と仮称される[大阪文化財研究所2013a]。

本調査地はKC12－１次調査地の東に隣接する（図１）。KC12－１次調査では正方位に配された古代の建物群が発見され、難波京外の貴族の邸宅である可能性が指摘されている[大阪文化財研究所2013a]。この他にも、KC99－１・00－１次調査で７世紀中頃に埋められた井戸や同じ頃に造成された土壇状遺構が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]。また、中世の遺構や作土層がKC07－２・12－２次調査で確認されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、大阪文化財研究所2013b]。さらに、本調査地の東南にあるKC08－１次調査では近世の遺構が確認されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。

当地においては、建設工事に先立つ大阪市教育委員会による試掘調査で、地表下0.75mで古代の遺物包含層が発見されたため本調査が行われることになった。敷地の西寄りに調査区（東西５m×南北25m）を設定した（図２）。調査は６月16日から開始した。目的の地層までは重機による掘削を行い、その後、地層の掘下げや遺構検出は人力で行った。調査が進む中で、古代の可能性がある柱穴を検出し、それと組み合う柱穴を探すために東側に２㎡、南側に９㎡の拡張区を設け、最終的に調査面積は136㎡となった。調査の記録は、適宜実測図の作成や写真撮影を行った。６月25日には調査を終了し、現場から撤収した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく

図１　調査地位置図

図２　調査区配置図

座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋○mと記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

調査地内は現代の造成によって南側の道路面より0.3mほど高くなっている。道路は東へ緩やかに下っているが、敷地内は平坦である。南端は現代の攪乱によって窪んでおり、北側は北に急激に落ちる崖面を形成している。これは、調査区内で確認した段丘構成層(以下、第3層)が南北で高低差が見られなかったため、比較的新しい時期の造成によるものと見られ、崖面と「河底谷」との関係は不明である。

第1層：近代の作土を母材とする盛土層である。オリーブ褐色(2.5Y4/4)～黄褐色(2.5Y5/4)中粒～細粒砂質シルト層で、層厚は30～50cmである。瀬戸美濃焼磁器・関西系陶器・土師器・瓦が出土した。

第2層：中世の遺構埋土もしくは盛土層である。第3層由来のシルト質極細粒砂偽礫を含む褐色(7.5YR4/4)シルト質極細粒砂層で、層厚は5～15cmある。瓦器・瓦質土器・常滑焼のほか古代以前の土師器・須恵器が出土した。上面で第1層で埋まる鋤溝や多数の土壙・小穴・落込み、SX203～207を検出した。

第3層：段丘構成層で、明黄褐色(10YR7/6)シルト質細粒～極細粒砂層である。上面でSP301、SD101、SK302・303・201、SX202を検出した。

ii)遺構と遺物

a．中世以前(図5・6・8)

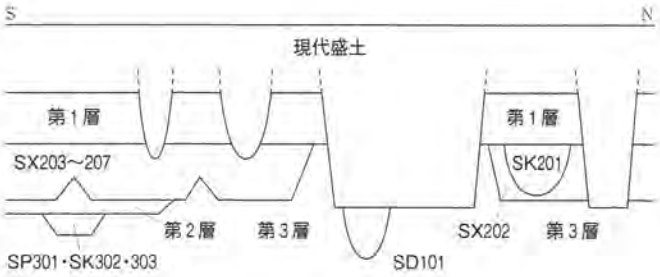


図3　地層と遺構の関係図

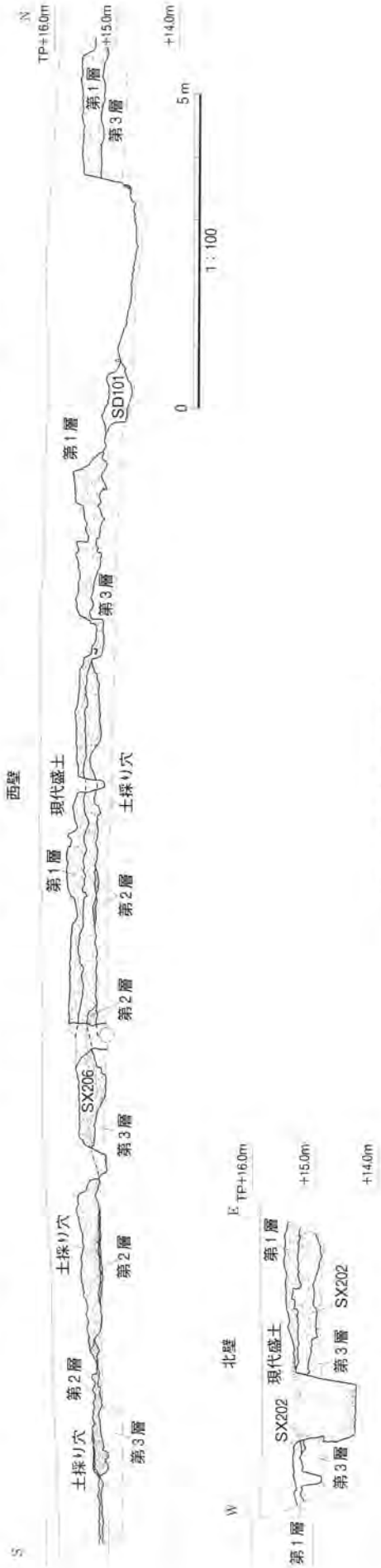


図4　調査区地層断面図

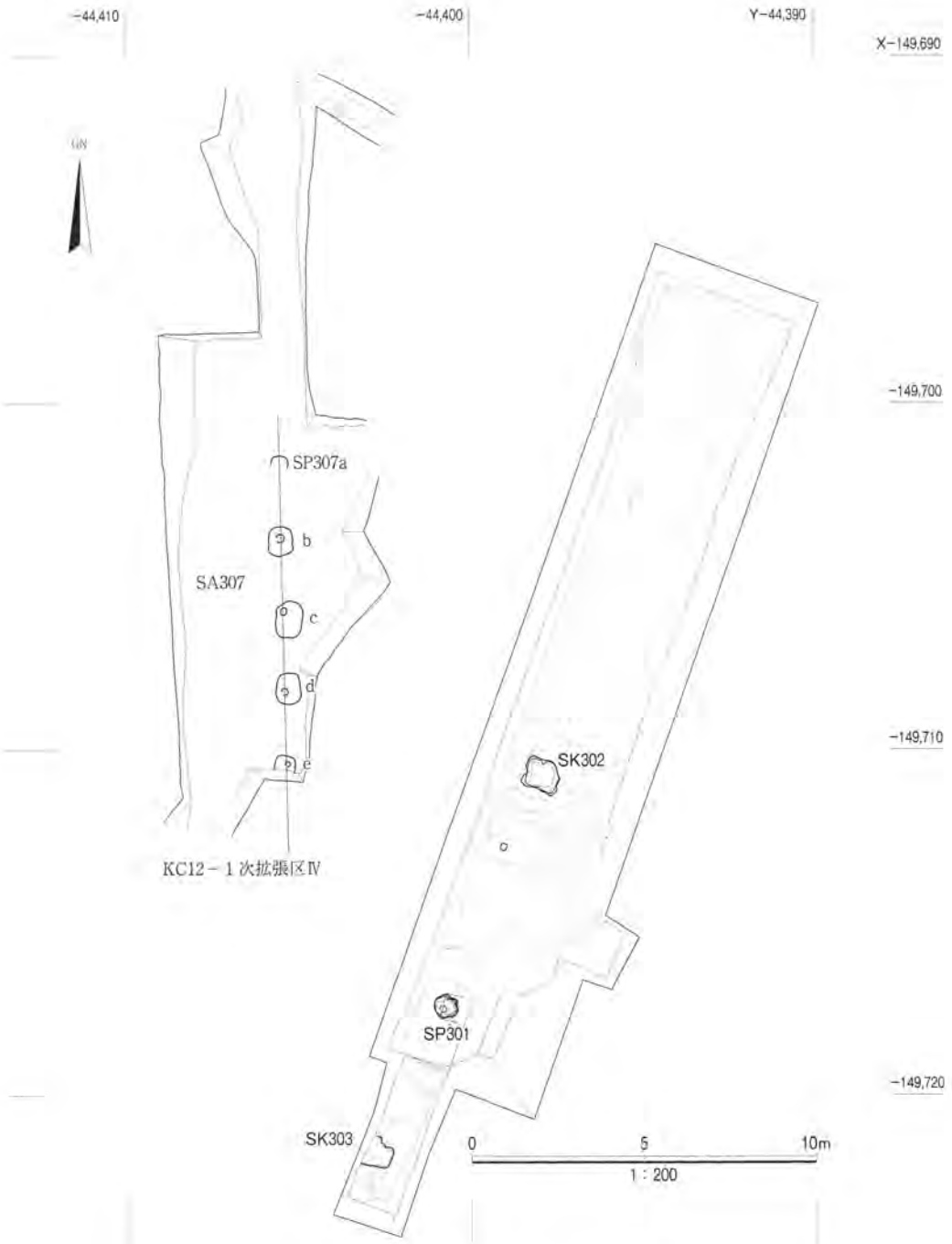


図５　第３層上面遺構平面図（中世以前）

第３層上面で柱穴と土壙を検出した。これらから出土遺物はなかったが、遺構を覆う第２層出土遺物のうち、14世紀以降と考えられる瓦質土器羽釜の鍔部があるため、それ以前の遺構であると考えられる。また、KC12－１次調査で見つかった柱穴と掘形の深さ・大きさ、埋土の岩相、柱痕跡の大きさが類似するため、古代に遡る可能性がある。

SP301は南北長0.69m、東西長0.73m、深さ0.07mの円形の柱穴で、中央やや南寄りに直径0.18mの柱痕跡がある。柱痕跡は褐色（7.5YR4/6）細粒～極細粒砂混りシルト質粘土で、掘形埋土は橙色（7.5YR6/8）細粒砂混りシルト質粘土である。

SK302は南北長0.90m、東西長0.95m、深さ0.15mの隅丸方形の土壙で、埋土は第３層由来の細粒

～極細粒砂偽礫と極少量の炭を含む赤褐色(5YR4/6)シルト質泥である。

SK303は南北長0.85m、東西長0.80m以上の不整形な土壙だが、南辺が直線的でSK302に似た隅丸方形に見える。深さ0.02～0.08mで底は平坦ではない。埋土は泥質シルト偽礫を含む明褐色(7.5YR5/6)シルト質細粒～極細粒砂である。

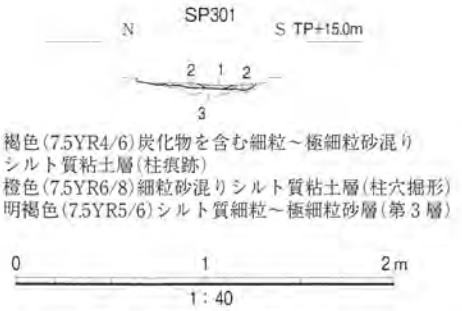


図6　SP301遺構断面図

遊離資料だが、古代に遡るものとして土師器1が出土している(図8)。甕の把手で、いびつな三角形を呈し、1.0～2.1cmと厚い。

b．近世(図7・8)

調査区の南北で遺構の分布に違いが見られた。

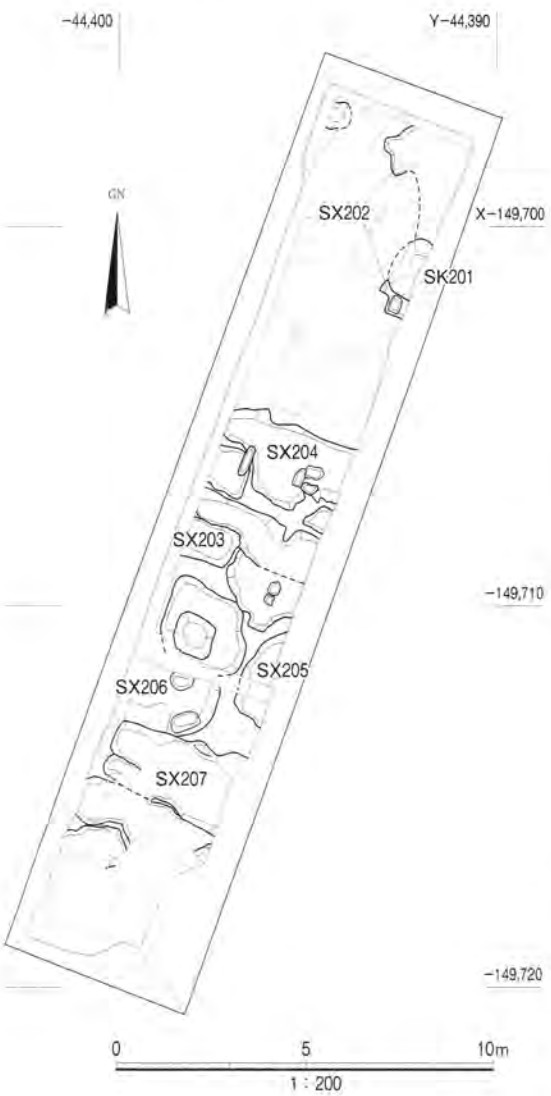


図7　第2層上面遺構平面図(近世)

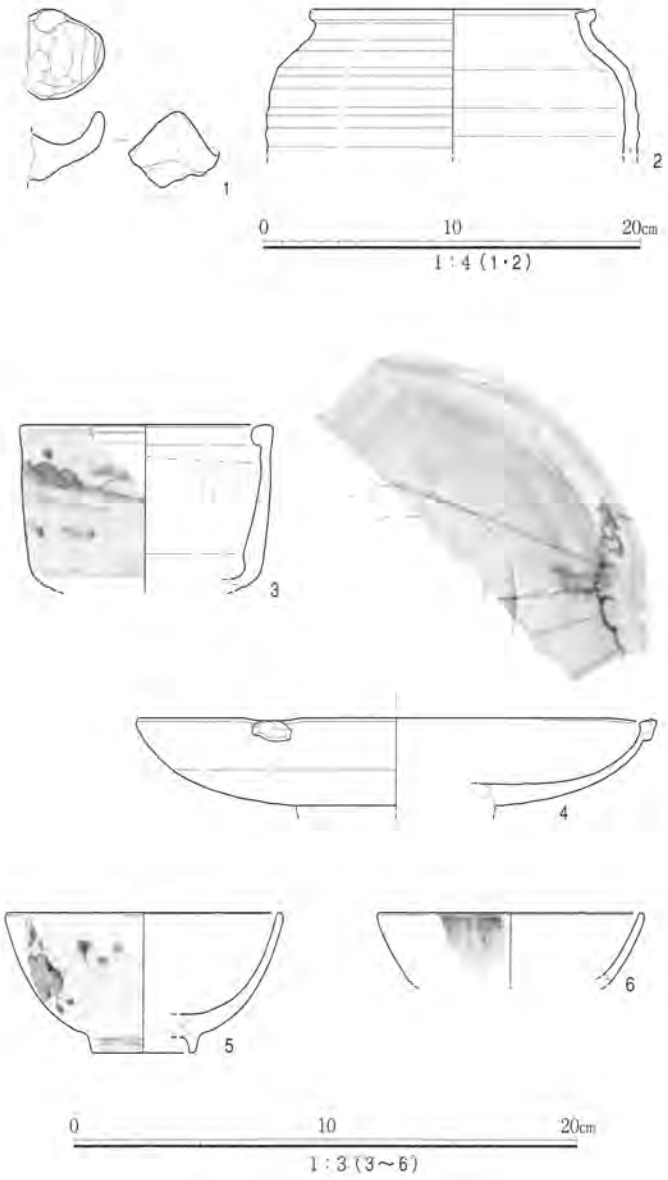


図8　SX203～207出土遺物

SK201はSX202の上位にあり、南北長1.65m、東西長0.67m以上、深さ0.50mの楕円形の土壙である。極細粒砂質シルト偽礫を多く含む淡黄色(2.5Y8/3)中粒～極細粒砂で一気に埋る。SX202は南北長4.85m以上、東西長2.25m以上、深さ0.35mの不整形な落込みである。炭・焼土塊・中礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)～褐色(10YR4/4)中粒～極細粒砂で埋る。これらから出土遺物はなかったが、埋土の岩相が次に述べるSX203～207の埋土とよく似ることから、近世の遺構と考えた。

南側に分布するSX203～207は土採り穴である。平面形は不整形で、褐色(10YR4/4)中礫混りシルト質中粒～細粒砂で埋る。底は最も深いところで0.35mある。

SX203～207からは2～6のほか、肥前磁器の碗・皿、肥前陶器の碗、瀬戸美濃焼陶器の碗、関西系陶器の碗・土瓶、軟質施釉陶器の灯明皿、土師器鉢、備前焼・丹波焼・堺・明石系の擂鉢、古代以前の土師器、須恵器のほか、埴輪片、壁土、瓦が出土した。

2は丹波焼の甕である。内外面に鉄釉を施す。3は肥前陶胎染付の火入である。4は肥前陶器の皿である。灰黄色の釉を施す。口縁部外面に装飾の粘土を貼り付けている。5・6は肥前磁器の染付碗である。5は外面に草花文を施し、底部内面を蛇ノ目釉剥ぎし、高台にアルミナが付着している。6は雨降文を施す。以上は18世紀中葉のものである。

c．近代(図9)

第1層で埋る溝・鋤溝・土壙・小穴・落込みを検出した。

SD101は幅1.8m、長さ3.5m以上、深さ0.55mの東西溝である。溝の縁に沿って3基ずつ並ぶ杭列がある。土師器の細片が出土した。下層において南北で土地利用の違いが見られたことから、敷地境を表す溝の可能性がある。

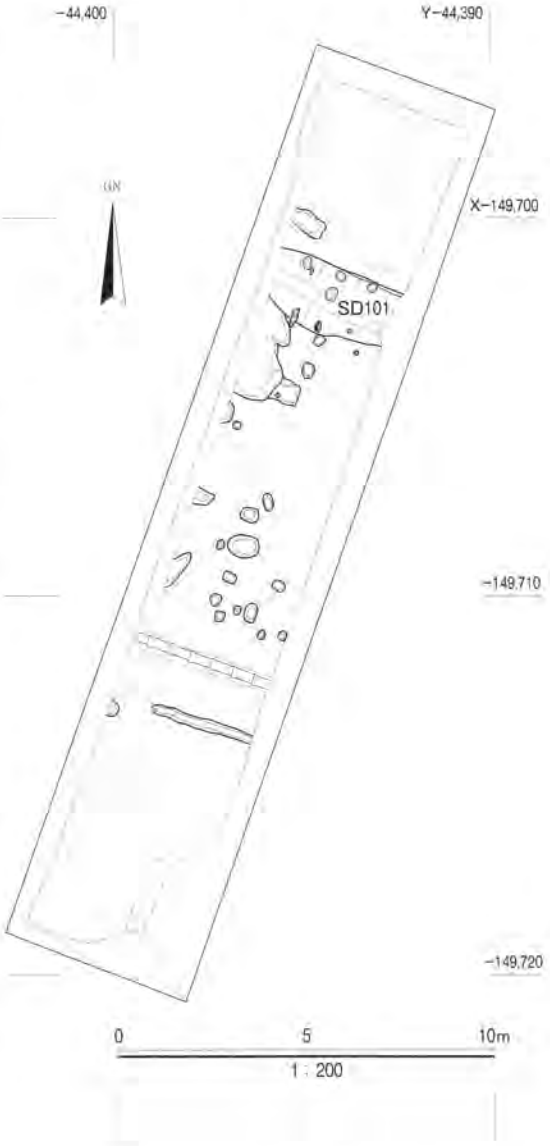


図9　第2・3層上面遺構平面図(近代)

3)まとめ

古代に遡る可能性のある柱穴を検出した。KC12－1次調査で見つかった大型建物群のうち、東を区画する一本柱塀SA307と組み合って建物を構成する可能性もあるが、現状では不明である。また、18世紀中葉に埋没する土採り穴群を検出した。KC12－1次調査で確認された土採り穴よりもやや古く、形状も異なるため、西側と敷地が異なると考えられる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「住友不動産株式会社による建設工事に伴う北河堀町所在遺跡発掘調査（KC00－1）報告書」：『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.61－69

2008、「北河堀町所在遺跡発掘調査（KC07－2）報告書」：『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.51－56

2010、「北河堀町所在遺跡発掘調査（KC08－1）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2008）』、pp.293－297

大阪文化財研究所2013a、『北河堀町所在遺跡発掘調査報告』

2013b、『天王寺区北河堀町54－14における建設工事に伴う発掘調査（KC12－2）報告書』

家原圭太2013、「大型建物群の評価」：大阪文化財研究所編『北河堀町所在遺跡発掘調査報告』

調査区全景
（奥は「河底谷」、左手は
KC12－１次調査地：
南から）

調査区西壁地層断面
（南東から）

SP301検出状況
（北から）

天王寺区清水谷町19－23・19－25における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS13－40)報告書

調査個所	大阪市天王寺区清水谷町19－23・19－25
調査面積	約74㎡
調査期間	平成26年3月24日～4月3日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	次長(現所長)　南 秀雄、谷崎仁美

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

天王寺区清水谷町一帯は、北側の長堀通と南側の空清町一帯が谷で、周囲より小高い東側に舌状に張り出した地形となっている。西側の上町筋沿いが最も標高が高く、そこから約200m離れた清水谷高校から東は急激に低くなっており、調査地は上町筋から約60m東の比較的平坦な場所に位置する(図1)。歴史的に見れば、豊臣氏大坂城期の惣構の南部で、徳川氏大坂城期には大坂城代家臣屋敷のあった地区に当る。周辺では、これまで6～7世紀代の建物などが数多く見つかっている。特に、調査地に近接し、南側に位置するOS91－3次調査では、7世紀代の建物が12棟見つかっており[大阪市文化財協会2004]、西側のOS99－30次調査では、6～7世紀前半頃の建物1棟や7世紀中頃以降の正方位に並ぶ多数の柱穴を検出している[大阪市文化財協会2002]。

調査地では、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下約0.7mで古代から江戸時代前半と考えられる遺構および遺物包含層が検出されたため、本格的な調査を実施することになった。

敷地内で南北15m、東西6mの約90㎡の調査区を予定していたが、安全確保のため、南北を13m、東西を5mに縮小して約65㎡の調査区を設定した。しかし、調査中に古代の柱穴を検出したため、柱穴の続きを確認するために安全確保を考慮したうえで、北・西拡張区を設け、最終的に約74㎡となった。また、排土置き場の確保のため、南北を反転掘りして調査を進めた。南半部から調査を開始し、3月27日には必要な記録作業を終えて埋め戻し、北半部は同日から調査を開始した。4月3日に拡張区を含めて調査にかかるすべての作業を終えて撤収した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mとした。

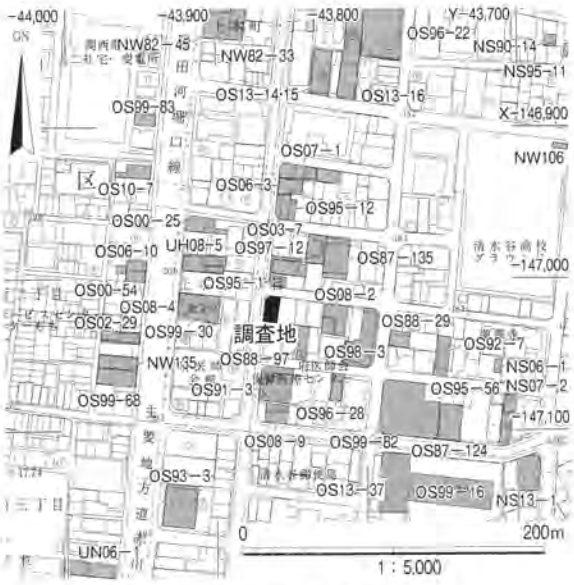


図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

2）調査の結果

i）層序（図３・４）

調査地内は、現代盛土により北・西道路面よりも10～20cm程高くなっていたが、地形的に高低差はなく、地表面でTP+19.8mほどであった。重機で現代盛土を除去し、以下を調査対象とした。

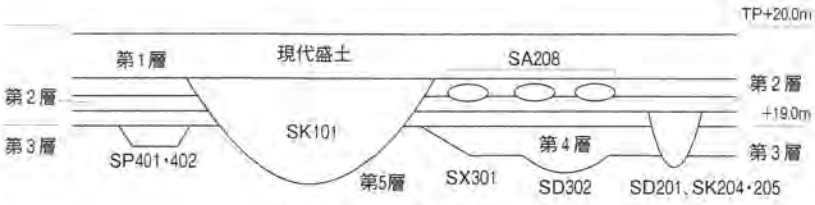


図３　地層と遺構の関係図

第１層：近世の整地層である。にぶい黄色(2.5Y6/4)中～細礫混り粗粒～細粒砂層で、鉄分が多く沈着する粗粒～中粒砂偽礫を含む。層厚は50～80cmである。上面で井戸や土壙SK101を検出し、層内の一整地面からSX102が掘られていた。本層からの出土遺物は肥前磁器・丹波焼・瓦の細片で、年代をしぼり難いが、SK101から出土した図13－15～21などが19世紀前～中葉以前のもので、本層の下限時期と考えられる。

第２層：豊臣期の整地層である。後述するSD201よりも北側にのみ分布する。褐色(7.5YR4/4～10YR4/4)第５層由来のシルト偽礫・炭・細礫混りシルト質中粒～細粒砂層で、層厚は20～30cmである。上面でSA208や礎石抜取穴を検出した。本層からは土師器６、瓦質土器９、瀬戸美濃焼12のほか、古代の土師器、須恵器２が出土した。

第３層：豊臣期の整地層である。にぶい黄褐色(10YR4/3)中～細礫混りシルト質細粒～極細粒砂層で、層厚は20～30cmである。上面で溝SD201、土壙状の落込みSK204･205、SX206などを検出した。本層からは土師器３・４、ベトナム産白磁11、瀬戸美濃焼、備前焼８のほか、古代の土師器、須恵器１が出土した。

第２・３層の出土遺物の内容は同じで、豊臣期の整地層であると考えられる。

第４層：灰～灰黄褐色(5Y5/1～10YR4/2)中粒～極細粒砂層で、層厚は30cmである。中世以降の作土層で、SX301・SD302の埋土である。

出土遺物は古代の土師器・須恵器のみであるが、周辺の既存調査で確認された中世の作土層と層相が類似することから、本層の時期は中世以降と推定した。

第５層：段丘構成層である。明黄褐色(10YR6/6)の粗粒～極細粒砂層で、層厚は30cm以上である。上面で、古代以前の柱穴SP401・402のほか、中世ではSD302や小穴群を検出した。このほか、本来は上位層から掘り込まれた豊臣期以降の遺構を検出した。

ii）遺構と遺物

a．古代以前（第５層上面、図５～７）

第５層上面でSP401･402を検出した（図５・６）。SP401は柱痕跡が直径0.12m、掘形が長径0.48m、短径0.40mの楕円形で、深さは0.22mである。掘形埋土は黄褐色シルト質中粒～細粒砂層である。SP402は柱痕跡が直径0.11m、掘形が長径0.36m以上、短径0.35mの楕円形で、深さ0.07mである。掘形埋土はにぶい黄褐色シルト質中粒～細粒砂層である。両者はほぼ正方位を向いて並んでいるが、柱間隔（柱痕跡の芯々距離）が2.23mと長く、現状では建物になるかどうか不明である。

柱穴には土師器の細片が含まれていたものの、図化し得ないものばかりであった。

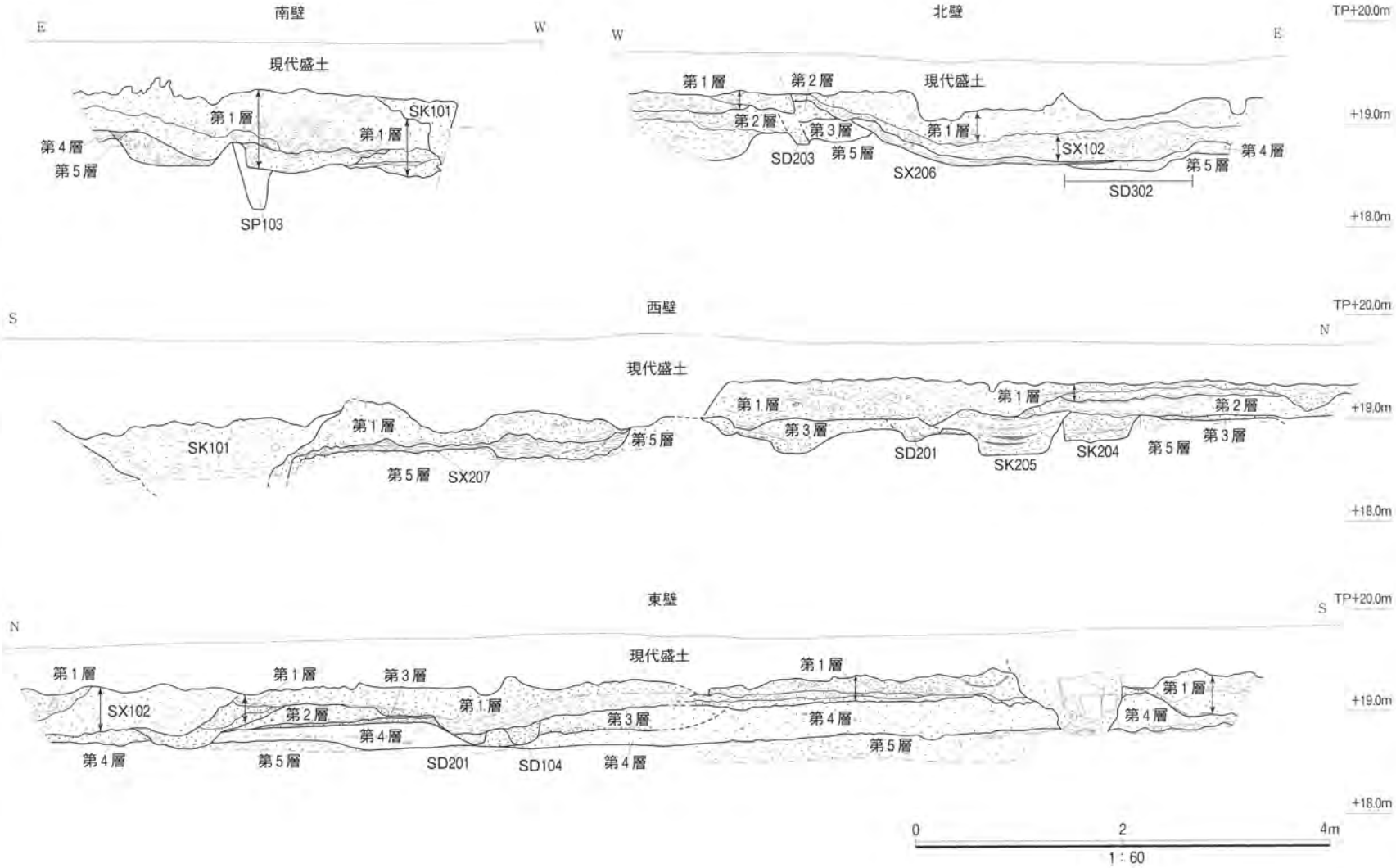

南壁
E
W
現代盛土
第1層
SK101
第1層
第4層
第5層
SP103
北壁
W
E
TP+20.0m
第1層
第2層
現代盛土
第2層
第3層
第1層
+19.0m
SD203
第5層
SX102
第4層
SX206
第5層
SD302
+18.0m
西壁
S
N
TP+20.0m
現代盛土
第1層
第1層
第2層
+19.0m
SK101
第1層
第3層
第5層
SD201
SK205
SK204
第5層
第3層
第5層
SX207
+18.0m
東壁
N
S
TP+20.0m
現代盛土
第1層
第1層
第3層
第1層
SX102
第2層
第1層
第3層
第4層
第1層
第4層
+19.0m
第4層
第4層
第5層
第5層
SD201
SD104
第4層
+18.0m
0
2
4m
1：60

図4　地層断面図

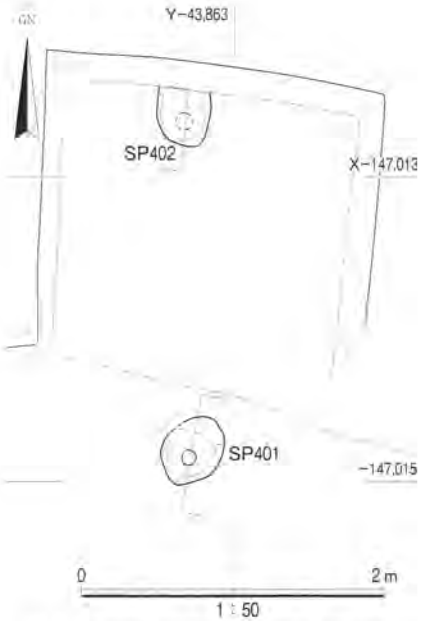


図５　古代の遺構平面図(第５層上面)

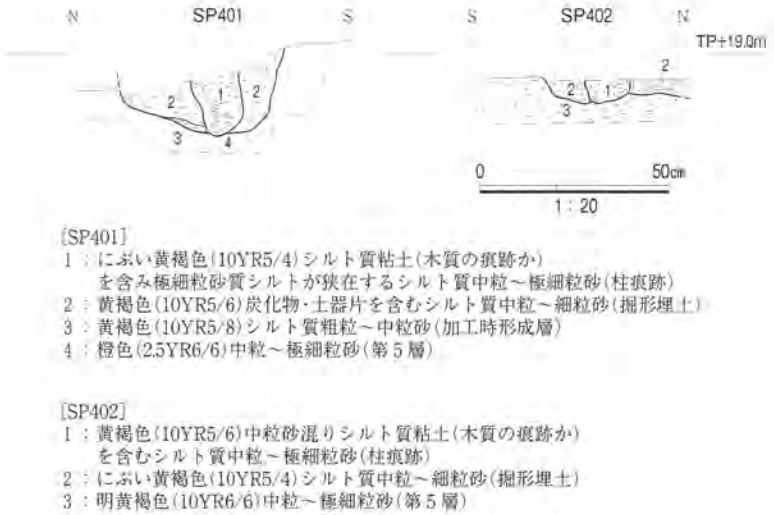


図６　古代の柱穴断面図

SP401・402は上位層から５～７世紀代の遺物が出土していたことや、柱穴の形状・規模から、難波宮下層の可能性がある。

なお、古代以前の遺物はすべて上位層から出土した(図７)。１は須恵器杯蓋、２は須恵器杯身である。１は復元口径11.7cmで、稜線はやや丸みを帯びる。TK23型式に属する。２は口縁端部が欠損しており、受部径が推定12.2cmである。これらは古墳時代のものである。これら以外に、６～７世紀の土師器甑の把手や高杯脚部、移動式竈の庇部の細片が出土した。

b．中世(第５・４層上面、図８)

SX301は西から東に向かって落ち込んでいる。第４層で埋る。

SD302はSX301を完掘したのちに第５層上面で検出した。幅1.10～1.25m、深さ0.10mの南北溝で、第４層で埋る。SD302はほぼ正南北に掘られており、調査地に北接するOS95－１次調査におけるSD04の延長線上に位置する(図14)。SD04は中世に埋没する[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997]。

このほか、SX301の上面や第５層上面で小穴群を検出したが、出土遺物は無く、中世より新しくなる可能性がある。

c．豊臣期(第３・２層上面、図９～11)

第５層上面で本来は第３層上面より掘り込まれたとみられるSD202・203、SX207を検出した。SD202はSD201、SD203はSK205に切られる。

SD202は幅0.21m、深さ0.10m、検出長約0.50mで、北で西壁内に曲がる。

SD203は幅0.20～0.25m、深さ0.20m、検出長約4.50mで、底が平坦で断面形は方形を呈する。流・滞水痕跡がある。SD203から、瓦器のほか宋銭「天聖元宝」(初鋳1023年)が出土した。

SX207は南北5.0m以上、東西2.4mの溝状の落込みで、北側が一段深く

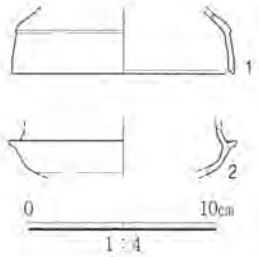


図７　古代以前の出土遺物
１(第３層)、２(第２層)

なっていた。底や側面に工具痕が残り、底はほぼ平坦であった。第３層に似る暗灰黄色細粒～極細粒砂質シルトで埋め戻されていた。瀬戸美濃焼小天目碗や古代に遡りうる厚手の平瓦片が出土した。

第３層上面でSD201、SK204･205、SX206のほか、調査区の北西にあるSD203の土壙群を検出した。

SD201は東西溝で、幅0.30～0.40m、深さ0.20m、検出長約3.90mで、底がほぼ平坦な逆台形を呈する。瀬戸美濃焼天目碗のほか、古代に遡りうる平瓦片が出土した。

SK204･205は埋土の層相がよく似ており、滞水痕跡が見られる。SK204は南北0.75m、東西0.70m、深さ0.30mの不整円形の落込みで、炭を含むオリーブ褐色シルト質中粒～極細粒砂で埋り、泥質シルトラミナが挟在する。SK205は南北0.90～0.95m、東西2.40m以上、深さ0.35mの東西に延びる落込みで、炭を多く含み、鉄分の沈着が顕著なオリーブ褐色シルト質中粒～極細粒砂で埋る。炭を含むシルト質極細粒砂ラミナが挟在する。

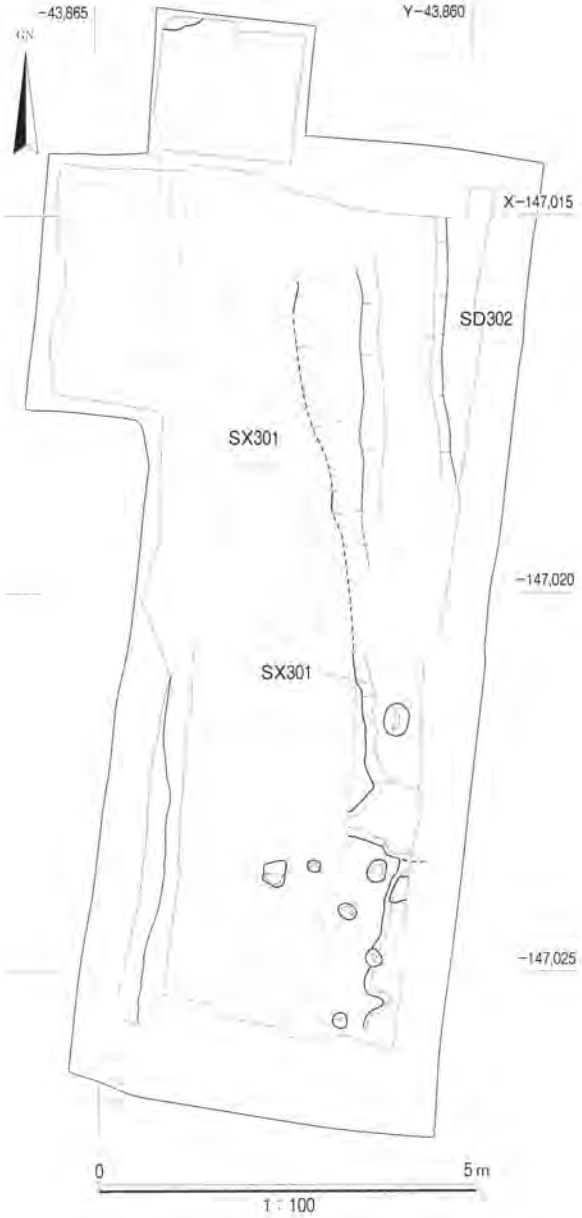


図８　中世の遺構平面図(第５・４層上面)

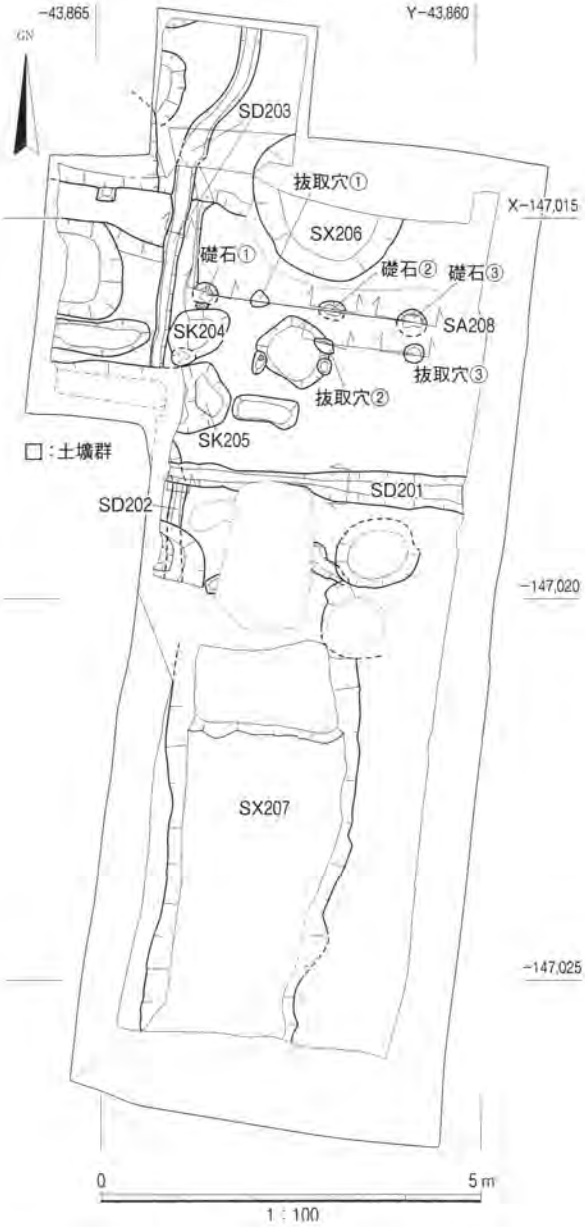


図９　豊臣期の遺構平面図(第２・３層上面)

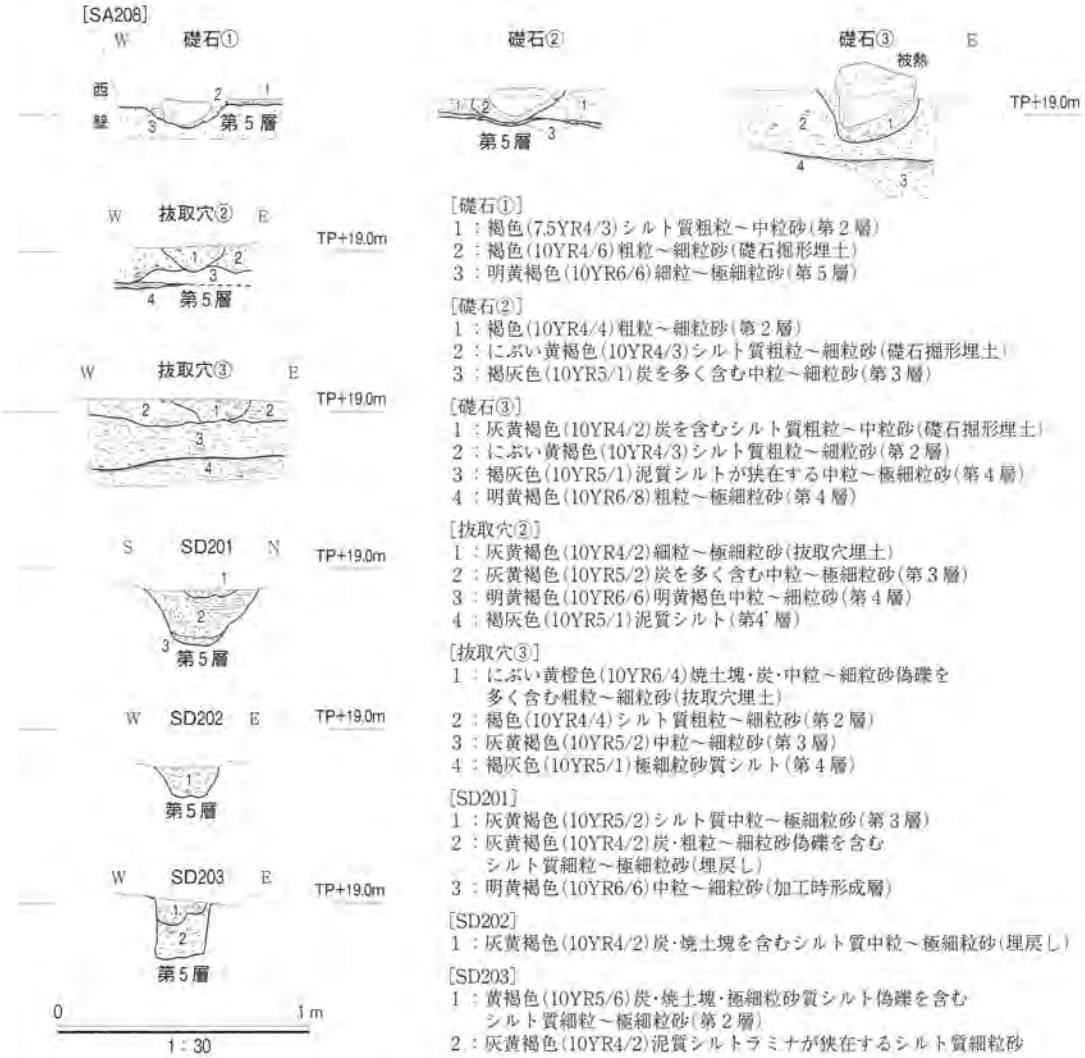


図10　遺構断面図

SX206は南北約1.90m、東西約2.00m、深さ0.04mの円形の落込みで、上部は暗灰黄色極細粒砂質シルトで埋り、底には炭が溜まっていた。

SK204から備前焼擂鉢7、中国産青花皿10が出土した。7は口径不明で、内面に斜め方向の7条以上1単位の摺目が入る。10は粗製の皿で、輪花になる可能性がある。口縁部が外折して立ち上がり、端部を内側に少し折り曲げる。SK205からは土師器皿5、軒丸瓦13のほか、鉱滓が出土した。5は復元口径9.6cmで口縁端部をわずかにつまみ上げる。にぶい橙色を呈する。13は三巴文軒丸瓦である。復元瓦当径は14.6cmで、巴尾と他の巴胴は接しておらず、内側に圏線が巡る。SX206からは貝類が出土した。細片化していたが、観察できるものはすべてアカニシであった。

第2層上面では、柵SA208を検出した。

SA208は東西3.0mの柵である。礎石が据わった状態の掘形を3基(礎石①～③)、抜取穴を1基(抜取穴①)検出した。柱間隔は0.80～1.05mである。礎石はすべて花崗岩の割石で、直径18～28cmである。礎石③は表面が赤褐色に変色しており、被熱していた。掘形は直径が0.29～0.36mの不整円形で、深さは0.09～0.17mである。

また、礎石②に対応する位置関係にある抜取穴②、礎石③と対応する位置関係にある抜取穴③を検

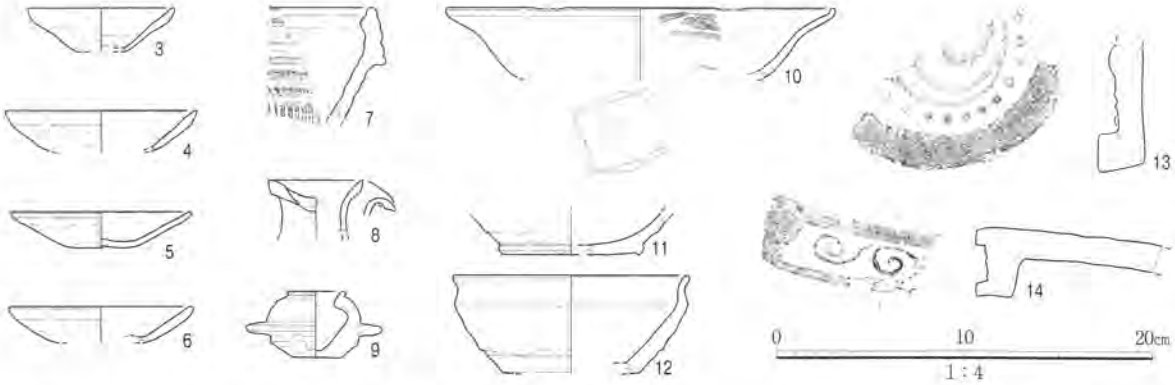


図11　出土遺物

抜取穴③(14)、SK204(7・10)、SK205(5・13)、第2層(6・9・12)、第3層(3・4・8・11)

出した。これらはSA208と組み合って建物になる可能性もある。抜取穴③からは軒平瓦14が出土した。

また、第5層の上面で検出したが、本来第3層上面より掘り込まれたとみられるSD202・203は、断面形が方形または逆台形を呈し、敷地内を区画する溝の可能性がある。これらの柵・溝は、ほぼ北で東に7～10°振っており、上町筋とほぼ同じ方向に沿う。この溝の西側には深い土壙が集中し、区画の裏手に当ると考えられる。さらに、SD201より北側に第2層が堆積し、南側に規模の大きな溝状の落込みSX207があることから、南北で土地利用の様子が異なっていることが分かる。

この他に豊臣期の遺物として、第2・3層より出土したものについて以下で記述する。

第2層内から土師器皿6、瓦質土器ミニチュア羽釜9、瀬戸美濃焼天目碗12が出土した。6は復元口径9.6cmで、口縁端部はヨコナデして丸くおさめる。にぶい褐色を呈する。9の体部外面下半はヘラケズリである。12は鉄釉を施し、体部下半が露胎である。

また、第3層内から土師器皿3・4、備前焼徳利8、ベトナム産白磁碗11が出土した。3は復元口径7.8cmで灰白色を呈する。4は復元口径9.6cmで、口縁端部はヨコナデし、つまみ上げを指向するが丸くおさめる。灰白色を呈する。8は注口部を大きく外反させる。外面は自然釉がかかり、赤褐～橙色を呈する。11は白化粧したのちに透明釉を施している。底部外面は無釉でロクロの回転方向は右回

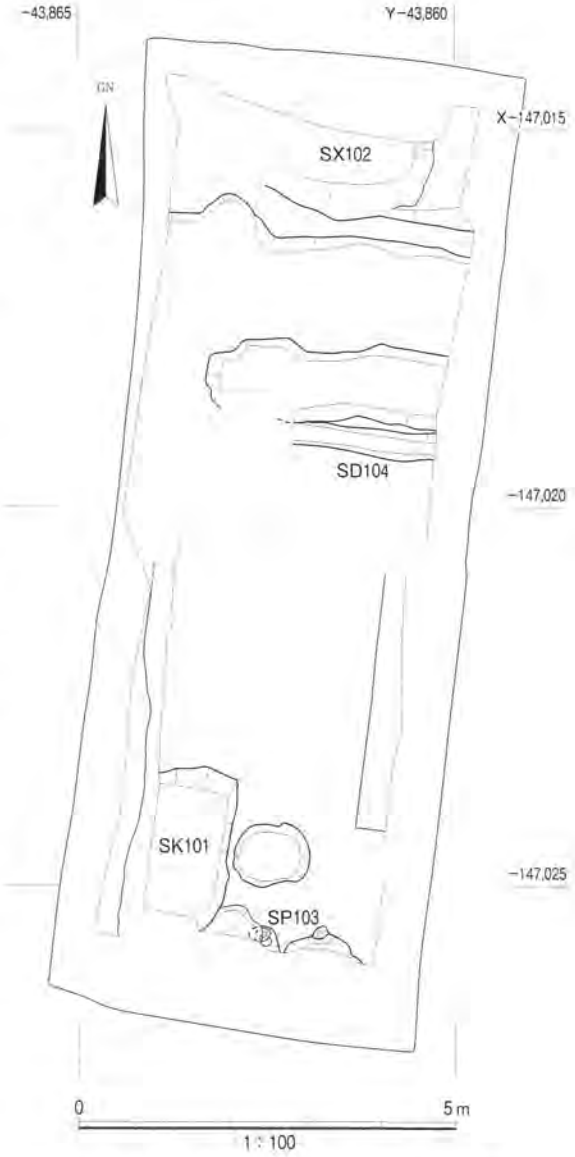


図12　徳川期の遺構平面図(第1層層内・上面)

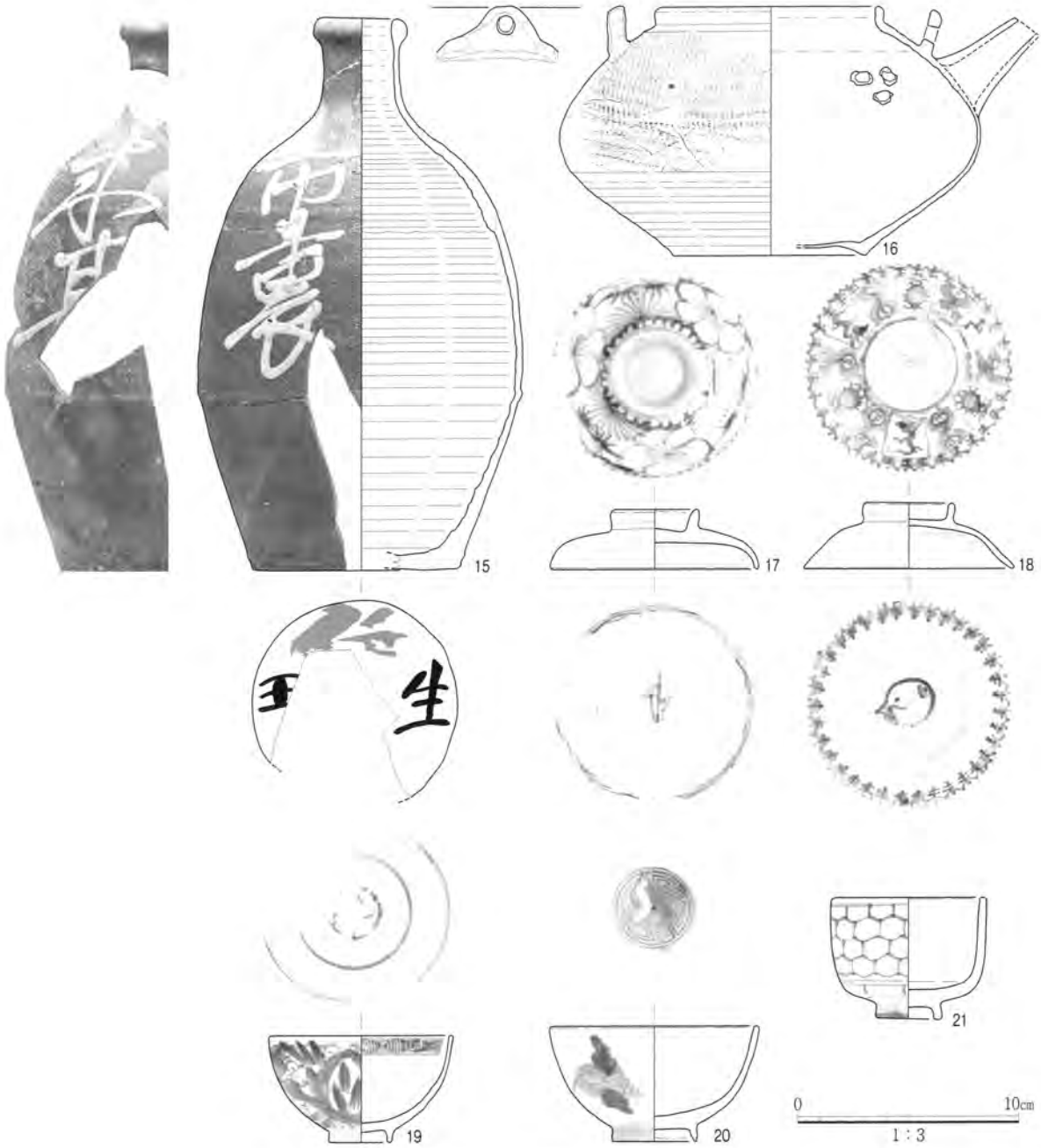


図13　SK101出土遺物

りである。底部内面には目跡があり、花文は無い。以上は、豊臣期に属する。

d．徳川期(第１層層内・上面、図12・13)

第５層上面でSP103や土壙、第３層上面でSD104を検出した。これらからは肥前磁器が出土しており、第１層層内から掘り込まれたとみられる遺構である。

SP103は柱痕跡の直径0.14m、掘形の直径約0.35m、深さ0.61mである。下部はにぶい黄褐色細粒～極細粒砂質シルトが挟在する中粒～極細粒砂で、上部は黄褐色中粒～極細粒砂で埋る。

SD104は幅0.29m、深さ0.11m、検出長約1.90mの東西溝で、底は平坦で断面方形を呈する。灰黄色粗粒～細粒砂で埋る。須恵器のほか、土師器や肥前磁器が出土した。

第１層上面でSK101、井戸、層内の一整地面でSX102などを検出した。

SK101は南北2.2m、東西1.1m、深さ0.7m以上の方形の土壙で、瓦や土器・陶磁器を多く含む黒褐色中礫混りシルト質中粒～極細粒砂で埋る。

瀬戸美濃焼磁器17・20、関西系磁器とみられる18・19・21、関西系陶器土瓶16、備前・丹波焼擂鉢、丹波焼徳利15や土師器が出土した。15は体部外面にイッチン技法で「市裏」と「本□」が対面に描かれている。底面には墨書がある。17・18は染付碗の蓋である。19・20は碗で、20の外面は刻線に濃を施している。21は小碗である。これらは19世紀前～中葉のものである。

SX102は南北約1.0m以上、東西2.0m以上、深さ0.2～0.3mの不整形な落込みである。第1層に似る焼土塊・極細粒砂質シルト偽礫を含む黄褐色中礫混りシルト質中粒～極細粒砂で埋る。須恵器のほか、土師器皿や瓦が出土した。

3）SD302と推定難波京条坊ラインとの位置関係について

今回、中世の溝SD302を検出した。正方位を向いており、北のOS95－1次調査のSD04につながると考えられる(図14)。SD04は古代か中世の包含層である第3層上面の遺構で、機能時の水成層から中世の遺物が出土した。また、上部は中世の包含層である第2層で埋ることから中世の溝である。その北側に接するOS97－12次調査ではこれらに対応する溝を検出しておらず[大阪市文化財協会1997]、溝はOS95－1次調査地とOS97－12次調査地の間で終束するか折れ曲がっている可能性がある。また、OS95－1次調査のSD03は中世から豊臣後期の溝である。

SD302およびSD04は、難波宮南門大路[積山洋2010]から西に168.02m、西一路から東に96.98mに位置し、ちょうど南門大路と西一路の間を8分の1に分割したラインと一致する(図15)。1坊を265.5m四方とした場合、1坊を16坪に割り、1坪の面積を4分の1町とする考え方の蓋然性が高いことはUH12－6次調査で示された[大阪文化財研究所2012]。SD04が北に直進しないことから、坪割に従って設けられた宅地内の区画である可能性が高い。さらに、中世にも難波京を踏襲した正方位地割が残存し、敷地境界の位置は条坊を踏襲したものが多かったことが最近の研究で明らかになりつつある[市川創2014]。よってSD302および

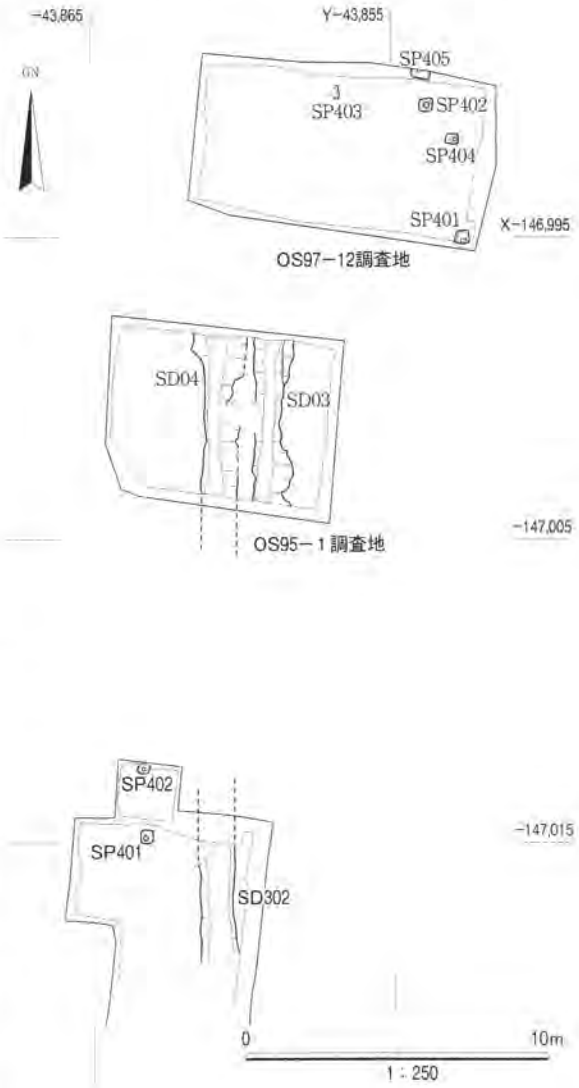


図14　既存検出遺構と今回の遺構との位置関係

SD04は中世まで踏襲された難波京の宅地割の名残であると考えられる。

また、OS88－97次調査やOS08－２次調査で検出されている南二路の側溝[大阪市文化財協会1989、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]は、本調査地より南に位置するようで、今回は見つからなかった。

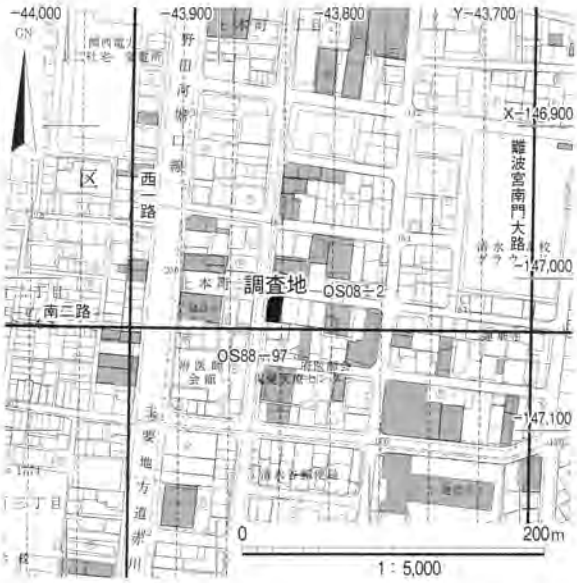


図15　推定難波京条坊ラインと調査地の位置
（図中の破線は縦の坪割を示したライン）

４）まとめ

清水谷地域における古代から現在に至るまでの土地利用を考える上で重要な発見があった。

まず、古代以前の柱穴SP401・402を検出した。上位層からの出土遺物や柱穴の形状・規模から難波宮下層の可能性がある。同時期の柱穴はOS97－12次調査でも見つかっている(図14)。

また、正南北方向の溝SD302を検出した。SD302はOS95－１次調査のSD04と同一の溝とみられ、調査地周辺が中世以降に耕作地になるまで存続した。古代の都市計画が後世にどのように踏襲されるか考える上で重要な資料である。

さらに、豊臣期の整地層を確認し、柵や溝を検出した。被熱した礎石があることから、大坂夏ノ陣を機に廃絶した可能性が高い。

引用・参考文献

市川創2014、「受け継がれた都市計画－難波京から中世へ－」：大阪文化財研究所・大阪歴史博物館編『平成21～25年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』、pp.147－158

積山洋2010、「難波大道と難波京」：『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』平成18～21年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997、「大野氏による建設工事に伴う発掘調査(OS95－１)略報」：『平成７年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

2010、「大坂城跡発掘調査(OS08－２)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.299－308

大阪市文化財協会1989、『大阪府医師信用組合による建設工事に伴う発掘調査(OS88－97)略報』

1997、『ダイア建設株式会社による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS97－12)報告書』

2002、「大坂城跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財調査報告－1999・2000年度－』、pp.71－76

2004、「清水谷地区の調査」：『難波宮址の研究　第十二』、pp.219－233

大阪文化財研究所2012、『中央区上汐一丁目１－６における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH12－６)報告書』

調査区北半完掘状況
（南から）

調査区南半完掘状況
（北から）

調査区北半東壁
地層断面（西から）

SP401検出状況
（北から）

SP401・402（南から）

SA208、抜取穴②・③
（南から）

天王寺区玉造本町における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS14－１)報告書

調査個所	大阪市天王寺区玉造本町１－25・1－26
調査面積	92㎡
調査期間	平成26年４月30日～５月９日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、趙 哲済

1)調査に至る経緯と経過

調査地は近世の城郭跡である大坂城跡の東南部に位置し、上町台地の東麓を下刻する清水谷の中に当る。周辺ではいくつかの調査が実施されているが、谷中では初めてである(図1)。

大阪市教育委員会が当該地で行った試掘調査の結果を受けて、地表下2.3m以下にある17世紀前半以前と考えられる遺構面の年代や遺構・遺物の分布状況を把握し、当該地の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的として調査を実施した(図2)。

調査は4月30日に開始した。当初計画では81㎡を対象にしたが、隣地建物との安全距離と重機の稼働範囲を確保するために63㎡に縮小して行った。重機掘削で地表下2.3mより浅い地表下1.5～1.6mで徳川初期以前とみられる盛土が確認できたので、これより下位は人力により掘り下げた。遺構面の精査と写真撮影、遺物の採取、遺構平面図や地層断面図を作成し、5月7日に大方の調査を終了した。しかし、調査区には試掘調査で地表下3m以下に確認されていた黒～暗褐色粘土層が分布しなかったため、試掘調査地点を再度掘り下げ、黒～暗褐色粘土層の堆積状況や年代を把握するための拡張調査を実施した。これにより調査面積は92㎡になり、5月9日に撤収を完了した。

調査地の基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、世界測地系に基づく座標北を基準として図示した。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP＋mと記した。

なお、遺物の観察は、当研究所の学芸員小田木富慈美による。

図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

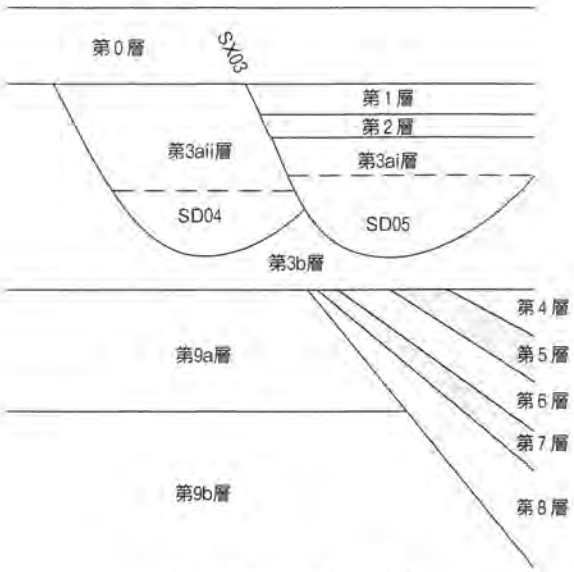


図3　地層と遺構の関係図

2)調査の結果

i)層序

調査地は清水谷の谷底のほぼ中央に位置し、南面道路は西側のTP+5.2mから34m隔てて東側の4.9mへ、北面道路(長堀通)の歩道上では西側のTP+5.4mから32m隔てて東側の5.2mへ傾斜し、勾配は緩く(6～9)/1000である。

調査地の地層は、現代盛土・攪乱層(第0層)の下位に9層を区分した(図3・4)。

第1層は第3層の微高地(後述)より北側に分布する氾濫堆積層である。上部のトラフ型斜交葉理のある褐色(10YR4/5)細粒中礫～細粒砂層と、下部の正級化する黄褐色(2.5Y5/4)粘土質シルト～褐色(7.5YR4/6)細粒砂層からなり、層厚は27cm以上ある。上部の古流向は西から東で南の微高地側にシフトしている。

第2層は第3層の微高地より北側に分布する整地層である。暗灰黄～オリーブ褐色(2.5Y4/2.5)の細礫質砂質シルトと粗粒砂からなり、層厚は8cm以下で薄い。

第3層は3枚に区分できる盛土層であり、全層厚は最大165cmである。第1～2層が分布する北側の上部(第3ai層)は、灰黄～暗灰黄色(2.5Y5～6/2)をおもな土色とするわずかにシルト混り中礫質砂偽礫や細礫混りシルト質粗粒～細粒砂からなる客土層であり、SD05を埋めている。一方、調査区中央東西の高さ0.2mの段より南側の微高地をつくる上部(第3aii層)は、褐色(10YR4/4)～にぶい黄褐色(10YR5/4)をおもな土色とする礫混り砂質シルト主体の客土層であり、SD04を埋めている。第3ai層が第3aii層を覆っている。下部の第3b層は、黄褐～黄灰色(2.5Y5/4～1)・灰黄色(2.5Y6/2)などをおもな土色とする砂質泥偽礫や細礫～粗粒砂などからなる客土層である。盛土技法は比較的ていねいであり、豊臣期か、降っても徳川初期の造成と推定される。

第4～8層は拡張区で確認した谷埋め堆積層(谷斜面の充填堆積層)であり、各地層は谷の肩口へ収斂する。谷斜面は急峻で水平距離約2.9mで約2.2m深くなる。この谷は、現況道路分布と標高との関係から、清水谷の主谷に当るものと考えられる。

第4層は黒褐色(10YR3/1)粗粒砂質泥層の湿地堆積層で、層厚は30cmである。最下部が粗粒砂層であり、幾分上方細粒化し、上部がやや暗色化するが、生物擾乱が著しく、ラミナは不連続である。縄文時代晩期の突帯文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器などの小片が含まれ、縄文時代晩期～中世までの長期間、湿地が存続した可能性がある。

第5層は黒色(10YR2/1)細粒砂質粘土層の沼沢地堆積層である。層厚は15cmであった。大型の植物片が多く含まれ、樹木の根も多く張っている。本層以下からは考古遺物は未発見である。

第6層は黒褐色(10YR2/2)わずかにシルト質粗粒～細粒砂・シルト層の湿地堆積層である。生物擾乱が著しい。

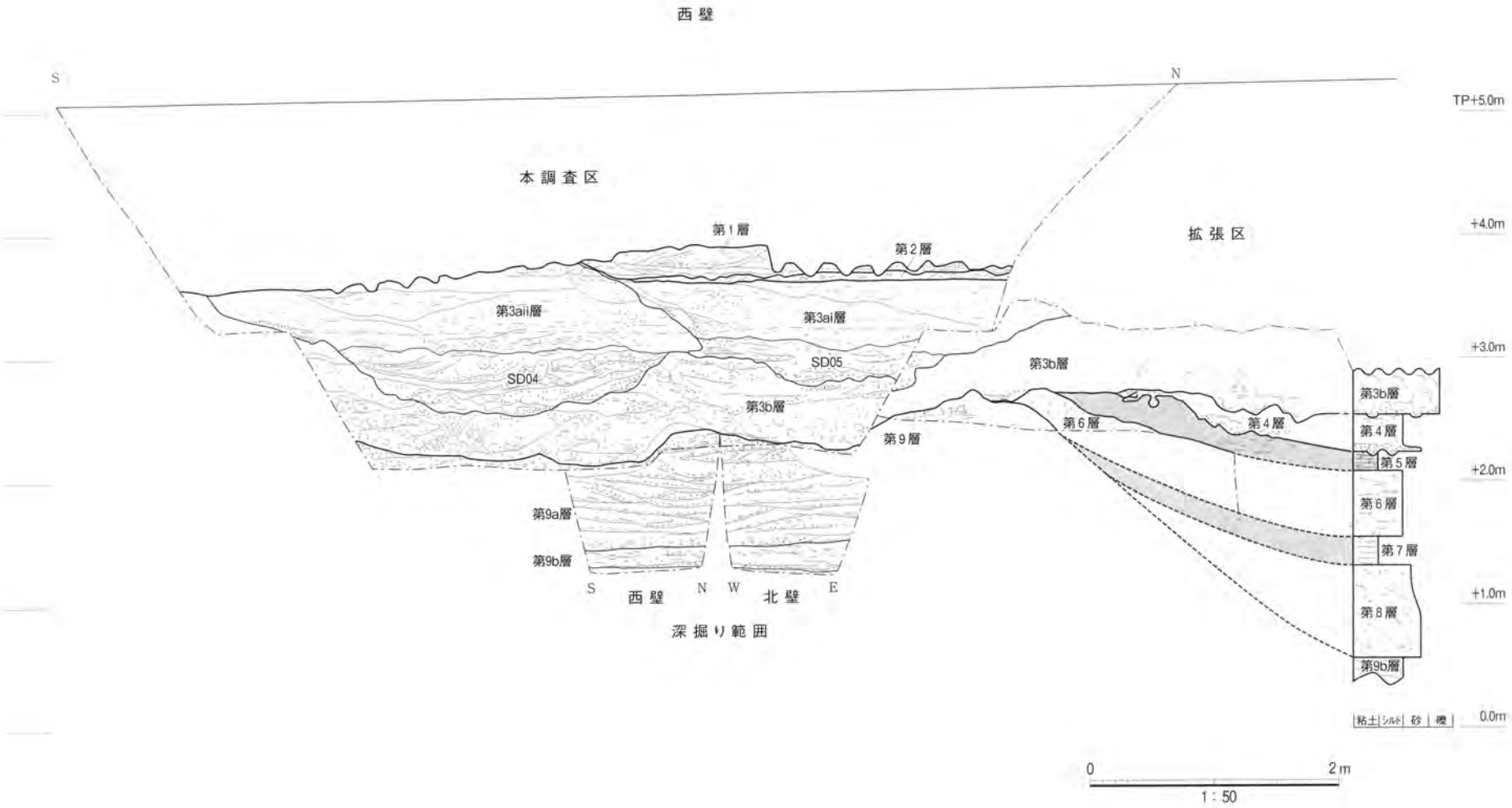

西壁
S
N
TP+5.0m
本調査区
拡張区
+4.0m
第1層
第2層
第3aii層
第3ai層
+3.0m
SD05
SD04
第3b層
第3b層
第6層
第4層
第9層
第3b層
第4層
第5層
+2.0m
第6層
第9a層
第7層
第9b層
+1.0m
第8層
S
西壁
N
W
北壁
E
深掘り範囲
第9b層
粘土
シルト
砂
礫
0.0m
0
2m
1：50

図4　地層断面図

第７層は黒褐色(2.5Y3/1)粘土層の沼沢地堆積層である。層厚は22cmであった。

第８層はオリーブ灰色粗粒～細礫質粗粒砂層の氾濫堆積層であり、上方細粒化する。層厚は76cmであった。

第９層は更新統であり、本調査区では２分できる。上部の第9a層はオリーブ灰色(2.5GY6/1)～明オリーブ灰色(2.5GY7/1)中礫～細礫質極粗粒砂層で、層厚は約100cm、トラフ型斜交層理が発達する。古流向は宰相山方面からN72° W方向へ下り、扇状地性の網状流路堆積層と推定される。下部の第9b層は基質支持の淡黄灰色(2.5Y8/3)～褐色(7.5YR4/6)中粒中礫～細礫層であり、基質は粗粒砂質シルトである。層厚は30cm以上であった。拡張区でもTP＋0.57m以下に第9b層と同様の礫質砂質泥層が分布した。

図５　第3b層基底面遺構平面図

第３層に覆われる以前の第９層上面は、高さ10～30cmの凸地が不規則に分布していた。第9a層は第9b層に比べて締りが悪く、スコップで容易に掘り下げられたのは、第４～８層に覆われない谷斜面の南側(本調査区側)では、第9a層が露出し、長らく風雨にさらされていた所為だと考えられる。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．清水谷の主谷

拡張区の第４～８層が埋める谷斜面は急峻で、見かけ上76/100の勾配がある。この谷は、谷の概形と一致する現況道路分布と、道路と並行して延びる帯状の低地、および第４～８層の堆積環境が沼沢地～湿地と推定されることから、清水谷の主谷底に広がる低湿地の一部に当るものと考えられる。支谷からの湧水がおも

な水源であったと推定される清水谷の主谷底は、通常時は大半が沼沢湿地で、その中を水路が細々と流れていた程度であったと推定される。第８・６層や第４層下底部の砂堆積物は、時折起った氾濫の堆積物であろう。

ｂ．豊臣後期または徳川初期の遺構

第３層内でSD04・05を検出した。

SD04は幅2.7m、深さ0.5mで断面が皿状を呈する東西溝である。調査区中央に段があり、東側で浅くなる。充填層は細粒～極細粒砂層と上方細粒化する細礫質極粗粒～細粒砂層の互層であり、４～５セットが互層する。前者には平行ラミナが認められ、後者には西から東に流れたトラフ型斜交ラミナが顕著に発達する。これらは第3aii層に覆われる。

SD05は幅1.9m以上、深さ0.8mの東西溝である。SD04を埋め立てた第3aii層のかさ上げによりできた土手状の高まりの北側を流れた溝である。充填層は細礫質極粗粒～粗粒砂層であり、西から東に流れたトラフ型斜交葉理が顕著に認められる。

SX03は第3a層上面の段である。段は第3aii層の斜面をほぼそのまま利用していて、南高北低である。段の高さは約0.2mである。段の北側では、17世紀後半以降に、５cm前後の厚さの第２層が客土されて整地され、その後、比較的近い時期に、その上位を第１層の氾濫堆積層が覆っている。

ｃ．包含層出土遺物

第４層出土遺物：１は縄文土器深鉢

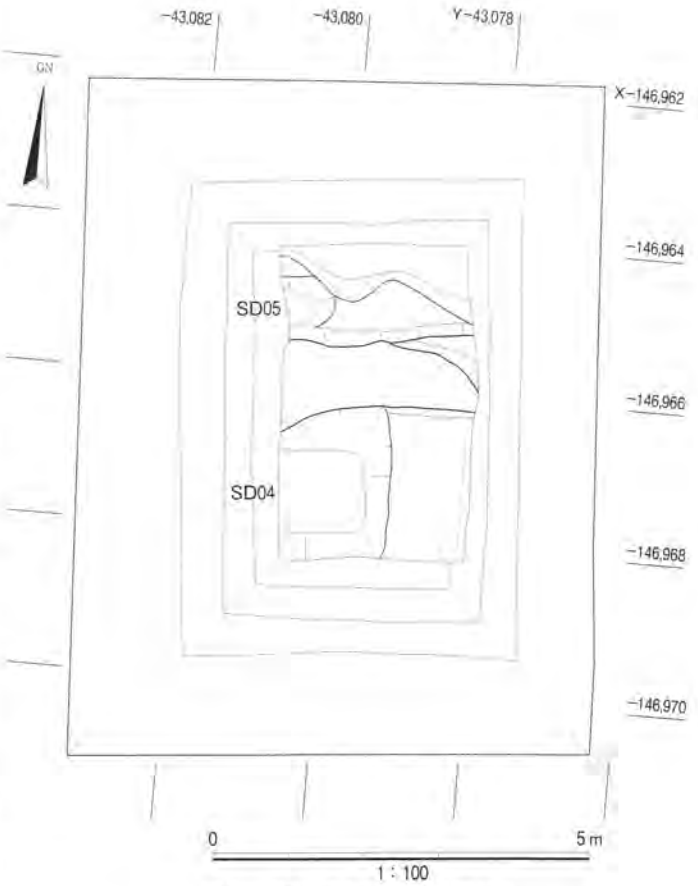


図６　第3b層上面遺構平面図

図７　第3a層上面遺構平面図

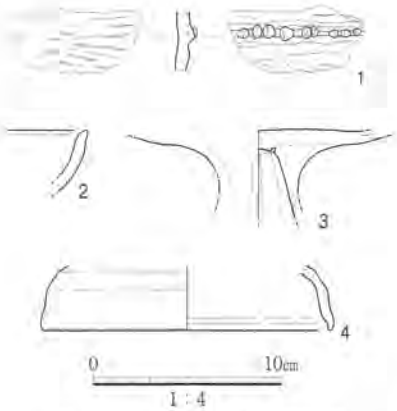


図８　包含層出土遺物実測図
第４層（１・２）、第3b層（３）、表採（４）

の体部で、外面に突帯を有し、その上にキザミを施す。内面は粗いハケ状の原体ないしは条痕で横方向に調整し、外面は突帯より下位をヘラケズリする。胎土は生駒西麓産の特徴を持つ。縄文時代晩期の長原式に属する。２は土師器皿の口縁部とみられ、端部を軽く外方へつまみ上げる。内外面にはヨコナデを施す。12～13世紀のものであろう。

第3b層出土遺物：３は土師器高杯で、脚部を面取りする。内面は被熱しており、暗文は確認し得なかった。８世紀に属するものであろう。

４は拡張区掘削時の揚げ土から見つかった須恵器杯蓋である。出土層準は不明である。口縁端部内面には浅い凹線を有する。６世紀後葉であろう。

３）まとめ

本調査では、次の諸点を明らかにした。

・清水谷の主谷の斜面にあたるとみられる斜面と、これを埋め立て、斜面へ収斂する地層（第４～８層）を認めた。

・清水谷の主谷底には、縄文時代晩期以前にまで遡ると推定される沼沢地～湿地が分布しており、中世まで、時折氾濫して砂礫が堆積していたと考えられる。

・豊臣期か徳川初期に、谷は大規模に埋め立てられた。もし、それが豊臣期の出来事なら、1594年の惣構堀に係る造成の可能性がある。

・その盛土造成中に溝が掘られ、複数回の氾濫で埋まったが、その溝を埋めて土手とし、その北側にさらに溝が掘られている。造成中に排水路を確保するために掘られた一時的な水路であったと推定される。

しかし、次の課題が残された。

・清水谷とその支谷である上町谷は、台地と低地を結ぶルートとして、古代難波宮造営時期を含め、縄文時代以降の人間集団の進出と開発の記録を、人間活動と相互に影響し合って形成された自然環境の中に残していると考えられる。したがって、今回の調査で検出された主谷底の沼沢湿地の古環境と、詳細な年代を明らかにすることは重要である。そのためには、年代測定や自然科学分析を実施する必要がある。

地層の断面
（南西から）

地層の断面
（拡張区：北東から）
黒色粘土層は第５層。

SD04・05
（東から）

天王寺区清水谷町15－８他３筆における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査（OS14－２）報告書

調 査 個 所	大阪市天王寺区清水谷町15－８他３筆
調 査 面 積	144㎡
調 査 期 間	平成26年５月20日～５月30日
調 査 主 体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、田中裕子

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は豊臣～徳川期の城郭遺跡である大坂城跡の南部に位置し、さらに古代の都城遺跡である難波宮跡の南辺に近接する。前期難波宮「朱雀門」から南西へ約250mの位置にあり、宮殿南方域の開発を考える上で重要性を有する。

調査地西方のNW82－33・45次調査では、前期難波宮期とみられる柱列が検出されている[大阪市文化財協会2002]。また、東隣のOS96－22次調査では、7世紀中頃に廃絶した掘立柱建物や溝が検出された[大阪市文化財協会1999]。昨年度行ったOS13－16次調査では(図2)、調査区南部で地山の急激な落込みが検出され、その落込みを埋める盛土層が確認されている。なお、盛土層は上下に分かれ、上層は豊臣期以降の埋め立てとみられるが、下層の時期は不明であった[大阪文化財研究所2013]。

当該地で大阪市教育員会が行った試掘調査では、地表下1.5m以下の深さで本格的な調査を必要とする古代から江戸時代前期と考えられる遺構面および遺物包含層が検出され、本調査を実施することとなった。

発掘調査は5月20日より実施し、調査地南部に8m×18mの調査区を設置した。調査区の東部は一部OS13－16次調査と重複する。まず、後述する第1層上面まで重機によって除去したのち、遺構検出を行った。第1層は近世の盛土であり、厚さが1m以上あることが確認されたため、上面で検出された遺構の記録を行ったのち、再び重機により第2層上面まで掘削した。第2層以下は人力による掘下げを行った。適宜、遺構の検出・掘下げと記録の作成を行って、5月30日に埋戻しを含めたすべて

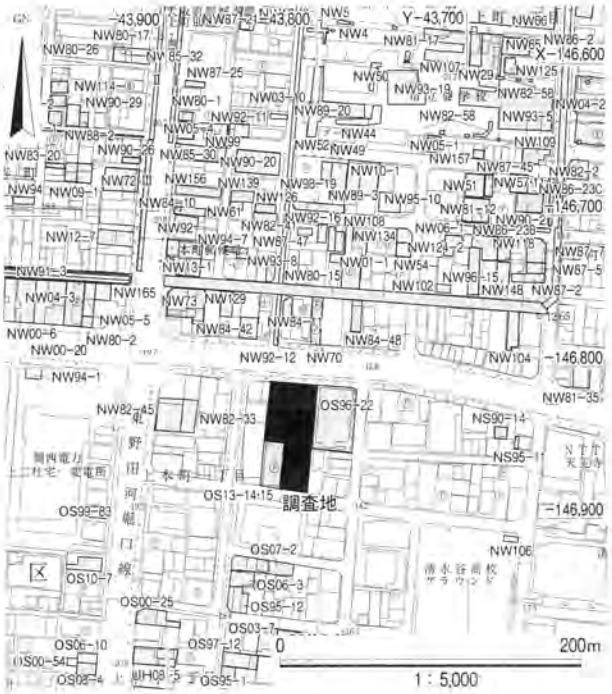


図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

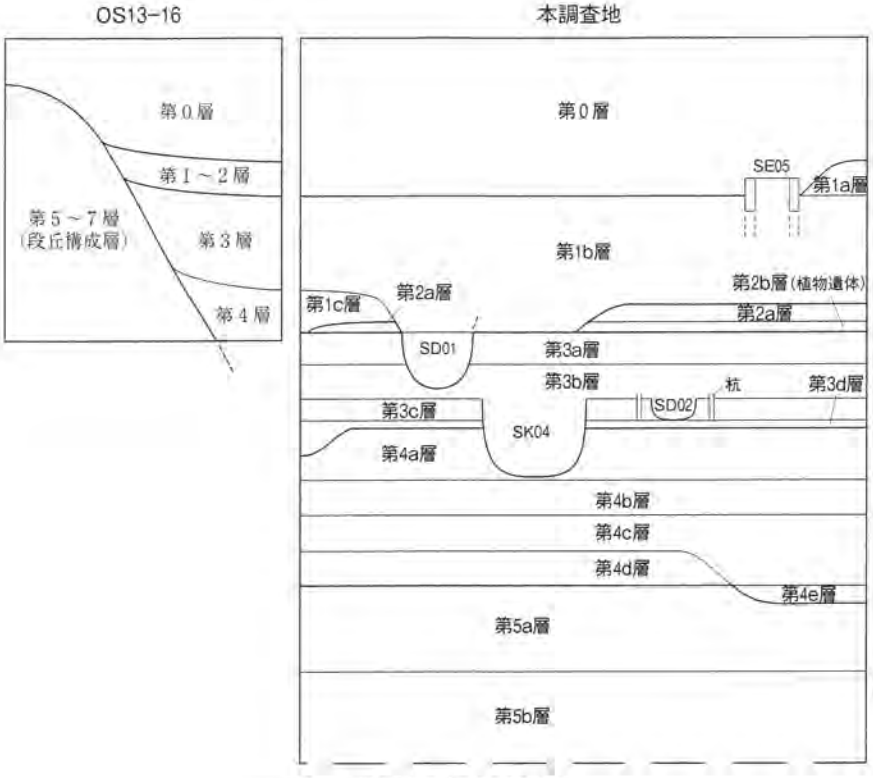


図３　地層と遺構の関係図

の作業を完了した。

本報告で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP＋○mと表記した。また、方位は現場で記録した街区図を1／2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

２)調査の結果

ｉ)層序

本調査地の現地表面は北部がTP＋16.4mで、南に向かって低くなる地形をしている。また、西から東へもわずかに下がっている。現地表下約4.5mまでの地層を観察し、現代盛土の下位を第１～５層に区分した(図３・４)。

第０層：レンガ・コンクリートを含む近代以降の盛土層である。最大層厚130cmである。

第１層：近世の盛土層であり、第1a～1c層に分けられる。

第1a層は、調査区南部でのみ確認される。黒褐色(10YR3/2)細礫混り中粒砂質シルトからなる。層厚は12cm以下である。18世紀代とみられる肥前磁器染付碗が出土した。

第1b層は、明褐(7.5YR5/8)～暗褐色(7.5YR3/4)中礫混り極粗粒～中粒砂からなり、最大層厚は150cmである。直径10～50cmほどの灰白色シルトの偽礫を含み、近隣の段丘構成層を母材とした盛土である。盛土中からは巴文軒丸瓦・丸瓦・平瓦などが見つかっているほか、盛土上部で丹波焼擂鉢7が出土した。肥前磁器の出土はなく、徳川初期までの盛土といえる。上面の遺構は削平のため検出できなかった。

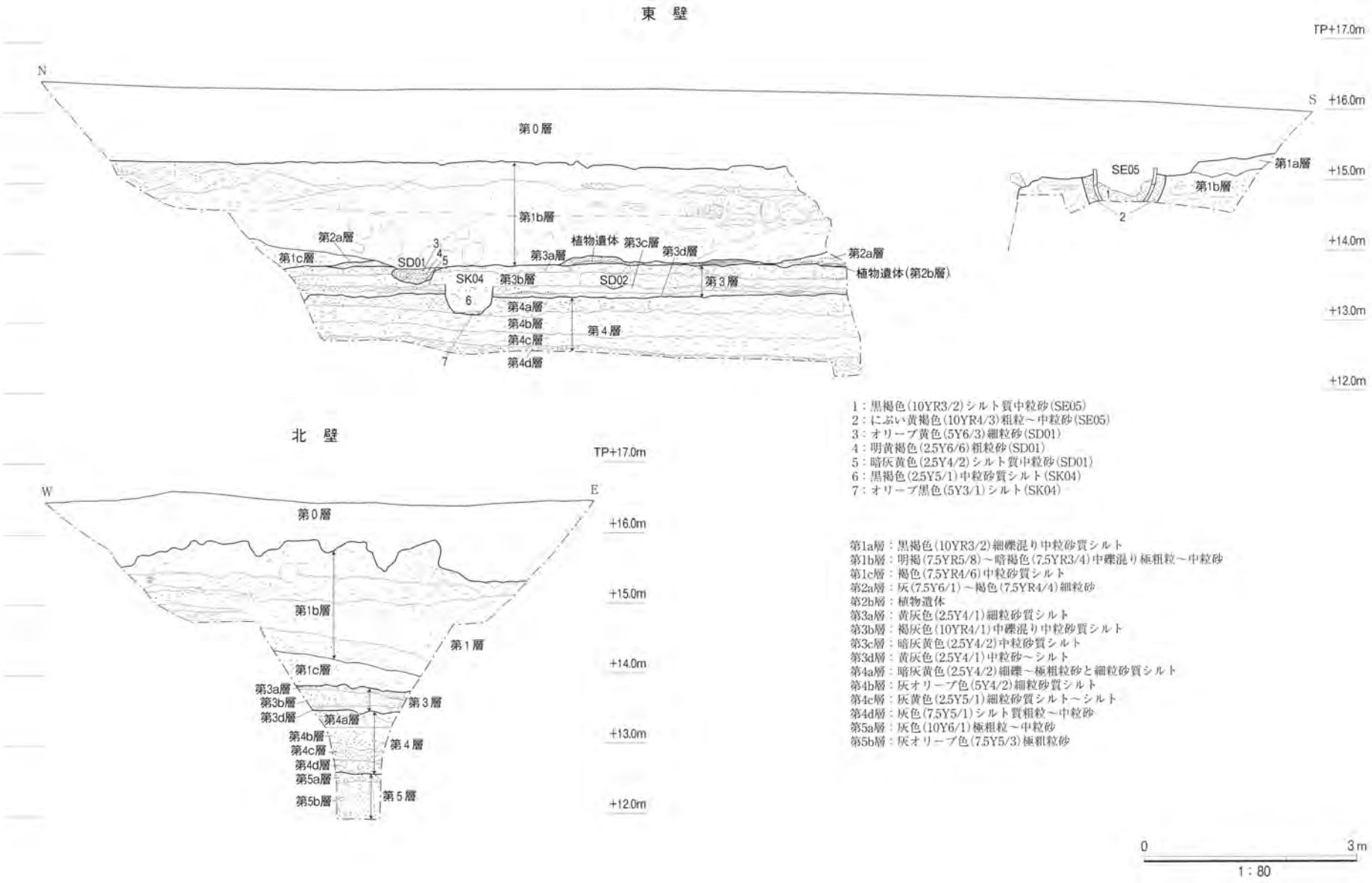

東　壁
TP+17.0m
N
S
+16.0m
+15.0m
+14.0m
+13.0m
+12.0m
第0層
第1b層
第2a層
第1c層
SD01
3
4
5
SK04
6
7
第3a層
植物遺体
第3c層
第3d層
第3b層
SD02
第3層
第4a層
第4b層
第4c層
第4d層
第4層
第2a層
植物遺体(第2b層)
SE05
1
2
第1a層
第1b層
北　壁
TP+17.0m
W
E
+16.0m
+15.0m
+14.0m
+13.0m
+12.0m
第0層
第1b層
第1層
第1c層
第3a層
第3b層
第3d層
第4a層
第3層
第4b層
第4c層
第4d層
第4層
第5a層
第5b層
第5層
1：黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂(SE05)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒～中粒砂(SE05)
3：オリーブ黄色(5Y6/3)細粒砂(SD01)
4：明黄褐色(2.5Y6/6)粗粒砂(SD01)
5：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂(SD01)
6：黒褐色(2.5Y5/1)中粒砂質シルト(SK04)
7：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト(SK04)
第1a層：黒褐色(10YR3/2)細礫混り中粒砂質シルト
第1b層：明褐(7.5YR5/8)～暗褐色(7.5YR3/4)中礫混り極粗粒～中粒砂
第1c層：褐色(7.5YR4/6)中粒砂質シルト
第2a層：灰(7.5Y6/1)～褐色(7.5YR4/4)細粒砂
第2b層：植物遺体
第3a層：黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト
第3b層：褐灰色(10YR4/1)中礫混り中粒砂質シルト
第3c層：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト
第3d層：黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂～シルト
第4a層：暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫～極粗粒砂と細粒砂質シルト
第4b層：灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂質シルト
第4c層：灰黄色(2.5Y5/1)細粒砂質シルト～シルト
第4d層：灰色(7.5Y5/1)シルト質粗粒～中粒砂
第5a層：灰色(10Y6/1)極粗粒～中粒砂
第5b層：灰オリーブ色(7.5Y5/3)極粗粒砂
0
3m
1：80

図4　東・北壁地層断面図

写真１　第２層検出の種子類
（1イネ、2イネ、3キク科、4ナデシコ科ハコベ属）

写真２　第２層検出のハエの囲蛹（いよう）

写真３　第3b層検出の種子類
（1キク科、2イネ、3ナデシコ科ハコベ属）

第1c層は調査区北部で確認される。褐色(7.5YR4/6)中粒砂質シルトからなり、最大層厚は45cmである。本層上面の遺構として豊臣期のSD01がある。

第２層：第2a・2b層に分けることができる。第2a層は灰色(7.5Y6/1)～褐色(7.5YR4/4)細粒砂からなる水成層である。調査区南部では厚さ約４cmほど植物遺体の集積があった。これを第2b層とする。単子葉類の葉やイネの籾殻、またナデシコ科ハコベ属やキク科の種子(写真１)が検出されたほか、イエバエ科、クロバエ科あるいはニクバエ科などの可能性をもつハエの囲蛹（いよう）(写真２)が集中して採取された(註１)。水田が放棄されたのち、低地部であった当地は排泄物・腐敗物などが堆積する環境にあったといえる。層中からは備前焼擂鉢・三巴文軒丸瓦６などが出土し、豊臣前期に属する。

図５　中世の遺構平面図

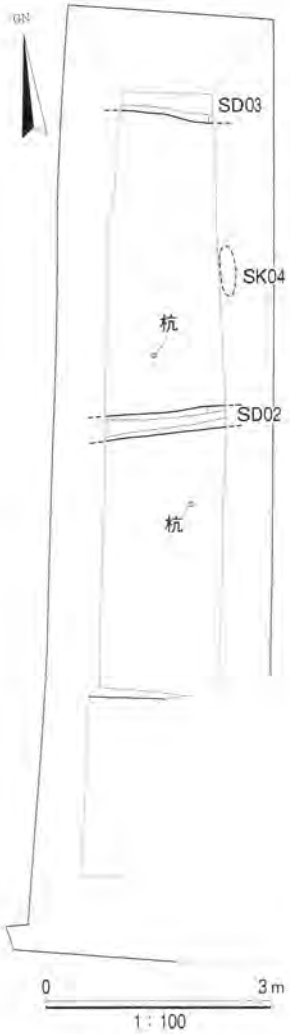


図６　豊臣前期の遺構平面図

第３層：大坂本願寺期～豊臣前期の作土層と自然堆積層で、第3a～3d層に区分できる。

第3a層は、黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は８～20cmである。直径３cm前後の粘土偽礫を含む。下部に薄い砂の堆積層がある。不均質に分級が悪くあまり耕されていないようである。中国産青花皿４・瀬戸美濃焼陶器皿・備前焼擂鉢などを包含する。

第3b層は褐灰色(10YR4/1)中礫混り中粒砂質シルトからなる作土層で、層厚12～18cmである。よく攪拌されている。中国産白磁碗・備前焼擂鉢などが出土する。土を持ち帰り水洗したところ、イネの籾殻のほか、水田や畔道などに生育するキク科タカサブ

ロウとみられる種子や、ナデシコ科ハコベ属とみられる種子などが検出されている(写真３)。

第3c層は、暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は６～12cmである。瓦質土器を包含する。本層の上面でSD02・SK04が検出されている。

第3d層は黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂～シルトからなる水成層である。層厚は２～10cmである。上部に平行ラミナの見られる砂が堆積し、下部はシルトからなり、逆級化している。備前焼擂鉢３が出土する。

第４層：中世までの自然堆積層と客土層および作土層で、第4a～4e層に分けることができる。

第4a層は、暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫～極粗粒砂と細粒砂質シルトからなる作土層である。黒色土器のほか、磨滅した土師器甕、須恵器甕・杯、須恵質の瓦などを含む。層厚12～35cmである。

第4b層は灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は20～40cmである。黒色土器のほか、磨滅した土師器甕や須恵器甕の破片を包含する。

第4c層は灰黄色(2.5Y5/1)細粒砂質シルト～シルトからなる作土層で、層厚は12～25cmである。北は細粒砂質シルト層であるが、南に向かってシルト層へと漸移している。表面が磨耗した重圏文軒平瓦２や土師器高杯、須恵器甕などが出土している。

第4d層は灰色(7.5Y5/1)シルト質粗粒～中粒砂からなる客土層で、層厚は18cm以上である。南に向かって下がっている。

第4e層は、地形の落込みの下部に堆積した黒色泥層である。調査区南西部に開けたトレンチでのみ確認された。黒色土器のほか、須恵器杯Ｈ１が出土する。

第５層：調査区北端の深掘りトレンチで確認された。周囲の段丘構成層の砕屑物が谷の中に再堆積した崖錐堆積層であるが、しまりのゆるい段丘構成層の可能性もある。第5a・5b層に分けることができる。第5a層は灰色(10Y6/1)極粗粒～中粒砂層で、分級が良い。層厚は14cmである。第5b層は灰オリーブ色(7.5Y5/3)極粗粒砂層で、層厚は50cm以上である。出土遺物はなく、堆積年代は不明である。

ⅱ)遺構と遺物

ａ．中世以前の遺物(図５・９)

第4a～4c層は中世の作土層であるが、明確な遺構は発見されなかった。しかし、第4d層上面で南に下る地形が検出されている。落込みの下部の泥層(第4e層)より古代から中世にかけての遺物が出土した。図示した遺物は須恵器杯Ｈ１である。蓋の可能性もある。７世紀前半頃とみられる。ほか細片のため図示しえなかったが、土師器片・須恵器甕および内黒の黒色土器などが出土している。

ｂ．豊臣前期の遺構(図６)

第3a～3c層は、第3d層の自然堆積層を耕起した豊臣前期の作土層である。第3c層上面で溝や杭などが検出された。

SD02　第3c層上面で検出された幅0.3m、深さ0.1m、長さ1.6m以上の溝で、西から東に流れていた。埋土は第3b層で埋められている。溝の南北より杭が検出された。出土遺物はない。

SD03　調査区北壁際、第3c層上面で検出された幅0.4m以上、深さ0.04m、長さ1.2m以上の溝であるが、地形の落込みの可能性もある。出土遺物はない。

SK04　第3c層上面で検出された南北0.7m、深さ0.4mの土壙である。調査区東壁の地層断面で確認

された。埋土は上下２層に分けることができる。上層は黒褐色(2.5Y5/1)中粒砂質シルトからなり、第3b層によって人為的に埋め戻された層である。下層は層厚６cmほどで、オリーブ黒色(5Y3/1)シルトが堆積する機能時堆積層である。出土遺物はない。

c．豊臣後期～徳川期以降の遺構(図７・８)

第1b・1c層は豊臣後期～徳川初期とみられる盛土である。OS13－15次調査の第3a～3c層、OS13－16次調査の第３・４層に相当する。OS13－16次調査で検出された落込みSX13を埋める盛土である。大坂町中屋敷替と関係する可能性もある。第1c層の上面で溝が検出されている。

SD01　調査区北部に位置する。幅0.6m、深さ0.3m、長さ1.7m以上の、西から東へ流れていた溝である。第1c層の上面より掘り込まれており、埋土は粗粒～細粒砂で速い水の流れによって堆積した

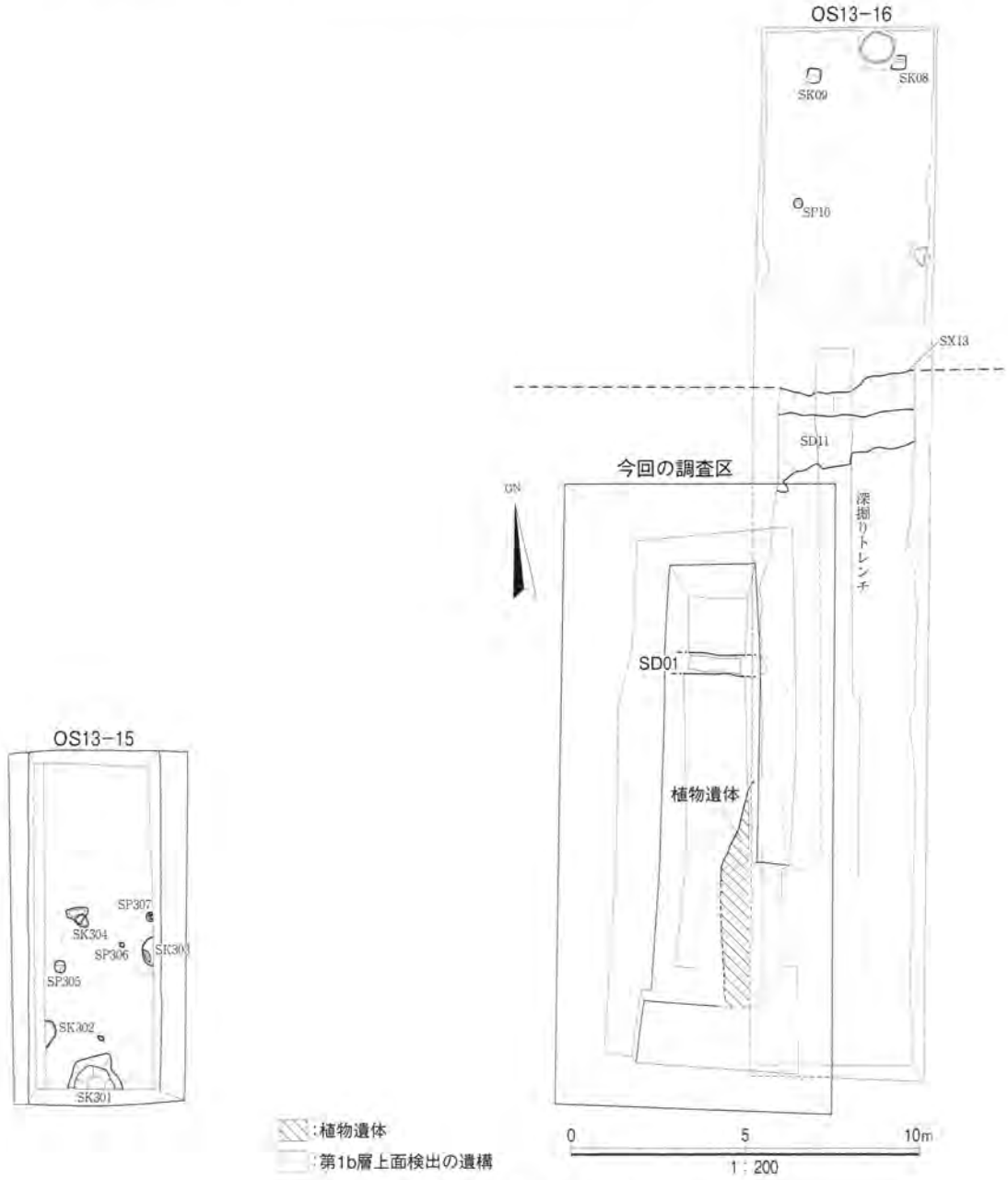


図７　豊臣後期～徳川初期の遺構平面図

とみられる。出土遺物は細片のため図示しえないが、瀬戸美濃焼陶器鉄釉碗と平瓦で、これらの遺物は豊臣期に属する。盛土を行う際、排水用に掘られた溝の可能性がある。

また、本調査区では削平のため検出できなかったが、第1b層上面の遺構として、OS13－15次調査およびOS13－16次調査では、溝や土壙などが検出されている。

第1a層は調査区南部にのみ確認できた。上面では瀬戸美濃焼磁器碗を含む近代の井戸SE05が確認されている。この第1a層に相当する近世の整地層の上面では、OS13－15次調査およびOS13－16次調査で18～19世紀代の遺構が検出されている。

d．各層出土の遺物(図９)

第4c層　図示した遺物は重圏文軒平瓦２である。全体的に著しく磨滅する。そのほか古墳時代の土

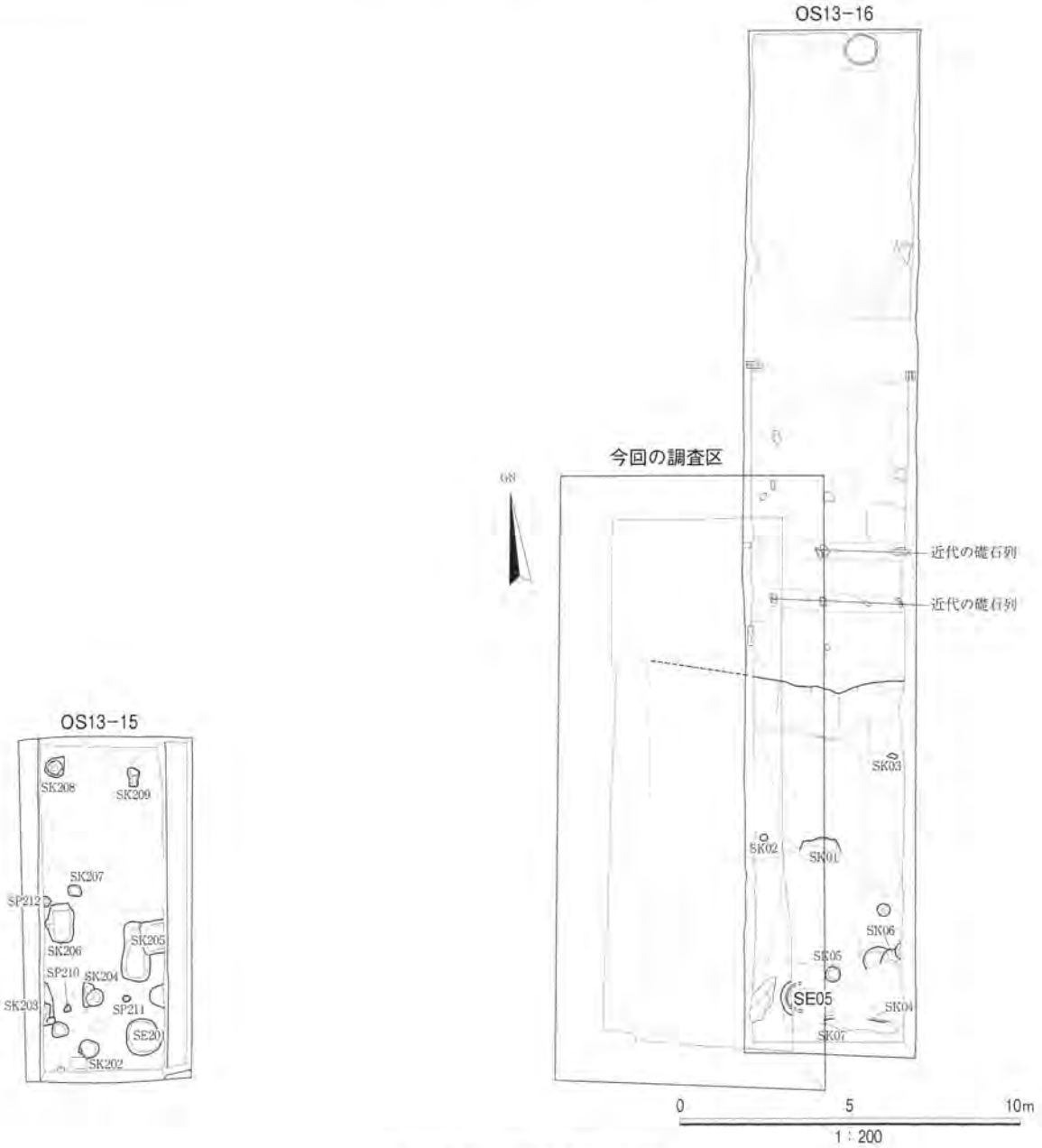


図８　近世～近代の遺構平面図

師器高杯や古代の須恵器甕なども出土している。

第3d層　図示した遺物は備前焼擂鉢3で、大坂本願寺期～豊臣期に属するとみられる。ほか、磨滅した土師器片や須恵器甕、瓦などが出土した。

第3b層　いずれも細片のため図示しえないが、土師器皿、口縁部が端反りとなる中国産白磁碗および瀬戸美濃焼皿・備前焼擂鉢などが出土した。

第3a層　図示した遺物は、漳州窯産の中国産青花皿4である。ほか、土師器皿、瓦質土器片、備前焼瓶類・擂鉢・甕、内禿の瀬戸美濃焼皿、丸瓦・平瓦・塼、砥石などが出土した。

第３層　第３層として取り上げた遺物に、瓦質土器火入5がある。浅鉢型で口縁部内面に櫛状工具による波状文が見られる。口縁部外面には波状の凸帯を貼り付ける。同様の波状の凸帯を備えた瓦質土器の火入は、堺環濠都市遺跡で16世紀後葉頃に見られる[土山健史1989]。

これら、第３層の各層から出土した遺物は肥前陶器を含まず、混入した土師器・須恵器を除けば、大坂本願寺期～豊臣前期に属する。

第２層　三巴文軒丸瓦6を図示した。内区は左巻きで、珠文数は16である。旧中央体育館(現大阪歴史博物館・NHK)のNW89－１次調査で出土した豊臣前期の三巴文軒丸瓦3573[黒田慶一1992]と同笵の可能性が高い。6は3573よりも笵傷が進んでいることから、より後出の資料といえる。ほか、備前焼擂鉢などが出土している。

第1b層　出土遺物は平瓦・丸瓦が中心である。そのほか、埋土の上部からは丹波焼擂鉢が出土している。図示した遺物は、丹波焼擂鉢7である。５条一単位の擂目を持ち、徳川初期に属する。

ｅ．遺構・遺物と地形の考察(図10)

第4e層から出土した須恵器杯Ｈ１は難波宮下層の時期のものであり、調査地東側に位置するOS96－22次調査地で、台地の上部で同時期の建物跡が見つかっている。一方、本調査区の第4a～4c層で出土した飛鳥・奈良時代の土師器や須恵器・瓦は、本来下層に堆積していた遺物が耕作による攪拌で巻き上げられたものか、近隣の台地を削って盛土された際に持ち込まれたものとみられる。いずれも表面の磨滅が著しい。第4c層からは重圏文軒平瓦２も出土しているが、近接地で後期難波宮期の遺構

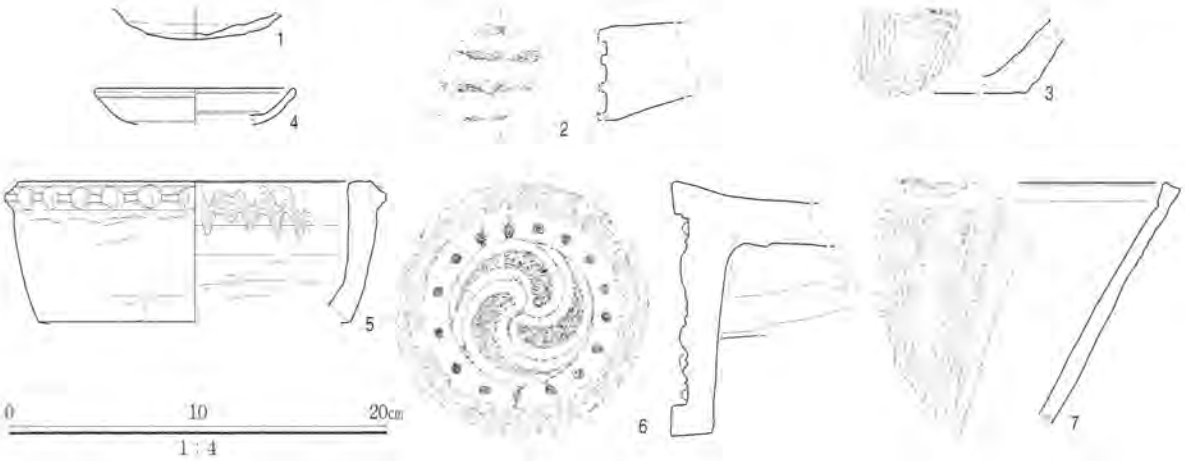


図９　出土遺物実測図

第4e層(１)、第4c層(２)、第3d層(３)、第3a層(４)、第３層(５)、第２層(６)、第1b層(７)

は検出されていない。中世に耕作地の客土として持ち込まれた可能性がある。

なお、調査地東側のOS96－22次調査地では、７世紀中頃とされる整地層が検出されている。難波宮下層の時期から後期難波宮期において、本調査地は谷となっていたといえるが、谷頭の北部（OS96－22次調査地）は部分的に整地されていたとみられる。こうしたことから、難波宮の南方、推定朱雀大路のすぐ西方に開口したままの谷があった可能性が高い。調査地より70m南に位置するOS07－２次調査では、TP＋16.4～16.5m付近で地山が確認されている［大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008］。OS07－２次調査地より手前でこの谷は終わるとみられる。

また、OS13－16次調査で、この谷の谷頭の落込み（SX13）が検出されたときは、急激な傾斜から人為的なものと考えられたが、今回の調査の堆積状況などから、自然の谷である可能性が高くなったといえる。

図10　清水谷周辺の地形復元

［大阪市文化財協会2002、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008］より一部追加・改変

3)まとめ

今回の調査において、本調査地は、古代には開口した谷であった可能性が指摘できた。中世以降は耕作地として利用され、洪水などでの中断はみられるものの、大坂本願寺期～豊臣前期も継続して耕作地として存在したようである。作土層からはイネの籾殻や水田雑草とみられる種子などが検出されている。その後豊臣前期の後半にこの地は耕作が放棄され、蛆が繁殖するトイレあるいは廃棄場のような環境となる。豊臣後期～徳川初期には大規模な盛土を行い谷を埋め、以降周辺は町屋となっていったといえる。

註)

(1)調査地より採取した種子・昆虫類については、大阪市立自然史博物館金沢至氏・塚腰実氏・横川昌史氏に同定・ご助言をいただきました。感謝申し上げます。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「大坂城跡発掘調査(OS07－2)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.63－68

大阪市文化財協会1999、「大坂城跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1996年度－』、pp.144－148

2002、「清水谷地区の調査」:『大坂城跡Ⅵ』、pp.219－233

大阪文化財研究所2013:『天王寺区清水谷町における建設工事(店舗)に伴う大坂城跡発掘調査(OS13－16)報告書』

黒田慶一1992、「瓦塼類」:『難波宮址の研究』第九、pp.187－224

土山健史1989、「堺環濠都市遺跡における、15・16世紀の在地土器」:『中近世土器の基礎研究』V、pp.37－59

調査区北・東壁地層断面
（南西から）

深掘りトレンチ
（南西から）

第3a層上面検出の遺構
（北から）

天王寺区逢阪一丁目106－１・106－２における建設工事に伴う
伶人町遺跡発掘調査(RJ14－１)報告書

調 査 個 所	大阪市天王寺区逢阪１丁目106－１・106－２
調 査 面 積	144㎡
調 査 期 間	平成27年１月19日～２月２日
調 査 主 体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、趙哲済、絹川一徳

1)調査に至る経緯と経過

伶人町遺跡は上町台地と大阪海岸低地に跨る遺跡であり、6世紀末の建立と伝えられる四天王寺の西に位置する。四天王寺の門前に繁栄した集落遺跡と考えられている。四天王寺旧境内遺跡の谷町筋を挟んで西側の上町台地上では、古代～中世の遺構・遺物が見つかっている。8世紀に遡る遺構・遺物はRJ05－2次調査地や大阪星光学院内の調査地で[大阪市文化財協会2006、西近畿文化財研究所2006]、また、古代末～中世後期の遺構・遺物は多く、RJ96－2・02－5・05－2・12－1次調査地、大阪星光学院内などで見つかっている(図1)。一方、台地下の海岸低地では集落跡は見つかっていないが、松屋町筋の西側のRJ08－3・4・5次調査地などで古代後期から中世にかけての遺物包含層が見つかっており、耕地であったと考えられている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998・2006・2010a・b、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、大阪市文化財協会2003]。

本調査地は上述の台地上と海岸低地の中間地の台地斜面上にあり、斜面に並ぶ天王寺七坂のひとつの天神坂に面している。大阪市教育委員会が行った試掘調査で、地表下1.6m以下の深さに中世と考えられる遺構面および遺物包含層が検出された結果を受けて、本調査が実施されることになった。

調査は準備工に続いて平成27年1月19日に開始した。地表下1.6mまでを重機で掘削し、後述する第2層上面の検出作業から地表下約3mまでを人力により掘り下げ、遺構・遺物の検出、平面図・断面図の記録などを行った。調査は2月2日に終了し、撤収した。

本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。本報告の遺物の観察および記述は研究所学芸員小田木富慈美による。

図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

2)調査の結果

i)地形と層序

調査地は上町台地の西斜面にあり、前面の天神坂は調査地の北東端でTP+13.5m、北西端でTP+8.9mで西へ傾斜する急な坂道である。調査地の標高はTP+12.9～12.5mで北西へ緩く傾斜している。現代盛土・整地層を第0層とし、これを含めて地表下3m付近までを7層に区分した。第1層が溜池の最終埋立て層であり、第2～5層が溜池内の堆積層、第6層が基盤層である(図3・4、図版1)。

第0層は現代盛土・整地層で層厚は40～80cm、複数回の客土が行われており、層内に何面かの旧地表面が確認できる。

第1層は灰～オリーブ黒色(10Y5～3/1)・黒色(10YR2/1)・黒褐色(2.5Y3/1)などの第3層の腐植質シルト偽礫・第6層のシルト偽礫・礫・砂・シルト・焼土などが混在する溜池の埋立層である。最大層厚は140cmあり、6枚以上の客土層が積み上げられている。

第2層は浅く湿地に移り変わった溜池の最終堆積層である。3層に区分した。

第2a層は黒褐色(2.5Y3/1)有機質シルト～粘土層であり、1枚の極粗粒～細粒砂の薄層や2枚の腐植物のラミナを挟んでいる。砂薄層から上位は上方細粒化する。層厚は15cm以下である。

第2b・c層は黒褐～黒色(2.5Y3/1-2/1)有機質細粒シルト～粘土層であり、層厚20～30cmである。土色の濃淡により、下半部10～15cmの黒色の部分を第2c層、上半部の灰～黒褐～暗褐色の部分を第2b層に区分した。

第2層からは明治30年代以降の遺物が出土している。

第3層はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土層である。後述するSX03が盛られて後に堆積した粘土層である。層厚は40～60cmであった。

第4層はオリーブ褐～オリーブ黒色(2.4Y4/4～7.5Y3/1)で第6層のシルト偽礫を主体とする偽礫・砂質泥からなる盛土層であり、盛土SX03を構成する。層厚は100～150cmであった。幕末～明治時代初頭に属する肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器のほか、瀬戸美濃焼陶器・関西系陶器・堺産陶器・丹波焼・土師器・瓦が出土している。

第5層はオリーブ黒色(5～7.5Y3/1)粘土層である。層厚は20～86cmで後述する溜池SX02の段下で

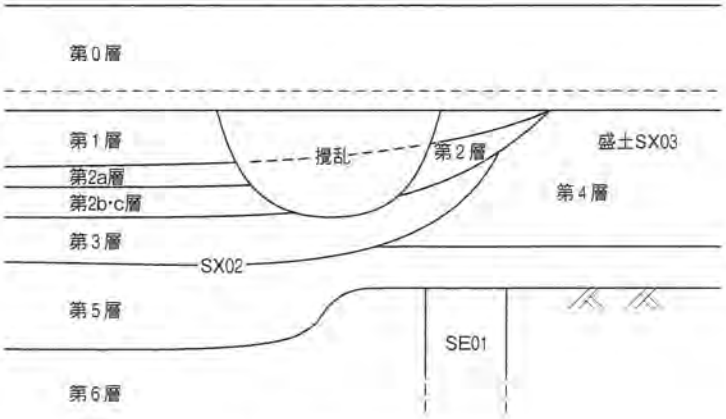


図3　地層と遺構の関係図

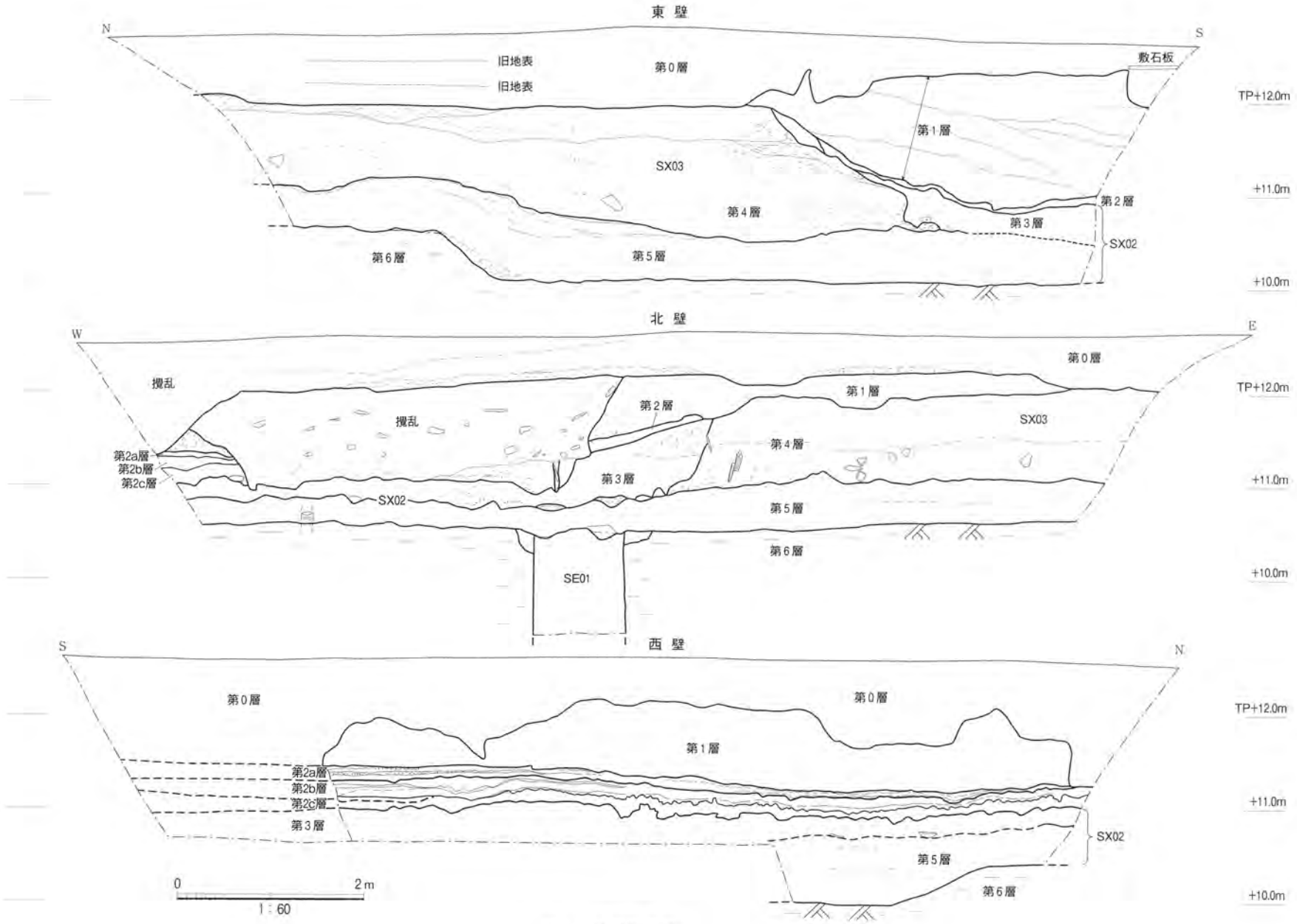

東 壁
N
S
旧地表
旧地表
第0層
敷石板
TP+12.0m
第1層
SX03
+11.0m
第4層
第2層
第3層
SX02
第6層
第5層
+10.0m
北 壁
W
E
第0層
撹乱
TP+12.0m
第1層
第2層
撹乱
SX03
第4層
第2a層
第2b層
第2c層
第3層
+11.0m
SX02
第5層
第6層
SE01
+10.0m
西 壁
S
N
第0層
第0層
TP+12.0m
第1層
第2a層
第2b層
第2c層
+11.0m
第3層
SX02
第5層
第6層
+10.0m
0
2m
1：60

図4　地層断面図

厚く、段上で薄い。層中の２層準に葉や朽ちた植物片からなる多数のラミナが挟まれており、わずかに中礫混りの最下部２cmは平行ラミナであるが、上部層準に含まれる平行ラミナは波状に変形している。後述するように、第５層から19世紀前～中葉の陶磁器などが出土していることからみて、このラミナ変形は1854年の安政南海地震の揺れによる可能性がある。

第６層は締りのよいオリーブ灰色(5GY5/1)シルトの基盤層である。岩相と分布高度から大阪層群のMa9層と推定される。鉛直の摂理が発達し、その方向はN2° W ～N10° E(中央値N7° E)が優勢で、これに斜交するN19・35° W方向がある。

ⅱ)遺構と遺物

a．古代・中世の遺物(図７)

後述するSE01から古代・中世の瓦が遊離資料として出土した。８は井戸側内から出土した古代の平瓦で、凸面に縄目タタキ、凹面に布目圧痕を有する。掘形内からも中世の平瓦が出土している。

b．近世の遺構と遺物(図５・７)

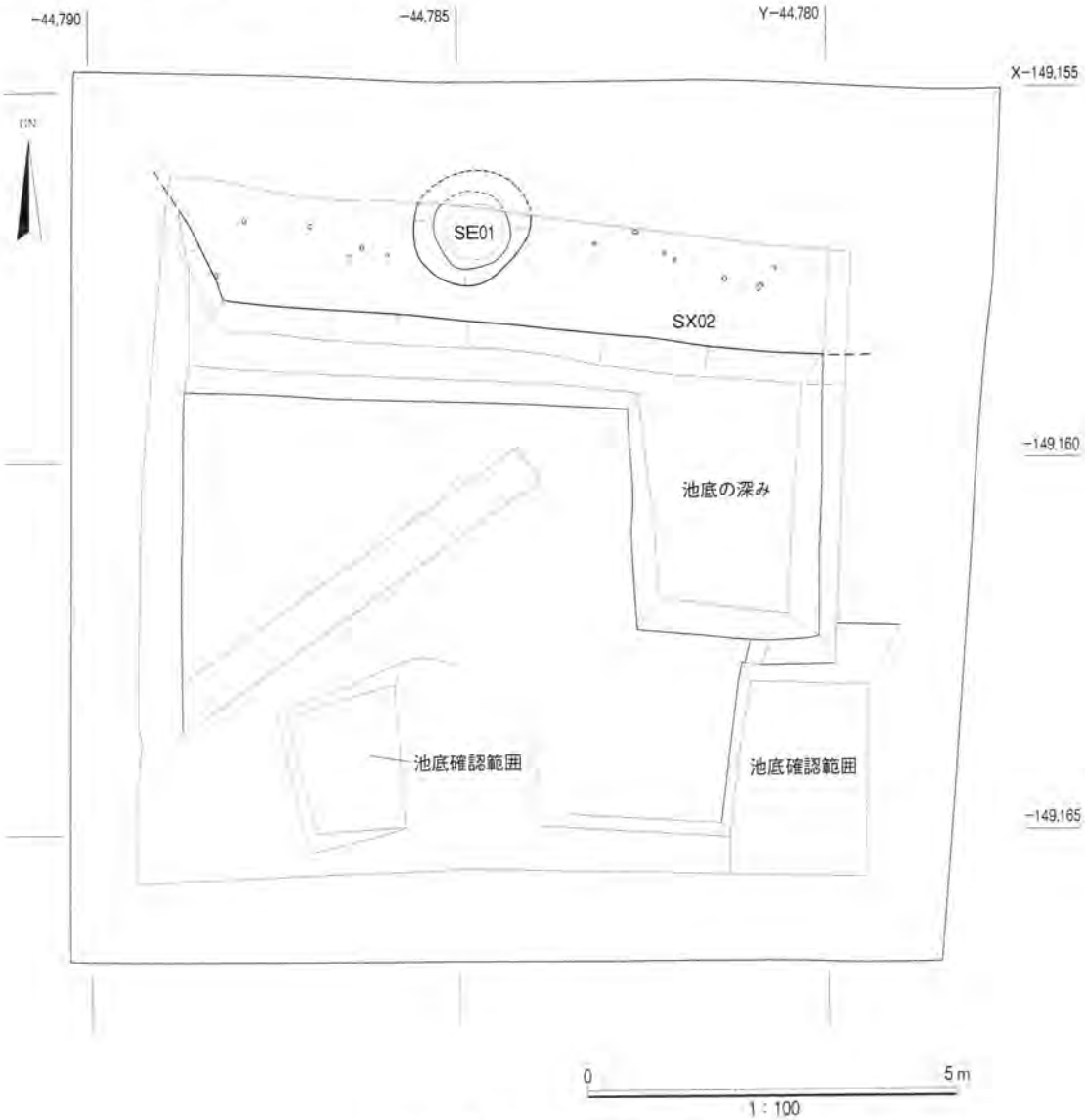


図５　第６層上面の遺構平面図

SE01は第６層上面で検出した直径1.1mの井戸である。掘形の径は1.5～1.6mでやや歪で、検出面から下約20cmまで掘形がある。井戸側があったと思われるが、池の掘削時に抜き取られたものと思われる。深さは1.1m以上で下底は未確認である。また、検出面も多少なりとも削剥されていると思われる。掘形の埋土は第６層偽礫で基質は灰色泥、井戸側内埋土は軟弱な泥である。肥前磁器のほか、備前焼・瀬戸美濃焼・丹波焼・関西系陶器・赤膚焼・土師器・瓦が出土した。掘形内からは１～４・７が出土した。１は肥前白磁の猪口で、口縁部が輪花となる。同じく２は肥前磁器の染付小広東碗である。外面には網目文を施す。３・４は関西系陶器の碗である。３は底部内面にイッチンで「福」字を記す。７は丹波焼の擂鉢で、17世紀後半のものであろう。井戸側内から出土した５・６は赤膚焼の色絵皿である。透明釉を施し、内面には瓢箪を上絵付けする。高台脇には瓢箪形の枠内に「赤ハタ」の刻印を有する。以上は１・７を除き、18世紀末～19世紀前葉に属するので、SE01の掘削時期も19世紀前葉を遠く遡らないであろう。

c．近代初頭の遺構と遺物（図５～８・図版１・２）

図６　第２層上面の遺構平面図

SX02は溜池である(図５)。調査区北辺近くに直線的な東西の段があり、高低さ0.5mで南側が低くなっている。検出した範囲で池底の深みはTP+10.04～9.96mであるが、深み部分は概ね平坦とみられる。最深部は調査区西北部、段が北西方向に曲がりかける付近の底にある。段の北西方向は池の出水口の方向を示唆するのであろう。段の北側の浅い底には細い杭が多数打たれていた。

SX02の深み側の池底堆積層(第５層)からは、肥前磁器・関西系磁器・瀬戸美濃焼磁器・三田青磁のほか、肥前陶器・関西系陶器・産地不明陶器・土師器・瓦が出土した(図８)。９～11は瀬戸美濃焼磁器の染付である。９は端反碗の蓋、10･11は端反碗である。12は関西系磁器の染付で、端反碗である。内面には蝙蝠文、外面には寿字文を施す。13～15は肥前磁器の染付である。13は小広東碗で、SE01出土の２と同一の器形と文様である。14は円筒形の油壺である。15は段重の蓋である。16・17は三田青磁の皿である。口縁部は輪花で、鶴文様を型押しする。18～22は関西系陶器の碗である。18は外面に鶴を描く。19～22は底部内面中央にイッチンと鉄絵で「福」字を描くもので、SE01からも同一器形・文様の碗３が出土している。23は産地不明陶器の皿で、平面形が酒壺形を呈する。内面中央には型押し文様で「男山」と刻印される。伊丹名産の酒名にちなんだものの可能性がある。24～26は土師器の灯明皿である。底部外面は糸切りする。27は三巴文軒丸瓦である。28・29は唐草文軒桟瓦で、29は丸瓦部分が剥落している。以上は19世紀前～中葉のものであり、SX02が近世末頃に掘られた溜め池と推定される。

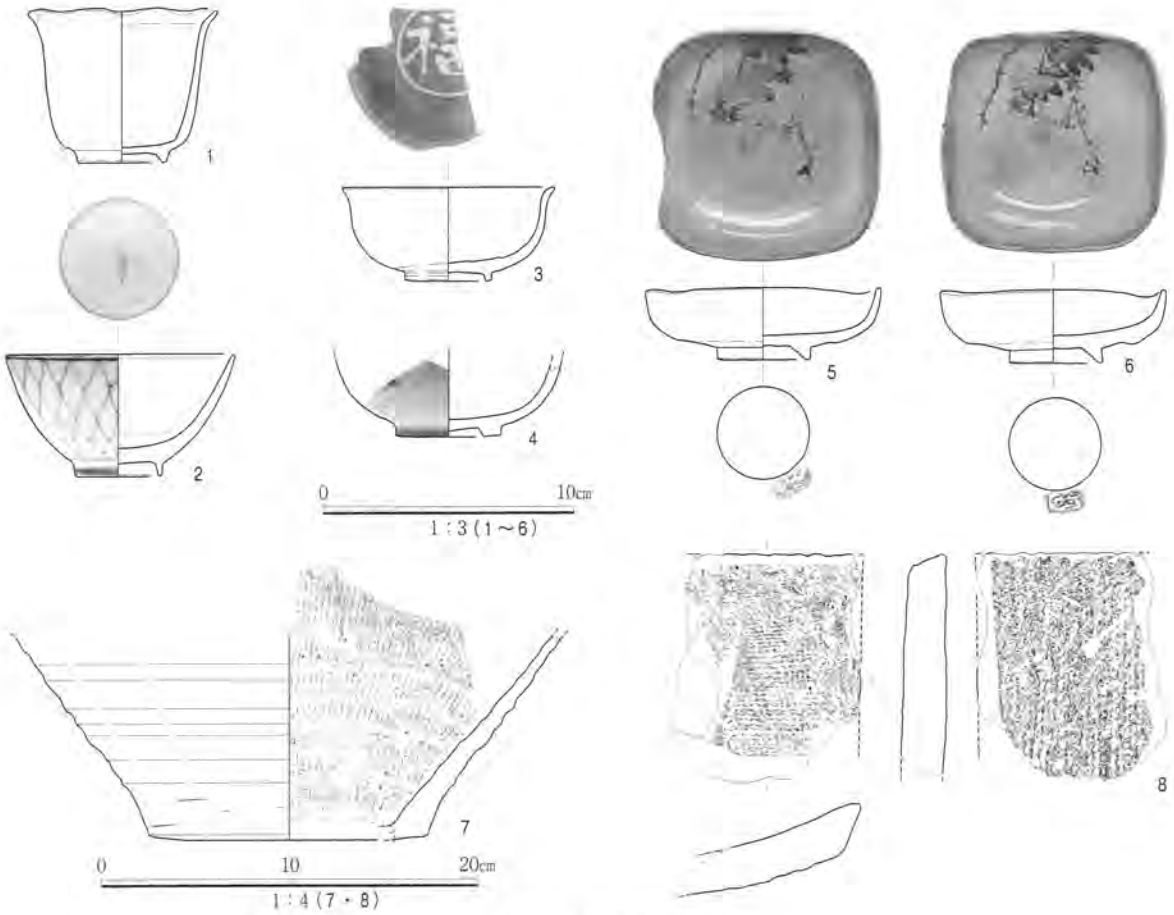


図７　SE01出土遺物実測図

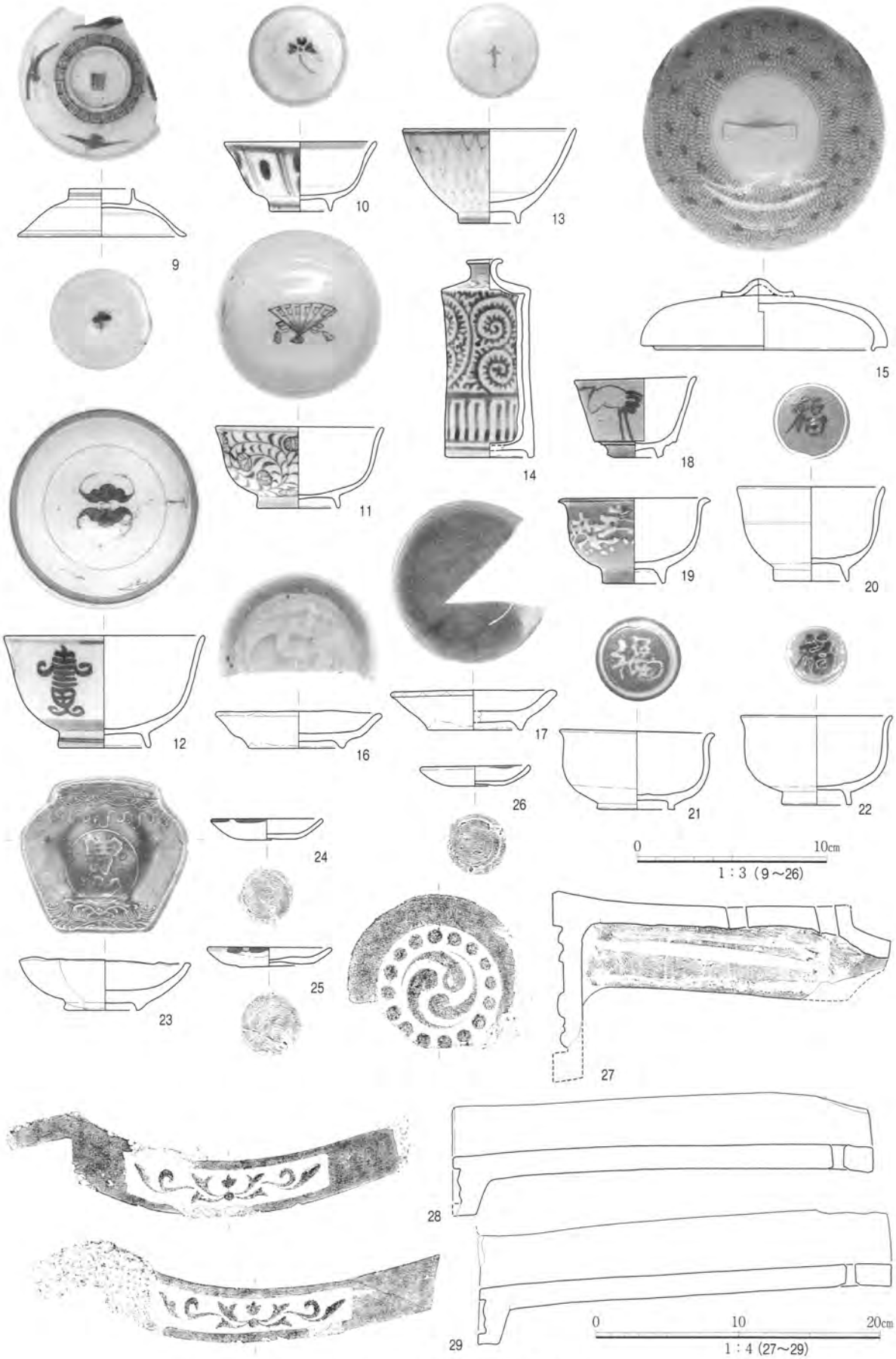


図８　第５層出土遺物実測図

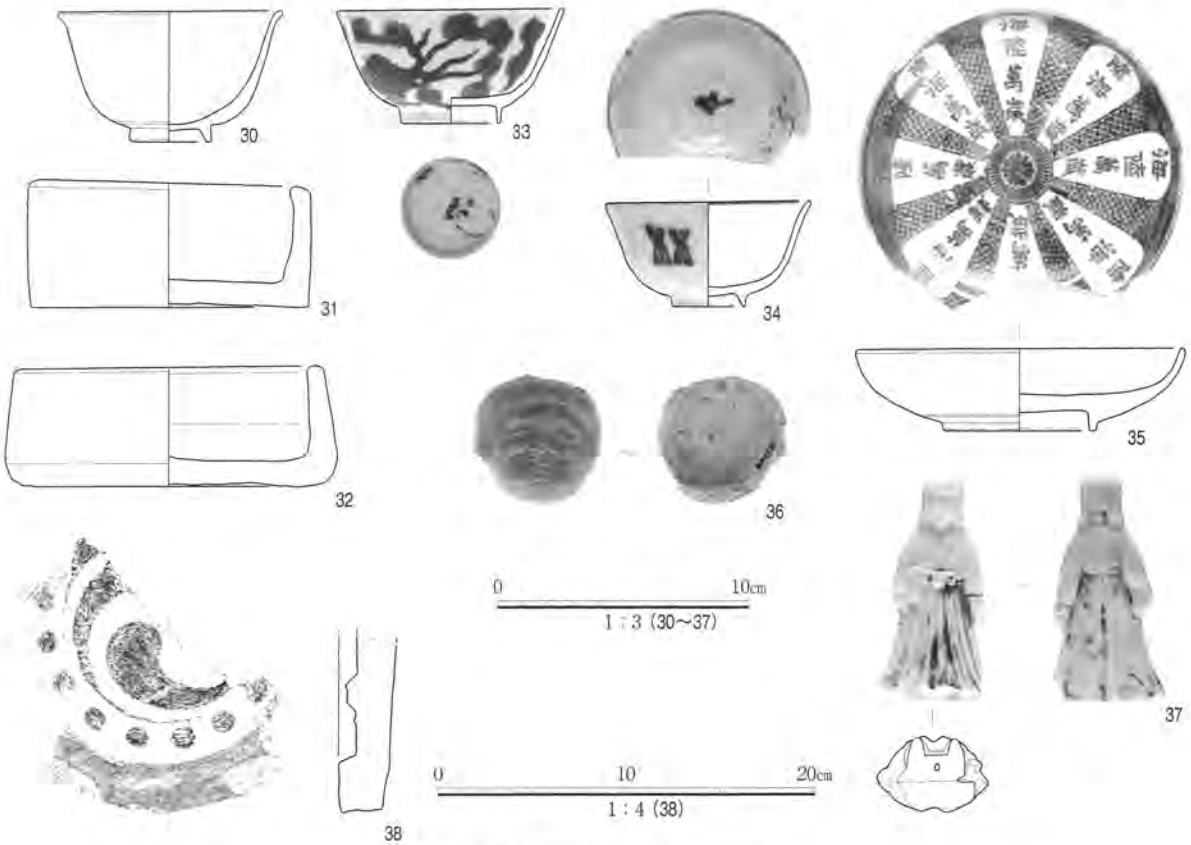


図９　第４層以上出土遺物実測図

第４層(30・31・38)、第2c層(32)、第2a層(33・35・36)、第2c ～0層(34・37)

SX03は池を一部埋め立てた際の盛土である(図６)。高さは池の段上で0.8～1.0m、池の深みで1.5mほどある。盛土の下面は深み側で0.5mほど深く、盛土時に圧密を受けて自沈したか、軟弱な堆積物の厚い深み側に流動したものと思われる。盛土は西辺が直線的で南辺が歪であるが、第３層の分布からみると、本来は南辺も直線的で、全体として四角い盛土の丸みのある南西コーナー部分を検出したとみられる。盛土(第４層)からは幕末～明治時代初頭に属する陶磁器などが出土している(図９)。30・31・38は第４層(盛土SX03)から出土した。30は関西系陶器の端反碗で、透明釉を施す。31は堺産の火入れである。38は三巴文軒丸瓦である。

ｄ．包含層出土の遺物(図９)

32は第2c層から出土した堺産の火入れで、31と類似する。33・35・36は第2a層から出土した。33は中国産青花の碗で、外面には金魚と水草の文様を施す。底部外面には判読不能の銘を有する。35は関西系磁器と思われる皿で、型紙摺りで「陸海萬歳」・「海陸萬歳」の文字と文様を施す。明治20～30年代で、日本軍に関連する記念皿であろう。36は土人形で顔の破片である。34・37は第2c ～０層より出土した。34は瀬戸美濃焼磁器の染付碗で、外面には合成コバルト呉須による篆書文を施す。37は磁器の人形で、袴姿の女学生である。

３)まとめ

当初期待された中世の遺構面は見つからなかったが、古代・中世の瓦が出土しており、近隣に当該

期の生活痕跡があったのであろう。また、近世末から近代にかけての溜池が見つかり、明治期の地形図に載る池の存在が確認された。この池は近世末に開削されたと考えられ、池が開削される直前まで使われていたらしい井戸も見つかった。

第5層中に認められるラミナ変形は、遺物の年代から、安政南海地震の揺れによる可能性を指摘できる。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「大阪早稲田速記秘書専門学校による建設工事に伴う発掘調査(RJ96－2)」:『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83－87

2006、「伶人町遺跡発掘調査(RJ05－2)報告書」:『平成17年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.39－55

2010a、「天王寺区伶人町における建設工事に伴う伶人町遺跡発掘調査(RJ08－2)報告書」:『平成20年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.37－42

2010b、「浪速区下寺二丁目における埋蔵文化財発掘調査(RJ08－3)報告書」・「浪速区下寺三丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(南区)(RJ08－4)報告書」・「浪速区下寺二丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(西区)(RJ08－5)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.391－448

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「天王寺区逢阪一丁目における建設工事に伴う伶人町遺跡発掘調査(RJ12－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』、pp.345－364

大阪市文化財協会2003、「伶人町遺跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―2001・2002年度―』、pp.13－16

西近畿文化財研究所2006、『伶人町遺跡発掘調査概要報告書』、84ps.

地層断面
（南から）

池底の深み
（SX02：東から）

池底の深み
（SX02：西から）

SE01
（南から）

池を埋め立てた盛土と
池底（第３層上面）の泥
（北から）

天王寺区国分町２－８他における建設工事に伴う
摂津国分寺跡発掘調査(SK14－１)報告書

調 査 個 所	大阪市天王寺区国分町２－８・２－９・２－10－１
調 査 面 積	78㎡
調 査 期 間	平成26年10月28日～11月６日
調 査 主 体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、田中裕子

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は奈良時代の寺院遺跡とされる摂津国分寺跡の北部に位置する。周辺ではこれまで10件の発掘調査が行われ古代から近世の遺構・遺物が検出されている。SK88－5・96－9次調査地では国分寺創建瓦の型式である均整唐草文軒平瓦が出土している[大阪市文化財協会1988、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998]。調査地の北側に隣接するSK10－1次地点では近代の包含層の中から古代の須恵器や瓦が出土している。また、東西方向の杭列や溝が検出されており、国分寺の寺域に係る可能性が指摘されている[大阪文化財研究所2012]。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下0.5m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする中世と考えられる遺物包含層が検出され、本調査を実施する運びとなった。

調査は10月28日より着手し、敷地の中央部南寄りに東西13m、南北6m、78㎡の調査区を設置した。地表下0.5mまで重機で掘削したのち、以下を人力で掘り下げた。遺構の検出、遺物の取り上げを行い、11月5日に記録作成などの調査作業を完了し、11月6日には埋戻しを含むすべての作業を完了した。

本報告で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP＋○mと表記した。また、方位は現場で記録した街区図を1／2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

2)調査の成果

i)層序(図3・4)

調査地周辺の標高は7～8mであり、南西部に位置する現在の臨済宗天徳山国分寺に向かって高くなる地形をしている。

図1　調査地位置図

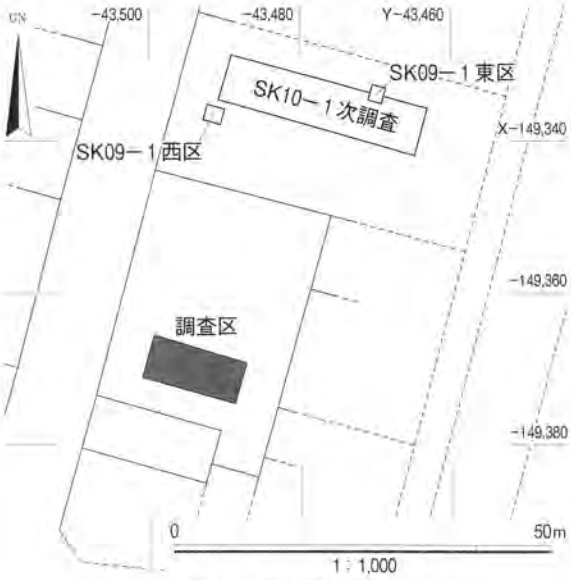


図2　調査区配置図

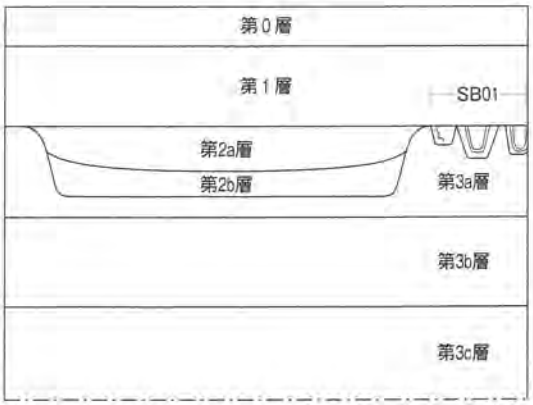


図3　遺構と地層の関係図

現地表下1.6mまでの地層を観察し、第0～3層に区分した。

第0層　バラスからなり、層厚8～36cmである。

第1層　オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒～中粒砂からなる現代の盛土である。層厚5～60cmである。

第2層　18世紀後葉の土採り穴の埋土であり、第2a・2b層に分けることができる。

第2a層はにぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂質シルトからなる偽礫を主体とし、層厚6～22cmである。近世丸瓦・平瓦のほか、奈良時代の須恵器・瓦などを包含する。

第2b層はわずかに粗粒砂が混る浅黄色(5Y7/4)極細粒砂質シルトからなり、層厚4～22cmである。近世丸瓦・平瓦のほか、黒色土器・瓦器を含む。

第3層　段丘構成層であり、逆級化構造をしている。本調査地周辺の地山層である。第3a～3c層に分けることができる。第3b・3c層は調査区北部の防空壕(SK02)の壁面で確認した。

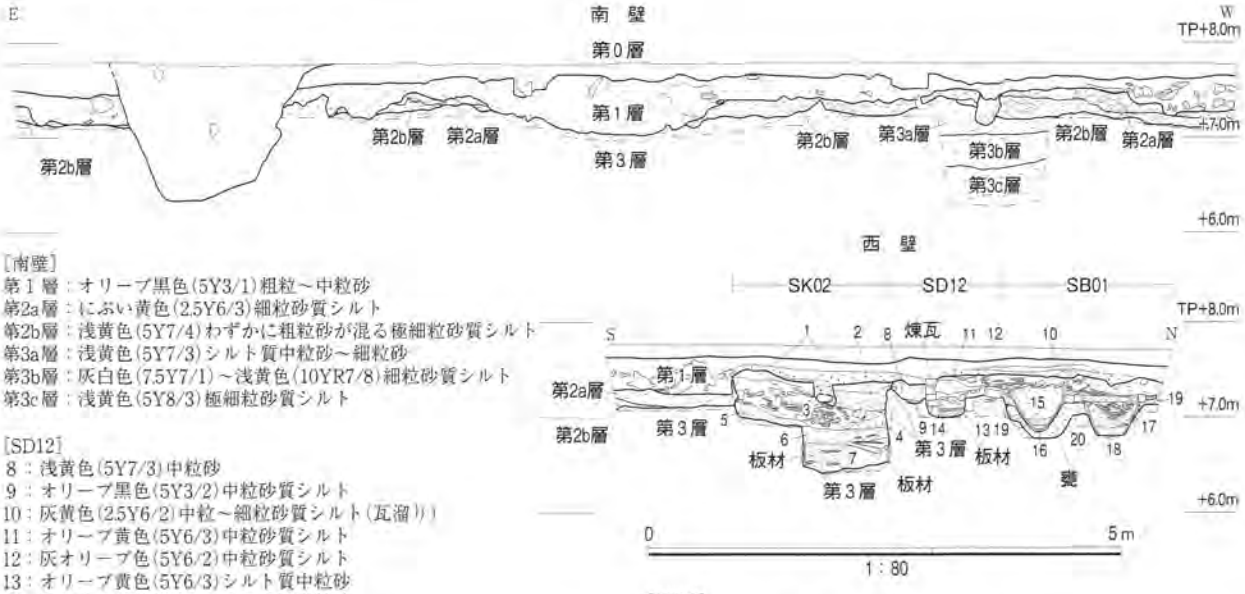
第3a層は浅黄色(5Y7/3)シルト質中粒～細粒砂からなり、層厚12～40cmである。

第3b層は灰白(7.5Y7/1)～浅黄色(10YR7/8)細粒砂質シルトからなり、層厚18cmである。

第3c層は浅黄色(5Y8/3)極細粒砂質シルトからなり、層厚40cm以上である。

ⅱ)遺構と遺物

a．近世の遺構(図5・7)



[南壁]
第1層：オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒～中粒砂
第2a層：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂質シルト
第2b層：浅黄色(5Y7/4)わずかに粗粒砂が混る極細粒砂質シルト
第3a層：浅黄色(5Y7/3)シルト質中粒砂～細粒砂
第3b層：灰白色(7.5Y7/1)～浅黄色(10YR7/8)細粒砂質シルト
第3c層：浅黄色(5Y8/3)極細粒砂質シルト

[SD12]
8：浅黄色(5Y7/3)中粒砂
9：オリーブ黒色(5Y3/2)中粒砂質シルト
10：灰黄色(2.5Y6/2)中粒～細粒砂質シルト(瓦溜り)
11：オリーブ黄色(5Y6/3)中粒砂質シルト
12：灰オリーブ色(5Y6/2)中粒砂質シルト
13：オリーブ黄色(5Y6/3)シルト質中粒砂
14：灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質中粒砂

[SB01]
15：浅黄色(2.5Y7/3)粗粒砂が混る中粒砂質シルト
16：浅黄色(2.5Y7/3)中粒砂質シルト(機能時堆積層)
17：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂質シルト
18：にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒～細粒砂(機能時堆積層)
19：灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂
20：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂質シルト

[SK02]
1：灰オリーブ色(5Y4/2)中粒砂
2：オリーブ黄色(5Y6/4)シルト質中粒砂
3：灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂質シルト(瓦溜り)
4：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質中粒砂
5：浅黄色(5Y7/4)中粒砂質シルト
6：浅黄色(5Y7/4)シルト質中粒砂
7：浅黄色(5Y7/4)細粒砂

図4　南・西壁地層断面図

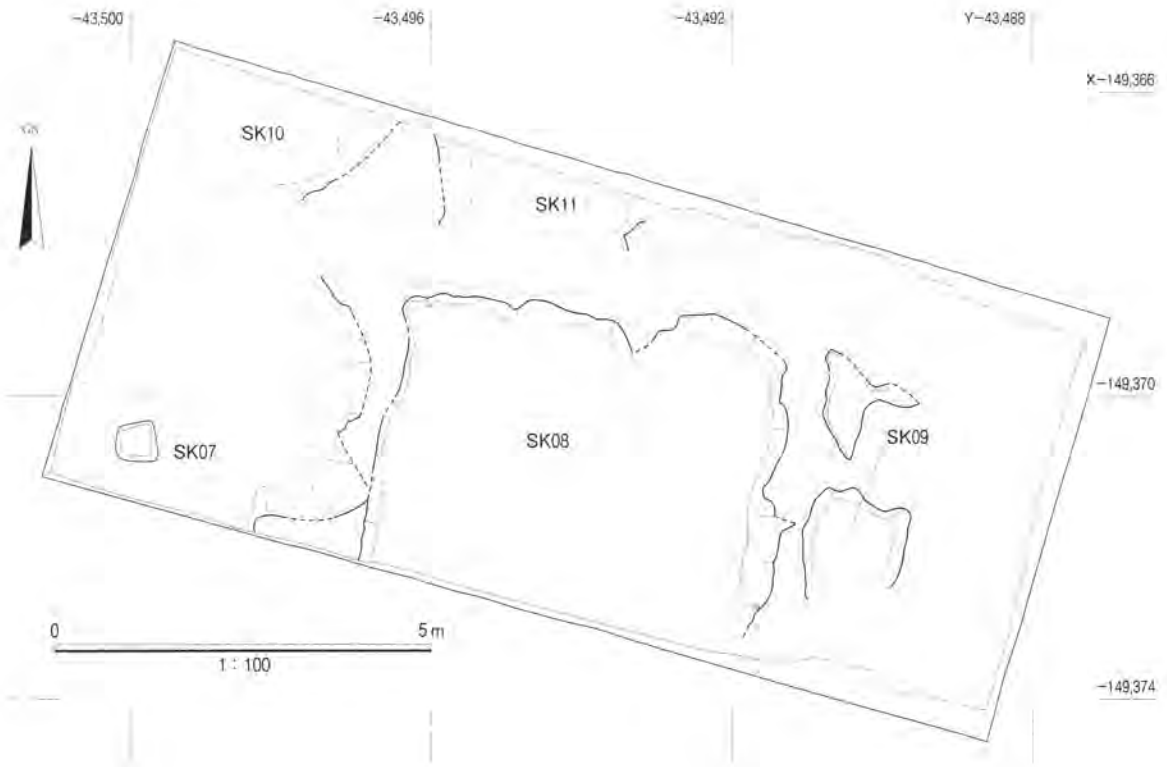


図５　近世(第３層上面)の遺構平面図

第３層の上面でSK07～11を検出した。

SK07　東西4.0m以上、南北3.5m以上、深さ0.2mの方形の土壙である。中央部がさらに東西0.6m、南北0.5mで窪んでいる。北側のSK10と一連の遺構の可能性もある。埋土は上下二層に分けることができる。上層の第2a層はにぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂質シルトの偽礫層で、下層の第2b層はわずかに粗粒砂が混る浅黄色(5Y7/3)極細粒砂質シルト層である。機能時堆積層をもたず、掘った直後に埋め戻されたとみられることから、本土壙は土採り穴とみられる。なお埋土上層(第2a層)のにぶい黄色細粒砂質シルトの偽礫から古代の瓦や須恵器が出土しており、古代の整地層か遺構埋土に由来する可能性がある。

図示した遺物のうち１は近世の橘唐草文軒平瓦である。18世紀後葉頃とみられる。そのほか上層(第2b層)から須恵器杯B２、布目瓦３～５が出土した。２は７世紀後葉～８世紀初頭、３は丸瓦、４・５は一枚作りの平瓦で奈良時代のものとみられる。

SK08　東西5.5m、南北4.5m以上の方形の土壙である。埋土はSK07同様上下二層に分けることができ、それぞれ第2a、2b層に相当する。いずれも小片のため図示しえないが、近世の平瓦のほか、須恵器杯・布目瓦などの古代の遺物、瓦器椀など中世の遺物が出土した。

SK09～11も規模は小さいが同様の遺構である。SK10からは18世紀後葉頃に属する橘唐草文軒平瓦６が出土した。

これらの土壙はいずれも土採り穴であり、18世紀後葉以降のものである。

ｂ．近代・現代の遺構と遺物(図６・７)

第２・３層の上面でSB01・SK02～06を検出した。

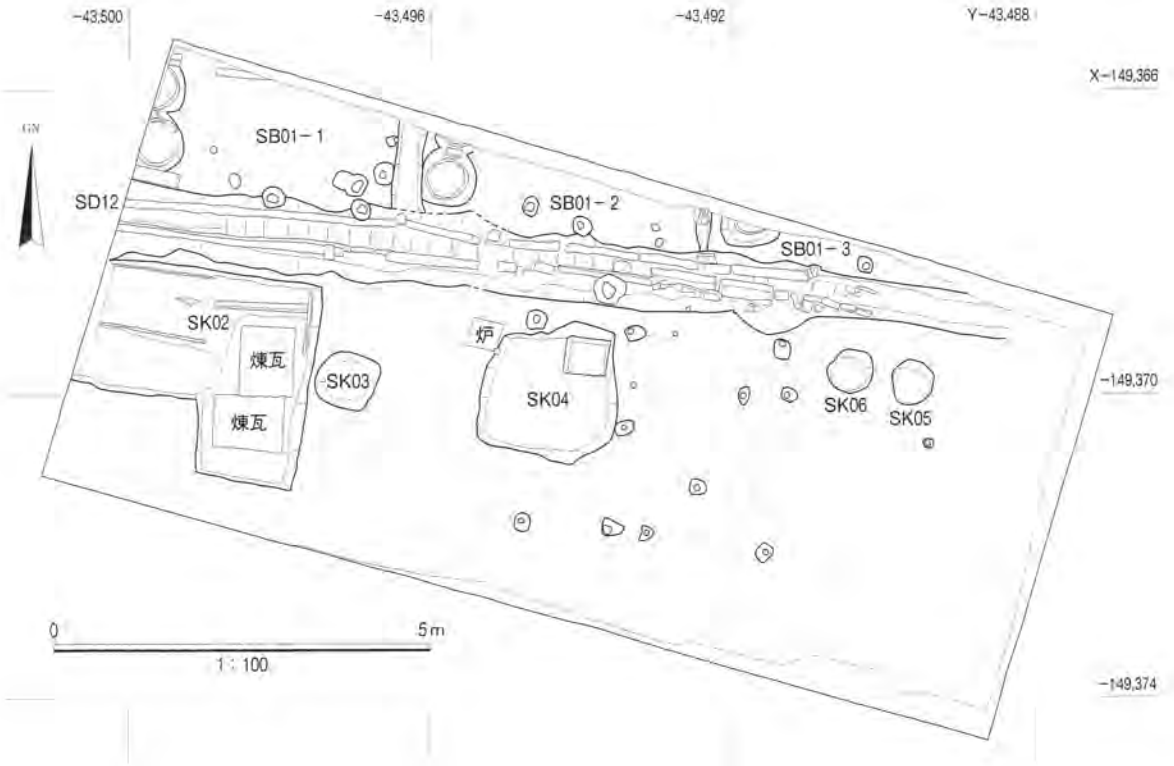


図6　近現代(第2層上面)の遺構平面図

SB01　調査区北部では1棟に3戸以上が連なる長屋建物が確認できた。各戸の境には幅0.2～0.4mの南北方向の側溝が掘られていた。SB01－2の東西幅は、側溝の芯々間で4.0mである。間口2間強で北側に入口がある構造とみられる。南東隅に大谷焼の甕が2点並べて埋められており、便槽であろう。SB01－1・3も南東隅に便槽を持つ。SB01－2に据えられた南側の甕内から昭和17年の十銭硬貨7などが出土した。そのほか敷地内からは瀬戸美濃焼磁器染付碗、碍子などが出土している。

SD12　SB01の南側に接する東西方向の溝である。幅0.5～1.0m、深さ0.4mで、南側はレンガを5段以上積み、北側は棒状のコンクリートを並べ、底には平瓦と板材を敷いていた。南側のレンガは下2段と上3段の大きさ、積み方が異なっている。上3段には南側に広がる掘形があり、この部分は後から付け加えられた可能性がある。下部の掘形の埋土はオリーブ黄(5Y6/3)～灰オリーブ(5Y5/2)色シルト質中粒砂で、上部の掘形の埋土は灰オリーブ色(5Y7/3)中粒砂である。底に敷いた板の上に泥が溜っており、機能時堆積層といえる。その上は瓦などを含む浅黄色(5Y6/2)中粒砂質シルトで埋め戻されていた。南側の上部の掘形(図4の埋土8)から瀬戸美濃焼陶器壺8が出土した。8は体部内面に釉薬がかかり、外面は鉄釉で、著しく被熱している。SD12はSB01と南側の敷地を区切る背割り溝とみられ、幅約3尺の溝といえる。溝の方向は東西方向であり、現在の区画とは一致しない。戦後しばらくまではこの周辺は東西方向の地割であったことが分かる。

SK02　東西3.0m以上、南北1.7mと2.7mのL字状を呈する土壙である。側壁は板材を貼り、底にはレンガを敷いていた。防空壕とみられる。

SK03　直径0.9mの不整円形の土壙である。焼土で満たされていた。SK04の炉を用いた作業の際の廃棄土壙とみられる。陶器製の湯たんぽ9が出土した。取手部分に「登録新意匠」と陽刻があり、戦時

中の代用品とみられる。萬古焼の可能性がある。

SK04　東西1.8m、南北1.9m、深さ0.6mの方形の土壙で、北東隅に東西0.6m、南北0.5mの木枠施設があった。また北西側には東西0.3m、南北0.4m、深さ0.1mの範囲が方形に被熱し、赤褐色シルトからなる固く締まった窪みがあった。金属製の羽口が北西隅より検出され、工業用の炉があったとみられる。土壙内からは円柱状の砥石が2点以上出土した。そのほかの出土遺物としては、瀬戸美濃焼磁器染付碗や色絵碗、碍子のほか土師器植木鉢などがある。

写真1　SK04出土の原貝と貝釦未成品

また本土壙の埋土中から貝釦(ボタン)の未成品がコンテナバット1箱分ほど見つかった。サラサバテイを含む数種類の原貝を使用し、刳抜きから段下げ、孔あけまでの過程を行っている。未成品は四つ孔、二つ孔、力釦などいくつかの種類があった(写真1：註)。貝釦の生産は明治10(1877)年頃より始まったとされ、大阪では天王寺付近で盛んであったようである[山崎健2014]。天王寺区内の調査では細工谷遺跡[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]や難波京朱雀大路跡[大阪文化財研究所2010]などで貝釦の未成品や原貝が出土している。

SK05・06　共に直径0.6m、深さ0.5mの円形の土壙である。2基並んで設置され、側壁より木枠が確認できた。SK06は直径37cm、厚さ1cmの円形の底板が残っていた。SK04と関わる水溜施設の可能性もある。

SK06より銅版転写の瀬戸美濃焼磁器染付碗、碍子、ガラス瓶、また宝珠型の陶器製貯金箱10などが出土した。宝珠形の貯金箱は「貯金玉」とも呼ばれ、こうした縁起物の貯金箱は明治初期～大正末期まで流行したとされる[山村定雄・龍雅之輔1992]。

以上、戦中～戦後にかけて敷地境の溝を境界とし、北側には間口二間の便所付き長屋が、南側には貝釦などを製作する作業場があった様子が分かった。また、これらの遺構は現在の敷地とは異なる東西方向の地割に沿っており、本調査区周辺はもともと東西方向の区画割がなされていたことが指摘できる。

3)まとめ

今回の調査で以下の2点の成果が得られた。

・近世の土採り穴から奈良時代の須恵器や布目瓦が出土した。

・戦中～戦後の長屋と貝釦製作の作業場を検出した。これらの建物は現在の敷地とは異なる東西方向で建てられていた。

今回の調査で摂津国分寺と直接関係する資料は得られなかったものの、上記の成果から調査地付近

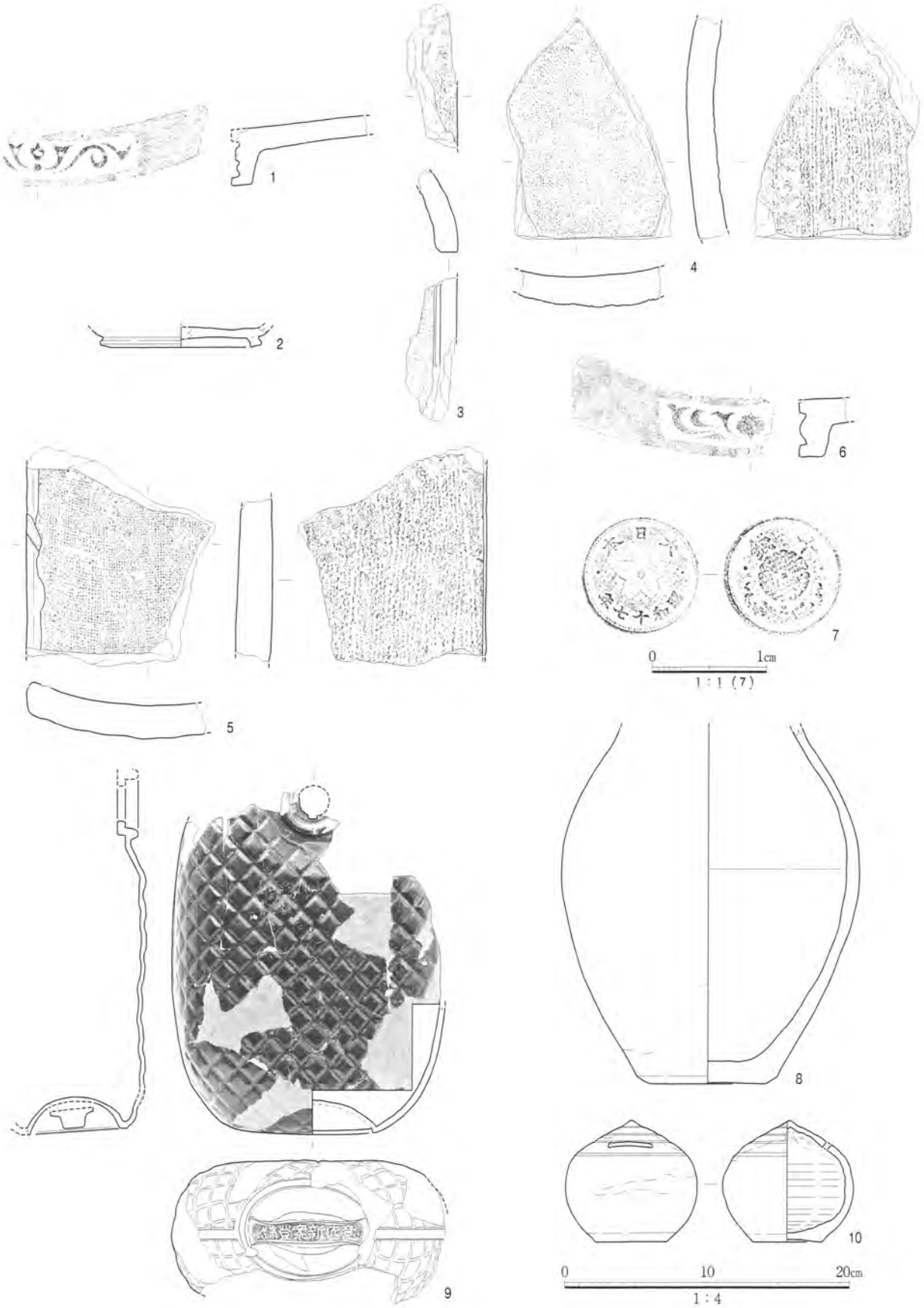


図７　遺物実測図

SK07(１～５)、SK10(６)、SB01(７)、SD12(８)、SK03(９)、SK06(10)

に古代の瓦葺の建物が存在したことが考えられる。また周辺にはかつて東西方向の区画が存在しており、古代の地割を反映している可能性もある。摂津国分寺の存在を考える一つの材料となるといえよう。

註)

(1)貝類については土佐市教育委員会の池田研氏にご教示いただきました。感謝いたします。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

1998、「養父孝乃介氏の建設工事に伴う発掘調査(SK96－9)」:『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.75－79

2010、「細工谷遺跡発掘調査(SD08－3)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.331－342

大阪市博物館協会1988、『吉村英一氏による建設工事に伴う摂津国分寺跡(SK88－5次)略報』

大阪文化財研究所2010、『難波京朱雀大路跡発掘調査報告』

2012、『摂津国分寺跡発掘調査報告』

山崎健2014、「近現代の貝釦」:『季刊考古学』第128号、pp.56－59

山村定雄・龍雅之輔1992、『貯金箱』保育社

西壁地層断面（東から）

近世の遺構完掘状況（西から）

近現代の遺構検出状況（西から）

天王寺区玉造本町３－11における建設工事に伴う
宰相山遺跡発掘調査(SS14－１)報告書

調査個所	大阪市天王寺区玉造本町３－11
調査面積	48㎡
調査期間	平成26年７月７日～７月10日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、田中裕子

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は弥生時代から中世にかけての集落遺跡である宰相山遺跡の東北部に位置し、豊臣大坂城の東南隅部付近に当る。調査地より北東180mに位置するOS89－146次調査地は、豊臣大坂城外郭東南隅の玉造口の城門、いわゆる「黒門」の跡地とみられており、豊臣後期の堀が確認されている。[大阪市文化財協会2002]。また、北西に位置するOS88－118・11－3・14－1次調査地において埋没谷が検出されており、古墳時代以降の遺物が出土している[大阪市文化財協会2002、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、大阪文化財研究所2014]。OS14－1次調査地では谷を埋める豊臣期あるいは徳川初期の大規模な盛土が検出されている。

当該地では大阪市教育委員会が行った試掘調査で、現地表下1.5m以下の深さで飛鳥～奈良時代の土器を含む遺物包含層が検出されたため、本調査を実施する運びとなった。調査は7月7日より着手した。敷地の南寄りに南北8m、東西6mで48㎡の調査区を設定し、現地表下約0.6mまで重機により現代盛土を除去した。近世～近代の盛土層である第1b層および豊臣～徳川初期の盛土である第2層上面の調査を行った後、再び重機により第3層の上面まで掘削を行った。その後、第3層以下を人力により掘り下げ、遺構の精査・写真撮影、遺物の採取、記録作業などを行い、7月10日に撤収を含むすべての作業を終了した。

なお、本報告で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP＋○mと表記した。

図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

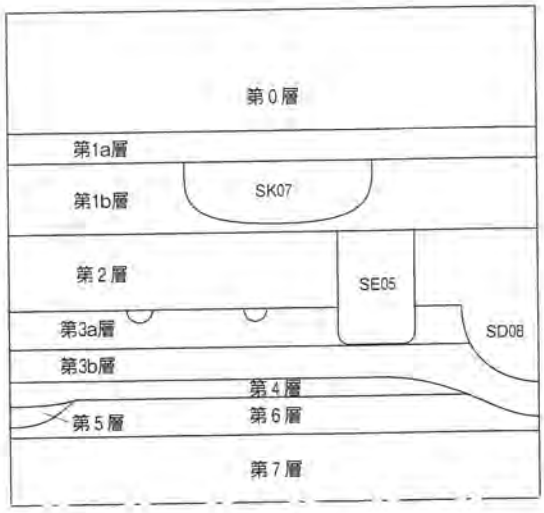


図3　地層と遺構の関係図

また、方位は現場で記録した街区図を1／2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

2)調査の成果

i)層序

調査地周辺は標高約4.1mから約3.9mと、北から南に向かって下がる地形をしている。

調査地の地層は、現代盛土(第0層)の下位に7層を区分した(図3・4)。

第1層：近世～近代の盛土層である。第1a・1b層に分けることができる。第1a層は暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚10～18cmである。銅版転写の瀬戸美濃焼磁器を含む。第1b層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂からなり、層厚15～80cmである。肥前磁器染付碗を含む。

第2層：にぶい黄色(2.5Y6/4)極粗粒～中粒砂の偽礫からなる盛土層である。最大層厚は98cmである。上面には18世紀代の遺構であるSE05などが検出されている。出土遺物は土師器皿・軒丸瓦のほか須恵器甕などを含み、豊臣期か徳川初期の盛土とみられる。

第3層：中世～豊臣期の作土層で、上下2層に区分される。

第3a層は黒褐色(2.5Y3/2)粗粒～中粒砂からなり、層厚は8～20cmである。上面で東西方向の耕作溝が検出された。付近の段丘構成層に由来する偽礫を含み、あまり攪拌されていない。第2層の盛土直前に客土され、わずかに耕されたのち、すぐに埋め立てられたと考えられる。

第3b層は褐灰色(10YR4/1)シルト質中粒砂からなり、層厚は6～12cmである。第3a層と比べ、よく攪拌された作土層である。

第3層からは豊臣期の土師器皿のほか、須恵器・瓦質土器などが出土した。

第4層：暗灰黄色(2.5Y4/2)中礫混り極粗粒砂からなり、層厚4～12cmである。堆積構造を持たず、土師器甕8・須恵器壺9・10など7世紀代の遺物を含む。古代の盛土層である。

第5層：黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトからなり、最大層厚4～13cmである。調査区北部の第6層の落込みで確認された湿地の堆積層である。須恵器高杯・杯Gなど6～7世紀の遺物を含む。

第6層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)～暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒～中粒砂からなる河成層で、層厚は34～100cmである。植物根の痕跡が顕著に見られる。出土遺物はなく、時代は不明である。

第7層：灰オリーブ色(5Y5/2)わずかに礫混り極粗粒砂からなる。層厚20cm以上の河成層である。調査区北部の深掘りトレンチで確認した。出土遺物はない。

ii)遺構と遺物(図5～7)

a．中世～豊臣期の遺構

第3a層の上面で溝を検出した。

SD08　調査区南部に位置する幅1.2m以上、深さ0.6m、長さ4.6m以上の西から東へ流れる溝である。埋土は上下２層に分かれ、下層は灰～黄灰色シルトからなる機能時堆積層である。上層は第２層の盛土で、埋められている。第２層の盛土を行う際、排水用に掘られた可能性がある。埋土からは須恵器・骨が出土した。図示した遺物は須恵器杯Ｇ蓋１・身２で、７世紀中～後葉とみられる。１は有蓋短頸壺の蓋の可能性もある。混入遺物であり、本遺構は検出層位の関係から豊臣期に属するといえよう。

SD10　幅0.4m、深さ0.1m、長さ2.3m以上の東西方向の溝である。遺物の出土はない。南側に平行するSD11が検出されており、これらは耕作溝の可能性がある。

b．近世以降の遺構

第２層の上面で18世紀以降の遺構を検出した。

SE05　調査区中央部に位置する直径1.6m、深さ0.6mの円形の井戸である。埋土は灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで、埋められている。出土遺物は肥前磁器染付碗・皿・蓋物・青磁染付碗および肥前陶器碗・鉢のほか、軟質施釉陶器皿、土師器火入、丸瓦・平瓦・桟瓦、モモ核などである。図示した遺物は肥前磁器染付碗３・４で18世紀中葉に属する。

SD04　幅0.2m、深さ0.1m、長さ2.1m以上の東西方向の溝である。SK03に切られる。出土遺物はない。

SK03　東西0.4m、南北0.5m、深さ0.1mの方形の土壙である。出土遺物は関西系陶器碗のほか、丹波焼・軟質施釉陶器・平瓦を含み、18世紀中葉に属するとみられる。

SK06　調査区東部に位置する東西0.2m以上、南北0.4m以上、深さ0.4mの土壙である。第1a層で埋められていた。関西系陶器土瓶・軟質施釉陶器灯明皿・平瓦など19世紀前半頃の遺物を含む。

SK07　調査区南部に位置する直径1.6m、深さ

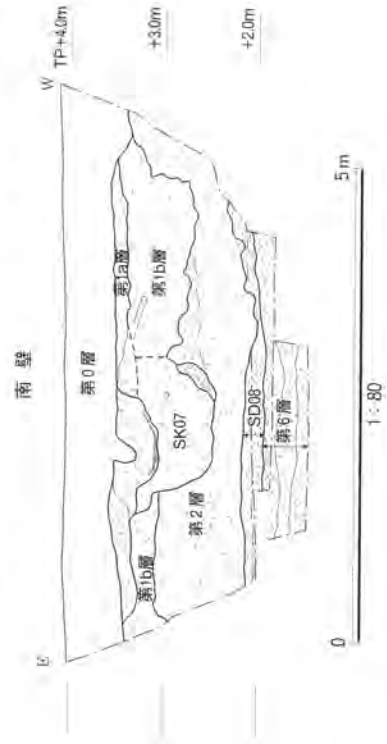


図４　地層断面図

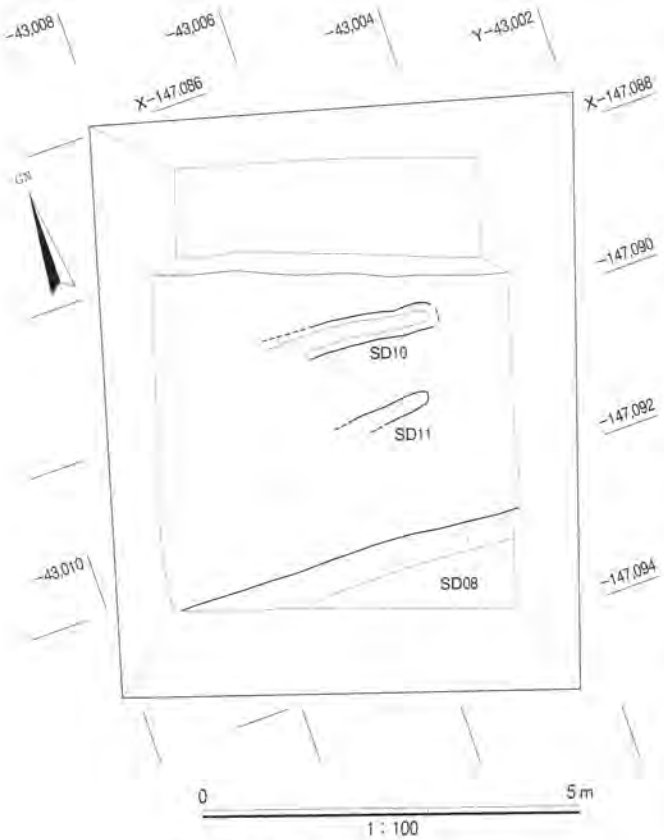


図５　中世～豊臣期の遺構平面図

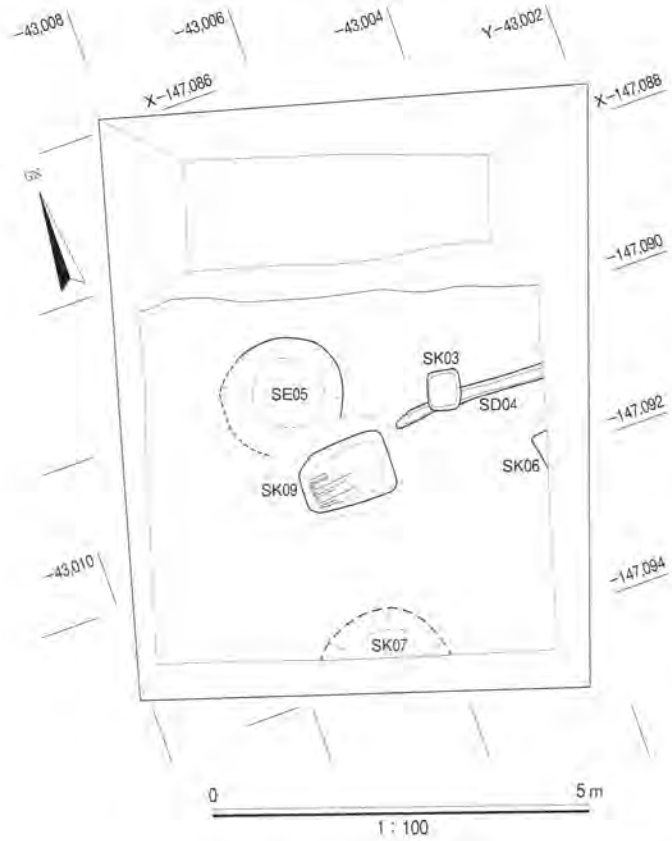


図６　近世以降の遺構平面図

0.8mの円形の土壙である。第1b層上面から掘り込まれている。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトからなり、埋められていた。出土遺物は肥前磁器染付碗５・皿および肥前陶器碗、関西系陶器灯明受皿６・土瓶・土鍋・蓋のほか、丹波焼甕・擂鉢、軟質施釉陶器皿、土人形猫７・神輿の屋根部分・ミニチュアの石臼、泥面子(判読不明であるが裏面に墨書あり)、平瓦、鉱滓である。５はいわゆる広東碗である。６は底部外面に糸切り痕が見られる。これらの遺物は18世紀後半～19世紀前半に属する。

SK09　調査区中央部に位置する東西1.2m、南北0.9m、深さ0.6mの方形の土壙で、釘打ちした木枠が出土した。近代の会所とみられる。

c．第４・５層出土の遺物

第４層の整地層からは土師器甕８、須恵器杯H・杯G蓋・壺９・10などが出土した。９は短頸壺で、10は壺の口縁部である。これらの遺物は７世紀代とみられる。

第５層からは土師器杯C・竈11、須恵器杯G蓋・高杯などが出土した。11は、生駒西麓産の胎土で、曲げ庇の付け根部分である。須恵器は小片のため図示しえないが、これらの遺物は６世紀から７世紀後葉までを含む。

３)まとめ

本調査では次の成果が得られた。

・６～７世紀代の遺物を包含する湿地性堆積層が検出された。

・その湿地を埋め立てた古代の整地層を

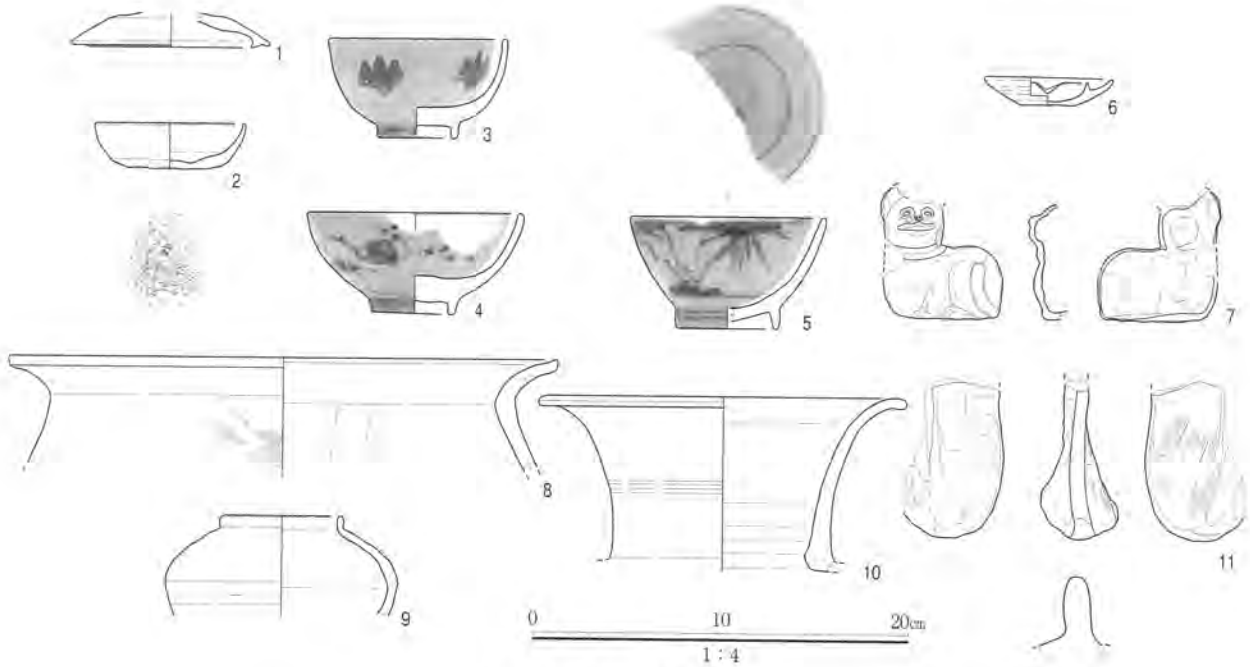


図７　出土遺物実測図

SD08(１・２)、SE05(３・４)、SK07(５～７)、第４層(８～10)、第５層(11)

検出した。古代の遺構は周辺の玉造地区でも見つかっており、NW88－14では掘立柱建物や溝が検出されている。[大阪市文化財協会2002]本調査地は低地にあたるが、奈良時代には湿地を埋め立てた整地が行われており、古代難波京の設置を考える材料となる。

・中世～豊臣期は耕作地として利用されていた。中世～豊臣期の作土層は森の宮遺跡・宰相山遺跡周辺で確認されており、低地を耕作地として利用していたようすがわかる。

・その後、豊臣期あるいは徳川初期に大規模な盛土を行い、本調査地は居住地となっていった。この第２層とした盛土が豊臣期のものであるとすれば、1594年の惣構に係る造成の可能性がある。

引用文献

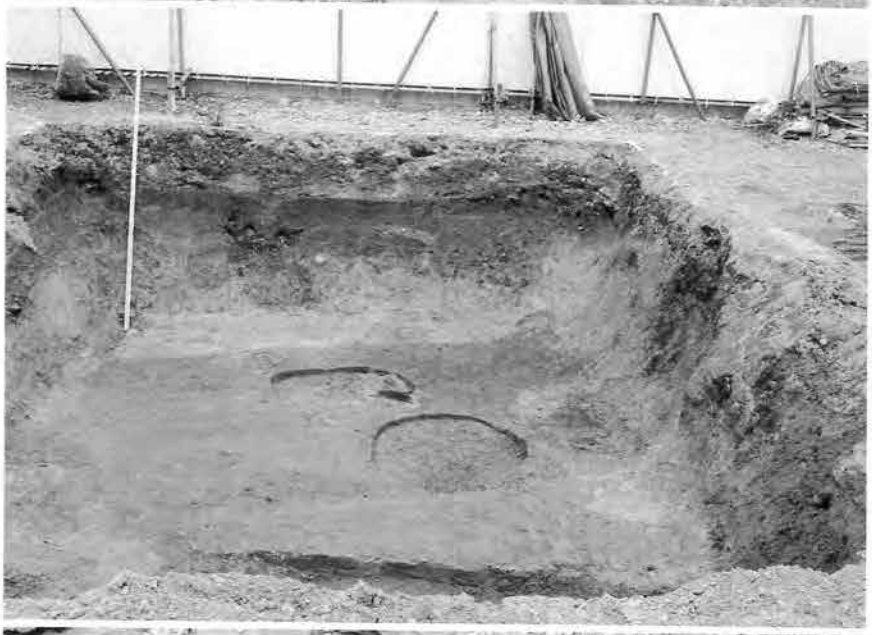
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「大坂城跡発掘調査(OS11－３)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.273－280

大阪市文化財協会2002、「玉造地区の調査」:『大坂城跡Ⅵ』、pp.205－218

大阪文化財研究所2014、『天王寺区玉造本町における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS14－１)報告書』

第６層上面
（西から）

第３層上面検出の遺構
（北から）



東壁地層断面
（西から）

天王寺区上汐四丁目４－５他３筆における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH14－２)報告書

調査個所	大阪市天王寺区上汐4丁目4－5・4－6・4－7・4－8
調査面積	50㎡
調査期間	平成26年9月4日～9月10日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、谷﨑仁美

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は弥生時代から近世にかけての集落遺跡である上本町遺跡の西南部に位置する。周辺では、難波京に係る古代の遺構や遺物が多数発見されている(図1)。調査地に北接するUS06－1次調査では、奈良時代後半～平安時代初頭の建物群を検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。また、調査地西側のUH09－3・12－17次調査では、奈良時代の井戸や、難波京の条坊ラインを踏襲した可能性がある中世の落込みなどが見つかっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2011、大阪文化財研究所2013]。さらに、調査地東側のUH10－5次調査でも飛鳥時代後半～奈良時代前半の遺物を含む溝状遺構を検出しており、難波京東西路に平行する条坊区画内の溝と推定され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2012]、西南側のUH13－13次調査では、7世紀後葉の柱穴と7世紀後葉～8世紀中葉の東西溝を検出している[大阪文化財研究所2014]。

このように、歴史的に重要な地点にある当地において建設工事に先立って行われた大阪市教育委員会による試掘調査で、現地表下1.0m以下の深さで古代～近世の遺構・遺物が見つかったため、本格的な調査を実施することになった。UH09－3・12－17次調査で見つかった溝状遺構の東延長ラインで、同様の遺構が確認できる可能性があったが、敷地の南半部は現代の攪乱で大きく破壊されており、敷地の北寄りに調査区を設けることになった。調査は9月4日から着手し、調査区は東西10m、南北5mの50㎡で設定した(図2)。アスファルト・バラス・現代盛土と後述する第1・2層を重機で掘削した後、第3層および第6層上面を人力で精査・遺構検出・遺構掘下げを行った。調査は適宜に実測図の作成、写真撮影を行った。9月10日に埋戻し、現地におけるすべての作業を終了した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mとした。また、出土遺物に関しては、

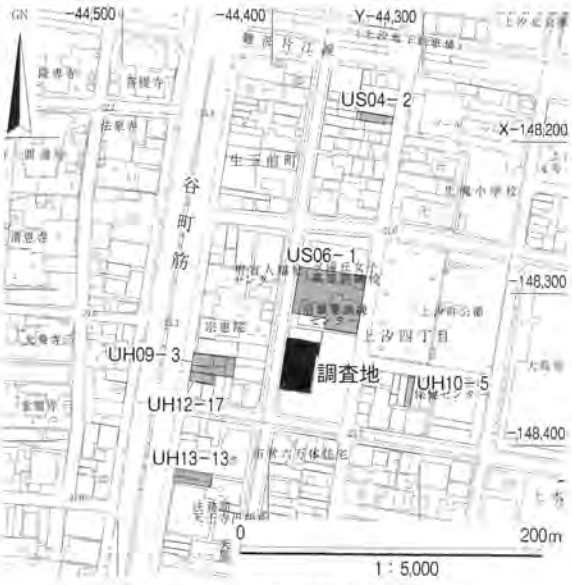


図1　調査地位置図

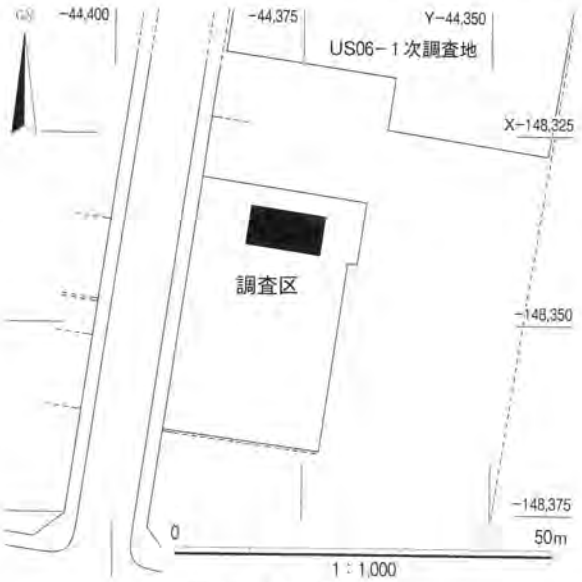


図2　調査区配置図

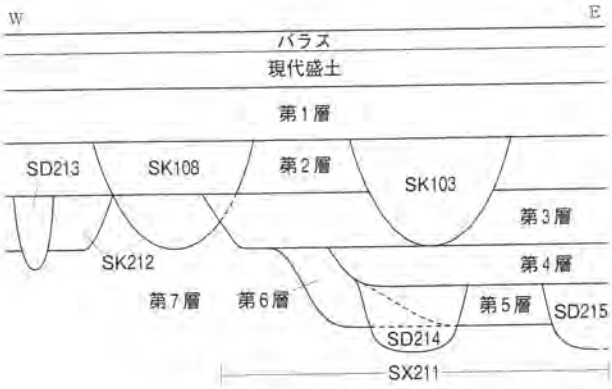


図3　遺構と地層の関係図

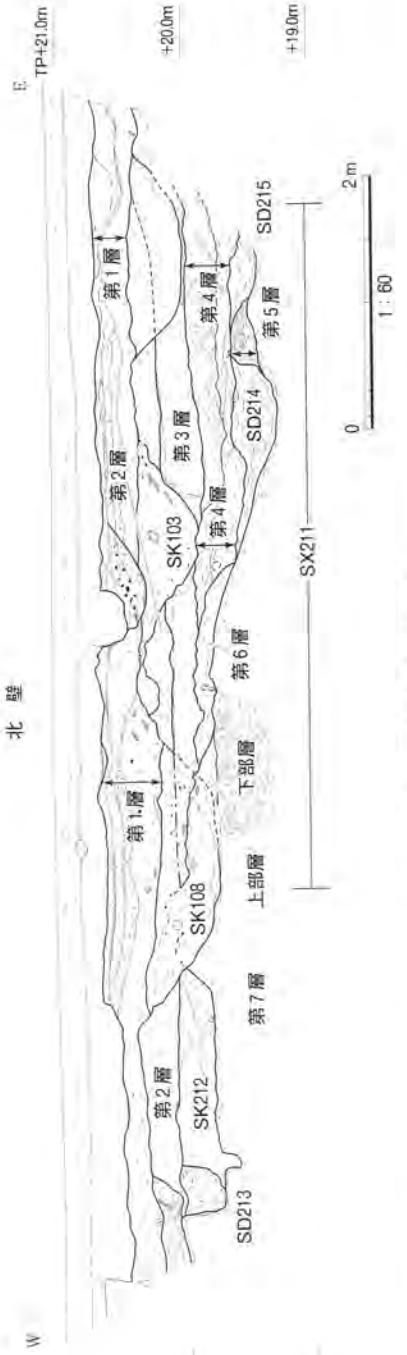


図4　調査区地層断面図

当研究所学芸員小田木富慈美が記述した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

敷地内は約TP+21mで平坦である。調査区内で検出した段丘構成層(以下、第7層)は西側に向かって高くなっており、調査区中央部で検出した第7層上部が西側では削平されていた。

第1層:近現代の遺構埋土および整地層である。炭・焼土塊・漆喰片を含む暗灰黄～黒褐色(2.5Y4/2～10YR3/2)中～細礫混り中粒～極細粒砂層で、層厚は30～42cmである。

第2層：近世の作土を母材とする盛土層である。炭を含む暗褐色(10YR3/4)中礫混り中粒～細粒砂層で、層厚は25～30cmである。上面でSE101・109、SK102～108を検出した。

第3層：SX211の埋土である。少量の炭と第7層由来の中粒～細粒砂偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒～細粒砂層で、層厚は30cmである。古代～17世紀前半の土師器・須恵器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・瓦が出土した。

第4層：SX211の埋土である。第7層由来の中粒～極細粒砂偽礫を多く含む暗灰黄～オリーブ褐色(2.5Y4/2～2.5Y4/3)シルト質中粒～細粒砂層である。層厚は35cmである。古代～16世紀末の土師器・須恵器・瓦器・瀬戸美濃焼・中国産磁器・瓦が出土した。

第5層：SX211の埋土である。黒褐色(2.5Y3/2)中粒～極細粒砂混り泥質シルトと褐色(10YR4/6)中粒砂質中～細礫層が互層になっており、人工的に盛土している。層厚は25cmである。本層を掘り込むSD214・215を検出した。古代～中世の土師器・須恵器・瓦器・青磁・備前焼・瓦が出土した。

第6層：SX211の埋土である。第7層由来の中粒～極細粒砂偽礫を含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒～細粒砂層で、層厚は15cmである。古代～中世の土師器・須恵器・瓦器が出土した。

第7層：段丘構成層である。上部はにぶい黄褐色(10YR5/4)中粒～細粒砂層で、層厚は17cmである。下部は

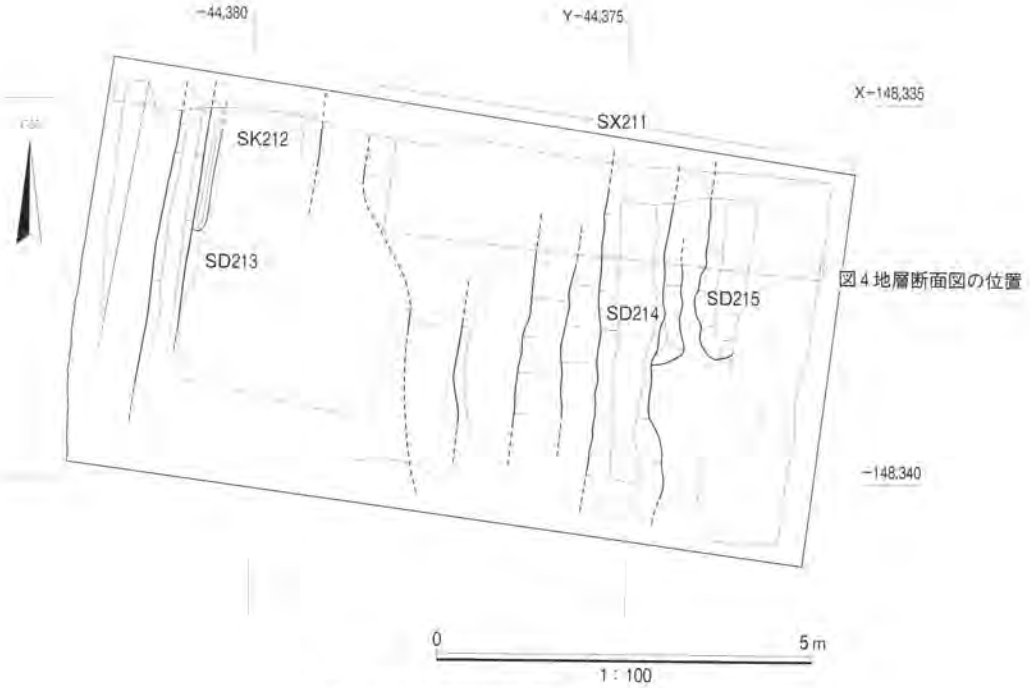


図5　中世～近世遺構平面図

黄褐色(10YR5/6)中～細礫層である。上面でSD213、SK212、SX211を検出した。

ii)遺構と遺物

a．中世～近世(第5・7層上面；図5・6・9)

第7層上面でSX211・SK212・SD213を検出した。

SX211は南北長4.5m以上、東西長6.0m以上、深さ0.95mの東に向かって低くなる落込みである。人工的なものか谷かは判断できなかった。以下で述べる出土遺物には、古代のものを含むが、最終的に17世紀前半に埋没する(図9)。

SD214・215はSX211内に第5層が堆積した後に掘られた溝である。

SD214は幅0.75～1.00m、長さ3.8m以上、深さ0.40mの溝状遺構である。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)中粒～細粒砂質シルトで、水漬きの痕跡は部分的に見られるが、人の手が入ってかなり荒れている。

SD215は幅0.65m以上、長さ2.0m以上、深さ0.24mの溝状遺構で、南側で終わっている。埋土はSD214によく似ているが、やや泥質である。

いずれも瓦器の細片や瓦片が出土しており、中世に属する遺構である。

第6層からは古代～中世の土師器・須恵器・瓦器が出土した。

第5層からは土師器・須恵器・瓦器・青磁・備前焼・瓦が出土した。1は蹄脚円面硯の脚部である。脚部の断面形は五角形を呈するとみられ、中央の稜はていねいに面取りする。上方には円形の装飾が剥落した痕跡が認められる。奈良文化財研究所の分類による蹄脚円面硯Bで、奈良時代前半

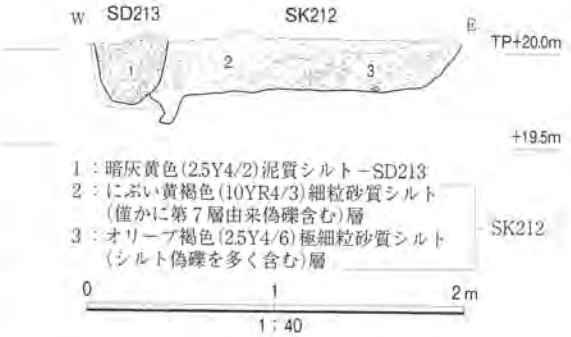


図6　SK212・SD213遺構断面図

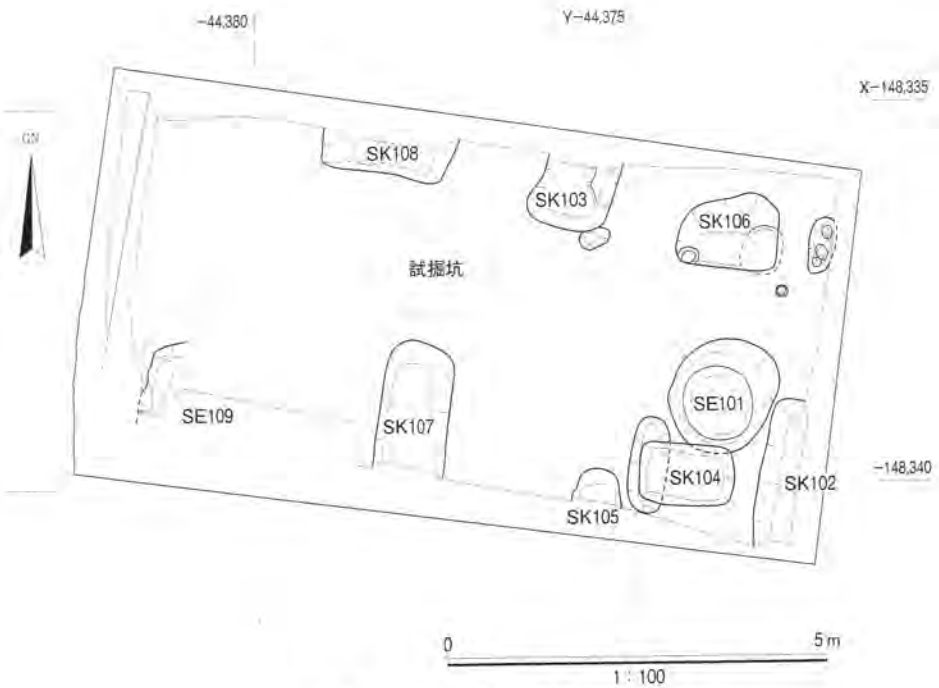


図７　近世～近代遺構平面図

～中頃に属するものであろう[青木敬2014]。

第４層からは土師器・須恵器・瓦器・瀬戸美濃焼・中国産磁器・瓦が出土した。２は土師器の甕である。口縁部は外反する。３は須恵器杯B蓋である。器高は低く、口縁端部を短く屈曲させる。天井部にはヘラ記号を有する。４は中国産白磁の皿である。口縁部が端反になるものであろう。高台には砂が付着する。５は瀬戸美濃焼の灰釉を施す小壺で、茶入れの可能性がある。以上は２・３が８世紀、４・５は16世紀後葉～末に属するものである。

第３層からは土師器・須恵器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・瓦が出土した。６は土師器の皿で、灯火具として使用している。底部は丸みをもち、口縁部は内湾する。底部内面には圏線状のナデ痕が巡る。７は瀬戸美濃焼の天目碗である。８は須恵質の平瓦で、凸面に縄目タタキを施し、凹面には布目圧痕が認められる。側面にはヘラケズリを施す。以上は８が８世紀、６・７は17世紀前半に属するものであろう。

SK212は西側をSD213に、東側をSK108に、南側の攪乱に壊されており、形状・規模は不明であるが、南北長0.5m以上、東西長約1.9m、深さ0.3mの土壙である。第７層由来の偽礫を少量含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトと、シルト偽礫を多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)極細粒砂質シルトで埋る(図６)。底が溝状に深くなる部分がある。須恵器片が出土した。

SD213はSK212の上部に位置する。長さ4.00m以上、幅0.40m、深さ0.32mである。暗灰黄色(2.5Y4/2)泥質シルトで人為的に埋る(図６)。古代と思われる土師器甕の口縁部が出土している。

SK212・SD213は古代の遺物を含むものの、少なくともSD213は溝の方向が谷町筋に沿っているので豊臣期以降のものと考える。

b. 近世～近代(第２層上面；図７・８・10～14)

重機で第１・２層を除去した後で遺構検出に入ったため、平面では第７層および第３層上面で遺

構の下部を検出した。本来は第2層上面を掘り込む遺構である。以下で述べるように、SK105は近代に下るが、それ以外は18世紀中葉～19世紀初頭に埋没する井戸や多数の土壙を検出した。

SE101は井戸側の痕跡は確認できなかったが、埋土の違いから、井戸本体は直径0.95m、掘形は直径1.50m、深さ1.00m以上で底まで掘り下げられなかった。

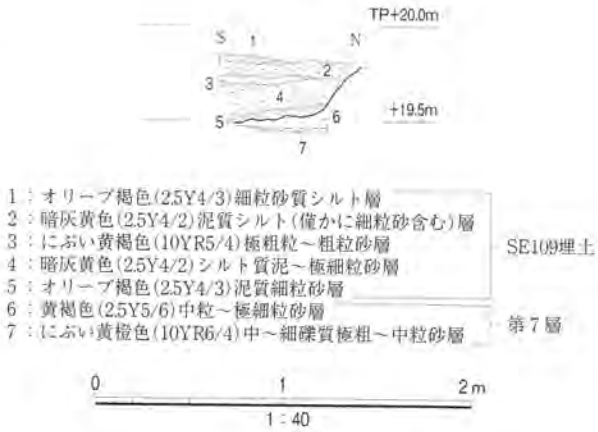


図8　SE109遺構断面図

土師器・須恵器・瓦器・肥前陶器・肥前磁器・関西系陶器・備前焼・丹波焼・瓦・石製の硯・碁石・鉄釘が出土した(図10)。9は肥前磁器で青磁染付の蓋である。口縁部内面には四方襷文を巡らせ、内面中央には手描きの五弁花文を施す。10～12は関西系陶器である。10は鉄絵と白泥で文様を描く半筒碗、11は鉄絵の丸碗、12は色絵の丸碗である。15は堺擂鉢で、口縁部上端に刻印を施す。13・14は土師器の皿で、いずれも灯火具として使用している。以上は18世紀中葉を中心とする時期のものである。

SE109は井戸側の痕跡は確認できず、東側を攪乱に壊されているため正確な形状や規模は不明である。深さ0.36mでオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトや暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混り泥質シルトなどで自然に埋る(図8)。出土遺物はなかった。

SK102は南北長1.9m以上、東西長0.5m以上、深さ0.4mの隅丸方形の土壙である。炭を多く含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒～細粒砂で埋る。

土師器・肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器・関西系陶器・備前焼が出土した(図11)。16～20は肥前磁器の染付である。16・17は碗蓋である。16は広東碗の蓋で、焼継している。17は口縁部が直線的に開き、

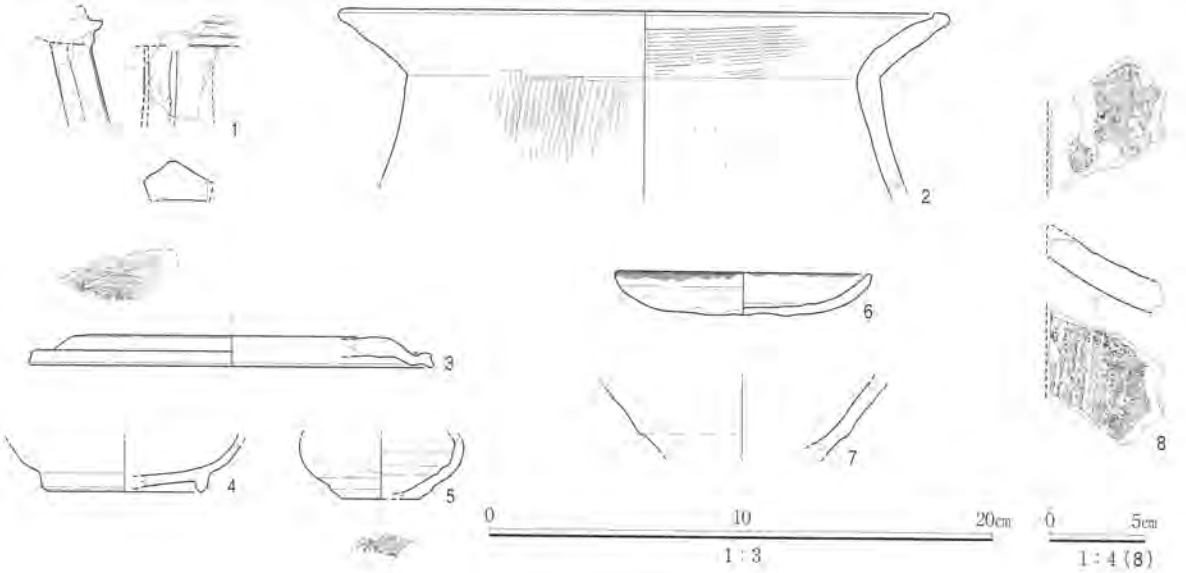


図9　SX211出土遺物
第5層(1)、第4層(2～5)、第3層(6～8)

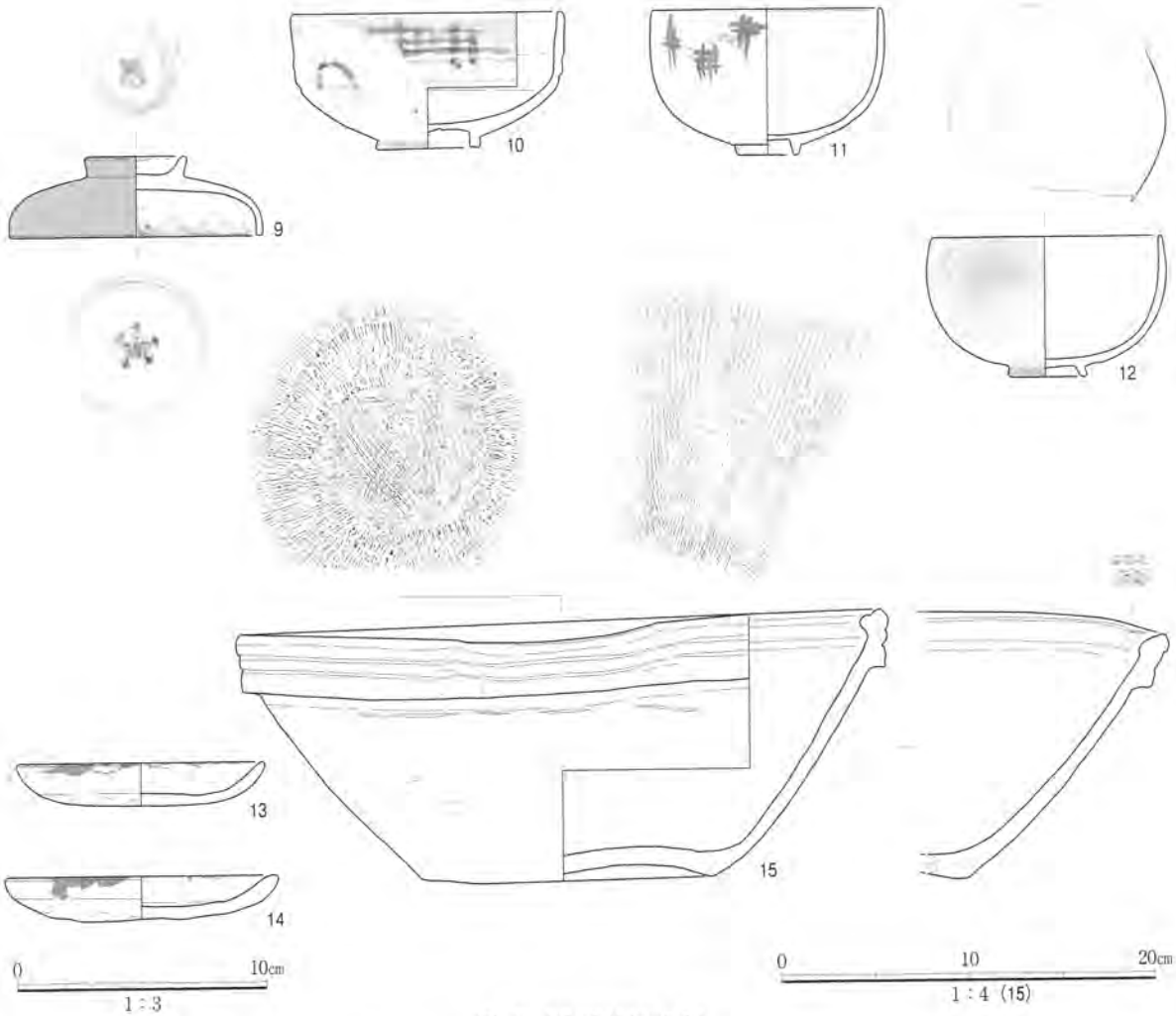


図10　SE101出土遺物

SE101掘形(10・12・13)、井戸側内(9・11・14・15)

天井部内面中央を1段低く窪ませている。18～20は碗である。18は底部内面を蛇の目釉剥ぎする。21は肥前磁器で白磁の瓢形瓶である。肩部には貝形の装飾を貼り付ける。口縁部上端を欠失する。22は備前焼の布袋徳利である。以上は18世紀末～19世紀初頭のものであろう。

SK103は南北長0.88m以上、東西長1.00m、深さ0.32mの隅丸方形の土壙である。炭を含む黒褐色(2.5Y3/1)中粒～極細粒砂で埋る。土師器・肥前磁器・関西系陶器・備前焼・丹波焼・多量の被熱した瓦が出土した。

SK104は南北長0.80m、東西長1.30m、深さ0.55mの隅丸方形の土壙である。土師器・須恵器・肥前磁器・関西系陶器・関西系磁器・土人形が出土した。

SK105は南北長0.50m以上、東西長0.65m、深さ0.26mの土壙である。土師器・肥前磁器・備前焼・瓦が出土した。幕末～明治時代に属する。

SK106は南北長1.00m、東西長1.30m、深さ0.32mの不整形な土壙である。

土師器・須恵器・肥前磁器・瀬戸美濃焼陶器・関西系陶器・信楽焼・丹波焼・瓦・土人形が出土した(図12・13)。23～41は肥前磁器で、24・41が白磁、30が青磁染付、40が青磁である以外、すべて染付である。23は碗の蓋である。24～30は碗で、24は薄手の端反碗である。25・26は口縁部内面

に四方襷文を施す。27・28は同一の草花文を施す碗で、組物であろう。29は変形寿字文を施す。30は体部下半が膨らむ。31は皿で、底部内面を蛇の目釉剥ぎする。32は27・28と同一文様の猪口である。33～35は仏飯具である。36は小型の香炉である。37～39は瓶、40は仏花生である。41は壺である。42～48は関西系陶器である。42・43は丸碗、44は筒茶碗である。45は透明釉の灯明皿で、菊花文の装飾を貼り付ける。46はミニチュアの鍋、48は鍋で、いずれも鉄釉を施す。47は透明釉に鉄絵を施す土瓶である。49～54は軟質施釉陶器である。49は緑色釉を施す火入れである。50は白色釉を施すホタテ貝の形状をした皿で、3箇所に脚が付くとみられる。51・52は柿釉の灯明皿、53・54は同灯明受皿である。55・56は瀬戸美濃焼陶器である。55は刷毛目碗である。56は鉄釉の灯明皿で、底部外面に輪トチ痕が残る。57～59は土師器である。57は掘りごたつの枠である。58は十能である。59は焙烙で、把手には2箇所に穴を有する。

以上の遺物は18世紀後葉～19世紀初頭のものである。

SK107は南北長1.65m以上、東西長1.00m、深さ0.38mの土壙である。

土師器・肥前磁器・瀬戸美濃焼陶器・関西系陶器・備前焼が出土した(図14)。60～63は肥前磁器の染付で、60・61は外青磁である。60は蓋、61は筒茶碗で、いずれも口縁端部内面には四方襷文を巡らせ、内面中央には五弁花文を施す。62は体部下半が膨らむ形状の碗である。63は仏飯具である。64は土師器の焙烙で、外面に凸帯を有するものである。以上は18世紀後葉に属する。

SK108は南北長0.45m、東西長1.80m、深さ0.34mの土壙である。炭・焼土塊・漆喰片を含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト質中粒～細粒砂で埋る。土師器・肥前磁器・瀬戸美濃焼陶器・関西系陶器が出土した。

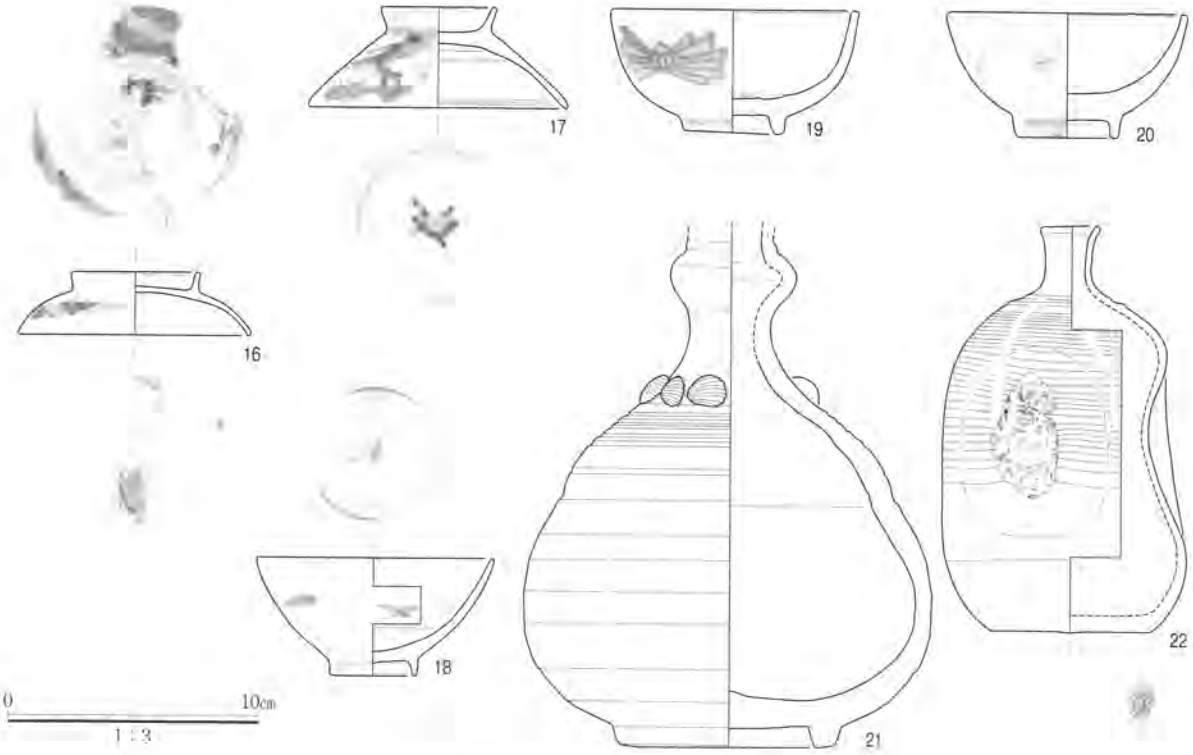


図11　SK102出土遺物

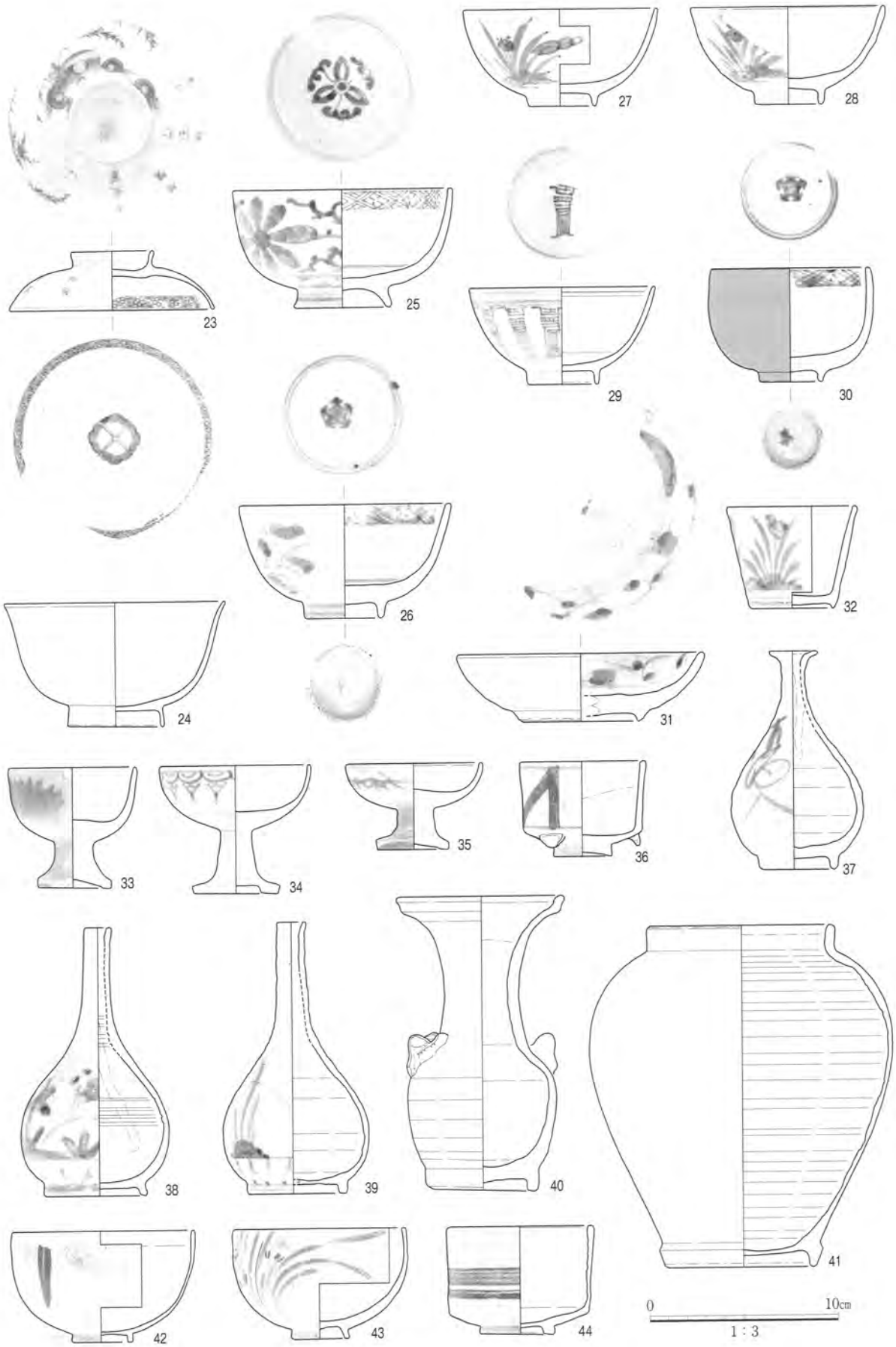


図12　SK106出土遺物（1）

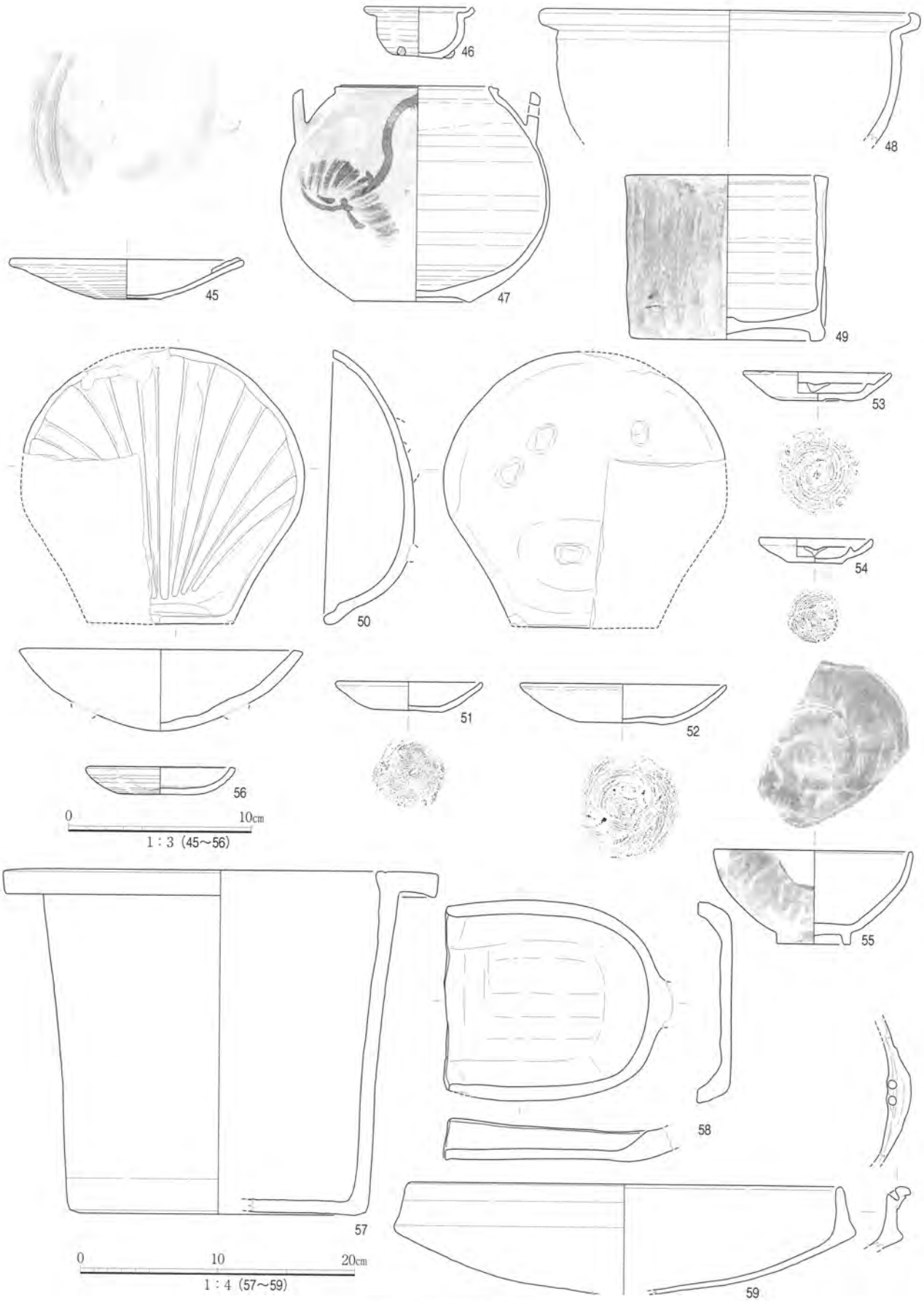


図13　SK106出土遺物（2）

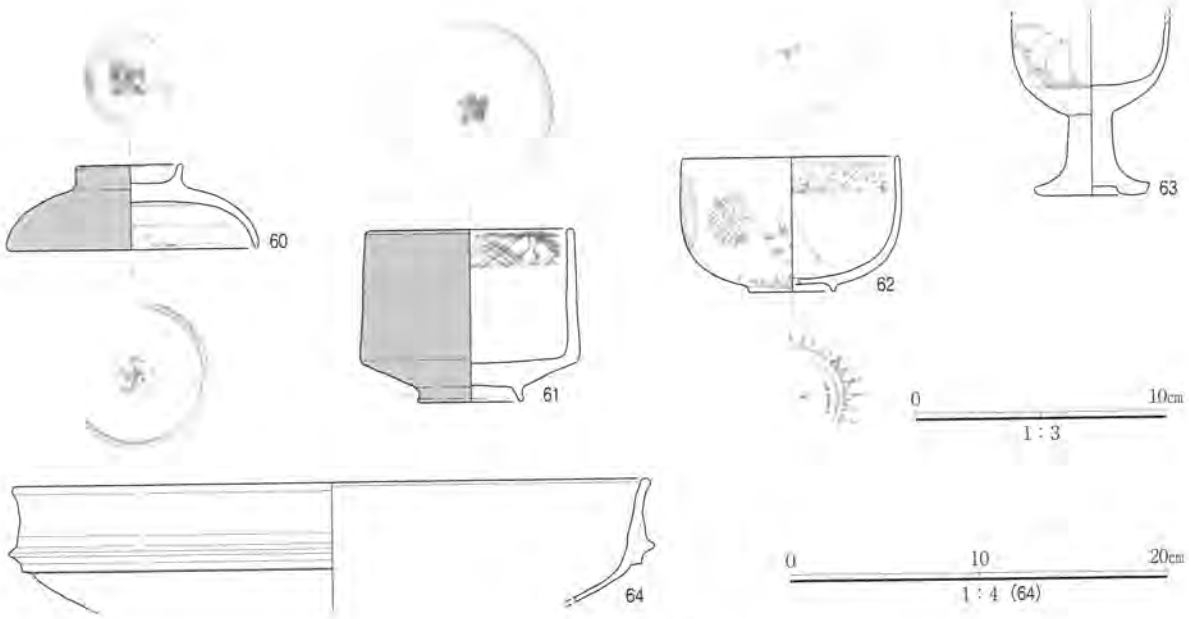


図14　SK107出土遺物

3）まとめ

調査地周辺で古代～中世の京に係る遺構や遺物が多数発見されているように、今回の調査でも古代～中世の遺物が出土し、中世の溝状遺構を検出した。また、近世の陶磁器が廃棄された土壙や井戸を検出したが、この付近に18世紀中葉以降に町家があり、当地はその裏手にあたると考えられる。

今後、周辺における調査成果を積み重ね、都市の変遷について検討を加えていく必要がある。

引用・参考文献

青木敬2014、「蹄脚円面硯Bの出現とその特質」：『奈良文化財研究所紀要2014』、pp.24－25

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

2008、「上本町南遺跡発掘調査（US06－1）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.252－259

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2011、「上本町遺跡発掘調査（UH09－3）報告書」：『平成21年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)』、pp.191－200

2012、「天王寺区上汐四丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査（UH10－5）報告書」：『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.29－39

大阪文化財研究所2013、『天王寺区生玉前町における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査（UH12－17）報告書』

2014、『天王寺区六万体町301－18・19における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査（UH13－13）報告書』

調査区全景（西から）

調査区北壁中央部の
地層断面（南東から）

遺構完掘状況（南東から）

淀川区十八条一丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(JH14－１)報告書

調査個所	大阪市淀川区十八条1丁目1－6・1－7
調査面積	1015㎡
調査期間	平成26年4月2日～6月13日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋　工、岩本 正二

1)調査に至る経緯と経過(図1～3)

調査地は鎌倉～江戸時代の集落遺跡である十八条遺跡B地点に位置する。大阪市営地下鉄御堂筋線東三国駅の北約0.5kmにあり、北東すぐ近くを神崎川が流れている。調査地は淀川によって形成されたデルタ上に立地している(図1)。1885(明治18)年の地図(図2)を見ると、調査地は神崎川が大きく蛇行する場所に近接し、水害を受けやすい環境であったと考えられる。

今回の調査地の周辺では、神崎川より南側での発掘調査が何例か報告されている(図1)。すぐ西側の地点で十八条遺跡の調査(JH07－1次)が行われ、14世紀頃に耕作地となったことが明らかになっている[大阪市教育委員会･大阪市文化財協会2009]。調査地の南側には、東三国6丁目所在遺跡があり、HM98－1次調査では古墳時代前期の土器と10世紀頃および15世紀頃の土器が出土し、15世紀頃の直角に曲る(南北・東西方向)4条の溝が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000]。HM13－1次調査では、14～15世紀頃の畠が検出されたが、16世紀に洪水の被害を受けたことが判明した[大阪文化財研究所2014b]。南東側には東三国2丁目所在遺跡があり、HM97－1次調査では15世紀頃の耕作関連の溝・畦畔、19世紀の掘立柱建物・井戸などが見つかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]。HM10－1・2次調査では、13世紀頃の流路が確認された[大阪文化財研究所2012b]。このように、調査地付近一帯では、14～15世紀頃に耕地として開発されていく様相が明らかになってきている。

また、神崎川をはさんで北には、平安～鎌倉時代の堤防などの遺構が検出され、弥生～室町時代の遺物が大量に出土し、特に平安時代の祭祀関係の遺構・遺物が注目された吹田市五反島遺跡がある[吹

図1　周辺の遺跡と調査地

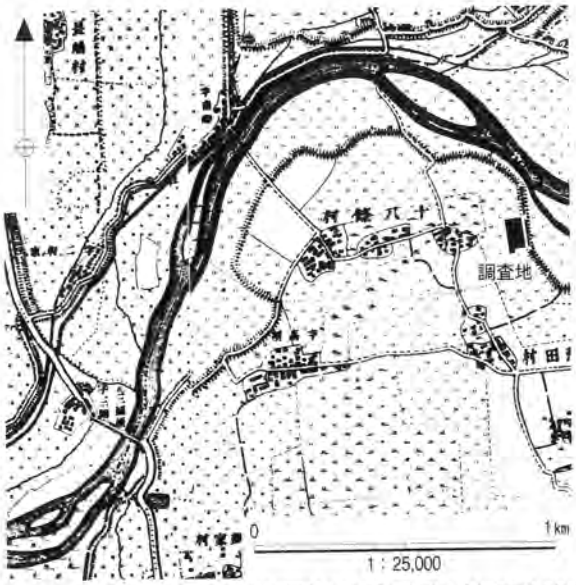


図２　調査地位置図〈1885(明治18)年〉［清水靖夫編1995］

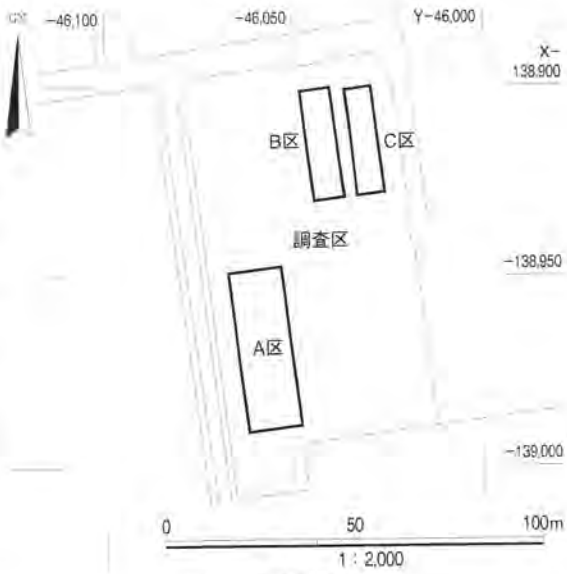


図３　調査区位置図

田市教育委員会1996・2002・2003・2014］。

今回の調査地で実施された大阪市教育委員会文化財保護担当による試掘調査で、地表下約1.1m以下の深さにおいて、本格的な発掘調査を必要とする室町～江戸時代の遺構面および遺物包含層が検出された。そのため、こうした遺構面の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に、発掘調査を実施することになった。

本調査では調査区を３箇所設定し、A・B・C区とした(図３)。４月２日にA区として東西14m×南北42mの調査区を設定し、重機によって盛土・攪乱層(第０層)を除去した。A区は建物の基礎や建物解体による攪乱が著しく、特にA区中央部は遺構が一部しか残存していなかった。４月21日にC区として東西７m×南北28mの調査区を設定し、重機によって盛土・攪乱層(第０層)を除去した。C区もA区と同様、建物の影響を受けて上層部の攪乱が著しかった。５月20日にB区として東西８m×南北29mの調査区を設定し、重機によって盛土・攪乱層(第０層)を除去した。B区は東南隅を除いて、攪乱は受けていなかった。それぞれの調査区について、第１層からは人力による掘下げを行い、遺構の検出、遺物の採集、実測図の作成、写真撮影を行った。最終的に、河川氾濫堆積層である第５～８層を掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認し、６月13日には埋め戻し、機材の撤収などすべての作業を終了した。また、６月3日に、調査地に近い東三国小学校５・６年生約80人が発掘現場を見学した。

本報告書の図２の方位は真北、それ以外の図の方位は世界測地系に基づく座標北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○mと記している。なお、基準点は専門業者がスタティック測量を行い、その成果を得た。

２)調査の結果

ｉ)A区

a. A区の層序(図４～６)

第０層：現代の盛土・攪乱層である。層厚90～220cmである。

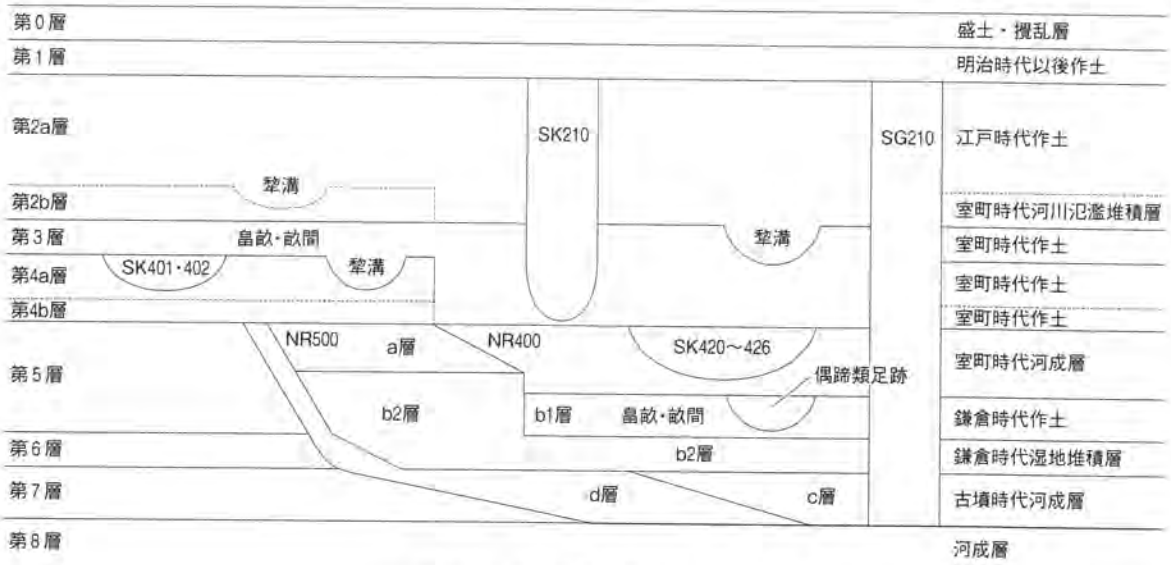


図4　地層と遺構の関係図(A区)

第1層：黒褐色(5Y3/2)シルト質細粒砂に細粒砂の偽礫を多数含む作土層で、層厚8cmである。第1層は攪乱のため調査区南西部にしか残っていなかった。明治時代以後の作土層である。

第2層：第2a・2b層の2層に細分される。

第2a層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)ないしにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂の作土層で、層厚8～20cmである。18世紀の磁器が出土し、江戸時代の作土層である。第2a層上面でSG201・SK210、下面で犂溝を検出した。

第2b層はにぶい黄褐色(10YR5/3)ないし暗褐色(7.5Y3/4)細粒砂からなる河川氾濫堆積層で、層厚5～20cmである。15世紀の土器が出土した。第2b層は調査区南部(南端からNR500肩部まで)に分布し、北部には広がらない。

第3層：褐色(10YR4/4)ないし暗褐色(10YR3/4)細礫混り細粒砂質シルトの作土層である。層厚10～20cm、12～16世紀の土器が出土し、室町時代の作土層である。第3層上面で畠畝・畝間、下面で犂溝を検出した。

第4層：第4a・4b層の2層に細分される。

第4a層は暗褐色(10YR3/4)シルト質細粒砂からなる作土層で、酸化鉄・酸化マンガンの斑紋が見られる。層厚15～20cmで、12～15世紀の土器が出土し、室町時代の作土層である。本層上面でSK401・402を検出した。

第4b層は褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂の作土層で、層厚10～18cmである。12～15世紀の土器が出土し、室町時代の作土層である。

第4a・4b層は調査区南部(南端からNR500肩部付近まで)に分布し、北部には広がらない。

第5層：褐色(10YR4/4)ないし黄褐色(2.5Y5/3)極細粒～細粒砂からなる河成層である。層厚40～45cmで、一部にシルトの薄層が見られる。古墳時代前期の土器が出土した。本層は調査区南部(南端からNR500肩部付近まで)に分布し、北部には広がらない。

第6層：黒褐色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルトに暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒～細粒砂の薄層を挟む河

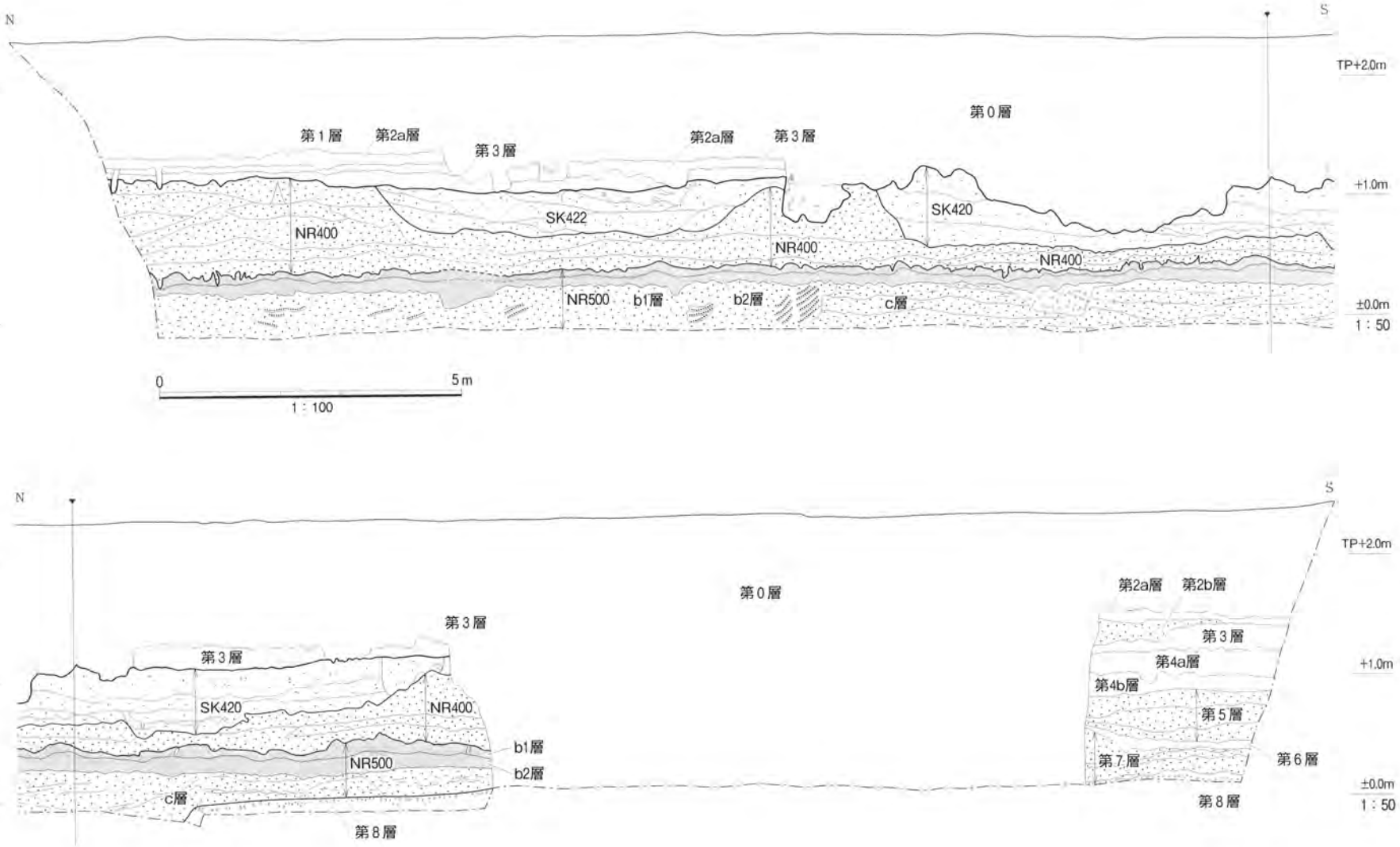


図5　東壁地層断面図（A区）

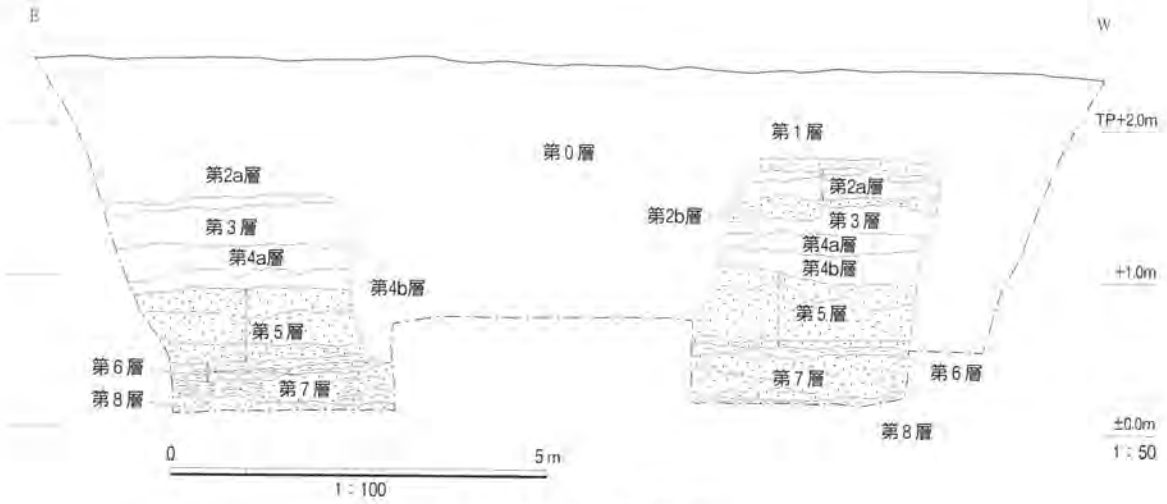


図6　南壁地層断面図(A区)

成層である。層厚10cmで遺物は出土していない。本層は調査区南部(南端からNR500肩部付近まで)に分布し、北部には広がらない。

第7層：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂とシルトの互層からなる河成層である。層厚10～40cmで、遺物は出土していない。本層は調査区南部(南端からNR500肩部まで)に分布し、北部には広がらない。

第8層：浅黄色(2.5Y7/4)粗粒砂～中礫からなる河成層である。層厚50cm以上で、下限は確認していない。北東に向かって低くなる。本層は調査区全域に広がる。遺物は出土していない。

b. 古墳～室町時代の遺構と遺物

第5層上面で、流路NR500を検出した(図7～9)。

NR500　調査区中・北部で検出した流路で、南岸を確認した。南北幅32m以上、深さ0.7～1.0m、南東から北西の方向に流れている。流路の方向は、東で南に18°前後振れる。

流路にはa～d層が堆積していた。a層はにぶい黄褐色(10YR5/4)ないし黄褐色(10YR5/6)シルト質細粒砂からなる河成層で、層厚30cmである。a層は南肩部にしか確認できないが、後述する流路NR400によって削られたものと考えられる。b層は流路が埋没する過程中の湿地堆積層で、b1・b2層の2層に細分される。b1層は灰黄色(10YR4/2)ないし黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚5～10cmである。b2層を耕起したものと考えられる。b1層上面で、畠畝・畝間、偶蹄類の足跡を検出した。b2層は黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質～粘土質シルトからなる湿地堆積層で、層厚20～50cmである。c層はにぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂とシルトの薄層の互層からなる河成層で、細礫を含む。底部に堆積し、層厚10～80cm以上である。d層はにぶい黄褐色(10YR4/3)ないしオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂とシルトの薄層の互層からなる河成層で、南肩部付近に堆積し、層厚20～30cmである。

a層から須恵器壺1、11～12世紀の土師器皿、土師器羽釜2、黒色土器椀3、瓦器椀4が出土した。そのほか、古墳時代の土師器壺・甕・高杯5・6、須恵器杯・壺・高杯7が出土した。1は壺の底部で、底径7.5cm、底部外面はヘラキリのあとナデ調整している。時期の詳細は不明であるが、10世紀頃のものであろうか。2は突帯状の短い鍔が体部の高い位置に付くので口縁部の出が極端に短くなっ

図7　第5層上面・NR500上面遺構平面図(A区)

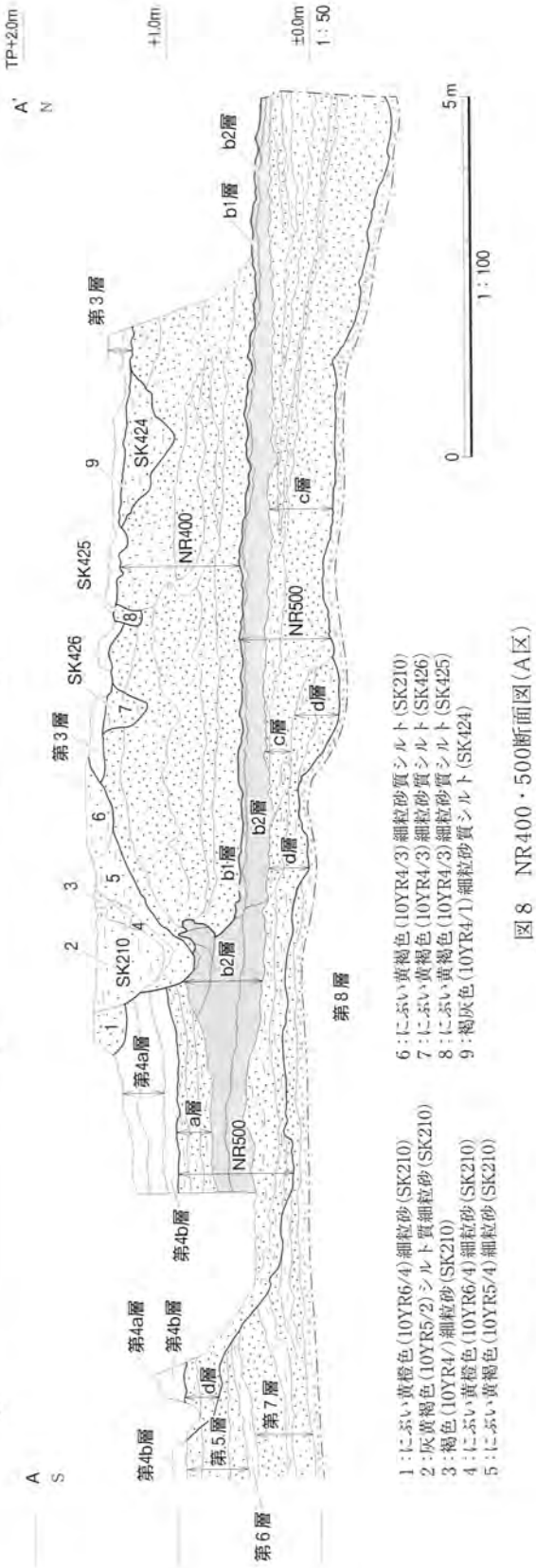


図8　NR400・500断面図(A区)

ており、端部は平坦である。調整は内外面ともにナデである。10世紀のものであろう[古代の土器研究会編1996]。3は黒色土器椀の高台部で、底径7.5cm、内面が黒色である。内面はミガキ調整している。10～11世紀のものであろう。4は口径11.8cm、外面下半部はユビオサエ調整で、内面の暗文は粗い。13世紀のものであろう。5は高杯の杯部で、脚部は欠損している。杯部の屈曲位から口縁端部まで直線的に立ち上がり、屈曲位の位置が低い。調整は磨滅のため不明であるが、杯部外面の口縁部付近には横方向のハケメがみられる。6は高杯の脚部で、杯部は欠損している。脚部の裾部は短く「ハ」の字状に開き、スカシ孔はない。調整は脚部外面が縦方向のハケ、脚裾部の内面が横方向のナデである。5・6は古墳時代前期の布留式期Ⅲ[米田敏幸1991・杉本厚典2003]に属するものであろう。7は有蓋高杯で、口径12.6cm、底径8.2cm、高さ7.7cm以上、杯受部の立ち上がりが欠損している。脚部には3方向の台形スカシ孔があり、脚の端部で下方に曲げられている。5世紀後半のものであろう。

b1層から鎌倉時代の土師器皿、古墳時代前期の土師器が出土した。

b2層から11～12世紀の土師器皿・羽釜8、瓦器椀9、13世紀後半の瓦質土器三足釜・羽釜10が出土

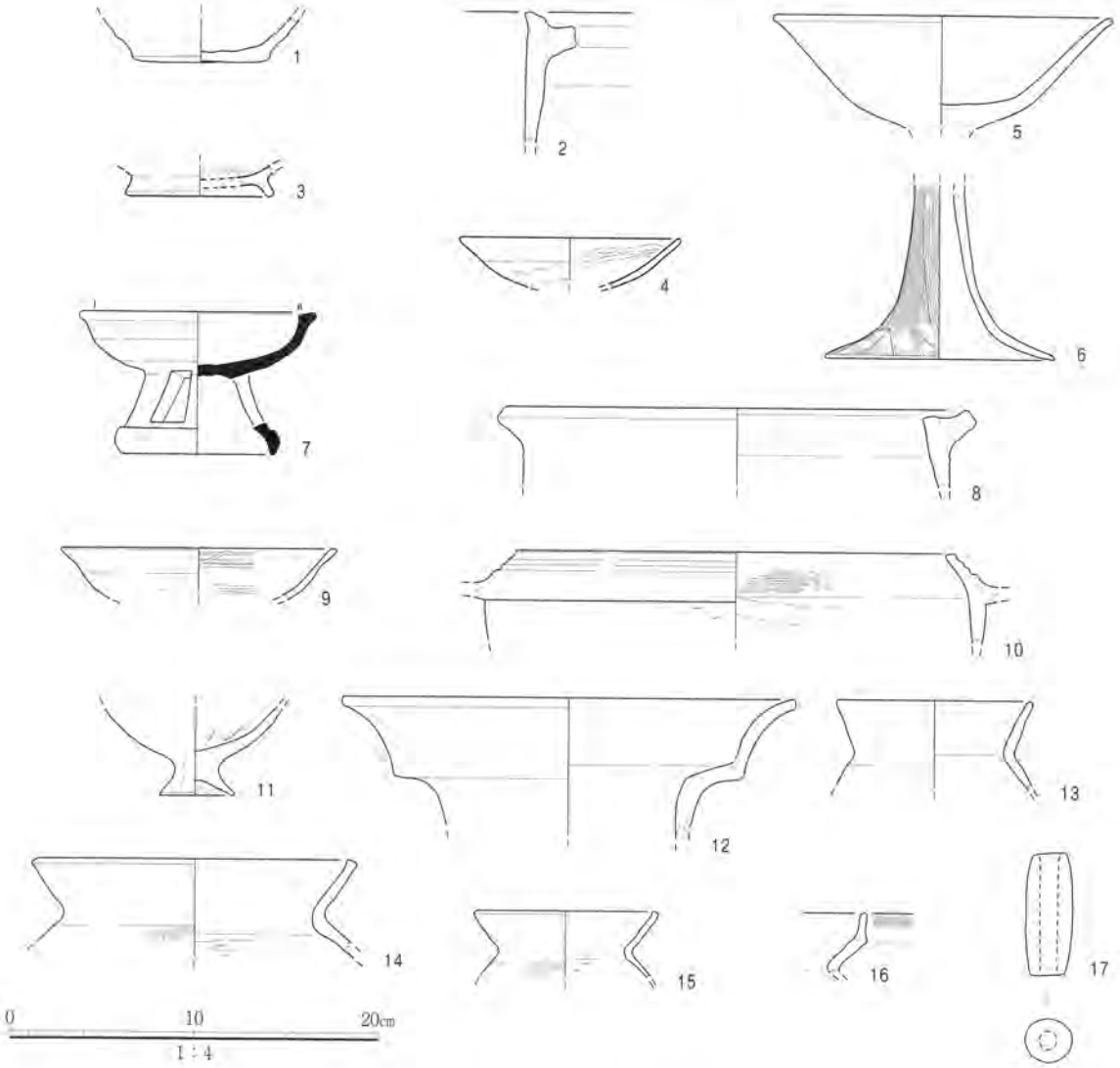


図9　A区出土遺物実測図(1)

NR500a層(1～7)、NR500b2層(8～12)、NR500d層(13～17)

した。そのほか、鎌倉時代の瓦質土器浅鉢、瓦器皿、常滑焼甕、東播系須恵器甕、平瓦、丸瓦が出土した。また、古墳時代の土師器高杯・鉢11・壺12・甕、須恵器杯・甕や弥生時代後期の甕が出土した。8は短い鍔が体部の高い位置に付くので口縁部の出はほとんどない。口縁端部は平坦で、調整は磨滅のため不明である。12世紀頃のものと考えられる。9は口径14.6cm、内面の暗文は粗くなっている。13世紀前半のものであろう。10は口径23.6cm、口縁部は内傾し、口縁部外面の段もはっきりしている。調整は、内面は横方向のハケののちナデ、外面の鍔部以下は横方向のケズリである。14世紀前半頃のものと考えられる。11は小型台付鉢形土器で、鉢部内面底部にはクモの巣状に板状工具のあたりが残っているが、ていねいにナデ調整している。底径3.8cm、高さ2.0cmの脚を張り付けている。脚部付近は赤く焼けており、製塩土器の可能性がある。12は二重口縁壺で、口径24.2cm、口縁部は外反し大きく開く。調整は磨滅のため不明で、色調は橙色、胎土に結晶片岩の角礫を含む。阿波系の土器と見られる。11・12は古墳時代前期の布留式期Ⅱに属すると考えられる。

d層から、弥生時代後期の甕、土師器壺13・甕14～16・高杯・器台、土錘17が出土した。13は小型壺で、口径10.4cm、口縁部は外反し端部は丸くおさめている。調整は全体にヨコナデであるが、体部内面はケズリののちナデている。14・15は甕で、14は口径16.9cm、15は口径9.5cm、いずれも口縁部は外反し端部は平坦で内側にやや肥厚する。調整は外面が縦方向のハケ、体部内面は横方向のヘラケズリである。16は甕の口縁部片で、口縁部は外反したのち直立し端部は丸くおさめ、外面に数条の櫛描直線文を施す。体部内面はヘラケズリ調整で、吉備系の甕である。13は古墳時代前期の布留式期Ⅲ、14～16は布留式期Ⅱに属するものであろう。17は管状土錘で、長さ6.6cm、直径2.4cm、孔径0.9cm、重さ41.4gである。

NR500b層上面で、畠の畝・畝間、偶蹄類の足跡を検出した(図7～9)。

畠　調査区中・北部で検出した畠の畝・畝間である。畝間は幅0.4～0.7m、深さ0.05mの南北方向であるが、0.8～1.0m間隔で平行に並んでいた。また、調査区東北隅部には幅0.4m、深さ0.05mの東西方向の畝間が認められた。畝間は一部に切り合う箇所があり、新旧関係が見られるので、畠は改修しながら耕作されている。南北畝・畝間の方向は北で東に約14°振れている。畠の標高は、南部で平均TP+0.5m、北部で平均TP+0.4mである。畠の作土であるb1層からは鎌倉時代の土器が、b1層の母体であるb2層からは11～14世紀前半の土器が、畠を覆うNR400の堆積層からは13～15世紀の土器が出土している。これらのことから、畠の時期は鎌倉時代であろう。

足跡群　偶蹄類(ウシ)の足跡である。歩いた方向など、一定の法則性は認められなかった。

NR500a層上面で流路NR400を検出した(図7・8・15)。

NR400　調査区中・北部で検出した流路で、南岸を確認した。南北幅24m以上、深さ0.7～1.0m、南東から北西の方向に流れている。流路の方向は、東で南に約21°振れている。

流路内には、にぶい褐色(10YR4/3)～褐色(10YR4/4)極細粒～細粒砂がシルトの薄層を挟んで堆積していた。上方では一部で中粒～粗粒砂が見られた。層厚60～80cmである。流路は鎌倉時代の畠の上面を削り、最終的には畠を砂で覆っている。

堆積層から13世紀の瓦器椀、15世紀後半の土師器皿・瓦質土器羽釜、瓦質土器擂鉢18、東播系須恵

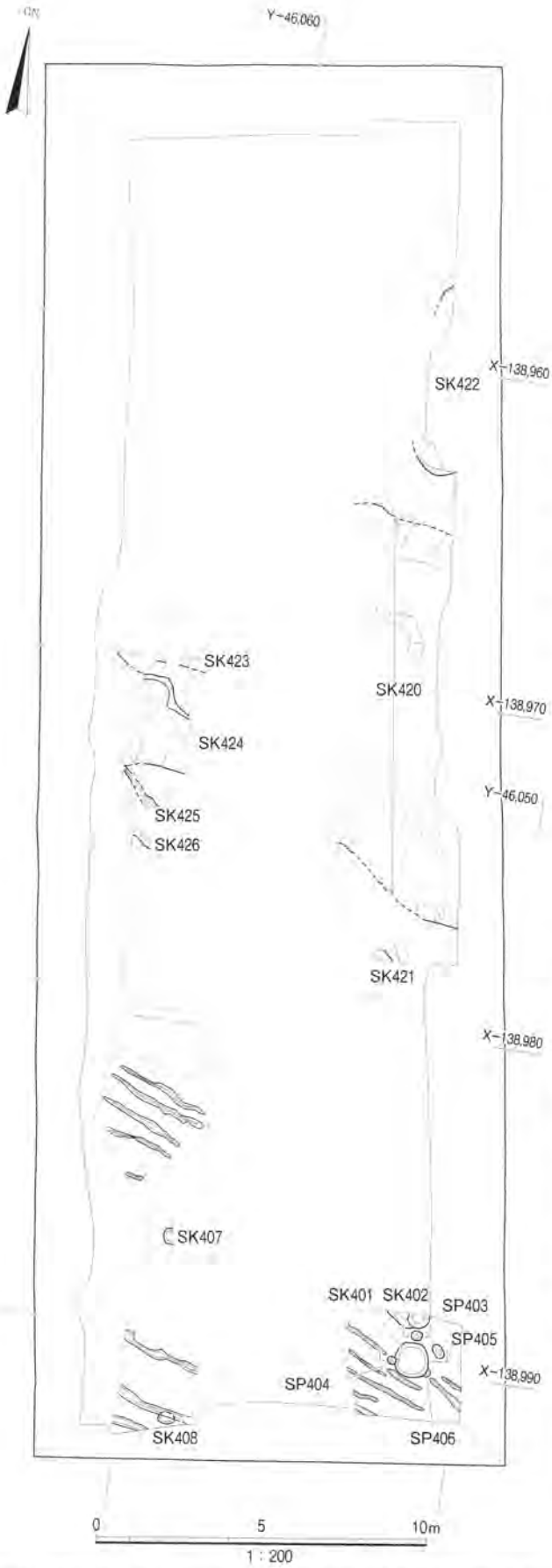


図10　NR400上面・第4a層上面・第3層下面遺構平面図(A区)

器鉢が出土した。18の口縁部は断面三角形に近く、外面の稜線も明瞭であるが、全体として丸味を帯びている。外面の調整は、口縁部以下は不定方向のヘラケズリである。15世紀のものであろう。

NR400堆積層上面で土壙SK420～426を検出した(図5・8・10・15)。

SK420　調査区中部東側で検出した東西4.0m以上、南北10.0～11.0m、深さ0.6mの溝状の土壙で、底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂～シルト質砂、褐色細粒砂質シルトである。埋土から15世紀後半の土師器皿、12～13世紀の瓦器椀、瓦質土器羽釜19～21、16世紀の中国産線描蓮弁文青磁碗・備前焼擂鉢、瓦質土器足鍋、備前焼甕・徳利、常滑焼甕が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器壺が出土した。19の口縁部は直立ぎみで、20・21の口縁部はやや内傾している。21の焼成は土師質である。いずれの羽釜も口縁端部は平坦で、調整は外面の鍔部以下は横方向のヘラケズリ、内面は横方向のハケで、口縁部付近は横方向のハケのあとヨコナデである。19～21は15世紀後半のものであろう。

SK421　調査区東側中部で検出した東西0.9m以上、南北0.8m以上、深さ0.2m以上の土壙で、攪乱のためわずかにしか残存しておらず、詳細は不明である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトである。

SK422　調査区東北部で検出した東西1.0m以上、南北5.5m、深さ0.4mの土壙で、底面は平坦である。埋土は褐色シルト質細粒砂、にぶい黄褐色細粒砂質シルトである。埋土から15世紀後半～16世紀初頭の瓦質土

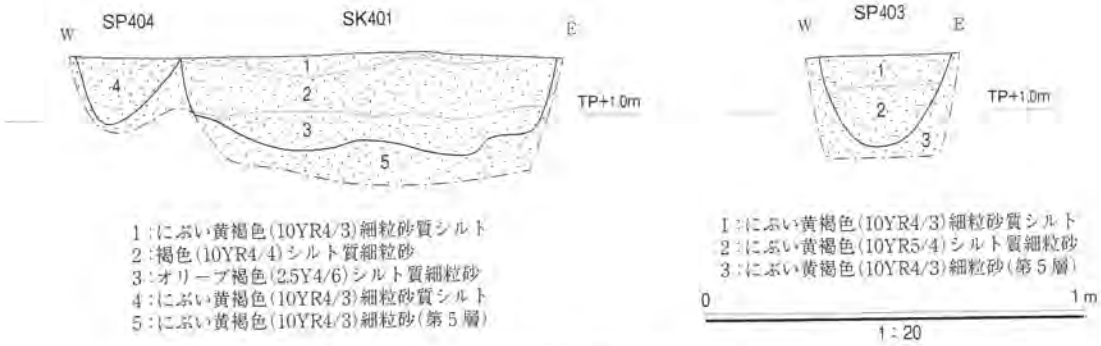


図11　SK401・SP403・SP404断面図(A区)

器羽釜が出土した。

SK423　調査区西側中部で検出した東西2.4m以上、南北2.1m以上、深さ0.4mの土壙で、攪乱のため一部しか残存しておらず、詳細は不明である。埋土は褐灰色細粒砂質シルトである。

SK424　調査区西側中部で検出した東西3.7m以上、南北3.0m、深さ0.3mの溝状の土壙で、攪乱のため一部しか残存しておらず、詳細は不明である。埋土は褐灰色細粒砂質シルトである。埋土から15世紀後半の土師器皿、12～13世紀の瓦器椀、15世紀後半の瓦質土器羽釜、常滑焼甕が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器が出土した。

SK425　調査区西側中部で検出した東西1.7m以上、南北0.2m、深さ0.2mの溝状の土壙で、攪乱のためほとんど残存しておらず、詳細は不明である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトである。

SK426　調査区西側中部で検出した東西0.7m以上、南北0.3m以上、深さ0.3mの溝状の土壙で、攪乱のためごく一部しか残存しておらず、詳細は不明である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトである。埋土から古墳時代前期の土師器が出土した。

以上、SK420～426については、時期は出土遺物から、室町時代後半とみられるが、性格については不明である。土(砂)採り穴の可能性があるが、SK420の形態が溝状を呈し、その方向が南東－北西を示して流路NR400と同じであり、ほかの土壙も同様な形態・同方向の傾向にあることから、洪水時に流路となり削り取られた窪地を埋めたものであることも考えられる。

第4a層上面で土壙SK401・402・407・408、小穴SP403～406を検出した(図10・11・15)。

SK401　調査区東南隅部で検出した東西1.2m、南北1.0m、深さ0.2mの楕円形の土壙である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルト、褐色シルト質細粒砂、オリーブ褐色シルト質細粒砂である。埋土から土師器皿22～24、15世紀後半の瓦質土器羽釜、常滑焼甕が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器杯が出土した。22は口径6.5cm、高さ1.8cm、色調は浅橙色、23は口径7.8cm、高さ1.6cm、色調はにぶい黄色、24は口径7.8cm、高さ1.6cm、色調は淡黄色である。22の底部中央が極端な上底(へそ皿)、23・24の底部がやや上底で、いずれも口縁部が底部から外側に強く屈曲して立ち上がり、やや外反する形態である。22～24は15世紀後半のものであろう。

SK402　調査区南東隅部で検出した東西1.2m以上、南北0.9m以上、深さ0.2mの不整形な土壙である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細粒砂である。埋土から土師器皿25が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器壺・高杯・甕が出土した。25は口径8.1cm、底部は欠損しているが、口縁部は大きく

外反する。色調はにぶい黄橙色である。15世紀のものと考えられる。

SK407　調査区西南部で検出した東西0.3m以上、南北0.5m、深さ0.1mの方形の土壙である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細粒砂で、炭が混じる。埋土から15世紀後半の土師器皿、13世紀前半の瓦器椀が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器が出土した。

SK408　調査区西南部で検出した長軸0.4m、短軸0.3m、深さ0.1mの楕円形の土壙である。埋土は暗褐色細粒砂質シルトである。

SP403　調査区東南隅部で検出した直径0.35m、深さ0.25mの円形の小穴である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルト・シルト質細粒砂である。埋土から瓦器椀が出土した。

SP404　調査区東南隅部で検出した直径0.25m、深さ0.25mの円形の小穴である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトである。埋土から古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器杯が出土した。

SP405　調査区東南隅部で検出した長軸0.5m、短軸0.3m、深さ0.2mの楕円形の小穴である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細粒砂である。

SP406　調査区東南隅部で検出した直径0.25m、深さ0.15mの円形の小穴である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細粒砂である。

SK401・402とSP403～406は近接して検出された。SP403～406はSK401の周囲に約1.0mの間隔でほぼ方形に配置されており、SK401に伴うものと考えられる。また、時期は15世紀後半であろう。これらの遺構は、周囲が耕作地であることからみると、耕作に関係するものであろう。

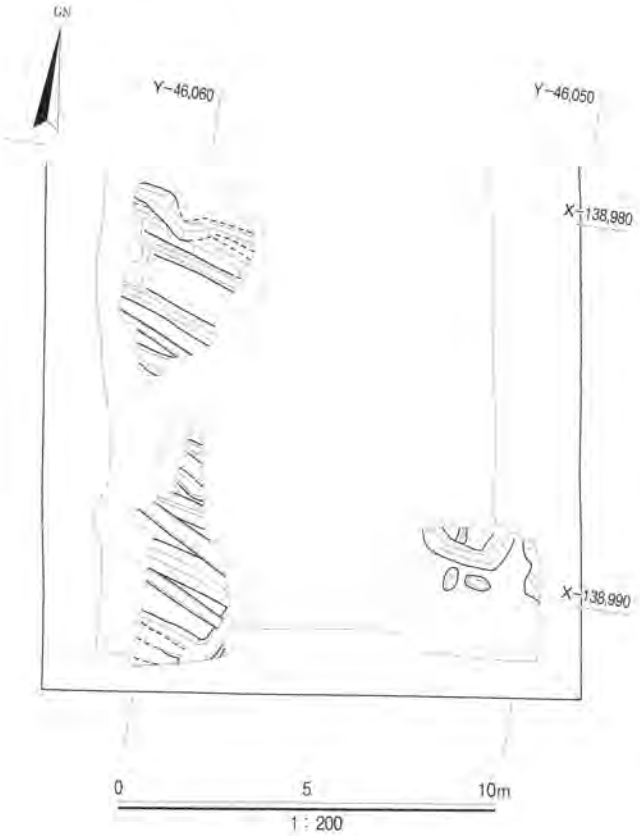


図12　第3層上面遺構平面図(A区)

第3層下面で犂溝群を検出した(図10)。

犂溝群　調査区南部で検出した東西方向の小溝群である。東西溝は幅0.1～0.2m、深さ0.01m、溝埋土は暗褐色細粒砂質シルトである。方向は東で南に15～17°振れている。

第3層上面で畠を検出した(図12)。

畠　調査区南部で検出した畠の畝・畝間である。調査区西南部では幅0.5～0.7m、深さ0.1mの東西方向の畝間群が、約1.0m間隔で平行に並んでいた。一部に畝間どうしが切り合う箇所があり、新旧関係が見られるので、畠は改修しながら耕作されている。東西畝の方向は東で南に約18°振る。また、調査区東南隅部では、幅0.5m、深さ0.05mの畝間がコの字状に巡っており、南北方向の畝・畝間がある。畠の作土層である第3層からは15～16世

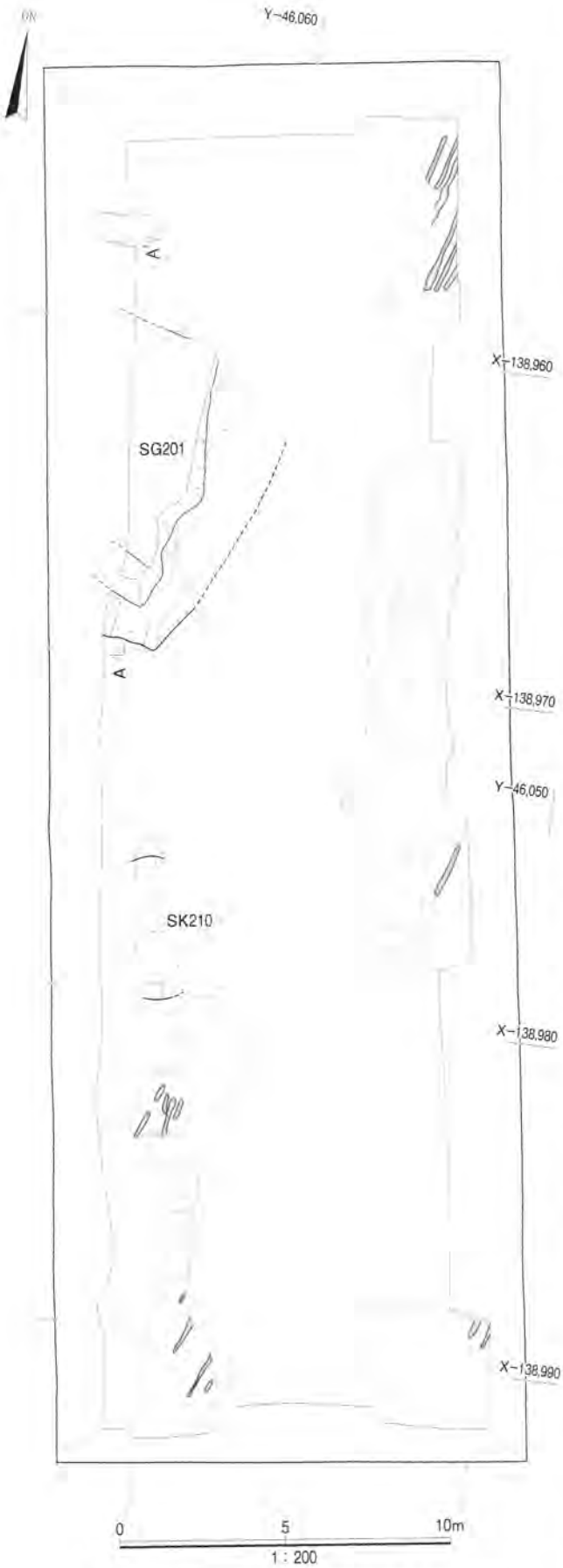


図13　第2a層下面・第2a層上面遺構平面図(A区)

紀初頭の土器が、畠を覆う第2b層からは15世紀の土器が出土している。これらのことから、畠の時期は室町時代後半と推定される。

c. 江戸時代以後の遺構と遺物

第2a層下面で犂溝群を検出した(図13)。

犂溝群　南北方向の小溝群である。南北溝は幅0.1m、深さ0.01mのものが多く、方向は北で東に約12°振れる。埋土はにぶい黄褐～暗褐色シルト質細粒砂である。犂溝は攪乱のため調査区南部と東北隅部でしか検出できなかったが、調査区全域に存在したと考えられる。

第2a層上面で溜池SG201、土壙SK210を検出した(図8・13・14)。攪乱のため層位関係は不明であるが、出土遺物などから判断して、第2a層上面と推定する。

SG201　調査区西北部で検出した南北9.3m以上、東西2.5m以上、深さ0.9m以上のほぼ方形の池である。南辺と東辺は、土を盛って堤を築き、木で護岸している。北辺は攪乱のため不明である。残存していた南辺の断面観察によれば、南辺は丸太杭を打ち込み、これに縦板を添え、縦板を横方向の角杭で押さえて、丸太杭・縦板・角杭を釘止めしている。この杭板を幅約1.3mの間隔で2列作り、その間にシルト質細粒砂・細粒砂・粘土質シルトを盛って、堤・護岸としている(第2次堤)。東辺は攪乱のため一部しか残存していなかったが、杭が列状に配置されている痕跡が認められるので、同様な構造であろう。なお、南辺の堤・護岸は、第1次堤・第2次堤の2ブロックが存在するので、何度か改修されていると考えられる。

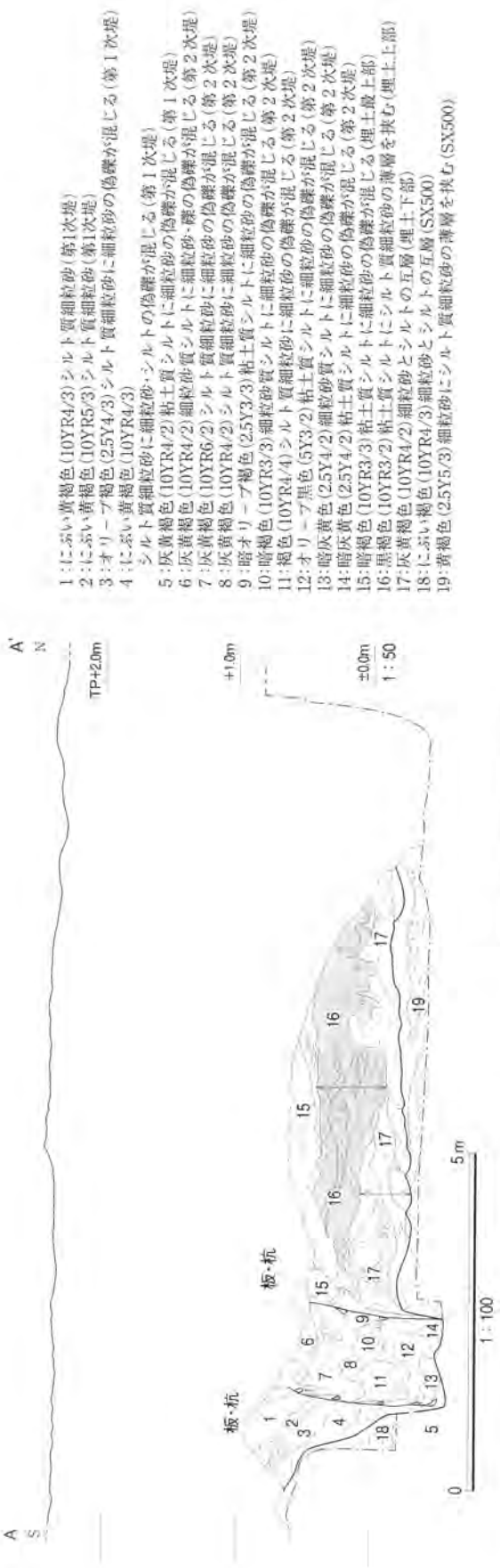


図14　SG201断面図(A区)

池内の埋土下部は灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂とシルトの互層からなる水成層である。上部は黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト～粘土質シルトからなる湿地堆積層、最上部は暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトに細粒砂の偽礫が混る埋立土である。

池からの出土遺物はすべて細片で、図化できなかった。埋土最上部から、明治時代初期の肥前磁器染付大皿、19世紀の瀬戸美濃焼磁器染付碗、19世紀前半の肥前磁器染付碗・関西系陶器土瓶・丹波焼徳利、17世紀後半の肥前磁器染付碗・丹波焼擂鉢、土師器焙烙、瓦質土器火鉢、堺擂鉢、丸瓦・平瓦・桟軒瓦・桟瓦が出土した。埋土上部から、19世紀の肥前磁器青磁・白磁・染付碗、19世紀の肥前施釉陶器鉢・肥前施釉陶器碗・関西系陶器土瓶・堺擂鉢、唐草文軒平瓦・平瓦が出土した。そのほか、瓦器椀、古墳時代前期の土師器高杯が出土した。埋土下部から、19世紀の肥前磁器染付碗・瀬戸美濃焼磁器染付碗・肥前施釉陶器碗・土師器焙烙・丹波焼擂鉢、平瓦が出土した。そのほか、13世紀の瓦器椀、15世紀後半の瓦質土器羽釜、古墳時代の土師器甕が出土した。また、第2次堤の盛土から、16世紀後半の中国産磁器染付小碗、17世紀前半の瀬戸美濃焼磁器碗、17世紀中～末の肥前陶器皿、17世紀の肥前陶器皿(絵唐津)、18世紀前半の肥前磁器染付碗、18世紀の肥前陶器皿(刷毛目)、18世紀後半～19世紀前半の肥前磁器染付碗、19世紀前半の瀬戸美濃焼磁器染付碗蓋・萩焼ピラ掛け碗・関西系陶器碗・土師器焙烙、堺擂鉢、丹波焼鉢、瓦質土器鉢、丸瓦・平瓦・桟瓦が出土した。そのほか、鎌倉時代の土師器・瓦、古墳時代前期の土師器甕が出土した。

以上、出土遺物などから見れば、池は17～

18世紀頃造られ、18～19世紀に機能したが次第に土砂が堆積し、明治時代初期には埋め立てられたと考えられる。

SK210　調査区西南部で検出した南北4.4m、東西1.5m以上、深さ0.7mの円形に近い土壙である。下部ににぶい黄褐色細粒砂～細粒砂質シルト、上部に灰黄褐色シルト質細粒砂が堆積していた。埋土上部から19世紀頃の関西系陶器が出土した。

土壙の性格については不明であるが、土(砂)採り穴の可能性がある。

d. 各層出土の遺物(図15)

第５層から弥生時代後期の甕、古墳時代前期の土師器壺・高杯・鉢27・甕28が出土した。27は有段

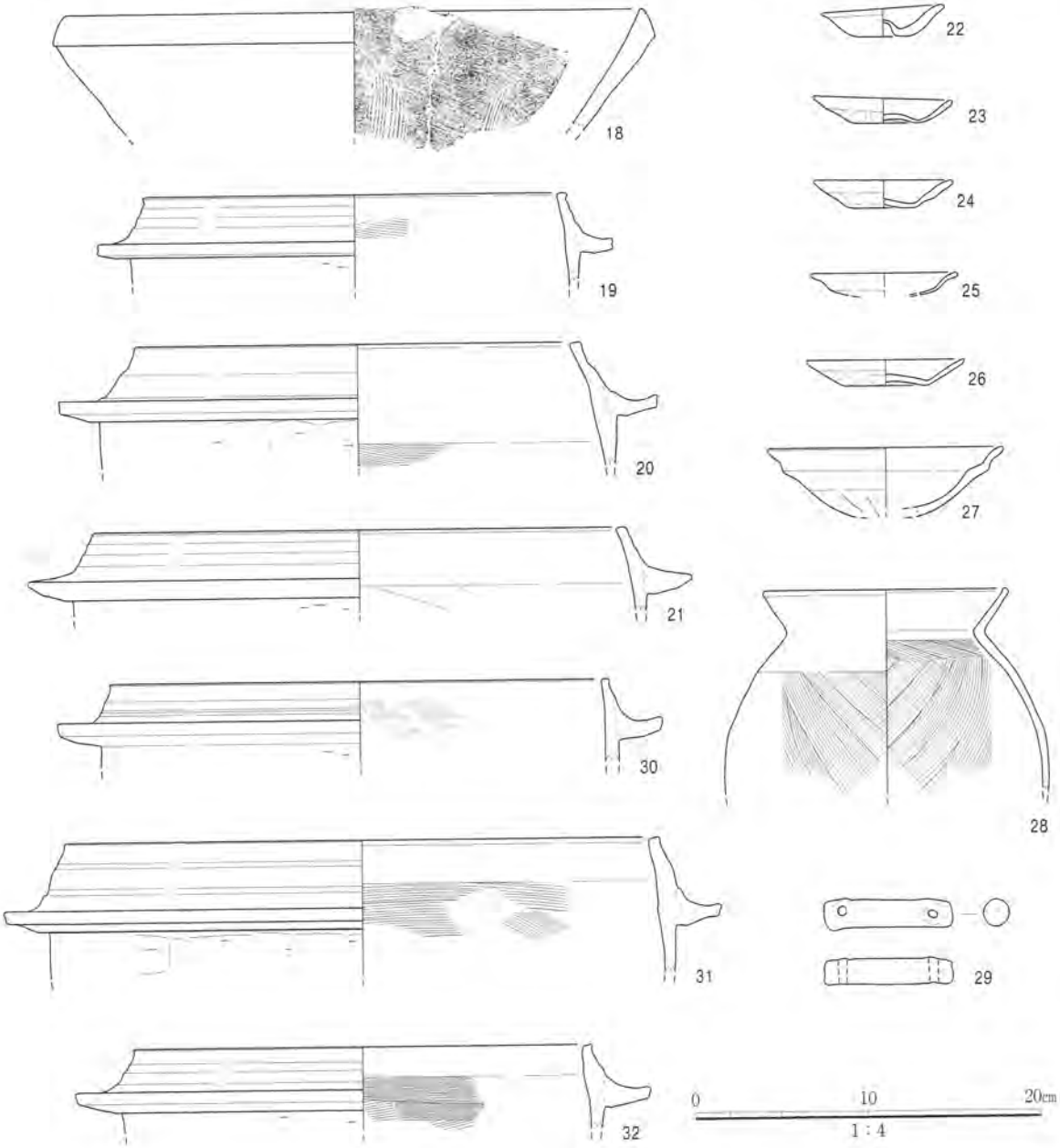


図15　A区出土遺物実測図(２)

NR400(18)、SK420(19～21)、SK401(22～24)、SK402(25)、

第５層(27・28)、第4b層(29)、第4a層(30・31)、第３層(32)、第2b層(26)

口縁鉢で、口径13.3cmである。調整は外面上半はヨコナデ、下半はヘラケズリののちヨコナデ、内面はヨコナデののちミガキを施している。色調は橙色である。28は口径13.8cm、胴部最大径18.7cm、口縁部は外反し端部はわずかに肥厚する。調整は体部外面は左上がりの縦方向のハケ、体部内面は最上部が左上がりの縦方向のハケ、それ以下は右上がりの縦方向のハケである。27は古墳時代前期の布留式期Ⅱ、28は布留式期Ⅲに属すると考えられる。

第4b層から15世紀の土師器皿、12～13世紀の瓦器椀、東播系須恵器鉢が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器高杯・甕、古墳時代後期の須恵器杯・壺と土錘29が出土した。29は棒状土錘で、長さ7.4cm、直径1.4cm、孔径0.5cm、重さ25.2gである。

第4a層から12～13世紀の土師器皿、15世紀の土師器皿、12世紀の瓦器椀、瓦質土器羽釜30・31、13世紀の中国産白磁皿が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器壺・甕、古墳時代後期の須恵器杯・壺・甕が出土した。30の口縁部は短く直立的で、31の口縁部はやや内傾している。31の焼成は土師質である。いずれも口縁端部は平坦で、調整は外面の鍔部以下は横方向のヘラケズリ、内面は横方向のハケで、口縁部付近はヨコナデである。30・31は15世紀後半のものであろう。

第3層から12～13世紀の土師器皿・瓦器椀・東播系須恵器鉢、13世紀の常滑焼甕・中国産青磁碗、15世紀後半～16世紀初頭の土師器皿・瓦質土器甕、瓦質土器羽釜32、平瓦が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器高杯・甕、古墳時代後期の須恵器杯・壺・甕が出土した。32の口縁部は直立ぎみで、焼成は土師質である。口縁端部は平坦で、調整は外面の鍔部以下は横方向のヘラケズリ、内面は横方向のハケで、口縁部はヨコナデである。15世紀後半～16世紀初頭のものであろう。

第2b層から土師器皿26、15世紀の瓦質土器甕、常滑焼甕が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器が出土した。26は口径9.0cm、高さ1.5cm、底部がやや上底で、口縁部が底から急に外側に湾曲して広がる形態である。色調は浅黄色である。15世紀のものであろう。

第2a層から18世紀の肥前磁器染付碗・土師器焙烙が出土した。そのほか、12世紀の土師器・瓦器、15世紀の土師器皿、古墳時代前期の土師器が出土した。

第1層から18世紀の肥前磁器染付碗が出土した。そのほか、古墳時代後期の須恵器杯が出土した。

ⅱ)B・C区

a. B・C区の層序(図16～19)

第0層：現代の盛土・攪乱層である。層厚150～200cmである。

第1層：黒褐色(5Y3/2)細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚10～14cmである。B区第1層から18世紀末～19世紀の磁器が出土した。B区の第1層は調査区北部と中・南部では第1層上面の標高に差があり(B区北端から南8.4mの地点に東西方向の畦畔がある)、北部の方が約0.3m高い。C区の第1層は攪乱のため、わずかにしか残っていなかったが、第1層上面の南北間の高さの関係はB区と同様と考えられる。明治時代以後の作土層である。B区の第1層下面で犂溝を検出した。

第2層：第2a・2b層の2層に細分される。

第2a層は暗灰黄色(2.5Y4/2)～オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルトの作土層で、層厚10～20cm

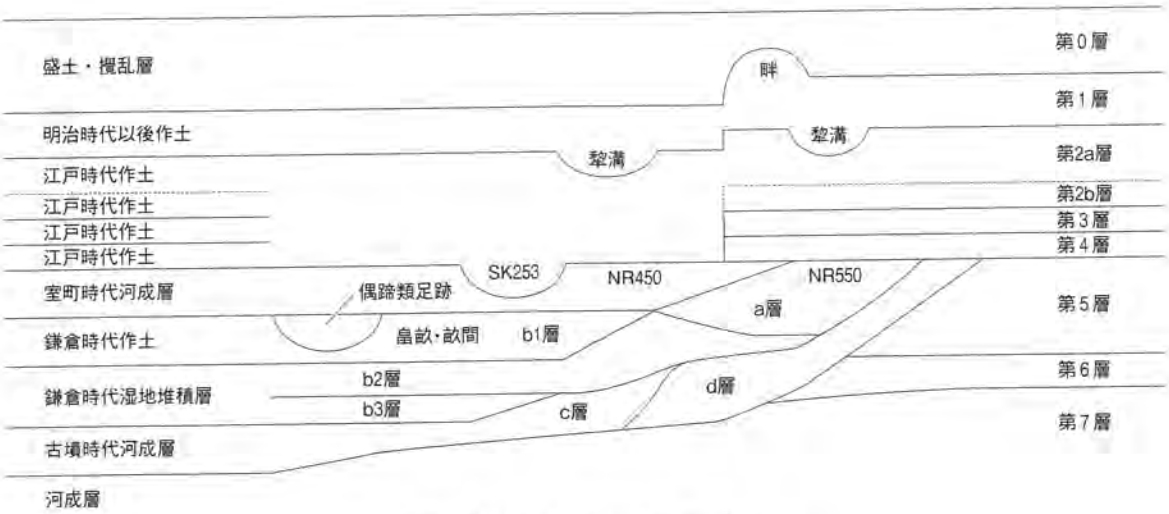


図16　地層と遺構の関係図(B・C区)

である。17～19世紀前半の土器が出土し、江戸時代の作土層である。B区の第2a層の高さは、畦畔を境に北部の方が約0.3m高い。B区の第2a層下面でSK253を検出した。

第2b層はオリーブ黒色(5Y3/2)～暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルトの作土層で、層厚10cmである。17～19世紀前半の土器が出土し、江戸時代の作土層である。B区の第2b層は畦畔を境に調査区北部に分布する。C区の第2b層もB区と同様に北部に分布する。

第3層：灰オリーブ色(10YR4/2)細礫混りシルト質細粒砂の作土層で、炭を含む。層厚10cmで、17～18世紀の土器が出土し、江戸時代の作土層である。B区の第3層は畦畔を境に調査区北部に分布する。C区の第3層もB区と同様に北部に分布する。

第4層：オリーブ黒色(5Y3/2)細礫混りシルト質細粒砂の作土層である。層厚10cmで、17～18世紀の土器が出土し、江戸時代の作土層である。B区の第4層は北部に分布するが、南部には広がらない。C区の第4層は北端部に分布するが、南限については不明である。

第5層：黄褐色(2.5Y5/4)極細粒～細粒砂からなる河成層である。層厚40～45cmで、遺物は出土していない。第5層はC区北端部(北端からNR550肩部付近まで)に分布し、南部には広がらない。また、B区には分布しない。

第6層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルトの河成層である。層厚10cm、遺物は出土していない。第6層はC区北端部(北端からNR550肩部付近まで)に分布し、南部には広がらない。また、B区には分布しない。

第7層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～細粒砂からなる河成層で、C区では一部に南東から北西方向のトラフ型斜交ラミナが見られる。層厚50cm以上で、遺物は出土していない。第7層はB・C区全域に分布する。

b. 古墳～鎌倉時代の遺構と遺物

第5層上面で、流路NR550を検出した(図17・18・20・22)。

NR550　B区全域、C区中・南部で検出した流路で、C区で北岸を確認した。南北幅25m以上、深さ0.6～1.3m、南東から北西の方向に流れていた。

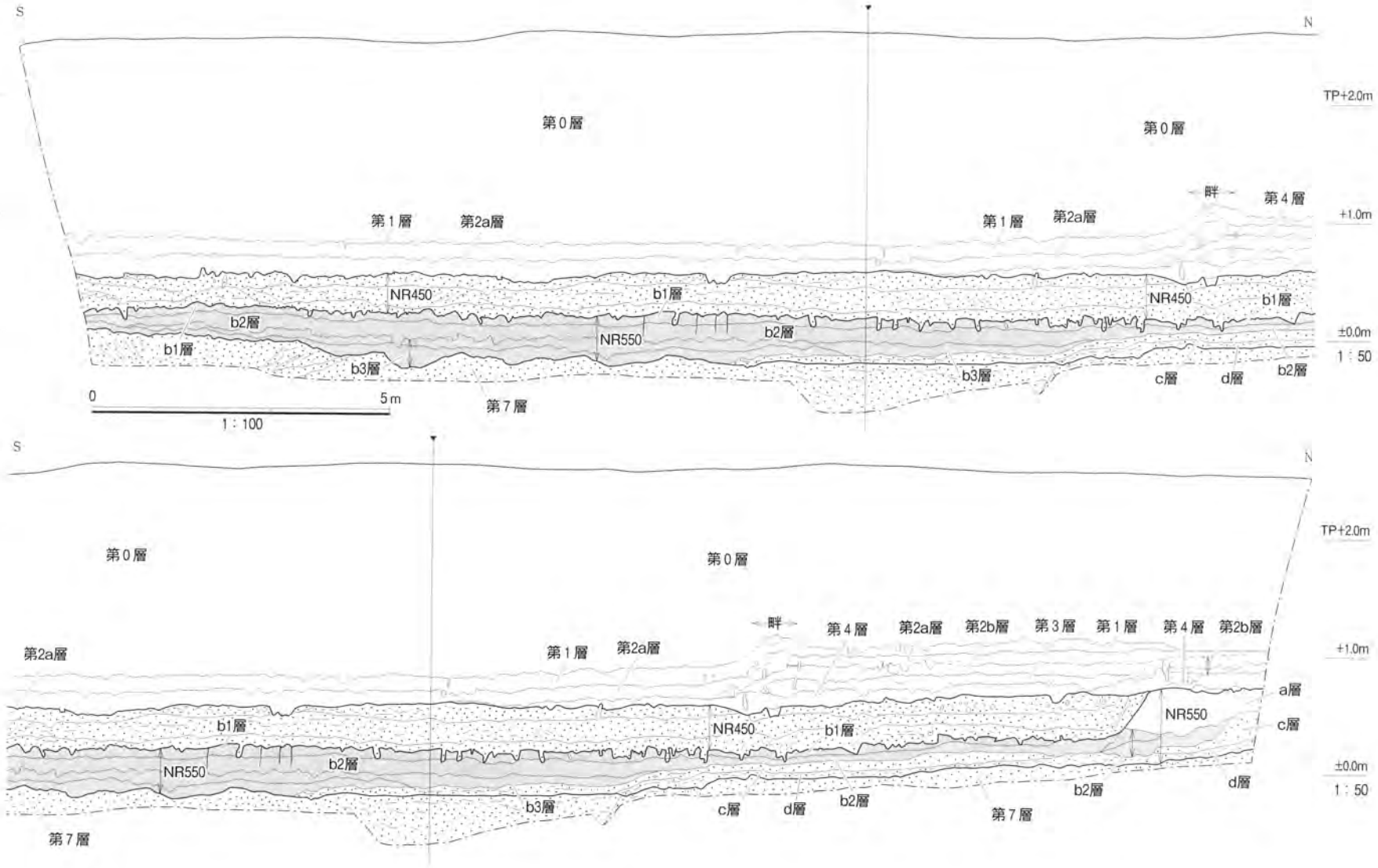


図17　西壁地層断面図(B区)

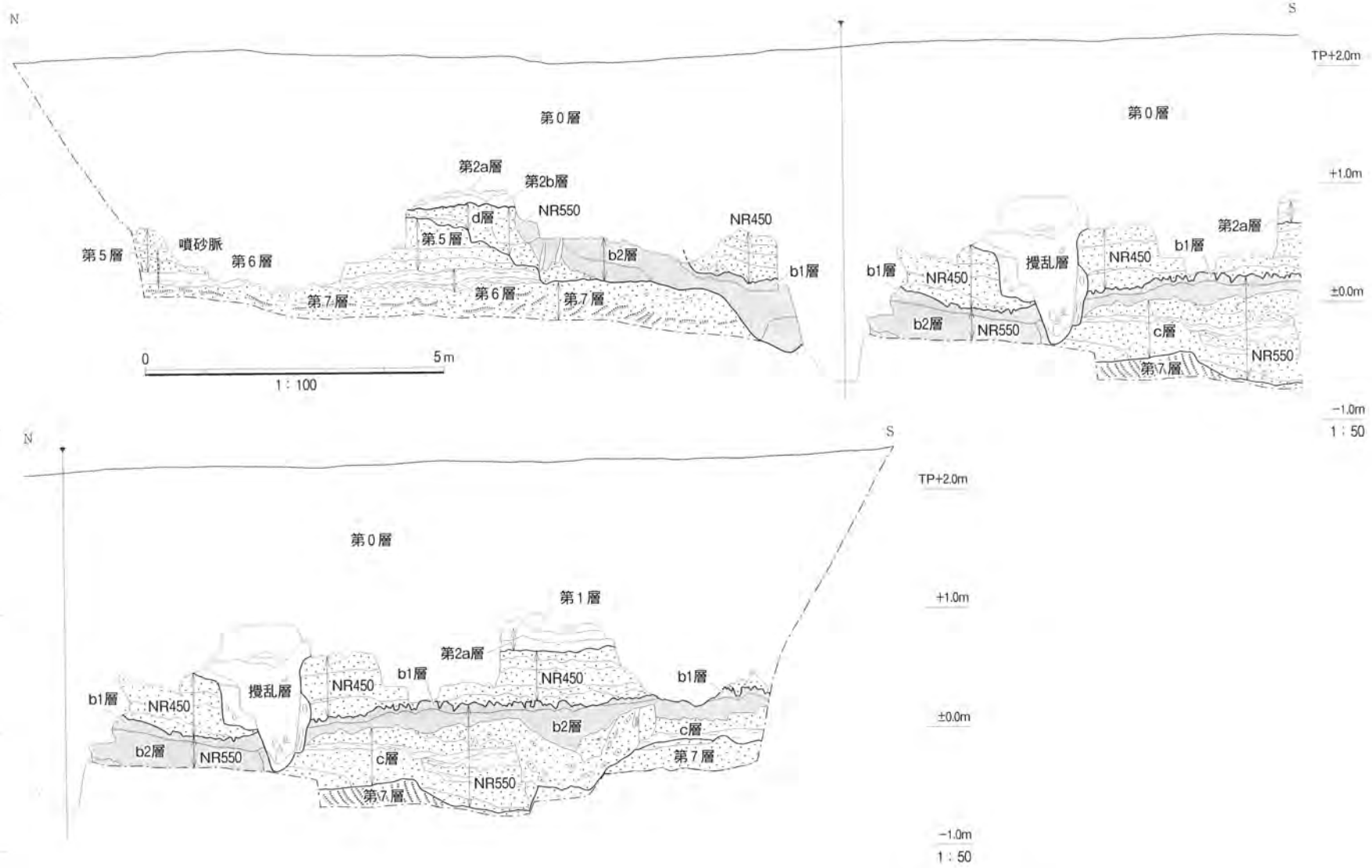


図18　東壁地層断面図(C区)

流路には、a～d層が堆積している。最上層のa層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトからなる層で、層厚20～30cmである。北肩部にしか確認できないが、後述する流路NR450によって削られたものと考えられる。b層は流路が埋没する過程中の湿地堆積層で、b1～b3層に細分される。b1層は黄灰色(2.5Y4/1)ないし黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト～粘土質シルトからなる作土層で、層厚5～10cmである。b2層を耕起したものと考えられる。上面で畠畝・畝間、偶蹄類の足跡を検出した。b2層は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトからなる湿地堆積層で、層厚10～18cmである。b3層はオリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルトからなる湿地堆積層で、層厚10cm、植物遺体を多量に含む。c層は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂からなる層で底部に堆積していた。C区では細粒砂と極細粒砂質シルトが互層状に堆積し、層厚10～70cmである。d層は暗灰黄色(2.5Y4/2)～褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒砂にシルトの薄層を挟む層である。肩部付近に堆積した層で、層厚20～40cmである。

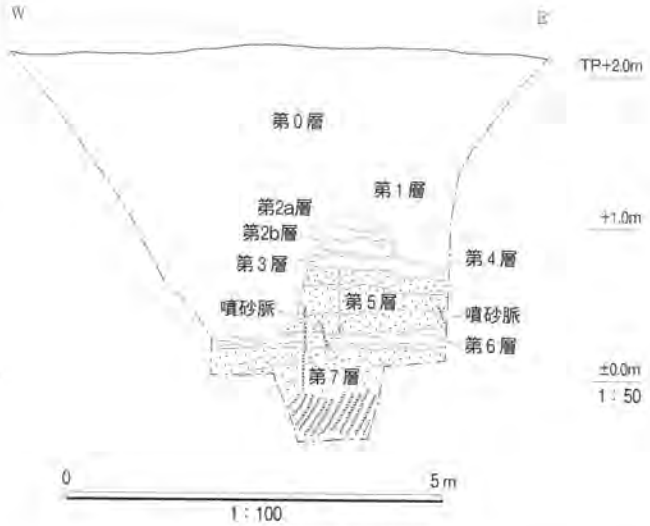


図19　北壁地層断面図(C区)

a層から古墳時代前期の土師器が出土した。b1層から13～14世紀の土師器皿が出土した。b2層から12世紀の土師器皿、12～13世紀の瓦器椀、10～11世紀の黒色土器椀A類、中国産青磁碗33、備前焼甕、平瓦が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器壺・甕が出土した。33は龍泉窯系鎬蓮弁文青磁碗で、灰オリーブ色の釉が掛る。13世紀前半のものであろう。c層から古墳時代前期の土師器が出土した。d層から古墳時代前期の土師器壺・甕が出土した。

NR550b層上面で、畠の畝・畝間、偶蹄類の足跡を検出した(図17・18・20)。

畠　調査区中・南部で検出した畠の畝・畝間である。幅0.2～0.5m、深さ0.05mの南北方向の畝間が、0.5～1.0m間隔で平行に並んでいた。また、北端部には、幅0.2m、深さ0.05mの東西方向の畝間が3条ある。畝・畝間の南北方向は北で東に約14°振れている。畠の標高は、B区南部でTP+0.2m、B区北部でTP+0.3m、C区南部でTP+0.2mである。畠の作土であるNR550b1層からは13～14世紀の土器が、b1層の母体であるb2層からは10～13世紀の土器が、畠を覆うNR450堆積層からは12～15世紀の土器が出土している。これらのことから、畠の時期は鎌倉時代であろう。

足跡群　偶蹄類(ウシ)の足跡である。足跡は、弧を描いたり、重なる場所があるが、なんらかの作業が行われたと推定できるような行跡は認められなかった。

流路NR550a層上面で流路NR450を検出した(図17・18・20・22)。

NR450　調査区中・南部で検出した流路で、北岸を確認した。南北幅20m以上、深さ0.7～1.0m、南東から北西の方向に流れている。流路には灰色極細粒～細粒砂で、一部にシルトの薄層を挟む層が堆積していた。鎌倉時代の畠の上面を削って、最終的には砂で覆うように埋没している。

図20　第5層上面・NR550上面遺構平面図(B・C区)

堆積層から土師器皿35、13世紀の土師器羽釜、12～13世紀の瓦器椀、瓦質土器擂鉢34、15世紀後半の瓦質土器羽釜、13世紀の中国産白磁皿、常滑焼甕が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器杯・甕が出土した。34の口縁部は断面三角形に近く、外面の稜線は明瞭であるが丸味を帯びている。外面の調整は、口縁部以下は横方向のヘラケズリである。15世紀のものであろう。35は口径6.8cm、色調は浅黄橙色、口縁部は緩く立ち上がって、端部を丸くおさめる。調整は内面と口縁部はヨコナデ、それ以外はユビオサエである。12～13世紀のものであろう。

c. 江戸時代以後の遺構と遺物

B区第2a層下面でSK253を検出した(図21)。

SK253　B区南部で検出した幅1.4m、長さ3.0m以上、深さ0.1mの長方形の土壙で、埋土は暗灰黄

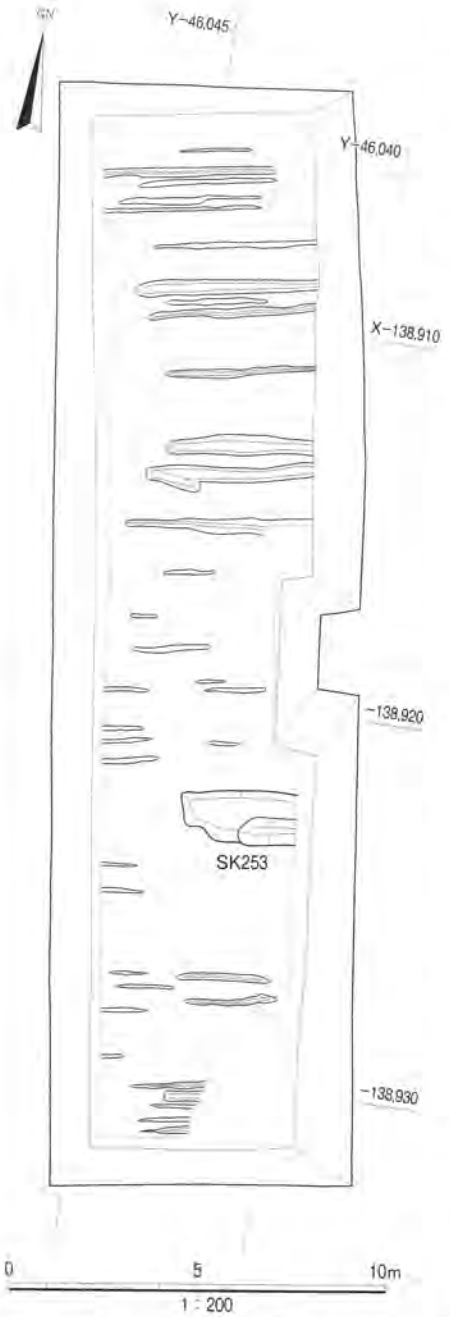


図21　第2a層下面・第1層下面遺構平面図（B区）

色細粒砂質シルトである。埋土から鎌倉時代の東播系須恵器鉢が出土した。耕作に関係した土壙と考えられる。

B区第1層下面で犂溝群を検出した(図21)。

犂溝群　B区で検出した東西方向の小溝群である。B区北端から南に8.5～11.0mの位置にある東西溝3条は、幅0.3～0.5m、深さ0.1mである。それ以外は、幅0.1～0.2m、深さ0.01mのものが多く、方向は東で北に6～9°振る。なお、B区北端から南8.4mの地点に第1層に属する東西方向の畦畔があり、犂溝検出面の高さは、畦畔を境に北が南より約0.3m高い。溝の埋土は黒褐色(5Y3/2)細粒砂質シルトである。埋土から18世紀末～19世紀初頭の肥前磁器染付碗、平瓦が出土した。

d. 各層出土の遺物

第4層から17世紀前半の丹波焼擂鉢、17世紀後半の肥前施釉陶器皿、17世紀末～18世紀前半の肥前磁器染付碗・肥前磁器香油壺・肥前京焼風陶器碗、18世紀前半の肥前磁器染付碗・肥前施釉陶器(刷毛目)、18世紀の土師器焙烙F2類[難波洋三1992]、18世紀末～19世紀初頭の肥前磁器染付端反碗蓋、石硯、土師器焜炉、備前焼壺、丹波焼瓶、平瓦が出土した。そのほか、12～13世紀の土師器皿・瓦器椀、13世紀後半の瓦質土器三足釜、常滑焼甕や古墳時代前期の土師器壺、古墳時代後期の須恵器甕が出土した。

第3層から17世紀前半の肥前施釉陶器碗・備前焼擂鉢、18世紀前半の肥前磁器染付碗・堺擂鉢、18世紀の肥前磁器染付碗が出土した。

第2b層から17世紀前半の肥前施釉陶器皿・肥前陶器碗(鉄絵唐津)、17世紀後半～18世紀初頭の肥前磁器染付碗、18世紀前半の肥前磁器染付碗、土人形(鳩)が出土した。

第2a層から16世紀末～17世紀初頭の瀬戸美濃焼施釉陶器皿(折縁ソギ皿)、17世紀前半の肥前施釉陶器碗・丹波焼擂鉢、17世紀後半の肥前磁器染付碗・備前焼擂鉢、17世紀後半～18世紀初頭の肥前京焼風陶器碗、17世紀後半～18世紀前半の丹波焼擂鉢、17世紀末～18世紀前半の肥前磁器染付碗・肥前施釉陶器皿(刷毛目)・丹波焼擂鉢、18世紀前半の肥前磁器染付碗、18世紀の肥前磁器染付碗・肥前施釉陶器碗、18世紀後半～19世紀初頭の肥前施釉陶器碗、18世紀末～19世紀初頭の関西系施釉陶器土瓶・肥前磁器染付碗蓋、19世紀前半の関西系施釉陶器碗、18～19世紀の土師器焙烙D3類、土師器焜炉、土人形(人物)、桟瓦、平瓦、青銅製キセル、寛永通宝が出土した。そのほか、古墳時代前期の土師器壺、

図22　B・C区出土遺物実測図
NR550b2層(33)、NR450(34・35)

古墳時代後期の須恵器甕、12世紀の中国産白磁椀、13世紀の瓦器椀、土師器皿、東播系須恵器鉢、瓦質土器擂鉢が出土した。

第1層から18世紀末～19世紀初頭の肥前磁器染付広東碗、19世紀頃の産地不明白色釉磁器碗が出土した。

3)まとめ(図1・23・24)

i)古墳時代の流路NR500・550を確認した。南のA区ではNR500の南岸を、北のC区ではNR550の北岸を確認した。これらの流路の堆積層であるb層(湿地堆積層)の広がりから見て、NR500とNR550は同じ流路であると考えられる(図23)。同一の流路であるとすると、南北幅約80mの規模で、長さ約30m分を確認したことになる。A区ではNR500最下層のd層から、多量の土器・土製品が出土した。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器・土製品であるが、ほとんどは古墳時代前期の布留式期に属する。土器は壺・甕・高杯・鉢・器台、土製品は土錘などで、遠隔地(吉備など)からの搬入土器も含まれる。土器はすべて破片であり、上流から流れてきたものであるが、ほとんどが磨滅しておらず、近い場所に古墳時代前期の集落があったと推定される。今回調査地の南約240m地点の東三国6丁目所在遺跡の発掘調査(HM98－1次)で、同様の布留式期の土器がまとまって出土しており、この地点を含めた近接地が候補地となる(図1)。

ii)鎌倉時代の畠を検出した。流路NR500・550が埋没していく過程で湿地堆積層(b層)が形成されていたが、鎌倉時代になって、この湿地堆積層を畠として利用している。畠の畝・畝間の方向は北で

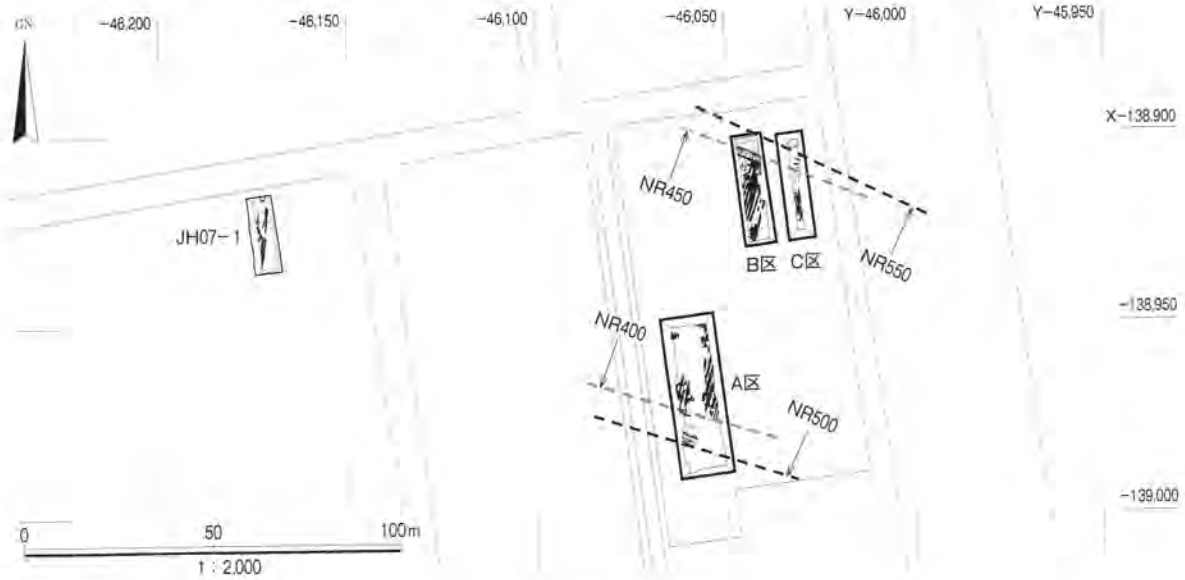


図23　鎌倉時代の畠の広がり

東に約14°振れている。畠の検出状況はA～C区において共通しており、A区とB・C区の間の湿地堆積層が存在すると推定できる空間も畠であった可能性が高い。また、A区から西約100m地点の発掘調査（JH07－1次）で、14世紀頃の耕作地が検出されている。水成層である粘土層を耕起した耕作面の標高がTP＋0.4～0.5m、溝などの耕作関係遺構の方向が北で東に約14°振れ、その後砂で埋まっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。この様相は、今回検出した畠と共通しており、流路NR500・550の北西延長部にあたる場所であることを考慮すると、流路の湿地堆積層を利用した耕作地が広い範囲で展開していたことが考えられる（図23）。

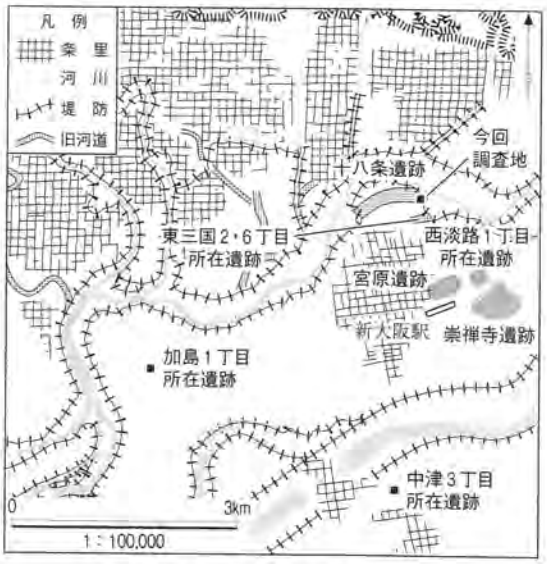


図24　大阪市北部と周辺の条里
（[服部昌之1988]所収図を一部改変・追加トレース）

今回検出の畠の畝方向は北で東に約14°振れ、この方向は、服部昌之案の摂津国西成郡周辺（神崎川より南側）の条里地割の方向（北で西に約8°振れる）[服部昌之1988]とは相違する。北で東に振れる点では、神崎川より北側で復元した摂津国豊島郡・河辺郡の条里地割の方向（北で東に2.5～3°振れる）に類似する（図24）。

一方、南約360m地点の東三国6丁目所在遺跡の発掘調査（HM13－1次）で検出された畠は、時期が14～15世紀、南北方向の畝方向は北で西に15～20°振っている[大阪文化財研究所2014b]。さらに、今回調査地の南にある東三国2丁目所在遺跡、宮原遺跡、西淡路1丁目所在遺跡で検出された室町時代頃の溝などの遺構の方向は、おおむね北で西に振れている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、大阪市文化財協会2010、大阪文化財研究所2010・2012a・2014a]。これらは、北で西偏する点では神崎川以南の条里地割の方向と共通しており、今回の鎌倉時代の畠の方向が例外的事例になる。

神崎川より南にある地域で、溝などの方向が北で東に振れる事例は、大阪市淀川区加島1丁目所在遺跡で確認されている。15世紀頃の南北溝が検出され、溝を基準にした地割は北で東に約6°振れている。この方向については、神崎川を挟んで対峙する摂津国豊島郡・河辺郡の条里地割の影響を受けていたと推定されている[大阪文化財研究所2011a]。今回検出した鎌倉時代の畠畝の方向については、流路の方向にほぼ直角であり、自然地形に規制されているとも考えられるので、北の地割の影響が存在するかどうかについては課題として残る。

iii）室町時代の流路NR400・450を検出した。畠は室町時代後半に、流路の厚い砂層で覆われてしまい、耕作できない状況が生じたようである。

iv）A区では室町時代末の第3層で、B・C区では江戸時代の第4層で作土層を検出し、耕作（畠・水田）が再開された時期を示す。

v）江戸時代の犂溝方向は北で約12°東偏し、鎌倉～室町時代の畠の畝方向（北で約14°東偏）に類似する。明治時代以後の犂溝の方向は、東で北に6～9°振って（北で6～9°西偏）おり、それ以前とは

様相が異なる。堅溝方向が地割を反映しているものとすれば、明治時代になって、調査地の地割(土地区画)が変化したものと考えられる。

引用・参考文献

上田秀夫1982、「14～16世紀の青磁碗の分類について」:『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会、pp.55－70

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「住宅都市整備公団による建設工事に伴う確認調査(HM97－1)」:『平成9年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3－16

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「モンセーヌ東三国建設工事に伴う確認調査(HM98－1)」:『平成10年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3－10

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「埋蔵文化財発掘調査(JH07－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.281－287

大阪市文化財協会2010、『西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2010、『宮原遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2011a、『加島1丁目所在遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2011b、『西宮原遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2012a、『西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅱ

大阪文化財研究所2012b、『東三国2丁目所在遺跡発掘調査報告』

大阪文化財研究所2014a、『西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅲ

大阪文化財研究所2014b、『淀川区東三国5丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(HM13－1)報告書』

尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」:中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.315－337

京都市埋蔵文化財研究所2003、『平安京左京四条二坊十四町跡』

古代の土器研究会編1996、『古代の土器4　煮炊具(近畿編)』

小森俊寛2005、『京から出土する土器の編年的研究』　京都編集工房

吹田市教育委員会1996･2002･2003、『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書　写真図版編　自然科学編遺構編　遺物編』

吹田市教育委員会2014、『五反島遺跡の発掘調査　吹田市南吹田下水処理場雨水滞水池設置工事に伴う発掘調査』

杉本厚典2003、「河内における布留式期の細分と各地との併行関係」:『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジュウム資料集　財団法人大阪府文化財センター、pp.39－61

清水靖夫編1995、「2万分の1仮製地形図(1885)」:『明治前期・昭和前期　大阪都市地図』　柏書房

田辺昭三1981、『須恵器大成』　角川書店

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」:『難波宮址の研究』第九、pp.373－400

服部昌之1988、「古代における景観構成とその変化」:新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第1巻　大阪市、pp43－89

森田稔1995、「中世須恵器」:中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.356－366

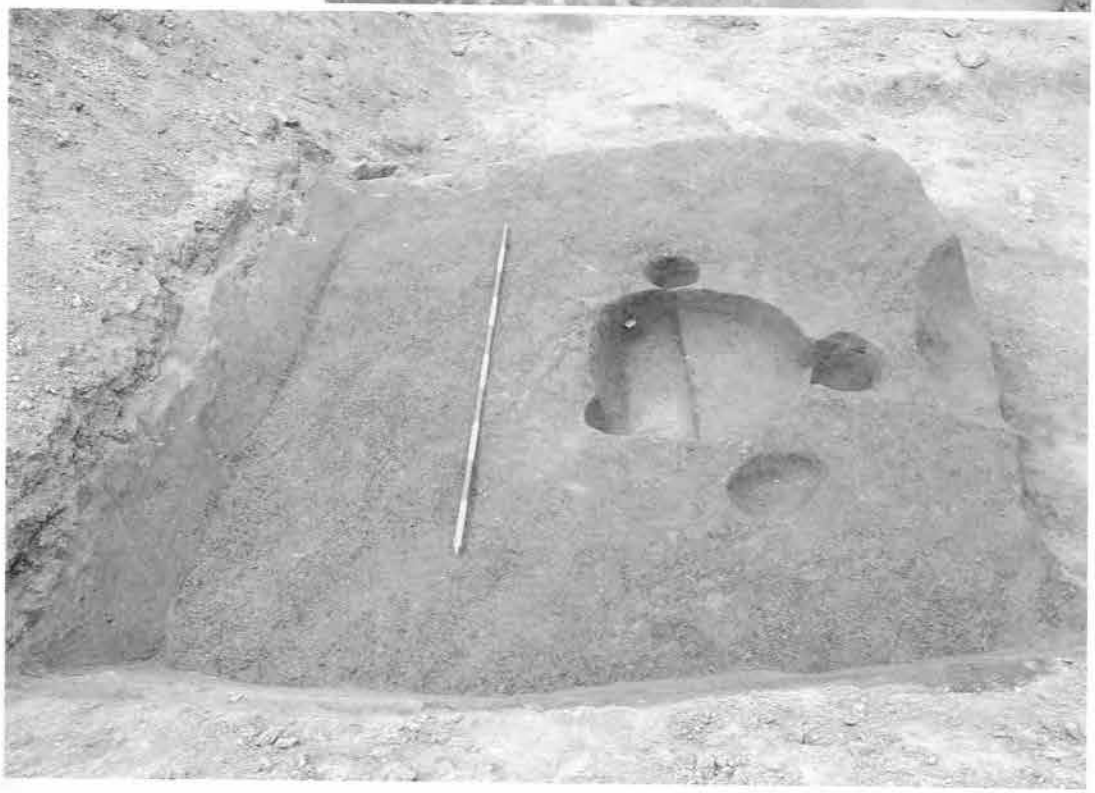
山本信夫2000、『大宰府条坊跡ＸＶ　陶磁器分類編』太宰府市教育委員会

米田敏幸1991、「土師器の編年1　近畿」:『古墳時代の研究』6土師器と須恵器　雄山閣、pp.19－33

A区 NR500
検出状況
（東から）

A区 畠検出状況（南から）

B区 畠検出状況
（南から）



A区 SK401・402、SP403～406（東から）

淀川区宮原二丁目８－１他における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(MH14－１)報告書

調査個所	大阪市淀川区宮原２丁目８－１他
調査面積	140㎡
調査期間	平成26年５月19日～平成26年６月１日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、絹川 一徳

1)調査に至る経緯と経過

調査地は新たに発見された中世～近世の集落遺跡である宮原遺跡F地点である。調査地の南側約300mの宮原一帯には東西500m、南北250mの範囲に宮原遺跡が、JR新大阪駅から西南西約300m～1kmの範囲に宮原遺跡D地点がそれぞれ中世の集落遺跡として周知されている。また、東には西淡路1丁目所在遺跡、南東には崇禅寺遺跡が近接し、西側には西宮原遺跡が存在する(図1～3)。

宮原遺跡は淀川の沖積作用によって形成されたデルタ地帯の微高地上に立地する。この微高地は、これまで大阪湾岸流の影響で上町台地から北へ延びるように形成された「長柄砂州」の一部と考えられてきたが[梶山彦太郎・市原実1986]、最近の周辺地域の発掘調査による河川堆積層の観察から、淀川の沖積作用が大きく影響したことが明らかとなった[趙哲済2005、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008c・2009]。

宮原遺跡におけるこれまでの調査では、MH99－3次調査で室町時代の東西方向の坪境溝が検出され、円筒埴輪や古代の土師器・須恵器などが出土した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001]。また、MH94－2次調査では鎌倉・室町時代の建物群や井戸などが見つかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]。MH06－1・2次調査では12～15世紀代の遺物が出土しており、いずれの調査においても「宮原庄」とみられる荘園があった時代の遺構・遺物が確認されている[大阪市教育委員

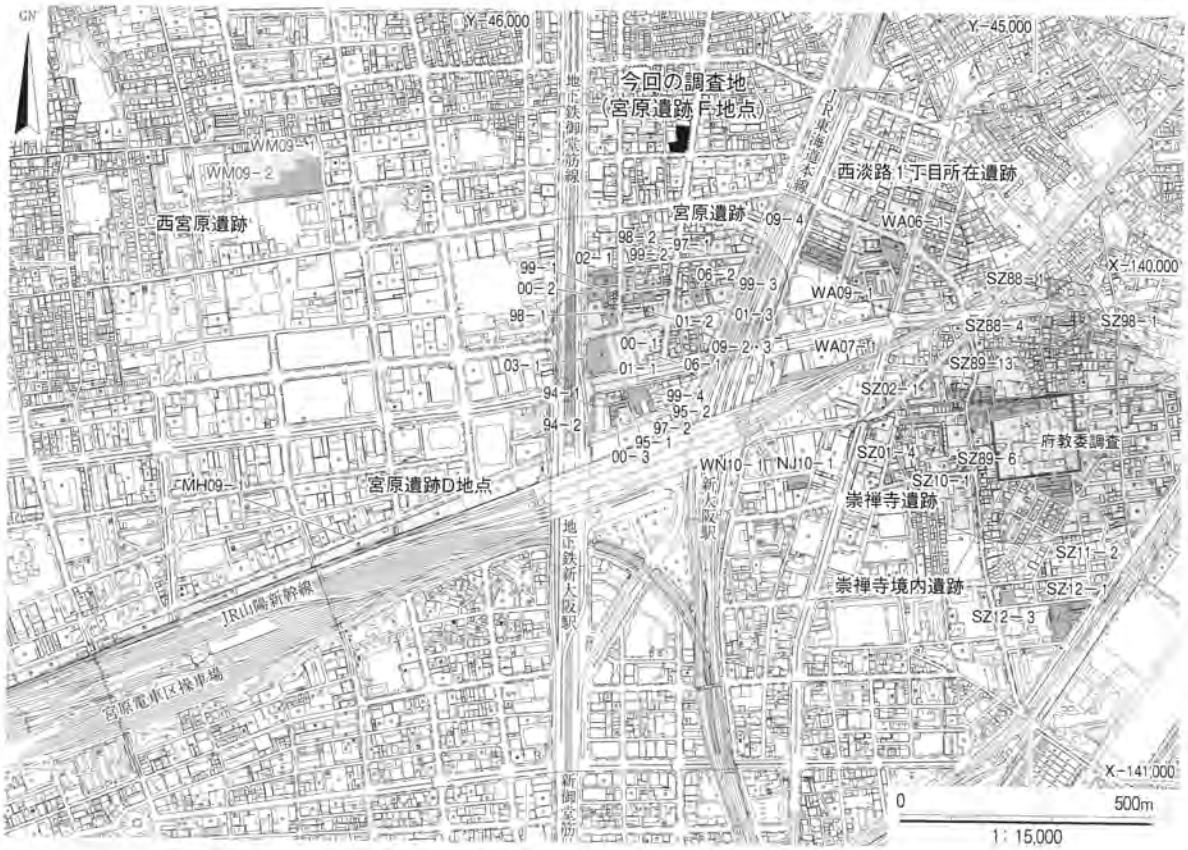


図1　調査地の位置

図2　1880年代における調査地周辺図
（[清水靖夫編1995]に加筆）

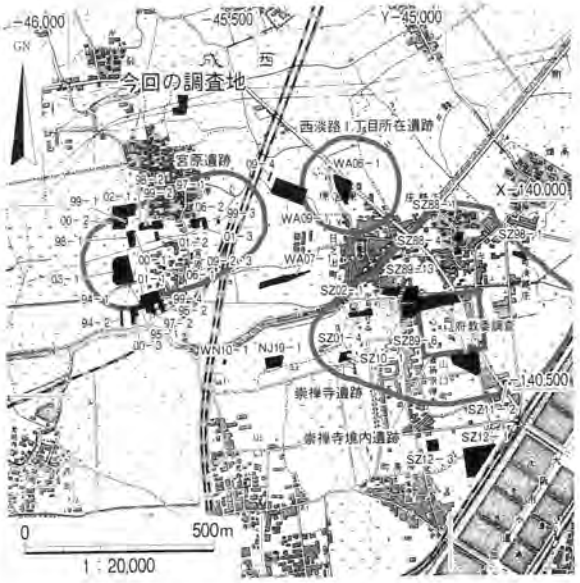


図3　1920年代における調査地周辺図
（[清水靖夫編1995]に加筆）

会・大阪市文化財協会2008a・2008b]。

宮原遺跡の南東約500mに位置する崇禅寺遺跡では、弥生時代後期末(庄内期)から古墳時代にかけて居住や土地開発が始まっている[大阪市文化財協会1999、大阪文化財研究所2012a・2014a]。この時期の遺物として他地域産の土器や鉄製素環頭大刀などが出土しており、崇禅寺遺跡の一帯が、淀川流域に設けられた水上交通や軍事上の拠点であったと推定されている[積山洋1994]。古墳時代前期では、ほかに宮原遺跡D地点のMH09－1次、西淡路1丁目所在遺跡のWA06－1次調査において当該期の遺物が出土しているが、いずれも河川堆積層内からのものであることから、この時期には崇禅寺遺跡より西側の宮原遺跡の一帯はまだ離水していなかったようである[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008c、大阪市文化財協会2010]。崇禅寺遺跡では、古墳時代中期に古墳が存在していたことが多数の埴輪の出土[大阪市文化財協会1999・大阪府教育委員会2003]によって推定されているが、それより西側は、古代以降になってようやく陸化が進み、安定した環境となったようである。西淡路1丁目所在遺跡のWA07－1次調査では、奈良時代の井戸などの遺構が検出され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]、中世前半になると上述した宮原遺跡付近からも集落関係の遺構が認められるようになる[大阪文化財研究所2012b・2014b]。

古文書における「宮原」の地名の初見は、1220(承久2)年の文書の「宮原田参町」という記述で、1280(弘安3)年の文書にも「宮原北方庄内」が見られる。したがって、13世紀代には「宮原庄」が存在していたようで、1351(正平6)年の文書では奈良春日神社領であったことが記されている。南北朝時代には宮原庄・宮原北庄・宮原南庄に分割されていたとされ、宮原遺跡近辺は春日神社領の宮原庄か興福寺領の宮原北庄であった可能性が高い[新修大阪市史編纂委員会1988]。

今回の調査に先行して行われた大阪市教育委員会による試掘調査において、地表下約1.0m以下の深さで中世の遺構と遺物の存在が確認された。この遺構面の年代や遺構・遺物の分布状況と当該地の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的として本格的な発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は５月19日から着手した。予定箇所に東西７ｍ×南北20ｍの140㎡の調査区(図４)を設定し、重機により近現代の盛土や攪乱土を掘削した。その後、下位の地層を人力により掘り下げながら、遺構面の精査と遺構の検出・掘削、出土遺物の採集、必要な実測作業と写真撮影などの記録作業を適宜実施した。５月30日に調査に必要な現地作業がすべて終了し、６月１日に埋戻しと後片付けを行って撤収した。

本報告書の図の方位は世界測地系に基づく座標北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○ｍと記している。なお、本報告書で用いる座標値・座標北は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成して得た世界測地系座標(平均直角座標系第Ⅵ座標系)を基準にしている。

２)調査の結果

ｉ)層序(図５～８)

調査地は平坦な地形で、現地表の標高はTP+1.8m前後であった。以下の０～７層を確認した。

第０層：調査地の全域をほぼ均等に覆う現代盛土層で、層厚は約80cmであった。

第１層:オリーブ黒色(5Y3/2)の細粒砂質シルトの作土層で、層厚は10～15cmであった。旧表土で、近代以降の地層である。第１層下面において北北西－南南東方向の犂溝群と東壁の地層断面で土壙を検出した。

第２層：暗褐色(10YR3/4)またはオリーブ褐色(2.5Y4/3)のシルト質細粒砂～細粒砂質シルトの作土層で、層厚は５～10cmであった。本層からは18世紀初頭の肥前磁器が出土した。江戸時代中頃の地層である。第２層下面では畠の耕作に係わる北北西－南南東方向の畝間を検出した。

第３層：暗褐色(10YR3/3)または暗灰黄色(2.5Y4/2)のシルト質細粒砂の作土層で、層厚は５～10cmであるが、調査区の南側では、第２層の耕起によって削平されており、本層の分布が認められないところがあった。本層からはおもに13～15世紀の土師器・瓦器・瓦質土器などが出土した。

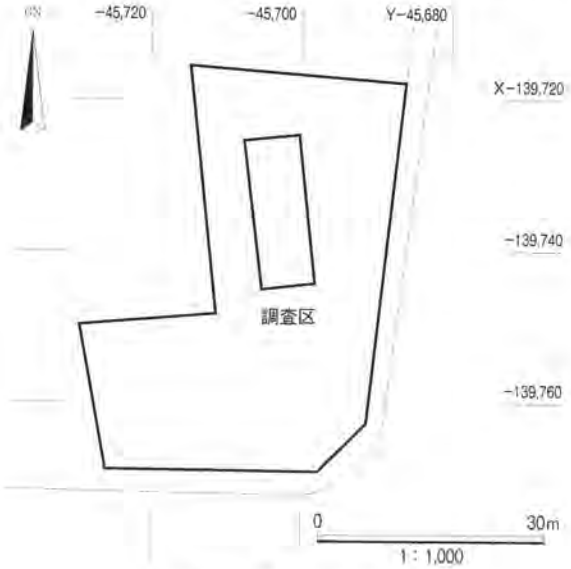


図４　調査区の位置

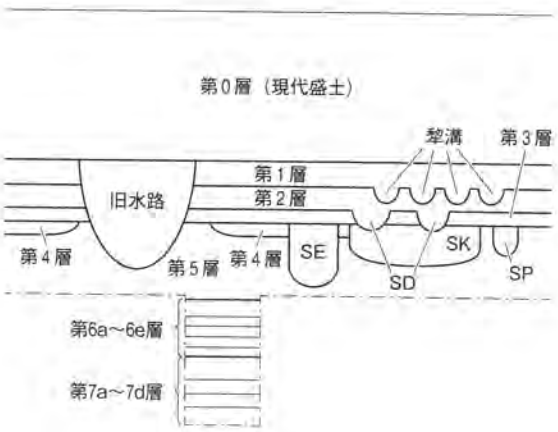


図５　地層と遺構の関係図

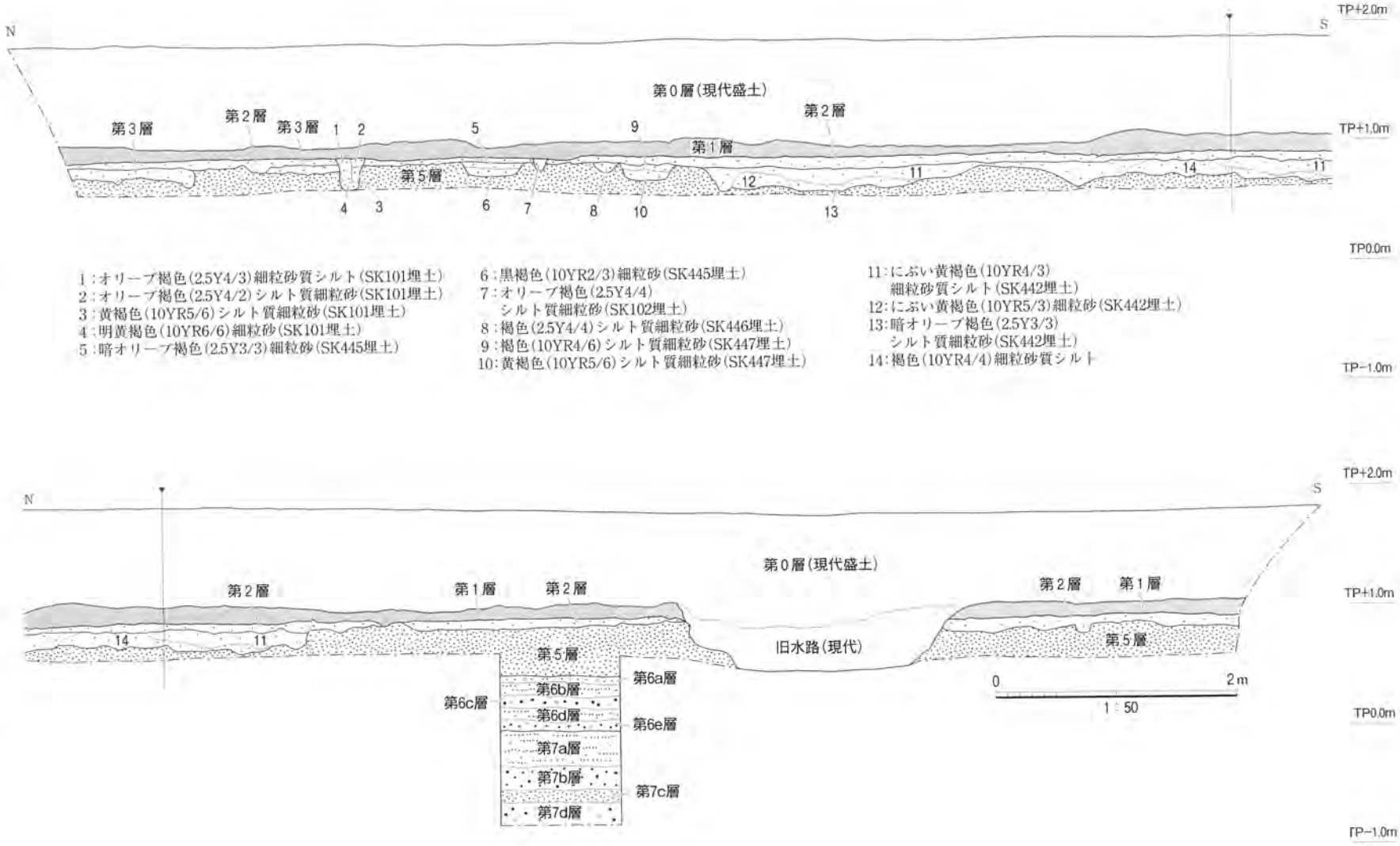
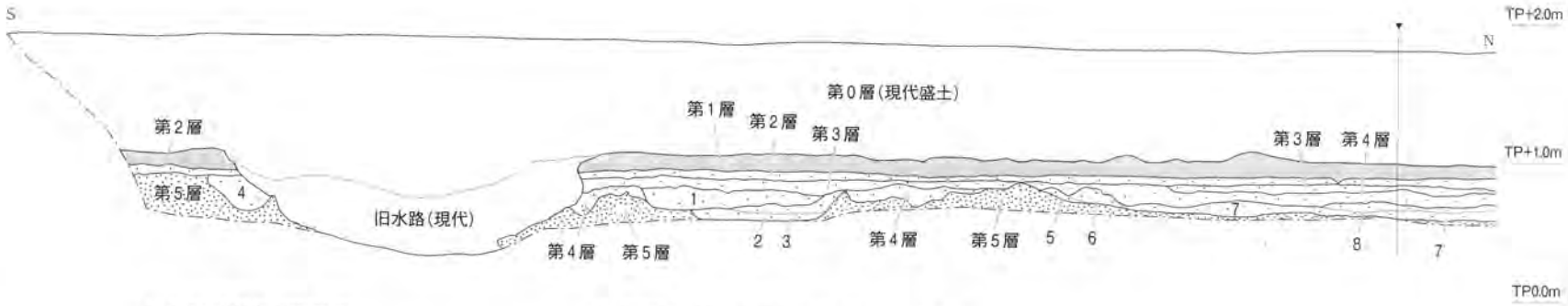
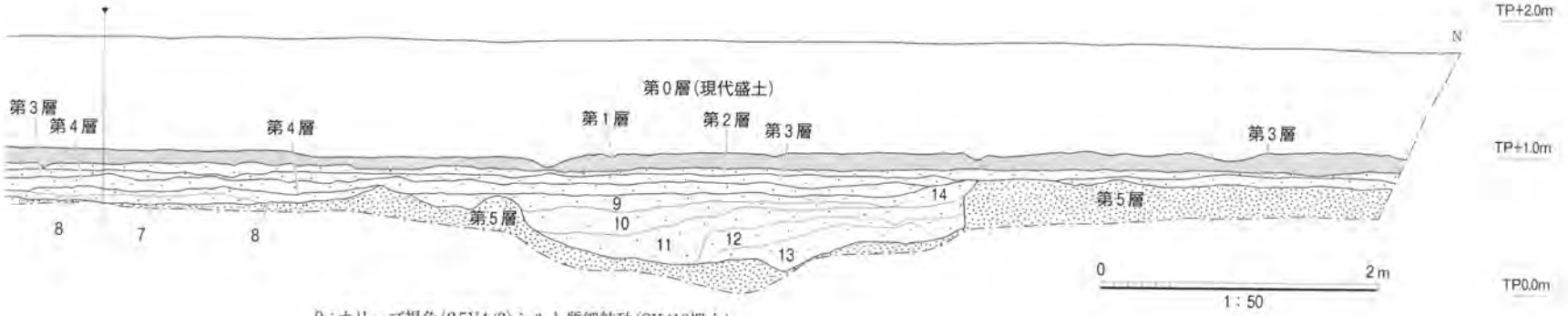

N
S
TP+2.0m
TP+1.0m
TP0.0m
TP−1.0m
第0層(現代盛土)
第3層
第2層
第3層
第2層
第1層
第5層
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14
1:オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト(SK101埋土)
2:オリーブ褐色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂(SK101埋土)
3:黄褐色(10YR5/6)シルト質細粒砂(SK101埋土)
4:明黄褐色(10YR6/6)細粒砂(SK101埋土)
5:暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂(SK445埋土)
6:黒褐色(10YR2/3)細粒砂(SK445埋土)
7:オリーブ褐色(2.5Y4/4)
シルト質細粒砂(SK102埋土)
8:褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂(SK446埋土)
9:褐色(10YR4/6)シルト質細粒砂(SK447埋土)
10:黄褐色(10YR5/6)シルト質細粒砂(SK447埋土)
11:にぶい黄褐色(10YR4/3)
細粒砂質シルト(SK442埋土)
12:にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂(SK442埋土)
13:暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
シルト質細粒砂(SK442埋土)
14:褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト
第0層(現代盛土)
第2層
第1層
第2層
第2層
第1層
第5層
旧水路(現代)
第5層
第6a層
第6b層
第6c層
第6d層
第6e層
第7a層
第7b層
第7c層
第7d層
0
2m
1:50

図6　東壁地層断面図

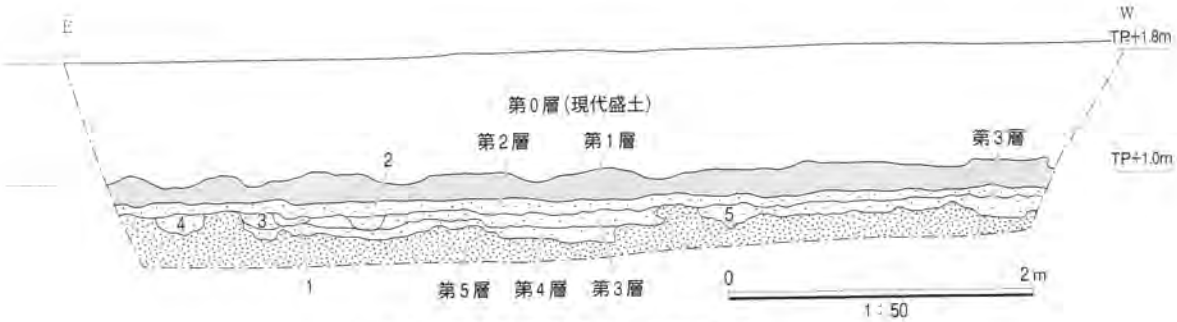


1：にぶい黄褐色(10YR4/3)
　シルト質細粒砂(SK424埋土)
2：褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂(SK424埋土)
3：暗褐色(10YR3/3)シルト質細粒砂(SK424埋土)
4：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂(SD440埋土)
5：黄褐色(10YR5/6)細粒～極細粒砂(SK421埋土)
6：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂(SK421埋土)
7：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
　細粒砂質シルト～シルト(SK421埋土)
8：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト(SK421埋土)



9：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂(SK418埋土)
10：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルト(SK418埋土)
11：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト(SK418埋土)
12：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂(SK418埋土)
13：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂(SK418埋土)
14：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂(SK418埋土)

図7　西壁地層断面図



1:黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト(SD203埋土)
2:黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂(SD202埋土)
3:黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細粒砂(SD204埋土)
4:黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂(SD205埋土)
5:暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂(SD201埋土)

図8　北壁地層断面図

第4層:暗褐色(10YR3/3)のシルト質細粒砂の作土層で、上位・下位層との境界はやや漸移的である。地層の遺存状況は部分的で、大半は第2・3層の耕起により削平されている。本層の上面で井戸・土壙・小穴などを検出した。出土遺物は認められなかったが、上位層に近い時期で中世の地層とみられる。

第5層:明黄褐色(10YR6/6)の細粒～極細粒砂で、後浜に形成された風成砂の堆積層である。遺物は認められなかったが、中世以前の地層とみられる。

第6層:調査区の東南部に設定した深掘りトレンチ(南北1m×東西2m)で確認された地層である。第6a～6e層に分けることができた。いずれも水成層で、第6a層は明黄褐色(10YR7/6)の細礫質細粒砂、第6b層は黄褐色(10YR5/6)の細粒砂、第6c層はにぶい黄褐色(10YR5/3)の細礫質粗粒砂、第6d層は明黄褐色(10YR6/6)の細粒砂、第6e層は黄褐色(10YR5/8)の細礫質中粒砂である。第6層全体で層厚は約50cmであった。遺物は出土しなかった。

第7層:本層も深掘りトレンチで確認された地層である。第7a～7d層に分けることができた。いずれも水成層で、第7a層は黄褐色(10YR6/6)の細粒砂、第7b層はにぶい黄褐色(10YR5/4)の粗粒～中粒砂、第7c層はにぶい黄橙色(10YR6/4)の細粒砂、第7d層はにぶい黄褐色(10YR5/3)の砂礫層である。第7層全体で層厚は80cm以上であった。遺物は出土しなかった。

ii)遺構と遺物

a. 中世の遺構と遺物(図9～12)

第4・5層の上面において井戸・溝・土壙・小穴などの遺構を検出した。これらの遺構のうち後世の耕起により第4層が削平された場所では、第5層上面で遺構検出を行ったが、いずれの遺構も埋土がほぼ共通することから、同時期の遺構とみられる。

井戸　SE401・410・432・444の4基を検出した。いずれも井戸底は第5層内で収束する。

SE401は調査区の北端中央部で検出した。長径1.25m、短径0.80m、深さ0.40m以上である。最初に楕円形で平底の土壙(深さは残存部で0.08m)を掘ったのち、中央へ直径0.50m、深さ0.38mの円形の掘形を配置した2段掘りとなっている。砂地で掘形の壁面が容易に崩落するので、深度を確保するためにこうした方法が採られたものとみられる。中央の掘形には井戸側として土師器羽釜が2段に重なるように据えられていた。また、中央の掘形の底には細～中礫を充填していたが(図10)、おそらく

下位に据え付けた羽釜2をしっかりと固定させるとともに、井戸内へ砂の侵入を防いで集水しやすくするためであったと考えられる。井戸底の標高はTP+0.28mであった。

SE401からは7・12・21・22が出土した。7は土師器皿で、口径8.3cm、器高1.6cmである。口縁端部は丸くおさめ、内外面ともにヨコナデ調整をしている。13世紀代のものとみられる。12は瓦器椀である。内湾する体部から口縁部が緩やかに外反し、端部は丸くおさめている。体部内面の圏線ミガキは疎らである。和泉型Ⅲ－3期(13世紀前半)に属する。21・22は土師器羽釜である。いずれも井戸側として使用されていた。上位が21(羽釜1)、下位が22(羽釜2)である。21は口径28.5cm、高さ12.6cm以上で体部下半は欠失していた。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部を肥厚している。外面は口縁部から鍔部までヨコナデ、内面は端部がヨコナデ、それ以下は不明瞭であるが、板状工具によるナデ調整とみられる。22は口径29.1cm、高さ27.5cmで底部の一部を欠く。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦な面である。口縁部の外面と鍔部の調整はヨコナデで、口縁部には段が見られる。体部外面の調整はハケののちナデである。内面の調整

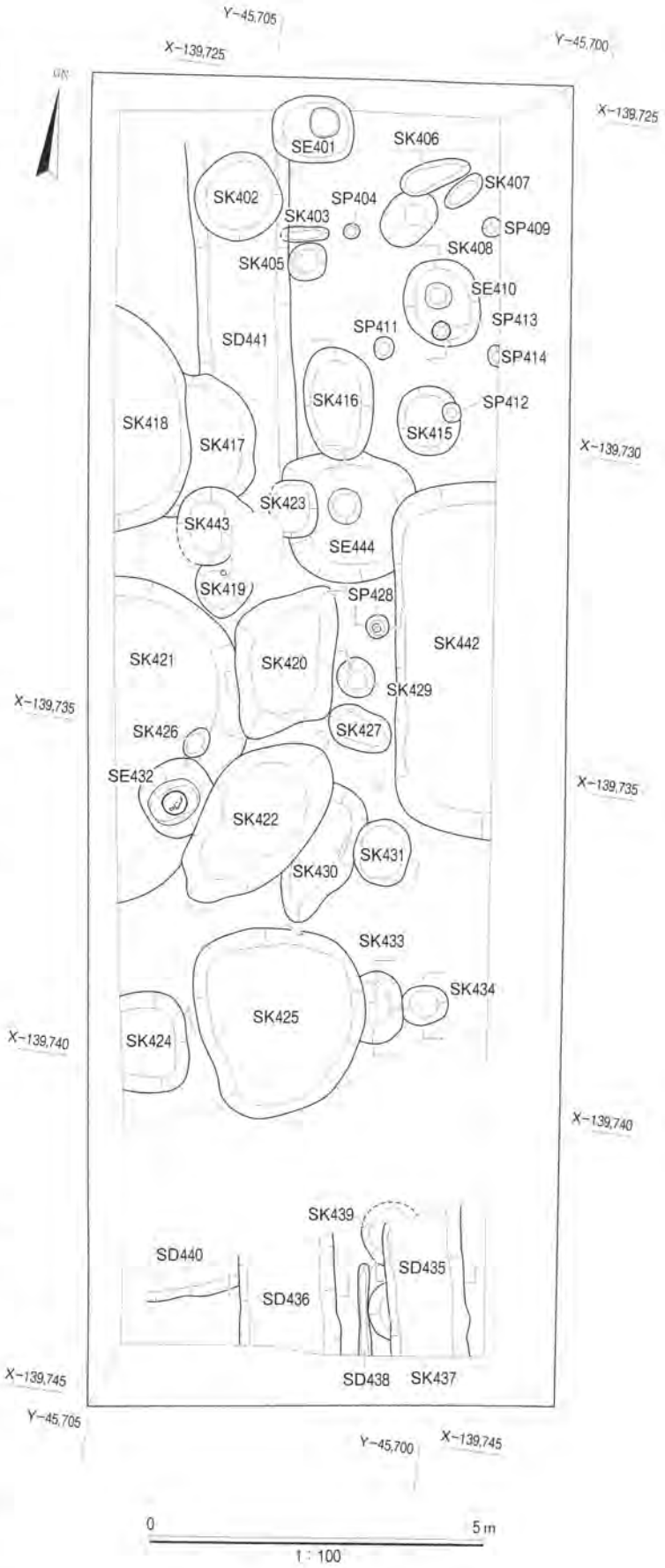


図9　第4・5層上面遺構平面図

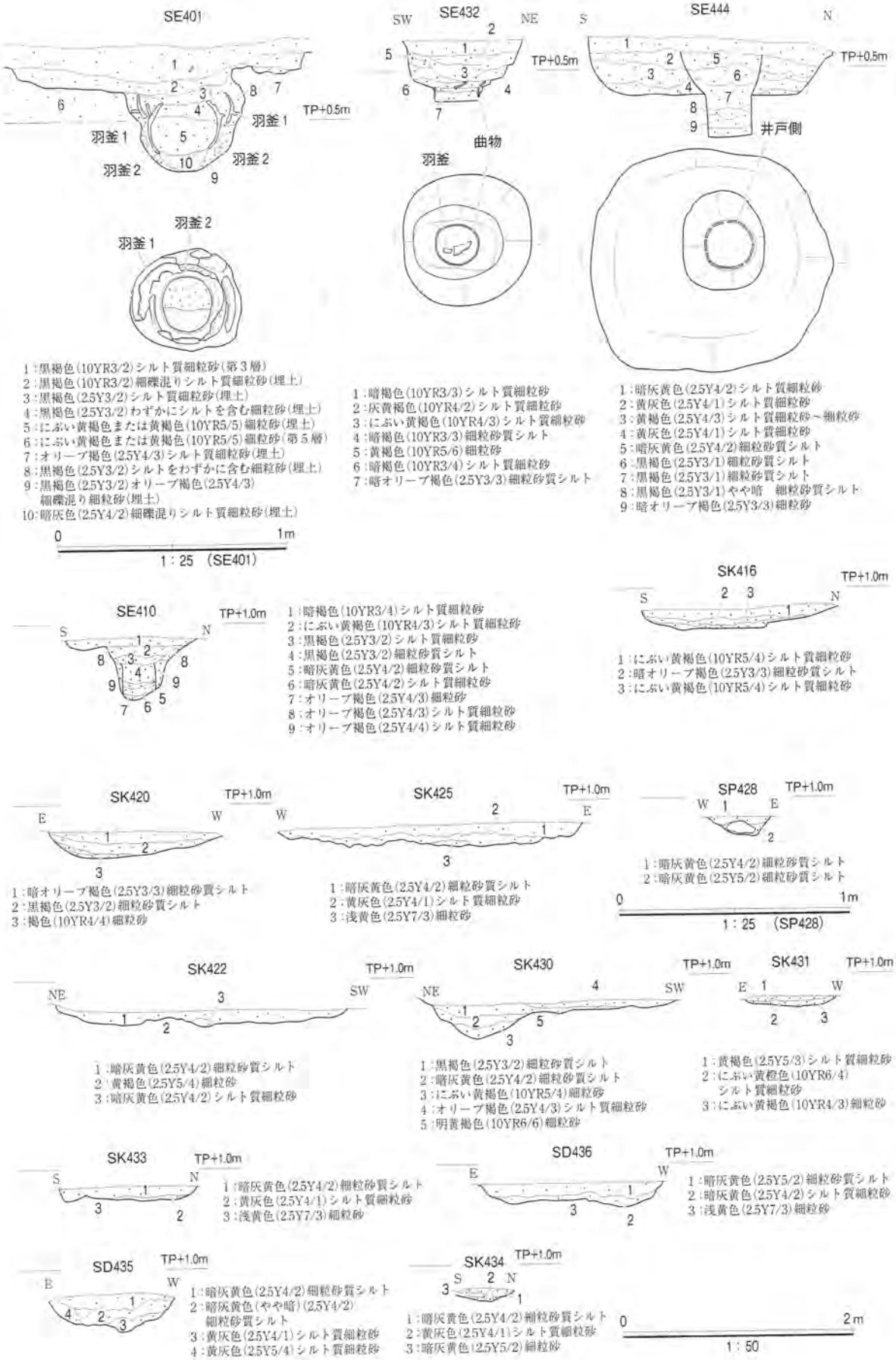


図10　第4層上面遺構平面・断面図

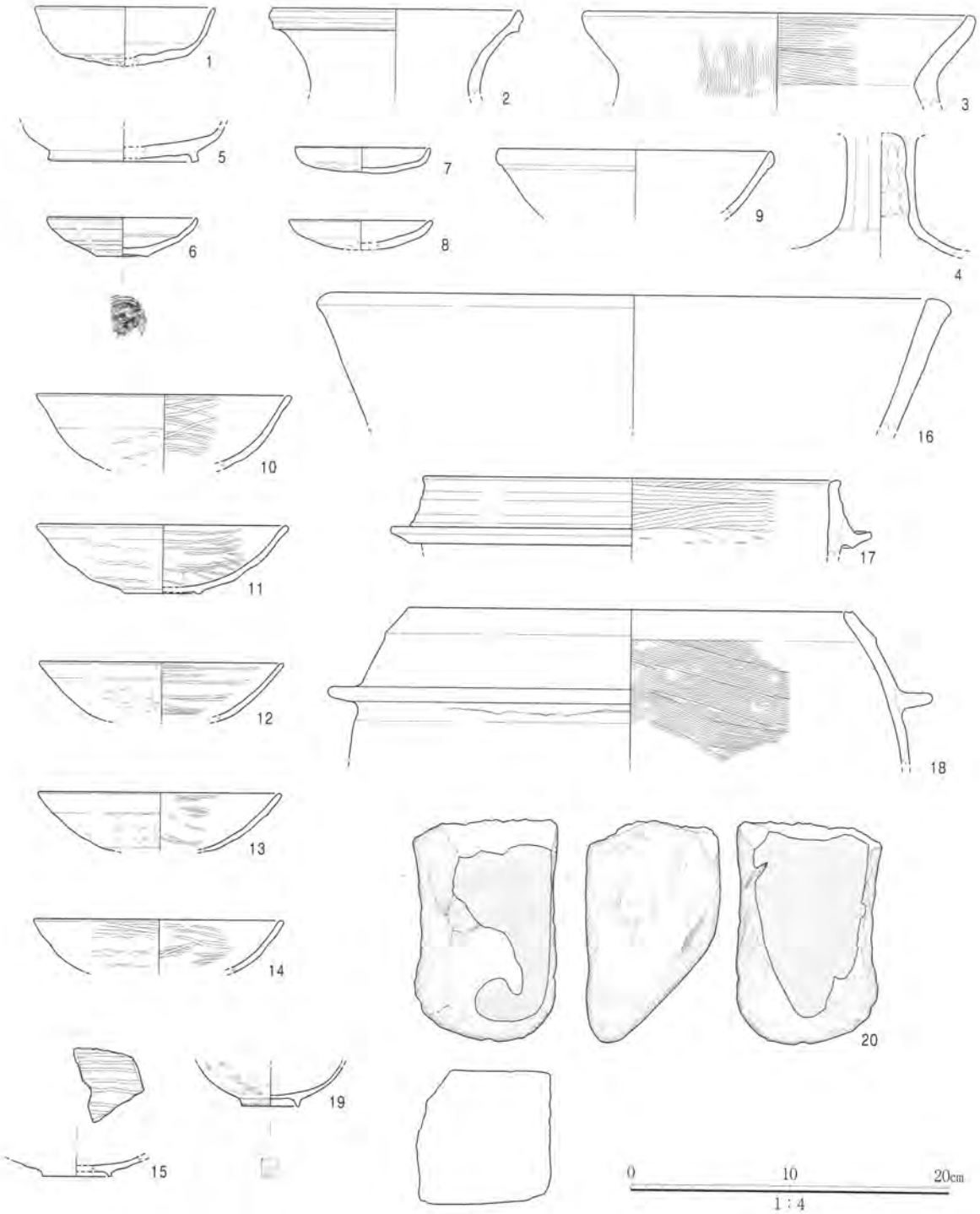


図11　出土遺物実測図(1)

SE401(7・12)、SE410(8)、SK416(15)、SK421(1)、SE432(13・18)、SD435(2)、SD438(14)、SK439(3・4)、SK442(10・16・17)、SK443(5)、SE444(6・9・11・20)、第2層(19)

は口縁部がヨコナデ、それ以下は体部がハケ、底部がハケの後にナデである。底部は煤の付着が著しい。21・22は13世紀代のものとみられる。

SE410は調査区の東北側で検出した。井戸の掘形は2段に掘られており、長径1.35m、短径1.15m、深さ0.12m以上である。平底の土壙の中央に直径0.60m、深さ0.58mの円形の掘形を配置して水溜としている。水溜には直径36.0cm、高さ28.0cmの曲物が据えられていたが、完全に腐食しており痕跡し

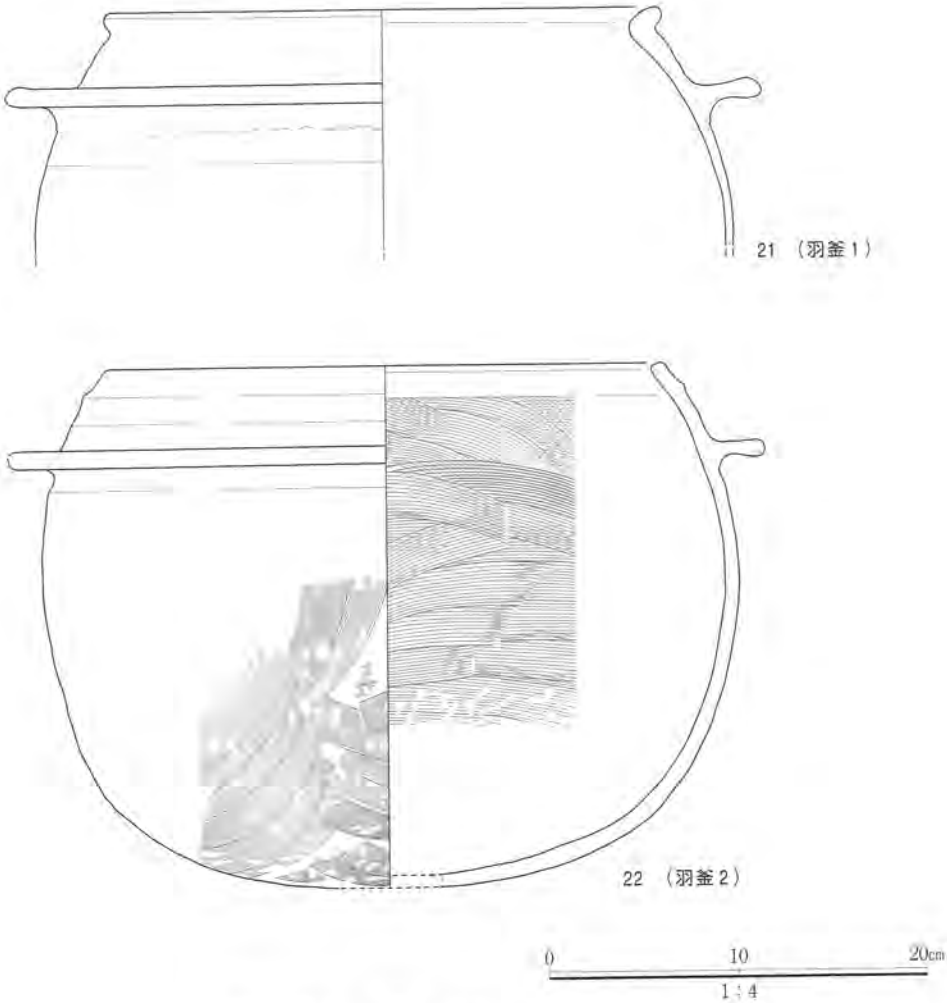


図12　出土遺物実測図（2）
SE401(21・22)

か確認できなかった。井戸底の標高はTP+0.36mであった。

SE410からは土師器皿8が出土した。8は口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁部内外面ともにヨコナデである。

SE432は調査区の中央西側で検出した。この井戸の掘形も2段に掘られており、直径1.10m、深さ0.42mである。掘形の中央に直径36.0cm、高さ11.0cmの曲物を据えている。曲物は木質部分の腐食が著しく、下半部の一部は本来の形状を留めていない。井戸底の標高はTP+0.24mであった。

SE432からは13・18が出土した。13は瓦器椀である。内湾する体部から口縁部が緩やかに外反し、端部を丸くおさめている。和泉型Ⅲ－3期(13世紀前半)に属する。18は土師器羽釜である。口縁部は内傾しながら立ち上がり、段をなす。口縁端部は平坦におさめる。口縁部の外面と鍔部の調整はヨコナデである。口縁部の内面は横方向のハケ調整が施されている。13世紀代のものであろう。

SE444は調査区の中央北寄りで検出した。掘形が2段に掘られた井戸で、長径2.15m、短径1.94m、深さ0.49m以上である。中央に長径0.85m、短径0.70m、深さ0.39mの円形の掘形が配置され、中に直径40cm以上、高さ70cm以上の桶が井戸側として据えられていたが、上部は完全に腐食して痕跡を留めるのみで、木質部は下半部31cm分しか残存していなかった。桶は12枚の板材で構成され、板材

は幅10cm前後、厚0.5cmを測るが、腐食と変形が著しいため、本来の形状や厚みは不明である。本来、外周に板材を結う箍があったと考えられるが、腐食のため痕跡を含めて確認できなかった。井戸底の標高はTP－0.11mであった。

SE444からは6・9・11・20が出土した。6は中国産白磁皿である。底部は露胎で、糸切り痕がある。9は中国産白磁碗である。口縁部は玉縁で、灰白色の釉が掛かる。6・9は12世紀のものであろう。11は瓦器椀である。口縁部が緩やかに外反し、端をわずかに屈曲させて丸くおさめている。体部内面に水平方向のミガキ、底部内面に疎らな平行線状暗文が見られる。和泉型Ⅲ－3期(13世紀前半)に属する。20は細粒砂岩の砥石である。研ぎ面は2面認められた。被熱しており部分的に暗赤褐色を呈する。SE401・410・432・444の4基の井戸は、規模や掘形の構造が類似しており、井戸底の標高値も近似する。それほど深く掘られた井戸ではなく、簡単な構造であるが、複数の井戸が存在することから、調査地が集落の一部であった可能性が高い。また、埋土の岩相や出土遺物の年代も共通することから、ほぼ同時期の遺構とみられる。出土遺物の年代観から、おおむね13世紀前半に形成されたものであろう。

溝　SD435・436・438・440・441の5条を検出した。方位はSD435・436・338・441が北北西－南南東、SD340がその直交方向である。いずれも上位層からの耕起により大半が削平されており、一部のみ検出することができた。

SD435・436は調査区の南端で検出した。SD435が幅1.20m、深さ0.12mで、SD436が幅1.62m、深さ0.21mである。北側が大きく削平されているため延伸状況は不明である。SD435からは溝の年代を示す遺物ではないが、2の須恵器甕の口縁部が出土した。

SD438は調査区の南端で検出した。幅0.20m、深さ0.05cm前後で、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトである。犂溝とみられる。SD438からは瓦器椀14が出土した。14は内湾する体部から口縁部が緩やかに外反し、端部を丸くおさめている。体部内面と口縁部の外面に水平方向のミガキが疎らに施されている。和泉型Ⅲ－3期(13世紀前半)のものであろう。

SD440は調査区の西南隅で検出した。幅0.48m以上、深さ0.23mである。SD436に切られており、延伸状況は不明である。

SD441は調査区の西北で検出した。幅1.55m、深さ0.21mである。南側が大きく削平されているが、SD336と規模や方向がほぼ同じであることから、一連の溝であった可能性がある。

SD435・436・440・441の幅広の溝は、いずれも埋土が耕起を受けた作土であることから、水路ではなく、畝立てなどの際に設けられた畝間の可能性が高い。

土壙　SK402・403・405～408・415～427・429～431・433・434・437・439・442・443の28基と東壁断面でSK445～447の3基を検出した。土壙の大半が深さ0.15m前後と浅く、底面が平坦で砂州の堆積物の上部である第5層まで掘り込まれていた。長径が1mを超える土壙はSK402・406・416～418・420～422・424・425・430・431・433・442・443である。大型の土壙には方形や不整形なものが目立ち、下底が平坦で重複あるいは接するように掘られていることから、これらの大半は砂州の上部に堆積した均質な砂を採取するための砂採り穴であったとみられる。

SK416からは15の瓦器椀の底部が出土した。扁平な高台を貼り付けており、底部内面には平行線状

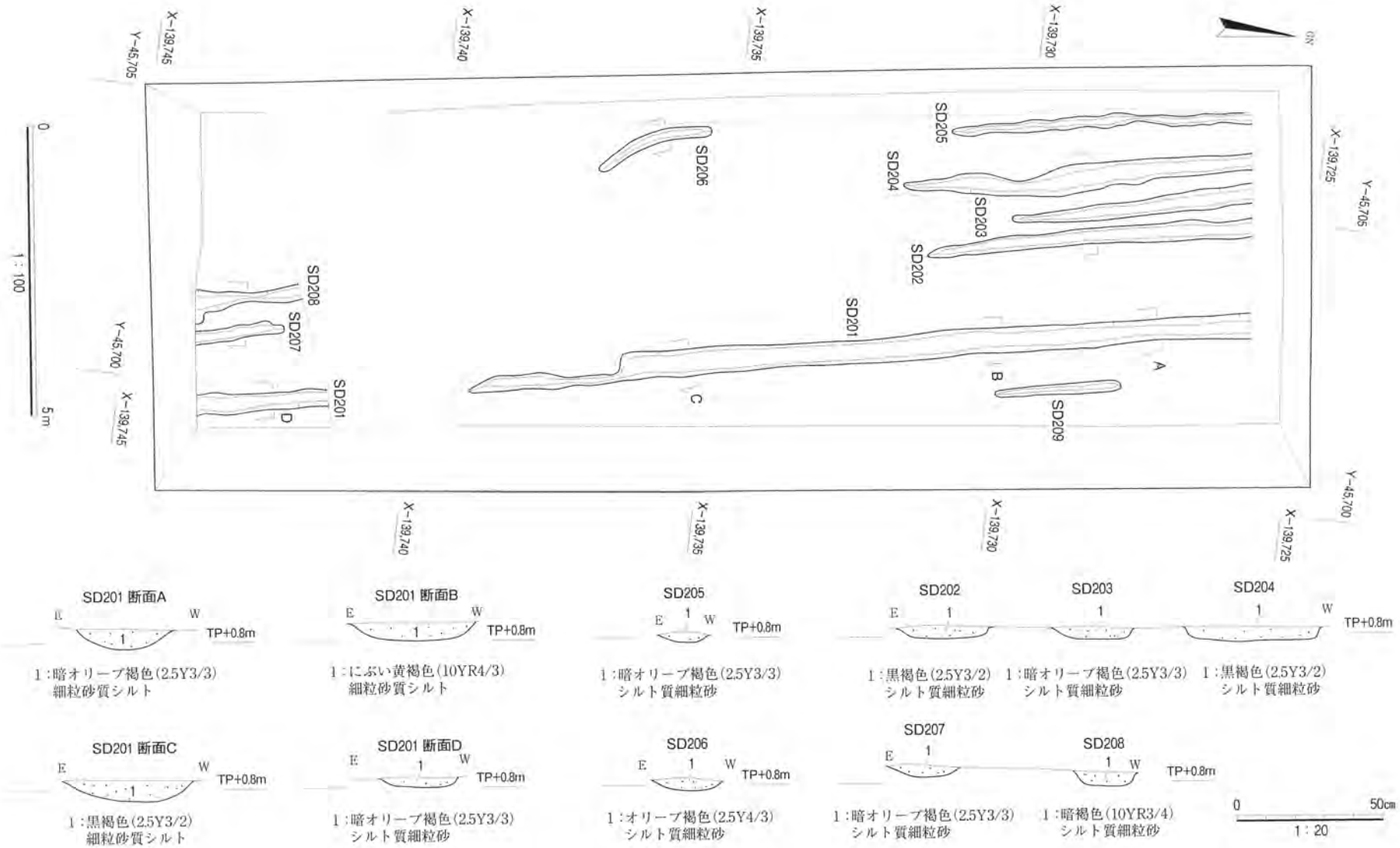


図13　第２層下面遺構平面・断面図

暗文が見られる。和泉型Ⅲ－３期(13世紀前半)であろう。SK442からは10・16・17が出土した。10は瓦器椀である。口縁部が緩やかに外反し、端部をわずかに屈曲させて丸くおさめている。和泉型Ⅲ－３期(13世紀前半)のものであろう。16は瓦質土器鉢で、口縁端部と内面が磨かれている。14・15世紀のものとみられる。17は土師器羽釜である。口縁部はわずかに内傾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦である。頸部に浅い凹線が３条巡る。鍔部分と口縁外面はヨコナデ、口縁部の内面は横方向のハケ調整で、鍔より下部は内面がヘラケズリ調整である。14・15世紀のものとみられる。16・17についてはほかの遺構から出土した遺物よりも新しいが、遺構埋土ではなく第３層出土の遺物が混入した可能性がある。また、遺構の年代を示す遺物ではないが、SK421から１が、SK439から３・４が、SK443から５が出土した。１は須恵器杯Ｇ身で、口径は11.1cmである。底部外面はヘラ切りのまま未調整である。７世紀中葉のものであろう。３は土師器甕である。口縁がくの字状に外反する。口縁部から頸部にかけての外面は縦方向のハケ調整を行い、その後ヨコナデを施す。口縁端部はヨコナデ、口縁内面は横方向のハケ調整を施している。４は土師器高杯の脚部である。脚部はヘラケズリにより面取りを行っている。脚端部外面は粗い縦方向のハケ調整の後でヨコナデ、内面もハケ調整の後ヨコナデを施す。３は７世紀後半、４は８世紀後半のものとみられる。５は須恵器杯Ｂで、高台径は8.7cmである。杯部内外面はヨコナデを施している。７世紀後葉以後のものであろう。

以上のように、SK442で中世後半の遺物が一部認められたものの、そのほかの土壙から出土した遺物はおおむね13世紀前半のものであった。したがって、砂採り穴とみられる土壙の大半は、井戸が廃絶した頃かそれ以降の中世後半にかけて継続的に形成されたものとみられる。ほかの土壙も同様の時期幅と考えられる。

小穴　SP404・409・411～414・428の７基を検出した。直径30cm前後、深さ0.15～0.20cmで、埋土は暗黄褐色または灰黄褐色のシルト質細粒砂であった。SP328では小穴内から細粒砂岩の礫が出土した。柱穴に伴う根石の可能性があるが、ほかに組み合う柱穴などは認められなかった。以上の小穴群も土壙と同時期の遺構とみられる。

b．近世の遺構と遺物(図13)

第２層下面においてSD201～209を検出した。SD201～208は畠の畝間、SD209は犂溝である。SD201～208は幅0.20～0.45m、深さ0.10～0.15mで、埋土は黒褐色または暗オリーブ褐色の細粒砂質シルトである。溝の方向は、途中で東方向へ屈曲するSD206を除くと北北西－南南東方向に延びている。犂溝のSD209は幅0.15m前後、深さ0.05mで、埋土は暗オリーブ褐色の細粒砂質シルトである。これらの遺構の年代を示す遺物が第２層から出土している(図11)。19は肥前磁器碗の底部である。体部外面に花唐草文を手描きで全周巡らせている。高台内側には角渦福を記している。時期は18世紀初頭である。したがって、第２層下面で検出された溝群も江戸時代中頃の遺構とみなしうる。

c．近代の遺構と遺物(図14)

第１層下面において調査区のほぼ全域で犂溝群を検出した。犂溝は幅0.15～0.20mで、深さ0.05m

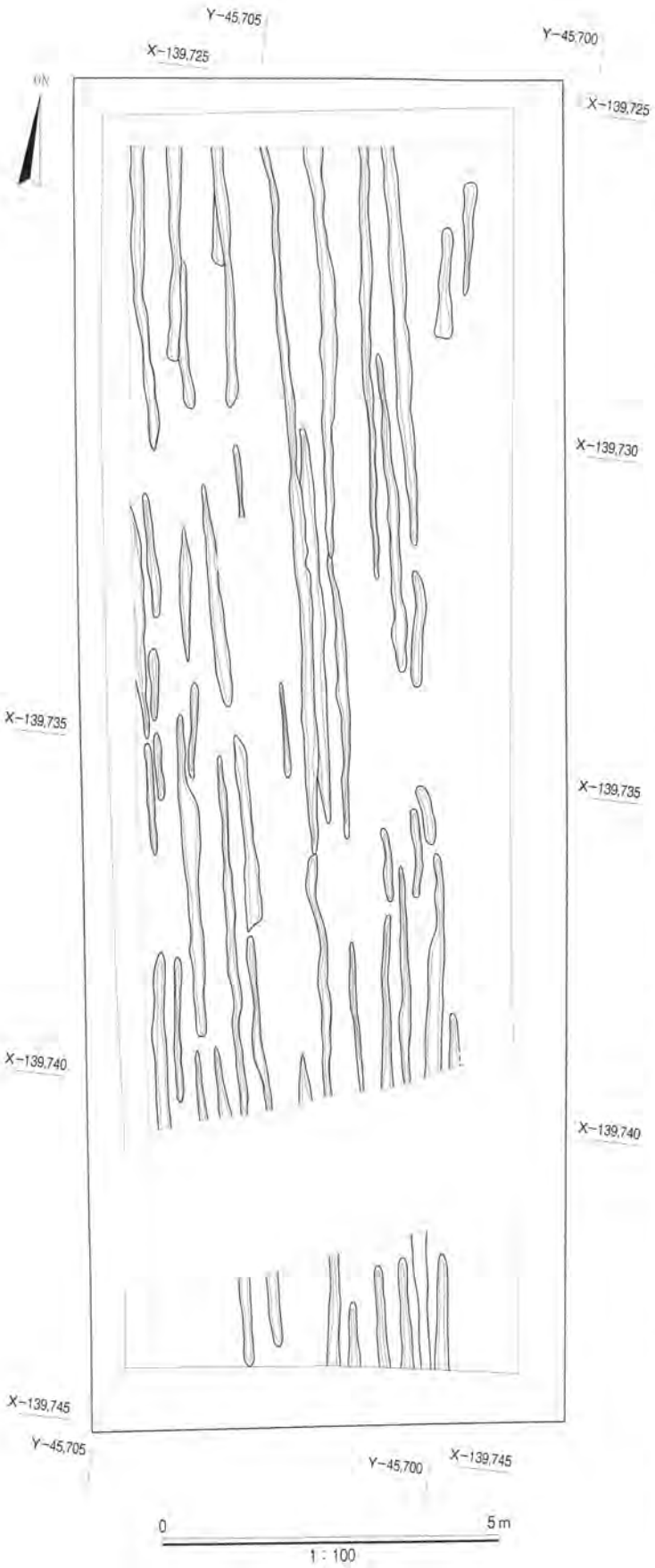


図14　第１層下面遺構平面図

前後であった。方向はすべて北北西－南南東の方向である。第４層上面と第２層上面で検出した溝方向と一致しており、調査地周辺では、中世以来の地割を近代まで基本的に踏襲していたことを示している。

そのほか、東壁の地層断面においてSK101・102を検出した。

3）まとめ

今回の調査では以下のことが明かとなった。

①調査地は淀川のデルタ地帯に位置し、後浜に形成された砂州に立地する。調査地付近で人間の生業活動が始まったのは古代以降で、本格的な土地開発が行われたのは中世になってからである。

②13世紀前半になると調査地は集落地となり、井戸としてSE401・410・432・444が設置された。これらの井戸は素掘りではなく、曲物、桶、土師器羽釜などが井戸側として用いられていた。調査地が砂地にあって、井戸壁の崩落を防ぐための工夫であったとみられる。各井戸の構造は単純で共通する部分が多い。また、井戸底まではそれほど深くはない。調査区内で同時期の井戸が４基も存在するのは、短期間で廃棄され、新たな井戸に作り替える必要があったからであろう。

③13世紀前半以降、中世後半にか

けて、砂州上部に堆積した風成の均質な砂を採取するために砂採り穴が多数掘られている。また、全般的に土壙の分布密度が高いことから、砂採りの作業は頻繁に行われていたとみられる。

④溝、犂溝の方向は北北西－南南東であり、中世以降、近代に至るまでその方向に変化が認められない。調査地周辺にも同様の地割(図２・３)が広く認められることから、中世以来の地割が基本的に踏襲されているものと思われる。

⑤中世集落の中心は調査地の南に位置する宮原遺跡とみられる。調査地はその集落の近傍にあって、中世から近代に至るまで継続して土地利用が進められてきたことが明らかとなった。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『崇禅寺遺跡発掘調査報告』Ⅰ

2001、「崇禅寺遺跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』、pp.103－111

2010、『西淡路１丁目所在遺跡発掘調査報告』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

1996、「新大阪森ビル建築に伴う発掘調査(MH94－２)」:『平成６年度大阪市内埋蔵文化財宝蔵地発掘調査報告書』、pp.153－165

2001、「丸紅株式会社による建設工事に伴う宮原遺跡B地点発掘調査(MH99－３)報告書」:『平成11年度大阪市内埋蔵文化財宝蔵地発掘調査報告書』、pp.３－５

2008a、「宮原遺跡発掘調査(MH06－１)報告書」:『平成18年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.73－76

2008b、「宮原遺跡発掘調査(MH06－２)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.297－303

2008c、「西淡路１丁目所在遺跡発掘調査(WA06－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.307－313

2009、「西淡路１丁目所在遺跡B地点発掘調査(WA07－１)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.305－316

大阪府教育委員会1982、『崇禅寺遺跡発掘調査概要』Ⅰ

2003、『崇禅寺遺跡』(大阪府埋蔵文化財調査報告2002－４)

大阪文化財研究所2010、『宮原遺跡発掘調査報告』

2012a、『崇禅寺遺跡発掘調査報告』Ⅱ

2012b、『西淡路１丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅱ

2014a、『崇禅寺遺跡発掘調査報告』Ⅲ

2014b、『西淡路１丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅲ

梶山彦太郎・市原実1986、『大阪平野のおいたち』 青木書店

清水靖夫編1995、『明治前期・昭和前期大阪都市地図』 柏書房

新修大阪市史編纂員会

1988、『新修大阪市史』第二巻

1989、『新修大阪市史』第三巻

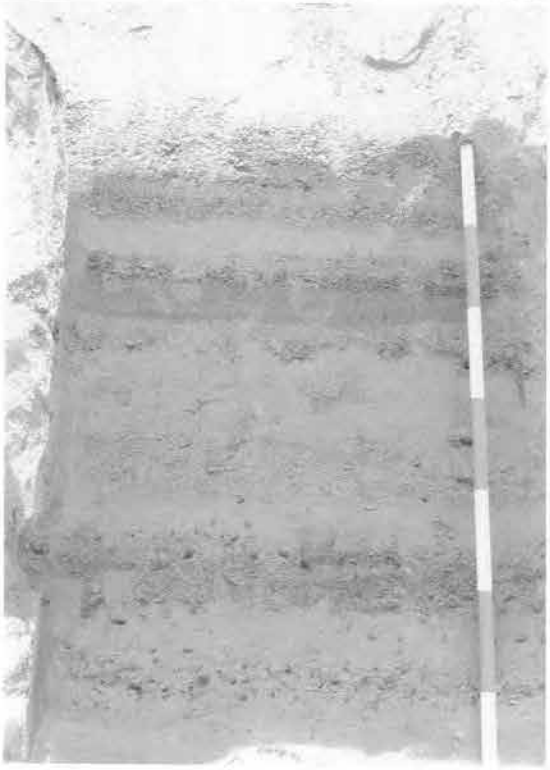
2004、『新修大阪市史　史料編』第一巻　考古資料編
積山洋1994、「上町台地の北と南－難波地域における古墳時代の集落変遷－」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp.173－191
趙哲済2005、「河内平野の古地理変遷」：『平野区誌』平野区誌編集委員会、p.24
森島康雄1992、「畿内産瓦器椀の併行関係と年代」：『大和の中世土器』Ⅱ　大和古中近研究会、pp.113－117

図版一

北壁地層断面
(南西から)

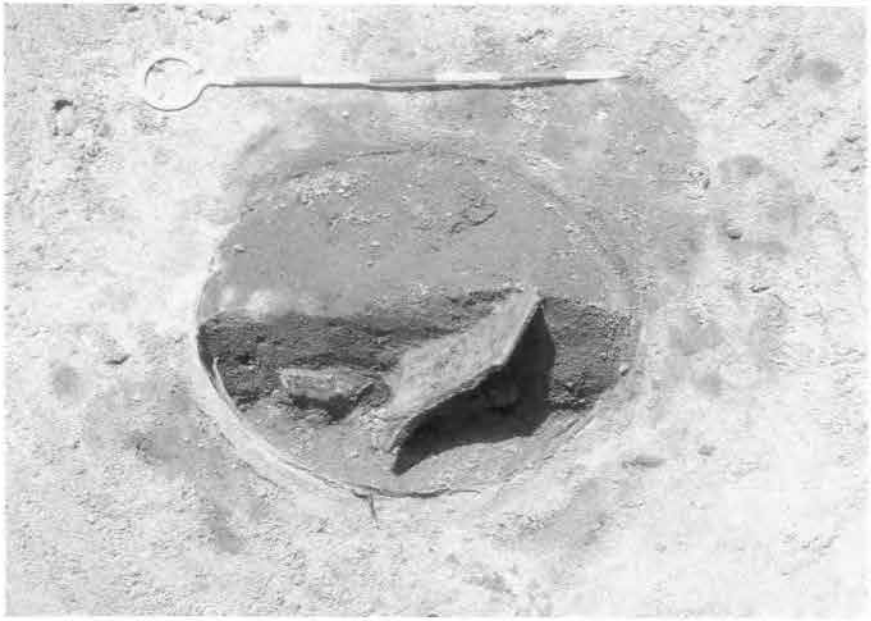
東壁地層断面
(北西から)

東壁南側深掘区
地層断面
(西から)



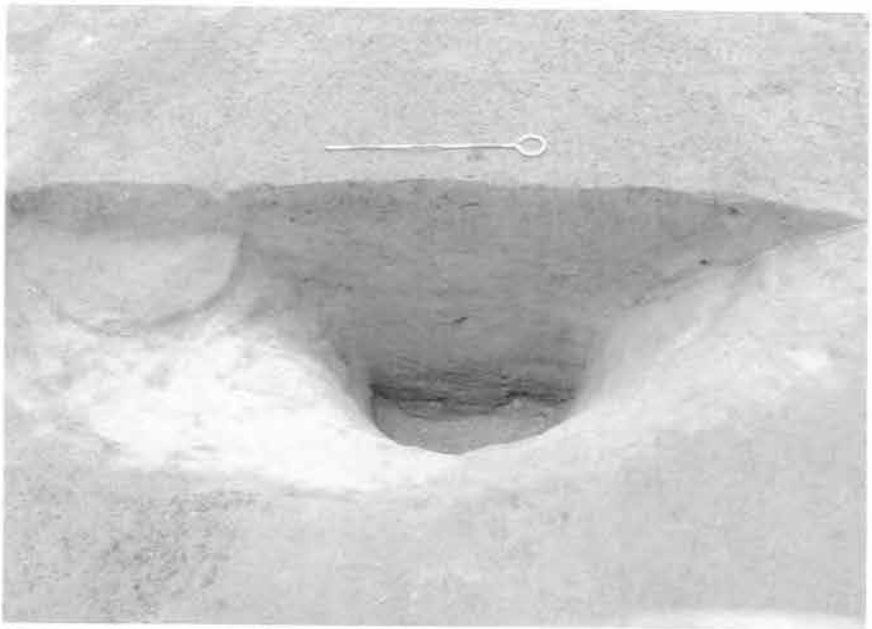
第4・5層上面遺構
完掘状況および
SE444検出状況
（北から）

SE432
羽釜および曲物
出土状況
（東から）



SE401
羽釜出土状況
（南西から）

SE410断面
（東から）



SK418断面
（東から）

第２層下面遺構
（畝間・犂溝）
完掘状況
（北から）

淀川区三津屋北三丁目47－１における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(MK14－１)報告書

調 査 個 所　淀川区三津屋北３丁目47－１
調 査 面 積　240㎡
調 査 期 間　平成26年９月１日～９月24日
調 査 主 体　公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者　調査課長　高橋 工、趙哲済、黒田慶一、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

調査地は現淀川と神崎川に挟まれた海岸低地に立地する。神崎川からは240m南にあり、1926(大正15)年刊行の国土地理院地形図にある澱粉製作所(現日澱化学株式会社)の敷地内に当る。三津屋霊園を挟んで南側は、近世以降の主要街道であった中国街道(現国道26号線)に接している。中国街道は

図1　調査地位置図

大坂から十三・加島・尼崎を経て西宮で西国街道と合流して山陽道となり、瀬戸内以西に繋がる交通の幹線道であった。

調査地の西約600mには、南北朝時代から戦国時代の城跡とされる三津屋城伝承地がある。また、神崎川に沿って中国街道を約1km下ると、古墳時代前期の布留式土器や13～14世紀の遺構・遺物が濃密に出土した富光寺境内遺跡[HK95－1次：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997]、1.3km先には田辺三菱製薬加島工場で1937年に弥生時代と平安時代の土器が多量に出土したと報じられた加島遺跡[大阪文化財研究所2011]などがある。

本調査地からは南西に約700m離れた加島1丁目所在遺跡では、巣穴化石などの生物擾乱の著しい海底(干潟とみられる)であったKZ08－1

図2　調査区配置図

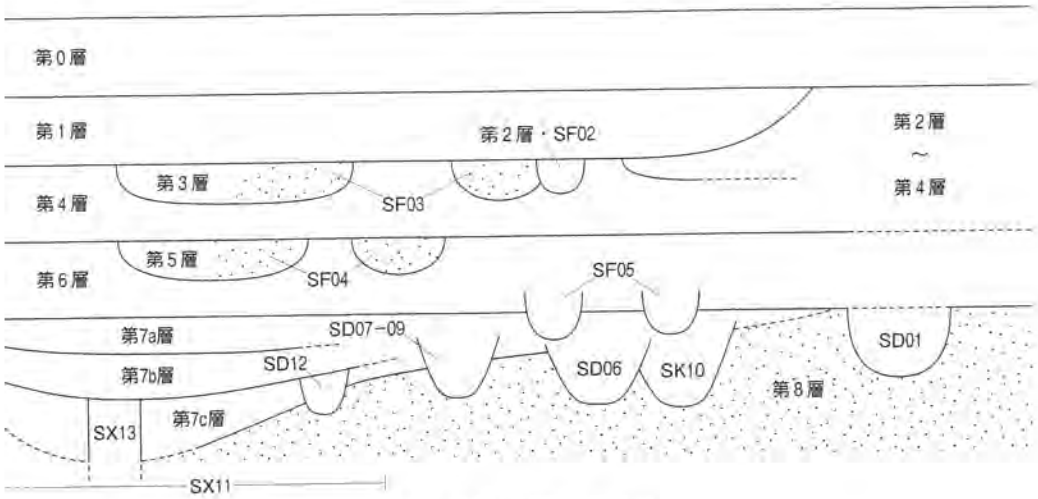


図3　地層と遺構の関係図

次調査地が、中世以降に湿地から耕作地へ移り変わった土地変遷を考察している[大阪市文化財協会2008]。同じ敷地で本格的に行われたKZ09－1次調査では、耕作痕跡を複数面で検出し、耕作の開始時期を鎌倉～室町時代にかけてと推定した[大阪文化財研究所2011]。なお、この調査では、KZ08－1次調査が海底の堆積層とみた古墳時代頃の地層を河成層としているが、三角州帯が形成される過程で干潟面を何度か覆った砂層を強調したのであろう。この調査地から北へ約200m、本調査地からは南西に約500mのKZ12－1調査地では、近世以前の層準は植物の根が残る砂層～粘土層となり、より陸域に近い湿地環境であったと予想される[大阪文化財研究所2012]。

本調査地から北東へ約700m、神崎川に面するMK13－1次調査地では、江戸時代の神崎川の堤や河道の位置を推定している。また、多数の地震痕跡を検出した[大阪文化財研究所2014]。

今回の調査では、大阪市教育委員会の試掘結果を受け、開発敷地の北辺に沿って東西30m、南北8mの調査区を設定した(図2)。9月1日より機械掘削を始め、人力による調査を経て、9月23日に調査を終え、翌24日に撤収を完了した。

調査地の基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、これに基づき、本報告では世界測地系の座標北を方位の基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

本報告書の出土遺物に関する記述は当研究所学芸員小田木富慈美が行った。

2)調査の結果

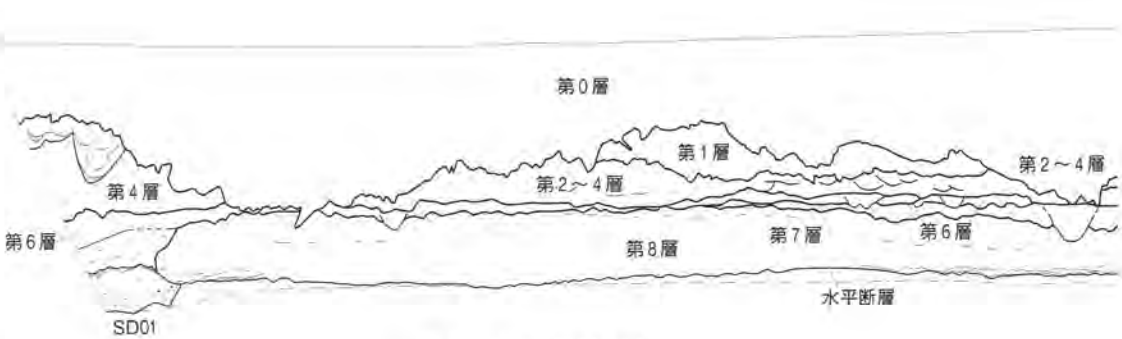


図4　南壁地層断面図

i)層序

調査地はほぼTP±0mの平坦な造成地である。建物解体時に攪乱された造成土(第0層)の下位、地表下1.7m付近までの地層を7層に区分した(図3・4・5)。

第1層は近代以降の客土層および作土層である。客土層は褐色(10YR4/4)砂質シルトの偽礫からなる。調査区東端部を除くほぼ全域に広がり、下面の標高はTP−1.0〜−1.2mで、東で少し高くなる。層厚は最大45cmだが、第0層形成時の攪乱前はさらに厚かったとみられる。作土層はにぶい黄褐〜黄褐色(10YR5/4〜2.5Y5/3) わずかに細礫混りシルト質砂〜砂質シルトからなり、調査区東端部に畠の作土として分布した。下面の標高はTP−0.7m内外であった。層厚は20cmである。

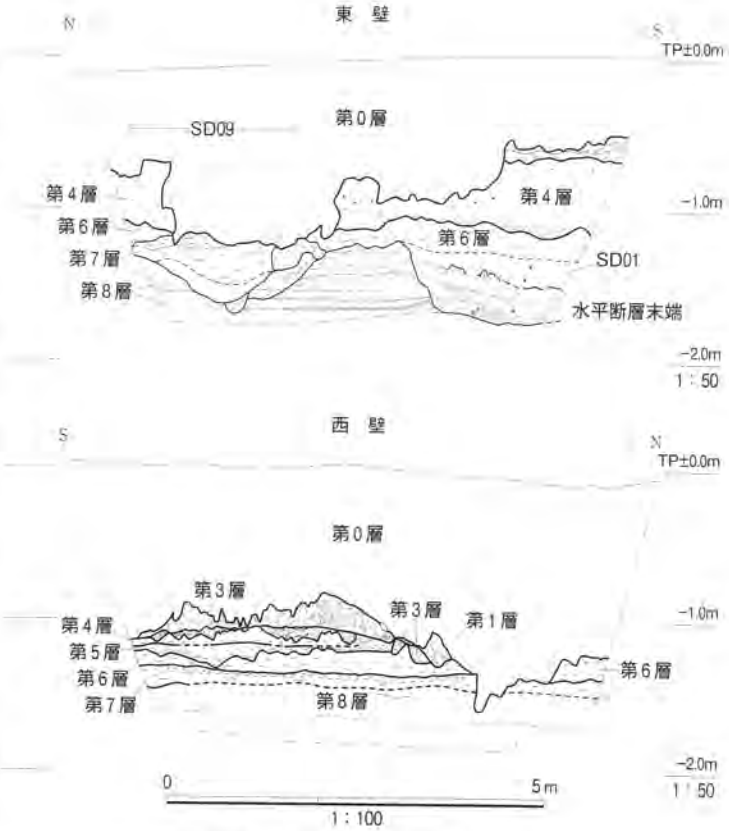
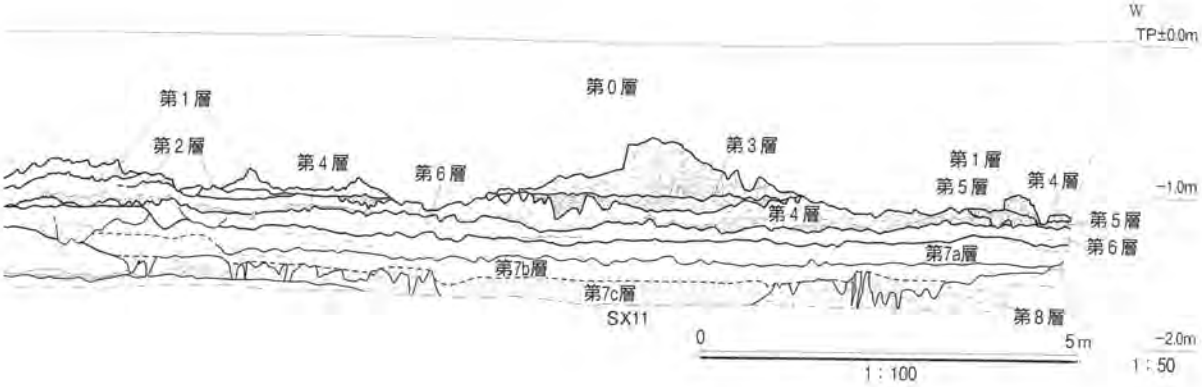


図5　東・西壁地層断面図

第2層は江戸時代後半以降の暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトからなる作土層である。層厚は6cm以下で、調査区西部で部分的に区分できたが、第3層が分布しない調査区中・東部では本層から第4層までが同質で区分できない。第2層(〜第4層)内で畠の畝間SF02が見つかった。

第3層は江戸時代後半以降の砂の客土層である。黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂主体の粗粒〜細粒砂で、後述する第4〜6層由来の砂質シルト偽礫が含まれる。SF03の埋土として調査区西部に断続的に分布した。

第4層は18〜19世紀(江戸時代後半)の作土層および客土層である。作土層は灰色(7.5Y5/1)中粒砂質シルトからなり、層厚は20cmで、調査区西部に分布する。上述のように、調査区中・東部では第2層と同質の作土層であり、第2層と第4層が区分できないため、図4には第2〜4層と記述した。客



土層はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトからなり、調査区東部に厚く分布した。最大層厚は東端部の50cmであった。作土層とは漸移して明確な境界は認められなかった。調査区西部の第４層上面で畠SF03が見つかった。第４層には陶磁器が含まれる。

第５層は氾濫性の砂層である。灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂で、SF04の埋土として調査区西部に断続的に分布した。出土遺物がなく堆積年代を決め難いが、層序関係から17世紀頃かと思われる。

第６層は15～16世紀の作土層である。暗オリーブ色(5Y4/3)砂質泥からなり、調査区全域に広く分布する。粘土質の調査区西部では下面はTP－1.3mで層厚は、シルト質の調査区東部ではTP－1.1mで層内にSF05の畝間群が見つかった。陶磁器類が含まれる。

第７層は主として調査区西部の凹地SX11とその周辺に分布する湿地の泥層と、これと漸移して東部の第８層直上に分布する古土壌である。地層形成は遅くとも古墳時代初期に始まり、14世紀まで続く。SX11内では３層に区分できる。第7a層は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルト層で層厚は15～20cm、第7b層は褐色(10YR4/4)粗粒～中粒砂質シルト層で層厚は15cm内外、第7c層は灰色(5Y4/1)砂質泥層で層厚は15cm以上である。湧水のため下限は確かめられていない。調査地東部の第７層は暗オリーブ～灰色(5Y4/4～10Y4/1)砂質シルトからなる層厚５cm内外の古土壌で、マンガン斑紋が顕著である。

第８層は古墳時代初期以前に堆積した氾濫性の砂層である。層厚は50cm以上で、下限は未確認である。オリーブ褐～黄褐・灰オリーブ色(2.5Y4/3～5/4・5Y5/2)を呈し、下部から上部にかけてややシルト質の粗粒～中粒砂から緩やかに上方粗粒化して粗粒砂となり、最上部でややシルト質の中粒～細粒砂へ上方細粒化する。古流向はほぼ西から東である。

第７～８層中に見られる地震痕跡については後述する。

ⅱ)遺構と遺物および地震痕跡

遺構の平面図・断面図と遺物実測図を図６～９に示す。

a．古墳時代初頭の遺構と遺物

SK10は調査区東部のSD06に一部削られて第７層内で見つかった平面が洋ナシ形の浅い土壙である。長径0.6m、短径0.5m、深さ0.3mで、埋土はSD06や周囲の第８層と類似するシルト質中粒砂である。1は口縁部を横にして出土した土師器で、短頸の直口壺である。口縁部は直線的に広がり、端部内面を肥厚させる。体部は球形で、外面をハケ、内面をヘラケズリで調整する。古墳時代前期初頭に属する。

b．古代～中世の遺構と遺物

SD06は調査区東部の第７層内で見つかったN39°Eに延びる溝である。幅0.7～0.8m、深さ0.1m余りである。長さは3.3m以上あり、南端が調査区内にある。埋土はややシルト質の中粒砂である。土師器皿20個体以上のほか、土師器椀・黒色土器が出土した。２～22は土師器である。２～５は口径11cm未満の皿である。２～４は所謂「て」の字口縁皿である。２は器壁が薄く、３・４は厚い。５は口縁部が強く外反し、底部が平底となる。摩滅が著しく、回転台使用の有無は確認できない。６～21は口径が13～18cmの皿である。口縁部はいずれも一段のナデで調整し、端部を外方へ軽くつまむものが多い。体部下半から底部にはユビオサエ痕が顕著に認められる。22・21は器高が高く、椀に近い形態である。

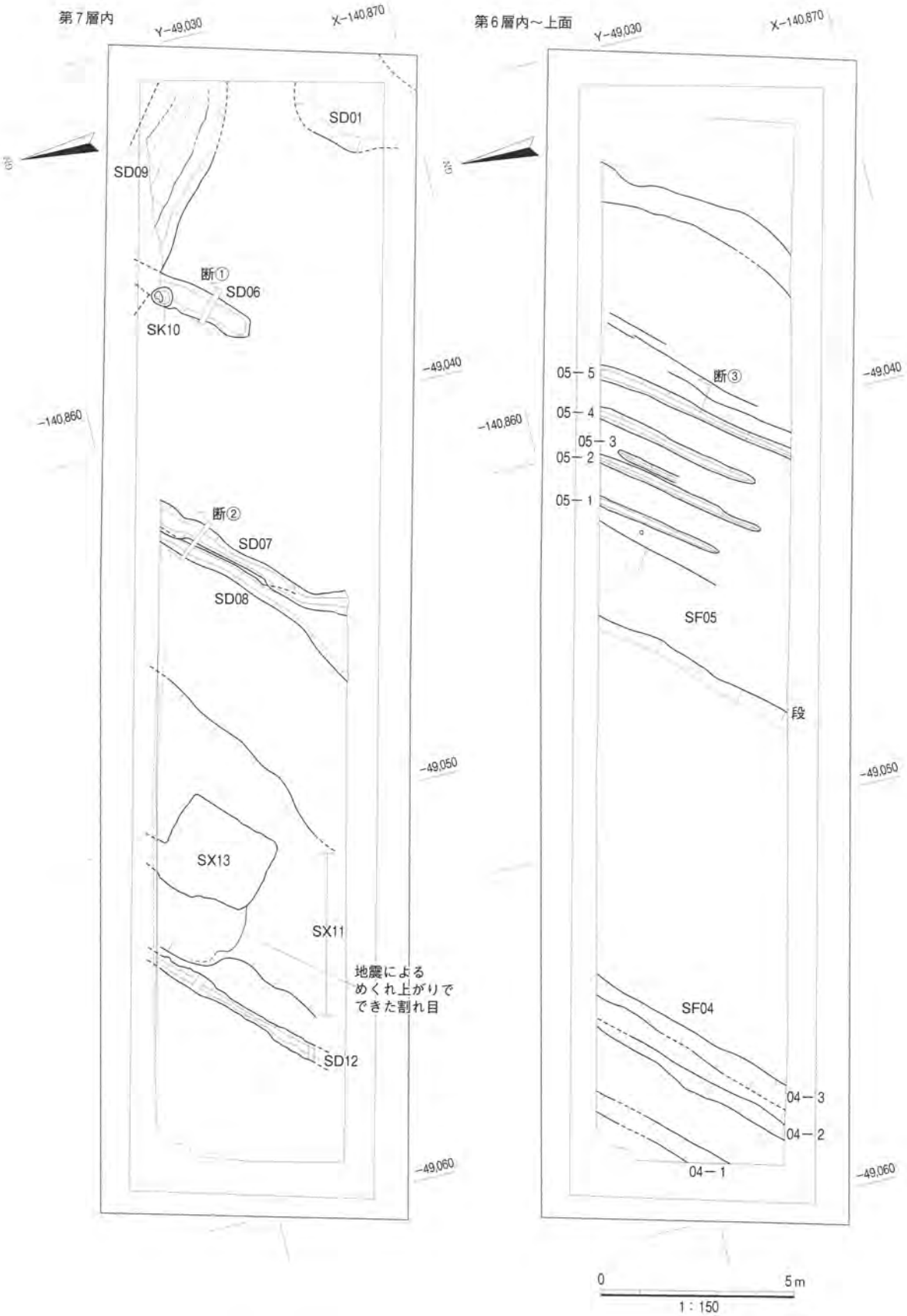


図6　第7層内・第6層内〜上面の畝間群及び耕作痕跡
一線だけのものは畝間の対になる肩が特定できないもの。畝間遺構番号はSFを省略。

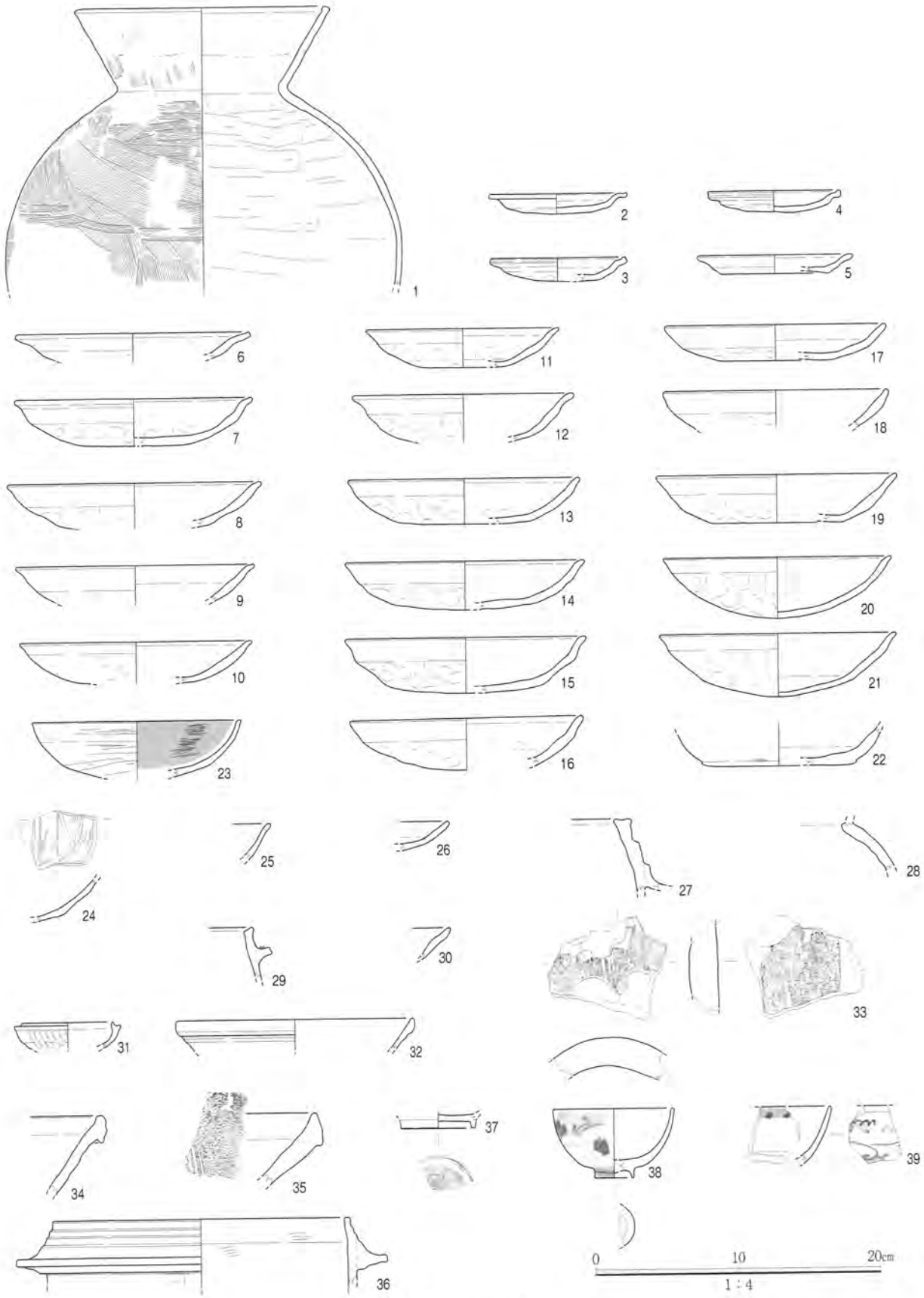


図7　出土遺物実測図

SK10(1)、SD06(2～23)、SD01(26～28)、SD08(25)、SX11(24)、第7層(29～31)、
第4(～6)層(33～35)、第2層(32・38・39)、第1層(36・37)

以上の皿は、胎土に砂粒やシャモットを多く含み、浅黄色を呈するものが多い。22は平底の底部を持つ椀である。回転台整形の可能性があるが、摩滅のため確認し得なかった。底部付近の外面には工具の痕跡を有する。23は黒色土器A類の杯である。内外面ともにヘラミガキを施し、底部外面はヘラケズリする。胎土は精良である。以上のうち土師器は11世紀前～中葉に属する。黒色土器23は9世紀後半で、大阪北部域産とみられる。

SD08は第7層内で調査区中央部をN42°Eに延びる溝である。幅0.4m、深さ0.1mであるが、南側でラッパ状に広がる。埋土は細粒砂質シルトである。灰釉陶器の口縁部25が出土した。内外面に灰釉が付着し、端部は緩やかに外反する。10世紀であろう。

SD07はSD08に一部重なって第7層内、SD06の下位で調査区中央部をN43°Eに延びる溝である。幅0.4～0.6m、深さ0.1m余りであるが、南側で少し東に(N15°E)振る。遺物は出土していない。

SD09は調査区東北隅の第7層内で見つかったN48°Wに延びる溝である。幅2.1mで深さ0.3m余りの二段落ちの溝であり、下段幅1.2m、下段深さは0.2m余りである。土師器片が出土した。

SD01は調査区東南隅の第7層上面で見つかった溝である。北方向から東北東方向へ弧を描くように分布する。幅1.5m以上、深さ0.6m足らずで、長さ約3m分を検出した。土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・古瀬戸・中国産白磁・中国産青磁が出土した。26は土師器皿である。27は瓦質土器で羽釜の口縁部である。以上は14世紀に属する。28は中国産白磁の壺で肩部の破片である。12世紀後半～13世紀であろう。

SD12は第7c層上面で調査地西部をN44°Eに延びる溝である。幅0.5m、深さ0.1mで、長さ5m以上である。遺物は土師器片がわずかに出土したのみである。

SX11は調査区西部の第8層上面で見つかった溝状の凹地である。幅約10mで北東－南西方向に延びる。第7c層が分布する深い部分の幅は5.4mである。深さは0.6m以上で、湧水のため下限は確かめられていない。第7a～c層から土師器・須恵器・瓦器・中国産青磁が出土した。これらの中には被熱したものが多く含まれる。24は瓦器椀で、底部内面に平行線状のヘラミガキを施す。13世紀であろう。

SX13は第7c層上面で見つかった土壙である。平面形はSD12にほぼ並行する東辺が2.6m、南辺が2m余りの方形であるが、西辺は地震によるとみられる変形により歪である。北西隅には幅0.7mの溝らしい凹みが北に延びている。土師器片が出土している。

第7層から出土した29は瓦器の羽釜で、三足釜の口縁部であろう。13世紀に属する。30は土師器皿で、口縁端部を軽くつまんで屈曲させる。15世紀に属する。第7a層から出土した31は中国産白磁の合子である。12世紀後半～13世紀に属する。

c．江戸時代の遺構と遺物

SF05は調査区東部の第6層内で見つかった畠である。N35～38°Eに延びる畝間SF05－1～5を検出した。畝間幅0.3m前後、深さ0.1m、長さ5.4m以上で、畝間間隔はSF05－1・2・4・5間で1.0～1.1mである。畝間堆積物の底付近には、雨水により畝斜面を流れたとみられる細粒～極細粒砂のラミナが明瞭に認められる。

SF04は調査区西部の第6層上面で見つかった畠である。第5層を埋土とし、N42～44°Eに延びる

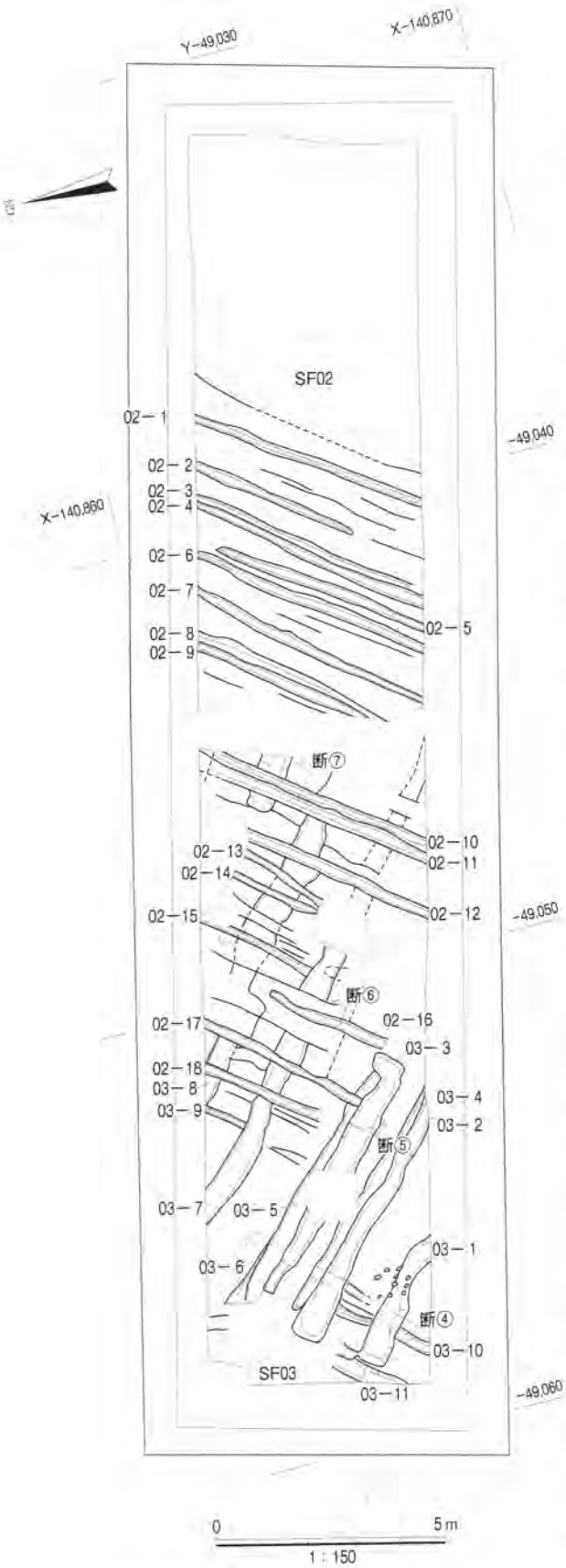


図8　第4層上面・第3層上面の畝間群
一線だけのものは畝間の対になる肩が特定できないもの。
畝間遺構番号はSFを省略。

畝間SF04－1～3を検出した。畝間幅0.5m前後、深さ0.1m未満でごく浅く、長さ5.7m以上で、畝間間隔は0.9mと0.17mで、SF04－2/1間にもう一筋畝間があった可能性がある。

SF03は調査区西部の第4層上面で見つかった畠である。第3層を埋土とし、N44～50°Wに延びる畝間SF03－1～8を検出した。畝間幅0.5～0.8m、深さ0.1m前後、長さは11.4m以上で西端がある。畝間間隔はSF03－1・2・3・5・7で1.4m前後、SF03－7・8間がやや広く1.7mである。また、SF03－1～8の下位に、SF03の方向と直交するSF03－9～11も見つかっている。

SF02は調査区中央部～東部を中心に第4層上面で見つかった畠である。上述したように地層区分が出来ないところでは第4層下面まで下げて検出作業を行っている。第2層を埋土としN34～37°Eに延びる畝間SF02－1～18を検出した。畝間幅0.2m余り、深さ0.1m未満で浅く、長さは5.4m以上である。畝間には再耕起による重なりがあるが、畝間間隔はSF02－1・2・4・6・7・9で0.8～1.0mである。

SF02～05からは江戸時代の陶磁器類のほか、土師器・東播系須恵器・瓦器・中国産白磁が出土した。図示し得るものはなかった。

包含層の遺物も江戸時代の陶磁器類が主体であるが、耕起に伴い掻き上げられた中世の遺物も含まれている。

第4～6層から出土した33は丸瓦で、凹面に布目圧痕、凸面には縄目タタキ痕跡を有し、被熱している。平安時代前半に属するとみられる。34は東播系須恵器のこね鉢である。13世紀に属する。35は備前焼の擂鉢で、15世紀に属する。

第2層から出土した32は中国産白磁碗で、口縁部が玉縁状を呈する。11世紀後半～12世紀に

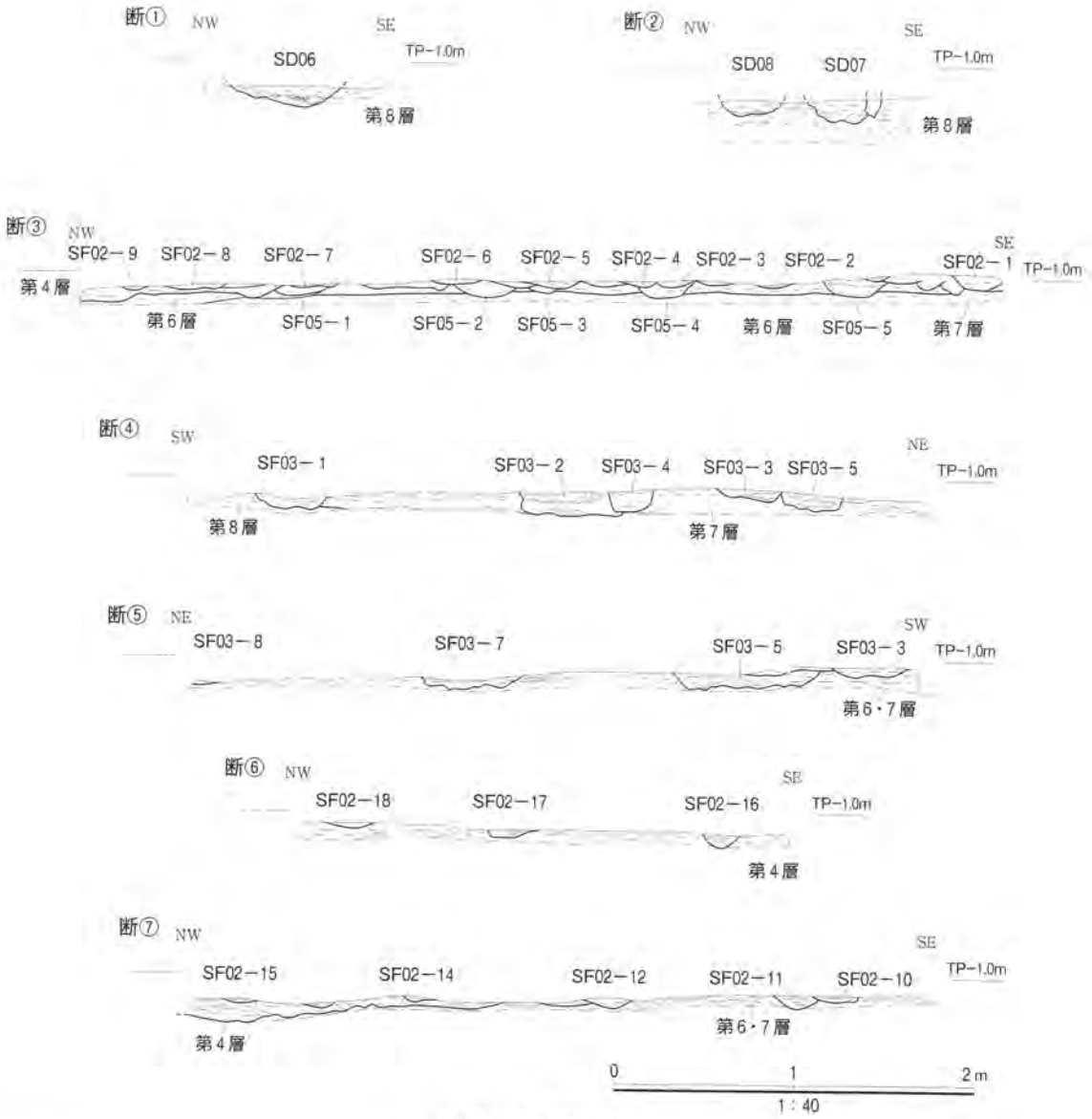


図9　遺構断面図

属する。38は肥前磁器の染付碗で、外面にコンニャク印判による施文を有する。18世紀前葉である。39は肥前磁器の染付碗で、18世紀中葉に属する。

第1層から出土した36は瓦質土器の羽釜で、15世紀後半に属する。37は肥前陶器で、京焼風陶器の碗である。17世紀後葉である。

d．地震痕跡

第8層～第7層中には、地震によるとみられる変位・変形構造が認められる。調査区南壁では、第8層の下部、TP−1.6m付近に水平断層(極低角の衝上断層)が微妙な凹凸を持ちながら、SD01内から西へ18m余りにわたって追跡できる。断層ガウジ(註1)は薄いシルト層である。変位量は上盤が約30cmほぼ西へ滑っている。地震変形ゾーン下部の脆性破壊ユニット下半にしばしば見られる現象である。また、SX11内の第7層の下底面には径数cm～10cm余りで比高数cm～20cm程度の不規則な凹凸変形が認められ(図4)、これは地震変形ゾーンの流動変形ユニットにあたるとみられる。地震変形ゾーン上部の流動変形ユニットは未確認であり、上位の作土層である第6層には変位・変形構造は認められな

い。

一方、第7c層上面のSX13は、埋土中に甚だしい変形が見られ、第８層の液状化・流動化に伴う第7c層の偽礫化、および西側第7c層のめくれ上がりが認められる。第7b・ａ層に変形が認められないことから、地震はSX13掘下げ後、第7b層堆積前までに発生したと考えられる。

SX13や第7c・ｂ層の出土遺物からみて、地震の発生は12～13世紀とみられる。1099(康和元)年の南海地震や1185(文治元)年の内陸地震、1200年前後の南海地震などの可能性がある。

3)まとめ

本調査では淀川区の諸遺跡における従来の知見に加えて、新たに次の諸点が明らかとなった。

・SK10の直口壺が出土したことから、当該地の離水は古墳時代初頭以前に遡る。

・中国産白磁・青磁、土師器など古代～中世の遺物が少なからず出土することから、当該期に近隣には集落が存在したと考えられる。

・畝間の方向にはN43°EとN36°Eをそれぞれ中央値とするものがある。当該地における中世以降の条里も、この程度のぶれがあったのであろう。

・12～13世紀の地震により、当該地周辺は被災したと考えられる。

本調査地周辺で今後さらに調査がすすめられ、当該の海岸低地における歴史と古環境がより詳細に解明されることが期待される。

註)

(1)断層ガウジ(fault gouge)は断層運動に伴う破砕によって生じた細粒・未固結の断層内物質をいう。一般に、破砕岩片は細粒基質部に対して30%未満のものを指す。いわゆる断層粘土も含まれる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997、「佐々木氏による建設工事に伴う発掘調査(HK95－１)略報」:『平成７年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.７－15

大阪市文化財協会2008、『淀川区加島一丁目における埋蔵文化財試掘調査(KZ08－１)報告書』、pp.１－３

大阪文化財研究所2011、『加島一丁目所在遺跡発掘調査報告』、pp.１－35

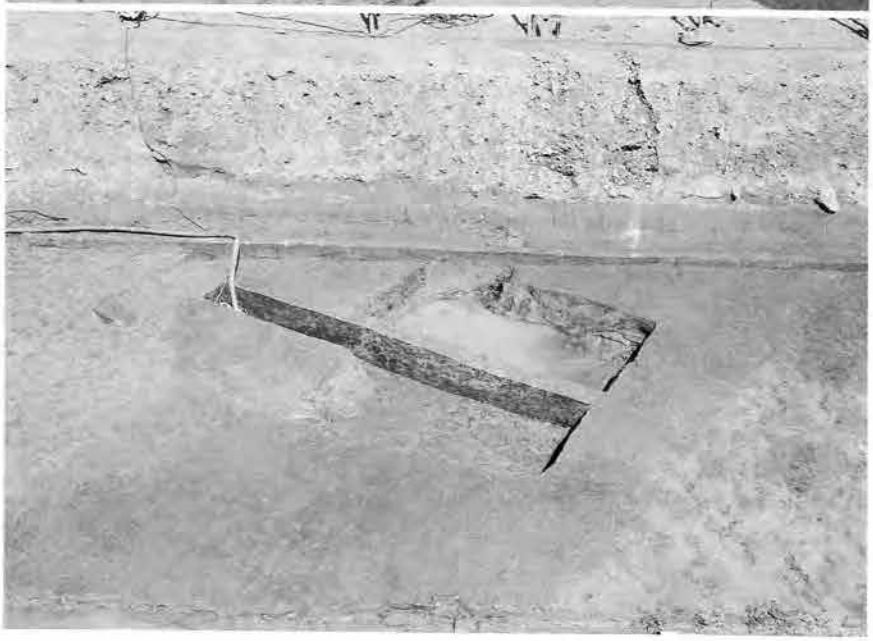
2012、『淀川区加島一丁目(加島人権文化センター)における埋蔵文化財試掘調査(KZ12－１)報告書』、pp.１－２

2014、『淀川区三津屋北一丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(MK13－１)報告書』、pp.１－６

調査地遠景(北西から)

南壁地層断面
(北西から)

SX11・13、SD12
(南から)



SK10土器出土状況
（西から）

SD06土器出土状況
（南西から）

SD07・08（南西から）

SD01(北西から)

第6層内～上面の畝間群(東から)

第4層上面・第3層上面の畝間群(西から)

淀川区新高三丁目14－１における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(NI14－１)報告書

調査個所	大阪市淀川区新高3丁目14－1の一部
調査面積	169㎡
調査期間	平成27年2月2日～2月17日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、吉田悠歩、絹川一徳

1)調査に至る経緯と経過

新高3丁目所在遺跡は淀川区の北部、神崎川の左岸に位置する新発見の遺跡である(図1)。淀川デルタに立地し、大阪市教育委員会による試掘調査では中世の遺構面・遺物包含層が確認された。

調査地周辺の歴史的環境について、この地域は考古学的な調査事例が少ないため、いまだ不明な点が多い。しかし、調査地から東に2kmほど離れた崇禅寺遺跡とそれに隣接する宮原遺跡・西淡路1丁目所在遺跡では比較的調査が進んでいる。その成果によると、おもに淀川から運ばれる土砂の堆積により陸地が形成される中で、まず、微高地上に立地する崇禅寺遺跡で弥生時代後期～古墳時代初頭に集落が形成された。その後、奈良時代には、微高地上の崇禅寺遺跡のみならず低地にある宮原遺跡や西淡路1丁目所在遺跡でも遺構や遺物が見られるようになる。平安～室町時代には低地の開発が進み、江戸時代には堤防の構築や水路の掘削が行われた[大阪市文化財協会2010a・b]。

調査地から北東へ2kmほど離れた東三国遺跡や十八条遺跡などでは、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物や、14世紀以降の各時期の耕作痕跡などの遺構が知られている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999·2009]。以上の遺跡にみられる変遷は、調査地周辺の一般的な土地利用のあり方であったと思われる。

今回の調査に先立ち大阪市教育委員会による試掘調査が行われ、地表下約1.1m以下の深さで中世と考えられる遺構面および遺物包含層が検出された。今回の調査はこうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に行った。

調査は、平成27年2月2日に13m×13mの調査区を設定して開始した(図2)。第1層までを重機で

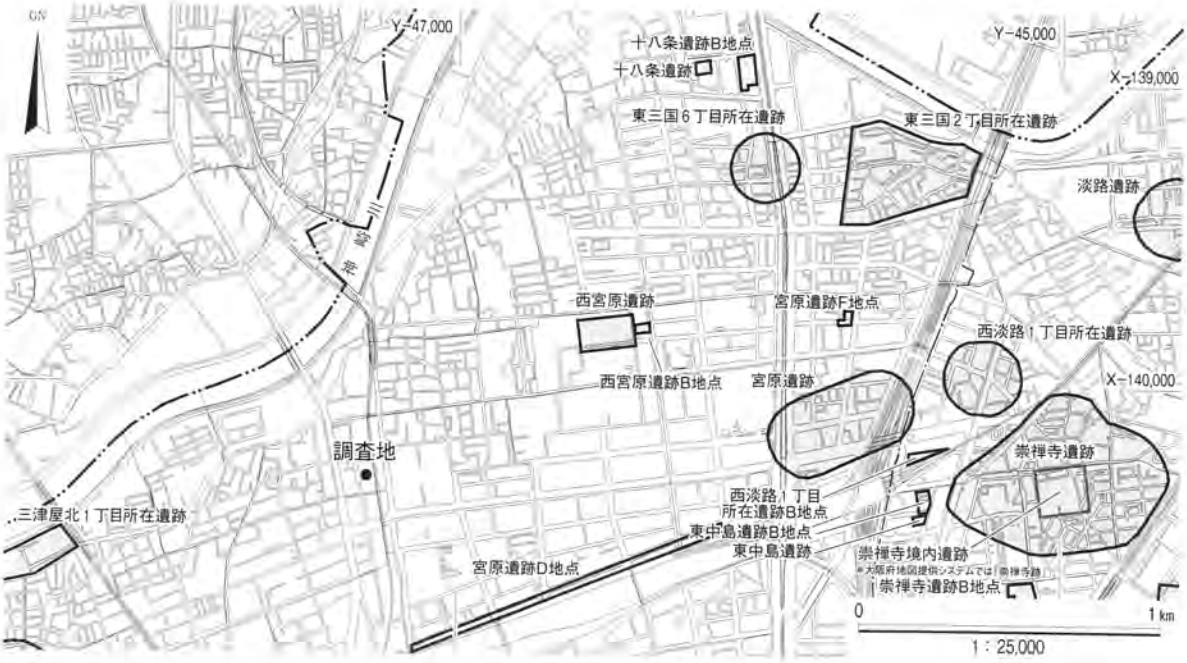


図1　調査地位置図

図２　調査区位置図

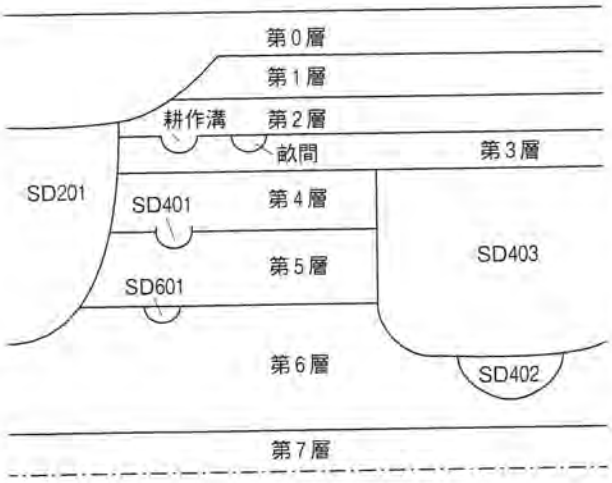


図３　地層と遺構の関係図

掘削し、第２層以下を人力で掘り下げ、遺構面の精査と遺物の採集、写真撮影、実測などを行った。２月17日に機材を撤収し、作業を完了した。

なお、基準点はMagellan社製ProMark３により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３～６、図版１)

第０層：コンクリートやレンガを含む現代の盛土である。調査区全体に見られ、層厚は60～110cmである。

第１層：灰色(5Y4/1)シルト質細粒砂層で、近代～現代の旧表土である。最大層厚は20cmを測る。

第２層：黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルトの作土層である。層厚は15cmである。東側を攪乱とSD201に削られており、調査区の西側にのみ分布する。上面でSD201を、下面で耕作溝を検出した。出土遺物は瓦質土器甕片ほか下位層に由来する土師器・瓦器のみである。下位層とSD201の出土遺物から室町時代後半から江戸時代にかけて形成された可能性が高い。

第３層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混り粘土質シルトの作土層である。層厚は３～15cmで、攪乱とSD201に削られた調査区東半以外に分布する。上面で畝間と考えられる遺構を確認した。第３層からは13～14世紀前葉の遺物に加え、15世紀以降と考えられる備前焼擂鉢の破片が出土している。

第４層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粘土層で、層厚は12cmである。植物による擾乱が見られる湿地の堆積層である。第４層は東を攪乱とSD201で、西をSD403で削られているため、調査区中央でのみ分布を確認できた。また、上面でSD403を、層内でSD401を確認した。

第５層：灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト層で、層厚は20cmである。一部に植物の根による擾乱が見られる湿地の堆積層である。調査区のほぼ全面に分布する。本層からは平安時代以前と考えられる土師器の小片が出土している。

第６層：粗粒砂～シルト質粘土からなる氾濫堆積層である。おもに上方に細粒化する灰色(5Y4/1)中粒砂～細粒砂層と黄灰色(2.5Y4/1)植物片を含むシルト～シルト質粘土層の互層からなる。また、

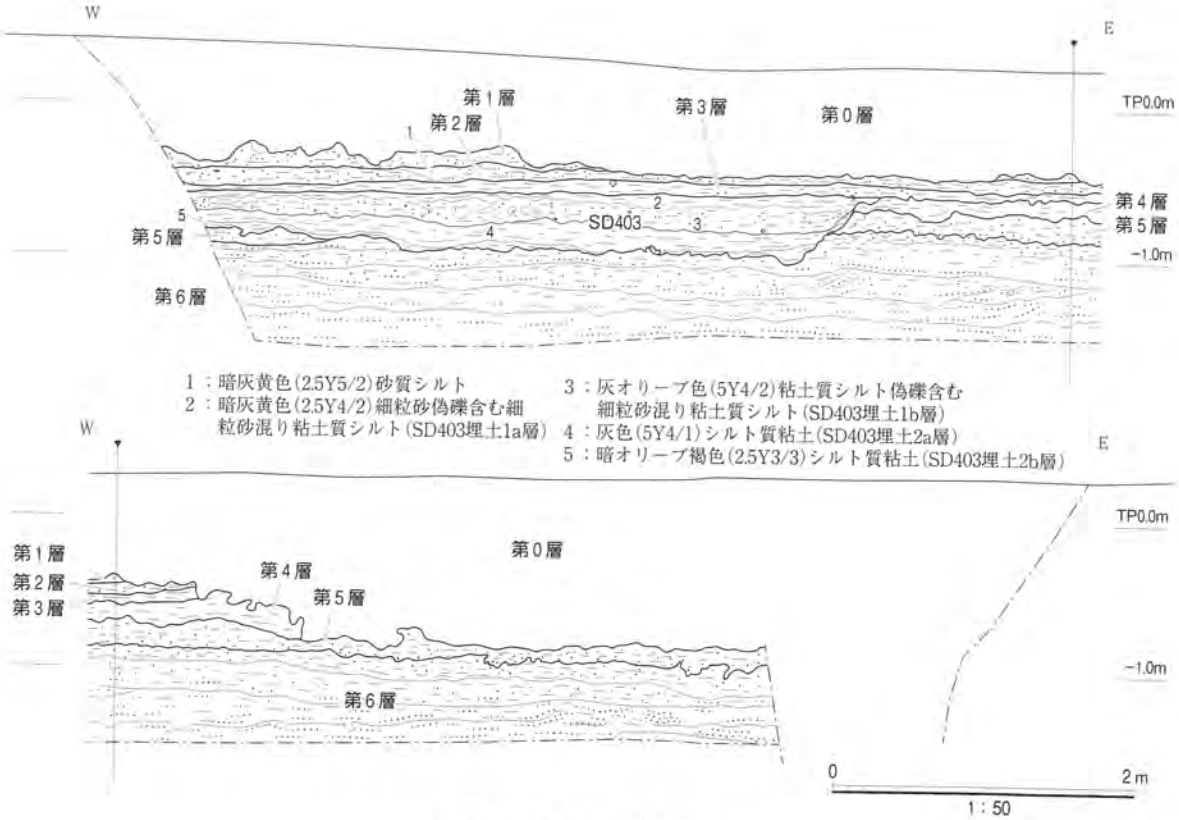


図4　北壁地層断面図

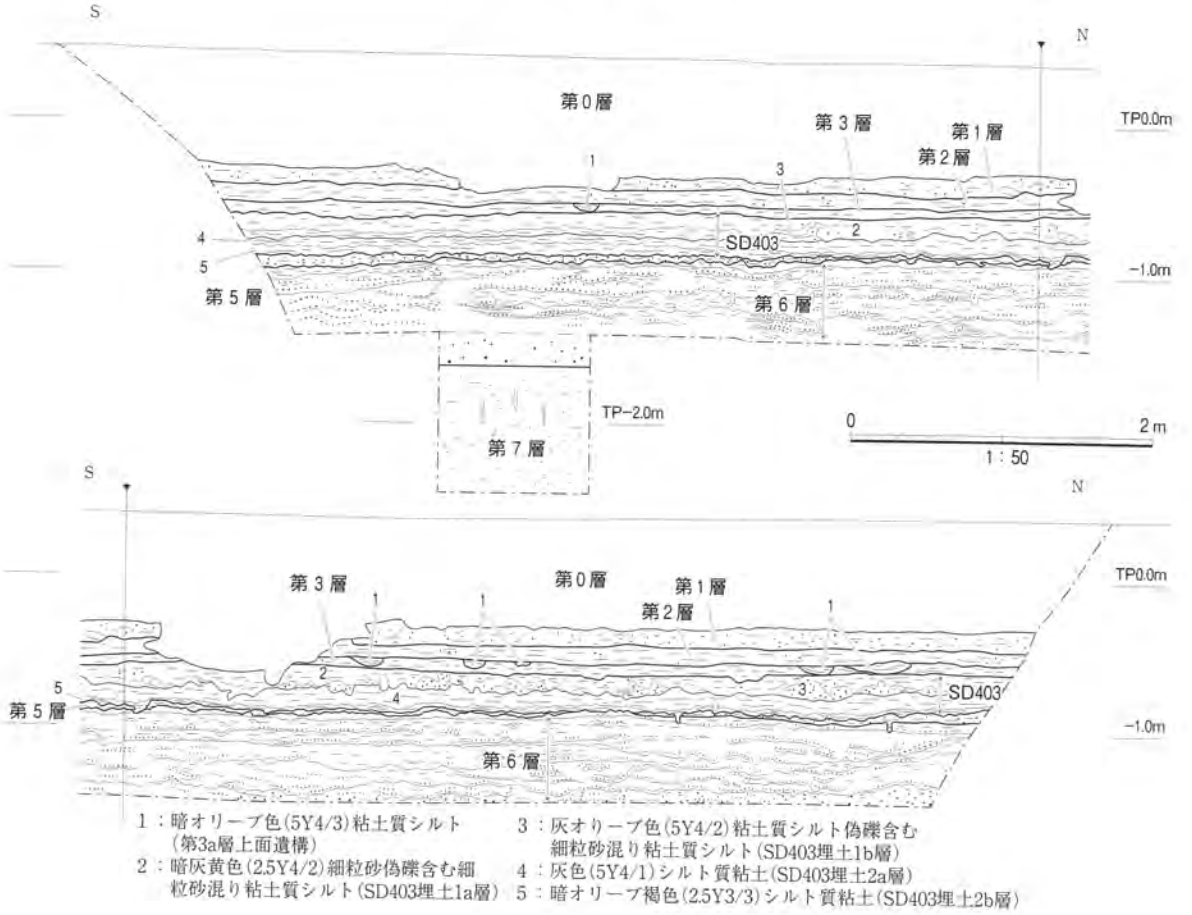


図5　西壁地層断面図

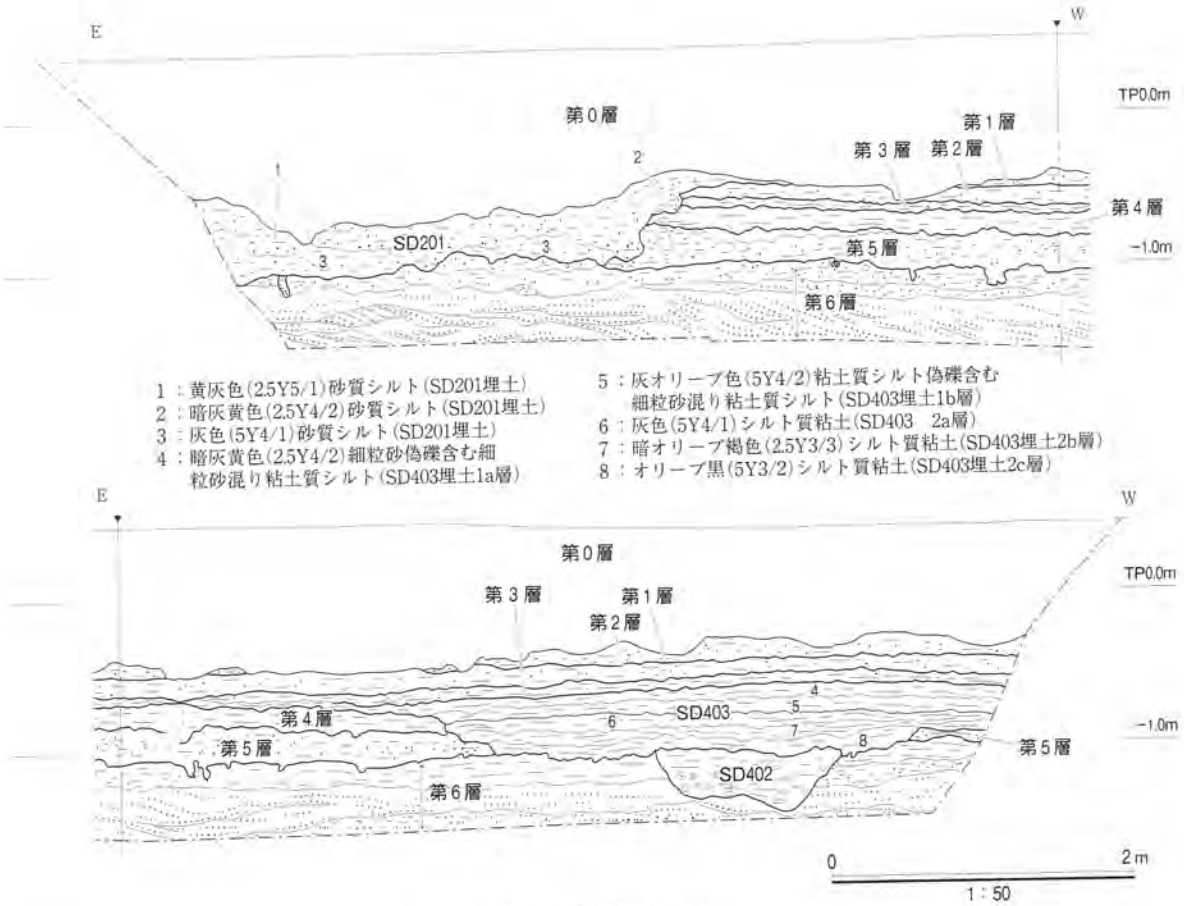


図6　南壁地層断面図

上方に細粒化するラミナと植物の根による擾乱が見られる。なお、南壁の一部では粗粒砂～細粒砂層が見られた。この砂層には西へ傾斜するトラフ型斜交ラミナが見られるため、一時的に東から西へ向かう流れがあったことがうかがえる。層厚は70cmで、調査区の全体に分布する。また、上面ではSD601を検出した。本層からは板状の木製品が出土している。

第7層：深掘りで確認した海成堆積層である。シルト混り細礫質極粗粒砂からなり、サンドパイプが見られる。層厚は84cm以上である。

ii)遺構と遺物

a．平安時代以前(図7)

第6層上面においてSD601を検出した。長さ3.1m以上、幅0.25m、深さ0.1m弱で、N38°E方向に延びる。埋土はオリーブ

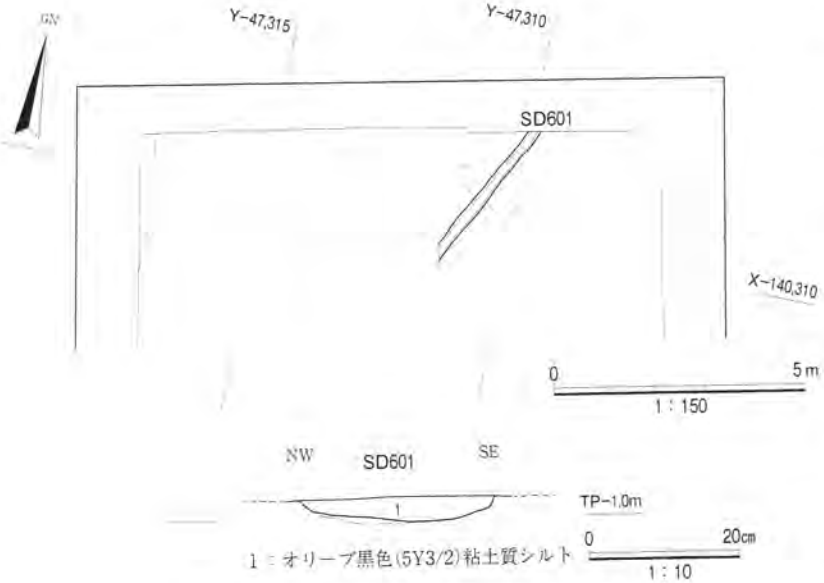


図7　平安時代以前の遺構平面・断面図

黒色(5Y3/2) 粘土質シルトである。出土遺物はないが、第５層の出土遺物より平安時代以前と考えられる。

b．鎌倉時代(図８・９、図版１・２)

第４層内ではSD401を検出した(図８)。長さ5.5m以上、幅0.7m、深さ0.1mで、N89° W方向に延びる。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1) シルト質粘土である。

また、後述するSD403の掘削終了時に、溝の基底でSD402を検出した。長さ5.9m以上、幅1.2m、深さ0.4mを測り、N14° W方向に延びる。埋土は第６層に由来するシルト質粘土と砂の偽礫を含むオリーブ黒色(5Y3/2) シルト質粘土である。土師器と瓦器の小片が出土した。なお、SD402はSD403掘削以前に埋没しているが、出土遺物の時期に大きな違いは認められない。

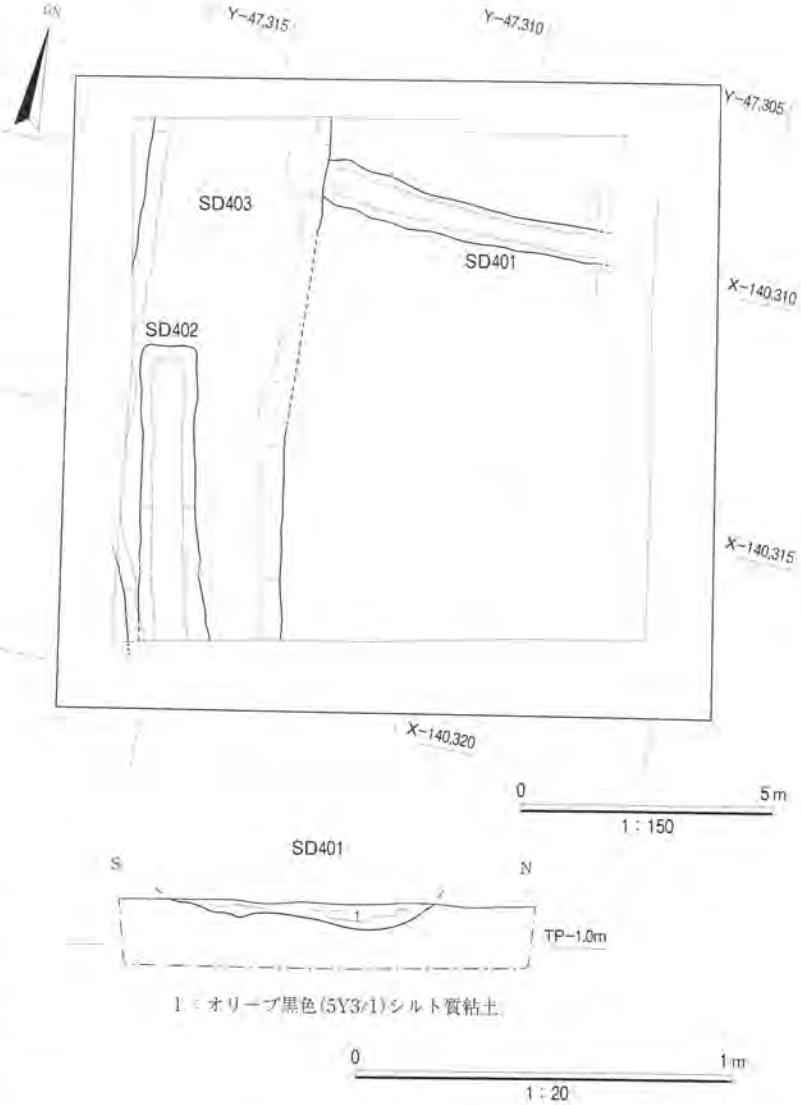


図８　鎌倉時代の遺構平面・断面図

SD403は調査区の西半で検出した大溝である。調査区外に続いており、全体は明確にできないが、長さ10.4m以上、幅3.5m以上、深さは0.5mで、N７° W方向に延びる。埋土の下半部は自然堆積層と思われる２層、上半部はSD403を埋め立てた１層からなる。なお、２層に耕起の痕跡が認められないことから、本遺構は掘上げ田の掘潰れ(凹部)である可能性が考えられる。

下半部の２層は2a～c層に細分され、土師器や瓦器の小片が出土した。2a層は灰色(5Y4/1) シルト質粘土層で、層厚は15cm前後である。第2b層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) シルト質粘土層で、層厚は４cmである。2c層はオリーブ黒色(5Y3/2) シルト質粘土層で、層厚は４～12cmである。第2a～c層にはラミナなどは見られないが、分級がよく、地層の境界は漸移的である。

上半部の１層は溝の埋戻し層であり、1a層と1b層に細分した。1a層は暗灰黄色(2.5Y4/2) 細粒砂混り粘土質シルトからなり、細粒砂の偽礫を含む。層厚は４～11cmである。1b層は灰オリーブ色(5Y4/2) 細粒砂混り粘土質シルトからなり、粘土質シルトの偽礫を含む。層厚は４～18cmである。

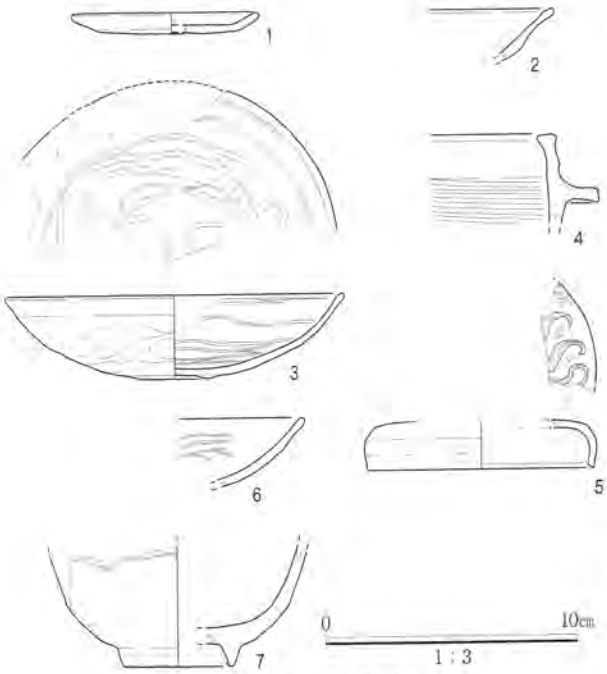


図９　出土遺物実測図
SD403(１～５)、SD201(７)、第２層(６)

SD403の上半である１層から溝の上位に堆積した第３層にかけては、土師器１・２、瓦質土器４、中国産磁器５など、13世紀～14世紀前葉の遺物が出土しており、SD403下半の２層からは土師器・瓦器など13世紀後葉の遺物が出土している(図９)。なお、１層では12世紀代の瓦器椀が１点見られた。

１・２は土師器皿である。１の口縁部は底部から斜めに立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面にナデが見られ、浅黄橙色を呈する。２は口縁端部内面を沈線状にくぼませ、器高がやや高い。摂津北部産とみられ、13世紀後～14世紀前葉に属するものである。３は瓦器、４は瓦質土器である。３は和泉型の椀で、口縁部外面はヨコナデ、体部外面にはユビオサエが見られる。体部内面には圏線状、底部内面には連結輪状のヘラミガキを施す。高台は低い。尾上氏らによる瓦器編年のⅣ期に属し、13世紀後葉であろう[尾上実・森島康雄・近江俊秀1995]。４は摂津型の羽釜である。口縁部は直立し、端部は平坦で内側へつまんでいる。口縁部外面には２条の凹線が巡る。体部外面の調整は不明である。体部内面にはハケメ、口縁部内面にはヨコナデを施す。14世紀前葉のものである。５は中国産青白磁で、合子の蓋である。天井部には型押し文様を有する。13世紀であろう。

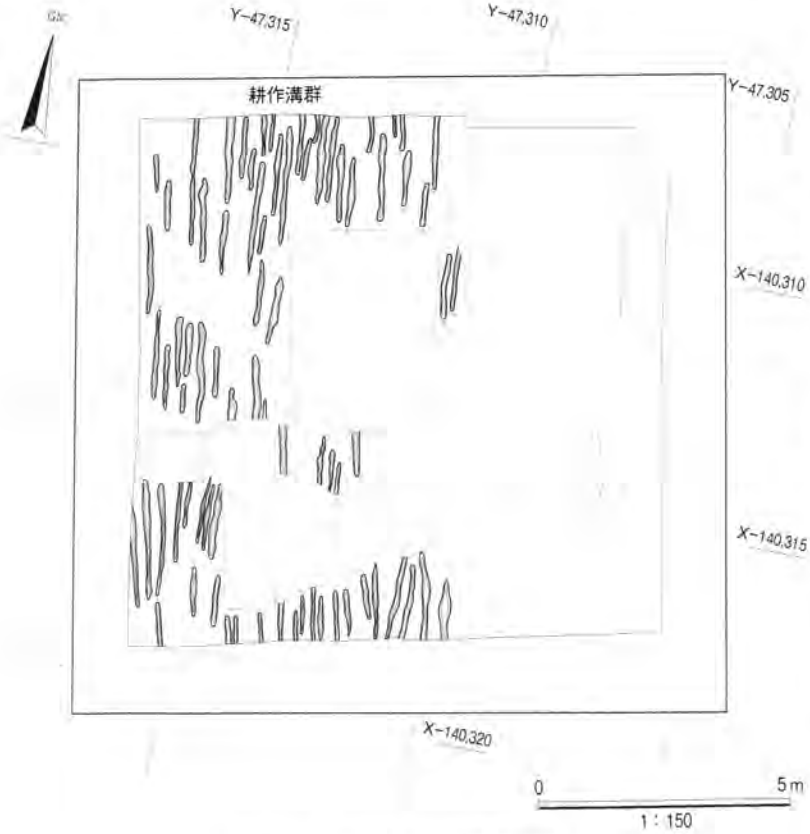


図10　室町時代の遺構平面図

c．室町時代(図10、図版２)

第２層下面で南北方向の**耕作溝**を多数検出した。長さ0.6～2.5m以上、幅0.1m前後で、N９°W前後の方向に延びる。瓦質土器片のほ

か、下位層に由来する土師器・瓦器片が出土した。

このほか、西壁の断面で第3層上面の遺構を確認した。幅は0.1～0.2mで、深さは0.1m程度である。埋土は暗オリーブ色(5Y4/3)粘土質シルトで、底部に薄く砂が堆積しているものも見られた。畝間などの可能性が考えられる。第3層が15世紀代の遺物を含むことから、時期はこれ以降であろう。

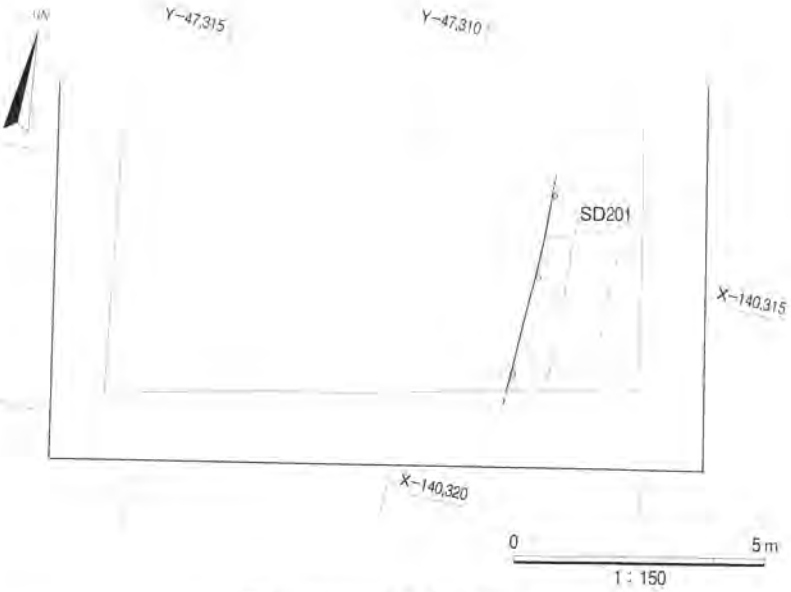


図11　江戸時代の遺構平面図

d．江戸時代(図9・11、図版2)

第2層上面では調査区の東南隅で溝状の落込みSD201を検出した。攪乱により壊されていることと、調査区外に続くことから平面形は明確にできなかったが、長さ4.0m以上、幅2.5m以上、深さ0.6mで、N1°E方向に延びる。

SD201からは17世紀後半に属する備前焼擂鉢・肥前磁器染付碗のほか、土師器・瓦器が出土した(図9)。7は肥前磁器の染付碗で、17世紀後半のものである。

e．各層出土の遺物(図9)

6は第2層から出土した瓦器椀である。口縁部外面にはヨコナデを施し、口縁端部は丸くおさめる。内面にはヘラミガキをまばらに施す。13世紀後葉の遊離資料である。

3)まとめ

今回の調査では、おもに鎌倉時代の13～14世紀前葉では掘上げ田のほか、耕作に関連する溝が認められた。このほかには室町時代の耕作溝、江戸時代の溝を検出した。これらのことから、調査地では13世紀頃までには開発が始められ、以後はおもに耕作地として利用されたものと思われる。出土遺物の中には中国産磁器も含まれ、付近に比較的富裕な階層が居住していたことが推定される。一方、氾濫堆積層の上面で小規模ながら平安時代以前に遡る溝があり、12世紀代の遺物がごくわずか出土したことなどから、周辺の開発がより遡る可能性も考えられるため、周辺域での調査で注意を要する。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「住宅都市整備公団による建設工事に伴う確認調査(HM97－1)」:『平成9年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3－16

2009、「埋蔵文化財発掘調査(JH07－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』2007、

pp.281－288
大阪市文化財協会2010a、『西淡路１丁目所在遺跡発掘調査報告』、pp.53－58
2010b、『宮原遺跡発掘調査報告』、pp.46－47
尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』、pp.315－337

図版一

西壁地層断面
（南東から）

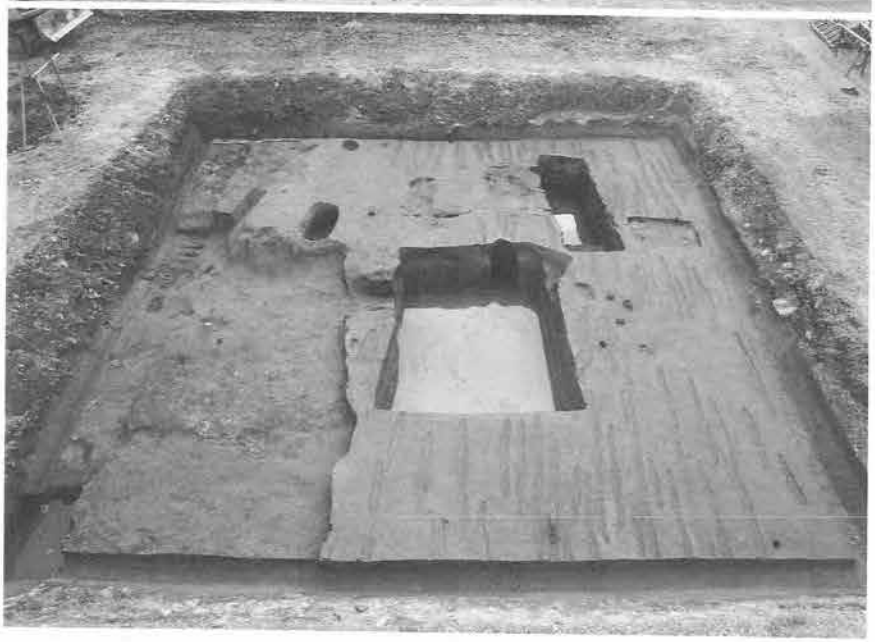
南壁地層断面
（北西から）

SD402・403断面
（北から）

SD402完掘状況
（南から）

SD403完掘状況
（北から）

第２層下面遺構
完掘状況
（北から）



淀川区野中北二丁目４・５・６の各一部における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(NV14－1)報告書

調査個所	大阪市淀川区野中北二丁目4・5・6の各一部
調査面積	220㎡
調査期間	平成26年8月25日～9月26日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋　工、絹川一徳

1)調査に至る経緯と経過(図1～3)

調査地は大阪市立十三市民病院の東側に位置する(図1)。調査地の周辺は、平安時代以降、神崎川の水運の要所であった場所で、その重要性から南北朝・戦国時代に複数の城館が築かれている。調査区から東へ約500mには14世紀中頃に楠木正行が築城したとされる三津屋城跡伝承地、北へ約500mには16世紀後半に細川藤賢が築城したとされる堀城跡伝承地がある。また、大坂を起点とした能勢街道と中国街道の合流点にも近く、調査地の西約1.5kmには、平安・鎌倉時代以来、神崎川沿いの交通の要衝として栄えた加島の集落がある。

一方、これまで周辺で行われた既往の調査は少なく、調査地から南東約1.2kmの淀川区役所旧庁舎の敷地内で行われたJS09－1次、北西約700mの三津屋北1丁目所在遺跡で行われたMK13－1次の2例にとどまる。試掘調査として実施されたJS09－1次調査は江戸時代の陶器片が出土したのみで、それ以前の遺構・遺物の確認には至らなかったが、MK13－1次調査では江戸時代とみられる杭列などの遺構が検出されている。調査地周辺は、中世以降に開発が進められたことが明らかであるが、このように調査事例が少なく、当該期の遺構検出に至っていないため、その土地利用の変遷については未だ不明な点が多い。

今回の発掘調査に先行して、2014年7月16日に大阪市教育委員会文化財保護担当が行った試掘調査において、地表下約1.5m以下で中世とみられる遺構と遺物の存在が確認された。この遺構面の年代や遺構・遺物の分布状況と当該地の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的として本格的な発掘調査を実施することとなった。

調査区は敷地の南東側に配置した。当初、東西28m×南北8mの調査区を設定する予定であったが、調査区のほぼ中央で南北方向に敷設された既存の排水溝を維持させる必要が生じたため、関係諸機関

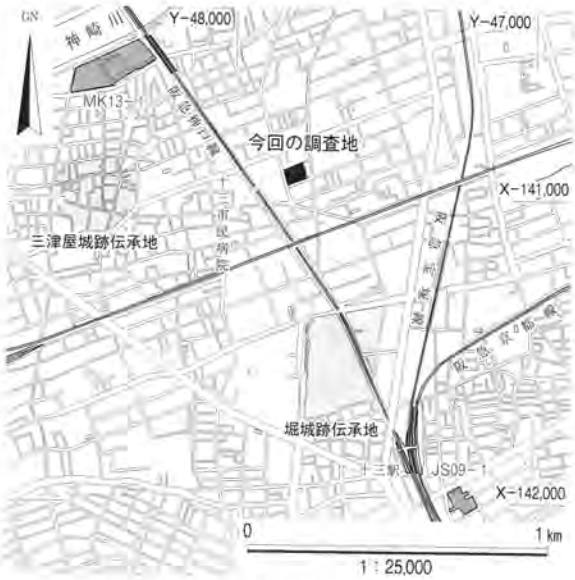


図1　調査地の位置

図2　調査区の位置

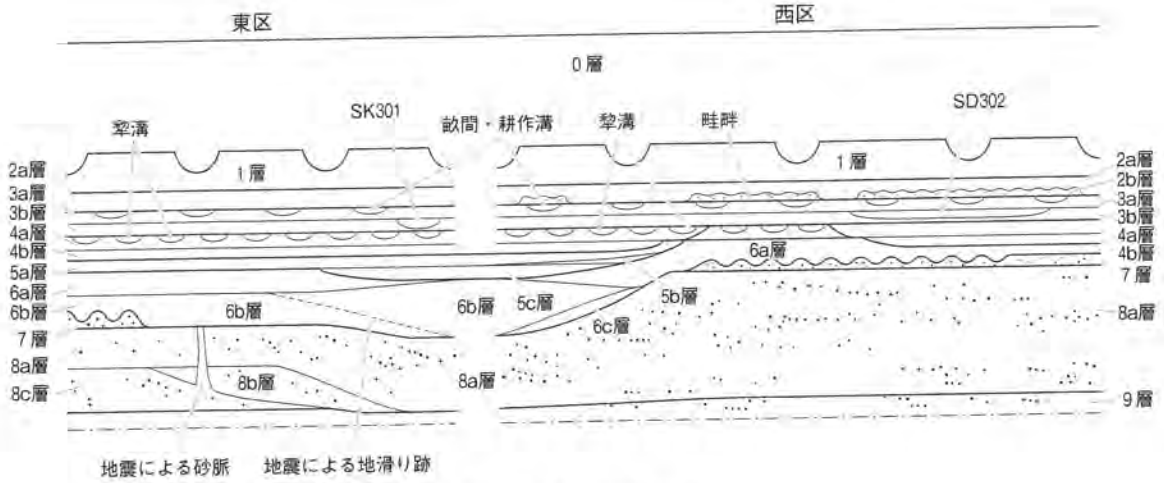


図３　地層と遺構の関係図

との協議の結果、排水溝をそのまま残し、東西２区に分けて調査区を再設定することとなった(図２)。東区は東西14.5m×南北８m、西区は東西13m×南北８mで調査面積は220㎡である。発掘調査は８月25日から着手した。重機により近代・現代の盛土や攪乱土を掘削した。その後、以下の地層を人力により掘り下げながら、遺構面の精査と遺構の検出・掘削、出土遺物の採集、必要な実測作業と写真撮影などの記録作業を適宜実施した。９月25日に調査に必要な現地作業がすべて終了し、９月26日に埋戻しを完了して撤収した。

本報告書で用いる標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○mと記している。また、座標値・座標北は、現場において基準点をMagellan社製ProMark３により測位して得た世界測地系座標を基準にしている。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３～５)

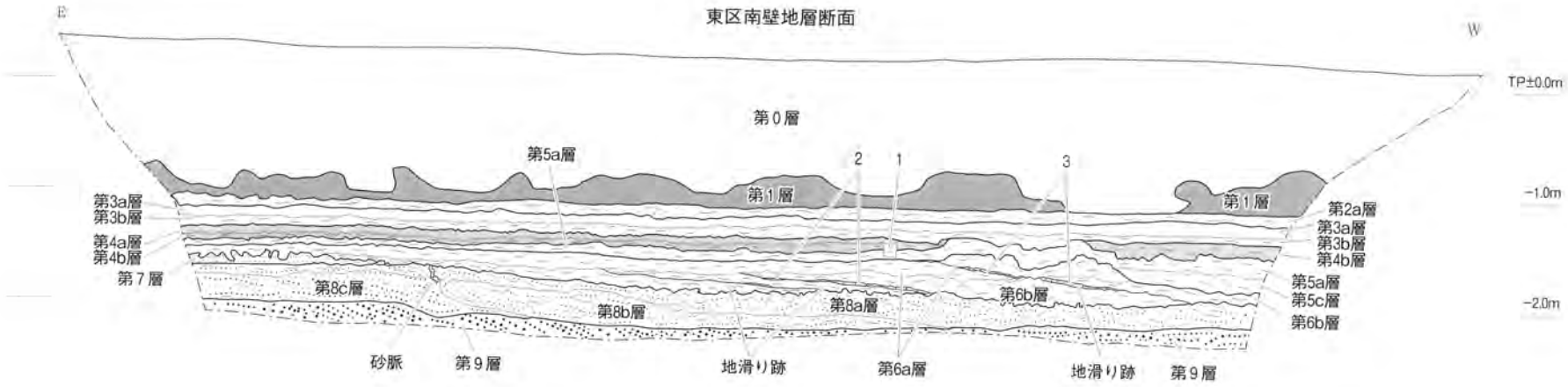
調査地は平坦な地形で、現地表の標高はTP+0.2m前後であった。以下の０～９層を確認した。

第０層：現代の盛土層である。層厚は100～120㎝であった。

第１層：灰色(5Y4/1または2.5Y4/1)細粒砂質シルトの作土層で旧表土である。調査区の全域で確認され、層厚は20㎝前後であった。

第２層：第2a・2b層に細分された。第2a層は調査区の全域に堆積していた灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂質シルトの作土層で、層厚は10～15㎝であった。上層との境界は明瞭である。第2b層は西区のみに認められた氾濫堆積の灰オリーブ色(5Y4/2)中粒砂層である。上・下層との境界は明瞭であるが、上位層からの耕起によって断続的に地層が失われており、全体的な遺存状況はあまりよくない。層厚も安定せず平均で５㎝前後であった。第2a層では西区から「寛永通宝」鉄銭が出土した。鉄銭の出現は18世紀中葉以降であることから、第2a層の年代は江戸時代後半とみられる。また、遺物は出土しなかったが、下位層との関係から第2b層も江戸時代の地層と考えられる。

第３層：第3a・3b層に細分された。いずれも調査区の全域に堆積していた。第3a層は西方に向かっ



1：灰色(5Y6/1)粘土質シルト
2：灰色(5Y5/1)細粒砂(断層ガウジ)
3：灰色(5Y4/1)細粒砂(断層ガウジ)
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂(第4a層)
5：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂(第7層)
6：灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質細粒砂(SD302埋土)

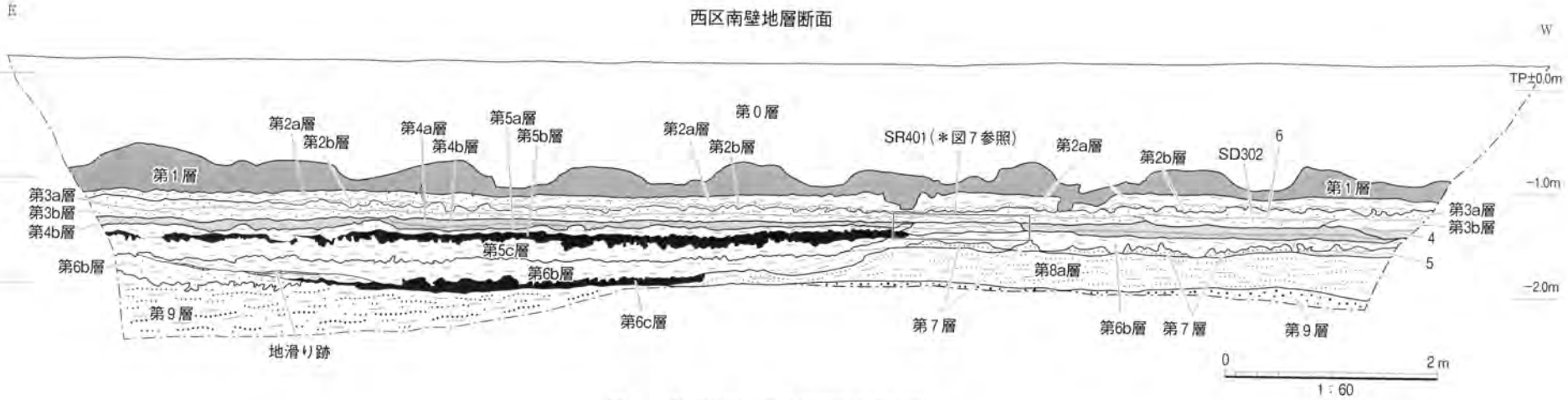


図4　東区南壁・西区南壁地層断面図

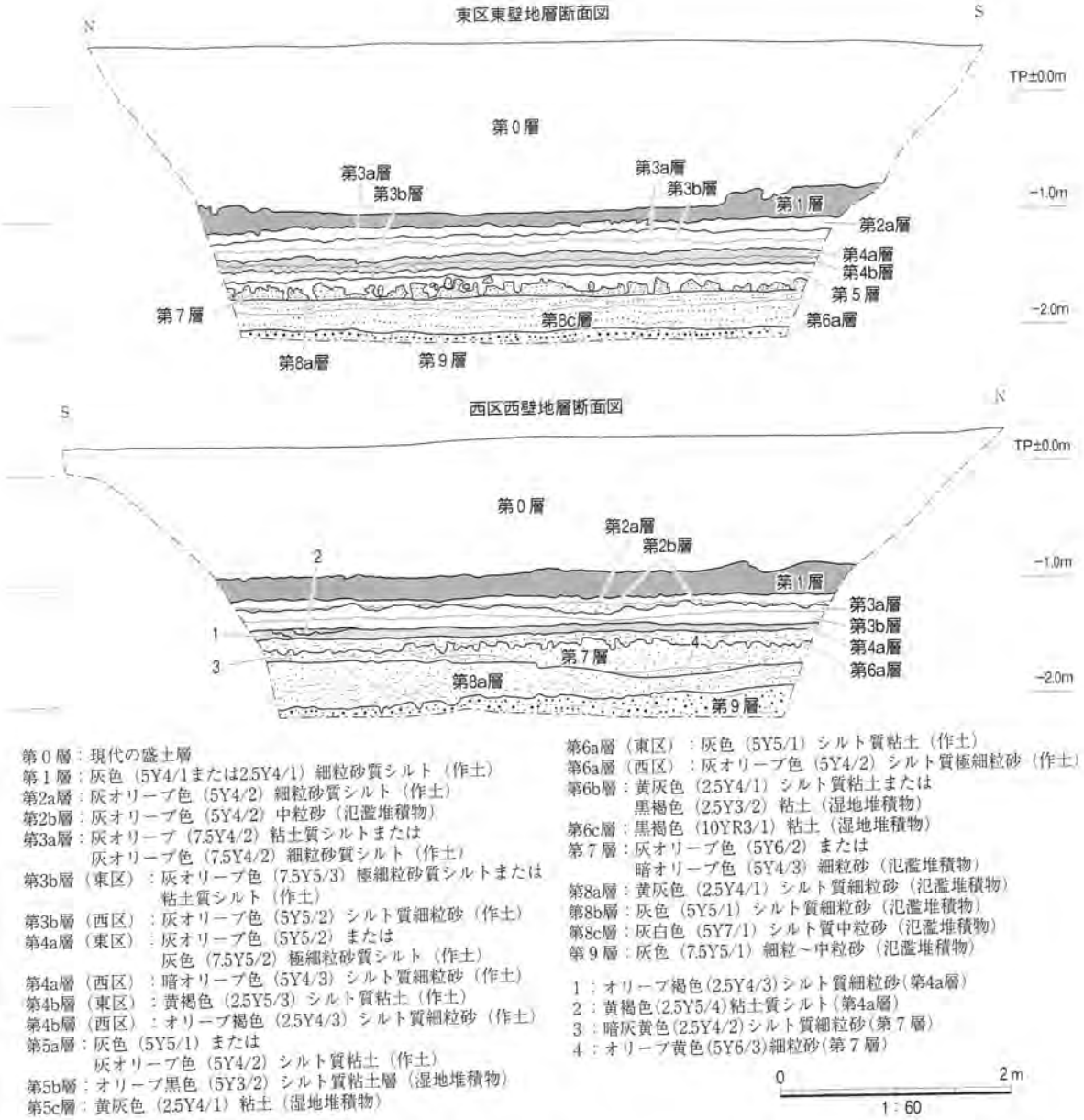


図5　東区東壁・西区西壁地層断面図

て灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土質シルト～灰オリーブ色(7.5Y4/2)細粒砂質シルトへと移化する作土層で、東区では酸化鉄の集積が顕著に認められた。層厚は10cm前後であった。第3b層は東区で灰オリーブ色(7.5Y5/3)極細粒砂質シルト～粘土質シルト、西区で灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質細粒砂からなる作土層で、層厚は5～10cmであった。また、東・西区では第3a層上面において南北方向の畝間と耕作溝、第3b層上面でSK301・SD302、第3b層下面で南北・東西方向の犂溝、杭痕等の遺構を検出した。第3a・3b層からは、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器等の細片が少量出土しており、これらの遺構は室町時代のものとみられる。

第4層：第4a・4b層に細分され、いずれも調査区の全域に堆積していた。第4a層は東区で灰オリーブ色(5Y5/2)または灰色(7.5Y5/2)極細粒砂質シルト、西区で暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質細粒砂からなる作土層で、層厚は5～10cmであった。第4b層は東区で黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粘土、西区で

写真１　出土遺物
（左上の寛永通宝は西区第2a層出土。その他は上段・中段が東区第４層出土、下段が西区第４層出土）

オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂からなる作土層で、層厚は５cm前後であった。特に東区では本層で酸化鉄の集積が顕著に認められた。また、西区では第4a層上面で南北方向の畦畔SR401を検出した。第4a・4b層からは12世紀後葉～13世紀前葉の土師器椀・瓦器椀などの細片が少量出土した(写真１)。

第５層：調査区南側の東半のみで認められ、第5a～5c層に細分された。第5a層は灰色(5Y5/1)～灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質粘土の作土層である。層厚は東区東半では５cm前後であるが、調査区中央部では厚く堆積し、層厚は15cmほどになる。第5b層はオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粘土層で層厚は10cm前後、第5c層は黄灰色(2.5Y4/1)粘土層で層厚は15cm前後であった。いずれも調査区中央部で認められた湿地堆積層である。第５層以下は出土遺物がなく、地層の年代は不詳である。

第６層:第6a～6c層に細分された。第6a層は調査区の全域で認められた地層で、東区が灰色(5Y5/1)シルト質粘土、西区が灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質極細粒砂からなる作土層である。層厚は10～15cmであった。第6b層は調査区中央部のみに分布する湿地堆積層で西方に向かって黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土～黒褐色(2.5Y3/2)粘土層へと移化する。層厚は10～20cmであった。なお、東区南壁の地層断面において、本層内で地震に起因する地滑り跡が認められた。第6c層も調査区中央部のみに分布する湿地堆積の黒褐色(10YR3/1)粘土層で、層厚は５～10cmであった。

第７層：東区東半と西区西半でそれぞれ認められた氾濫堆積の灰オリーブ色(5Y6/2)～暗オリーブ色(5Y4/3)細粒砂層である。北西側では厚く堆積し、水平方向のラミナが認められたが、南から東側にかけては上位の作土である第6a層からの耕起により本層が削られており、断続的に分布する。層厚

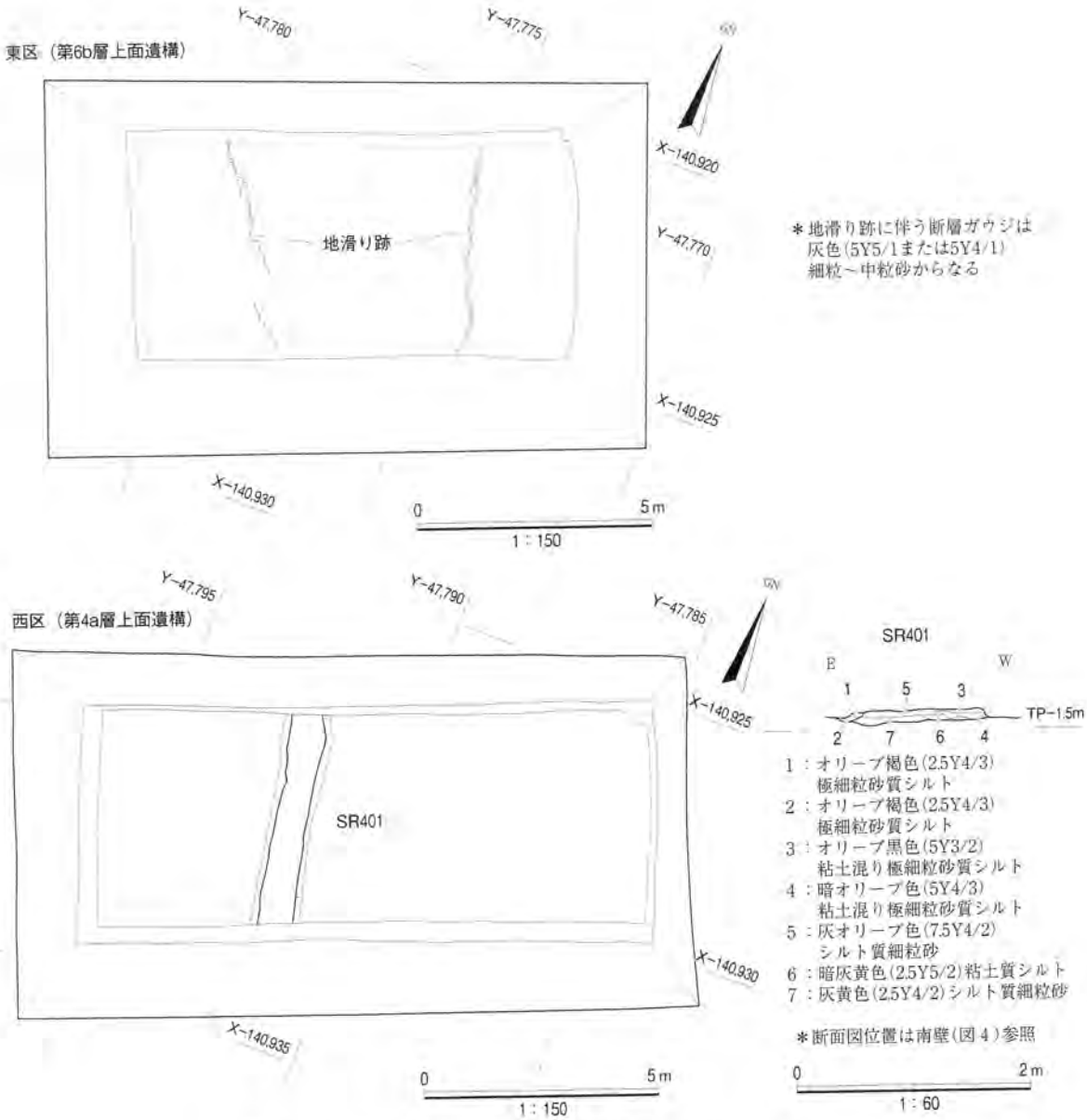


図６　第4a層上面遺構平面・断面図および第6a層検出の地滑り跡

は平均で10cm前後であった。

第８層：氾濫堆積層で第8a～8c層に細分された。第8a・8b層は東区のみ、第8c層が調査区全域で認められた。第8a層は黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂層で層厚が30～40cm、第8b層は灰色(5Y5/1)シルト質細粒砂層で層厚が10～30cm、第8c層は灰白色(5Y7/1)シルト質中粒砂層で層厚が約30cmであった。また、東区において第8c層から派生し、第8a層上面で収束した地震に起因する砂脈が認められた。

第９層：氾濫堆積の灰色(7.5Y5/1)細粒～中粒砂層で、層厚は20cm以上であった。

ⅱ)遺構と遺物

地滑り跡・砂脈(図４・６)

東区の南壁断面において、第6a・6b層内において横方向の地滑り跡が認められた(図６)。さらに第8a層上面において第8c層から派生した砂脈を検出した。上位層の第6b層の堆積物はシルト質粘土であ

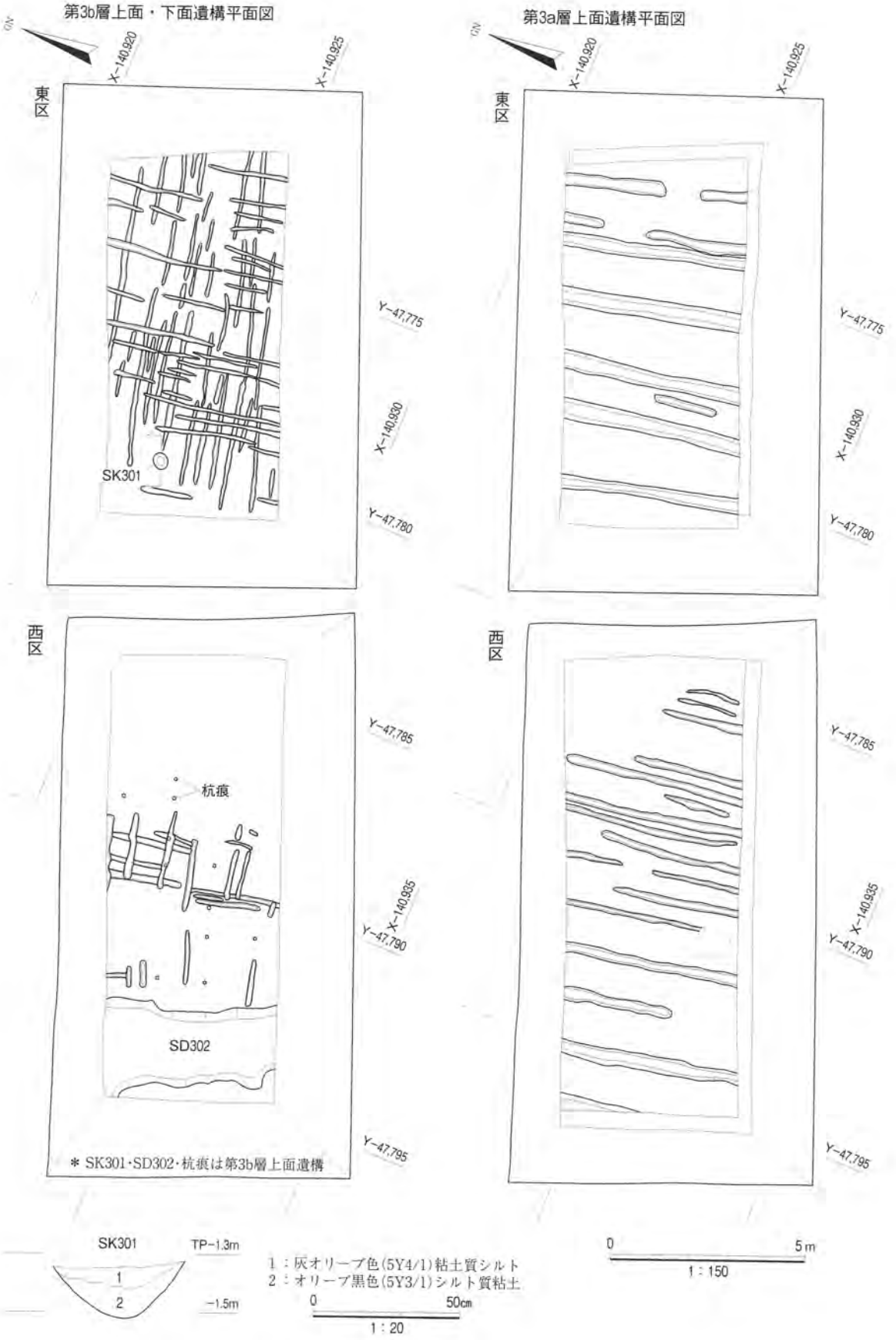

第3b層上面・下面遺構平面図
第3a層上面遺構平面図
東区
西区
X−140.920
X−140.925
X−140.930
X−140.935
Y−47,775
Y−47,780
Y−47,785
Y−47,790
Y−47,795
SK301
杭痕
SD302
＊ SK301・SD302・杭痕は第3b層上面遺構
SK301
TP−1.3m
−1.5m
1
2
1：灰オリーブ色(5Y4/1)粘土質シルト
2：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土
0
50cm
1：20
0
5m
1：150

図7　遺構平面・断面図

ることから、砂脈の形成が8層内で収束したものとみられる。いずれも同じ地震に起因するものとみられ、地震の発生時期は中世以前と推定されるが、出土遺物が認められなかったので年代の詳細は不明である。

第4a層上面遺構(図6)

第4a層上面においてSR401を検出した。南北方向の畦畔である。幅1.00～1.10m、高さ0.05～0.10mで第4b層の上面へ直接盛土を行うことで形成されていた。

第3b層下面遺構(図7)

東・西区において犂溝群を検出した。犂溝は東西・南北方向で幅0.10～0.20m、深さ0.01～0.02mであった。埋土は東区が灰オリーブ色(7.5Y5/3)極細粒砂質シルト、西区が灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質細粒砂であった。

第3b層上面遺構(図7)

東区北西側においてSK301、西区においてSD302・杭痕を検出した。SK301は円形の土壙で径0.45m、深さ0.17mであった。SD302は南北方向の溝で幅1.9～2.5m、深さ0.10mであった。埋土は灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質細粒砂である。自然の流路であった可能性がある。第3b層の出土遺物から、室町時代の遺構とみられる。

第3a層上面遺構(図7)

東・西区において畝間とみられる浅い溝状の掘込みを検出した。畝そのものは削平を受けていたが、畝間の状況から南北方向であったことが分かる。畝幅は0.80～1.30mで、畝間は幅0.20～0.45m、深さ0.03～0.06mであった。埋土はいずれも灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質中粒砂であった。第3a層の出土遺物から室町時代の遺構とみられる。

3)まとめ

調査の結果、本調査地では第3a層上面で南北方向の畠の畝間・耕作溝、第3b層上面でSK301・SD302、第3b層下面で東西・南北方向の犂溝群、第4a層上面で南北方向の畦畔の4期にわたる遺構面を検出した。第3a層上面と第3b層上面・下面遺構は室町時代、第4層上面遺構は鎌倉時代前半の遺構とみられる。調査地周辺では、室町時代になると三津屋城や堀城などの城館が築かれており、一帯で本格的な土地開発が進行していたことがうかがえる。

一方、今回の調査では集落に関係する遺構・遺物の検出には至っておらず、今後も継続的に周辺地の調査を進めて、調査地の近傍に存在したであろう中世村落の位置とその範囲、そして周辺の土地利用の変遷を明らかしていく必要があろう。

参考文献

大阪文化財研究所2013、『淀川区三津屋北一丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(MK13－1)報告書』
2009、『大阪市教育委員会淀川区十三東一丁目における埋蔵文化財試掘調査(JS09－1)報告書』

図版一

東区東壁地層断面
（北西から）

西区南壁地層断面
（北東から）

西区西壁地層断面
（北東から）

西区第4a層上面畦畔
検出状況
（南西から）

東区第3b層下面遺構
完掘状況
（東から）

西区第3b層下面遺構
完掘状況
（西から）

東区第3a層上面遺構
完掘状況
（南から）

西区第3a層上面遺構
検出状況
（西から）

西区第3a層上面遺構
完掘状況
（南東から）

東淀川区東淡路五丁目における建設工事に伴う
東淡路遺跡C地点発掘調査(EA14－１)報告書

調査個所	東淀川区東淡路5丁目16の一部・25・23・18－2
調査面積	300㎡
調査期間	平成26年8月20日～9月24日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、吉田 悠歩

1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

東淡路遺跡C地点は、東淀川区南部の淀川の右岸に位置する新発見の遺跡である。淀川デルタに立地し、大阪市教育委員会による試掘調査により中世～近世の遺構面および遺物包含層が確認された。

調査地周辺での人間の活動の開始について、調査地から西へ約0.5kmにある東淡路遺跡EA10－1次調査では、離水した層から採集した木片が14C年代測定で3760yB.P.±30と測定され、加えて近世の遺構からではあるが摩滅していない弥生土器が出土したことから、弥生時代には周辺で集落が営まれていた可能性が指摘されている[大阪市文化財協会2010a]。また、調査地の東方約2.5kmにある三宝寺跡伝承地では縄文時代中期末葉～後期前半の土器が出土し、西へ1.3kmほど離れた崇禅寺遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の遺構がみられるなど、淀川右岸のデルタ地帯では砂堆上を中心に縄文時代中期末葉から古墳時代初頭にかけて人間の活動が始まったことが知られている[大阪市文化財協会2003・2010b]。

人間が活動を始めてから後の淀川デルタの様子を調査が進んでいる崇禅寺遺跡とその周辺に位置する西淡路1丁目所在遺跡・宮原遺跡の成果から見ていくと、崇禅寺遺跡では古墳時代中期を除き人間の活動の痕跡は明確でなくなるが、奈良時代以降再び遺構や遺物がみられるようになる。また、西淡路1丁目所在遺跡や宮原遺跡でも奈良時代ごろになると遺物が確認されるようになる。その後、平安時代から中世にかけて、崇禅寺遺跡とその周辺の遺跡では集落が営まれ、低地部の開発も行われたことが確認されており、これらは宮原庄に係るものと考えられている。また、15世紀には崇禅寺が建立される。近世に入ると堤防の構築や用水の掘削が行われ、周辺は広く耕地化された[大阪市文化財協会2010b]。

崇禅寺遺跡などと同様の、河川の堆積によって陸化し、中世に開発され、その後現代まで耕作地として利用されるという傾向は、今回の調査地から東へ約2.1km離れた豊里遺跡でも指摘されている[大阪文化財研究所2014]。また、北方1.0kmほどにある下新庄遺跡C地点では、XS13－1次調査において平安時代に造られた水利施設と思われる池を検出した。この池は鎌倉時代後半に埋め立てられ、現

図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

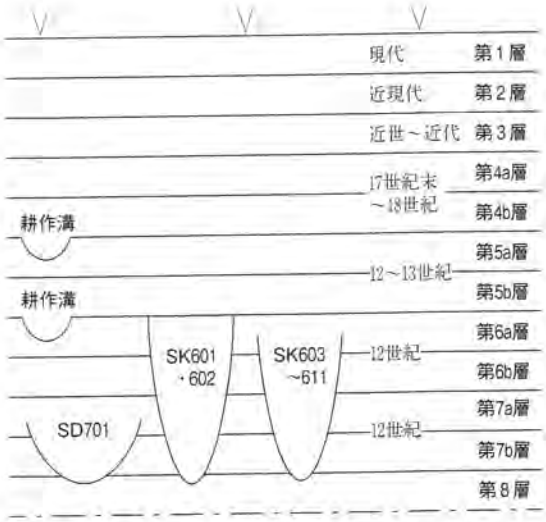


図3　地層と遺構の関係図

代まで水田として利用されたことが確認されている[大阪文化財研究所2013]。

なお、調査地付近には中世に淡路庄があった。淡路庄は、12世紀前半には藤原師通の室一条殿全子の荘園であったが、その後、藤原頼長の家領・王家領をへて13世紀末以降は石清水八幡宮領となったことが知られている[新修大阪市史編纂委員会編1988]。また、近世には、東淀川区淡路・東淡路・西淡路の新太郎松樋から此花区伝法町5丁目などの申新田にかけて中島大水道が開削され、本調査地を含む北中島一帯の生産性が向上した[新修大阪市史編纂委員会編1989]。

以上のように本遺跡周辺は、砂州上では縄文時代後期や弥生時代末～古墳時代初頭に人間の活動が開始し、中世には本格的に開発され、近世以後現代まで耕作地として利用されている。

今回の調査に先立って行われた大阪市教育委員会文化財保護担当による試掘調査では、地表下約1.0m以下の深さで、本格的な発掘調査を必要とする遺構面および遺物包含層が確認された。このため、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に発掘調査を実施することとなった。

調査は、平成26年8月20日に調査区を設置することから開始した。調査区は大阪市教育委員会の指示に基づき、南北10m、東西30mとした。作業としては、まず現地表下約1.0m、第1～2層とした近代・現代の遺物を含む地層および攪乱のおよんでいた第4a層を重機で掘削し、それ以下をおもに人力で掘り下げ、遺構の検出、遺物の採集、実測図の作成や写真撮影などの記録作成を行った。9月24日に機材の撤収を行い、作業を終了した。

以下、本文および挿図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP＋○mと記した。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいた座標北を基準としている。

2)調査の成果

i)層序(図3～5、図版1)

第1層は現代の盛土である。層厚は約90cmである。

第2層は黒色(2.5Y2/1)シルト質中粒砂層で、層厚は12cmである。近現代の作土層である。

第3層はオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂層で、層厚は12cmの作土層である。近世～近代のものと思われる。

第4層は作土である第4a層とその母材である第4b層とに細分した。第4a層はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質中粒砂層で、層厚は15cm、淘汰は悪い。ごくわずかに第4b層に由来する中粒砂の偽礫を含む。

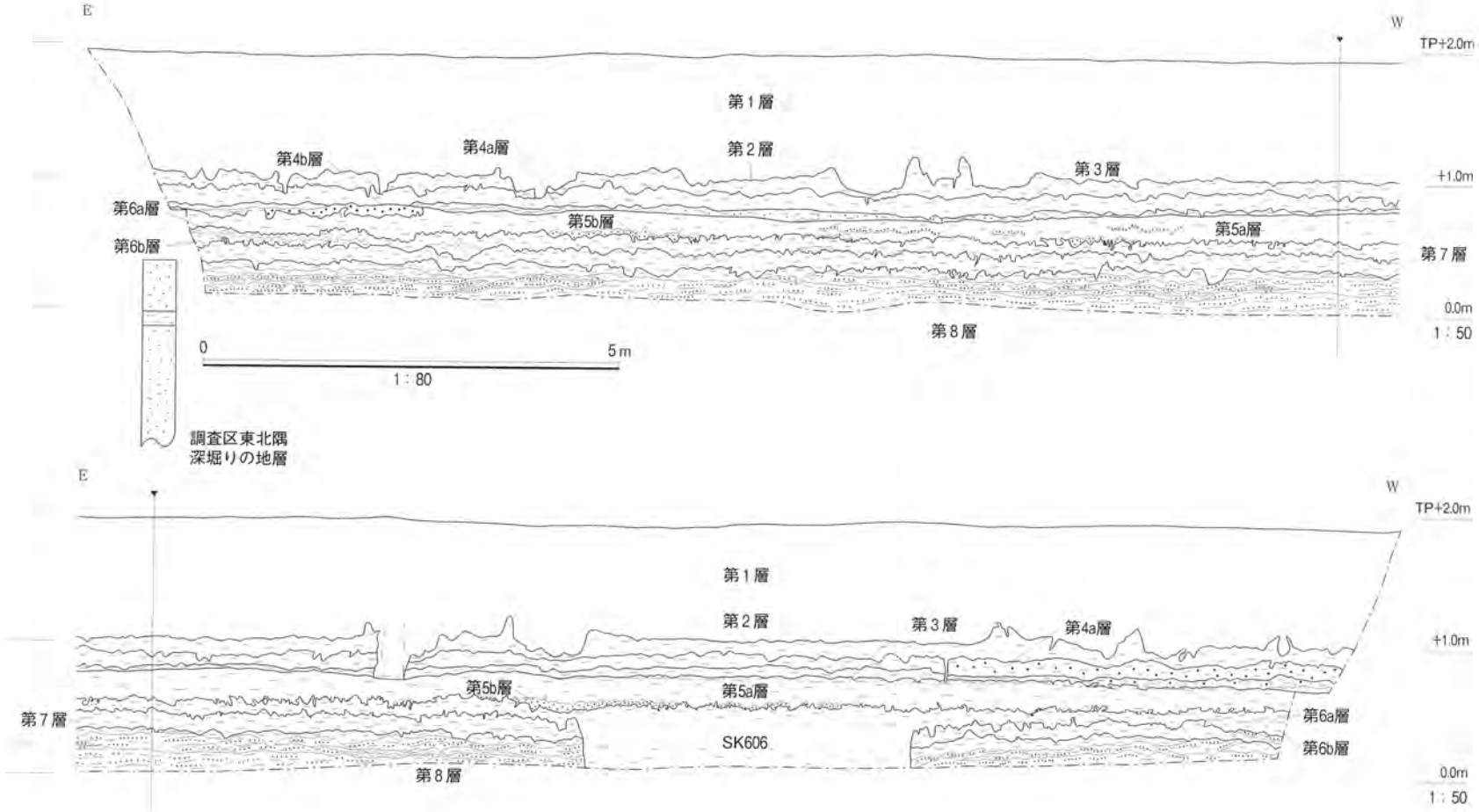

E
W
TP+2.0m
第1層
第4b層
第4a層
第2層
第3層
+1.0m
第6a層
第5b層
第5a層
第6b層
第7層
0.0m
第8層
1：50
0
5m
1：80
調査区東北隅
深堀りの地層
E
W
TP+2.0m
第1層
第2層
第3層
第4a層
+1.0m
第5b層
第5a層
第7層
第6a層
SK606
第6b層
第8層
0.0m
1：50

図4　南壁地層断面図

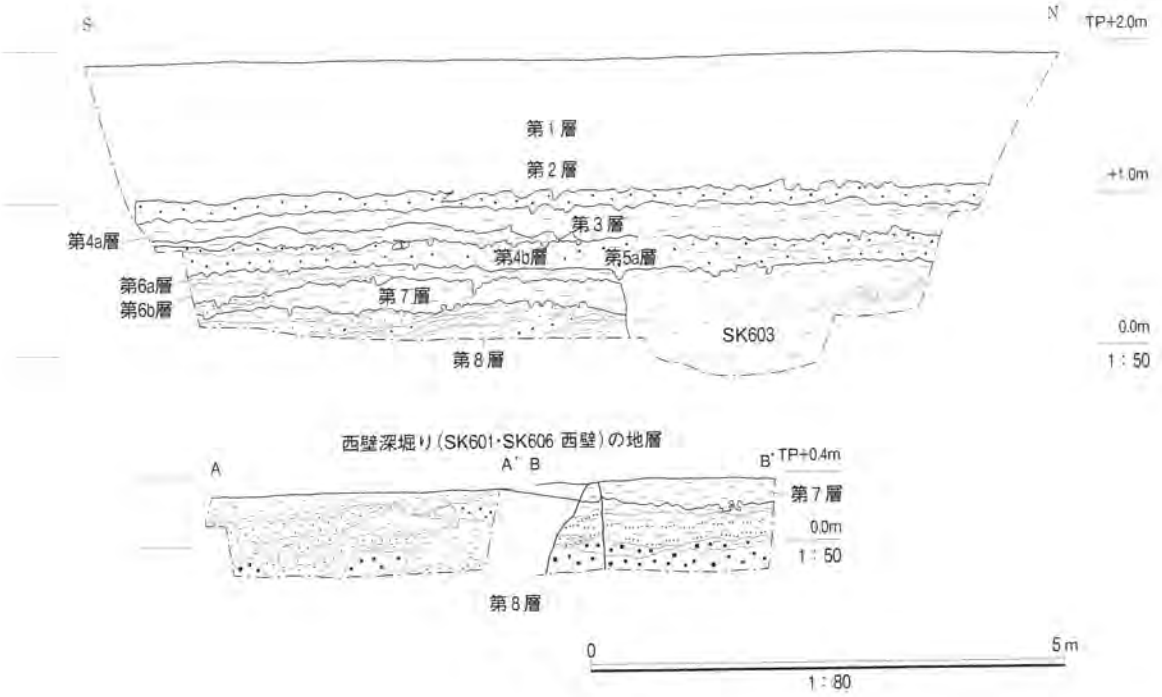


図5　西壁地層断面図

第4b層は灰色(5Y4/1)中粒砂で、ごくわずかであるがシルトの偽礫を含む。層厚は最大8cmである。第4b層下面で踏込みと耕作溝を検出した。第4層の時期について、攪乱が及んでいた第4a層まで重機で掘削したため混入の可能性は否定できないが、おもに17世紀末～18世紀の陶磁器が出土しているため、本層は江戸時代中頃のものである可能性が高い。

第5層は第5a層と作土である第5b層とに細分した。第5a層はオリーブ黒色(10Y3/1)シルト質細粒砂層で層厚8～20cmである。部分的に薄い細粒砂層が見られるものの、級化構造など自然堆積と判断できる特徴はみられないことから、人為層と思われる。第5b層はオリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂層で、層厚は2cmである。第5層からは12～13世紀の遺物が出土した。また、第5b層下面で踏込みと耕作溝を検出した。

第6層は第6a層と第6b層に細分した。第6a層は灰色(5Y4/1)砂～シルト質粘土層で、層厚が8cmである。級化構造など自然堆積と判断できる特徴はみられないことから、人為層の可能性が考えられる。第6b層は灰色(5Y4/1)シルト質粘土層で、層厚は1cm、淘汰は良い。第6a層の下部に部分的にみられる。第6層からは12世紀の遺物が出土した。また、第6層上面から第6層内にかけて方形土壙群を確認した。

第7層は、作土である第7a層とその母材である第7b層に細分した。第7a層は黒色(7.5Y2/1)シルト質粘土層で、層厚12cmの作土層である。第7a層内で溝を、下面で踏込みを確認した。遺物は2点しか出土しなかったが、そのうち1点は12世紀のものとみられる瓦器椀である。第7b層は第7a層の下部にごく薄くみられる、第7a層と同色の植物片を含むシルト質粘土層である。この層は湿地に堆積したものである。

第8層は黄褐色(2.5Y4/1)の流木を含むシルト層と細粒砂～極細粒砂層の互層からなる氾濫堆積層

で、低角の楔状斜交ラミナが発達する。層厚は1.4m以上である。また、互層は北から南へ下方に傾斜していることから、氾濫堆積層が北から南へ付加していったことがわかる。氾濫源河川は調査区の南方を流れていたのであろう。なお、遺物は出土しなかったため、本層の時期は不詳である。

ii)遺構と遺物

a. 平安時代(図6・7、写真1、図版1)

第7a層内でSD701を、下面で多数の踏込みを検出した。SD701は長さ12.9m以上、幅0.7m、深さ0.1mで、N65° W方向に延びる。埋土は黒色(7.5Y2/1)シルト質粘土であった。

b. 平安時代～鎌倉時代初頭(図8・9・12－1～8、写真2・3、図版2)

第6a層上面でSK601・602を、第7層上面で第6a層内の遺構であるSK603～613を検出した。いずれも掘形の形状と埋土が類似し、方向がそろっているため、同じ目的で掘られた土壙とみられる。平面形はほとんどが方形を呈し、大きさは長辺1.9～6.6m以上、短辺1.4～3.2mである。深さは、第6層上面のSK601・602では0.7～0.8m、第6層上面のSK603～613では0.5～0.7mである。いずれの土壙もおおむね垂直に掘り下げ、底は平坦で

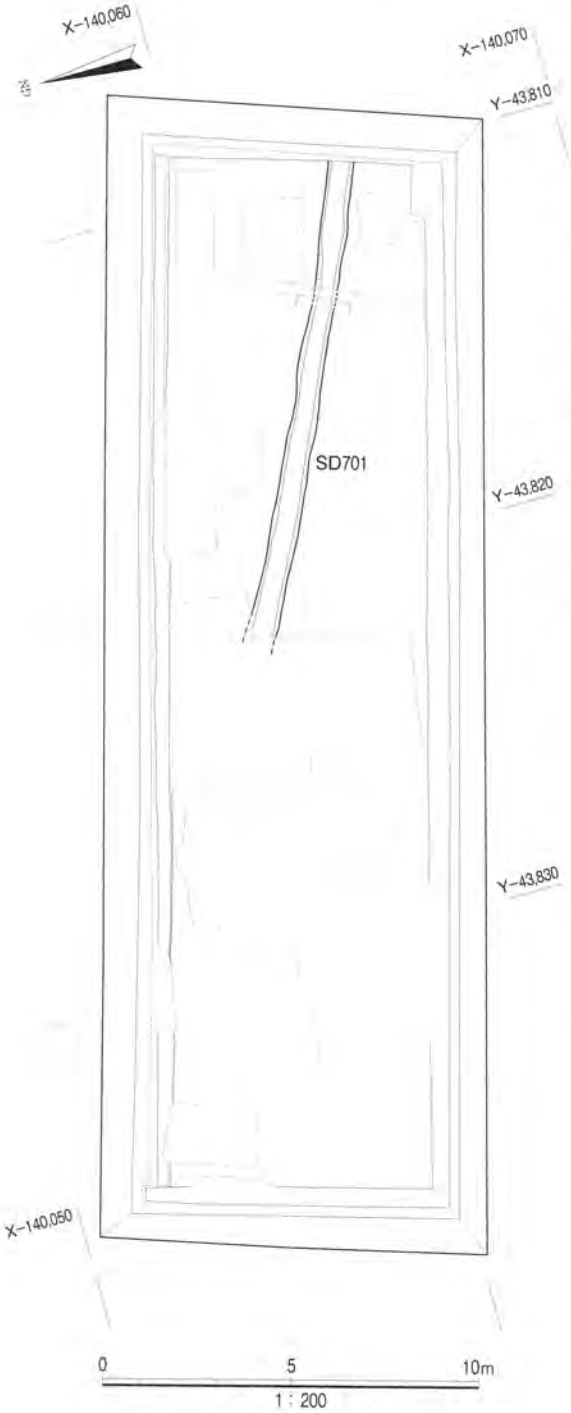


図6　平安時代の遺構平面図

写真1　SD701断面(東から)

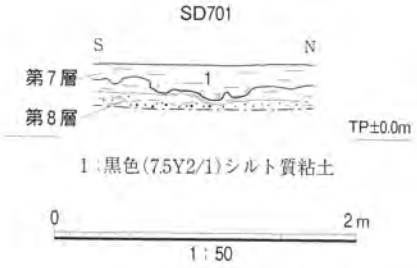


図7　平安時代の遺構断面図

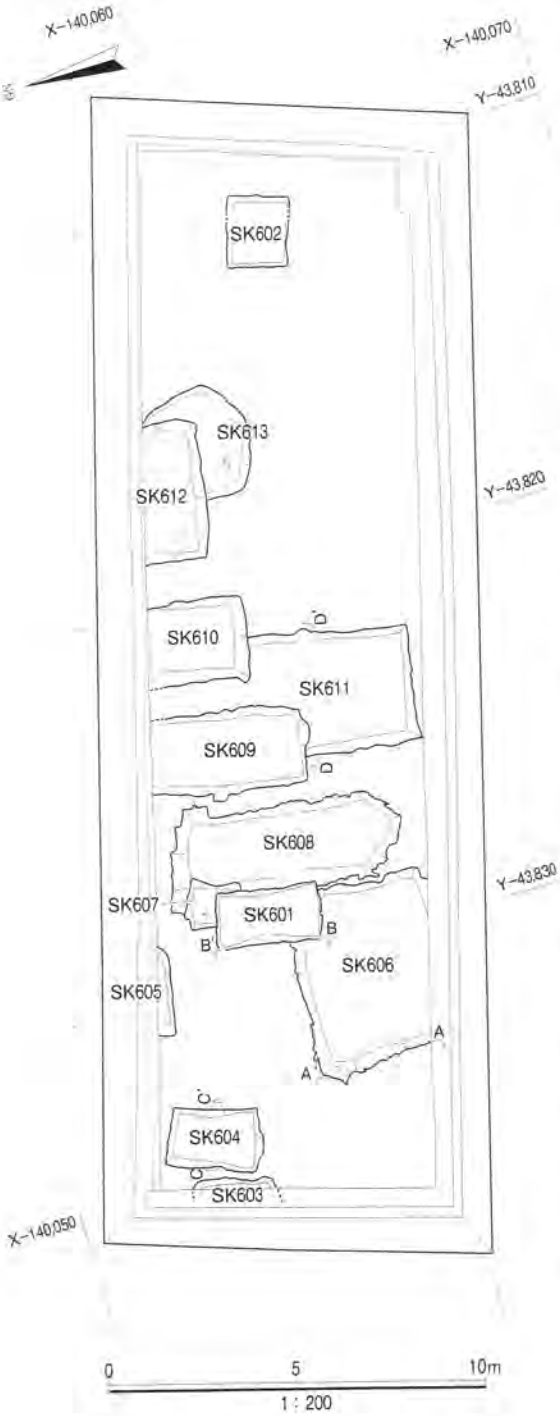


図８　平安～鎌倉時代初期の遺構平面図

ある。掘込みは、第８層中のシルト層を掘り抜いて厚い砂層に達したところで止まるが、SK613のみ第８層中のシルト層内で止まる。埋土はいずれも、第７・８層に由来するシルトの偽礫混りのシルト質粘土である。

これらの土壙は、SK608で壁面を抉るような掘り込みがみられたこと、埋土が下層の土で短期間に埋め戻されたと思われること、いずれも第８層のシルト層まで到達していることから、シルトの採取を目的とした土採り穴と理解できる。しかし一方、今回検出したような、大型の方形土壙について、畑地の造成を目的とした土採り穴とする見解[松田1996]や水田に入り込んだ魚を捕獲するために掘削されたとする意見[江浦2010]がある。

図12－１～８は第６層上面～第６層内の土壙から出土した遺物である。

１はSK602から出土した土師器皿である。体部は斜めに立ち上がり、口縁部は立ち気味である。色調は灰白色を呈する。

２・３はSK605から出土した瓦器椀である。内面には密なヘラミガキを施す。外面のヘラミガキはまばらである。12世紀中葉頃のものであろう。

４・５はSK607から出土した遺物である。４は木製品で、本来の形状は不明であるが、残存部位は棒状を呈する。５は土師器皿である。体部はやや内湾しつつ立ち上がる。色調は灰白色を呈する。

６はSK608から出土した土師器皿である。体部は斜めに立ち上がり、口縁部はやや外反する。色調は灰黄色を呈する。

７はSK610から出土した瓦器椀である。高台は断面台形を呈し、内外面に緻密なヘラミガキを施す。

８はSK611から出土した瓦器椀である。器壁は厚手で、内面には緻密なヘラミガキが施され、外面の口縁部付近にもヘラミガキが施される。また、口縁部直下の内面には沈線が巡る。12世紀前半のものであろう。

c. 鎌倉時代前半（図10、図版２）

第5b層下面で複数の踏込みと耕作溝を検出した。踏込みには偶蹄類の足跡が多く含まれ、その大

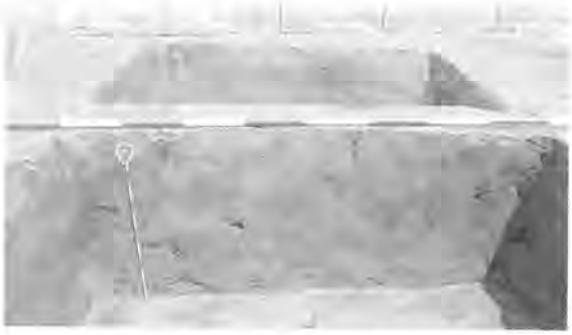


写真２　SK604断面(南から)

写真３　SK611断面(南から)

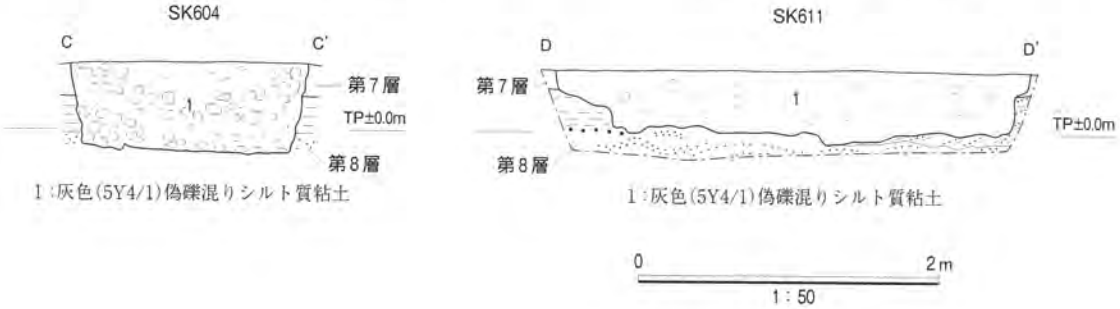


図９　平安時代～鎌倉時代初期の遺構断面図

半は南北方向を向く。耕作溝は長さ0.8～4.2mだが３m前後が最も多くみられる。幅は0.2mほどで、N2° E方向に延びる。埋土は第5b層であるオリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂である。

d. 江戸時代(図11、図版２)

第4b層下面で多数の踏込みと耕作溝を確認した。踏込みには偶蹄類の足跡が多数含まれ、その大半は東西方向を向く。耕作溝は長さ２～３m前後、幅0.2mほどで、いずれもN82° E前後の方向に延びる。埋土は第4b層である灰色(5Y4/1)中粒砂である。

e. 各層出土の遺物(図12－９～36)

第７層からは土師器の小片と瓦器椀が１点ずつ出土した。９は瓦器椀で、全体にやや摩滅しているためヘラミガキなどは確認できなかったが、高台の形状から判断して12世紀代のものである。

第６層からは、土師器皿・瓦器椀・東播系須恵器鉢・貿易陶磁器などが出土した。

10～14は土師器皿である。10はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿で、色調はにぶい黄橙色を呈する。11世紀後葉に属する。11は底部は残存していないものの、体部は斜めに立ち上がり、口縁部をわずかに肥厚させる。色調は灰黄色を呈する。12は灰黄色を呈する。13の体部は斜めに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。色調は灰白色を呈する。14の体部は斜めに立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。色調はにぶい橙色を呈する。

15～24は瓦器椀である。15は内面に丁寧なヘラミガキを施すが、外面にはヘラミガキはみられない。16・17もやや摩滅しているものの、内面にのみヘラミガキを施したものである。いずれも12世紀前半であろう。18・19は内面に平行線状の暗文を施した瓦器椀底部で、外面にヘラミガキはみられない。12世紀後半のものである。20・21は内面に丁寧にヘラミガキを施すが、外面にはヘラミガキはみ

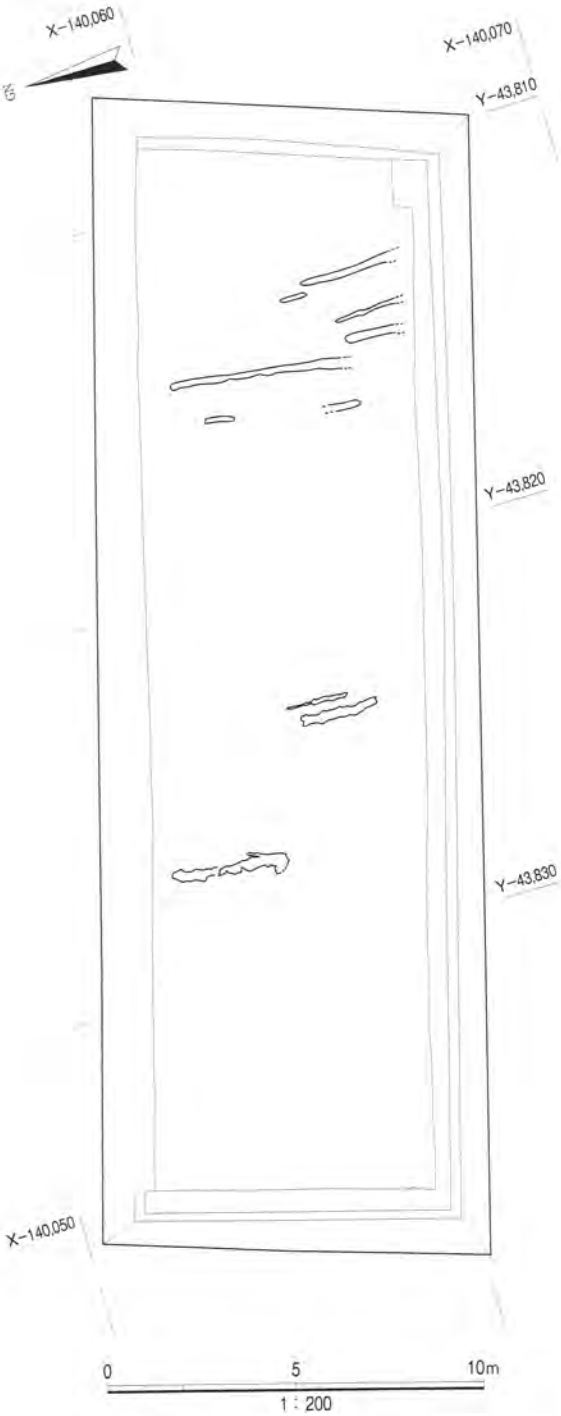


図10　鎌倉時代前半の遺構平面図

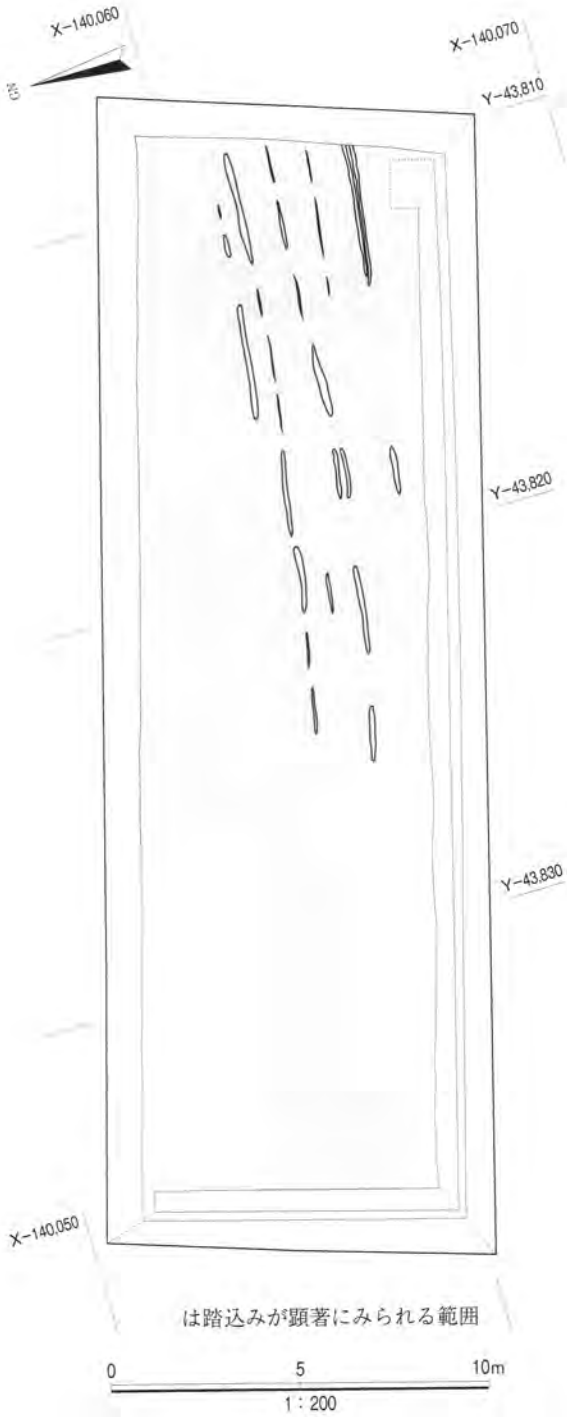


図11　江戸時代の遺構平面図

られない。22は摩滅しているが内面にヘラミガキが施されている。これらは12世紀前半のものである。23・24は摩滅しているため、ヘラミガキなどは確認できなかったが、高台の形態から12世紀に属するものであろう。

25は東播系須恵器の鉢である。

26は玉縁口縁の白磁碗で灰白色の釉をかける。27はオリーブ黄色の釉を施した白磁碗で、外面は下部が露胎である。また、わずかにしか残存していないが、見込みに釉剥ぎとそれに伴う段がみられる。

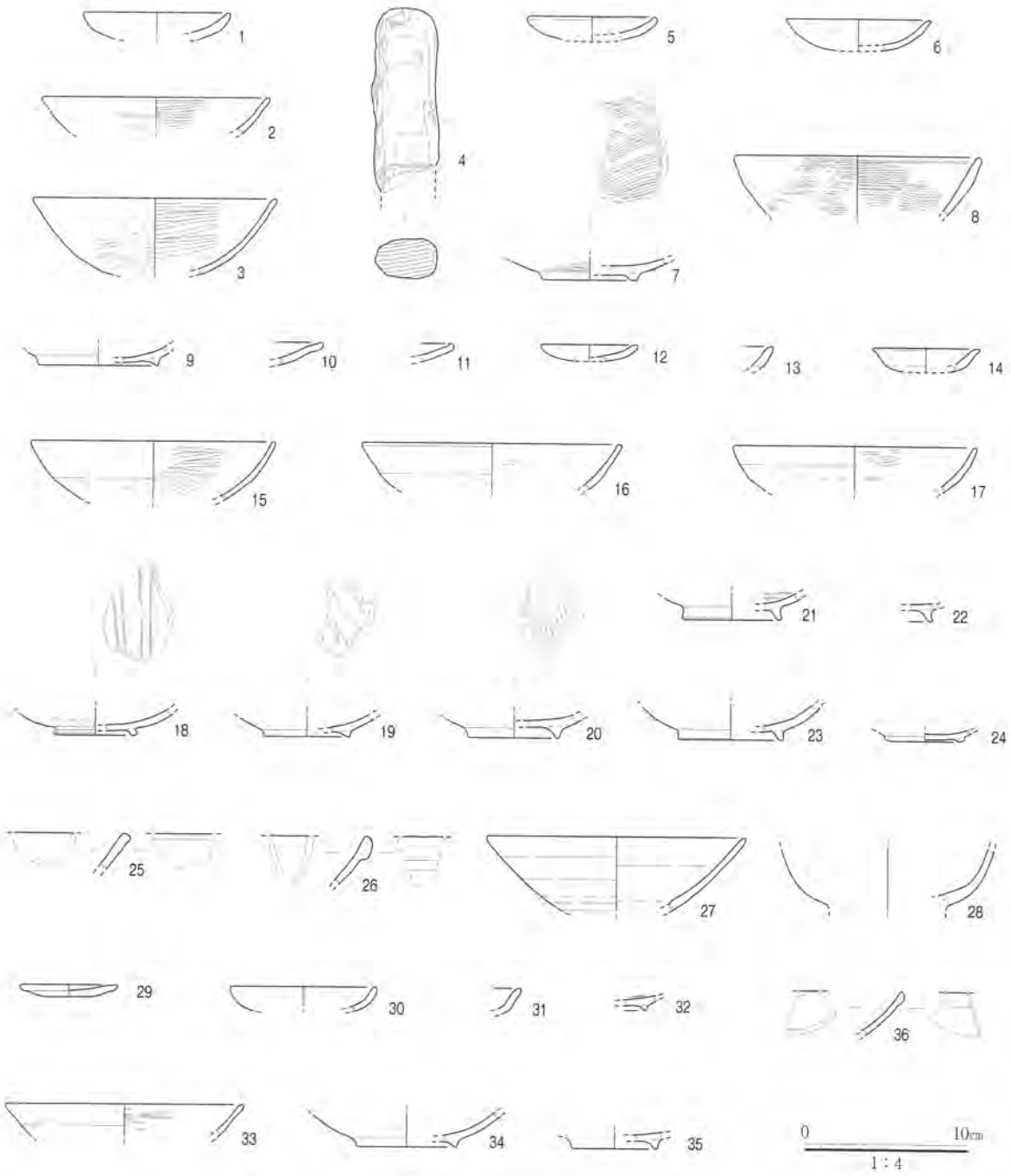


図12　出土遺物実測図

SK602(1)、SK605(2・3)、SK607(4・5)、SK608(6)、SK610(7)、SK611(8)、
第7層(16)、第6層(10～28)、第5層(29～36)

12世紀中頃～後半に属するものである。28は口縁部・底部ともに欠損しているため時期などは限定できないが、明緑灰色の釉をかけた無文の龍泉窯系青磁碗である。

第5層からは、土師器皿・瓦器椀・羽釜・須恵器甕・東播系須恵器鉢・中国産磁器・瓦などが出土した。

29～31は土師器皿である。29は「て」字状口縁の土師器皿で、色調はにぶい橙色を呈する。11世紀後葉に属するものである。30の体部は斜めに立ち、口縁部では直に立ち上がる。色調はにぶい黄橙色を呈する。31の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。色調はにぶい橙色を呈する。

32～35は瓦器椀である。32は小破片であるが、ヘラミガキや暗文は確認できず、高台も小さい。高台の形状から13世紀代のものと思われる。33は内面にやや粗雑にヘラミガキを施す。34・35は摩滅しているため調整は確認できないが、高台の形状から12世紀のものと思われる。

36は中国産白磁碗で、灰白色の釉をかける。

第４層からは肥前磁器碗・備前焼擂鉢が出土した。

３）まとめ

今回の調査では平安時代～鎌倉時代前半の溝・踏込み・方形土壙群、近世の踏込み・耕作溝を確認した。なお、出土遺物から、調査地周辺の開発は11世紀後葉～12世紀前半に始まったものとみられる。

参考文献

江浦洋2010、「水田と淡水漁撈　―池島・福万寺遺跡条里型水田面検出の方形土坑群をめぐって―」：『大阪文化財研究』第36号　大阪文化財センター、pp.23－30

大阪市文化財協会2003、「SP02－１次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告　2001・2002年度』、pp.131－136

2010a、『東淀川区東淡路二丁目における東淡路遺跡発掘調査(EA10－１)完了報告書』、pp.１－４

2010b、『西淡路１丁目所在遺跡発掘調査報告』、pp.53－58

大阪文化財研究所2013、『東淀川区菅原六丁目における建設工事に伴う下新庄遺跡C地点発掘調査(XS13－１)報告書』、pp.１－８

2014b、『豊里遺跡発掘調査報告』、pp.７－13

新修大阪市史編纂委員会編1988、『新修大阪市史』第２巻、大阪市　pp.158－159

1989、『新修大阪市史』第３巻、大阪市　pp.312－321

松田順一郎1996、「山賀遺跡第９次発掘調査報告　―調査地点の堆積環境の変化と耕作地遺構の形成―」：『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.６No.４　東大阪市文化財協会、pp.29－37

調査区西壁地層断面
（東から）

氾濫堆積層
（SK606西壁）
（東から）

第７層内SD701
検出状況
（東から）

第６層上面～第６層内
方形土壙群完掘状況
（西から）

第５層下面検出状況
（西から）

第４層下面踏込および
耕作溝検出状況
（西から）

旭区高殿五丁目６－３における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(DN14－１)報告書

調査個所	大阪市旭区高殿5丁目6－3
調査面積	72㎡
調査期間	平成26年10月14日～10月21日
調査主体	公益財団法人 大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、黒田慶一

1）調査に至る経緯と経過

今回調査地は森小路遺跡の西方1.1km、榎並城跡伝承地の北方1.2km、淀川の南方1.3kmに位置し、周辺は淀川の自然堤防と後背湿地よりなる低地である。当調査地の北東100mの地点をDN08－1次調査で試掘調査したところ、地表面から2.2m下まで近代の盛土であった[大阪市文化財協会2009]（図1）。淀川左岸はその南東に沿って自然堤防が分布し、帯状に並ぶのが見て取れる。守口市八雲遺跡、同八雲東遺跡、同西三荘遺跡では縄文土器が出土し、その下流、守口市長池町遺跡、大阪市旭区森小路遺跡、同都島区榎並城跡伝承地、北区同心町遺跡では弥生時代の遺跡がみつかっている。弥生時代中～後期頃までには、ほぼこのラインで淀川の左岸の地形は基本的に安定していたものと考えられている[大阪文化財研究所2014]。

当該地で大阪市教育委員会によって、平成26年8月29日に行われた試掘調査で、地表下0.4～0.6mで瓦器・土師器片が出土し、同0.8mで自然堆積の砂層に到達したことから、本調査を実施することとなった。南北14m×東西4mの調査区を設定して、10月14日、調査に着手し、人力と重機を併用しながら掘削し、実測図作成、写真撮影などの記録保存を行った。調査区北西部で弥生時代の遺構を検出したことから、関係機関と協議し、16㎡拡張を行い（図2）、10月21日に全ての現場での作業を終えた。

なお、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。

2）調査の結果

i）層序（図3・4）

第0層：層厚10～60cmの現代盛土層である。主に焼土を含む黒褐色（2.5Y3/2）中礫質粗粒砂からな

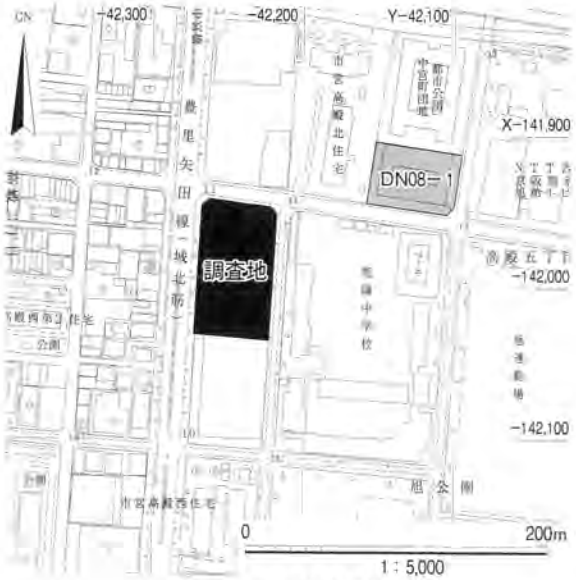


図1　調査地位置図

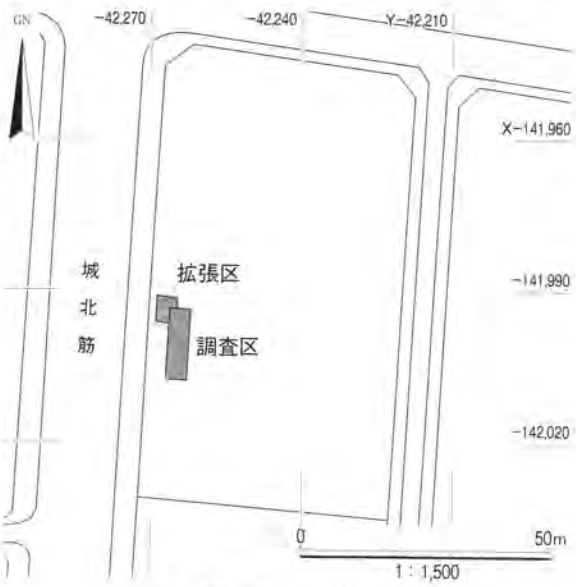


図2　調査区配置図

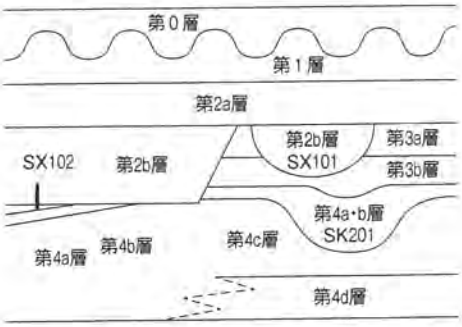


図3　地層と遺構の関係図

る。最下部で焼土が顕著になることから、第2次大戦の焼土で盛土したものと思われる。

第1層：オリーブ黒～暗灰黄色(5Y3/1～2.5Y4/2)粘土質シルトからなる作土層で、層厚は10～30cmである。中央部分は東西方向の畠の畝を形成する。1945年頃を下限とする。

第2a層：オリーブ褐～灰色(2.5Y4/3～5Y5/1)粘土からなる作土層であり、層厚は10～30cmである。

第2b層:灰オリーブ～オリーブ灰色(5Y4/2～5GY5/1)シルト質粘土層で、層厚は10～20cmである。15世紀から18世紀後半までの遺物を含む。調査区の大半は江戸時代の中頃まで、池状の落込みを呈していたとみられ、本層はそれを埋める自然堆積層である。北端のSX101内では黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト層であった。

第3層はSK201の充填層(第4層)の上位に連続する湿地堆積層である。

第3a層：北部のみに分布する黒褐～灰白色(2.5Y3/1～2.5Y8/1)シルト質粘土～粘土層であり、層厚は10～40cmである。

第3b層：北部のみに分布する黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土～粘土層であり、層厚は10～20cmである。

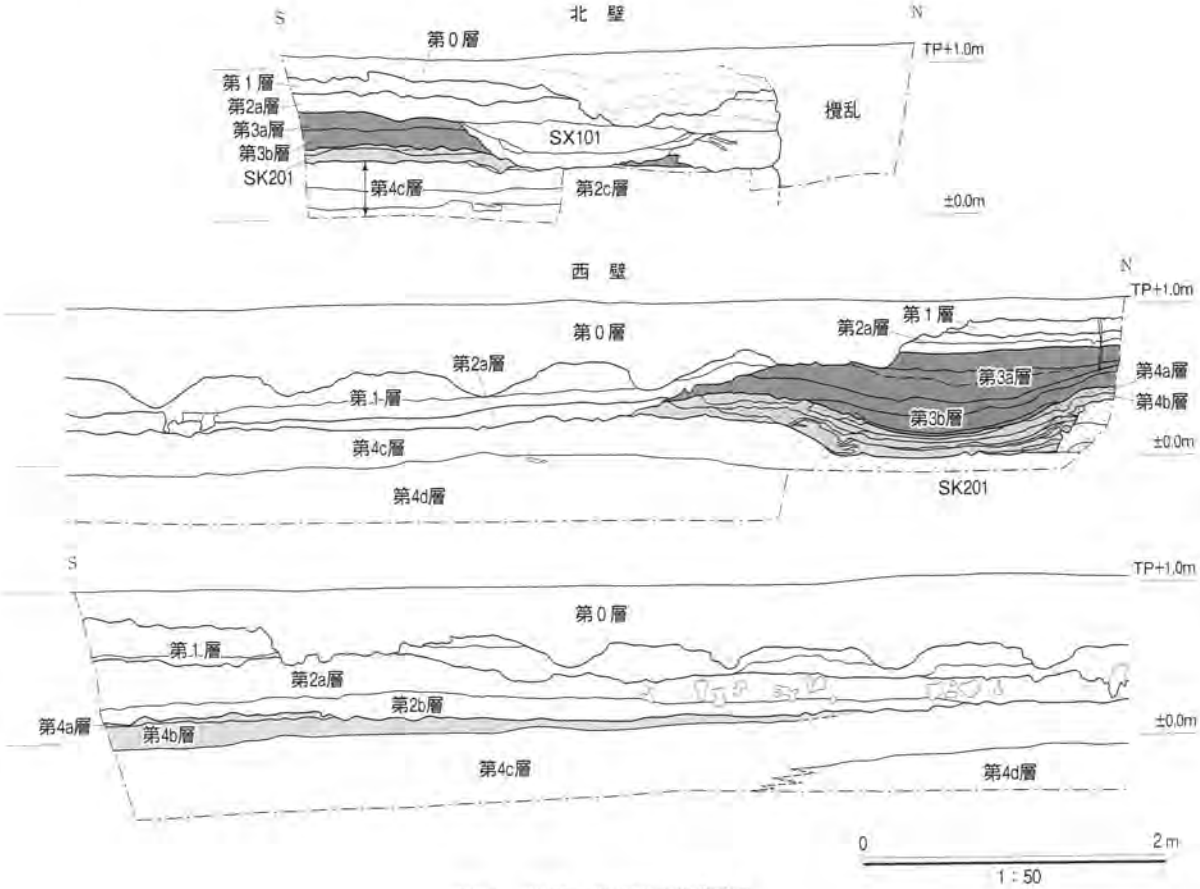


図4　北壁・西壁地層断面図

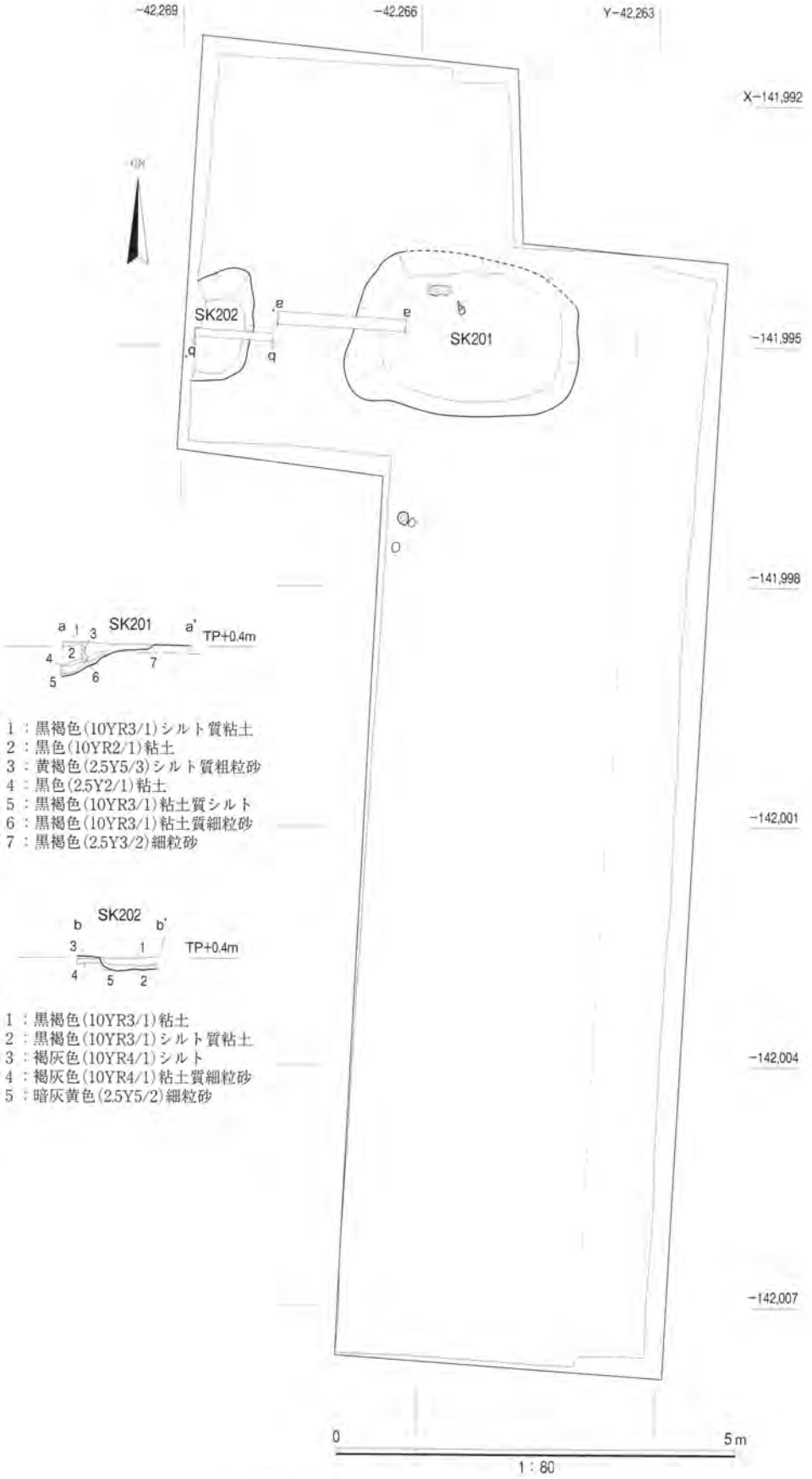


図5　第4c層上面平面・遺構断面図

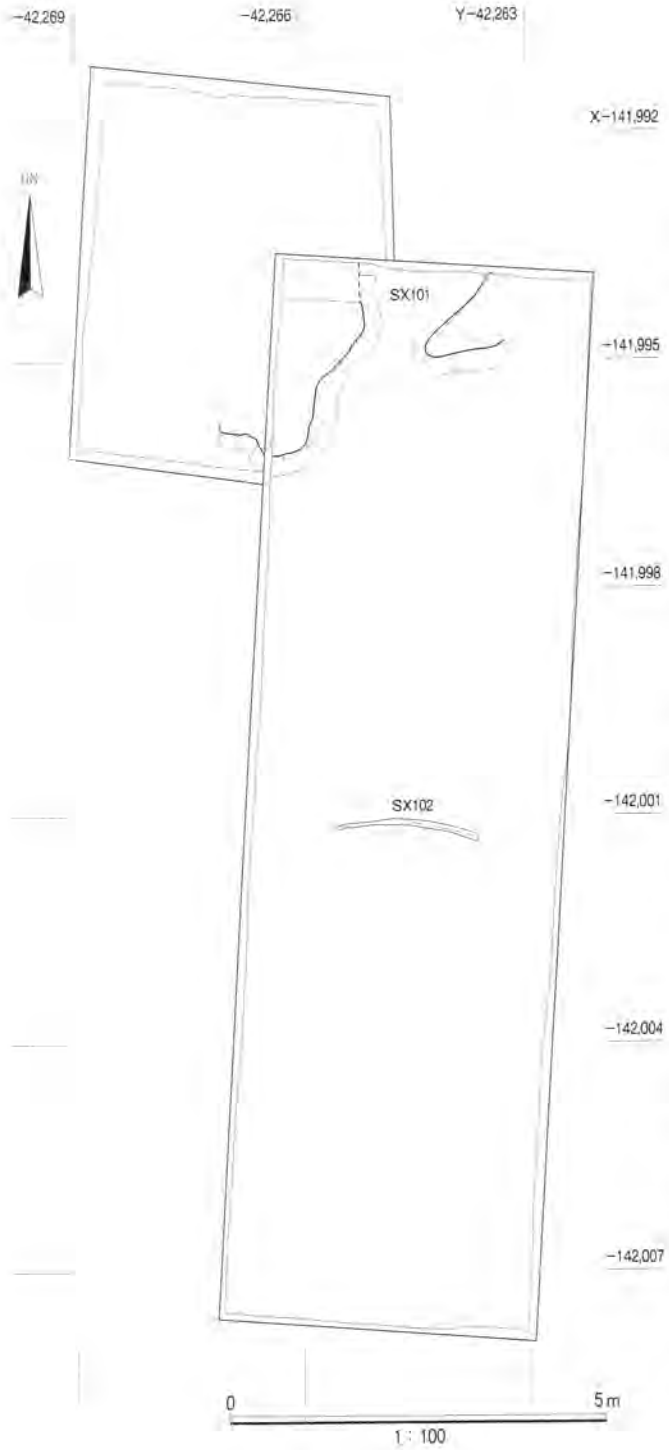


図6　第3a層上面平面図

第４層は層相から三角州帯の堆積層と推定される。第4a・b層はSK201の充填層でもある。

第4a層：南端部に分布するオリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂層で、層厚は５cm以下である。

第4b層：南半に分布するやや暗い黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粗粒～中粒砂層で、層厚は10～20cmである。

第4c層：黒褐～灰オリーブ色(2.5Y3/1～7.5Y6/2)粗粒砂を主体とする砂層で、層厚は70cm以上である。

第4d層：第4c層下半部(層厚約50cm)の同時異相である。灰色(5Y5/1)シルト質粗粒砂～中粒砂質シルトからなり植物の根が顕著で、直径1.0～1.5cmの巣穴も少数認められ、擾乱が激しい。三角州帯の流路に沿う湿地の堆積層とみられる。

ii)遺構と遺物(図５～７)

a．第4c層上面(弥生時代中期)

SK201　東西3.0m、南北2.0m、深さ0.4mの不整楕円形を呈する土壙で、黒色(2.5Y2/1)粘土などの水成層(第4a・b層)を埋土とする。弥生土器１・２と板状木片が出土した。１は凹線文をもつ鉢で、２は底部の薄い壺形土器の破片である。畿内第Ⅳ様式に属するとみられる。

SK202　東西0.8m以上、南北1.5m、深さ0.2mの土壙で、黒褐色(10YR3/1)粘土などを埋土とする。

b．第3a層上面(17世紀中葉～後葉)

SX101　東西1.5m、南北1.0m以上の土壙で、第2b層で埋没する。南側が池ならば、取水口であった可能性がある。

SX102　長さ2.0m、幅0.2mの板が東西方向に立てられていたが、用途は不明である。

c．地層出土の遺物(図６)

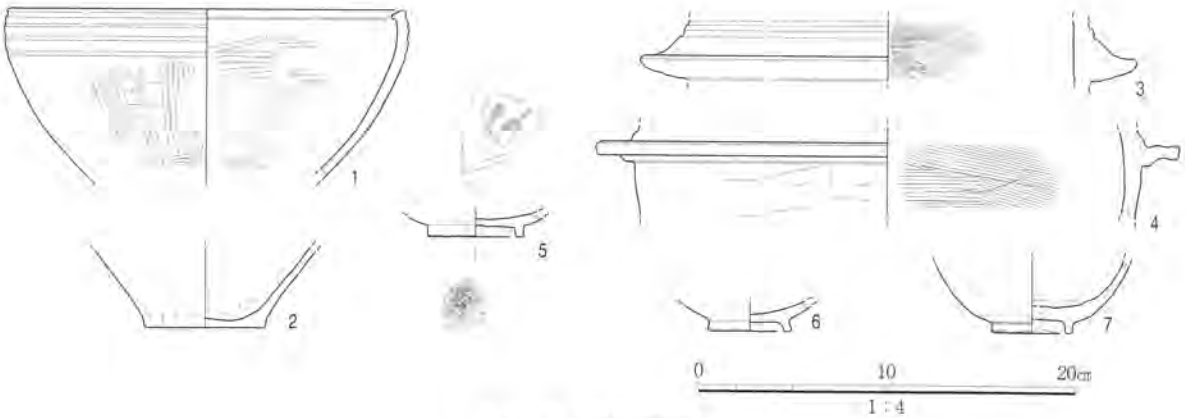


図７　出土遺物実測図

SK201（１・２）、第2b層（３～７）

第2b層からは瓦質土器羽釜３・４と瀬戸美濃焼陶器腰錆碗６、肥前京焼風陶器碗５、肥前磁器染付碗７が出土した。３・４は15世紀に、５は17世紀後半、６・７は18世紀後半に位置付けられる。

３）まとめ

当地は淀川左岸の自然堤防上に位置し、旭区森小路遺跡、都島区榎並城跡伝承地、北区同心町遺跡と同様に弥生中期の遺構を検出することができた。また、江戸時代の中頃には池状の落込みを呈していたと思われる。

今後、周辺の調査により、淀川自然堤防上の遺跡の知見はいよいよ増すものと思われる。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2009、『旭区高殿五丁目における埋蔵文化財試掘調査（DN08－１）報告書』

大阪文化財研究所2014、『豊里遺跡発掘調査報告』

第4c層上面（南から）

北西拡張区第4c層上面
（北から）

SK201断面（南東から）

城東区関目六丁目１における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(SE14－１)報告書

調査個所	大阪市城東区関目6丁目1
調査面積	36㎡
調査期間	平成26年8月25日～8月28日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、岩本 正二

1)調査に至る経緯と経過

今回の調査地は、鎌倉～江戸時代の集落遺跡である関目６丁目所在遺跡にある。京阪電鉄関目駅の東に位置し、淀川によって形成されたデルタ上に立地している。現状は平坦な土地で、盛土・整地している現地表面の標高はTP＋1.3m、それ以前の地表面の標高はTP＋0.8mである(図１～３)。

関目遺跡については、今回調査地の北約300mの地点で発掘調査(SE11－１次)が行われ、平安時代末の溝・土壙を検出し、江戸時代に耕作地になったことを確認している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013a]。また、調査地の南東約280mの地点で、関目４丁目所在遺跡の発掘調査(SE13－１次)が実施され、江戸時代の耕作地を検出している[大阪文化財研究所2014]。

今回の調査地の北東側には、弥生時代中期～古墳時代中期の集落遺跡である森小路遺跡[大阪市文化財協会2001、大阪文化財研究所2012・2013a]、南西側には弥生時代中期の集落遺跡および室町時代の城館跡である榎並城跡伝承地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012・2013b]が存在している。また、調査地の西側約1.0kmの地点で、高殿遺跡の発掘調査(DN13－１次)が実施され、平安時代後半の遺構を検出し、江戸時代に耕作地になったことが明らかになっている[大阪文化財研究所2013b]。こうした調査成果から、調査地の周辺一帯では、江戸時代を中心に耕作地として開発が進展したことが判明してきている。

大阪市教育委員会文化財保護担当による試掘調査で、現地表下約0.6m以下の深さにおいて、発掘調査を必要とする遺構面および遺物包含層が検出された。そのため、こうした遺構面の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史的変遷の基礎資料を得ることを目的に発掘調査を実施することになった。

調査は８月25日から開始した。東西12m×南北３mの調査区を設定し、重機によって現代の盛土(第

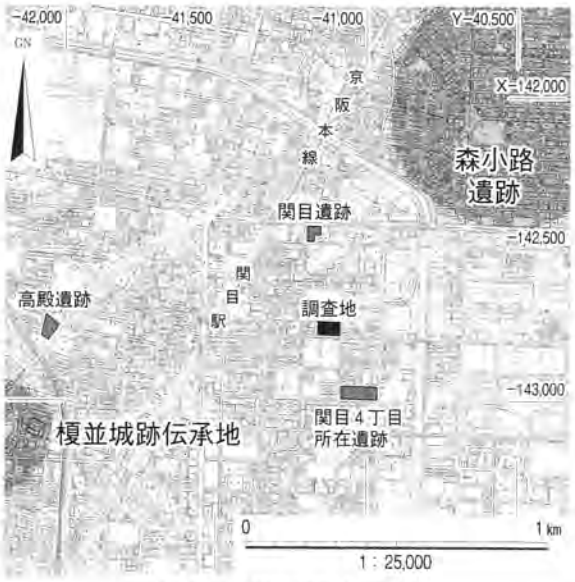


図１　周辺の遺跡と調査地

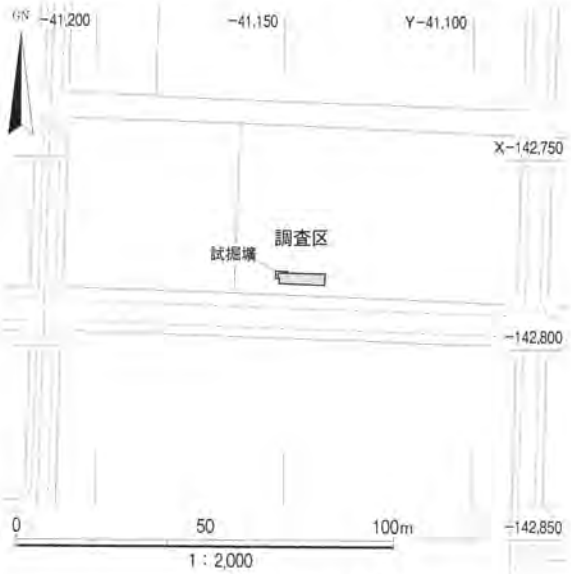


図２　調査区位置図

0層)を除去した。その過程で、調査区中央部において、現在も機能している水道管・排水管が存在することが判明したため、両管は残した。それ以下の層準からは、人力による掘下げを行った。遺構の検出、遺物の採集、実測図の作成、写真撮影を行った。最終的に、水成層である第4層を掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認し、8月28日に埋め戻しを行い、機材を搬出して、すべての作業を終了した。

本報告書の図3の方位は真北、それ以外の図の方位は座標北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記している。

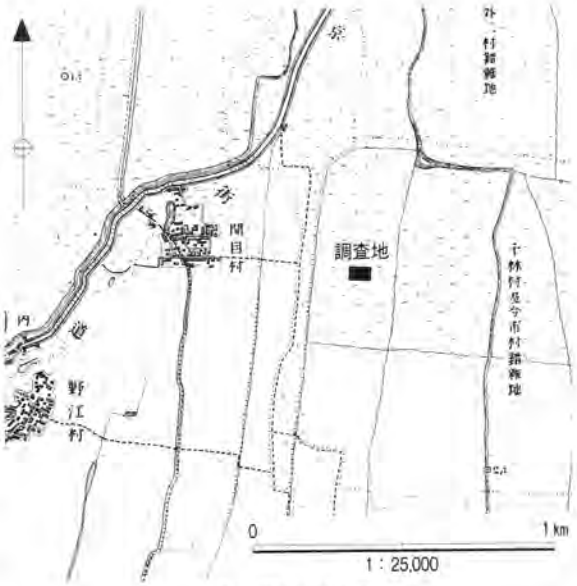


図3　調査地位置図
(1885(明治18)年)［清水靖夫編1995］

なお、本報告書で用いる座標値・座標北は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成して得た世界測地系座標(平面直角座標第Ⅵ座標系)に基づく。

2)調査の結果

i)層序(図4・5)

第0層：現代のアスファルト舗装・盛土である。層厚70～80cmである。

第1層：灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルトからなる現代の作土層で、層厚10cmである。本層は攪乱のため、わずかの部分にしか残っていなかった。

図4　地層と遺構の関係図

第2層:黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚10cmである。本層は攪乱のため、わずかの部分にしか残っていなかった。

第3層：黒褐色(10YR3/2)細粒砂混りシルト質粘土からなる作土層で、層厚25～35cmである。鎌倉～江戸時代の土器が出土した。本層下面で溝SD01を検出した。

第4層：黄灰色(2.5Y5/1)シルト質細粒砂～細粒砂からなる水成層で、植物遺体を含み、上部には植物の根痕が多く見られた。層厚100cm以上で、遺物は出土していない。

ii)遺構と遺物

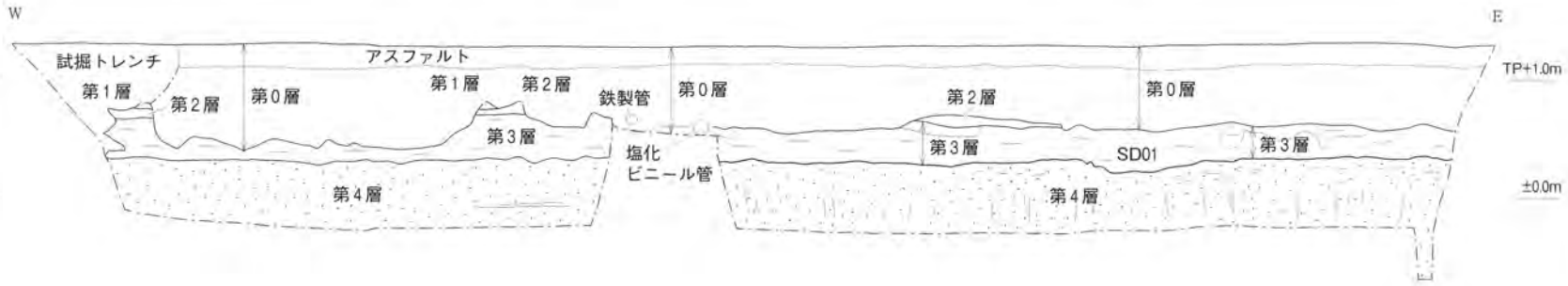
a. 江戸時代の遺構(図6)

第3層下面でSD01を検出した。

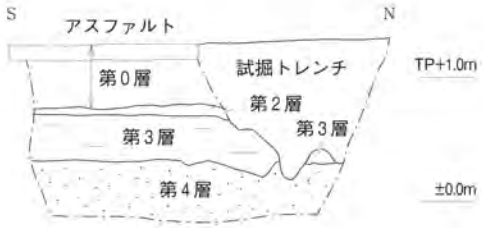
SD01　幅1.0～1.5m、長さ2.5m以上、深さ0.1mの南北方向の溝である。北で東に約9°振る。埋土は黒褐色シルト質粘土である。おそらく耕作に関係した溝であろう。

b. 第3層出土の遺物(図7)

北壁地層断面



西壁地層断面



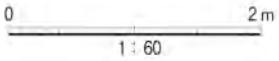


図5　北・西壁地層断面図

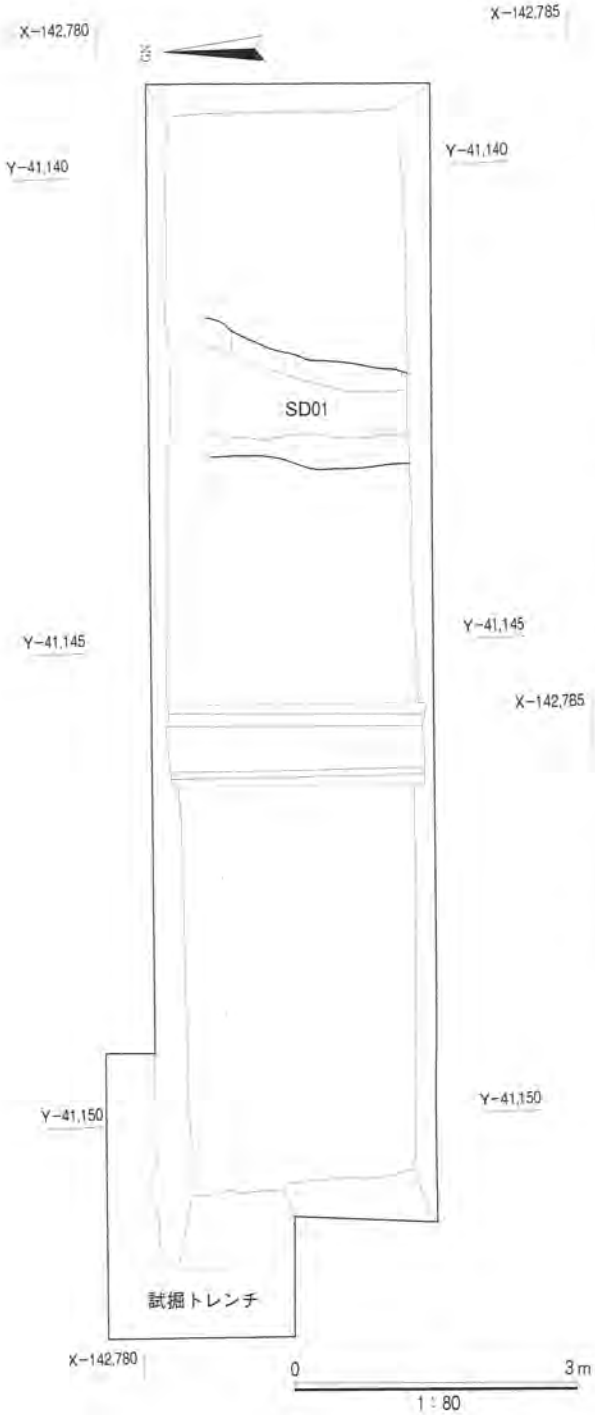


図6　第3層下面遺構平面図

図7　第3層出土遺物実測図

第3層から土器が出土したが、すべて細片で1点しか図化できなかった。18～19世紀前半の肥前磁器染付碗・関西系陶器土瓶、12世紀頃の土師器皿、瓦器椀1、奈良時代以前の土師器高杯・須恵器甕が出土した。

1は瓦器椀の高台部で、高台底径5.2cm、高さ0.5cm、断面形は端部がやや丸みを帯びた台形である。底部内面(見込み)の暗文は平行線状である。12世紀頃のものであろう。

3)まとめ

江戸時代の作土層を確認した。湿地であった土地を江戸時代に耕作地として開発している。以後は、継続的に耕作地となり、水田あるいは畠として利用されている。

今回の調査で、調査地とその周辺一帯の低地は、江戸時代に耕作地として開発されたことが明らかになった。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「榎並城跡伝承地発掘調査(EN01－5)報告書」:『平成13年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83－87

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「都島区内代一丁目における建設工事に伴う榎並城跡伝承地発掘調査(EN10－1)報告書」:『平成22年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.1－5

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013a、「城東区関目六丁目における建設工事に伴う埋蔵文発掘調査(SE11－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.481－486

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013b、「都島区内代一丁目における建設工事に伴う榎並城伝承地発掘調査(EN11－2)報告書」:『平成23年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.15－29

大阪市文化財協会2001、『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ

大阪文化財研究所2012、『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅱ

大阪文化財研究所2013a、『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅲ

大阪文化財研究所2013b、『旭区高殿四丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘掘調査(DN13－1)報告書』

大阪文化財研究所2014、『城東区関目四丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘掘調査(SE13－1)報告書』

尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」:中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.315－337

京都市埋蔵文化財研究所2003、『平安京左京四条二坊十四町跡』

小森俊寛2005、『京から出土する土器の編年的研究』　京都編集工房

清水靖夫編1995、「2万分の1仮製地形図(1885)」:『明治前期・昭和前期　大阪都市地図』　柏書房

北壁地層断面
（南から）

第３層下面遺構
検出状況
（西から）

住吉区帝塚山西二丁目４－１における建設工事に伴う
帝塚山古墳群発掘調査(TZ14－１)報告書

調査個所	大阪市住吉区帝塚山西2丁目4－1
調査面積	120㎡
調査期間	平成26年6月2日～6月18日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、京嶋 覚

1）調査の経過

調査地は国史跡帝塚山古墳の東南部に位置する。帝塚山古墳は大阪市内で唯一全形を残す前方後円墳である。昭和５・６年に京都帝国大学の梅原末治氏が調査を行い、墳丘全面に葺石を施していることなどが報告されている[大阪府1932]。この調査の際に「小帝塚山古墳」とされる小前方後円墳も合わせて報告されており、今回の調査地はその古墳の推定地内に位置している。

調査地周辺では南側でTZ05－１次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]が、西隣の敷地でTZ13－１次調査[大阪文化財研究所2013]が実施されており、いずれも地山層の粘土採掘を行った土採り穴の土壙が整然と検出されている。土壙からは古墳時代後期から飛鳥時代の遺物なども出土しているが、19世紀前半まで下る遺物も含まれているため近世以降の遺構であり、さらに近代まで下る可能性も指摘されている。

今回の調査地における教育委員会の試掘でも土採り穴と考えられる土壙が確認されており、これまでと同様の遺構群のほか、各種遺構が検出される可能性があるため、発掘調査を行うこととなった。調査範囲は敷地南側の中庭で、建物のなかった地点で、10m×12mの範囲を設定して行った。

調査は６月２日から重機により現地表下0.2～0.3mまで掘削したところ地山層が検出されたため、それ以下は人力で掘り下げ、調査を進めていった。６月４日には地山上面の遺構検出が終わり、５日から遺構掘削を開始した。６月11日に遺構の掘下げを終え、翌12日に記録を行い、13日には記録作業を完了して埋戻しを行った。機材等の撤収は18日までに行い現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。基準点および水準点は国土交通省が設置した街区多角点10A11と節点1A012の２点を与点として測量した。図中の方位は座標北を基準にする。水準値はT.P.値（東京湾平

図１　調査地位置図

図２　調査区位置図

均海面値）で、図中ではTP＋○mと略記した。

2）調査の結果

i）層序（図3・4）

調査地の敷地北側道路面の標高はTP+14.4mで、敷地内ではそれよりやや高く、TP+14.5mであった。

第0層：層厚10～30cmの現代盛土である。解体工事に際して表土が20cm程度削平されている。

第1層：明黄褐色（10YR6/6）シルト質細粒砂～シルト層の整地層で、土採り作業と一連の堆積である。最大層厚で30cmで、調査区南部のみで確認された。7世紀前半の須恵器杯蓋1や13世紀代の東播系須恵器捏鉢10など土採り穴と同様の遺物が出土した。

第2層：黄褐色（2.5Y5/5）シルト質細粒砂～黄褐色（2.5Y5/3）細粒砂質シルト層で、最大層厚40cmである。多くの土採り穴の埋土上層に共通して見られる地層であるため第2層とする。

各土採り穴の下部には地山層の偽礫主体の淡黄色（5Y8/4）シルト質粘土や、オリーブ褐色（2.5Y4/3）～暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルト質中粒砂が堆積している。

第3層：淺黄色（5Y7/3～2.5Y8/4）極細粒砂～シルト～粘土層で、上面からの乾痕が顕著に見られる地山層である。

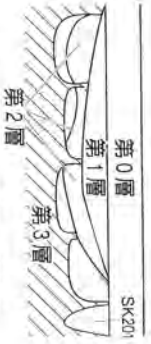
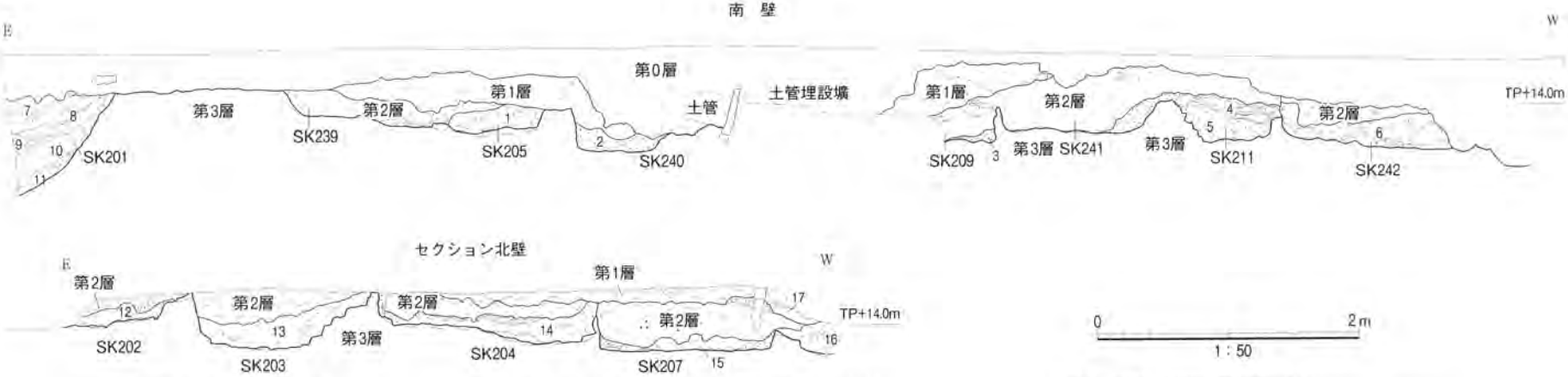


図3　地層と遺構の関係図



1：淡黄色（2.5Y8/4）シルト質粘土（地山偽礫層）
2：黄褐色（2.5Y5/4）シルト質中粒砂（シルト偽礫含む）
3：オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質中粒砂
4：にぶい黄色（2.5Y6/4）シルト質粘土（地山偽礫層）
5：暗オリーブ褐色（2.5Y8/4）シルト質中粒砂（地山偽礫含む）
6：にぶい黄色（2.5Y6/4）細粒砂質シルト（下部は地山偽礫主体）
7：にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質細粒砂（シルト偽礫含む）
8：にぶい黄橙色（2.5Y6/4）シルト質細粒～中粒砂（水成層介在）
9：黄褐色（2.5Y5/3）シルト質細粒砂（水成層）
10：にぶい黄色or黄褐色（2.5Y5/4）シルト質細粒砂（シルト～粘土偽礫含む）
11：にぶい黄色（2.5Y6/3）シルト質細粒砂（水成）
12：オリーブ褐色（2.5Y4/3）細粒砂質シルト～シルト質細粒砂
13：オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質細粒～中粒砂（地山粘土偽礫含む）
14：オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質細粒砂（地山粘土偽礫含む）
15：オリーブ褐色（2.5Y4/4）細粒砂質シルト
16：黄褐色（2.5Y5/3）細粒～極細粒砂質シルト（地山粘土偽礫含む）
17：黄褐色（2.5Y5/4）細粒～極細粒砂（水成）

図4　南壁地層断面図・セクション断面図

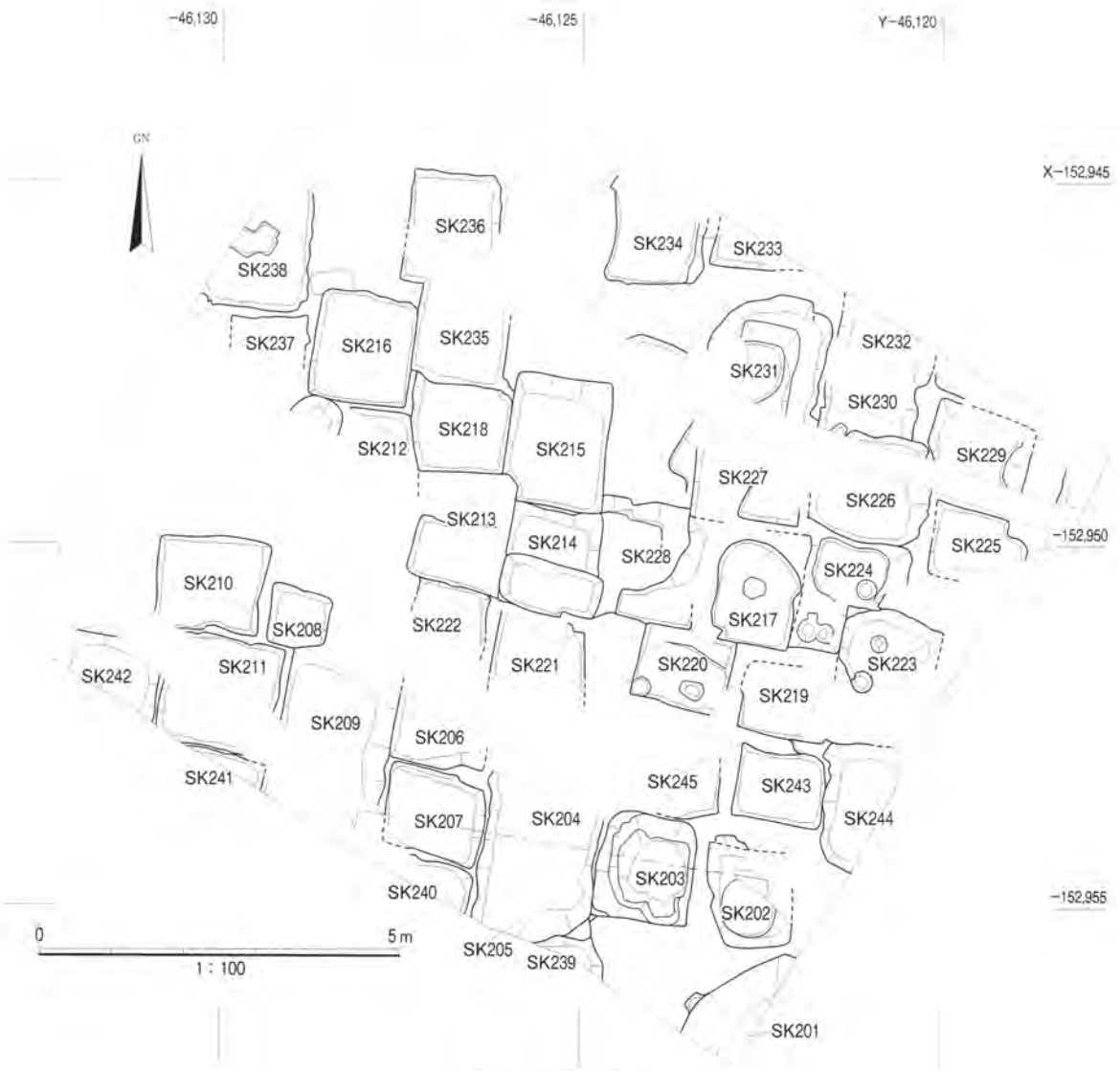


図５　遺構平面図

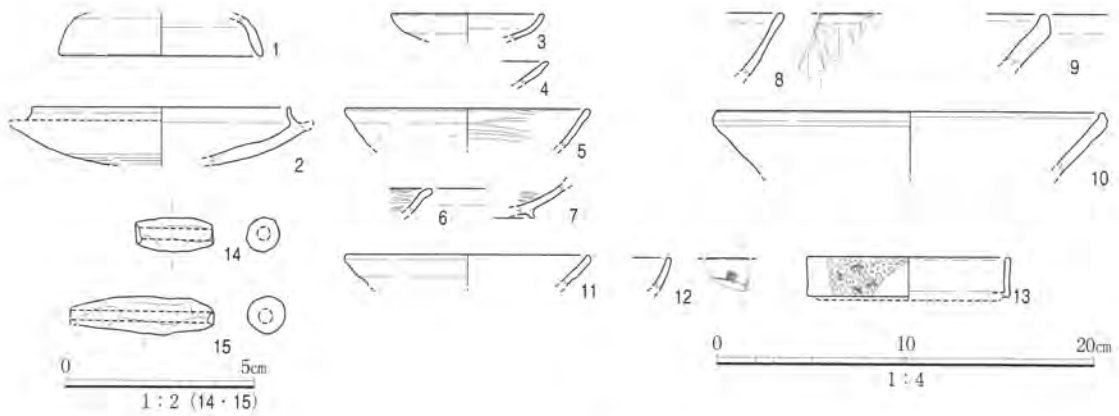


図６　遺物実測図

SK201(７・13)、SK204・205(２・９・11)、SK206(８)、SK210・211(３・６)、
SK212(４・15)、SK214(12・14)、SK215(５)、第１層(１・10)

ⅱ)遺構と遺物

a．近世～近代(図５～７)

SK201　調査区南東隅の第３層の地山層上面で検出された土壙で、平面形は南北1.8m以上、東西1.0m以上の楕円形と推定され、深さ0.7m以上ある。埋土の中位と最下位に整級化する細粒～中粒砂層が認められ、後述の土採り穴と異なる。出土遺物に高台が踏ん張る12世紀代まで遡る瓦器椀細片７と近代の瀬戸美濃焼磁器13が出土した。

SK202～245　同じく第３層上面で検出された土採り穴と思われる土壙群である。これらの土壙は一辺長が1.3～1.5mの方形を基調とする平面形で、各々接するように整然と並んで検出された。深さはまちまちで底面に円形の窪みができているものが複数ある。掘削は地山層下部の極細粒砂～シルト層まで及び、地山層上部の粘土を対象に採掘したと思われ、土壙底面の標高の傾向としては、調査区北東から南西に向かって低くなる傾向がうかがえる。また、土壙群は北でやや東に振る方向を基準にして配列している。

これらの土壙の形状・規模・方位はTZ05－１次調査で検出された土壙群と類似しており、一連の土採り穴と考えられる。一方、西隣の敷地で行われたTZ13－１次調査では、方位は共通するが大型の長方形土壙の土採り穴であり、今回の遺構とは異なる(図７)。

土壙からの出土遺物には土師器皿３・４、須恵器杯身２・捏鉢９、瓦器椀５・６、中国産青磁碗８などの細片が少量出土した。須恵器杯身２は立上りが短く口径が大きいため、TK43型式とみられ、図化されていないが長脚の高杯脚部片があり、これらが最も古い時期の遺物である。また、須恵器捏鉢９は東播系で、瓦器椀５・６はいずれも細片だが、外面の暗文が省略されるものがある。８は中国産の鎬蓮弁文青磁碗である。14・15の小型管状土錘も中世に多く見られるものである。これらは13世紀

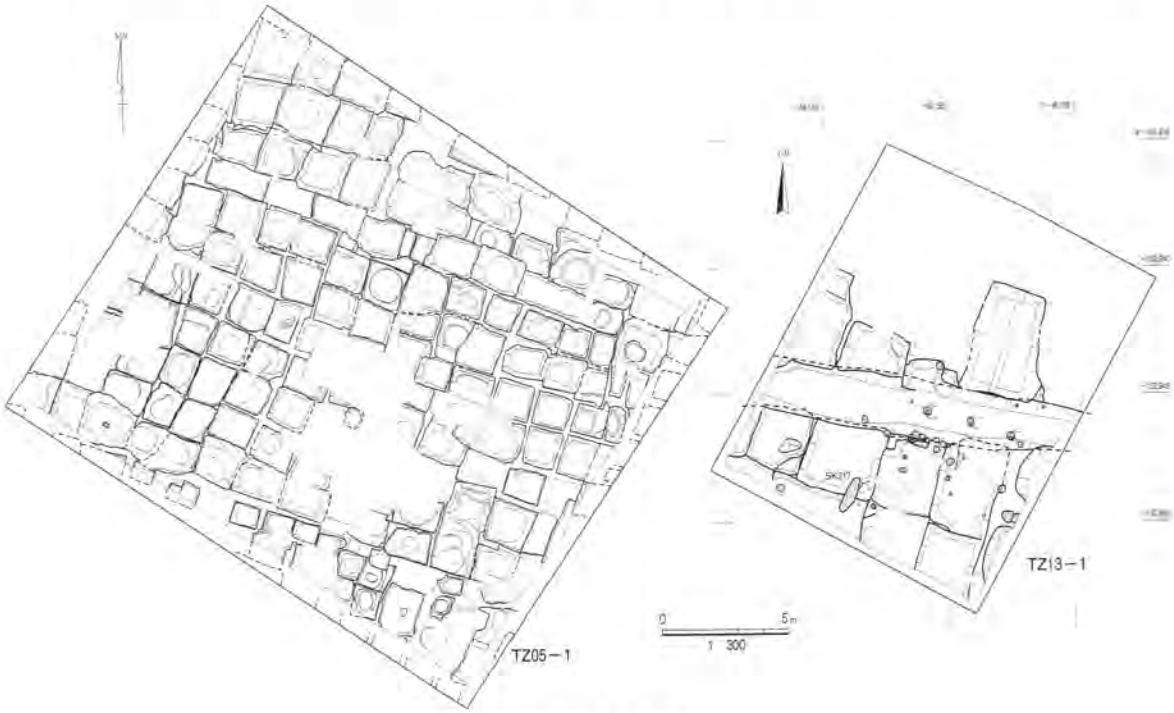


図７　周辺調査地の遺構全体図

代の遺物とみられ、土採り穴の埋土や整地土の母材となる地層の時期を示している。しかし、埋土には肥前陶器皿11・肥前磁器碗12をはじめとする近世遺物も少量ながら確実に含まれ、土壙の掘削時期は江戸時代まで下る。

b．近代～現代

調査区北部の第２層上面では耕作に伴うと推定される東西方向の溝、畝間と推定される南北が検出された。埋土は第１層より上位の作土と思われる灰色シルトである。

c．周辺遺構の総括と小帝塚山古墳

小帝塚山古墳の所在地とされる今回の調査地周辺の調査では、小帝塚山古墳の存在を示唆する手がかりが得られず、いずれも江戸時代末期から近代にかけての土採り穴と思われる土壙群が検出された。

小帝塚山古墳は1930・31(昭和５・６)年に梅原末治氏が現地調査を行い、報告している[大阪府1932]。それによると、「帝塚山の正面即ち西南にあって、相去ること約二丁である。所在地は前者(帝塚山古墳)よりも一段高く、同じく松林のうちに墳丘が見られ」るとしている(図８)。梅原氏が調査した10年前の1921(大正10)年測量の地図によると、帝塚山古墳の前方部から西南約２町(200m)には標高15mの等高線で描かれた高台があり、針葉樹林の地図記号が見られる(図９)。一方、今回調査した地点は標高は同じく高いものの、土採りの地図記号が描かれ、針葉樹林ではないことが読み取れる。

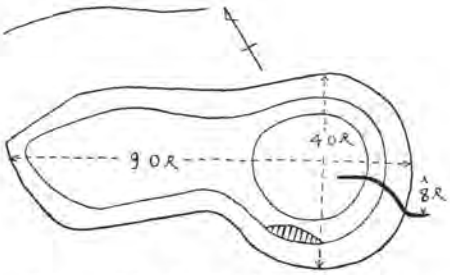


図８　小帝塚山古墳([大阪府1932]より)

以上のことから、昭和初期に墳丘が確認された小帝塚山古墳の所在地は、現在の住吉中学校敷地内と推定できるのである。住吉中学校は1948(昭和23)年に住吉第５中学校として開校しており、その際に、松林が切り拓かれ、墳丘も破壊されたと推定される。

また、地図の等高線から今回の調査地は当時から数10cm低くなっており、この付近の住宅開発により削平された可能性が高い。1914(大正３)年に分譲が開始された南海高野線東側の住宅地とは別に、高野線に帝塚山駅が新設された1934(昭和９)年以降に西側の開発が進み、荒地となった傾斜地が削平されたと推定される。

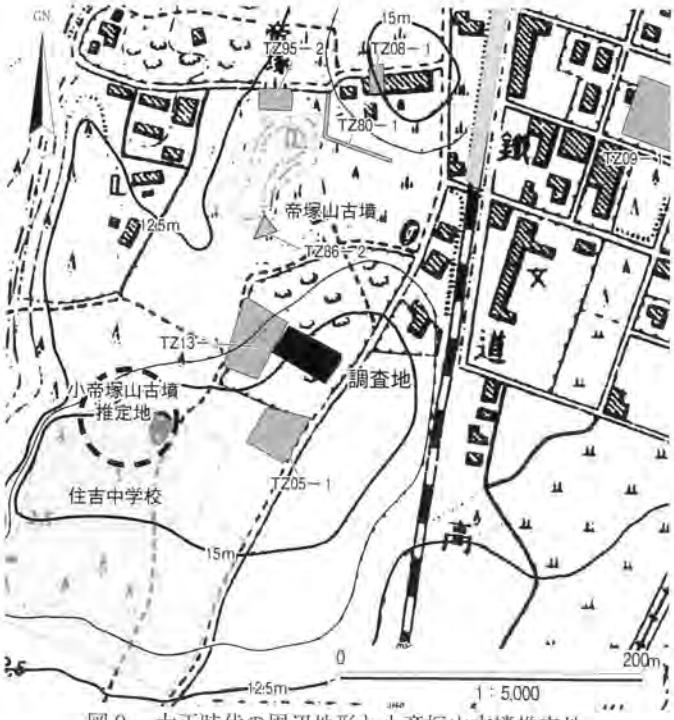


図９　大正時代の周辺地形と小帝塚山古墳推定地
(大正10年地図に加筆)

3)まとめ

今回の調査では、近世から近代の土採り穴と考えられる土壙群が調査区全面に

検出され、わずかに残った地山層上面でも古い時期の遺構は検出できなかった。また、小帝塚山古墳の所在地は包蔵地になっていない現在の住吉中学校敷地内に比定されるため、新たに包蔵地に加えて保存していく必要がある。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「帝塚山古墳群発掘調査(TZ05－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.255－262

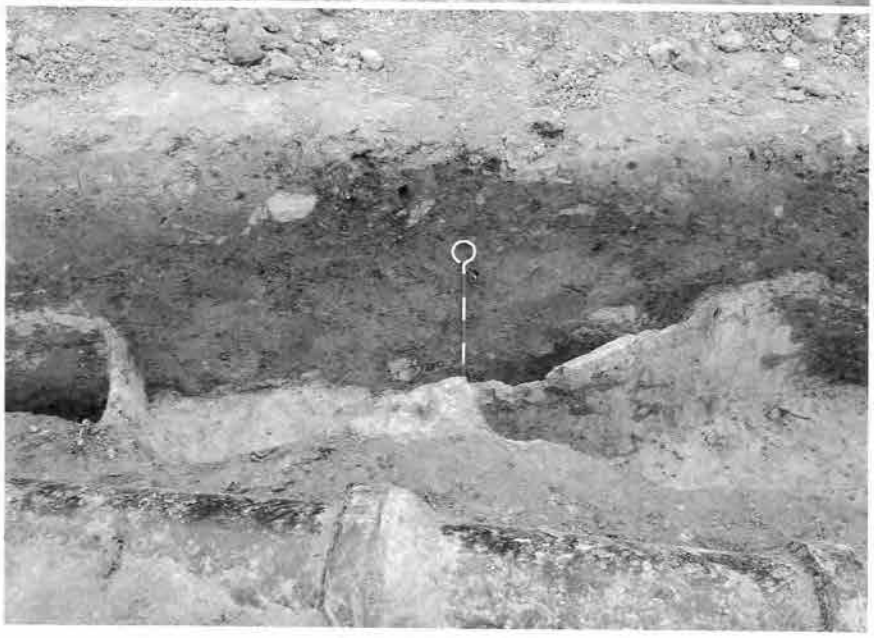
大阪府1932、『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第3輯

大阪文化財研究所2013、『住吉区帝塚山西二丁目における建設工事に伴う帝塚山古墳群発掘調査(TZ13－1)報告書』

土壙群全景
（南東から）

土壙群近景
（東から）

南壁地層断面（左から
SK209・241・211）



平野区長吉長原西一丁目５－20における建設工事に伴う
長原遺跡発掘調査(NG14－１)報告書

調査個所	大阪市平野区長吉長原西1丁目5－20
調査面積	98㎡
調査期間	平成26年4月2日～4月11日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、京嶋 覚

1）調査の経過

調査地は長原遺跡西部に位置し、瓜破台地と長吉台地を分ける「馬池谷」東肩から約100m東側の長吉台地上に立地する。台地は北東方向に緩やかに高度を下げ、約500m東の中央環状線手前付近から沖積地に変わり、弥生時代までに自然堤防の高まりが形成されている。一方、調査地の西側に存在する「馬池谷」は、UR07－４次調査[大阪市文化財協会(以下、大文協) 2009]では最深部の流路底がTP＋2.5mで、現地表から約7.3mの深さがあり、今回の調査地と瓜破台地側とを截然と区分している。

調査地の長吉長原西一丁目ではこれまで多くの発掘調査が行われ、古墳時代から平安時代の遺構群が濃密に分布していることがわかっている。(図１)

長吉長原西一丁目の北半部で行われたNG84－12・84－25A区・84－67・86－91次[大文協1992b・2006]、DD１・84－１次調査[大文協1979]では前方後方墳を含む15基の古墳が発掘されており、周辺は長原古墳群北群の南端に位置している。これから南側ではNG84－25次調査B区で古墳時代中・後期の南北を溝で区画された十数棟の掘立柱建物と２基の井戸からなる集落が発掘されている。建物には大壁建物が含まれ、井戸の一つは直径３ｍの大型で、扉や楣を含む建築部材が出土した[大文協2006]。今回の調査地の西側のNG83－32次調査[大文協1992a]では古墳時代中期の８棟の掘立柱建物からなる集落が発掘されており、そこから南の長吉長原西二丁目一帯でも各所で古墳時代中・後期の集落遺構が分布している[大文協1993a・b他]。これらは出戸自然堤防上に形成された東部の集落が西に居住域を移して形成されたと考えられ[京嶋覚1993]、今回の調査地はその居住域の北端付近に位置するNG83－32次調査地の集落に近接している。

NG84－25次調査Ａ区の奈良時代の水田直下で、古墳群の間に幅約６ｍの道路状遺構が検出されて

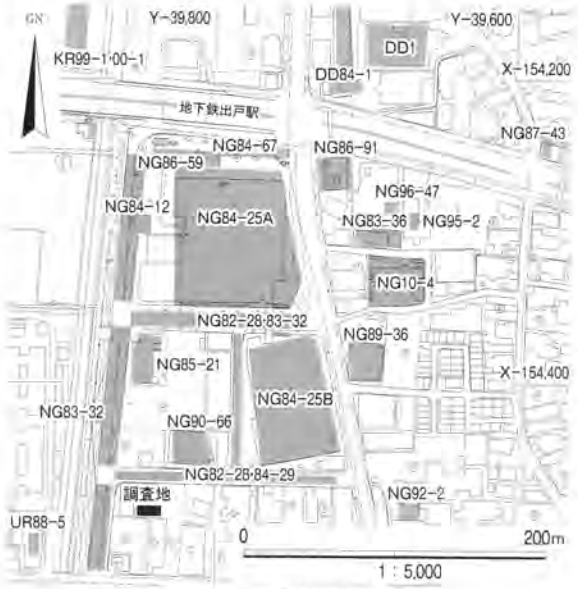


図１　調査地位置図

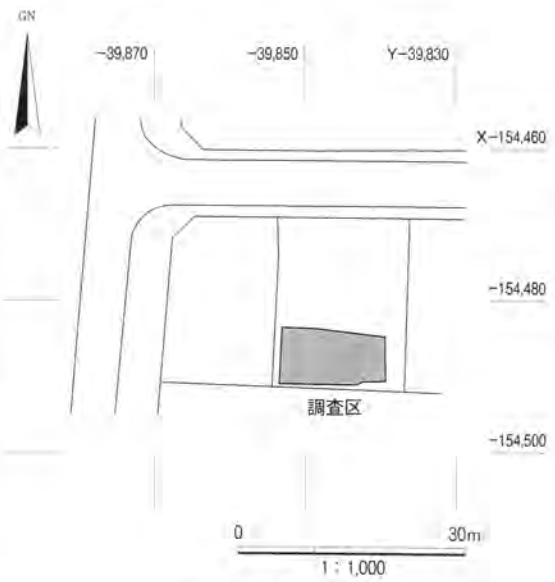


図２　調査区位置図

おり、南側のNG82－28・84－29次調査[大文協1990・1992b]でもその延長部の側溝と推定される溝が確認されている。これは北東から南西に向かう条里制に先行する斜行道路で[京嶋2010]、この道路状遺構の一部が今回の調査地で検出される可能性があった。

また、NG83－32次調査の北部では奈良時代と平安時代の建物群が検出されており[大文協1992a]、近接するNG82－28・85－21次調査[大文協1990、大阪市教育委員会・大文協1987]でも平安時代の集落遺構が確認されている。さらに調査地に近いNG83－32次調査南部にも平安時代の屋敷地が存在し[大文協1992a]、東側の長吉総合病院内のNG92－２次調査では平安時代の井戸から「治暦二年(1066年)」「長原里卅五坪」と書かれた木簡が出土している[大文協2006]。このことから、今回の調査地は古代条里制においては河内国丹比郡「長原里」の北西隅に当たる三十六坪に位置することになる。

このように、調査地周辺では多くの遺構が分布していることが明らかになっているため、古墳時代の集落遺構の拡がりや条里制に先行する道路の確認と、平安時代の土地利用についての資料を得ることを目的に、開発対象区域の南部に南北７m、東西14mの調査区を設定し、発掘調査を実施することになった(図２)。

調査は掘削土の仮置き場所を確保するため、西側10mほどを先に発掘調査し、その終了後に埋戻し作業と平行して残りの部分を調査することとした。

４月２日から重機により現代盛土である現地表下約1.5mまで掘削した。それ以下には現代耕土と厚さ数cmの中世作土が堆積しているのみで、直下に地山層が確認された。時間の短縮を図るため、重機で地山層直上まで掘削し、地山層上面での遺構検出と掘下げを人力で行うこととした。

４月７日に西側の掘下げと記録作業を終えて埋戻しを開始し、翌日から東側の残り部分の重機掘削を行って遺構の検出・掘下げ・記録作業を進めた。こうした現場作業は４月11日に終え、機材の撤収を行ってすべての作業を完了した。

以下にその結果を報告する。基準点および水準点は国土交通省が設置した街区多角点10A05・10A06の２点を与点として測量した。図中の方位は座標北を基準にする。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTP＋○mと略記した。

２)調査の結果

ｉ)層序(図３・４)

調査地の現地表はTP+10.9mで、北側東西道路の中央ではTP+10.3mと低くなっている。

第０層：層厚140cmの現代盛土である。長吉瓜破地区土地区画整理事業に際して施工されたと思われる。

第１層：オリーブ黒色(5Y2.5/1)シルト質細粒～中粒砂層の現代作土である。最大厚で10cmであるが、盛土工事前に削剥されたと思われ、わずかしか残っていない。

第２層：オリーブ色(5Y5/4)～暗オリーブ色(5Y4/3)細粒砂質シルトの作土層で、層厚５～10cmである。古墳時代～古代の土器片や

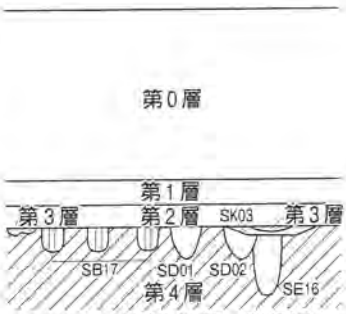
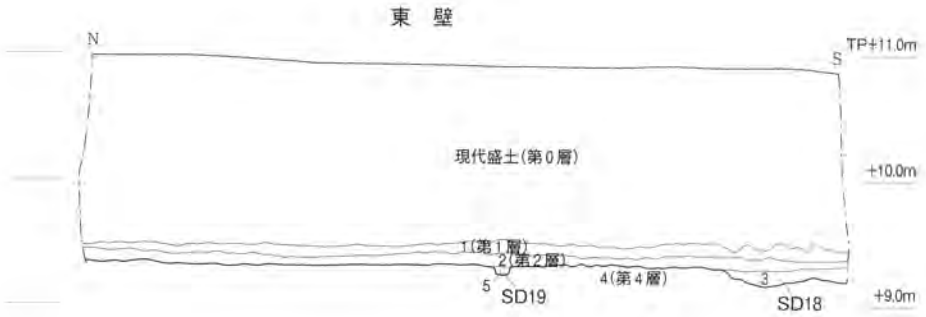
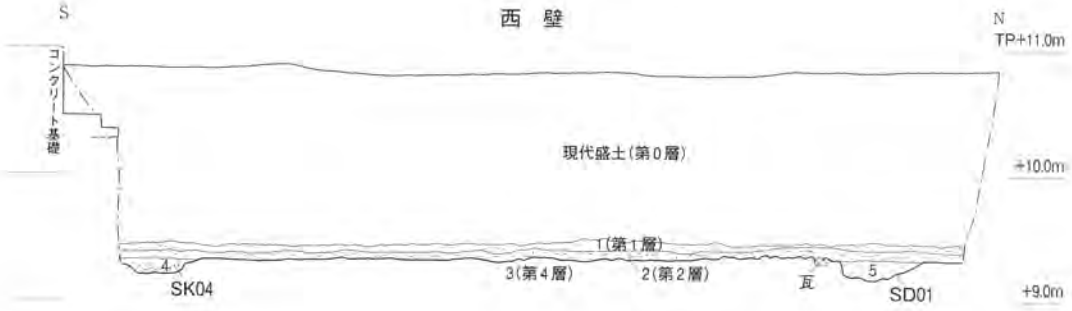


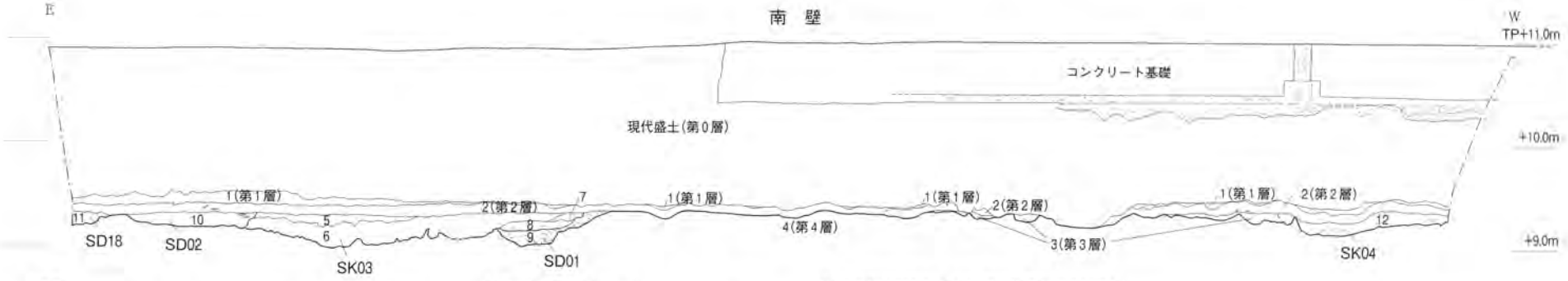
図３　地層と遺構の関係図

東壁
1：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒～中粒砂(現代作土、第1層)
2：オリーブ色(5Y5/4)細粒～中粒砂質シルト(中世作土、第2層)
3：褐灰色(10YR5/1)細粒砂質シルト(SD18埋土)
4：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土(地山層、第4層、乾痕有)
5：黄灰色(2.5Y4/1)シルト～細粒砂質シルト(SD19埋土)



西壁
1：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂(現代作土、第1層)
2：暗オリーブ色(5Y4/3)細粒～中粒砂質シルト(中世作土、第2層)
3：黄褐色(2.5Y5/4)粘土(地山層、第4層、乾痕有)
4：灰色(5Y5/1)シルト～細粒砂質シルト(地山偽礫含、SK04埋土)
5：灰オリーブ色(5Y5/2)シルト(SD01埋土)





南壁
1：オリーブ黒色or黒色(5Y2.5/1)シルト質細粒～中粒砂(現代作土、第1層)
2：オリーブ色(5Y5/4)細粒砂質シルト(中世作土、第2層)
3：灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂混り粘土質シルト(古代作土、第3層)
4：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土(地山層、第4層、乾痕有)
5：褐灰色(10YR6/1)シルト
6：黄灰色(2.5Y6/1)粘土質シルト(地山偽礫含)
7：灰オリーブ色(5Y5/2)粘土(地山偽礫含)
8：灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂質シルト
SK03埋土
9：黄灰色(2.5Y5/1)シルト(地山偽礫含)(SD01埋土)
10：褐灰色(10YR5/1)細粒砂質シルト(SD02埋土)
11：褐灰色(10YR5/1)細粒砂質シルト(SD18埋土)
12：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(地山偽礫含)(SK04埋土)

0　2m
1：60

図4　西壁・東壁・南壁土層断面実測図

図８－25の棒状土錘などと共に黒色土器・瓦器椀が出土しており、近世に下る遺物が含まれないことから中世の作土層である。本層下面で耕作に伴う南北方向の平行する浅い溝群が一部で確認された。長原遺跡標準層序の長原4B層に相当する。

第３層：灰色(5Y5/1)～灰オリーブ色(5Y5/2)シルトからなる作土層で、最大層厚10cmである。調査区西部の踏込み内にわずかに遺存する。遺物はないが標準層序の長原6A層に相当する。

第４層：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土層で、上面からの乾痕が見られる。標準層序の長原13層に相当する地山層である。

ⅱ)遺構と遺物

a．古墳時代(図５～10、写真１・２)

第４層の地山層上面で掘立柱建物SB17、柱穴SP05、溝SD01、井戸SE16が検出された。

SB17は調査区東北部で検出された東西３間(3.7m)、南北２間(3.4m)以上の総柱建物である。３間×２間と仮定すると桁行柱間が1.23m、梁行柱間が1.70mの等間であり、周辺で検出されている同構造の建物が示す傾向と同じく梁行柱間が大きい。柱穴掘形は直径0.4m前後の円形ないし楕円形で、深さは0.25～0.40mである。柱痕跡はそれと判断できるもので10～12cmである。北東隅柱と推定されるSP13の柱痕跡上部から須恵器甕体部の20cm大の破片21が出土した。建物廃絶後に埋置された可能性がある。その他の柱穴からはほとんど遺物は出土しなかった。

21は須恵器甕の体部片で、外面は平行タタキを縦ないし斜め方向に施し、内面は丁寧に当具痕を消して仕上げている。TK208型式より下ることはないであろう。

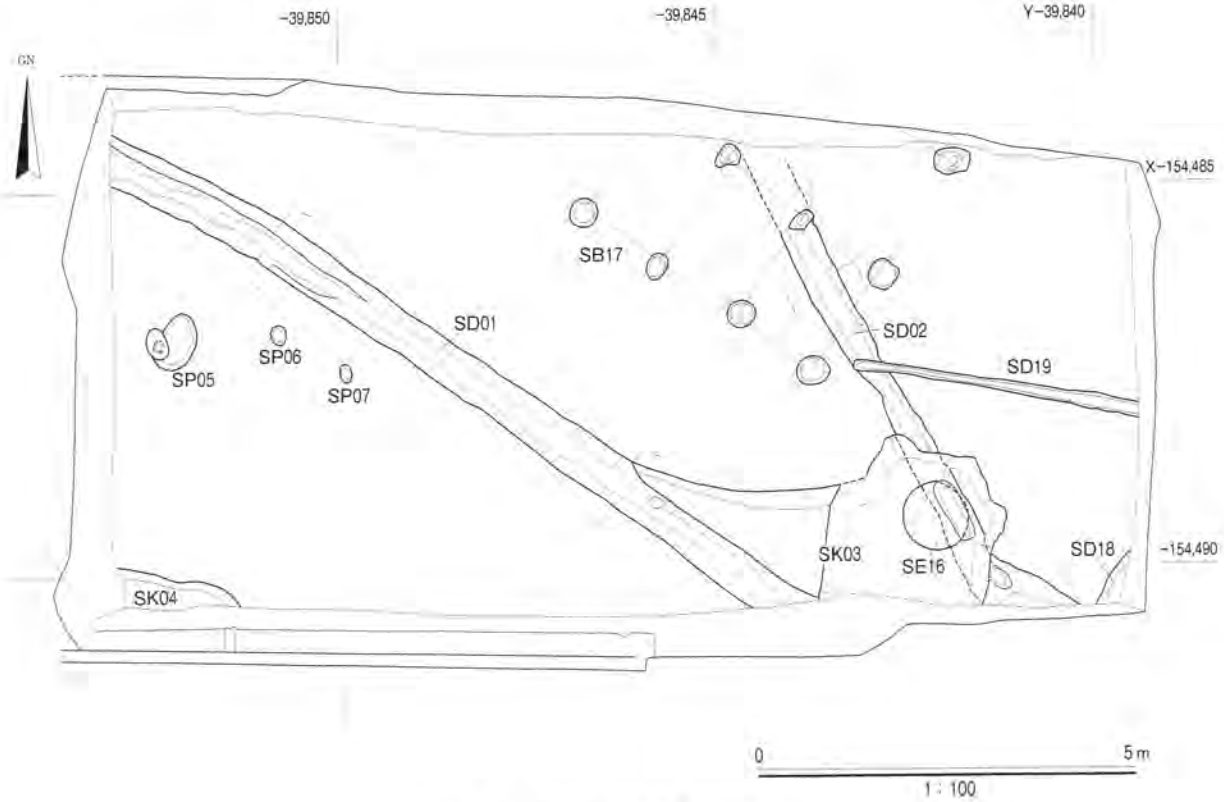
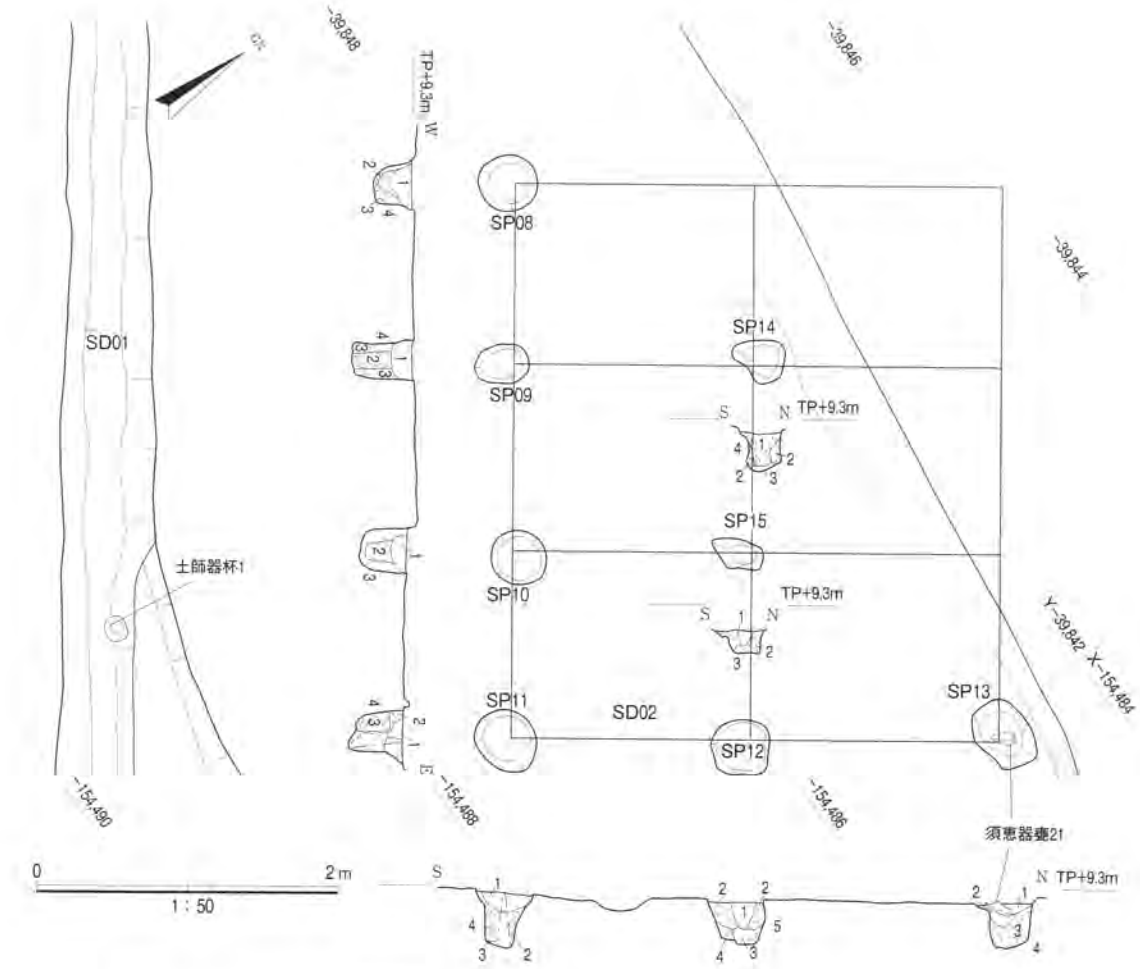


図５　第４層上面遺構平面図



SP08
1：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト
2：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト(粘土偽礫含む)
3：浅黄色(2.5Y7/4)シルト(粘土偽礫多い)
4：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土(地山)

SP09
1：黄褐色(2.5Y5/4)シルト
2：黄褐色(2.5Y5/3)シルト(粘土偽礫多い)
3：灰黄色(2.5Y6/2)粘土とシルトの偽礫層
4：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土(地山)

SP10
1：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト
2：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト
3：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土(地山)

SP11(WE)
1：黄褐色(2.5Y5/4)シルト
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(粘土偽礫少量含む)
3：淺黄色(2.5Y7/4)粘土偽礫層
4：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土(地山)

SP11(SN)
1：黄褐色(2.5Y5/4)シルト
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(粘土偽礫含む)
3：浅黄色(2.5Y7/4)粘土質シルト(粘土偽礫主体)
4：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土(地山)

SP12
1：灰黄色(2.5Y6/2)シルト
2：黄灰色(2.5Y6/1)シルト(粘土偽礫多く含む)
3：灰黄褐色(10YR5/2)シルト(粘土偽礫含む)
4：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(2と類似)
5：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土(地山)

SP13
1：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト
2：黄灰色(2.5Y5/1)シルト(粘土偽礫少量含む)
3：黄灰色(2.5Y6/1)粘土質シルト(粘土偽礫多い)
4：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土(地山)

SP14
1：黄褐色(2.5Y5/5)粘土偽礫多いシルト
2：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト(粘土偽礫含む)
3：褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト(加工時)
4：浅黄色(2.5Y7/3)粘土(地山)

SP15
1：褐灰または灰黄褐色(10YR4/1.5)シルト
2：灰オリーブ色(5Y6/2)シルト(粘土偽礫多い)
3：浅黄色(2.5Y7/3)粘土(地山)

図6　SB17平面・断面図

SP05は調査区西端で検出された長径0.8m、短径0.6mの楕円形の柱穴で、南西部にこれを壊して長径0.4m、短径0.25mの柱穴が検出された。この部分に直径12cmの明瞭な柱痕跡が確認され、他に柱痕跡が認められなかったため、掘り直されて柱が据えられたと考えられる。調査区の西20mで検出されているNG83－32次調査SB13のすべての柱掘形が梁行方向に長い楕円形を呈する特徴があったことから、SP05も後述するSD01と平行する方位を示す掘立柱建物の北東隅柱になる可能性がある。

SP06･07は第2層直下で検出されたSD01に沿って南側に並ぶ小ピットである。いずれも直径0.2m、深さ0.05mと浅い。出土遺物はないが、SD01に沿って配置しているため、古墳時代の遺構の可能性がある。

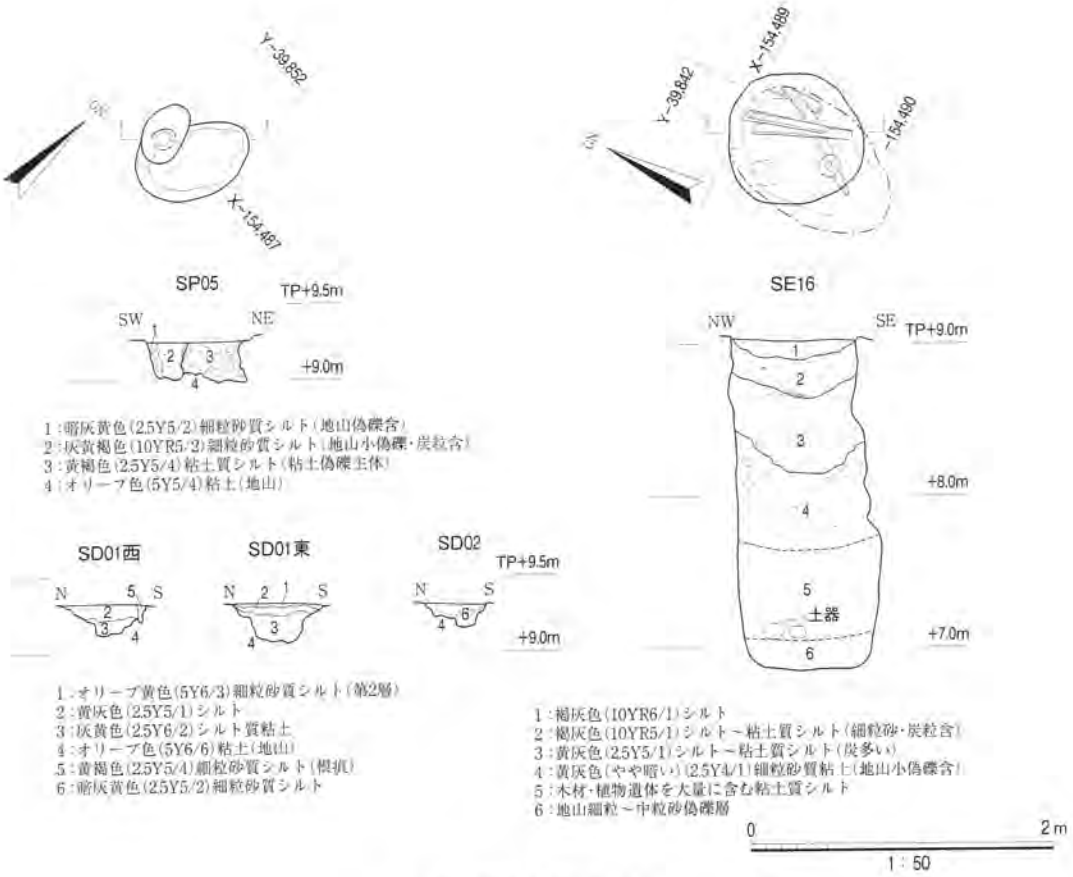


図７　各遺構平・断面図

SD01は、調査区北西隅から南壁の東寄りに向かって直線的に延びる、幅0.5～0.6m、深さ0.2～0.3mの溝で、検出した長さは11.0mである。埋土はシルト～粘土質シルトの自然堆積であるが、水が流れた痕跡は認められなかった。SB17はこの溝と2.4mの間隔をあけて平行している。また、SP05との間隔は1.5m、SP06・07との間隔は0.6mである。

出土遺物には土師器杯１・甕、須恵器蓋杯・高杯２・壺・甕などがある。

１は埋土最上部から完形で出土した土師器杯である。平底を呈する体部から、直線的に口縁部が延びる。内外面共に著しく風化しており、調整痕は見えないが、口縁端部内面を幅広く強くヨコナデが施されたと見られる。細部の形状や調整は不明だが、全体の形状から奈良時代の杯Ａと考えられる。溝内に堆積した第２・３層中の遺物であろう。

２は体部外面に波状文を施す高杯杯部と推定され、TK216型式であろう。これ以外に細片で図示していないが、尖った端部から少し下に稜線を作り、以下を波状文で飾る壺口縁部の細片や、稜線が鋭く、天井部のケズリ範囲が広い蓋杯など、TK208型式までの須恵器がある。

SE16は調査区東南部で検出された井戸である。直径0.8～0.9m、深さ2.1mで、下部では壁面の崩落により、長径1.2mの楕円形を呈していた。埋土は上部は偽礫を含まない自然堆積と思われる粘土質シルトで、その下位に地山粘土の偽礫と炭粒を含む埋め土があり、その下位に木製品を含む木材と多量の植物遺体の堆積が見られた。最深部は地山砂層が再堆積していた。

井戸側は無かったと考えられるが、下部の壁面の崩落を防ぐために植物や廃材を用いた簡易な井戸

図８　出土遺物実測図

SD01(１・２)、SP13(21)、SE16(３～20・26)、SK03(22～24)、第２層(25)

写真１　SE16出土須恵器
上：17、下：18

側が設けられていた可能性がある。

出土遺物には土器類としては土師器高杯３・４・壺７・甕８・甑９、韓式系土器平底鉢５、須恵器杯蓋10～12・有蓋高杯13・高杯脚14・把手付椀15・大型椀16・壺18～20・瓶17があるほか、丸底Ⅰ式[広瀬和雄1988]の製塩土器６などがある。

３は土師器高杯の杯部で、口縁部は内湾気味で端部は丸く収める。内面に放射状暗文を施している。４は中空の脚部で、柱状部外面は縦方向にナデ調整し、内面には絞り目が残る。裾部外面はヨコナデ調整で、内面にはユビオサエを施した後にヨコナデしている。７は内外面をハケメ調整主体で仕上げている広口壺で、外面は使用による擦痕が顕著である。８は外面ハケメ調整で内面を板ナデ調整する甕の底部である。９の甑口縁部は外面縦方向のハケメ調整で仕上げ、内面は口縁付近はハケメ調整であるが、それ以下は板ナデ調整である。５の平底の土器は韓式系土器の平底鉢であろう。

10～12は須恵器の杯蓋で、いずれも口縁端部はシャープな面をつくる。自然釉などにより確認できない10以外は天井部外面のヘラケズリが広い範囲に及んでいる。13・14は別個体の高杯であるが、いずれも外面にカキメを施す。13の口縁端部は面をなしている。14の脚部は円形スカシ孔を３方に開ける。15は小型の把手付椀で、口縁部と把手を欠く。16は外面をヘラケズリする底部片で、最大径部に凹線が確認できる。内底面の広い範囲に自然釉が認められるため、大型の椀と推定される。18・20は壺体部で、いずれも口縁部を欠く。体部に18は波状文、20は列点文が施されている。また、20の頸部は波状文で装飾されている。19は壺口縁部で、ヨコナデでつくり出された２条の稜線で３段に分割された外面に、それぞれ波状文が施されている。17の瓶は無文で、体部下半の外面をヘラケズリしている。

これらの土器は主として図７で示した埋土５層で出土したが、20の須恵器壺は埋土３層上面付近、杯蓋11は埋土２層から出土しており、瓶17の口縁端部細片がSK03から出土している。しかし、時期差はあまりなく、須恵器におけるON46段階からTK208型式に収まる。

26は幅10cm、長さ14cm、厚さ５cmの砂岩製の砥石である。

木製品には鞍橋27～31・槽ないし盤32・部材33のほか、断面が六角形に面取りされた直径３～４cmの棒状木製品や、建築部材とみられる板材がある。石製品には砥石26がある。

鞍橋27～31はいずれも破片であるが、材の特徴からいずれも同一個体の可能性が高い。最大の破片である27は、端部を丸く仕上げた外縁に平行するように幅約７～８mmの突帯を外側に削り出しており、その上面には黒漆が遺存している。厚くなる下辺に沿って小孔が４～５cmの間隔で４個開けられており、これらの小孔が並ぶ位置の下端面は加工の痕跡が見られず、破断面と考えられ、小孔がない位置

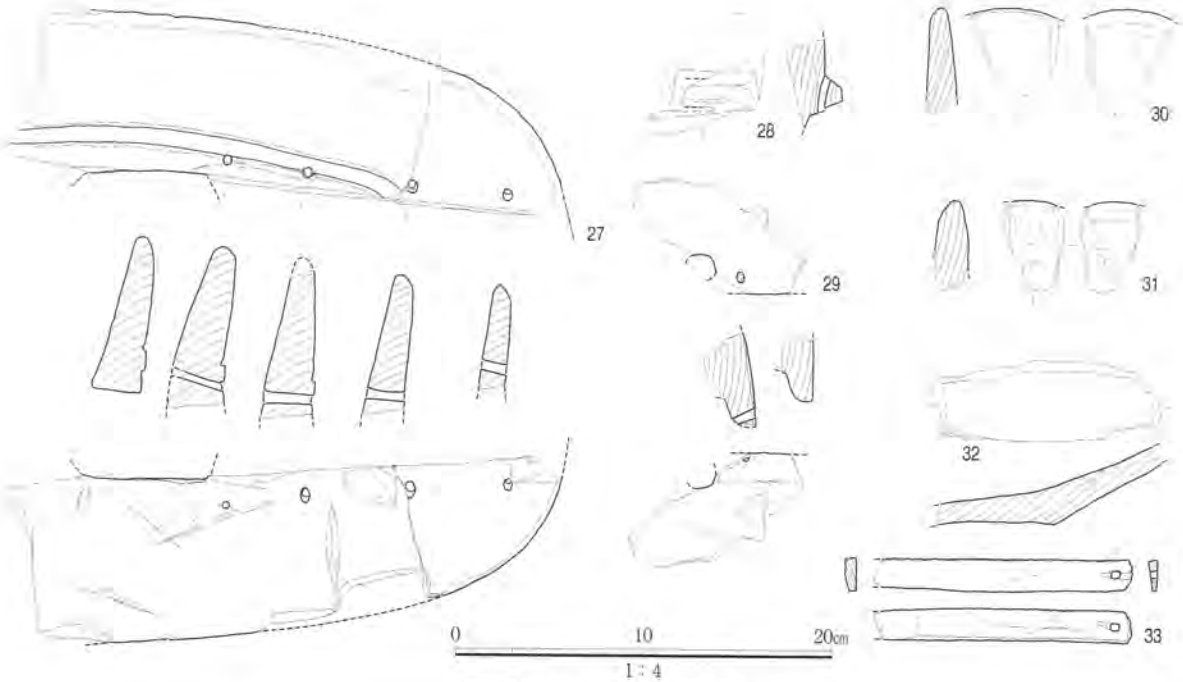


図９　SE16出土木製品実測図

の下端面は加工面が認められる。下端面の両者の境界は直線的に明瞭な段が確認できる。したがって、４個並ぶ小孔は、折損して補修のために開けられた紐孔と考えられる。一方、内側は平坦に仕上げられている。28は鞍橋下端の馬膚近くの破片と推定され、幅15㎜、高さ10㎜の断面台形の突起帯を削り出し、そこに幅15㎜以上で高さが５㎜の孔を開けた破片である。反対の面は残っていない。29は端面を一部残す破片で、端面近くに小孔と、直径15㎜程度の孔が認められる。面が良好に残る方が外面で、もう一方が内面で、下端付近の幅15㎜ほど面が残っている。馬膚に相当する下端から幅1.5㎝ほどが薄くつくられ、それ以上が厚くなると推定される。30・31は鞍橋上端の小片である。

以上の破片以外にも端面を残さない破片がいくつかあるが、いずれも同一材と見られるものである。これらの破片を同一個体とみて全体の形状を、他遺跡の資料を参考に復元してみたい。27外側の突帯は磯の外縁、すなわち海との境界部分に削り出されており、類例は大阪府蔀屋北遺跡[大阪府教育委員会2010]、奈良県谷遺跡[橿原考古学研究所1985]や名柄遺跡[神谷正弘2005]、滋賀県神宮寺遺跡[長浜市教育委員会2004]の５世紀中～後葉の４例しかない。蔀屋北・谷遺跡は突帯の幅が約５㎜でやや狭いが、名柄・神宮寺遺跡は約７㎜と広く、本資料に近い。28の台形突起帯は、大阪府百舌鳥陵南遺跡[神谷1987]や上津島遺跡[上津島遺跡調査団1997]、蔀屋北遺跡、神宮寺遺跡の鞍橋内側の下端付近に見られ、欠損している上津島遺跡例を除いて、洲浜形を挟んで馬膚沿いに各４箇所の孔が穿たれており、居木を連結するための孔とされて

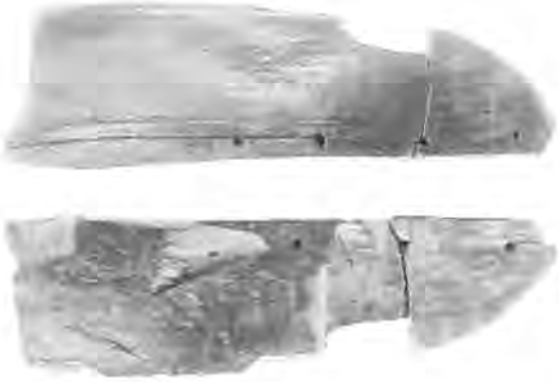


写真２　SE16出土木製鞍橋27
上：外側、下：内側

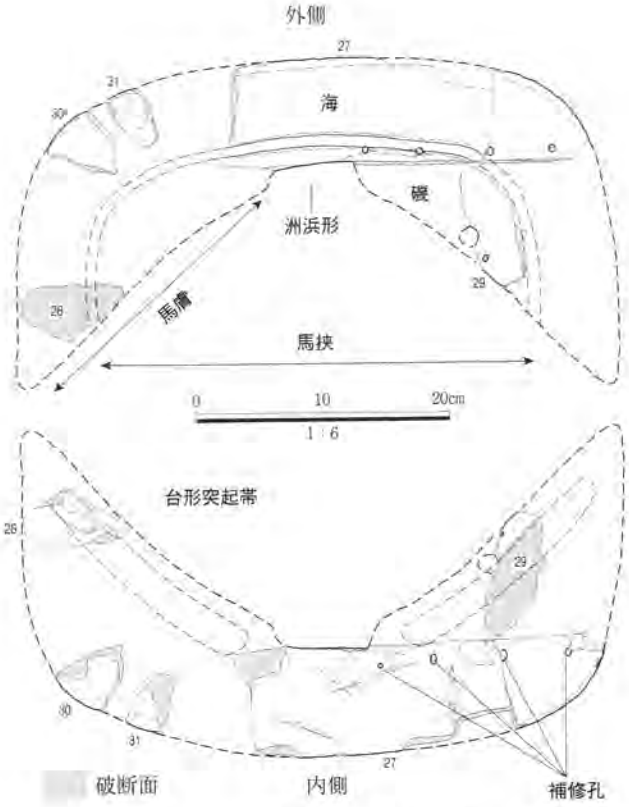


図10　木製鞍橋片の配置復元図

いる。また、28の紐孔と29に見られる馬膚部の形状から、内側の台形突起帯の下は、百舌鳥陵南・神宮寺遺跡例のように薄くなる形状で、蔀屋北・谷・名柄遺跡のように溝状にはならないと推定される。この27～29が同一個体と考えれば、本資料は外側に磯外周の突帯をもち、内側に居木との連結のための台形突起帯をもつ点に大きな特徴があり、それと共通する特徴を有する資料は、蔀屋北遺跡と神宮寺遺跡の資料のみである。

そこで、全形が知られる蔀屋北遺跡出土の後輪を参考に、今回出土した資料の部位を復元すると図10のようになる。27下端の加工痕の見られる部分は洲浜形に相当することになり、それ以下が破損していることになる。29に見られる小孔や円孔の用途は不明である。

本資料は既述のとおり５世紀中～後葉の井戸から出土しており、５世紀中葉とされる蔀屋北遺跡と近い時期の資料と考えられる。隣接する八尾南遺跡でも本資料と同時期の後輪が井戸から出土しているが[八尾市文化財調査研究会1995]、磯の表現のない資料であり、磯外周に突帯をもつ木製鞍橋は先に記した５世紀代の４例のみであり、本資料が５例目となる。

32は槽ないし盤の底部から体部にかけての破片であるが、全体の形状は不明である。33は長さ13.6cm以上、幅1.6cm、厚さ0.2～0.5cmの板状に加工され、丸く加工した一端に４㎜×５㎜の方形気味の小孔を穿っている。何らかの部材と思われる木製品である。

今回の調査区西側のNG83－32次調査で６棟の掘立柱建物や溝・土壙などが発掘されており(図11)、TK216型式からTK23型式の須恵器や土師器が多数出土している[大文協1992a]。今回のSD01はNG83－32次調査で検出されているSD14の東延長部と推定される。また建物SB17の時期は柱穴からの遺物から５世紀後葉以前である。したがって、今回の遺構群はこの集落の一部と考えることができ、集落の東西規模は50m以上に及ぶことになる。そして、NG83－32次調査SK10･12からウマ右中足骨･右上腕骨・右下顎臼歯などの動物遺体が出土していた[久保和士1992]が、SE16から木製鞍が出土したことにより､この集落で５世紀中～後葉に乗馬が行われていたことが確実になった。また､この鞍が､朝鮮半島から船で運ばれてきた馬の陸揚げと飼育管理の地とされる[岩瀬透2010]蔀屋北遺跡と共通していることから、長原遺跡から八尾南遺跡にかけて存在が想定されている馬飼集団[原田昌則1995、久保1998、京嶋2001]が、蔀屋北遺跡の集団と関連していることが初めて明らかになったといえよう。

b．古代(図5・7・8)

SD01・SE16を壊して掘られている土壙SK03、これが埋まった後に掘られているSD02やSD18・19、SK04が古代に属する遺構と考えられる。

SK03は東西2.5m、南北2.1m以上、深さ0.3mの楕円形の土壙で、底は平坦であった。埋土は地山層の偽礫が混じる灰オリーブ～黄灰色(5Y5/2～2.5Y6/1)粘土質シルトである。出土遺物には須恵器壺22、土師器杯C23、土師器鉢24などがある。22は球形の体部に外反する口縁部がつく壺で、古墳時代の土師器直口壺に似た形状である。本来、SE16に伴うものと推定される。23は細片であるが、口縁端部を面をつくるように仕上げている。一般的な土師器杯Cとは異なるが、推定される全形からみて杯Cと考えられる。24は口縁端部に内傾する面をつくる土師器鉢である。精良な胎土で、体部外面にはユビオサエ痕が残る。

図11　周辺の古墳～奈良時代遺構配置と調査地

出土遺物が少なく、時期は特定しにくいが、前述のとおりSD01埋土最上層から1の土師器杯Aが出土している点も考慮して、奈良時代の土壙と考えられる。

SD02は調査区東部で北西から南東に直線的に検出された溝である。南端で東に曲がる。幅0.5m、深さ0.15mで、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトである。出土遺物には黒色土器B類椀の口縁部細片が出土しており、平安時代Ⅲ期[佐藤隆1992]まで下る。SD18は調査区東南隅でごく一部が検出された。出土遺物はないが埋土はSD02と同じである。SD19は調査区東部で検出された最大幅0.15m、深さ0.07mの小溝で、西端は浅くなって消滅し、東に向かって直線的に延びている。SD02を切っているが、第2層直下で検出されるため、平安時代の範疇であろう。調査区北側のNG84－29次調査[大文協1992b]で飛鳥～奈良時代のSD04～06などの数条の溝が検出されており、さらに北側のNG90－66次調査地[大文協2006]でもこれらに続く可能性のある溝群があるが、SD02・18・19はこれらとは時期を異にしている。

また、既述のとおりNG84－25次調査A区では、奈良時代の水田の下で両側側溝をもつ幅約6mの飛鳥時代の道路状遺構が北東から南西方向に直線的に検出されており[大文協2006]、さらに南の

NG84－29次調査のSD04・05などに続くと推定[京嶋2010]されていたが、今回の調査地ではその延長部分は確認できなかった。

SK04は調査区南西隅で検出された東西1.5m以上、南北0.5m以上、深さ0.15mの浅い土壙で、埋土は地山の偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトである。土師器甕や羽釜の細片が出土しており、平安時代Ⅲ・Ⅳ期であろう。

本調査地北側のNG83－32次調査[大文協1992a]で総柱建物を含む奈良時代の掘立柱建物群が発見されており、NG90－66次調査の飛鳥～奈良時代の遺物を含む溝群は、この建物群の東を区切るものと考えられる。今回のSK03はこれらに関連する遺構と考えられ、飛鳥時代の道路遺構はその後の開発により破壊されたとみられる。また、SD02・18・19やSK04は平安時代後期まで下るが、建物は検出されておらず、「長原里」三十六坪に屋敷地を確認することはできなかった。

3)まとめ

以上、今回の調査では古墳時代の集落と古代の遺構が検出された。特に、5世紀中～後葉の建物と井戸は長吉台地に形成された初期の集落の一部と考えられ、全国で10数例しか出土していない5世紀代の木製鞍が、長原遺跡で初めて出土した点で重要な成果があったといえよう。

引用・参考文献

岩瀬透2010、「「讃良の牧」の形成と展開」:『蔀屋北遺跡』Ⅰ、pp.145－152

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1987、「辰野マンション建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85－21)」:『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市文化財協会1979、「平野区長吉出戸4丁目所在遺跡発掘調査略報」:『大阪府下文化財担当者研究会(第1回)資料』

1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1992a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1993a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ

1993b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ

2006、『長原遺跡発掘調査報告』XV

2009、『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ

大阪府教育委員会2010、『蔀屋北遺跡』Ⅰ大阪府埋蔵文化財調査報告2009－3

橿原考古学研究所1985、『奈良県遺跡調査概報(第二分冊)1984年度』

神谷正弘1987、「大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復元」:『考古学雑誌』第72巻第3号、pp.115－128

2005、「古墳時代集落出土木製鞍再論」、『埴生の宿－田代克己さん追悼録－』、pp.149－178

京嶋覚1993、「5・6世紀の集落構成の復元とその特質」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.241－258

2001、「馬と地域社会」、『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、pp.133－148

2010、「初期計画道路の一様相　河内「長原西古道」の検討」:『立命館大学考古学論集』Ⅴ、pp.273－288

久保和士1992、「動物遺体」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.93－94

1998、「古代の牧と馬の飼育」:『わが国最古の牧』寝屋川市歴史シンポジウム発表資料
上津島遺跡調査団1997、『上津島遺跡第５次発掘調査報告』豊中市文化財調査報告 第41集
佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102－114
長浜市教育委員会2004、『神宮寺遺跡』長浜市埋蔵文化財調査資料第54集
原田昌則1995、「まとめ」:『八尾南遺跡』、pp.116－130
広瀬和雄1988、「近畿地方における製塩土器」:『考古学ジャーナル』第298号、pp.13－20
八尾市文化財調査研究会1995、『八尾南遺跡』八尾市文化財調査研究会報告47

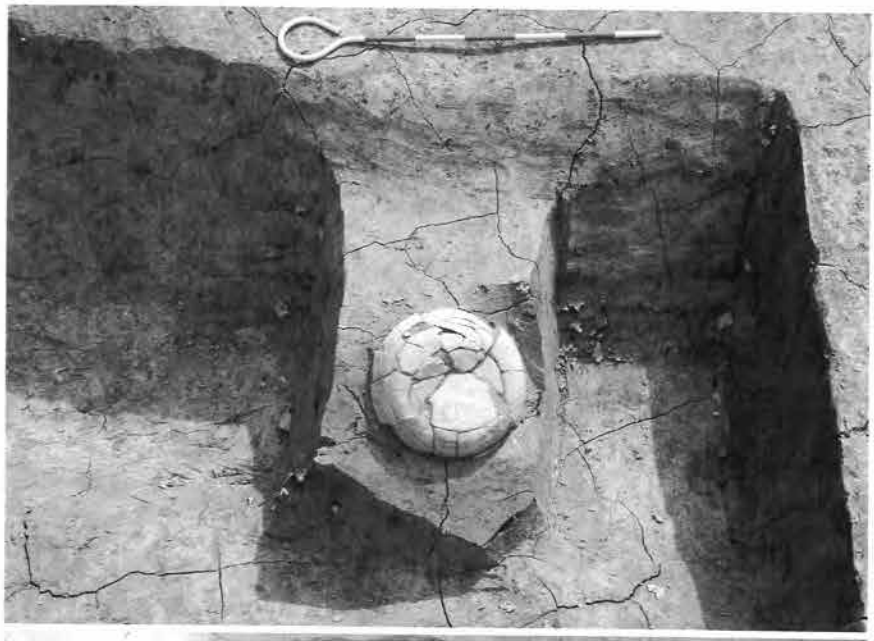
図版一　西半部・東半部全景と溝・掘立柱建物

西半部SD01(左)・02
(南東から)

東半部全景
(東から)

SB17検出状況
(西から)

SD01土器１出土状況
（北から）



SE16（西から）

SE16木製品出土状況
（東から）

平野区瓜破五丁目370－１の一部における建設工事に伴う
瓜破遺跡発掘調査(UR14－１)報告書

調査個所	大阪市平野区瓜破５丁目370－１の一部
調査面積	100㎡
調査期間	平成26年８月18日～８月26日
調査主体	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
調査担当者	調査課長　高橋 工、岡村勝行

1)調査に至る経緯と経過

調査地は瓜破遺跡のほぼ中央部に位置する。近隣では東60m、旧中高野街道沿いで行われたUR83－3調査で、古代から中世末の多くの遺構・遺物が発見され、概ね4期に分類されている。第1期(9世紀後葉)の溝からは奈良時代と思われる瓦が出土し、第2期(11世紀後半～13世紀前葉)では、12基の井戸が検出され、瓦がまとまって出土した。第3期(14世紀後葉～15世紀前葉)の溝群においても、やはり瓦が一定量出土しており、今日残る字名「光流寺」に当る寺院の存在が想定されている[大阪市文化財協会2000a]。また、北東300mのUR82－22次調査(立会)では奈良時代後期の軒瓦が出土し、奈良時代の建物が見つかった[大阪市文化財協会1992]。北300mのUR89－26次調査では近世以降の土採り穴が検出された[大阪市文化財協会2000b]。一方、西南西200mのUR92－28次調査(瓜破小学校内)では、旧石器時代から近世にいたる地層が良好に保存されていることが確認され、なかでも縄文時代後期から弥生時代前期にかかる石器・土器が比較的多く出土し、周辺に当該期の集落の存在が予測された[大阪市文化財協会2000c]。

大阪市教育委員会が平成26年5月27日に行った試掘調査の結果、現地表下約0.5m以下で中世の土器を含む遺物包含層および遺構面が検出され、本調査を実施することになった。8月18日、敷地南西寄りに調査区を幅6.3m、長さ16mで設定した。重機で現地表下0.5mまで近現代盛土層を掘削し、その後、慎重に人力によって掘り下げながら、遺構・遺物の検出に努め、随時、写真・図面で遺構・地層の記録を行った。機材の撤収などの作業を含め、26日に現地におけるすべての作業を終え、発掘調査を完了した。

調査地の基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づ

図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

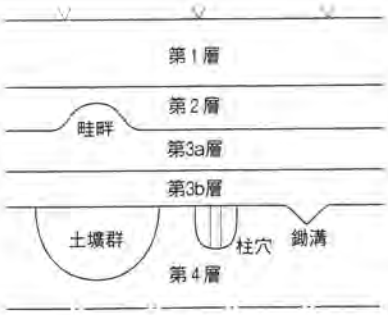


図3　地層と遺構の関係図

く座標北を基準とした。標高はT.P.値（東京湾平均海面値）でTP＋○mと記した。

2）調査の結果

ⅰ）層序（図3・4）

敷地の現地表面の標高はTP＋9.6m前後とほぼ平坦である。TP＋8.4mまでの地層を第1～4層に大別し、第3層を細分した。

第1層：近現代の盛土および攪乱層である。層厚は20～30cmである。

第2層：暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂を主体とする盛土層で、最大層厚は30cmである。19世紀以降の遺物を含む。

第3層：極細粒砂質シルトを主体とする作土層で、層厚は20cm前後であり、第3a層と第3b層に2分類した。

第3a層は黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルトを主体とする、やや締まりの悪い水田作土層で、調査区南半部では中粒砂を比較的多く含む。層厚は概ね10数cmである。19世紀以降の遺物を含む。上面で畦畔を検出した。

第3b層は黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルトを主体とする作土層で、層厚は10cm前後である。19世紀以降の遺物を含む。下面で鋤溝を検出した。

第4層：明黄褐色(2.5Y7/6)シルト質粘土からなる段丘構成層で、層厚は60cm以上である。上面で柱穴、土採り用と考えられる土壙群を検出した。

ⅱ）遺構と遺物（図4～6）

調査区からは、柱列・柱穴・土採り穴が検出された。これらの遺構の埋土には、第3層段階の耕起によって破壊された黒褐色細粒砂質シルト（古土壌）の偽礫を含む、という共通する特徴がある。古代～中世の遺物の大半は19世紀代と考えられる土採り穴から出土したため、以下の遺物の記載は遺構と関係なく、時代毎に行う。

a．中世以前の遺構と遺物

柱列A　調査区北東部で検出されたSP01～03からなる2間分の柱列で、ほぼ正方位である。柱間は北から1.55m、1.40mであり、柱掘形の直径はいずれも0.20mである。SP02から時期不明の土師器細片が出土したのみであるが、柱筋の方位、調査区内の出土遺物から古代末～中世段階の可能性が高い。

柱穴　柱列A以外に、SP04･05がある。SP04は掘形の直径0.20m、深さ0.18mで、柱痕跡の直径は0.06cmである。SP05は直径0.15mで、焼石が入っていた。いずれも遺物は出土していないが、埋土の特徴から、柱列と同様の時期が想定される。

調査区から出土した最も古い遺物は古代の平瓦12である。凸面を縄目タタキ、凹面をナデで仕上げる。1・2は、土師器小皿である。厚めの器壁に屈曲の弱い「て」の字状口縁を有し、11世紀後半～末

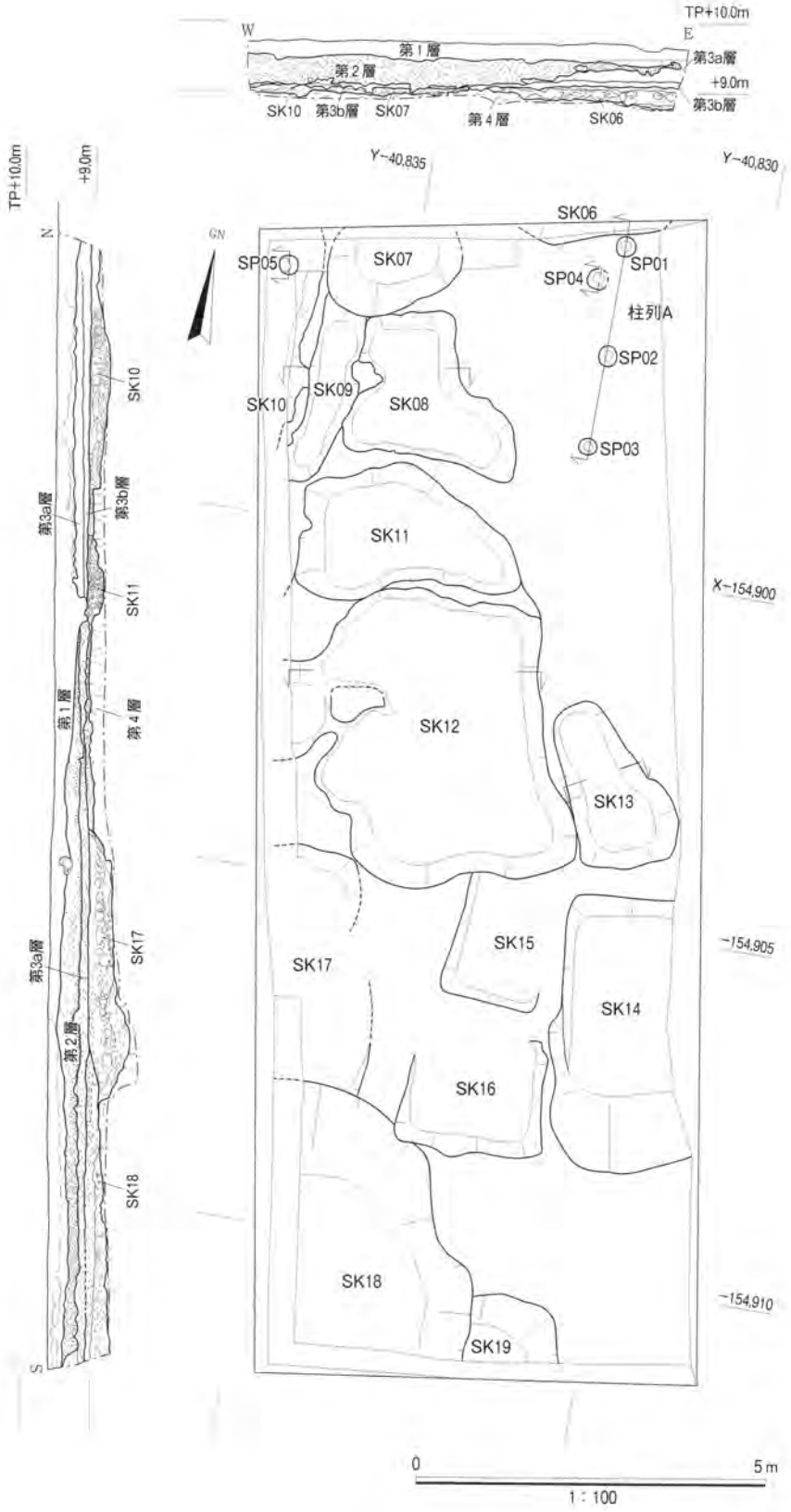


図4　地層断面図・遺構平面図

のものだろう。3は口径10.2cm、高さ2.0cmのほぼ完形の土師器皿である。厚手で、外面底部に粘土紐の継ぎ目を残す粗雑な作りである。4は中国産白磁碗である。5は黒色土器B類椀で、口径16.1cmである。内外面にやや粗めのヘラミガキを施し、11世紀代のものだろう。6は土師器羽釜である。口縁は内傾して、直口気味におさめ、内外面ともナデで仕上げる。概ね13世紀代に位置づけられる。7・8は和泉型の瓦器椀である。前者は口径15.0cm、高さ5.6cm、後者は口径13.7cm、高さ5.0cmで、ともに外面は粗いヘラミガキ、底部内面に格子状のヘラミガキを施す。概ねⅡ－2期(12世紀中頃)に属する[森島康雄1995]。9は瓦質土器擂鉢、10は備前焼擂鉢で、ともに15世紀代、11は中国産青花皿で、16世紀(大坂本願寺期)に属する。以上は近世の土採り穴および第3b層より出土したものである。

b．近世の遺構と遺物

調査区の北東・南東部を除く全面で、多くの土壙が接するように検出された。平面形は長方形に近いSK14～16もあるが、多くは不整形である。深さはSK17が0.6mである以外は、0.2～0.3mである。地山偽礫主体の埋土で埋め立てられており、土壙群は粘土の採掘を目的とした土採り穴と考えられる。近世の平瓦13のほか、18世紀末～19世紀を示準する肥前磁器碗・瀬戸美濃焼磁器碗・丹波焼徳利などが出土しており、掘削活動は概ね19世紀代に行われたと考えられる。

各土採り穴の規模、特徴は次のとおりである。

SK06　長辺2.2m以上、短辺0.2m以上、深さ0.3m以上である。

SK07　長辺1.9m、短辺1.0m以上、深さ0.3mである。

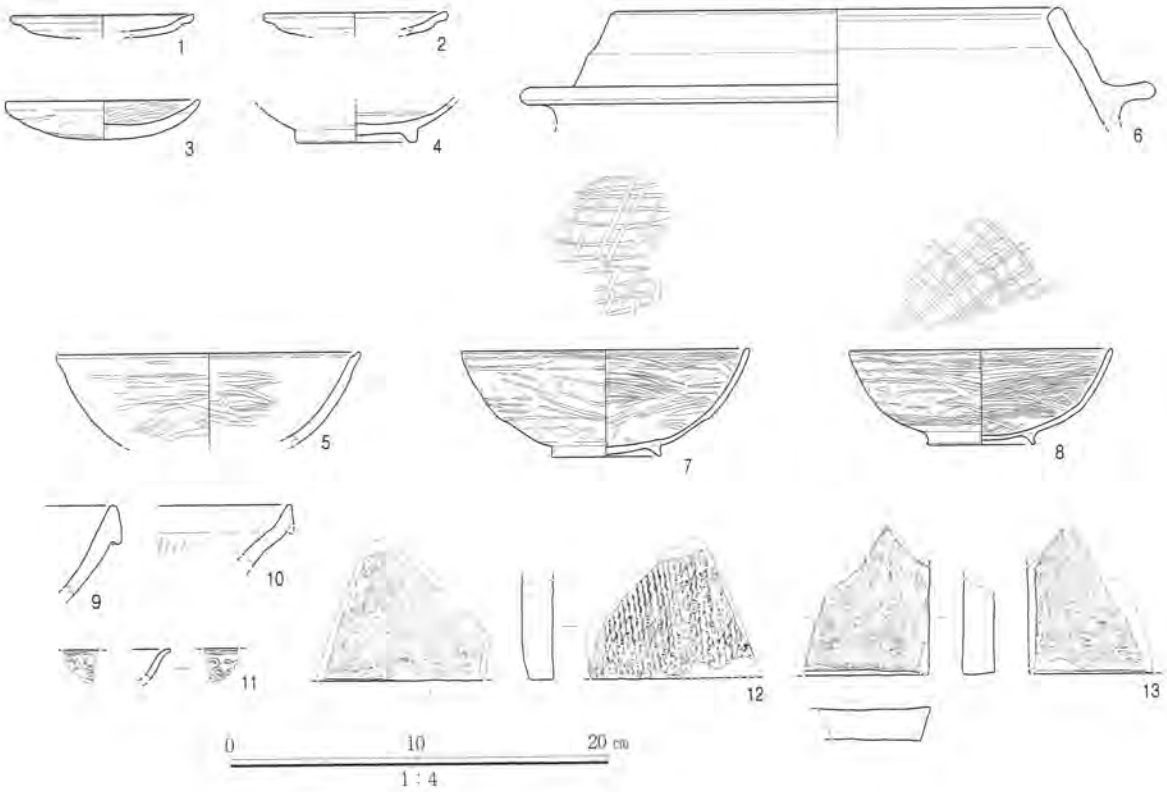


図5　出土遺物

SK09(11)、SK12(7・8・10)、SK18(2・3・5・12・13)、SK19(9)、第3b層(1・4・6)

SK08　長辺2.5m、短辺2.0m、深さ0.3mである。18世紀末に属する丹波焼徳利片が出土した。

SK09　長辺２.5m、短辺0.7m、深さ0.3mである。

SK10　長辺3.0m以上、短辺0.8m以上、深さ0.2m以上である。

SK11　長辺3.2m、短辺2.0m、深さ0.3mである。

SK12　長辺4.2m、短辺3.5m、深さ0.2mである。西端近くで瓦器椀７・８がまとまって出土した(図版参照)。近世の丸瓦片も出土している。

SK13　長辺2.5m、短辺1.5m、深さ0.2mである。

SK14　長辺4.0m、短辺1.7m以上、深さ0.5mである。この土壙のみ、最下部に桟瓦を中心とする、まとまった廃棄物が認められた。

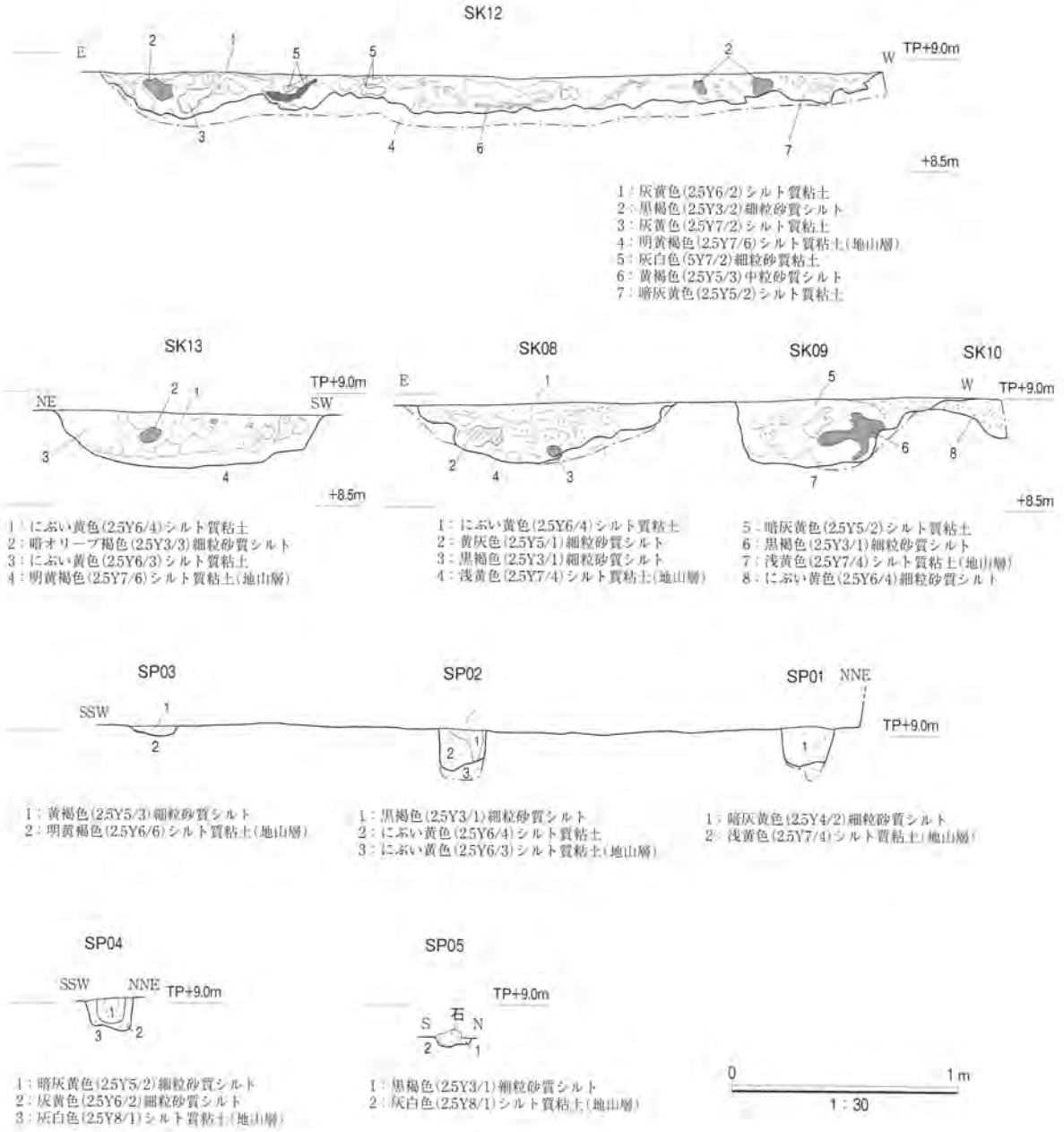


図６　遺構断面図

SK15　長辺1.8m、短辺1.4m、深さ0.2mである。

SK16　長辺2.0m 、短辺1.8m、深さ0.2mである。

SK17　長辺3.3m、短辺1.3m以上、深さ0.6m以上である。

SK18　長辺3.7m以上、短辺2.5m以上、深さ0.3m以上である。古代末～近世の遺物が比較的多く出土した。

SK19　長辺1.3m、短辺1.0m以上、深さ0.2mである。

3)まとめ

本調査では、古代末～中世に属すると考えられる柱穴群が検出され、また、近世の土採り穴からはそれぞれ少量であるが、古代から中世末にいたる広範な時期に及ぶ遺物が出土した。遺物の時期幅はUR83－３次調査の成果と同様な傾向にあり、当該地は旧中高野街道の東に想定されている寺院の縁辺部に当るものと考えられる。今回の調査は小規模なものであったが、当地に濃密な歴史が埋もれていることを示唆する重要な成果が得られた。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1992、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

2000a、「UR83－３次調査」:『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.127－137

2000b、「UR89－26次調査」:『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.138－139

2000c、「UR92－28次調査」:『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.25－39

森島康雄1995、「６．瓦器椀」:『概説中世の土器・陶磁器』、p.300

調査区全景
（北から）

西壁地層断面
（北東から）

SK12遺物出土状況
（南から）

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書（2014）

発行日　平成28年3月31日

発　行　大阪市教育委員会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編　集　大阪市教育委員会事務局文化財保護課
（大阪市北区中之島1-3-20）

印　刷　株式会社フォーラムK